

# 福岡県の中近世城館跡Ⅱ

## —筑前地域編2—

福岡県文化財調査報告書 第250集



2015

福岡県教育委員会



# 福岡県の中近世城館跡Ⅱ

## —筑前地域編2—

福岡県文化財調査報告書 第250集



## 序

今から 500 年ほど前、中世から近世初期にかけて、全国各地に数多くの城館が築かれました。福岡県も同様に、著名な山城から無名の小砦に至るまで非常に多くの城館が造られ、その数は現在知られているもので 1,000 箇所を超えてます。

本県ではこれまで、埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査や各自治体史誌の編纂事業等をとおして、これら中近世城館遺跡の把握や周知を進めてまいりました。また、任意団体や個々の研究者によって踏査や縄張り図の作成等が行われ、個々の存在と歴史的重要性が次第に明らかになってきました。

一方、遺跡の詳細を未だ把握できていない中近世城館遺跡も多く存在しており、近年の開発事業等によりやむを得ず記録保存の対象となった事例も少なくありません。

こうした現状に対し、本県教育委員会では、県内に所在する全ての中近世城館遺跡を対象に総合的な緊急分布調査に取り組むこととし、平成 24 年度から調査に着手しました。本調査は遺跡の位置や時代、歴史的背景を可能な限り把握するとともに成果の体系的な整理と評価を行い、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解を促進することを目的としています。

この度、旧筑前国北部の調査成果を取りまとめることができました。今後も県内各域について報告書を取りまとめ、刊行していく予定です。

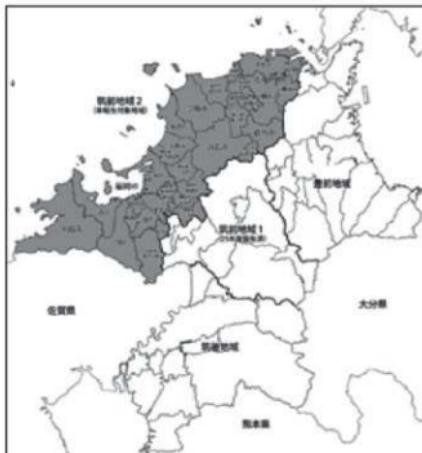
本調査の実施並びに本書の刊行に当たり、調査指導委員会の委員の皆様、関係市町村をはじめ、多くの方々に多大なる御協力を得ましたことに心より感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長  
城戸 秀明

## 例　　言

- 1 本書は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業の報告書第2集であり、福岡県文化財調査報告書第250集にあたる。
- 2 本事業は、県内に所在する中世・近世の城館跡および関連遺跡を対象とした悉皆分布調査事業であり、平成24年度より開始し、28年度（予定）まで調査を実施し報告書を刊行する計画である。
- 3 本書では、平成24年度から26年度にかけて実施した筑前地域の北部（旧郡の鞍手郡（宮若市・直方市・鞍手郡鞍手町・小竹町・北九州市八幡西区（一部））、遠賀郡（北九州市八幡西区（一部）・八幡東区・戸畠区・若松区・中間市・遠賀郡遠賀町・芦屋町・水巻町・岡垣町）、宗像郡（宗像市・福津市）・糟屋郡（古賀市・糟屋郡新宮町・粕屋町・久山町・篠栗町・須恵町・宇美町・志免町・福岡市東区）・席田郡（福岡市博多区（一部））、那珂郡（福岡市博多区（一部）・中央区・城南区（一部）・南区・春日市・筑紫郡那珂川町）、早良郡（福岡市城南区（一部）・早良郡・西区（一部））、怡土郡（福岡市西区（一部）・糸島市（一部））、志摩郡（福岡市西区（一部）・糸島市（一部））の旧9郡、10市14町に所在する約350箇所の中世・近世の城館跡、城館伝承地、城館関連遺跡を報告対象とした。
- 4 調査については福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 5 本書に掲載した縄張り図および遺構実測図は、事務局で作成したもの以外は全て出典を明示し、縄張り図については作成者もしくは作成機関名を明示した。  
事務局にて作成した縄張り図の作成および製図は岡寺 良（九州歴史資料館）が担当した。
- 6 本書に掲載した写真は明示したもの以外は事務局にて撮影したものであり、岡寺が担当した。
- 7 本書の執筆分担は以下のとおりである。
  - I 今井涼子  
(福岡県教育庁文化財保護課)
  - II 岡寺
  - III 岡寺
  - IV 岡寺
  - V 岡寺
  - VI 酒井芳司（九州歴史資料館）  
一瀬 智  
(福岡県立アジア文化交流センター)  
伊津見孝明
  - VII 岡寺
- 8 本書の編集は岡寺が担当した。



## 目 次

	頁
I はじめに .....	1
1 調査に至る経過 .....	1
2 調査の経過 .....	1
3 調査の組織 .....	2
II 調査の方法 .....	4
1 調査の進め方と方法 .....	4
2 鞍手郡城館史料『筑前要領大友家戦史』について .....	6
III 対象地域城館一覧 .....	10
IV 対象地域城館分布図 .....	50
V 個別城館報告 .....	95
1 中世城館 .....	96
①鞍手郡 .....	96
②遠賀郡 .....	125
③宗像郡 .....	146
④糟屋郡 .....	163
⑤席田郡 .....	182
⑥那珂郡 .....	183
⑦早良郡 .....	195
⑧怡土郡 .....	205
⑨志摩郡 .....	213
2 近世城館 .....	220
3 城館等伝承地 .....	236
4 城館関連遺跡 .....	237
VI 城館関連文献史料一覧 .....	274
VII 城館関連地名一覧 .....	300
索引 .....	311
抄録	

## 挿 図 目 次

	頁
第1図 『鞍手郡誌』掲載『筑前要領大友家戦史』文中の城館一覧の掲載部分	7
第2図 『筑前要領抜』表紙（直方市立図書館蔵）	7
第3図 『筑前要領抜』掲載の城館一覧（直方市立図書館蔵・上は読み下し文）	8
第4図 『天文十一年壬寅三月 大友宗麟若宮地方攻略』（直方市立図書館蔵） （右：表紙・左：巻末（年紀記載部分））	9
第5図 熊ヶ峯城畝状空堀群	96
第6図 熊ヶ峯城縄張り図（事務局作成）	96
第7図 草場城（湯原所在）縄張り図（藤野正人作成・提供）	97
第8図 草場城（湯原所在）遠景	98
第9図 地蔵山城遠景	98
第10図 地蔵山城縄張り図（事務局作成）	98
第11図 篠城（城内最高所の曲輪）	99
第12図 草場城（乙野所在）横堀（横堀部分に水が溜っている）	99
第13図 篠城・（乙野）草場城縄張り図（事務局作成）	100
第14図 立林城縄張り図（事務局作成）	101
第15図 稲光城縄張り図（事務局作成）	102
第16図 稲光城遠景	102
第17図 稲光城堀切	102
第18図 黒丸城縄張り図（事務局作成）	103
第19図 黒丸城遠景	103
第20図 黒丸城堀切（南側部分・左上が主郭）	103
第21図 平山城曲輪群Ⅰの堀切	104
第22図 平山城曲輪群Ⅲの帶曲輪	104
第23図 平山城縄張り図（事務局作成）	105
第24図 丸尾城から眺める若宮盆地	106
第25図 丸尾城南側堀切	106
第26図 丸尾城測量図（文献65）	106
第27図 宮永城遠景	107
第28図 宮永城縄張り図（文献210・藤野正人作成）	107
第29図 黒巣城堀切	108
第30図 黒巣城縄張り図（事務局作成）	108
第31図 高丸城（堀切から続く帶曲輪）	108
第32図 高丸城縄張り図（事務局作成）	109
第33図 岡田城遠景	109
第34図 岡田城縄張り図（事務局作成）	109
第35図 尾園本城縄張り図（事務局作成）	110
第36図 山下城堀切	111

第 37 図	山下城縄張り図（事務局作成）	111
第 38 図	茶臼山城縄張り図（事務局作成）	111
第 39 図	茶臼山城遠景	112
第 40 図	茶臼山城堀切 A	112
第 41 図	鏡鏡山城縄張り図（事務局作成）	112
第 42 図	鏡鏡山城（左）・金生城（右）遠景	113
第 43 図	金生城縄張り図（藤野正人氏作成・提供）	113
第 44 図	龍ヶ岳城・祇園岳城遠景	114
第 45 図	龍ヶ岳城縄張り図（文献 196・片山安夫作成）	114
第 46 図	祇園岳城縄張り図（中村修身作成・提供）	115
第 47 図	祇園岳城堀切・畝状空堀群	115
第 48 図	鷹取城遠景（雲取山山頂から）	116
第 49 図	鷹取城縄張り図（文献 180・木島孝之作成）	116
第 50 図	鷹取城測量図（文献 62・1/3,500）	117
第 51 図	鞍手郡頓野村鷹取山古城図（部分・国立公文書館蔵）	117
第 52 図	鷹取城主郭部測量図（文献 62 掲載図を一部改変して事務局作成）	118
第 53 図	鷹取城出土鬼板瓦（文献 60）	118
第 54 図	鷹取城発掘調査状況写真（直方市教育委員会提供） (1 : 西口城門、2 : 南口城門、3・4 : 碇石建物)	118
第 55 図	雲取山城（山頂部）縄張り図（事務局作成）	119
第 56 図	雲取山城・山ノ田城遠景	119
第 57 図	雲取山城（標高 444m 地点）堀切	119
第 58 図	雲取山城（標高 444m 地点）縄張り図（事務局作成）	120
第 59 図	山ノ田城堀切	120
第 60 図	山ノ田城縄張り図（事務局作成）	121
第 61 図	鶴砦縄張り図（事務局作成）	121
第 62 図	音丸城縄張り図（文献 57 掲載図面と現地調査を元に事務局作成）	122
第 63 図	音丸城横堀（現存）	122
第 64 図	音丸城横堀（1976 年調査）（文献 57 から転載）	122
第 65 図	剣岳城縄張り図（文献 209・岡寺 良作成）	123
第 66 図	城腰山城遠景	124
第 67 図	城腰山城縄張り図（事務局作成）	124
第 68 図	園田浦城遠景（昭和 42 年頃・文献 67 から転載）	125
第 69 図	破壊前の園田浦城縄張り図（文献 31・中村修身作成）	125
第 70 図	園田浦城測量図 (文献 70 掲載図に文献 67 掲載図面と事務局作成図面を合成して事務局作成)	126
第 71 図	園田浦城北郭全景（平成 8 年）（北九州市教育委員会提供）	127
第 72 図	園田浦城北郭堀切（平成 8 年）（北九州市教育委員会提供）	127
第 73 図	園田浦城本郭検出の整地層（平成 8 年）（北九州市教育委員会提供）	127
第 74 図	園田浦城本郭からみた帆柱山城・花尾城（右端の森が南郭の丘陵）	127

第 75 図 浅川城遠景（手前は遠賀川）	128
第 76 図 浅川城縄張り図（北九州市立自然史・歴史博物館作成・提供）	128
第 77 図 烟城位置図（1/25,000「徳力」を一部改変） （大正 11 年陸地測量部作成・福岡県立図書館提供）	129
第 78 図 烟城・伝二ノ丸地点縄張り図（事務局作成）	129
第 79 図 竹尾城縄張り図（文献 11・村上勝郎・田中賢二作成）	130
第 80 図 市瀬城縄張り図（北九州市自然史・歴史博物館作成・提供）	130
第 81 図 別当山城測量図（文献 68）	131
第 82 図 帆柱山城石垣	131
第 83 図 帆柱山城堀切	131
第 84 図 帆柱山城縄張り図（文献 11・村上勝郎作成）	132
第 85 図 花尾城縄張り図（文献 178・八巻孝夫作成）	133
第 86 図 遠賀郡藤田村花尾山古城図（部分・国立公文書館蔵）	133
第 87 図 花尾城曲輪 I の石垣	134
第 88 図 花尾城曲輪 V の石垣	134
第 89 図 花尾城曲輪 II 北側斜面の石垣遺構（上：「井戸」部分・下：登り石垣部分）	134
第 90 図 茶白山城南西側にある御大典記念碑（左）と土壘状遺構（右）	135
第 91 図 茶白山城縄張り図（文献 10・廣崎篤夫作成）	135
第 92 図 花房山城測量図（文献 11・中村修身作成）	136
第 93 図 楽丸城縄張り図（北九州市立自然史・歴史博物館作成・提供）	136
第 94 図 小敷城測量図（文献 71）	137
第 95 図 小敷城遠景（発掘調査時・北九州市教育委員会提供）	137
第 96 図 小敷城堀切（発掘調査時・北九州市教育委員会提供）	137
第 97 図 古賀城遠景	138
第 98 図 古賀城縄張り図（事務局作成）	138
第 99 図 古賀城石垣（後世に積まれたもの）	138
第 100 図 古賀城石垣（南側斜面）（城郭に伴うものか）	138
第 101 図 猫城遠景	139
第 102 図 猫城縄張り図（事務局作成）	139
第 103 図 城之越城遠景	140
第 104 図 城之越城位置図（1/25,000「折尾」を一部改変） （昭和 11 年陸地測量部作成・福岡県立図書館提供）	140
第 105 図 城之越城縄張り図（事務局作成）	140
第 106 図 山鹿城遠景（2014 年撮影）	141
第 107 図 大正～昭和初期の山鹿城（絵葉書・個人蔵）	141
第 108 図 遠賀郡山鹿古城図（国立公文書館蔵）	141
第 109 図 山鹿城縄張り図（事務局作成）	142
第 110 図 岡ノ城縄張り図（事務局作成）	143
第 111 図 岡ノ城から東を望む（手前に汐入川、奥に花尾城・帆柱山城などがみえる）	143

第 112 図 麻生隆守墓	143
第 113 図 龍昌寺山城縄張り図（藤野正人作成・提供）	144
第 114 図 熊山城縄張り図（文献 212・藤野正人作成）	144
第 115 図 熊山城遠景	145
第 116 図 雨乞山城縄張り図（文献 207・藤野正人作成）	145
第 117 図 白山城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	146
第 118 図 城ノ腰城縄張り図（文献 207・藤野正人作成）	147
第 119 図 勝島城縄張り図（藤野正人・事務局作成）	147
第 120 図 勝島遠景（最高所が城跡）	148
第 121 図 島内最高所の平坦地形（勝島城跡）	148
第 122 図 草崎城遠景（勝島から）	148
第 123 図 草崎城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	148
第 124 図 大島城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	149
第 125 図 草場城縄張り図（文献 210・藤野正人作成）	150
第 126 図 上山堡縄張り図（藤野正人作成・提供）	150
第 127 図 蔦岳城及び周辺城館位置図 （国土地理院発行 1/25,000 地形図「筑前東郷」を一部改変して作成）	151
第 128 図 蔦岳城石垣（曲輪 A 南斜面）	151
第 129 図 蔦岳城堀切	151
第 130 図 蔦岳城からの眺め（白山城・玄界灘方面）	151
第 131 図 蔦岳城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	152
第 132 図 三郎丸土壘の横堀	153
第 133 図 三郎丸土壘縄張り図（文献 207・藤野正人作成）	153
第 134 図 茶臼山城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	153
第 135 図 名残城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	154
第 136 図 大障子城縄張り図（事務局作成）	154
第 137 図 大障子城遠景（最高所のやや右）	155
第 138 図 片脇城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）	155
第 139 図 勝浦岳城遠景（左の頂部が名児山、右が勝浦岳）	156
第 140 図 勝浦岳城縄張り図（事務局作成）	156
第 141 図 大穂城縄張り図（藤野正人作成・提供）	157
第 142 図 大穂城主郭	157
第 143 図 許斐岳城遠景（左奥は立花山）	157
第 144 図 許斐岳城縄張り図 （文献 11・藤野正人作成。網掛け部は堀切（堀切すべては網掛けせず））	158
第 145 図 許斐岳城堀切	159
第 146 図 金魚池	159
第 147 図 許斐城縄張り図（北東麓部分・文献 207・藤野正人作成）	159
第 148 図 高宮城遠景	160

第149図	高宮城縄張り図（事務局作成）	160
第150図	冠山城縄張り図（藤野正人作成・提供）	161
第151図	宮地岳城縄張り図（事務局作成）	161
第152図	亀山城縄張り図（文献184・中西義昌作成）	162
第153図	亀山城周辺地割図（事務局作成）	162
第154図	飯盛城縄張り図（文献11・藤野正人作成）	162
第155図	鶴岳城縄張り図（文献184・中西義昌作成）	163
第156図	小松ヶ岡砦縄張り図（文献190・中西義昌作成）	163
第157図	白ヶ岳城縄張り図（文献181・中西義昌作成）	164
第158図	米多比城縄張り図（文献190・中西義昌作成図を一部改変して事務局作成）	165
第159図	「糟屋郡史」編纂資料「附、城砦古戦場一束」中の四万城の記載 (左：修正稿（四方城山）・右：決定稿（四万城山）)	166
第160図	四万城縄張り図（事務局作成）	166
第161図	古子城縄張り図（文献181・中西義昌作成）	167
第162図	佐谷城縄張り図（事務局作成）	167
第163図	佐谷城遠景（中央。左は若杉山）	168
第164図	佐谷城堀切	168
第165図	高鳥居城遠景（左の頂部。右は若杉山）	168
第166図	高鳥居城縄張り図（文献191・中西義昌作成）	169
第167図	草葉城遠景（粕屋町教育委員会提供）	169
第168図	草葉城縄張り図（文献80・西垣彰博作成）	169
第169図	飯盛山城遠景（粕屋町教育委員会提供）	170
第170図	飯盛山城縄張り図（文献80・西垣彰博作成）	170
第171図	丸山城遠景（粕屋町教育委員会提供）	170
第172図	丸山城堀切断面（粕屋町教育委員会提供）	171
第173図	丸山城測量図（文献80）	171
第174図	下山田城縄張り図（藤野正人作成・提供）	171
第175図	立花山城および周辺城館位置図 (国土地理院1/25,000「福岡」「古賀」を一部改変して事務局作成)	172
第176図	立花山城遠景（久山町遠見岳から）	172
第177図	筑前国裏粕屋郡立花山古城之図（部分・国立公文書館蔵）	173
第178図	立花山城A地点の堀切	173
第179図	立花山城（立花山地区）縄張り図（文献195・木島孝之作成図に井楼山南斜面部分（藤野正人作成・提供図）を合成して事務局作成）	174
第180図	立花山城イバノヲ・大タヲの石垣	175
第181図	立花山城イバノヲの石垣隅角部	175
第182図	立花山城立花口側の井戸	175
第183図	立花山城小つぶら通路遺構の石垣	175
第184図	立花山城曲輪Dの枠形虎口	175

第 185 図	三日月山地区縄張り図（文献 213・藤野正人作成）	176
第 186 図	三日月山遠景（城ノ越山側から）	177
第 187 図	城ノ越山遠景（三日月山山頂から）	177
第 188 図	城ノ越山地区縄張り図（全体）（文献 213・藤野正人作成）	177
第 189 図	城ノ越山地区（A 地区部分）（文献 213・藤野正人作成）	178
第 190 図	城ノ越山地区縄張り図（B 地区）（文献 213・藤野正人作成）	179
第 191 図	城ノ越地区的城館遺構（左：a3 地点の切岸（岩盤削り出しの様子がわかる） （右：b4 地点の土壌畳みの曲輪）	179
第 192 図	御飯ノ山城（香椎 B 遺跡）遠景（左：南から（奥に立花山）・右：北から） (福岡市埋蔵文化財センター提供)	180
第 193 図	御飯ノ山城（香椎 B 遺跡）測量図（文献 76）	181
第 194 図	稻居塚城・金居塚城縄張り図（文献 204・山崎龍雄作成）	182
第 195 図	那珂郡三宅邨古野城之図（部分・国立公文書館蔵）	183
第 196 図	古野城の位置比較（左：那珂郡三宅邨古野城之図（江戸後期）・右：国土地理 院作成 1/25,000「福岡南部」（昭和 35 年）を一部改変して事務局作成）	183
第 197 図	新城山城縄張り図（岡寺 良作成）	184
第 198 図	新城山城遠景	184
第 199 図	新城山城堀切	184
第 200 図	老林城縄張り図（事務局作成）	185
第 201 図	老林城遠景	186
第 202 図	老林城主郭切岸	186
第 203 図	龍神山城遠景	186
第 204 図	龍神山城曲輪切岸	186
第 205 図	龍神山城からみた福岡平野	186
第 206 図	龍神山城曲輪ピット群（那珂川町教育委員会提供）	187
第 207 図	龍神山城堀切土層（那珂川町教育委員会提供）	187
第 208 図	龍神山（岩門）城縄張り図（文献 201、那珂川町教育委員会作成測量図・ 中西義昌作成図・岡寺 良作成図を合成して岡寺作成）	187
第 209 図	猫嶺城縄張り図（文献 190・中西義昌作成）	188
第 210 図	鷺ヶ岳から眺めた福岡平野	188
第 211 図	鷺ヶ岳城縄張り図（文献 206・中西義昌作成図・村上勝郎・田中賢二作成図 を合成して村上・田中作成）	189
第 212 図	鷺ヶ岳城堀切	189
第 213 図	鷺ヶ岳城曲輪群 I の石垣	190
第 214 図	鷺ヶ岳城曲輪群 III の石垣	190
第 215 図	一ノ岳城と亀ノ尾城	190
第 216 図	一ノ岳城堀切	190
第 217 図	一ノ岳城縄張り図（文献 201・岡寺 良作成）	191
第 218 図	一ノ岳城石垣 j	192
第 219 図	一ノ岳城石垣 k	192

第220図	亀ノ尾城遠景	192
第221図	亀ノ尾城堀切	192
第222図	亀ノ尾城縄張り図（文献201・下高大輔・岡寺 良作成）	193
第223図	七曲城石垣	194
第224図	七曲城縄張り図（事務局作成）	194
第225図	小田部城位置図（国土地理院作成1/25,000地形図「福岡西南部」（昭和33年）を一部改変して事務局作成）	195
第226図	有田村ノ内小田部氏宅址図 （「早良郡廻村覚帳（下）」「筑前町村書上帳 早良郡四」・福岡県立図書館蔵）	195
第227図	菟道岳城主郭の土塁	196
第228図	菟道岳城切岸と曲輪面	196
第229図	菟道岳城縄張り図（山崎龍雄作成・提供）	196
第230図	安楽平城・周辺城館遠景（脇山側から）	196
第231図	安楽平城及び周辺城館群位置図 （国土地理院1/25,000地形図「福岡西南部」を一部改変して事務局作成）	197
第232図	安楽平城から望む早良平野	197
第233図	安楽平城堀切	197
第234図	安楽平城石垣	197
第235図	安楽平城縄張り図（中西義昌作成・提供）	198
第236図	油山山頂所在の城館群（山崎龍雄作成・提供図を一部改変して事務局作成）	199
第237図	曲渕城縄張り図（文献190・中西義昌作成）	200
第238図	金山城遠景（上：早良区脇山から・下：西から）	200
第239図	金山城縄張り図（文献54・宮武正登作成）	201
第240図	金山城堀切	201
第241図	金山山頂の立石状自然石	201
第242図	池田城遠景	201
第243図	大教坊墓石	201
第244図	池田城縄張り図（事務局作成）	202
第245図	都地城縄張り図（文献11・山崎龍雄作成）	202
第246図	都地城遠景（左：南から、右：西から・福岡市埋蔵文化財センター提供）	203
第247図	都地城跡発掘調査図（左：平面図・右：土壘土層図・文献146）	203
第248図	飯盛城縄張り図（文献197・中西義昌作成）	204
第249図	城ヶ崎城縄張り図（山崎龍雄作成・提供）	204
第250図	城ノ崎城図 （「早良郡廻村覚帳（上）」「筑前町村書上帳 早良郡四」・福岡県立図書館蔵）	204
第251図	高祖城遠景	205
第252図	高祖城および周辺城館位置図 （国土地理院1/25,000地形図「福岡西南部」を一部改変して事務局作成）	205
第253図	高祖城測量図（文献156・山崎龍雄・瓜生秀文ほか作成）	206

第 254 図	高祖城上の城の石垣遺構（糸島市教育委員会提供）	206
第 255 図	高祖城堀切	206
第 256 図	高祖城V地区の土塁ライン	206
第 257 図	草野陣地区的城館繩張り図（山崎龍雄作成・提供）	207
第 258 図	高来寺地区的城館繩張り図（文献 190・中西義昌作成）	207
第 259 図	有田城繩張り図（文献 197・中西義昌作成）	208
第 260 図	旗振嶺城繩張り図（文献 197・中西義昌作成）	208
第 261 図	旗振嶺城南側にある堀切状の谷	208
第 262 図	訂正怡土郡図（部分・国立公文書館蔵）（上が南。一部改変して事務局作成）	208
第 263 図	加布里城繩張り図（文献 184・中西義昌作成）	209
第 264 図	宝珠岳城繩張り図（文献 197・中西義昌作成）	209
第 265 図	小倉山城繩張り図（文献 197・中西義昌作成）	210
第 266 図	二丈岳城からの眺め（糸島半島）	210
第 267 図	二丈岳城堀切	210
第 268 図	二丈岳城繩張り図（文献 197・中西義昌作成）	211
第 269 図	二丈岳城石塁	211
第 270 図	吉井岳城・城山山頂の堀切	212
第 271 図	吉井岳城繩張り図（文献 205・山崎龍雄作成）	212
第 272 図	訂正志摩郡図（部分・国立公文書館蔵）	213
第 273 図	青木城繩張り図（文献 190・中西義昌作成）	213
第 274 図	白杵氏端城遠景（右手前・左奥は柑子岳）	213
第 275 図	白杵氏端城繩張り図（文献 184・中西義昌作成）	214
第 276 図	柑子岳城から見た眺望（長浜海岸・能古島・博多湾）	214
第 277 図	柑子岳城堀切	214
第 278 図	柑子岳城繩張り図（文献 181・中西義昌作成図を一部改変して事務局作成）	215
第 279 図	水崎山（水崎城）遠景	216
第 280 図	水崎山山頂周辺の平坦面（城郭遺構かは不明）	216
第 281 図	大神城繩張り図（文献 184・中西義昌作成）	216
第 282 図	岩松城繩張り図（文献 184・中西義昌作成）	217
第 283 図	松隈城繩張り図（文献 190・中西義昌作成）	217
第 284 図	波多江館繩張り図（文献 190・中西義昌作成）	218
第 285 図	波多江館遠景	218
第 286 図	波多江館堀・土塁	218
第 287 図	親山城繩張り図（文献 190・中西義昌作成）	219
第 288 図	犬鳴別館遠景（昭和 62 年調査時）	220
第 289 図	犬鳴別館石垣（下段）	220
第 290 図	犬鳴別館裏門の石垣	220
第 291 図	犬鳴別館測量図（文献 63）	221
第 292 図	犬鳴御別館絵図（宮若市教育委員会蔵・宮若市指定文化財）	222

第293図	犬鳴御別館絵図（藩主館部分・宮若市教育委員会蔵）	223
第294図	大音屋敷（上：石垣全景・下：枡形虎口）	223
第295図	直方惣郭図（個人蔵）	224
第296図	直方惣郭図（部分・個人蔵）（御殿の右上の鉤形の堀の下が旧藩主館跡地）	225
第297図	直方御殿御絵図（個人蔵）	226
第298図	遠賀郡黒崎古城図（部分・国立公文書館蔵）	227
第299図	黒崎城石垣	228
第300図	黒崎城南斜面にある矢穴痕跡の残る玄武岩	228
第301図	黒崎城本丸跡の花崗岩石材	228
第302図	黒崎城北側の護岸の石垣表記（陸地測量部作成 1/25,000 地形図「八幡市」（大正 11 年）を一部改変して事務局作成）（福岡県立図書館提供）	228
第303図	中島（若松城）の位（陸地測量部作成 1/25,000 地形図「八幡市」（大正 11 年））（福岡県立図書館提供）	229
第304図	元禄十二年若松附近古絵図（写） （部分・北九州市自然史・歴史博物館所蔵・提供）	229
第305図	名島城跡地形図（文献 79・昭和初期）	230
第306図	表粕屋郡名島古城之図（小早川期・国立公文書館蔵）	230
第307図	名島城本丸枡形虎口の石垣（福岡市埋蔵文化財センター提供）	231
第308図	発掘調査で確認された名島城本丸石垣（文献 82）	231
第309図	崇福寺唐門（重要文化財）	231
第310図	名島御館之図（九州大学附属図書館蔵）	231
第311図	福岡城堀石垣（腰巻石垣）	232
第312図	福博惣絵図（部分・福岡市博物館蔵、一部改変して事務局作成）	232
第313図	福岡城本丸・二ノ丸所在の門・櫓位置図 （文献 193 掲載図を一部改変して事務局作成）	233
第314図	福岡城二ノ丸表御門	233
第315図	福岡城二ノ丸裏御門	233
第316図	福岡城三ノ丸土塁	233
第317図	福岡城天守台	233
第318図	福岡城多聞櫓	234
第319図	福岡城祈念櫓	234
第320図	福岡城旧本丸表御門櫓	234
第321図	福岡城下之橋御門と伝潮見櫓	234
第322図	福岡城下之橋御門調査状況（福岡市埋蔵文化財センター提供）	234
第323図	福岡城祈念櫓調査状況（福岡市埋蔵文化財センター提供）	234
第324図	福岡城上之橋御門調査状況（福岡市埋蔵文化財センター提供）	234
第325図	肥前慶長国絵図に描かれた石崎古城（部分・佐賀県立名護屋城博物館蔵）	235
第326図	石崎城遠景	235
第327図	香椎井原屋敷地割図（事務局作成）	236

第 328 図 光福寺城館跡測量図（文献 175）	237
第 329 図 上頓野宮ノ前遺跡調査区位置図（文献 64）	237
第 330 図 上頓野宮ノ前遺跡第 3 区遺構平面図（文献 64）	238
第 331 図 本城南遺跡 C 地区遺構平面図（文献 69）	238
第 332 図 本城南遺跡 C 地区調査状況（北九州市教育委員会提供）	239
第 333 図 上西郷ニホンスギ遺跡（奥左隅に龜山城）（福津市教育委員会提供）	239
第 334 図 上西郷ニホンスギ遺跡全景（上が北・福津市教育委員会提供）	239
第 335 図 上西郷タナカ遺跡全景（上が北・福津市教育委員会提供）	240
第 336 図 香椎 A 遺跡第 4 次調査 I 区遺構平面図（文献 81）	241
第 337 図 香椎 B 遺跡生水・寺熊調査区遺構配置図（文献 76）	242
第 338 図 香椎 B 遺跡第 8 次調査 3 区遺構平面図（文献 83）	243
第 339 図 席田青木遺跡・中山遺跡遺構配置図（文献 204・山崎龍雄作成）	243
第 340 図 麦野 A 遺跡遺構配置図全景（文献 134）	244
第 341 図 諸岡 B 遺跡調査区位置図（文献 121）	244
第 342 図 諸岡 B 遺跡 9 次調査（G 区）遺構平面図（文献 121）	245
第 343 図 諸岡館跡全体復元図（文献 122）	245
第 344 図 諸岡館跡土塁遺構（福岡市埋蔵文化財センター提供）	246
第 345 図 諸岡館跡遺構平面図（文献 122）	246
第 346 図 大橋 E 遺跡遺構平面図（文献 129）	246
第 347 図 中白水遺跡平地城館遺構配置図（文献 46）	247
第 348 図 中白水遺跡 12 次調査全景（春日市教育委員会提供）	247
第 349 図 中白水遺跡 12 次調査遺構平面図（文献 130）	247
第 350 図 井出ノ原遺跡全景（文献 119）	248
第 351 図 大塚遺跡全景（那珂川町教育委員会提供）	249
第 352 図 大塚遺跡遺構配置図（文献 133）	249
第 353 図 安徳台遺跡地下式横穴（文献 131）	250
第 354 図 安徳台遺跡遺構配置図 (文献 131 掲載図を一部改変して事務局作成。アミカケ部が居館推定域)	250
第 355 図 平蔵遺跡 3 次調査遺構配置図（文献 125）	251
第 356 図 五ヶ山網取遺跡遺構配置図（文献 135）	252
第 357 図 柏原 K 遺跡中世遺構配置図（文献 138）	253
第 358 図 磐井川 A 遺跡中世遺構配置図（文献 141）	253
第 359 図 広瀬遺跡 1 次調査中世遺構配置図（文献 143）	254
第 360 図 志水 A 遺跡 C 区遺構配置図（文献 140）	254
第 361 図 志水 A 遺跡 C 区全景（福岡市埋蔵文化財センター提供）	254
第 362 図 清末遺跡中世後期遺構配置図（文献 139）	255
第 363 図 有田・小田部遺跡群中世遺構配置図（文献 186・右は復元図）	255
第 364 図 有田・小田部遺跡群中世城館関連遺構配置図（文献 186） (左: 小田部 3 丁目地点・右: 小田部 5 丁目地点)	256

第365図	原遺跡遺構配置図（文献145）	256
第366図	浦江遺跡5次調査13区遺構配置図 (文献144掲載図を一部改変して事務局作成)	257
第367図	下山門乙女田遺跡中世遺構配置図（文献142）	257
第368図	元寇防壁の位置を描いた「石塁遺址図」（『伏敵編』（明治24年）より転載）	258
第369図	各地区の防壁遺構断面図（文献114）	259
第370図	元寇防壁（指定地）の現状 (1:今津地区・2:生の松原地区・3:西新地区・4:蛭浜地区)	259
第371図	元寇防壁8次調査で見つかった石積み遺構 (福岡市埋蔵文化財センター提供)	260
第372図	元寇防壁8次調査防壁遺構復元	260
第373図	蔵持境遺跡遺構平面図（文献154）	261
第374図	蔵持古屋敷遺跡復元想定図（文献154）	262
第375図	蔵持古屋敷遺跡遺構配置図（文献149）	262
第376図	東五反田遺跡全景（糸島市教育委員会提供）	263
第377図	東下田遺跡（糸島市教育委員会提供）	263
第378図	東高田遺跡第3地点全景（糸島市教育委員会提供）	264
第379図	東高田遺跡第3地点遺構配置図（文献148）	264
第380図	熊野神社東遺跡遺構配置図（文献157）	265
第381図	石崎曲り田遺跡3次調査IV区上層遺構平面図（文献153）	266
第382図	木舟・三本松遺跡3次調査遺構配置図（文献152）	267
第383図	木舟の森遺跡遺構平面図（文献150）	268
第384図	大塚遺跡遺構配置図（文献164）	269
第385図	青木遺跡調査地位置図（文献162）	270
第386図	青木遺跡2次調査区中世遺構配置図（文献161）	270
第387図	青木遺跡4次調査遺構配置図（文献162）	270
第388図	池田井田遺跡遺構配置図（文献166）	271
第389図	潤古屋敷遺跡遺構配置図（文献167・168掲載図を一部改変して事務局作成）	272
第390図	波多江遺跡遺構配置図（アミカケ部は中世後半期・文献158）	272
第391図	木丸遺跡遺構配置図（文献165）	273

## 表 目 次

第1表	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿	2
第2表	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成24～25年度）	2

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

古代の防衛施設である大野城跡、基肆城跡、水城跡が存する本県では、九州歴史資料館を中心として継続的な古代山城の調査研究が行われてきた。また、8か所の神籠石系山城が知られており、いずれも国の史跡に指定され、調査研究ならびに保護、活用が図られているところである。

しかしながら、中世以降近世初期までの間に築造された、山城を中心とする数多くの城館・城郭遺跡については、これまで県および市町村が実施した遺跡詳細分布調査や重要遺構確認調査、県史・市町村史編纂事業を通じて把握に努めてきたが、総合的な調査を行うには至っていないかった。任意団体や個々の研究者によって地道に続けられた調査研究成果の蓄積は著しく、本県における中近世城館研究の進展はこれに負うところが大きいが、悉皆的な調査が実施されていないため、位置が特定されていない、あるいは詳細が十分に把握されていない城館・城郭遺跡は依然として多く、適切な保護措置を講じるにあたり情報が不足している状況である。また、遺跡の公開活用を図る上でも県内の城館遺跡相互の比較検討は必要であり、本県にとって中近世城館遺跡の総合調査の実施は課題となっていた。

近年の山間部における開発の増加や山城に対する興味関心の高まり、保存活用の要望の増加から総合調査の実施は急務となり、いよいよ総合的な分布調査に取り組むこととなった。本調査は県内の中近世城館遺跡を対象に、遺跡の位置や範囲、時代、歴史的背景等の基本的情報を可能な限り把握し、成果の体系的な整理と評価を行うものである。また、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解の促進をも目的としている。

## 2 調査の経過

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、国庫補助を受けて平成24年度から5か年の計画で実施している。平成25年2月に第1回福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会（以下指導委員会）を開催し、調査の方針と手法について指導を受けた。委員は第1表のとおりである。本調査は、県内市町村を旧国に基づいて地域分けし、筑前地域、豊前地域、筑後地域の順に調査を進め、随時報告書をまとめることとなった。

第1表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿（敬称略）

委員氏名	職名	備考
西谷 正	九州歴史資料館名誉館長 九州大学名誉教授	委員長、考古学
服部英雄	九州大学教授	副委員長、中世史
中井 均	滋賀県立大学教授	城郭研究

平成25年度は筑前地域の報告書刊行と豊前地域の調査を実施する予定となっていたが、筑前地域に所在する中近世城館遺跡の数は非常に多く、また、関連資料等も膨大な量にのぼるため、報告書を2分冊とし、調査事業を1年延長することとなった。指導委員会は2回開催し、調査および報告書作成作業の進捗状況の報告、併せて、旧筑前国の三日月山の城館群、黒崎城跡、花尾城跡の現

地視察と検討を行った。また、筑前地域の南半部にあたる旧御笠郡・夜須郡・上座郡・下座郡・穂波郡・嘉麻郡の6郡の調査成果を「福岡県の中近世城館跡I－筑前地域編1－」にまとめた。

平成26年度は筑前地域北半部の重点調査と報告書の刊行、豊前地域の調査を実施した。5月に開催した第4回指導委員会では、旧筑前国立花山城跡の南側に位置する城ノ越山に点在する城ノ越城館群の現地視察と検討、報告書作成作業の進捗状況および豊前地域の調査状況の報告を行った。

平成27年3月には第5回指導委員会を開催し、旧豊前国長野城跡周辺に展開する城館群を現地視察し、検討を行った。また、報告書作成作業の進捗状況の報告ならびに豊前地域の調査状況の報告を行い、指導、助言を得た。

第2表 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過(平成26年度)

	開催日時	会場	審議内容等
第4回	平成26年5月30日	久山町役場	・城ノ越城館群現地視察 ・城ノ越城館群の検討 ・筑前北部地域の調査について ・豊前地域の調査について
第5回	平成27年3月4日	北九州市埋蔵文化財センター	・長野城周辺城館群現地視察 ・長野城周辺城館群の検討 ・筑前北部地域の調査について ・豊前地域の調査について

### 3 調査の組織

本事業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課と九州歴史資料館とで協力して取り組んでいる。

#### 福岡県教育庁総務部文化財保護課（調整・調査・報告）

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
<b>総括</b>			
教育長	杉光 誠	杉光 誠	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
総務部長	西牟田龍治	西牟田龍治	川添弘人
文化財保護課長	伊崎俊秋	伊崎俊秋	赤司善彦
課長補佐	桂木俊樹	高田政司	岩崎千鶴子
<b>庶務</b>			
管理係長	石橋伸二	石橋伸二	石橋伸二
事務主査	伊藤幸子	綾香博充	
	綾香博充		
主任主事	加藤教子	加藤教子	加藤教子
<b>調査・報告</b>			
企画係長	吉田東明	吉田東明	吉田東明
技術主査	岸本 圭	今井涼子	今井涼子

	今井涼子 宮地聰一郎		大庭孝夫
主任技師		大庭孝夫 坂元雄紀	
			坂元雄紀

#### 九州歴史資料館（調査・報告）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
<b>総括</b>			
館長	西谷 正	荒巻俊彦	杉光 誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊崎俊秋
参事補佐	小池史哲		
<b>庶務</b>			
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塙塚孝憲
総務班長	長野良博	長野良博	山崎 彰
<b>調査・報告</b>			
学芸調査室長	小田和利	小田和利	小田和利
学芸普及班長 (平成 25 年度から学芸研究班)	松川博一	松川博一	松川博一
技術主査		岡寺 良	酒井芳司
			岡寺 良
主任技師	岡寺 良 一瀬 智	一瀬 智	

#### 調査協力（本書報告対象地域のみ（50 音順・敬称略））

<公的機関>芦屋町教育委員会、伊都国歴史博物館、糸島市教育委員会、宇美町教育委員会、岡垣町教育委員会、遠賀町教育委員会、春日市教育委員会、粕屋町教育委員会、北九州市市民文化スポーツ局文化振興課、北九州市立自然史・歴史博物館、九州大学附属図書館、鞍手町教育委員会、古賀市教育委員会、小竹町教育委員会、国立公文書館、佐賀県教育庁、佐賀県立名護屋城博物館、篠栗町教育委員会、志免町教育委員会、新宮町教育委員会、須恵町教育委員会、那珂川町教育委員会、中間市教育委員会、直方市教育委員会、直方市立図書館、久山町教育委員会、福岡市経済観光文化局文化財部、福岡市史編さん室、福岡市博物館、福岡市埋蔵文化財センター、福岡県立図書館、福岡県立美術館、福津市教育委員会、水巻町教育委員会、宮若市教育委員会、宗像市市民協働・環境部。

<研究団体・個人>牛嶋英俊、小方良臣、片山安夫、木島孝之、庄野直彦、田中賢二、中西義昌、中村修身、廣崎篤夫、藤野正人、宮崎博司、村上勝郎、八巻孝夫、山崎龍雄、北部九州中近世城郭研究会（代表：中村修身）。

## II 調査の方法

### 1 調査の進め方と方法

前章でも述べたとおり、本県における中近世城館の調査研究成果の蓄積は著しく、既往の調査情報が比較的多くそろっているのが実情である。よって、既往情報の整理と蓄積を主眼に置き、以下のとおりの手順で調査を進めている。

#### ＜手順1＞既存資料の把握

上記の状況を勘案し、対象地域における城館の全体概要を知るために、過去の調査資料等を把握するところから始めることとした。福岡県内における城館調査は、既に江戸時代の地誌類編纂にまでさかのぼることができると、それらも含め、以下の12文献を「基本参考文献」とし、そのほか各自治体史や報告書等を参考にしながら、城館の情報を収集した。12の基本参考文献は以下のとおりであり、その概要については、前冊『福岡県の中近世城館跡 I—筑前地域編 I—』に掲載しているため、そちらを参照されたい。

- ①『筑前国続風土記』(貝原益軒著・1629年)
- ②『筑前国続風土記附録』(加藤一純・鷹取周成著・1798年)
- ③『筑前国続風土記拾遺』(青柳種信著・文政～天保年間(未完))
- ④『福岡県地理全誌』(白井浅夫ほか著・1875～1880年)
- ⑤『旧城跡等ノ取調』(福岡県社第1956号 大正5年10月2日施行)
- ⑥『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡県史、史蹟名勝口碑傳説所在地』(和田宗八・1936年)
- ⑦『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡 (人物往来社(鳥羽正雄他編・1967年))
- ⑧『探訪日本の城』10 西海道 (小学館・1977年)
- ⑨『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX付録 福岡県中世山城跡  
(福岡県教育委員会(副島邦弘・近沢康治編)・1979年)
- ⑩『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島 (新人物往来社(磯村幸男編・1979年))
- ⑪『福岡県の城』(廣崎篤夫・1995年) /『福岡県古城探訪』(廣崎篤夫・1997年)
- ⑫『福岡県の城郭』(福岡県の城郭刊行会・2009年)

この他、国人領主筑紫氏の城館の一覧を示した『筑紫氏城数之覚』(筑紫家文書・福岡市博物館蔵)や秋月氏の城館の一覧を示した『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』(原文書不詳・三浦末雄1946『物語秋月史』所収)などの記載城館も参考としている。

なお、筑前地域のうち本書掲載の鞍手郡については、江戸時代の地誌類にほとんど掲載されていない小規模城館が多い。それらの小規模城館の初出については、『筑前要領大友家戦史』という文献が初出となっている。これについては、本章第2節において述べておくこととする。

#### ＜手順2＞既存情報の整理

上記の資料をはじめとする把握された既存情報を元に、城館一覧表を作成するとともに、位置が判明しているものについては国土地理院発行1/25,000地形図により位置図を作成した。それらの内容や詳細についてはⅢ・Ⅳを参照願いたい。

それらの情報をこの段階において、該当市町村教育委員会および調査指導委員に情報照会を行ったうえで、追補訂正を行った。

### <手順3>一次調査

上記、既存情報の整理を行った情報をもとに、一次調査として以下の調査を行った。

#### ①現地遺構の確認調査

位置が把握できたものについて、現地にて遺構の有無や状況について確認した。既に縄張り図等のデータがあるものについては、それらの図面と現地の状況との照合も行っている。

#### ②文書調査

既に翻刻されている古文書について、対象地区の城館にかかわる記載を抽出する作業を行った。詳細についてはVIを参照願いたい。

#### ③絵図調査

古城跡を描いた古絵図資料として、文化～天保年間に秋月藩士の大蔵種周・土井正就によって描かれた『古戦古城之図』(国立公文書館蔵)などに記載された城館絵図の調査も行い、現地調査のためのデータの参考とした。

#### ④地名調査

城館にかかわる地名を抽出する作業で、「明治十五年字小名調」(『福岡縣史資料第七輯』1937年福岡県編集・発行)を元に、城館関連地名について抽出を行い、現状で把握できている城館との照合を行った。また、上記文献には記載されていないが、現在残されている小字名なども城館に直接関わるものについても抽出を行った。詳細についてはVIIを参照願いたい。

### <手順4>二次調査（追加調査）

一次調査において、得られた情報をさらに補完するため、追加調査として二次調査を行った。調査内容については以下のとおりである。

#### ①現地調査

一次調査において現地を確認した結果、城館遺構が確認され、なおかつ既往の図面がないものについて、縄張り調査を行い、図面を作成した。また、平地に立地し、現地形からでは城館の範囲の特定が困難なものについては市町村が所蔵する地籍図を利用して城館の範囲を特定・推定した。作業の行程上、現地調査については一次調査と二次調査を連続して行わざるを得ない状況であり、いくつかについては事実上、一連の調査として行ったものもある。

なお、図面の作成方法・表記・遺構名称等については、『発掘調査のてびき 各種遺跡編』(2014年・文化庁編)に準じた。

#### ②地名調査

一次調査において確認された城館関連地名について、特定の城館と関連性が窺われるものについては、現在の場所との照合を行った。照合方法は、現在の小字との照合によるものであり、市町村教育委員会および地元博物館等に照会することで行った。そのため、既に今となっては所在不明となってしまったものも多かった。

最終的に、調査対象については「中近世城館」「城館関連遺跡」「城館等伝承地」の三分類を行い、それぞれ報告することとした。それらの分類基準は以下のとおりである。

#### ①中近世城館

中世城館一般をさす。位置や来歴が明確なもののみならず、それらが不明の場合であっても、基本文献に城として記載されているものについてはここに含めた。

なお、報告においては中世城館と近世城館は区別し、中世から近世まで連続しているものについては中世城館に含め、近世以降に築城されたことが明らかなものについて、近世城館とした。

### ②城館関連遺跡

城館等の伝承や来歴はないが、発掘調査において中世（概ね 12～16 世紀代）の溝や堀状遺構で囲まれた集落、屋敷地などの遺跡を指す。中世の屋敷地と思われる遺跡であっても、溝や堀で囲まれることがなく、防御されたものではないものについては除外した。

### ③城館等伝承地

城館伝承の内、主として特定の武将などの居館として伝承のあるもので、現在、場所や城館遺構が全く不明となっているもの、城館以外のもの（岩など）に城館伝承が付されているものを指す。確実に遺構等が見られるものについては「中世城館」として扱っている（「波多江館」など）。

本書では、上記の調査を経た筑前地域の一部（旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡）について報告を行うものである。

## 2 鞍手郡城館史料『筑前要領大友家戦史』について

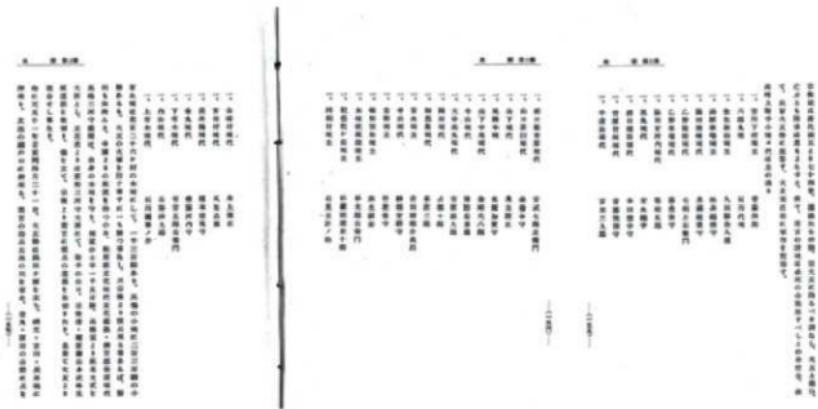
筑前地域のうち本書掲載の鞍手郡については、江戸時代の地誌類にはほとんど掲載されていない小規模城館が多い。それらの小規模城館の初出については、『筑前要領大友家戦史』という文献がほとんどである。にもかかわらず、この史料の原典については長らく不明であった。しかし、今回の調査において、原典あるいはそれに近いと思われる史料を発見、調査する機会を得たため、ここに紹介することとしたい。

### （1）『筑前要領大友家戦史』について

鞍手郡、特に上鞍手（旧若宮町域）の城館の多くは、上記のとおり江戸時代の地誌類にはほとんど掲載されていない。当該地域の城館の集成において参考とされたのが、昭和9年（1934）に刊行された『鞍手郡誌』に翻刻が載せられていた『筑前要領大友家戦史』である。そこには、天文11年（1542）の大友氏と宗像氏との争い「小金原合戦」の様相と共に、旧若宮町域の城館 35 箇所とその城主・城代が羅列されており（第1図）、その一覧が以後の城館集成の基本文献となっていたが、その出典は不明であった。例えば、昭和52年に刊行された宮若市山口所在の茶臼山城跡の発掘調査報告書『九州縦貫自動車道関係発掘調査報告書 XVI』（福岡県教育委員会発行）でも、この文献は注目されており、第I章第2節（3）には『『筑前要領大友家戦史』に見える大友宗麟の鞍手の攻略』としてその概要が記されているが、「『筑前要領大友家戦史』が、いつ、いかなる人によって書かれたものかさだかではない」とし、その註には「鞍手郡委員会編『鞍手郡誌』には、この文献の解題が示めされていないので九州歴史資料館倉住靖彦氏を通じて九州大学文学部国史科助手森茂暁氏の手をわざわざしたが判明していない。」とあり、その時点以来、長らく出典は不明となっていた。

### （2）香月文書『筑前要領』について

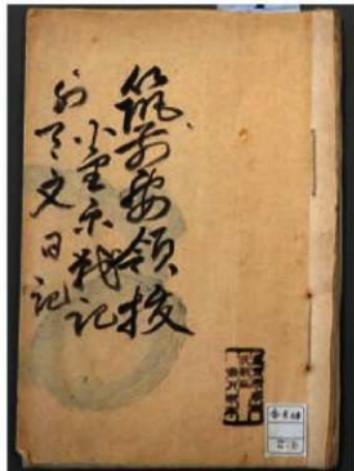
今回の調査事業において、若宮地域の城館を解明する上で、『鞍手郡誌』記載の『筑前要領大友家



第1図 「鞍手郡誌」掲載『筑前要領大友家戦史』文中の城館一覧の掲載部分

戦史」の出典を調べる必要性があると認識し、その探索を行った。そこで筑豊地域の歴史に詳しい牛嶋英俊氏（福岡県文化財保護指導委員）に尋ねたところ、直方市立図書館に所蔵されている直方市史編纂資料の中に『鞍手郡誌』を編纂した人物の一人、香月楽平の旧蔵資料「香月文書」があり、その中に類似する名称、内容の文献があることを御教示いただいた。そこで牛嶋氏立会いの下、原資料を確認するにいたった。その資料が「筑前要領抜 外小金原戦記 天文日記」（香月文書 278・第2図）である。墨書きの書簡綴本で、全文を読み下してはいないが、『鞍手郡誌』掲載の文章と同じ書き出して始まっており、内容もかなり重複する部分が多いが、『香月文書』「筑前要領抜」の方が内容量が多く、おそらくこの文書を鞍手郡誌編纂の際に抜き書きしたものと思われる。

なお、城館の一覧部分の読み下しを次頁に掲げ、写真も掲載する(第3図)。鞍手郡誌掲載の内容と大半は同じであるが、原本では「○○村△△城」となっているところを鞍手郡誌では「○○△△城」と略して書いていたり、写し間違いなどもあって、今回の調査によってより正



第2図 「筑前要領抜」表紙（直方市立図書館蔵）

于時上鞍手郡村々小城代或ハ城主アリ、  
 先吉川庄下村音藤太郎 六郎丸城石川代々城主  
 金生村巖山城主 入田賀全人道  
 潟原村岡城代 松井越後守、同修理亮主子越中丞  
 脇田村篠塚城代 黒瀬後守  
 野村篠ノ代 毛利左衛門  
 神場城 藤豐後守  
 脇田村安内城代 麻原五郎  
 黒丸村黒丸城代 安永越中守子親太郎  
 浩口村源谷城代 本多備中守  
 竹原村竹原城代 音義飛翼守  
 平村浦山城代 吉田九郎  
 浩口村都市原城代 武七良左衛門  
 山下城代 古木正  
 尾尾木城代 尾尾加賀守  
 同郷也○寺山城代  
 大谷也○高丸城代 吉原源五郎  
 同郷也○岡田城代 古部十郎  
 煙堺三郎  
 ○宮水城代 吉田福源介貞昌  
 ○中山城主  
 ○古野村掌管 ■〔桂道〕肥後守  
 ○頓野吉取城主 麻生領益  
 ○本村正岡城代 杉太郎右衛門  
 ○龍池村龍池城主 杉橋頭並連 同十郎  
 ○同村福村城主 石見主計助  
 ○山崎村城代 井上彌正  
 ○宮田村城代 瓜生兵庫  
 ○長井鶴井城代  
 ○金丸村城代 齊藤河内守  
 ○下有木村城代 越後式部介  
 ■〔桂道〕吉五郎右衛門  
 ○内山城代 古野神九郎 古殿  
 ○上有木村城主 石川園書介  
 正親町天皇御時代事也 有木郷二子ハ有名ノ侍  
 有吉 石川 〔桂道〕ヲ以テ附属多シ、  
 ○安政内閣ト云アリ、城跡不詳、地方領、  
 ○左衛門源昌ト云ハ有木郷貢久ニ在ス、  
 其地不詳



第3図 「筑前要領抜」掲載の城館一覧（直方市立図書館蔵・上は読み下し文）

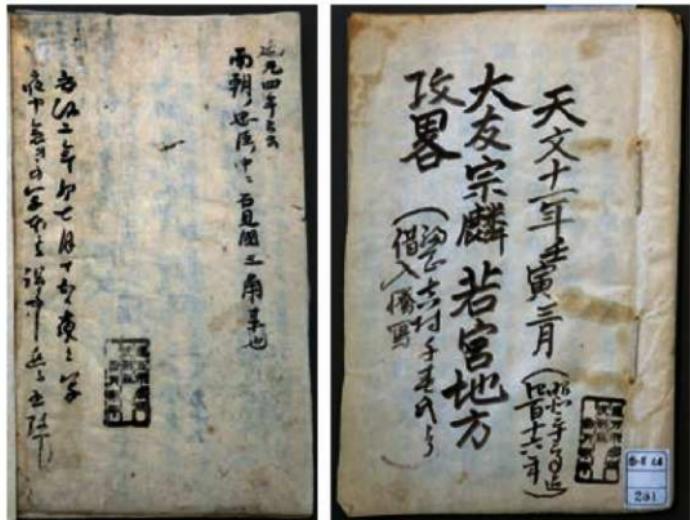
確な名称を捉えることができた。

また、この香月文書「筑前要領抜」の成立年代であるが、筆跡などから近代以降に写されたものである可能性が高い。しかし、香月文書281に「天文十一年壬寅三月 大友宗麟若宮地方攻略」という文献がある（第4図）。その内容は、書き出しが「筑前要領抜」と同様であるものの、全て同一というわけではないが、重複する部分が多く、少なくとも何らかの関係がある文書である。また表紙に「吉村与平氏より借入贈写」とあり、吉村氏が近代以降に写したものとみられるが、巻末に「安政二年卯七月十五日夜々写 夜中急ぎの写本にて誤多し近日書改」とあり（第4図左）、原本から安政2年（1855）に写された内容であることが分かる。よって、少なくとも幕末までには「筑前要

領抜」も成立していたとみられる。

### (3) 小結

以上、若宮地域の城館の初出文献である「筑前要領大友家戦史」について、その出典の探索結果を述べてきたが、少なくとも幕末以前にまで遡る記載内容を持っており、近世の地誌類と同様の史料的価値をもつものであると言えよう。今回は時間的な制約もあって、城館の一覧の確認と概略を調べるにとどまった。将来的には全文読み下したうえで、その内容の精査を行うことにより、より詳細な情報が得られよう。



第4図 『天文十一年壬寅三月 大友宗麟若宮地方攻略』(直方市立図書館蔵)  
(右:表紙・左:年紀記載部分)

### III 対象地域城館一覧

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての一覧を示す。一覧表の各項目の詳細は以下のとおりである。

#### <一覧表の項目解説>

「地域」…県内の旧国名（筑前・筑後・豊前）の別を示す。

「No.」…遺跡の分類ごとに通じて番号を付した。番号の振り方は以下のとおり。

- ・「中世城館」…1・2・3…
- ・「近世城館」…K 1・K 2・K 3…
- ・「城館等伝承地」…D 1・D 2・D 3…
- ・「城館関連遺跡」…R 1・R 2・R 3…
- ・「所在不明」…F 1・F 2・F 3…

「名称・別称」…城館の名称が複数あるものについては、なるべく基本参考文献の初出名を名称として採用し、他の名称については別称とした。ただし、今日一般的に通用した名称が上記基準でない場合は、一般名称の方を採用した（波多江館など）。  
よみがなについては、なるべく確実に把握することに務めたが、読み方を確定できなかったものについては○を付して記している。

「旧郡名」…旧郡名の別を指す。「遠賀郡」については中世～近世にかけ、「御牧郡」とも称されるが、本書では「遠賀郡」で統一した。

「所在地」…大字までの表記とした。

「関連地名」…地名調査の結果、城館に直接関連すると思われる地名を記した。

「史料」…文書調査の結果、一次史料に記載のあるものには、「一次」欄に、参考史料に記載のあるものには「参考」欄に○を付した。

「地誌類・参考文献」…一本一覧表を作成するにあたって基本参考文献とした文献に記載のあるものはそれぞれ○を付し、「その他文献」欄にはそれ以外の文献番号（番号は参考文献一覧（44～49ページに記載）の番号と同じ）を付した。番号がゴチックとなっているものについては、縄張り図または測量図が掲載されている文献を指す。文献の略号内容は以下のとおり。

- ・「本編」…『筑前国続風土記』（貝原益軒著・1629年）
- ・「附録」…『筑前国続風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著・1798年）
- ・「拾遺」…『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信著・文政～天保年間（未完））
- ・「全誌」…『福岡県地理全誌』（白井浅夫ほか著・1875～1880年）
- ・「種々」…『研究旅行用面白い種々な見方の福岡県史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（金文堂（和田宗八・1936年））
- ・「全集」…『日本城郭全集』14佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
- ・「探訪」…『探訪日本の城』10西海道（小学館（西谷正ほか・1977年））
- ・「教委」…『九州縦貫自動車道開通係理藏文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
- ・「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年）

- ・「廣崎」…『福岡県の城』(廣崎篤夫・1995年) / 『福岡県古城探訪』(廣崎篤夫・1997年)
  - ・「城郭」…『福岡県の城郭』(福岡県の城刊行会・2009年)
- 「種類」…以下の基準により分類して表記した。
- ・「山城」(比高約30m以上の丘陵・山稜上に立地する城館)
  - ・「丘城」(比高約30m未満の丘陵上に立地する城館)
  - ・「平地城館」(平地に立地する城館)
- 「所在」…城館の所在や遺構の状況や範囲は判別できるか否か等で以下のとおり分類・表記した。
- …所在・残存遺構・範囲が明確に把握できるもの。
  - …所在は把握できるが、残存遺構や範囲は把握できない（もしくは未踏査）もの。
  - …小字の範囲程度の所在のみが把握できるもの
  - △…大字の範囲程度の所在のみが把握できるもの
- なお、旧都の範囲までしか把握できないものについては「所在不明」とした。
- 「図幅名」………IVに掲載した位置図の図幅名を示した。図幅名は国土地理院1/25,000地形図を採用し、地図の西側と東側とで、それぞれ（西）・（東）を付した。
- 「調査データ」…今回の調査事業も含め、「縄張り調査」・「測量調査」・「発掘調査」がなされているものについて、それぞれ○を付した。
- 「包蔵地番号」…周知の包蔵地となっているものについては、包蔵地番号を県および市町村の番号をそれぞれ付した。それぞれの包蔵地を示した分布地図については、参考文献一覧を参照願いたい。
- 「概要」………Vの個別報告に記載のあるものについては、記載ページを付し、記載のないものについては、城館の概要について記した。

<中世城館>

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献					種 別	所在				
								一 歩 考 査	本 編	附 録	沿 革	全 体	理 念	全 集	探 訪	教 授	大 系	廣 島	坂 野	その他文献		
筑前	137	熊ヶ堀城	くまがみね	熊ヶ堀	鞍手郡	宮若市大鳴		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	◎	
筑前	138	安河内城	やすこうち	鷺田安河 内城	鞍手郡	宮若市鷺田					○		○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城 か	○
筑前	139	古賀城	こが	鶴ヶ瀬城	鞍手郡	宮若市鷺田				○	○								20,192	丘城	●	
筑前	140	草場城	くさば	福山城・湯 原草場城	鞍手郡	宮若市湯原		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	◎	
筑前	141	地蔵山城	じぞうやま	大村氏宅	鞍手郡	宮若市湯原	大城・大城 前			○				○		○	○	○	14	丘城	◎	
筑前	142	下村城	しもむら	吉川下城	鞍手郡	宮若市下	堀之内			○	○		○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	丘城	●	
筑前	143	天神山城	てんじんや ま		鞍手郡	宮若市下				○										丘城 か	△	
筑前	144	櫛城	じのん	藤崎城	鞍手郡	宮若市乙野		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	◎	
筑前	145	草場城	くさば	乙野草場城	鞍手郡	宮若市乙野							○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	◎
筑前	146	房宮城	たけみや		鞍手郡	宮若市乙野				○										山城	△	
筑前	147	清水城	しづすが		鞍手郡	宮若市乙野				○			○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	△	
筑前	148	立林城	たてばやし		鞍手郡	宮若市黒丸				○	○									山城	◎	
筑前	149	稻光城	いなみつ	城山城・稻 次城・小伏 城	鞍手郡	宮若市稻光・小 伏	古城原・古 城			○	○		○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	丘城	◎	
筑前	150	亭跡山城	(ていせき さん)		鞍手郡	宮若市稻光				○										不明	△	
筑前	151	黒丸城	くろまる	古賀宗城	鞍手郡	宮若市黒丸	城ノ監	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	丘城	◎	
筑前	152	平山城	ひらやま	六社八幡 城	鞍手郡	宮若市黒丸				○	○				○					20,192	山城 丘城	◎
筑前	153	丸尾城	まるお	黒丸丸尾	鞍手郡	宮若市黒丸・山 口													○	20,65,192	山城	◎
筑前	154	宮永城	みやなが	雁城山城・鷹 大木城	鞍手郡	宮若市宮永・山 城山・陣屋谷	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192,210	山城	◎	
筑前	155	黒巣城	くろす	細黒巣城・ 黒鳥城	鞍手郡	宮若市山口				○			○	○	○	○	○	○	13,20,192	山城	◎	
筑前	156	高丸城	たかまる	鷹丸城・大 谷城・大谷 高丸城	鞍手郡	宮若市山口				○			○	○	○	○	○	○	13,14,20, 192	山城	◎	
筑前	157	岡田城	おかだ		鞍手郡	宮若市山口				○			○	○	○	○	○	○	13,20,192	山城	◎	
筑前	158	尾園本城	おののほ ん	尾園城・宮 山城	鞍手郡	宮若市山口				○			○	○	○	○	○	○	13,20,55, 192	丘城	◎	
筑前	159	山下城	やまとじ		鞍手郡	宮若市山口				○	○		○	○	○	○	○	○	13,20,192	丘城	◎	
筑前	160	茶臼山城	ちゃうすや ま	茶臼岳城・ 茶臼城	鞍手郡	宮若市山口				○	○		○	○	○	○	○	○	13,14,20,55, 192	山城	◎	
筑前	161	中尾城	なかお	山下中尾 城	鞍手郡	宮若市山口							○	○	○	○	○	○	13,20,192	丘城 か	△	
筑前	162	寺山城	てらやま		鞍手郡	宮若市山口								○	○	○	○	○	13,20,192	丘城 か	△	
筑前	163	片山砦	かたやま		鞍手郡	宮若市山口							○		○	○	○	○	13,20,192	丘城 か	○	
筑前	164	天ノ坊城	てんのぼう		鞍手郡	宮若市山口・稻 光・平									○	○	○	○	14	不明	△	
筑前	165	浦山城	うらやま	平浦山城	鞍手郡	宮若市平								○		○	○	○	13,20,192	不明	△	

図幅名	調査データ 測量図 発表図	位置地番号		概要
		福岡県	市町村	
豊田(西)	○	440267		本文96ページ参照。
豊田(東)		440266		『筑前要領』(香月文書)には「豊田村安河内城代 藤原五郎」と城代名が書かれ、当地域の小規模城館の一つとする。小字「安河内」の地内に位置すると思われるが、城郭遺構は見つかっておらず、また県の分布地図の所在地も踏査の結果、自然地形であり、現在のところ、字「安河内」地内の詳細な場所までは不明である。
豊田(東)		440298		『拾遺』に「古賀古城(鶴か浦の城)」として、文亀年間の宗像氏臣の右部氏、大永・天文年間の大内氏臣の大村日向守重蔵などの城主名が挙がっている。城があったという天満宮跡地とされる場所は、丘陵全体が後世の開墾により造成されてしまっており、現在は城郭遺構を確認できない。
豊田(東)	○	440268		本文97ページ参照。
豊田(東)	○	440299		本文98ページ参照。
豊田(東)	○	440269		『筑前要領』(香月文書)には「吉川庄下村城 音藤四郎」と記載される。地元では「下村城」と伝え。須賀神社南側の丘陵上にあったとする。現地には尾根上に7基ほどの群集墳や平坦面を確認することができるが、明瞭な城郭遺構を確認することはできない。
豊田(東)				『全跡』には「村の西南一町にあり、山上平地。東西十六間南北八間許、城主を藤田助四郎と云う」と記載される。また下村城と同一の可能性もあるが、確証はない。天神山の所在も不明であるため詳細は不明である。
豊田(東)	○	440265		本文99ページ参照。
豊田(東)	○	440264		本文99ページ参照。
豊田(東)				『拾遺』(「舊古城址」)の記載に、「又(乙野)村南に岳宮とて小山有。城址なりといえども不詳」とある。乙野地内の南側にあるものとみられるが所在不明である。「若宮町史」ではこの城の城趾を清水城と推測するが、場所が異なるようである。
豊田(東)		440297		『全跡』には「清水城址」として(「乙野」)村ノ西二十五町ニアリ。城主是水氏ノ由井伝。山上に三戱許の平地あり」と記載される。乙野の草場城の城主と同じであるが、場所が異なるようである。所在は不明であり、県の分布図に所在が記載されるが、そこは自然地形であり、『全跡』の記載とも異なる場所である。
豊田(東)	○			本文101ページ参照。
豊田(東)	○	440275		本文101ページ参照。
豊田(東)				『全跡』に「高峰山城址」として記載。「村の東北二町にあり。平地二戱許あり。字を白土と云。城主を須川右京と云。」としているが、現在、福光地内に「白土」の字はなく、所在不明である。
豊田(東)	○	440263		本文102ページ参照。
豊田(東)	○			本文104ページ参照。
豊田(東)	○ ○ ○			本文106ページ参照。
豊田(東)	○	440262		本文107ページ参照。
豊田(東)	○			本文108ページ参照。
豊田(東)	○	440296		本文108ページ参照。
豊田(東)	○			本文109ページ参照。
豊田(東)	○	440256		本文110ページ参照。
豊田(東)	○	440295		本文110ページ参照。
豊田(東)	○	440257		本文111ページ参照。
豊田(東)				『筑前要領』(香月文書)には「山下〇中尾城代 金崎大八郎」とあり、字山下の地内に所在が推定されるが、現在中尾という地名や伝承もなく、所在は不明。ただし、山下城としての城郭がこれにあたる可能性も考えられる。
豊田(東)				『筑前要領』(香月文書)には中尾城につづいて、「同郡山口寺山城 唐防石原城」とあり、字山下の地内に所在が推定されるが、現在山下という地名や伝承もなく、所在は不明。ただし、山下城としての城郭がこれにあたる可能性も考えられる。
筑前東郷(東)				『全跡』には(山口)村の東二町柱松にあり、廣三十間四面。宗像氏替の由、言伝ふ」とある。小字に「片山」があり、地内の丘陵上にあたるとみられるが、現地に城郭遺構は見られず詳細は不明。
豊田(東)		440261		文獻14の「城趾(とりで) 古戰場分布図」での掲載を初出とする。県の分布地図(文獻218)では、天の坊山山頂が城地とするが、城主など城に関する情報は他になく、所在はおろか、城の根拠は不明確である。なお、『全跡』では「天王峯(てんのうぼう)」の山岳名があり、これが既に「天の坊」となったとみられる。
豊田(東)		440274		『筑前要領』(香月文書)には「平村蒲山城代 吉田三九郎」とあり、大字平の地内に所在したとみられるが、関連する城館遺構は見つからない。詳細不明。県の分布地図(文獻218)には「一覧表記載と番号付とはなされているが、地図上には見当たらぬ」。『篠ヶ丘』には平村蒲山城(吉田氏)、芹田には「平蒲山城(吉田氏)」と2つの城が掲載されているが、共にこの城を指しているものとみられる(『教委』でも同様の記載がなされている)。

地 域	No.	名 称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献					種別	所在	
								一 番 多 少 次 考	二 本 編	三 附 錄	四 拾 遺	五 全 詒	六 提 綱	七 全 集	八 探 訪	九 教 委	十 大 系 統	十一 廣 域	十二 都 域
筑前	166	堀城	ほりたに	沼口堀谷城	鞍手郡	宮若市沼口	堀之内					○	○	○	○	○	13,14,20, 192	丘城 か	△
筑前	167	都市原城	とちばる		鞍手郡	宮若市沼口						○	○	○	○	○	13,20,192	丘城 か	△
筑前	168	竹垣城	たけがき	竹原竹垣城	鞍手郡	宮若市竹原					○	○	○	○	○	13,20,192	丘城 か	△	
筑前	169	上有木城	かみあるき		鞍手郡	宮若市上有木					○	○	○	○	○	13,14	丘城 か	△	
筑前	170	六郎丸城	ろくろうまる	櫻城	鞍手郡	宮若市上有木	六郎丸				○	○	○	○	○	13,18	丘城	●	
筑前	171	城崎岱	じょうさき	岩永左衛門城	鞍手郡	宮若市上有木・四郎丸	城先(四郎丸)		○	○	○				○	18	丘城	●	
筑前	172	下有木城	しもあるき	坂元城・坂本城	鞍手郡	宮若市下有木・坂崎					○	○	○	○	○	13,14,18, 192	丘城 か	△	
筑前	173	山崎城	やまざき		鞍手郡	宮若市倉久										14	丘城 か	△	
筑前	174	四郎丸城	しろうまる		鞍手郡	宮若市四郎丸	四郎丸				○	○	○	○	○			丘城 か	△
筑前	175	内山城	うちやま	古野城	鞍手郡	宮若市倉久	古殿・古殿の前					○	○	○	○	○	13,14,18	丘城 か	△
筑前	176	金丸城	かなまる		鞍手郡	宮若市金丸	金丸				○	○	○	○	○	13,14,20, 192	丘城	△	
筑前	177	友池城	ともいけ		鞍手郡	宮若市原田					○		○	○	○	192	丘城	○	
筑前	178	蟹藏山城	かにばらさんじやく	勝山城	鞍手郡	宮若市金生					○	○		○	○	192	山城	◎	
筑前	179	金生城	かなう	勝山城・白鹿城	鞍手郡	宮若市金生	城の内・古城		○	○	○	○	○	○	○	13,192	山城	◎	
筑前	180	長井鶴城	ながいづる		鞍手郡	宮若市長井鶴					○	○	○	○	○	13,14	山城	△	
筑前	181	宮田城	みやた		鞍手郡	宮若市宮田							○	○	○	13	丘城	△	
筑前	182	龍ヶ岳城	りゅうがたけ	龍徳城・粥田城・鶴岳城	鞍手郡	宮若市龍徳	城ヶ谷・町屋敷、辻屋敷、門ノ内・小路、表口・裏口		○	○	○	○	○	○	○	13,14,18 192	山城	◎	
筑前	183	祇園岳城	ぎおんだけ		鞍手郡	宮若市本城	城・城上		○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,18, 178	山城	◎
筑前	184	塔ノ峯城	とうのみね		鞍手郡	宮若市龍徳・鶴田							○	○	○	○	18	山城	●
筑前	185	稻付城	いなつき	稻築城・稻村城・龍ヶ岳城	鞍手郡	宮若市龍徳	稻築		○	○	○	○	○	○	○	13,18	丘城 か	●	
筑前	186	高取城	たかとり		鞍手郡	宮若市龍徳・鶴田								○	○	18	山城	●	
筑前	187	草場城	くさば	勝野山城・目尾崎城	鞍手郡	鞍手郡小竹町勝野・新多			○	○	○	○	○	○	○	14,19	丘城	●	
筑前	188	山崎城	やまさき	新山崎城	鞍手郡	鞍手郡小竹町新山崎	城尾		○	○	○	○	○	○	○	13,14,19	丘城	●	
筑前	189	権現山城	ごんげん やま	権現堂城・吉野城	鞍手郡	鞍手郡小竹町御德			○	○	○	○	○	○	○	13,14,19	山城	●	

図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	緯度 経度 測量 免賦 種類	福岡県	市町村		
豊田(東)		440259		『筑前要領』(香月文書)には「沼口村堀谷城代 本田備中守」とある。県の分布地図(文献218)では、大字山口との境界にある標高122mの独立丘陵上と推測しているが、当該地は自然地形で城郭遺構は存在しない。またその近辺には字「舟ノ内」があり、城との関連が推測されるが、関連構造は見つかっていないため、所在不明と言わざるを得ない。 『若宮町史』には既に消滅したと書かれている。また、文献14の「城趾(とりで)古戦場分布図」には城名の記載はないものの、堀谷被推定地の場所に●が付されており、堀谷城を示しているものと思われる。	
豊田(東)		440258		『筑前要領』(香月文書)には「沼口村都市原城代 安武七良(郎)左衛門」とある。県の分布地図(文献218)には現在の若宮IC付近に推測されているが、詳細は不明。現在、小字に「都市原」(現在、日本陶器の工場地)が残っており、その近辺に所在が推測される。	
豊田(東)		440260		『筑前要領』(香月文書)には「竹原村竹垣城代 舟藤飛騒守」とある。県の分布地図(文献218)では大字平との境に近い丘陵上としているが、現地には城郭遺構はない。また、竹垣の地名や伝承も見られない。竹原地内に存在したと推測されるが、詳細は不明。	
中間(西)	(410074)			『筑前要領』(香月文書)には「上有木城 石川園書院 石川氏祖先」とある。文献14の「城趾(とりで)古戦場分布図」には山峰の北側にある標高95mの独立丘陵上に位置が示されているが、現地は自然地形であり、城郭遺構はない。同じく上有木城内の中六郎丸城の城主立が、上有木城と同じ石川氏とあることから、同一の城を指している可能性も考えられる。	
中間(西)	410074			『筑前要領』(香月文書)には「六郎丸城 石川代々城主」とある。字六郎丸の地内には、石川氏が代々居住した伝承地があり、現在も石川姓が居住する。低丘陵上に位置し、城こうもりよりは館に近い印象を受けるが、現地は宅地と畠地で地表観察では城郭遺構を発見することはできない。	
中間(西)	410013			『附録』(香月文書)には「四郷丸村岩谷、同所の上有木村城崎とい焉所に、高く平たい地に森の跡があり、岩谷平衛門が守っていた」とある。城崎の東には、吉野院の北、標高107mの独立丘陵が城地とされているが、自然地形であり、城郭遺構は見られない。	
筑前東郷(東)				『筑前要領』(香月文書)には「下有木村城代、有吉五郎右衛門」とある。また、『全志』には「坂本城址」として「村の西五町城崎山にあり、城主有吉彦三郎と云」とある。下有木地内には、「坂元」や「城崎」の小字が残り、その近辺に城地が想定されているが、明確な城郭遺構が存在する所もなく、詳細は不明である。	
筑前東郷(東) 中間(西)				文献14の「城趾(とりで)古戦場分布図」での掲載を唯一の出典とする。山崎集落の背後の尾根上を城地としている。それと思われる尾根上を踏査したが、城郭遺構が見られる場所はなく、詳細は不明である。	
筑前東郷(東) 中間(西) 直方(西)				『筑ヶ岳』(四郎丸城址)としての掲載を初出とする。城名および四郎丸地内にであること以外は全く情報がなく、詳細は不明である。因縁丸に所在することを考えれば城崎町との重複の可能性もある。	
中間(西)	410011			『筑前要領』(香月文書)には「内山城代 古野伸九郎右衛門」とある。「宮田町誌」には小字「内山」地内の「大門」の地名の場所に城跡、「古野戸(古窓)」の他の場所に城主・古野伸九郎の墓があるとするが、内山地内の明確な城郭遺構は、文献14が示す場所も含めて確認できず、詳細は不明である。	
直方(西)	440272			『筑前要領』(香月文書)には「○金丸城代 雷藤河内守 ○金丸城代 越後式部介」とあり、金丸地内には城館が2か所存在した可能性を示している。しかし、金丸地内には城館遺構は確認できず詳細は不明である。	
直方(西)	440271			『全志』には「(原田)村の東北七北町にあり、山上平地に二軒。村市山之邊に古者居れど云、小寺氏共云」とある。友池の天満宮の裏の丘陵頂部に推定されているが、現地は自然地形で頂部の周囲を平坦面が巡っているが、竹林等による後年に造成となりか、城郭遺構と認定できず。詳細は不明である。	
直方(西)	○			本文112ページ参照。	
直方(西)	○	440270		本文113ページ参照。	
直方(西)				『筑前要領』(香月文書)には「長井鶴田城代 横本源(マツモト)見守」とある。長井鶴地内には城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。	
直方(西)				『筑前要領』(香月文書)には「宮田村城代 平生兵庫」とある。宮田地内には城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。	
直方(西) (東)	○	410368 410369		本文114ページ参照。	
直方(西)	○	410356		本文115ページ参照。	
直方(東)	410377			文献18によれば、光明寺の裏手にある俗称光明寺山山頂に位置するとされるが、現地には自然の平坦地形が見られるので、城郭遺構は見られず、詳細は不明である。	
直方(東)	410370			『附録』には「若狭岳皆岳」と、「若狭」には里民に内藤部屋、鶴田村西念寺跡碑に「内藤部屋、鶴田村西念寺跡碑に」に概要が記載)によれば吉井十郎並祐(縁)の居城とする。一方、「筑前要領」(香月文書)には「稻村城主 石見主助」とある。龍ヶ城から大鳴鳥を挟んで東側の城基山とい小丘陵上にあったとするが、採石により消滅しており、詳細は不明である。	
直方(東)	410376			文献18によれば、鶴田丘陵(龍ヶ城と鶴田の境界)の東端にある高取山山頂にあったとするが、現地は自然の平坦地形が見られるばかりで、城郭遺構は見られず、詳細は不明である。	
直方(東)	420022			城主等は明らかれておらず、地誌等は幕藩古城、「千種」には朝野山城、文献14(複数の「城趾(とりで)古戦場分布図」には日足城跡として表記される。勝野と新多の間にあたる小丘陵の頂部に位置し、平坦面も見られるが、丘陵全体が後世の耕作等による改変を受けたり、城郭遺構が残存しているか否かは不明である。	
直方(東)	420010			「本編」には「井上業が城主となりて、「拾遺」には里民は中尾山という」とする。「筑前要領」(香月文書)には「山崎村城代 井上伸彈」とある。連瀬川に面した低丘陵が城地とされ、現地には通し切った腰壁のみらみられるが、周囲は自然地形であり、城郭遺構と判断することができず。詳細は不明である。	
直方(東)	420014			『筑前要領』(香月文書)には「吉野村城主 武谷肥後守」とあるが、『本編』には「城主不知 麻生氏なりにしや」とする。御徳の南、権現山(標高約150m)にあったが、昭和40年代に造成工事が行われた。『福岡県の城』には昭和45年頃にはからうじて腰壁一本が残っていたとあるが、現在は城郭遺構は全て消滅した。	

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料 一 参考 次 本 編	地誌類			基本参考文献						その他文献	種 別	所在	
									本 編	附 録	通 鑑	全 城	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 科 系 統	大 系 統	演 劇 部		
筑前	190	杣城城	(そましろ)	仙城城	鞍手郡	直方市下杣						○	○	○	○					不明	△
筑前	191	廣取城	たかとり	高取(山)城、廣取山城、高島居城、	鞍手郡・豊前郡	直方市永濱寺・朝野・田川郡福智町上野		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13~15, 58~62, 178,180,193	山城	◎
筑前	192	雲取山城	くもとりやま	雲取城	鞍手郡	直方市上頓野・朝野			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,15	山城	◎
筑前	193	山ノ田城	やまと	鞍手郡	鞍手郡	直方市上頓野													227	山城	◎
筑前	194	鶴翁	むとり	元取城	鞍手郡	直方市上頓野													13,15	山城	◎
筑前	195	白山城	はくさん		鞍手郡	鞍手郡鞍手町八尋・宮若市倉久・四郎丸						○			○			14,192	山城		
筑前	196	音丸城	おとまる	音丸山城	鞍手郡	鞍手郡鞍手町新北						○	○	○	○				16,57	丘城	◎
筑前	197	劍岳城	つるぎだけ	尾山城、中山城、劍(山)城	鞍手郡	鞍手郡鞍手町中山・新北	城ヶ崎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13,14,16, 187,209	山城	◎
筑前	198	城腰山城	じょうのこしやま	腰(越)山城、新町城	鞍手郡	鞍手郡鞍手町新延	城ヶ谷		○	○		○	○	○	○	○	○	○	13,14,16	山城	◎
筑前	199	古野城	ふるの	春日城	鞍手郡	鞍手郡鞍手町木月						○	○	○	○				16	丘城 か	●
筑前	200	今許斐城	いまこのみ	今許斐岱	鞍手郡	鞍手郡鞍手町上木月	門前				○	○								平城 か	●
筑前	201	金剛城	こんごう		鞍手郡	北九州市八幡西区金剛	丸の内・門前・アラ坂・馬場尻				○			○		○	○	○	『木屋瀬町誌』 174	館か	△
筑前	202	楠橋城	くわばし	城ノ辻砦	遠賀郡	北九州市八幡西区楠橋	城ノ辻・大門・堀		○	○	○								26	館か	△
筑前	203	茶臼山城	ちゃうすやま	香月氏宅、吉川館、吉川氏宅	遠賀郡	北九州市八幡西区楠橋	殿里敷・朝末里敷・末殿里敷		○	○	○								26	丘城 か	△
筑前	204	香月館	かつき	香月七郎副宗宅・香月氏宅・香月城	遠賀郡	北九州市八幡西区上香月・白岩町	殿裏敷・上殿	○	○	○	○		○		○		○	○	26	館	●
筑前	205	園田浦城	そのだら	園田城・水丸城	遠賀郡	北九州市八幡西区北筑2丁目	馬賣場・園田		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,31,67,70, 174	丘城	◎
筑前	206	本城城	ほんじょう	鰐子谷城	遠賀郡	北九州市八幡西区本城谷	城山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,31, 172,174	丘城	○
筑前	207	浅川城	あさかわ	陣山城	遠賀郡	北九州市八幡西区浅川	廻山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	31,172,198	山城	◎
筑前	208	烟城	はた	烟山城・白木城・麻生城	遠賀郡	北九州市八幡西区烟		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,31, 172,174	山城	◎
筑前	209	馬乘城	うまのり		遠賀郡	北九州市八幡西区上上鹿役3丁目	城ノ腰		○	○	○				○	○	○	○	26,31, 172	丘城 か	○
筑前	210	竹尾城	たけのお	上津役城、竹尾山城	遠賀郡	北九州市八幡西区上上鹿役・市齋			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,31, 172,174	山城	◎
筑前	211	市瀬城	いちのせ	一瀬城	遠賀郡	北九州市八幡西区市瀬			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,31, 172,174	丘城	◎
筑前	212	別当山城	べつとうやま		遠賀郡	北九州市八幡西区別当町										○	○	○	31,68,172	丘城	◎
筑前	213	帆柱山城	ほばしらやま		遠賀郡	北九州市八幡西区市瀬・熊手		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	21,26,31, 171,172, 174,178	山城	◎

図幅名	測定データ		包産地番号		概要
	緯度 経度 測量 発掘	福岡県 市町村			
直方(東)					「種々」に「袖城城址」としての掲載を初出とするが、「教委」刊載の際に「仙城城」と誤記されたとみられ、それ以降の文献では後者の記載となる。また、袖城城自身も直方市中泉所在の袖島館(筑前D24)を指している可能性もあるが、詳細については全く不明で、検討を大いに要する。
金田(西)	○ ○ ○	050113	103 (直方市)		本文116ページ参照。
肥力(西)	○	050112	28		本文119ページ参照。
萬力(西)	○		29		本文120ページ参照。
肥力(西)	○		18		本文121ページ参照。
中間(西)		430001			文献14を初出とする。鞍手町八尋から宮若市四郎丸へ接する白山崎付近に所在する。文獻192では跡の北側稜線上の標高163mの頂部に城跡を推定するが、後世の変改地形があるのみで、城郭遺構は確認できない。跡の傍の南稜線上には白山神社跡があり、城郭遺構は確認できないが、その周辺が推定地とみられる。ただし、初出文献において城館との接続が示されていないため、城館としての存在自体、検討を要する。
中間(西)	○ ○ ○	430057			文献122ページ参照。
中間(西)	○ ○ ○	430066			文献123ページ参照。
中間(西)		430011			文献124ページ参照。
中間(西)					文献16には文政3年「書上帳」を引用し、「古野山の内、相庭モトクの城跡と申所御座候、追手、攝手の門跡杯(なごり)申し伝え候所も御座候」との記載が見られる。古月小学校の敷地がその跡地とされるが、現在は城郭遺構を確認することができない。
中間(東)					『拾遺』に「今許斐古戰備」には「(上木月)村中貞舟社地を今許斐城といふ。遠賀郡雄城の脇有しと云。」とし、天正8年に毛利領製、立花道持の友方が宗像の城跡を改めた際に今許斐にて合戦があったとする。上木月の貞舟社神社の場所に推定されるが、城郭遺構は見られない。『金説』には集落内に門前という地名があり、雄城の大手門にあたるといつ。
肥力(西)					『木屋瀬町誌』(1959年・木屋瀬公民館編・木屋瀬町誌編纂員会発行)には金剛城として、「今尚其跡に在る内、門前、アフ屋、馬廻屋等の地名を残していく」とし、応仁年間に廢城したのではないかと伝える。大字金剛に門前、大字野面に馬廻屋の地名が残るため、金剛が馬廻屋あたりの平地に位置するものと思われるが、詳細な場所は不明である。文献174と『河福岡城の城主』に「金剛山城」として金剛山山頂に立地する香月氏の出城とするが、誤認とされる。
中間(東)					『附録』には「村の西ノ城の辻といふ所あり。皆の筋なるべし」とし、『治遺』には「治遺」には「横櫛村古城」として城ノ辻と云。村南也。城主不詳。村内に大門、邊塁と云字あり。」とある。文献25には真楽寺の周辺に大門、邊の字があること、その周辺に所在が想定されるが、明確な城郭遺構はない。詳細は不明である。
中間(東)					『附録』には「黒川茶臼山」として「村の北八町には古城地といふ。城主しれす。平地三面反許あり、漢の跡残れり」とある。「治遺」には「村の西八丁目に在し」とし、古川郡をこの城とし、香月氏臣民の古川郡左衛門脚内源頼の館とする。聖光上人が誕生した尊福寺の旧地が茶臼山にあたるとしているが、茶臼山の場所がわからず、詳細は不明である。
中間(東)					『本編』には香月村内に香月七郎副城が屢次があるとし、殿屋舎のホノケが残るとする。文献26には上原といいう所にあるとする。現在、聖福寺の裏側の低丘陵上が半上「上原」であり、そこには延命地蔵堂がある。地蔵堂の傍らには朝駒にあつたと伝わる「石五輪塔などの石塔類が残されており、その周囲に城跡が想定されるが、現状では明確な城郭遺構は残されていない。
折尾(東)	○ ○ ○	017154			本文125ページ参照。
折尾(東)		017081			洞海廢を望む蛭子谷の城山と呼ばれる丘陵上に位置していたが、裏面造成により削除した。「本城」の地名は、原範頼が陣を置いたことに由来するとされ、「拾遺」「本城村古城」には「夢守範頼陣せられし處、近古に麻生重寅居城す」と云ふ。文献175によると、裏面造成の際には12世紀代の御厨器類が出土したという。
折尾(東)	○				本文126ページ参照。
肥力(西)		017070			本文129ページ参照。
肥力(西) /八幡(西)					『附録』『拾遺』には竹尾城の項目に併せて記載される。『拾遺』には「町上津役の東北、官道に近き所に在。城主知らず」とある。大原地区造成により一部破壊したが、1970年までは塙切の一部が残っていたが、消滅してしまったという(文献172など)。塙切類には城壁という場所にあったとするため、現在、上上津役3丁目に残る小字の塙所付近に所在したと見られる。
肥力(西) /八幡(西)	○	017101			本文130ページ参照。
肥力(西) /八幡(西)	○				本文130ページ参照。
八幡(西)	○ ○	017076			本文131ページ参照。
八幡(西)	○	017068			本文131ページ参照。



図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	測量 図 面積 面積 面積 面積	発掘 福岡県 市町村			
八幡(西)			6010		吉川家文書等に応安5年(1372)2月の「筑前国多良倉・鷹見巣城合戦」における軍事状が見られるように一次史料では確認でき、今川了俊が攻城したことがわかるが、地図類等に多良倉城に関する記載はなく、鷹見室の上宮と六坊跡の記載が見られるものである。権現山山頂(標高617m)に坂地が推定されているが、現在は通信用アンテナが建設されており、建設の際には遺物も出土したというが、山頂の往時の様子を覗くことはできない。ただし、戦国時代末期の城郭としての使用は文献からは確認できないため、明確な城郭遺構自体が存在したか否かは検討をする。
八幡(西)	○	○	017069・7069		本文132ページ参照。
八幡(西)					吉川家文書等に応安5年(1372)2月の「筑前国多良倉・鷹見巣城合戦」における軍事状が見られるように一次史料では確認でき、今川了俊が攻城したことがわかるが、地図類等に多良倉城に関する記載はない。皿倉山山頂(標高622m)に坂地が推定されているが、現在は通信用アンテナが建設されており、建設の際には遺物も出土したというが、山頂の往時の様子を覗くことはできない。ただし、戦国時代末期の城郭としての使用は文献からは確認できため、明確な城郭遺構自体が存在したか否かは検討をする。
八幡(西)					『附録』には「尾倉村古城」として「(尾倉)村の西南にあり、麻生郷里といへる者、小早川隆景郷の与力となり、北城を守り、」とあり、「附録」には「城山」と云ふ。一次史料では『正記』に文明10年(1478)10月3日に麻生小倉陣上り注進状が来たある。現在、春の町3丁目には大正時代に開かれた淨土宗華頂寺があり、『福岡縣の城』によると、華頂寺の境内が城地で、かつては土塁と2か所の堀切があったが、寺院建設の際に消滅したとする。
八幡(西)	○				本文133ページ参照。
八幡(東)					『本編』附録には「藤谷古城」とし、「拾遺」以降は「(藤谷)古城」として掲載される。枝光村と大蔵村との境にあり、麻生氏の城地とする。文献31では「藤谷城」として一覽表に記している。現在大蔵1丁目の大蔵中学校用地と隣接する高見1丁目の高見神社の裏の周辺が城地として推定されているが、学校建設に伴う発掘により詳細は不明である。皿倉山から北西側へ茶臼山城を経由して派生する低丘陵上にあたり、また近世長崎街道を見下ろす交通の要衝に位置していたとされる。
八幡(東)					『本編』附録には中島城(若松城・筑前K1)の城地である。『全誌』には中島城が承永間より内治部の城であることが、その時の城郭とされる。『附録』には「くらやしき」とい所に「反ほど」の平地があるとし城となっているとしている。「拾遺」には戸田村の本村の中にあり、西方に堀切があるとする。一方で『全誌』では「古宅寺」として、竹内治部の屋敷があつたとする。城地が屋敷家へと伝承が変わってしまった結果であろうか。文献26には「今の御櫛の裏」に堀切があつたとも、現在、場所等も含め、詳細は不明である。
八幡(東)					文献174には「麻生氏の出城で、天賀二郎・三郎永行の居城であったとし。現在の菅原公園から大谷住宅一帯に城地で、菅原公園の一角に水門の墓と伝わる石塔を記載するが、遺構は現存しないとしている。ただ北九州の城上りも過る典例は、天賀城自体はもとより天賀氏についても見当たらず、詳細は全く不明である。
八幡(西)					『本編』には麻生氏の城であるのみで、詳しい記載は見られない。『元禄十二年筑前国繪図』の写しに「(廣田)古城」との記載が見られる。そして文献22には「市内修多羅の小高寺所、今市立病院所在地にて、附近に康の跡じと云」とあり、現在の白山1丁目の住宅地(旧若松病院跡地)にあつたとみられるが、早くに公園造成がなされてしまい、詳細不明なまま城郭遺構は消滅したとみられ、現状では何も確認することはできない。
八幡(西)		5043			『拾遺』の「(廣田)古城」の項に「高塔塔と云地に皆の跡有。平地南北十五間斗、東西五間斗、周りに堀の跡など残れり、山上に石佛有」とある。『元禄十二年筑前国繪図』(写)には高塔山に「古城」の記載が見られる。『全誌』には「麻生氏の城地にて大庭屋守と云士居たりと云」とある。高塔山山頂(標高122m)にあつたが、早くに公園造成がなされてしまい、詳細不明なまま城郭遺構は消滅したとみられ、現状では何も確認することはできない。
八幡(西)	○	5029			本文136ページ参照。
岩屋(東)					『全誌』に「(額田)城ノ崎」として「(額田)村の北十五町、海に臨むる小山なり、磐鉾なりと云、詳なる事しれず」とあり、額田地内の臨海部に磐の存在を指摘するが、他には全く出典はない。現在額田の臨海部は柳町の発電所として埋め立て造成がなされており、往時の状況は不明であるが、昭和25年の国土地理院地形図は埋め立て前の状況を示しており、額田の沿岸部に「城ノ崎」と記載された岬がある。現在は発電所の建物となっている場所と想定され、既に消滅しているとされる。
岩屋(東)	○				本文136ページ参照。
折尾(東)	○	○			本文137ページ参照。
折尾(西)	○		22		本文138ページ参照。
中間(東)	○	160018	59		本文139ページ参照。
折尾(西)	○				本文140ページ参照。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料 一 參 考 次	地誌類						基本参考文献				種 別	所在	
									本 編	附 録	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 學	大 系	演 講	城 郭	
筑前	231	マルビ寺	まるび		遠賀郡	遠賀郡遠賀町若松					○							25	丘城 か	●	
筑前	232	五郎城	ごろう		遠賀郡	遠賀郡遠賀町島津					○	○	○	○	○	○	○	○	25	丘城	●
筑前	233	山鹿城	やまが		遠賀郡	遠賀郡芦屋町山鹿	城山・城ヶ浦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	26,28,174	丘城	◎	
筑前	234	大城城	だいじょう		遠賀郡	遠賀郡芦屋町大城	大城前・大城		○	○	○						○	26,28	丘城 か	○	
筑前	235	碁石山城	ごいしやま	安口判官城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町吉木			○	○	○	○						25	丘城 か	●	
筑前	236	隆守城	たかもり		遠賀郡	遠賀郡岡垣町吉木			○	○	○	○	○	○	○	○			平地 城郭 か	△	
筑前	237	岡ノ城	おかの	腰山城・ 城越城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町吉木西1丁目			○	○	○	○	○	○	○	○	○	25,30,174, 212	丘城	◎	
筑前	238	龍谷寺山城	りゆうごくじやま	鍋倉城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町高倉											○	30	山城	◎	
筑前	239	熊山城	くまやま	熊野宅	遠賀郡	遠賀郡岡垣町三吉				○	○						○	25,30,212	山城	◎	
筑前	240	龍王山城	りゆうおう やま	八竜城・ 竜王城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町三吉・手野			○	○	○	○	○	○	○	○	○		丘城	●	
筑前	241	雨乞山城	あまごいや 主	三吉城・ 手野城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町手野・三吉	城ヶ原		○	○	○	○	○	○	○	○	○	25,30,207	山城	◎	
筑前	242	海藏寺城	かいぞうじ	海藏寺戦城	遠賀郡	遠賀郡岡垣町内浦						○	○	○	○			25	山城	●	
筑前	243	白山城	はくさん		宗像郡	宗像市山田		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,37,207	山城	◎	
筑前	244	吉田城	よしだ	十郎ヶ城	宗像郡	宗像市吉田・江口			○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,37,207	山城 か		
筑前	245	城ノ脛城	じょうのこし	地島城	宗像郡	宗像市地島	城膝			○	○	○	○	○	○	○	○	33,35,207	山城	◎	
筑前	246	勝島城	かつしま		宗像郡	宗像市神津	城辻		○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,35,207	山城	◎	
筑前	247	草薙城	くさなぎ	四塚城・ 草塙崎山城	宗像郡	宗像市神満			○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,35,207	山城	◎	
筑前	248	大島城	おおしま		宗像郡	宗像市大島	城山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,36,207	山城	◎	
筑前	249	草場城	くさば	平等寺城・ 草場山城	宗像郡	宗像市平等寺	城の口		○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,37,210	山城	◎	
筑前	250	上山堡	かみやま		宗像郡/遠賀郡	宗像市山田・遠賀郡岡垣町高倉			○	○						○	210	山城	◎		
筑前	251	葛岳城	かつだけ	岳山城・ 赤間山城・ 赤馬山城・ 城山城	宗像郡	宗像市陵峰寺・ 遠賀郡岡垣町上 畠	一ノ丸・二 ノ丸・三ノ 丸・芦原 堀・新堀・ 馬立堀・馬 賣堀・廣 丸・城道・ 陶尾・先陣 橋・屋形 口・大門 口・赤城・ 城腰・城ヶ 谷・城山・ 城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,37,199, 207,210	山城	◎		

図幅名	調査データ		包囲地番号		概要
	測量 範囲 面積	測量 発表	福岡県	市町村	
折尾(西)					「全誌」には、「堂塔寺山の左右をマルビと云、森ありし山骨伝ふ」とある。堂塔寺山は遠賀川支流の西川西岸の標高10m足らずの低丘陵で、豪師山ともい、堂塔寺があつたとするが、永禄年間に大友氏によつて兵火にかかめ廃絶したとい。現在、堂塔寺のある低丘陵に城地が想定されるが、城郭遺構は見られず詳細は不明。
折尾(西)					「全誌」には、「島津(村)の東北一町間に平地二段五畝の所ありて、圃となれり。猪股五郎左衛門が居宅の址と云」とある。猪股五郎左衛門については「治暦記」に永享年間の人物と記す。堂塔寺山に推定されるマルビ骨から西川を挟んだ東側、標高14mの低丘陵上が城跡と伝えるが、後世の耕作等の変改が激しく、現状では城郭遺構は確認できず、詳細は不明である。
折尾(西)	○	○	400026	47	本文141ページ参照。
折尾(西)					「附録」には「麻生氏裕なるべし」とあり、城の東西町に大塚といふ2つの塚があるとする。「全誌」には「大城城址」として(平尾)村の東三町目に大塚小坂とあり、城址と云、石垣の形猶のこれら、蒲冠者範頼、平氏を攻め下し時、此所に居宅と云)とあり、大字平城地内には、小字「大城」があり、そこに城地が推定されるが、現状では果樹園あるいは航空自衛隊芦屋空軍基地の敷地となつており、城郭遺構を確認することはできず、詳細は不明である。
吉木(東)					「附録」には「城主王上、むしし安楽院あもし地也」とある。「全誌」には「幕有山」として「岡松原(三里松原)の中、浜山の小高き所にあり、此所に丸き小石多し。因て基石山と云。今し小郷堆ぐ種めり。古安楽寺のありし地にて、安口判官が築ししと云」とあり、「種めり」は「安口判官城(基石山)」の名がえみる。吉木の安楽院の背後には、三里松原の砂丘が広がつており、標高46mの最高所が基石山とみらる。そこに城地が想定されるが、砂の松林が広がるのみ(所々に円礫あり)。城郭遺構は確認できない。 伝承地にござる可能性も考えられる。
吉木(東)	○	○	390089	390089	本文143ページ参照。岡垣町指定文化財。
吉木(東)	○			390236	本文144ページ参照。
吉木(東)	○				本文144ページ参照。
吉木(東)					近世～近代の地誌類には羅王山城か竜王古城として記される。「治暦記」「竜王古城」には「三吉村の西南八龍山の上に在、此山龍王社あり故に羅王山と云。山頂平地四畝有斗」とある。三吉集落の南、字「八龍」にある山神社がかつての羅王神社の場所で、その社殿の背後、標高105mの山が「竜王山」であり、その山頂部に城地が推定される。しかし、現地は自然の平坦地形が見られるばかりで、城郭遺構を確認することはできず、詳細は不明である。なお、八龍城という別称の初出は「福岡県の城」である。
吉木(東)	○		390074	390074	本文145ページ参照。
吉木(東)					文獻25に「海藏寺戦城址」とあるのが初出で、「大字内浦の西南六町余にあり、麻生河内守隆守が戰死の歎なり」とあるが、これは「全誌」の「海藏寺谷戦場」の項の記事とは同じであるため、これに拠つていることが想定される。なお、福賀郡と鹿島郡との境に聳える湯川山の東側の山麓近くある福聚山海藏寺は、岡ノ城主・麻生隆守が戦死した地として、近世～近代の地誌類に記されるが、これは「村の西南五町」の場所にあるため、海藏寺がその脇に城地が想定されるものの、古戦場を初出とする記載のため、城郭遺構があった可能性は低いとみられる。
吉木(東)	○		00100		本文146ページ参照。
吉木(西)			00080		「本編」には「大宮司三十七代氏承屋城なりしと云」とあり、「全誌」には「吉田(村)の西四町。山上に平なる所二反許あり、五月井に近し。里民は一馬力城と云」とある。文獻35では吉田上山口との境に聳える丘陵上の最高所(前障子山(標高68m))及び西側頂部に曲輪があるとしているが、現状では自然の平坦地形があるのみであり、城郭遺構は確認できず、詳細は不明である。
神湊(東)					本文147ページ参照。
神湊(東)					本文147ページ参照。
神湊(東)	○		320198	215(日立海町)-00024 (宗像市)	本文148ページ参照。
神湊(西)	○				本文149ページ参照。
筑前東郷(東)	○			00184	本文150ページ参照。
筑前東郷(東)	○				本文150ページ参照。
筑前東郷(東)	○		330785 390164	00278 ・390164 (宗像市) (岡垣町)	本文151ページ参照。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
								一 参考	本 國	附 録	地 誌	全 城	旧 城	種 々	全 集	探 査	教 委	大 系 統	廣 域	城 部
筑前	252	茶臼山城	ちやうすやま		宗像郡	宗像市三郎丸	一ノ横口・二ノ横口			○	○ ○ ○ ○ ○							207,210	山城	◎
筑前	253	今井城	いまい		宗像郡	宗像市三郎丸2丁目	今井城			○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○						33,37,210	丘城 か平 地域 館	○
筑前	254	城腰城	じょうのこし	石丸城	宗像郡	宗像市石丸4丁目	城/越			○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○						33,37,210	丘城 か	○
筑前	255	城俸城	じょうぶじやく	田久城	宗像郡	宗像市田久				○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○						33,37,210	丘城 か	△
筑前	256	名残城	なごり	施重城・株城・緑城	宗像郡	宗像市名残				○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○						33,37,207, 210	山城	◎
筑前	257	富地原城	ふじわら		宗像郡	宗像市富地原	城/根				○								山城 か、 丘城	△
筑前	258	城浦堡	じょうがうら	朝町城・朝城	宗像郡	宗像市朝町・名残	城ヶ浦・堀田			○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○						33,37	山城	●
筑前	259	大障子城	だいしょうじ	津瀬城・多礼城・瀬口城	宗像郡	宗像市多礼		○	○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○							33,35,207	山城	◎
筑前	260	片盛城	かたわき	秋葉山城	宗像郡	宗像市田島				○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,35, 179,207	山城	◎
筑前	261	勝浦岳城	かつらだけ	桂岳城	宗像郡	福津市勝浦・ 宗像市田島		○	○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,38	山城	◎	
筑前	262	大櫛城	おれい	宗像郡	宗像市大櫛	山廻													山城	◎
筑前	263	許斐岳城	このみだけ	許斐山城	宗像郡	宗像市王丸・ 福津市八並				○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○						33,34,37, 174,207	山城	◎
筑前	264	吉原里城	よしわらの	許斐里城	宗像郡	福津市八並	侍部殿谷 (十殿谷)・ 右近庭敷	○ ○	○			○ ○ ○ ○ ○ ○					34	平地 城跡 か	●	
筑前	265	宝林城	ほうりん		宗像郡	福津市木本						○ ○ ○ ○ ○ ○						34	不明	○
筑前	266	城の瀬城	じょうのうら		宗像郡	福津市木本	下城ノ裏・ 城ノ裏			○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,34	丘城	●
筑前	267	櫻姫羽子城	さくらひはこじや		宗像郡	福津市木本				○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,34	丘城	●
筑前	268	高宮城	たかみや	高宮山城	宗像郡	福津市畦町				○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,34	山城	◎
筑前	269	冠山城	かんむりやま	冠城・手光城	宗像郡	福津市手光				○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33	山城	◎
筑前	270	宮地岳城	みやぢだけ		宗像郡	福津市宮司		○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○					33,38	山城	◎	
筑前	271	龟山城	かめやま		宗像郡	福津市福間駅東 3丁目	切客			○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○						33,34, 184,190	丘城	◎
筑前	272	上西郷城	かみさいごう		宗像郡	福津市上西郷	城山・城			○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○						33	丘城 か	○

図幅名 (東)	調査データ		包蔵地番号 福岡県 市町村	概要
	調査 年 度	発 表 部		
筑前東郷 (東)	○		00275	本文153ページ参照。
筑前東郷 (東)				「附録」の三郎丸村の項には、「土穴村碑に丸く低き山あり。今井某が住し所といふ」とあり、「拾遺」には「今井城と云」とされる。皆小鶴なり。其子孫なる」とあり、近世と近代の地誌類で城主名が異なっている。現在、三郎丸に残る小字「今井坂」地内にある古社あたりに城地が求めらるるが、現在は宅地開発が行われておらず、現状ではまったくわからなし。宅地開発に伴う事前調査でも城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。
筑前東郷 (東)		00360		「本稿」には「城の腰の山と云、城主しれど」とある。また、「全誌」赤馬山被址の項には、「赤城、城腰、草場とて、三所に番所を設けたり」とあり、この「城腰」がこの城館を指すのであれば、焉房城の城腰として機能した可能性も考えられる。現在、石丸には小字「城ノ腰」の地名があり、そこにある小丘陵が城地が推定されるが、後後に変更もあり、明確な城館遺構は見られない。詳細は不明である。
筑前東郷 (東)				「附録」に「チャウガボウといふ所に古城地あり。宗像の臣、石松加賀守といへもの守れり」とある。「全誌」には「城跡地」として、「村の西大船頭の上なる山、城跡と云所にあり、平地一反許り、三段に切平せり」とある。「田久城」の初出は「教委」である。田久城の内西部は低丘陵地帯であるが、東海大学福岡短大等の施設によりかなり地形が改変されているため、既に消滅してしまった可能性が高い。文献3などでは福岡短大の北側の裏山一帯を想定しているが、城館遺構を確認した記録もなく、詳細は不明である。
筑前東郷 (東)	○	330297	00475	本文154ページ参照。
筑前東郷 (東)				「全誌」富地原村の項に「古城址」として、「村の東南、大平山の内に一反許平地あり、又麓に城ノ根と云田字あり。田記に古城ありと云ふは此ならぬ。群なる事なはず」とあり、唯一の記載となっている。大平山は「本稿」には宗像郡名残村と稱し、山上に木村の間にある山とし、山の西南に名引山(巣山)があるとする。大字富地原地内の中の山中にあることは推測できるものの、詳細な構造はおろか場所も不明である。
筑前東郷 (東)				「拾遺」には「(朝町)村の東方鞍手郡の境に丸山ある。城と云。其下の谷を城浦といふ。山上平地少し有。堡のたくひなるべく」とあり、謝応・永平年間頃の朝町村頭の佐々木(朝町)孫太郎入道源連の居所であったとする。「全誌」では「城前堡址」として名を挙げる。「教委」以降は、地名を採って「朝城」としているが、本来的には「朝町城」とすべきであろう。古丘の庄左庭の最南端の南側の谷が「城ヶ浦」で、その谷の南東側、大字名残の城の頂部(標高155m)が、通称「城ヶ浦山」であり、山頂部は自然の平坦地しかないが、周辺からは古代へ中世の土師器片を探集することができることで城地に想定することができる。なお、山の北側面、名残地内に垂田池がある。「垂田」などの小字名はないが、この城の関連した地名の可能性がある。
筑前東郷 (西)	○			本文154ページ参照。
筑前東郷 (西)	○	102(日)玄海 町)-00116 (宗像市)	320214	本文155ページ参照。
筑前東郷 (西)	○		350197	本文156ページ参照。
筑前東郷(吉)				本文157ページ参照。
筑前東郷 (西)	○	40001 (旧福間町) -00538 (宗像市)	340058	本文157ページ参照。
筑前東郷 (西)		340056	40003 (旧福間町)	「拾遺」許斐岳古城では「八並村の西南吉原の人家の上に治部谷左近屋舎など云所有。是許斐城の鬼城の城にて、此所即彼城の追手口となりしと、其南に古質原有。立花勢の陣せし址也」とある。永禄4年の宗像氏貞忠状では、立花勢が「吉原城」を攻撃したことに対し、占部八郎が防戦したことわかる。この時の大友方の感状からは「許斐之立花谷」や右近屋敷という地名が残り、永禄年間の戦いで被戦死した吉原源内左近衛門の墓などが残れ、その墓の奥、細い谷と谷の間の丘陵上に城地が想定されている。ただ、城郭遺構が確認されていないため、詳細は不明である。(福間町)の踏査。
筑前東郷 (西)		340068	70001 (旧福間町)	文政34年(1821)「宝林城趾」として「御麿原山にあり。豊臣秀吉島津征伐の際、宝林城主赤島監、秀吉に敵対し、加藤清正よりよびさるる伝説あり。木本桑野家に宝林山御守の古文書譲付有り」とある。木本公民館の東の低丘陵上には宝林寺跡などがあり、城地のおおむね場所はわかるが、明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
筑前東郷 (西)		340070	70005 (旧福間町)	「拾遺」には「本木村の南に在、西法寺寺之近」とある。「福間町史 資料編2」(福間町1998年)では西法寺の裏山は「城山」と呼ばれていたことが記載される。西法寺の南西側の丘陵頂部(標高105m「宇城ノ瀬」)に城地が想定されるが、若干の平坦地形が残るのみで明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
筑前東郷 (西)		340066	70032 (旧福間町)	「本編」には宗像氏の家臣、許斐兵部少輔が守被し、歐方・立花方の鶴ヶ岳の城と相対したとする。木本集落の北西の丘陵上(標高100m)は「福間町史 資料編2」(福間町1998年)によると、天保9年(1838)に西国八十八ヶ所靈場の一つ「總延喜子大師」の跡で、瓦や石材が散布する。二つが城地と想定されるが、若干の平坦地形は見られるものの、明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
筑前東郷 (西)	○	340064	70051 (旧福間町)	本文160ページ参照。
津屋崎(東)	○	340014	10005 (旧福間町)	本文160ページ参照。
津屋崎(東)	○	350178	60038 (旧福間町)	本文161ページ参照。
津屋崎(東)	○		60025 (旧福間町)	「拾遺」には村の南に在る「城」呼ばれる山があり、天満宮が所在するところ。「全誌」には「城地三段許あり。腰となる」とある。現在、大字上西郷地内には字ジョウと呼ばれる場所があり、そこが城地とみられ、丘陵が広がるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。

地 域	No.	名 称	よ みがな	別 称	旧都 名	所 在 地	関 連 地 名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在				
								一 次 参 考	本 編	附 錄	拾 遺	全 陸	旧 城	種 々	金 集	探 訪	教 委	大 系	廣 崎	城 郭	その他文献		
筑前	273	飯盛城	いもり	飯盛山城	宗像郡	福津市内殿		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	33,190	山城	◎
筑前	274	鶴岳城	つぐみが たけ	鶴ノ木城・ 津久見ヶ城	宗像郡	福津市木本・舍 利藏・古賀市鷺野			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	184,190	山城	◎
筑前	275	小松岡森	こまつがおか の森	鷺野氏邑 城	糟屋郡	古賀市鷺野	古里敷		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	190	丘城	◎
筑前	276	臼ヶ岳城	くすがたけ	鷺野曰岳 城・茶臼山城	糟屋郡	古賀市鷺野	城の山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	181,190	山城	◎
筑前	277	鷺城	さぎ	鷺代城・鷺白城	糟屋郡	古賀市庭内	城ノ谷・城 ノ裏				○	○						○	○	○	190	丘城	●
筑前	278	米多比城	ねたび		糟屋郡	古賀市米多比	先城倉											○	○	○	181,190	山城・ 丘城	◎
筑前	279	新穂山城	しんじょう やま	青柳新城	糟屋郡	古賀市青柳町・ 谷山	新城		○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	190	丘城 か	●
筑前	280	四方城	しまん	四方城	糟屋郡	古賀市賣捌町			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	190	山城	◎
筑前	281	古子城	ふるこ	古子山城	糟屋郡	古賀市賣捌			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	181,190	山城	◎
筑前	282	佐谷城	さだに	飛尾城	糟屋郡	糸島郡佐野町佐谷			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	41	山城	◎
筑前	283	高島居城	たかじりい	廣取城	糟屋郡	糟屋郡須恵町須 恵・上原池・篠栗 町篠栗	岳城・城山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	41,191	山城	◎	
筑前	284	草薙城	くさなぎ	草堀城	糟屋郡	糟屋郡篠栗町藤 栗			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	40,80		◎
筑前	285	飯盛山城	いもりや ま		糟屋郡	糟屋郡篠栗町金 出	碓井嶺(田 尾)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	40,80	山城	◎
筑前	286	丸山城	まるやま	城山城	糟屋郡	糟屋郡柏原町大 隈	大城戸・辻 畠		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	80	丘城	◎
筑前	287	燒地山城	やきじやま		糟屋郡	糟屋郡柏原町大 隈					○	○										丘城 か	●
筑前	288	丸山城	まるやま		糟屋郡	糟屋郡久山町久 原															219,240	丘城 か	●
筑前	289	白山城	(しらさん)		糟屋郡	糟屋郡久山町猪 野・久原															219,240	山城 か	△
筑前	290	上山田城	かみやま だ	田代城・ 南ヶ浦岱	糟屋郡	糟屋郡久山町山 田・久原	古城		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	42,190	丘城	●
筑前	291	下山田城	しもやまだ		糟屋郡	糟屋郡久山町山 田・新宮町立花 口		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	42,200	山城	◎
筑前	292	立花山城	たちばな やま	立花城	糟屋郡	糟屋郡新宮町立 花口・原上、久 山町山田・福岡 市東区下原・浜 男・香椎	城/越・障 山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	39,43,178, 181,195, 202,208,213	山城	◎	
筑前	293	御飯/山城	おひのや ま	老ノ山城	糟屋郡	福岡市東区香椎 3丁目	里城		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	39,76,182	丘城	◎
筑前	294	杉山城	すぎやま		糟屋郡	福岡市東区香 椎・水谷			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		丘城 か	○
筑前	295	稻居城・ 金居塚城	いないづ か・かないづ か	上月隈城	麻田郡	福岡市博多区月 隈1丁目			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	184,190,204	丘城	◎
筑前	296	古野城	ふるの		那珂郡	福岡市南区南大 橋1丁目	城ヶ尾		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		丘城	◎

図幅名	調査データ		概要
	測量 範囲	発掘 範囲	
脇田(西)	○	340077 (旧福岡町)	100007 本文162ページ参照。
脇田(西)	○	340080 (旧福岡町)	100001 本文163ページ参照。
脇田(西)	○		本文163ページ参照。
脇田(西)	○	250092	2500134 本文164ページ参照。
脇田(西)			『附録』に「境内の项、「愛宕社」の「鷹山」にあり。里民北所を城址と曾」が初出である。『拾遺』には「山上に堀切二段に在。城主群ならず」とある。庭内の東、大根川に架かる轟白橋の北側、熊野神社のある丘陵地が城地と推定される。周辺には「宇城ノ谷」「城ノ裏」などの関連地名も残るが、丘陵上には城館遺構は見られず、詳細は不明である。
脇田(西)	○	250094	250122 本文164ページ参照。
脇田(西)			『本編』では「青柳町古戸三所」として「青柳町の東、谷山村との境に古城有。新城と云。高崎城也。立花氏家臣の居たり」といふとある。文献190では、青柳町と谷山の境にある丘陵上を城地と推定しているが、現地には明確な城郭遺構はない。また、周辺の丘陵は採石によってかなり損なわれているため、既に消滅してしまった可能性も考えられるため、詳細は不明である。
脇田(西) 古賀(東) 大字町(西)		290102	290217 本文166ページ参照。 本文167ページ参照。 本文167ページ参照。
篠栗(西)	○	240075- 290085 (篠栗町・ 須恵町)	240353 本文168ページ参照。
篠栗(西)	○	240076	240289 本文169ページ参照。
篠栗(西)	○	240077	240067 本文170ページ参照。
福岡(東)	○ ○ ○	280069	280150 本文170ページ参照。
福岡(東)			『拾遺』の「丸山古城」の項には「(多々良)川の南に在を燒地山といふ。丸山と相對へり」とあり、割註として「或説に焼地山、古有と云ふ。丸山の多く良川を挟んだ独立丘陵、焼地山に城館が存在した可能性を指摘する。『全誌』にも同様の記述がなされるが、町教育委員会の路查結果によると、山中にて古墳はあるが明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。丸山と焼地山の間は、平地が其端となり、「勢門河内の帆船」と称される交通の要衝であり、焼地山は帆船などの城館の存在にふさわしい場所である。
篠栗(西)		270035	270163 1979年発行の福岡県遺跡等分布地図(文献219)を初出とし、「丘陵、元龜年間、平施」と概要が記されるのみである。久原川上流域の上久原集落に近い「丘陵上に比定されている。現地には安政年間の五輪神の石碑があり、かつて社殿があったと思われる平坦面が残る。地元では「まるふね山」と呼ばれているが、城館に隣接した伝承等は一切みられず、存在の是非も含めて詳細は不明である。
脇田(西)		270034	270041 1979年発行の福岡県遺跡等分布地図(文献219)を初出とし、「山頭、伝木被6年」と概要が記されるのみである。久原川最奥部、大鳴山に近く山頂部に比定されている。「白山」はやや笠よりの白山頭光寺(首羅山唐進)にちなんだと思われるが、「白山城」の比定地を城とする根拠が一切なく、現状ではその存在の是非も含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
福岡(東)	○	270037	270015 江戸時代の地誌類には上山田村の南あるいは西にあり、「古城」といふとされる。文献42には「南が丘の山上に址がある。後、田代氏が城を構え、田代城とも言われる」とある。上山田集落の南、久山中学校の北側の丘陵が被城地される。現在、ここには「南ヶ浦」とあるが、組合名前に「南が丘」があり、麓には田代氏代の住民も見られ、推定地で問題ない。しかし、丘陵斜面は長さ50mを越える大きな平坦地形が見られ、単郭の城の平坦面としては大きすぎ、また堀などの防禦施設も見られない。そして周囲には耕作等による変形地形も多く見られることから、明確な城館遺構は不明と言わざるを得ない。
古賀(東)	○	270038	270042 本文171ページ参照。
古賀(東)/ 福岡(東)	○	260038 +270033 (新宮町)	260138 本文172ページ参照。
福岡(東)	○ ○ ○		020015 本文180ページ参照。
福岡(東)			『附録』に「杉山古坡」として「御飯山古城」と共に名が挙がる。ただし他の地誌類では「杉山古戦場」として記され、足利尊氏の多々良合戦において阿蘇大宮司が討死した合戦地とされたため、城敷といふよりは合戦地、陣跡の可能性が高い。『拾遺』には香椎宮前の鳥居より本社に参る道の右の小山を杉山といふとあるが、現在、香椎には字「杉山」の地名が残されるものの、周辺は宅地化が進み、詳細は不明と言わざるを得ない。
福岡南部(東)	○		本文182ページ参照。
福岡南部(西)			本文183ページ参照。

地 域	No.	名称	よみがな	別称	旧都名	所在地	開遺地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在	
								参考 次	本編	附錄	全誌	種々	全集	防 災	教 育	大系	廣 域	その他文献		
筑前	297	天浦城	あまうら	天謙城・天 寶城・白水 城	福岡郡	春日市下白水6 丁目・泉1-2丁 目	城のヤネ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	46,194	丘城 か	●
筑前	298	中原城	なかばる		那珂郡	筑紫都郡河川町 中原	城・城ノ山			○	○							45	丘城 か	△
筑前	299	新城山城	しんじょう やま	環本ノ城	那珂郡	筑紫都郡河川町 西隈		○	○	○	○					○	○	211	丘城 か	◎
筑前	300	老林城	おとなばや し(ろうり ん)		那珂郡	筑紫都郡河川町 別所	城山・城林 谷	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	45,215	山城 か	◎
筑前	301	龍神山城	たつみん やま	山田ノ城・ 安徳城・岩 門城	那珂郡	筑紫都郡河川町 安徳・山田・上撰 原	城山・城ノ 下・山城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	133,194, 201,215	山城 か	◎
筑前	302	城ノ腰城	じょうのこし		那珂郡	筑紫都郡河川町 上腰原・山田	城ノ腰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		山城 か	△
筑前	303	猫籠城	ねことうげ	猫尾ノ城・ 猫城	那珂郡	筑紫都郡河川町 入道	猫城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	45,190,194, 215	丘城 か	◎
筑前	304	藤原城	ふじわら	金下城	那珂郡	筑紫都郡河川町 南面里				○	○					○	○	45	丘城 か	●
筑前	305	鷺ヶ岳城	むしがたけ	滑城	那珂郡	筑紫都郡河川町 南面里	城の谷	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	190,206	山城 か	◎
筑前	306	大丸城	おおまる		那珂郡	筑紫都郡河川町 南面里	大丸									○	○	229	山城 か	○
筑前	307	一ノ岳城	いちのたけ	五箇山城	那珂郡	筑紫都郡河川町 五ヶ山・市ノ瀬		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	201,215	山城 か	◎
筑前	308	亀ノ尾城	かめのお	虎ヶ岳城・ 盤城	那珂郡	筑紫都郡河川町 五ヶ山・市ノ瀬		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	201,215	山城 か	◎
筑前	309	白土城	しらちが	猫城	那珂郡	筑紫都郡河川町 五ヶ山			○	○	○					○			丘城 か	●
筑前	310	七曲城	ななまがゆ		那珂郡 /肥前国	筑紫都郡河川町 五ヶ山・ 佐賀県三養基郡 みやき町原古賀											54,229	山城 か	◎	
筑前	311	島飼城	とりから		早良郡	福岡市中央区島 飼2丁目	茶屋の内・ 土井ノ内	○		○	○					○			平城 城館	△
筑前	312	小田部城	こたべ	小田部氏宅 ・月城・堀ノ 内城	早良郡	福岡市早良区有 田2~3丁目	堀内・築城 ・難敵數		○	○	○				○	○	○	47,186	平地 城館	◎
筑前	313	茶臼城	ちゃうす		早良郡	福岡市早良区重 留					○	○	○	○	○	○	○	47	山城 か	●
筑前	314	菟道岳城	うじだけ	東入部城	早良郡	福岡市早良区東 入部	駒留殿・長 別当・スル 木殿・安上 殿・立石 殿・八舟殿		○	○	○				○	○	47	山城 か	◎	
筑前	315	安楽平城	あらひら	荒平城	早良郡	福岡市早良区東 入部	城原・大手 門・貢・據足	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	47,169, 181,190	山城 か	◎

図幅名	調査データ		包産地番号		概要
	測量 範囲 強 度	測量 免 税	福岡県	市町村	
福岡南部(東)					『本編』には「下白水村にあり。むかし島領唐といへる者の居城なりとかや」とし、一ノ岳城の出城とする。『附録』では「但馬・菅原在馬頭と宮士居たり」とする。『種々』には「天満城(天満城・白水氏)」とする。文献46によると、昭和35年ころまでは下白水集落の北側、標高30m程度の丘陵陸上を「城のヤマ」と呼び、字図を見ると、三方向を方形に造る壠状の区画が認められるが、現在は県・下白水の住宅街に造成されており、詳細を窺い知ることは難い。なお、「城數之観」に出てくる「白水ノ城」(筑紫良善居城)は天満城を指しているものとみられるが、確証はない。
福岡南部(東)					『治遺』中原村の項に「城といふ所。村の東の山に在て、觀音堂の上な。周り竹林にして上に平地三ヶ所在。上方老反計に越切り、其東西反計も有べし。其北に道を隔て黒男森の築反計も有べし。いずれも亂世に小身の山の里城なるべ。土民大井上氏の城趾といふ。詳ならず」とある。文獻55には浦田といふ場所に觀音堂があり、その上の「城ノ山」に里城があつたとする。現在、中原集落の中心には昭和40年代後に新幹線博多南駅建設等に伴い、日々的に開発され、車両基地の西側に隣接して小字「浦田」が残るもの、現在は「城ノ山」の場所の詳細は不明である。
福岡南部(西)・不入道(西)	○				本文184ページ参照。
不入道(西)	○		0140		本文185ページ参照。文献215では「病本城」として紹介しているが、「隈本城」の誤り。
不入道(西)	○	○	0250		本文186ページ参照。
不入道(西)					『附録』には「其址を村民に問ふに詳ならず。(上鹿原)村の南十町野に大待陣という山あり。八九分許に跨りて其前は羅神城の城域に統けり」とある。「治遺」には「上鹿原村と山田、安徳三村にかれり。羅神城の南に統きて大待陣と云山有。是也」とある。現在、上鹿原・山田・安徳の境は龍神山城のある城山山頂となっており、また「治遺」には羅神山城の記載がないことから、現在、羅神山城として認識している範囲内に城ノ城が含まれている可能性も考えられる。
不入道(西)			0268		本文188ページ参照。
不入道(西)			0264		『治遺』には「藤原古城」として、驚ヶ岳城と共に記載される。「又大津留が家老藤野右馬允と云者の守り城として、上南面里と下南面里の間、上南面里より一町半許の山の山頂の上に在て、其形茶臼の如く南北へ深き谷也。縦廿八間斗、横六間許。坤の艮に長し。壁に廻りて腰壁あり」とある。「金説」では「下城城」として記載する。南面里罫割など近い丘陵上の頂部に城地があるが、現地は後世の耕作等により丘陵全体が階段状の平坦面群となっており、堀などの防衛施設はみられない。往時の城跡遺構がどれほど残されているかは不明である。
不入道(西)	○		0258		本文188ページ参照。
不入道(西)			0278		地元の伝承では、丸丸の地に城跡があつたし、周知の包産地となっている。ただ、現地には明確な城跡構はないため、正確な所住ら不明である。字「丸丸」の地内のどこかに所住するものとみられる。地誌類等に全く出てこないため、存在自体を含め検討を要する。
不入道(西)	○		0290		本文190ページ参照。
不入道(西)	○		0295		本文192ページ参照。『種々』では「虎ヶ山城(筑紫氏)」とする。
中原(西)			0311		『本編』「五箇山」の項に「網取より上十八九町はかに」、谷二あり。直に行て白土が城と云」とあり、「治遺」には「里民は獣城と云ふ。並河川上流、佐賀との界、川が南北へ大きくて屈曲する大河様と佐賀賀と佐賀賀の高い丘陵上に位置する。丘陵の東側はかつては切り拓かれていたが、古くから宅地化が進み跡は分からなくなつた。丘陵上は抜い平垣面となつてから、城地と想定されるが、堀などの明瞭な城跡遺構はみられない。五ヶ山ダムの水没地点となるため、平成25年度に那珂川町教育委員会により発掘調査が行われた(報告書は未刊行)。
中原(西)	○		0314		本文194ページ参照。
福岡西南部(東)					『治遺』には「本村の東の方に御茶屋の内といふ所有。是城址也。四方に高土手有り。昔は高く大なりしを、後に漸田に開き、或は土を引などして、今纔に其形を存せり」とある。「領西要略」などには九州探題の当初の所在地としている。『附録』の「大休瀬望園」に「鳥飼村」の右(東)には「茶ノヤノ」という表記があり、当該地を指している。南唐仁小学校付近が確定地とされるが、古くから宅地化が進み跡は分からなくなつた。また、渡辺文吉「鳥飼城考(1-2)」(ふるさとの歴史と歴史)第213・215号 初版歴史と自然を守る会(1989年)では立地などの面から南公園付近の丘陵上ともみる向きもあり、所在も含め詳細は不明である。
福岡西南部(東)			020314		本文195ページ参照。
福岡西南部(東)					大正12年発行『筑紫良善誌』(文献47)を初出とする。同書には、「茶臼城跡」として「重留の東南に在て、土生宗綱城の趾である」とする。重留の官営業の東方の崖根上が城地として推定されており、現地は非常に広い人為的な平坦面とそれを囲む石垣と土塁状遺構が認められるが、城跡遺構とするにはあまりに広く、また堀などの遺構もないと、所住も含め詳細は不明である。
福岡西南部(東)	○				本文196ページ参照。
福岡西南部(東)	○		020303		本文196ページ参照。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在 地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献							種 別	所在
								一 次 考 査	二 次 考 査	本 編	附 録	附 録	全 記	田 城	種 々	集	探 訪	教 委	大 系	廣 境
筑前	316	陣／原城	じんのはる		早良都	福岡市早良区西入部・西区毫見が丘2・3丁目	山城跡・陣ノ尾・陣原			○	○					○	169	丘城か	○	
筑前	317	内野城	うちの	本城山城・本城	早良都	福岡市早良区早良6丁目	本城			○	○	○		○	○	○	○	47	平地城館か	△
筑前	318	曲測城	まがゆぶら	船場城	早良都	福岡市早良区曲測	城の山・大門・中門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	47,190	丘城	○
筑前	319	金山城	かなやま	熊の城・神代氏城	早良都	福岡市早良区石釜・佐賀県佐賀市三瀬村三瀬						○					○	47,54	山城	○
筑前	320	池田城	いけだ	都地若狭守宅	早良都	福岡市早良区駒山				○	○						○	47	山城	○
筑前	321	都地城	とじ	都地若狭守宅	早良都	福岡市西区金武				○	○	○	○	○	○	○	○	47,146	平地城館	○
筑前	322	飯盛城	いいもり	飯盛(森)山城	早良都	福岡市西区飯盛・羽根木	城ノ尾・八貫橋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	47,186,197	山城	○
筑前	323	生松原城	いきのまつばら		早良都	福岡市西区城の原団地・上山門1丁目	城の原・堀			○	○							47	平地城館か	○
筑前	324	長島城	ながじ	長島城・直島城・長島島城	早良都	福岡市西区下山門・今宿青木	城ノ内・相馬陣・本城・城ノ辻	○	○	○	○								山城か	●
筑前	325	探題北条氏城	たんじょうじ ほうじょうし		九州探題城・青山城・紫陽山城・長崎城・西園探題城	早良都	福岡市西区愛宕2丁目	城ノ辻	○	○	○	○	○	○	○	○	○	47	丘城か	●
筑前	326	探題波川氏城	たんじょうじ はなかわ		姫路城・光運寺山城・丸隈山城	早良都	福岡市西区姫路2丁目		○	○	○	○	○	○	○	○	○	47	丘城か	●
筑前	327	城ヶ崎城	じょうがさき		北浦城・城崎砦	早良都	福岡市西区能古	浦ノ城・城		○	○	○	○	○	○	○	○	47,186	丘城	○
筑前	328	東ノ城	(ひがしの の)			早良都	福岡市西区能古											237	不明	●
筑前	329	高祖城	たかす		怡土郡	糸島市高祖・高来寺・福岡市西区今宿上ノ原・原領・千里	城・草野陣	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,155,156, 188,189,190	山城	○	
筑前	330	波多江館	はたえ	波多江氏宅	怡土郡	糸島市難原				○	○							48	平地城館か	△
筑前	331	篠原城	しのわら	篠城	怡土郡	糸島市原南2丁目			○	○	○	○	○	○	○	○			丘城	○
筑前	332	有田城	ありた		怡土郡	糸島市有田			○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,197	丘城	○
筑前	333	簡城	つつ	簡山城	怡土郡	糸島市霧山・瓶原				○	○							197	山城	○
筑前	334	松尾城	まつお		怡土郡	糸島市瓶原		○		○	○	○						48,197	山城	○
筑前	335	旗振城	はたふりみね	旗振山城	怡土郡	糸島市瓶原			○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,197	山城	○
筑前	336	加布里城	かぶり	城山城・高岳城・添座城	怡土郡	糸島市加布里・二大派遣	城山・南城・荒城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,49,51, 184,190	山城	○	

図幅名	調査データ 測量 発掘	名産地番号		概要
		福岡県	市町村	
福岡西南部(東)				『拾遺』には「西入部村の西、金武山墜下山に在。曲須氏が塙地なりと云」とあるが、『全跡』では「磚/尾」として「平地三層にあり。上の段は六畝、其下二層は一畝許」とある。文献169には城の近くの「山城壁」には曲須氏と敵対する安泰平城の見張所があり、伊佐戸宅の周りには堀が巡っていたといふとある。現在、西入部と金武の境界および西入部の山城跡の集落は室見が丘の新興住宅地として造成され、往時の面影はなくなっている。住宅地造成に伴い、中世遺構が見つかり、「浦江跡」として調査されている。これらの遺跡との関連も想定されるが、詳細は不明である。
福岡西南部(東) /脊振山(東)				『拾遺』には「(内野)村の西の山中に在。本城といふ」とあり、天正7年の安楽平城攻防戦における龍造寺方大将の帆行越前の本陣で、人家になつてゐるとある。『全跡』には「本城山城址」として「村の西二町、本城山の麓にあり」とある。旧内野集落の中に推定されているが、明確な城館遺構は見当たらず、詳細は不明である。
福岡西南部(西) /伊坂山(西)	○	020823		本文200ページ参照。
脊振山(西)	○			本文200ページ参照。
伊坂山(東)	○	020784		本文201ページ参照。
福岡西南部(東)	○ ○	020431		本文202ページ参照。
福岡西南部(西)	○ ○	020588		本文203ページ参照。福岡市指定史跡「飯盛山跡」の範囲を含む。
福岡西南部(西)				『拾遺』には「領西略界」を引用し、正平17年(1362)の斯波氏経と菊池武光との戦いの際に、落城した城の一つとして「生ノ原城」を挙げ、それが「城ノ原」の城跡ではないかと推測する。『全跡』では「城原城址」として名を掲げる。『早良郡志』(文政47)では「城の原」として高祖城の土城があつたと伝えるし、上記の記事を掲げる。現在、生の原の南、十郎城の西岸は「城の原」とい、二ヶ城地と推測されるが、早くに宅地化が進み、現状では城郭遺構の有無は判断がつかず、詳細は不明である。
福岡西南部(西)				『拾遺』には「領西略界」を引用し、明応5年(1496)に高祖城の少弐政資が、大内方に対抗して長島、小田郡など早良郡の諸城を攻撃した際の長島城が、下山門村の西の山中にあら「城ノ原」の城跡ではないかと推測する。『全跡』には「城原城址」として「城の原の西山中にあり、山上平地三段余」とある。油坂川の南東側に聳える山腹頂部が城跡として想定され、山頂部は後世の改変と思われる平坦面が見られるのみで、明確な城館遺構は認められず、詳細は不明である。
福岡西部(東) /福岡西南部(東)				『本編』等では永元10年(1293)、九州探題に任命された北条兼時が築城したとするもので、宝見川西岸の丘陵地帯の最も東の頂部、涌山の東南にある丘陵上に位置したとする。愛宕神社の南側の丘陵上と推測されているが、近世以降の改変が激しく、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明である。
福岡西部(東)				『本編』等では、南北朝～室町時代に足利幕府から九州探題として任命された渋川氏、後に斯波氏が在城したとする。室町神社の西の山に位置する猿狹山(元守山・守山山城)にあったとされる。鷹の巣の西、名前川河口付近西側に、丸山の丘陵は残されており、頂部には鹿門天も祀られているが、明確な城館遺構はない。なお、『早良郡志』(文政47)では、渋川巣鴨の墓石とされる探題家の墓石がある丘陵上が城地とされるが、詳細は不明である。
福岡西部(東)	○			本文204ページ参照。
福岡西部(西)		020504		福岡市分布地図(文献237)の掲載を唯一の出典とする。昭和40年代以前の国土地理院の福岡西部の地形図に能古港フerry発着所の岬に「東ノ城」の地名記載があり、これが城の城地とみられる。現地には、現在城跡遺構もなく、詳細は不明である。
福岡西南部(西) /前原(東)	○ ○ ○	590330		本文205ページ参照。国指定史跡「怡士城跡」の範囲内。
前原(東)				『全跡』には「(福原)村の北二町、玉町分と云所にあり、今林郷となる」とするのが初出である。同じ福原地内に所在した福原城と関連する可能性も考えられるが、「玉町分」という地名の所在もわからぬため、大字福原地内に所在する以外には詳細は不明である。
前原(東)		590328		『本編』には波多江上絶助横櫛の里城とし、志摩郡前原の城(舞岳城)から連なった場所にあることから「つなぎの城」といふことがある。『附駿』には隙が開くとする。舞岳城の東、糸島高校周辺が城地と推測されているが、後世の改変が激しく、明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
前原(東)	○	590332		本文206ページ参照。
前原(東) /雷山(東)				『全跡』には「雷山の半腰、不動山にあり、開闢を隔て東、神農山にかかり、石垣残れ。西長門守興隆が居城なりしと云」とあり、雷山神龕石を再利用して城として取り立てたとする。しかし、神龕石は戦国期の城館と構造が全く異なつてゐるため、どの部分を城としたのか含め、詳細は不明である。また、『丁正怡士郡図』(第262図・国立公文書館蔵)の記載により、本書で旗振嶺城とする場所が磐城(簡山城)である可能性も考えられる。
雷山(東)				『全跡』には「簡山の西にあり、西揚部森國と云者、居たりしと云」とある。しかし、『糸島郡誌』(文献48)には、「飯原猿坂岳の西に連りたる處」にあつてとする。『丁正怡士郡図』(第262図・国立公文書館蔵)には簡山城の南背後の頂部、すなわち雷山神龕石の南西方向にあつた峰の上に描かれており、その周辺に城地は求められるが、現状では城館遺構は確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
前原(東) /雷山(東)	○	590334		本文206ページ参照。
前原(西) /雷山(東)	○	600240 (二大町) 590331 (二大町) (原町)	0209 (二大町)	本文209ページ参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在			
								一 參 次	參 本 編	附 録	拾 遺	全 院	旧 城	種 々	基 本	理 教 委 員 会	大 系 統 志 部	城 都 部				
筑前	337	波呂城	はろ	渡呂城	怡土郡	糸島市二丈波呂	城			○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,49,51, 197	丘城	●	
筑前	338	宝珠岳城	ほうじゅだ い		怡土郡	糸島市二丈長石	城山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,49,51, 197	丘城	◎	
筑前	339	崎城山城	じょうざき やま		怡土郡	糸島市二丈上深江	城崎			○	○	○		○	○	○	○	○	48,49,51	不明	○	
筑前	340	古城	こ	深江淀川 城	怡土郡	糸島市二丈深江	古城		○			○				○	○	○	49,51,197	丘城	●	
筑前	341	小倉山城	おぐらやま	小藏城・小 倉城	怡土郡	糸島市白糸			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,197	山城	◎	
筑前	342	二丈岳城	にじょうだ け	深江岳城・ 二丈岳城・ 二丈城	怡土郡	糸島市二丈深江・ 二丈一貢山・ 二丈福井		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,49,51, 183,197,214	山城	◎	
筑前	343	吉井岳城	よしいだけ		怡土郡	糸島市二丈吉井	城山・館・ 御屋敷・城		○	○			○	○	○	○	○	○	49,51, 197,205	山城	◎	
筑前	344	星山城	ほしやま		志摩郡	福岡市西区今宿 青木・今宿東3 丁目		○		○	○	○		○	○	○	○	○	48	丘城 か	●	
筑前	345	青木城	あおき		志摩郡	福岡市西区今宿 町	古城		○							○		○	52,186, 190,222	丘城	◎	
筑前	346	臼杵氏端城	うすきし 辻	辻倉城	志摩郡	福岡市西区今津 城カク・城 山・城			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52,184, 190	丘城	◎	
筑前	347	鷺城	さぎ		志摩郡	福岡市西区今津 館屋敷			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52,190	丘城		
筑前	348	柑子岳城	こうじだけ	好士岳城・ 香地岳城・ 草場城	志摩郡	福岡市西区今 律・草場		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,50,52, 181,183, 190	山城	◎	
筑前	349	水崎城	みずさき		志摩郡	福岡市西区元岡		○		○	○		○	○	○			○	48,52,186, 190	山城	●	
筑前	350	大神城	おおがみ	戸山城・大 神出雲守宅	志摩郡	福岡市西区桑原				○	○		○				○		48,52,184, 185,186,190	丘城	◎	
筑前	351	志摩城	しま	馬場城・志 摩野城	志摩郡	糸島市志摩馬 場・福岡市西区 桑原			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52,190	丘城 か	●	
筑前	352	岩松城	いわまつ	蒲城	志摩郡	糸島市志摩蒲				○	○	○	○					○	48,52,	184,190	丘城	◎
筑前	353	松隈城	まつぐま	松隈伊賀 守宅	志摩郡	糸島市志摩松隈				○	○	○	○					○	48,52,190	山城	◎	
筑前	354	西田城	にしだ	井田原城	志摩郡	糸島市志摩井田 城の辻・城 の前		○		○	○	○		○	○	○	○	○	48,52,190	丘城 か	●	
筑前	355	泊城	とまり	吉城	志摩郡	糸島市泊	タチ・城 崎・堀廻		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52,190	丘城 か平 城館	○	
筑前	356	波多江館	はたえ	波多江城・ 丹波屋敷	志摩郡	糸島市波多江			○	○	○		○			○	○	○	190	平地 城館	◎	
筑前	357	舞岳城	まいだけ		志摩郡	糸島市前原	城ノ尾			○	○		○	○	○	○	○	○	48	丘城	●	
筑前	358	觀山城	おやま	小山城・小 金丸城	志摩郡	糸島市志摩小金 丸	立			○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,50,52, 190	丘城	◎	
筑前	359	可也山城	かやさん	加也山城	志摩郡	糸島市志摩小金 丸・志摩御言・志 摩小富士・志摩 御床				○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52	山城	○	
筑前	360	新城山城	しんじょう やま		志摩郡	糸島市志摩新町				○	○	○	○	○	○	○	○	○	48,52	山城	△	

図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	測量 範囲 拡張	測量 発掘	福岡県	市町村	
前原(西)		600239	0208		『全跡』には西長門守護国の居城であったとする。波戸の天辰神社と龍国寺の北にある小丘陵上に位置するが、後世の耕作等による造成が見られるのみで、堀や土塁などの明確な城館遺構は認められず、詳細は不明である。
前原(西)	○	600237	0207		本文209ページ参照。
前原(西)					『全跡』には(河原)村の西二町丘上にあり、廣西段二十四歩、城主不詳。原田の築城ならべし」とあり、原田氏の出城と伝わられる。現在、小字「城崎」があり、その周辺に城地が推定されるが、水田の平地であり、明確な城館遺構はみられない。また、文献51には「越道」という字地を推定地とするが、道路造成のために既に消滅したとあり、詳細は不明である。
前原(西)		0211			『全集』が初出で、「深江岳の麓にあり、深江岳の支城であろうと考えられているが、深江岳城の平時の居館であったとし思われる」とある。「本編」は二丈岳の麓に出城の跡があり、深江岳(二丈岳)城の勢であるとしているため、このことを指しているものとみられる。文獻49には、長塙山の青木川の麓には御開池があり、国道20号ハイパスが貫いでいる。昭和35年の国土地理院の地形図を見ると、池の西側に標高約40mの独立丘陵があり、その頂部が城地とみられるが、現在はハイパス建設により完全に消滅している。
雷山(西)	○				本文210ページ参照。
雷山(西)	○	600141	0210		本文210ページ参照。糸島市指定史跡。
浜崎(東)	○	600238	0212		本文212ページ参照。
福岡西南部(西)					『治承』「長垂山」の項に「又瓊石油坂街道の口、池の西畔に星山と云小山有。按に大宰少次赤穂より出せる文書に星山と見たるは此地なるべし」とある。長垂山の青木川の麓には御開池があり、国道20号ハイパスが貫いでいる。昭和35年の国土地理院の地形図を見ると、池の西側に標高約40mの独立丘陵があり、その頂部が城地とみられるが、現在はハイパス建設により完全に消滅している。
福岡西南部(西)	○				本文213ページ参照。
福岡西部(西)	○	118E-1			本文213ページ参照。
福岡西部(西)					『本編』等では糸氏の城とし、山上に城主の墓があるとする。『治承』には城の東の庵を「館屋敷」というとある。臼杵氏の城地の北東約150mの標高11mの丘陵地が城地とされるが、後世の開削によりかなり旧状が損なわれおり、明確な城館遺構はみられない。
宮浦(東)	○				本文214ページ参照。
宮浦(東)					本文215ページ参照。
宮浦(東)					本文216ページ参照。
宮浦(東)	610552				『本編』には「馬場村古城」として「志摩城と号す。是大友氏の家臣、古庄能登が居たりし城なり。後に馬場越後と云し者も在城せしとぞ」とある。馬場集落の北、桑原との境にあたる標高121mの丘陵頂部が城地とされるが、自然地形が見られるのみで城館遺構はなく、詳細は不明である。
宮浦(東)	610348				本文217ページ参照。
宮浦(東)	610542				本文217ページ参照。
宮浦(東)	610536				『治承』「井田原村古城」として「西田に在。國の中方三間許高き所なり。城辻と云。城主跡ならず」とあり、永仁元年の文書に伊豆原二郎副が城主の可能性をほのめかしている。「糸島郡誌」(文獻48)が「西田城」としての初出である。井田原の長尾丘陵の西の低丘陵が字「西田」で、そこが城があったと伝えられるが、70年代に削られてしまっております。詳細は不明である。周辺には「城の辻」(城の前)などの隣連地名が残る。
前原(東)	590333	0018			『本編』には「泊村古城」として「村より翼を當てて跡跡ある。是泊村少輔領家が城址也。其前は泊美作と云しもの在城」とあり、また桂木寺や、近辺の尾根上に跡跡があり、大日堂の跡は泊内膳所と記載される。桂木寺の周辺にみられ、寺の西には「タマ」、南側には「城崎」(大日堂)の字が残っており、この一帯にいくつもの丘陵や館があつたものとみられる。なお、『全集』は泊領家の城を「泊城」、泊内膳の城を「古城」と区別して表記する。
前原(東)	590382	0035			本文218ページ参照。
前原(東)	590337	0046			『附錄』には「城の尾皮茶臼山ともいむ。波多江上総といふ者守りしとぞ。平らなる所一絶余あり。竹樹茂生せり」とある。前原駅南の丘陵地帯となっている笠山公園が城地とみられるが、配水池、展望台、記念碑などの公園等の造成により丘陵上は大きく改変されている。また、改変されていない縁辺部の尾根上は自然地形であり、明確な城館遺構を見出すことができず詳細は不明である。
前原(西)	610623	0131			本文218ページ参照。
前原(西)	610612				『本編』「加也山古城」に「いにしえ山上に城あり。近代乱世の時、郡士小金丸民少輔良種義を守りしと云ふ」とあり、可也山山頂に城地の存在を示している。しかし『治承』には「山上にも城有し由見ゆれ今其地跡ならず」とあり、江戸時代後期には城の場所がわからなくなってしまっている。現在、可也山山頂には神社などの構築物はあるが、曲輪や堀など明確な城館遺構を確認することはできず、詳細は不明である。
前原(西)					『附錄』に「新城山」として「(新町)村の北三町計にあり。城主跡ならず」とある。『全跡』には「絶頂に礎石残れり。松立なり」とある。新町集落の北に聳える竹趙山が想定され、山頂付近を踏査したが、明確な城館遺構はなく、所在を含め詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在
								一 參 考 次 第	本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	舊 々	全 集	探 訪	教 授	大 系	廣 境
筑前	361	邊田寺	へた		志摩郡	糸島市志摩小富士						○		○	○	48	不明	△	
筑前	362	姫島城	ひめしま		志摩郡	糸島市志摩姫島			○	○	○	○	○	○	○	48,52	丘城	●	

&lt;近世城館&gt;

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在
								一 參 考 次 第	本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	舊 々	全 集	探 訪	教 授	大 系	廣 境
筑前	K6	犬鳴別館	いぬなき	大鳴城・御別館	鞍手郡	宮若市大鳴		○			○		○		○	13,20,63	館	◎	
筑前	K7	大曾屋敷	おおとやしき	明尊寺坂	鞍手郡	宮若市山口							○	○	○	20	館	◎	
筑前	K8	直方陣屋	のおがた	直方館・東蓮寺陣屋・東蓮寺城・黒田長清居館	鞍手郡	直方市直方	西殿町・東殿町・御殿山・殿町・鉄砲町	○	○		○	○	○	○	○	12,13,17, 176	陣屋	◎	
筑前	K9	感田城	がんだ		鞍手郡	直方市感田	城坂・尾城・城の櫓・大手門・御所坂・櫓下				○		○	○	○	13,17	丘城	●	
筑前	K10	黒崎城	くろさき	道伯山城	遠賀郡	北九州市八幡西区道敷4丁目	城山・星敷	○	○	○	○	○	○	○	○	21,26,180, 193	山城	◎	
筑前	K11	若松城	わかまつ	中島城	遠賀郡	北九州市戸畠区中島		○	○	○	○	○	○	○	○	23,26,180, 193	平城	●	
筑前	K12	城辻城	じょうのづ	千代丸城	遠賀郡	福岡市東区名島1~3丁目				○	○					195	丘城	●	
筑前	K13	名島城	なじま		糟屋郡	福岡市中央区城内・大濠公園	城山	○	○	○	○	○	○	○	○	73,74,79,82	平山城	◎	
筑前	K14	福岡城	ふくおか	舞鶴城	早良郡/都城郡			○	○	○	○	○	○	○	○	44,85~ 108,193	平山城	◎	
筑前	K15	石崎城	いしざき	高祖崎城	怡土郡	糸島市二丈石崎				○	○	○			○	○	48,49,51	丘城	◎
筑前	K16	代官里敷	だいかん		怡土郡	糸島市二丈武							○			48,49	陣屋	●	

&lt;城館等伝承地&gt;

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在	
								一 參 考 次 第	本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	舊 々	全 集	探 訪	教 授	大 系	廣 境	城 郭
筑前	D21	左近屋敷	さこんやし	須恵左近宅	鞍手郡	宮若市乙野				○	○								居館	○
筑前	D22	障ノ坂	じんのさか		鞍手郡	宮若市山口					○								障	○
筑前	D23	黒田監物利良宅	くろだけん もつじょしよ じ		鞍手郡	宮若市金丸				○	○						13	居館	○	
筑前	D24	杣島館	そましま		鞍手郡	直方市中泉											17	居館	○	
筑前	D25	野中屋敷	のなか		鞍手郡	鞍手郡駕手町新延				○								居館	△	
筑前	D26	遠藤大膳宅	えんどうだ いぜん		鞍手郡	鞍手郡駕手町古門	城尾			○								居館	△	
筑前	D27	古野山館	ふるのやま		鞍手郡	鞍手郡駕手町古門				○							16	居館	△	
筑前	D28	島内館	(しまうち)		鞍手郡	鞍手郡駕手町古門	御東・殿坂			○							16	居館	○	
筑前	D29	吉田老岐宅	よしだいき のかひ		鞍手郡	鞍手郡駕手町中山	中屋敷・辻屋敷			○							16	居館	○	

図幅名	調査データ		包廃地番号		概要
	範 囲 強 度 指 標	測 定 方 向	福岡県	市町村	
前原(西)					『糸島部誌』(文獻48)には「往昔は邊田浦と称す。邊田は海浜の義なりといふ。霧前松浦郡城山草野中務少輔家人が家臣江川采女の居たる寺社址なりと云ひ伝ふ」とある。現在の志摩小富士地内に当たるが詳細な場所の記載がないため、不明と言わざるを得ない。
芥屋(西)					『本編』には「当島の姫大明神社の上の山を城山と云。是城址也といへり。いにしへ海辺に海賊共多く來りをさせしより、城かまへをして、海賊を防ぎたるなるべし」とある。『全誌』にも「姫大明神社の後の山なり。一頸の嶺にて平城櫓があり」とあることから、姫島神社裏の標高44mの頂部が城地と想定される。しかし現地は祠が建っており、若干の平坦面は見られるものの、確などの明確な城館遺構は確認できないため、詳細は不明である。

図幅名	調査データ		包廃地番号		概要
	範 囲 強 度 指 標	測 定 方 向	福岡県	市町村	
臨田(西)	○ ○				本文220ページ参照。宮若市指定史跡。
臨田(東)				440273	本文223ページ参照。
直方(東)			050114	164	本文224ページ参照。
中間(東)			050111	10	文献13には「開原軍記」を引用し、関ケ原合戦を控え、黒田氏が防備を固めた領内の諸城の一つに衣笠久左衛門が守っていた城田城が記載される。ただし、慶長5年(1600)段階では黒田氏の領域から城田はかけ離れており、疑問が残る。遠賀川支流の尺岳山の北岸、城の尾の丘陵上に城地は想定されており、文献13の記載と同様、現在は城地となっている。土塁や堀などを兼ね備えた城館であった可能性もあるが、現状では明確な遺構は確認できない。黒田氏以前の歴史的可能性も含めて今後検討を要する。
八幡(西)	○		017114		本文227ページ参照。
八幡(東)					本文229ページ参照。
折尾(西)					『拾遺』には「小草川の区安増甚左衛門居城の跡と云ふ」とある。別府の西、貴船神社の西側の低丘陵上が城地とされるが、自然地形が見られるのみで明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
福岡(西)	○		020115		本文229ページ参照。
福岡(西) /福岡西部 /福岡南部 /福岡南部 (西)	○		020193- 020164 (肥前城)		本文232ページ参照。国指定史跡。
前原(西)					本文235ページ参照。
前原(西)					『糸島部誌』(文獻48)には「大字武にあり。豐前中津藩の代官原田多作太の居住せし處なり。今池田辰次郎の跡となり」とあり、代官屋敷跡の写真を掲載している。現在、武の集落の中に、伝承地が残されており、そこが屋敷の跡を見てよいと思われるが、現状では遺構を確認することができないため、詳細は不明である。

図幅名	調査データ		包廃地番号		概要
	範 囲 強 度 指 標	測 定 方 向	福岡県	市町村	
臨田(東)					『拾遺』には「(乙野)村北に近左屋敷といふ處あり。須恵左近云者その宅跡なりと云」とある。『全誌』には「浦となれり」とある。現在、乙野地内には小字「佐近」があり、その播磨が該当するものと思われる。
筑前東郷 (東)					『全誌』には「(山口)村の北庭塚より豊前都原板村に越える閑道にあり。天正中、宗像立花家小金原合戦の時、氏貞兵出宿陣の跡と云」とある。現在の板振付近に当たるものと思われる。
直方(西)					『全誌』には「(金丸)村の南巣崎にあり。黒田となれり」とあり、黒田如水・長政の家臣で島原の乱で戦死した黒田利良の屋敷があったとする。『拾遺』などでは明見寺が巣崎に位置することから、その近辺ともられる。
直方(東)					文献17には、「中魚貝浦の山上にあった。陶器・兵器類が発掘され、当時の古井戸もあり、鳥居というのは直方城御用の時代の豊前との国境見取り役人であろう」とある。小字に「貝浦瀬」が記されているため、およその場所はわかるが、現状では遺構を確認できない。
中間(西)					『全誌』には「本村の内大丸にあり。野中軒跡由が別業の跡と云。小き森あり」とある。野中軒跡由は城原山城の城主として伝わる人物で、居館に当たるものとみられ、城原山城の東麓付近とみられるが、詳細な場所は不明である。
中間(西)					『全誌』には「本村と神崎の間に大膳體と云あり。中古造藤大膳と云者。居館にして其上の山を今に城尾と云は其被祉なりと云」とある。文献16によると、吉門集落の南の原ノ原底の西側丘陵上には、造藤大膳體が建立した「大膳體跡」があり、瓦が出土するという。その近辺が該当するものと思われるが、決め手に欠くため、所在は不明と言わざるを得ない。
中間(西)					『全誌』「造藤大膳宅址」の記載中に「又神崎古野山の内、及び島内此二所にも館址あり、各空堀の形のこれり」とある。文献16では伊豫文庫の文政3年の書の上に記載がある。神崎中・屋敷の上に古野山があるとしている。古野山の場所が不明であるため、詳細は不明である。
中間(西)					『全誌』「造藤大膳宅址」の記載中に「又神崎古野山の内、及び島内此二所にも館址あり、各空堀の形のこれり」とある。文献16では島内の中の館の今と称し、東二町の所に「御東」と称する別館があつたため、「殿坂」という地名がある。地名が残る。
中間(東)					『全誌』には「糸島の東一町余にあり、今置となれり」とあり、直方藩主黒田高政の家老・吉田壱岐守重成の邸す。元清寺寺が現存するため、吉田壱岐守重成の邸す。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種別	所在		
								参考書	本編	附録	拾遺	全誌	旧城	種々	全集	探訪	教養	大系	康嶋	城郭	
筑前	D30	岸本五郎 兵衛宅	きしもとご ろうべえい		鞍手郡	鞍手郡鞍手町小牧				○	○									居館	○
筑前	D31	陶弘誥館 址	とうひろ のり	守護所址	鞍手郡	北九州市八幡西区木屋瀬					○	○							13	居館	●
筑前	D32	猪野真玄宅	みののし んげん		遠賀郡	北九州市八幡西区香月		○	○											居館	△
筑前	D33	隱館	かくれやか た		遠賀郡	北九州市八幡西区烟	隱館			○	○									居館	△
筑前	D34	障壁谷	じょうぎやに		遠賀郡	北九州市八幡西区市瀬	障壁			○	○	○						26	障	○	
筑前	D35	古苔趾	こ苔		遠賀郡	北九州市八幡西区市瀬				○								26	山城 か	△	
筑前	D36	内藤陣山	ないとうじ んやま		遠賀郡	北九州市八幡西区鳴水	陣山	○	○	○								21,26	陣	○	
筑前	D37	麻生氏家 臣宅	あそうしき しん		遠賀郡	北九州市八幡西区紅梅4丁目	古齋	○		○	○	○						21,26	居館	○	
筑前	D38	井上家臣 宅	いのうえか しん		遠賀郡	北九州市八幡西区(旧藤田村)	殿町・御膳 敷・玄界屋敷・土居屋敷・源入屋敷・石坪	○	○									21・26	居館	△	
筑前	D39	藤村氏宅	ふじむらし		遠賀郡	北九州市八幡西区(旧熊手村)	上ノ屋敷・ 御屋敷		○										居館	○	
筑前	D40	源經基陣	みなもとの つねもと		遠賀郡	北九州市八幡西区陣山	陣山		○	○								21,26	陣	○	
筑前	D41	御屋敷	おやしき		遠賀郡	北九州市八幡西区抵園2丁目	御屋敷		○	○								21・26	居館	●	
筑前	D42	井上氏宅	いのうえし		遠賀郡	北九州市八幡西区陣原4丁目	東屋敷・西 屋敷・本 町・袋町・ 福岡路・新 屋敷	○	○	○							21,26	居館	●		
筑前	D43	麻生氏宅	あそうし		遠賀郡	北九州市若松区修多羅	堀・殿屋敷		○	○								26	居館	○	
筑前	D44	須藤鞍河 守行重宅	すどうする がののみ ゆきしげた く		遠賀郡	遠賀郡遠賀町手野		○	○	○	○							25,30	居館	○	
筑前	D45	古宅	こたく		遠賀郡	遠賀郡遠賀町吉木	横田屋敷・ 上枝屋敷・ 堀・堂楽屋敷・ 城山	○	○	○							25	居館	○		
筑前	D46	武藤氏宅	むとうし	須恵城	宗像郡	宗像市須恵2丁目	堀の内・城		○	○	○	○	○	○	○	○	○	25,37,210	居館	○	
筑前	D47	許斐氏宅	こひみし		宗像郡	宗像市王丸				○									居館	△	
筑前	D48	黒田美心 宅	くろだよし ん		宗像郡	福津市津照崎4丁目	殿屋敷		○	○	○								居館	●	

図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	測量 範囲 図 面積 ha	発掘 場所 福岡県 市町村			
中間(東)					『治遺』には小牧村の内の今村の人家に隣に岸本五郎兵衛の墓があるとし、「又其里に岸本氏の宅跡と有。此岸本五郎兵衛は小牧村の内に200石知行せし由」とあり慶長年間の人物とする。『全誌』には墓の北三町ほどに二重土手という所があり、岸本家の入居切場であったと伝えられるところ。現在、JR鹿児島駅の東側に「今村」の地名が残り、およその場所はわからぬが、城館遺構はみひらひいため、詳細は不明である。
中間(東)					『全誌』には木屋町中にあり、今の永源寺の地なるべと云うとあり、大内氏の臣家、陶中務少輔弘豊の跡跡で守御所と称するといふ。現在、遠賀川に面したところに永源寺はあるため、『全誌』において指摘する場所はわからぬが、現状では城館遺構はみひらひいため、詳細は不明である。
中間(東)					『本編』には香月村内に、香月七郎副宗の墓と合わせて、香月氏家臣の嶺野真玄(『附録』では實音)の宅があったとし、空塙の跡が残るとしている。詳細な場所については不明である。
鹿力(西)					『治遺』の項には、「隱賴」として「(惣村)村の葵の谷の間に有て尺ノ庭に登る路也。人家二軒あり、昔香月氏庭園を避て愛に築せしにして何といふとる。『全誌』では、香月家記を引用し、永正元年に大友方が攝領の香月源則を改めた時に、詰めの隠麗屋形に築いた結果、大友方は鷹頭岩より先には進めなかつて隠麗屋形は二つの事であるとしている。猪狩谷山沿上の猪狩音子野近くの谷に所在するものと思われるが、詳細な場所は不明である。
八幡(西)					『全誌』には(市瀬村)村北八町帆柱山の麓の谷にあり、麻生兵部(大輔弘重か)の陣所なりと云うとある。地名などから市瀬村の陣所上池、下池周辺に在したとみられるが詳細は不明である。
八幡(西)					『全誌』には(市瀬村)村東帆柱山の側に在り、昔藤原純友灰友の跡と言伝。礪石今猶存せり。』とある。明確な城館遺構が残る場所がないため、詳細は不明である。
八幡(西)					『本編』では帆柱山と花尾山との間にあら一小山を内藤陣と云うとし、麻生家信が花尾城に立て築いた所。改め手の中國勢の内藤家と陣を張った所とする。『吉賀郡藤田村花尾山古城図』(国立公文書館蔵)にも、帆柱山城と花尾城との間の山腹に「此辺内藤陣」という記載が見られる。そのため、およその場所は見当がつかず、明確な城館遺構が当たらないため、詳細は不明である。
八幡(西)					『本編』には「古館」として麻生四郎兵衛、麻生治部少輔の宅跡の存在を示す。『全誌』では「花尾山の麓に有。古館と云。麻生氏在城の時、其臣麻生治部少輔、同西郷兵衛と云士姓あり。其臣の宅址多々」とある。『治遺』には紅梅城跡が古館に在る。『詩記』では紅梅城跡が藤田村の南七町に在るとしている。かつての紅梅城は現在の紅梅4丁目付近にあったとみられ、そこに該当するものと思われるが、城館遺構はみひらひいため、詳細は不明である。
八幡(西)					『附録』には「殿町御屋敷、玄海屋敷、士佐屋敷、源入屋敷、石のつぼ等の名あり。皆井上防家臣の宅跡なり」とあり、黒崎城主井上之助の家の屋敷跡を示している。『全誌』では藤田村の東北にあるとすることから、黒崎城の周辺が想定されるが、場所が不明であるため、詳細も不明である。
八幡(西)					『治遺』には「山寺人家の上に上ノ屋敷御屋敷と云地有。昔藤村井戸後守と云し者の宅跡の由。其内に白石の五輪塔多し。塚などに隣に有場ありて村民恐れて役なし。丹後守は麻生家の老臣などにや」とある。現在の山寺町の地域にあつたものと思われるが、詳細は不明である。
八幡(西)					『治遺』に陣山と云は村の西官道の側藤田村の堀なり。古社一株ありとし、藤原純友時代の際に、源兼基が陣を置いたところとする。現在の国道3号線の陣山付近に当たるものと思われるが、古から開発が行われた場所であり、詳細は不明である。
八幡(西)					『治遺』に「御屋敷と云地八幡宮の近辺に在て今は土となり。前田家の宅址なりと云」とある。祇園2丁目の仲宿八幡宮近辺に位置するものとみられるが、明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
折尾(東)					『附録』には元和の一国一城令による黒崎城廢の後、城主井上之房が陣原村に館を構えたとある。また「家人も皆従い来り、家臣多く並びあり。今本町・袋町・福岡町・新屋敷等の字あれり。之房男半右衛門・半兵衛二人の居を東やしき西やといきい。今本町の居地なりりとも。『全誌』では上記の記述に加え、「本村にあり、井上之房が宅址は東屋敷と云」とある。井上之房の屋敷跡は現在月舍といら堂寮となっているが、城館遺構等は不明である。
八幡(西)					『治遺』修多羅村安養寺の項に「此地に昔麻生氏の憩宅有し由、周りに堀の形あり、字を堀と云。又此南に続姫敷と云地有。廣二丁の僧人の宅跡なるや。安水の堆は僧施地の形有しと云」とある。修多羅の安養寺近辺に存在したのと思われるが、堀や姫敷などは現見られない。詳細は不明である。
吉木(東)					『治遺』手野村の項に「須藤駿河守宅址と枝郷小郷の人家の上に在。今は圃となり。本編に見えたり。夫より一町斗下に堀口といふ所あり、今外郭なる。大なる宅址也」とある。「『治遺』には須藤駿河守行重の宅跡として、延徳年間の人物としている。現在、「手野」の字が残されているため、およその場所は把握できるが、城館遺構が確認されておらず、詳細は不明である。
吉木(東)					『附録』吉木村の項に「堂榮屋敷」には「弁上防家土久平左衛門といふ者居たりし屋敷跡残れ。又横田屋敷と云どり。小草川屋敷の家の臣横田太郎在衛門といふ者居、居たりし跡ない」とある。また「堀」には「屋敷御の臣、鬼鬼某が屋敷造り此所にあり。又隆秀の家臣上股助左衛門といふ者の宅跡あり。字を上股屋敷といふ」とある。さらに『全誌』宅址には、上記に加え、城山に「瓜生貞の宅跡があつたとする。現在、上記の地名は全て残されておらず、詳細は場所が不明であるが、文献によると道楽寺跡(堂榮寺)が、隆守院の北隣にあつたとするため、岡ノ城近辺の築落点在しているものと思われるが、詳細は不明である。
筑前東郷(東)					『治遺』須恵村の項に、「村の北に城と云處有。三方ハ野田にて其邊を堀の内と云。一方ハ野山に連れ。方舟町余土居を築き其上に雜木茂盛なり。其内に民家三軒有。」とあり、さらに「此城ハ則武藤氏の宅址也。」とある。現在、大字須恵には字「堀」の内があり、須賀浦交差点の南西側付近にあたり、その周辺に城地が推定されるが、現在宅地開発が進み、詳細は不明である。『全誌』では「武藤氏宅址」として名を挙げる。須恵城としての初出は「種々」である。
筑前東郷(西)					『全誌』に「本社(許斐神社社)の北七町にあり。此邊許斐氏の宅址と云。今は畠となり」とある。許斐岳城の北麓に想定され、六之神社墓碑の曲輪などは想定される可能性があるが、詳細は不明である。
津原崎(東)					『附録』に「(津原崎)村内にトヤシキといへる所あり。黒田修理尚忠之下ばく住居の所なりといふ。今其所に貢食あり」とあり、黒田如水の弟、利則の屋敷があつたとする。現在、津原崎千軒の中に屋敷跡と伝える場所があるが、屋敷の詳細は不明である。

地 域	No.	名 称	よ みがな	別 称	旧都 名	所在 地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
								一 歩 次 者	本 編	附 録	拾 遺	全 詰	旧 城	全 集	理 訪	教 大 系 統	廣 域 範 囲	その 他文 献		
筑前	D49	香琴井原 屋敷	かわくい はらやしき	香琴城	宗像郡	福津市福間南1 丁目						○	○	○	○	○	○	34	居館	○
筑前	D50	香琴深川 屋敷	かわふか がわやしき	香琴城	宗像郡	福津市福間南2 丁目								○	○	34	居館	●		
筑前	D51	園原館	だんのはばる	園宗時宅	糟屋郡 / 宗像郡	古賀市篠内・福 津市内殿・上西 郷		○	○	○	○	○						居館	○	
筑前	D52	遠見岳望樓	とおみがた け		糟屋郡	糟屋郡久山町猪 野				○							219	塔	●	
筑前	D53	和白村陣所	わじろむら		糟屋郡	福岡市東区上和 白	陣造	○	○	○	○	○						陣	△	
筑前	D54	陣腰	じんのこし		糟屋郡	福岡市東区松崎 1丁目	陣腰	○	○	○	○	○					39	陣	●	
筑前	D55	房州瀬・矢 倉門	ほしゅうせ りやぐらも ん		博多	福岡市博多区 (祇園町)		○	○	○								塔	◎	
筑前	D56	千葉探題 宅	ちばたん だい		那珂郡	福岡市南区星形 原	古星敷	○	○	○	○	○						居館	△	
筑前	D57	原田種直館	はらだね なお	岩戸館	那珂郡	筑紫郡原河川町 安徳		○	○	○	○	○						居館	○	
筑前	D58	平三里敷	へいぞうや しき	平藏屋敷	那珂郡	筑紫郡原河川町 上桃原	平藏	○	○	○	○					45	居館	○		
筑前	D59	黒田養心館	くろだようし ん		那珂郡	筑紫郡原河川町 市瀬	シロ	○										居館	●	
筑前	D60	一ノ岳里城	いちのたけ さじご		那珂郡	筑紫郡原河川町 五ヶ山	御所・御屋敷		○	○								里城	△	
筑前	D61	障尾	じんのお		那珂郡	筑紫郡原河川町 五ヶ山		○	○									陣	●	
筑前	D62	古城	こじょう		早良郡	福岡市早良区桜 原	城尾・堀 添・屋形 町・武士町		○	○								不明	△	
筑前	D63	重松若狭 守宅	しげまつわ かさのかみ		早良郡	福岡市早良区内 野				○								居館	○	
筑前	D64	立脛敷	たのやしき		早良郡	福岡市早良区次 郎丸1丁目	建星敷			○	○					47	居館	○		
筑前	D65	殿屋敷	とのやしき		早良郡	福岡市早良区相 原	殿屋敷			○	○							居館	△	

図幅名	調査データ 測量 発現 量	包蔵地番号		概要
		福岡県	市町村	
津屋崎(東)				本文236ページ参照。
津屋崎(東)				文献34に、香串井原屋敷の西に、同じく小金原合戦にて戦死した深川氏の屋敷があり、深川屋敷と呼ばれているとする。煙となつており、その傍らにはタブの木と古戸、鐵守様の祠があるとする。現在、福岡南2丁目に「香葉」の字が残り、深川屋敷の古戸と鐵守の祠の所在は把握されているが、明確な城館遺構はみられないため、詳細は不明である。
脇田(西)				『拾遺』には「昔薬右近が源宗時と云う上の住せし所なり」とある。宗時と曰岳城の丹治築基・築時が、原原にて合戦したことと記されている。現在、飯塚山の南、内殿の小字に「且ノ原」があり、その周辺に位置するものと思われるが、城館遺構はみられないため、詳細は不明である。
脇田(西)	270039	270039		『全跡』には天正14年(1586)に島津勢が立花山城を攻めたときに山上に斥候を置いた場所とする。その後の小早川氏も遠見番を置いていたとする。山の後ろを船形谷といい、遠見の番兵が居住したとしている。舊野皇大神宮の背後に聳える遠見岳(標高322m)山頂にあったとされ、山頂からは立花山城が一望のものにできる好立地ではあるが、現地に明確な城館遺構はなく、詳細は不明である。
古賀(東)				『本編』と白の山に、水承10年(1567)に宗像勢を討伐するために出陣した立花山城代の収留番入道が宿陣したところが和白の山上にあるとする。『附録』には「中和白の巖毛町ばれ町にダンツクリ(陣造)と云あり。其上に山あり。収留番が宿陣せし所ならし」とある。所在自体不明である。
福岡(東)				『本編』に「多々良機の東北なる山上に、陣の腰と云所有。此足利尊氏香椎より出で、此所にしばらく陣を取、多々良浜において菊池をたたかれたと云伝へたり」とある。現在、多々良浜に面した松崎の東に陣跡公園があり、そこに該当するとの想いがあるが、淨水場などもあり、明確な城館遺構はみられない。詳細は不明である。
福岡(西)				『本編』に「博多のものに、『博多の』の東の外郭に、横二千間余の堀の跡あつて、瓦の西南のすみより、辻の東に至る。是の南方の要なり。其土堤今あり。此堤を房門と号す。臼杵安房守籠要といひ少しはらせた故なりといふ。然れば元龜正天の北、始て作しなるべし。此要寄有るを。臼杵氏修補せしといひまだ詳ひらず。(中略) 今も矢聞門と云て、其名のみ付けられしである。正保年間に掘られたと『福博忠経園(福岡市博物館蔵)』にも博多の街の南側に横矢の折れを持った空堀が東西に掘かれている。堀の形状から、元々存在した房州櫛を江戸時代に徳永宗也が改修したのであらうとい見もある。現在は完全に市街地化しており、埋没している。
福岡南部(西)				『本編』に「屋形原の項には「むかし此所に千葉屋敷を有し故、屋形原と云。其它の跡あり。西方に有てて、顛要寄をなせり」とある。また、「治遺」は「屋形原の項には上記に加え、「むかしは此村、南の方古屋敷といふ所にあり、延宝五年に今に移る。奉雲公の館並といふ所即ち村の居宅と號す。周りに堀の跡あり」とし、千葉氏の館は所在不明となっている。現在は古屋敷の位置も定かではないため、所在不明である。
福岡南部(西)/不入道(西)				『本編』には「大なる宅の址あり。是を平三屋敷と云。是(現原)景時が末裔居たりし居宅なりと云。桃原平三と云者は、慶長の比官たりといひとある。現在、福岡城川南中学校の敷地は、字「平質」といい、平組な台地状でこれが強風があった場所となるらる。中学校建設の際に、平組織跡(筑前R25)として発掘調査が行われ。中世後期の獨立建物群や区画溝が多数発見された。屋敷跡の開闢が窺われる。
不入道(西)				『附録』には「黒田兼心館址并埴塙」として「村内にシロと音所あり。其境地凡千五百余坪有。石壁の址今に残れり」とある。市灘の城・内集落に埴塙あり、その付近に埴塙と伝える場所が残されている。
不入道(西)	0294			『拾遺』に「五箇山村」の項に「五ヶ山と網取との間、見返り坂の上に丸き小山を御所または御屋敷と云。一ノ嶺の鬼城なるべし」とある。糸河川の分布地図(文獻29)には龜ノ尾峯の西側に「御所屋敷跡」と位置を落としているが、正確な所在地等含め、詳細は不明である。
不入道(西)				『附録』に「五箇山村」の項に「尾の山といふ山あり。一ノ嶺の西也。策業廣門が陣所なりと里民いへり」とある。一ノ嶺城の西側の頂部、国土地理院地形図の一ノ嶺山頂地点に該当する。自然地形が見られるばかりで城館遺構はみられず、詳細は不明である。
福岡南部(西)				『拾遺』に「絵原村」の項に、「此村の田字に城ノ尾、堀添、屋形町、武士町等の名あり。いにしへいなる人の住居でかくしう来れるるにや。今其上しられず」とある。現在、松原2丁目に「堀添」、西長3丁目に「屋形町」の小字が残る。かくしう広い範囲を指している。詳細については不明である。
福岡西南部(東)/脊振山(東)				『全跡』には「西光寺の後にあり。若狭守は郷士なり。其遠孫も今村中にあり」とある。天正年間の難寺造による安東平城攻略の際、脇山の大教坊と共に、重松対馬守が難寺方に与していることから、戦国時代の領主とみられる。西光寺周辺に所在するとみられるが、詳細は不明である。
福岡西南部(東)				『拾遺』に「次郎丸」の項に「立屋敷」として「此人家四方に高土手を築り。其形方なり。昔大家の人の宅地のよしいひ伝ふれども、其由来詳からず」とある。市街地化前の昭和35年の国土地理院の地図に次郎丸集落東、現在の次郎丸1丁目に当たる場所に「建屋敷」集落が記載されており、ここに該当するものと思われる。詳細についで不明である。
福岡西南部(東)				『拾遺』に「御原村」の項に「殿の屋敷といふ所村の北に在。安泰平城城後に当村の谷を曲瀬河内守領せし時に、彼家の人を愛に遣わし置て、近辺の領地を支配せし所といふ。今は圃となりれ。近き頃まで古井などの残りありと云」とある。祖原は早くから市街地化が進んでおり、またトヨシキの地名も残っておらず、所在を含め詳細は不明である。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在		
								参考書	本編	附錄	沿革	全記	旧城	種々	金集	探訪	教義	大系	廣場	城郭	その他文献
筑前	D66	鉢屋	はちのやば		早良郡	福岡市西区生の 板原			○	○	○	○								古戰場 または 陣	○
筑前	D67	上原館	うえはる		怡土郡	糸島市高祖			○	○	○	○					○○	48	館	●	
筑前	D68	鬼沙門岳翁	ひしゃもん だけ		志摩郡	福岡市西区今津	陳屋					○				○	○	48	塔	○	
筑前	D69	元岡村古墳	ひとおかむ ら		志摩郡	福岡市西区元岡	馬場・泉 水・射場		○	○	○					○				居館 か	○
筑前	D70	古庄能登 守宅	ふるしょう のどののかみ	古庄氏館	志摩郡	糸島市志摩吉田					○	○	○			○		48	居館	●	
筑前	D71	野北殿館	のぎたどの	北殿館・阿 部鑑宗宅	志摩郡	糸島市志摩野北			○	○	○	○				○	○	48	居館	△	
筑前	D72	油比氏宅	ゆびし	油比城	志摩郡	糸島市油比					○	○	○	○	○	○○○○○	48,190	居館	○		
筑前	D73	浦志孫右 衛門宅	うらしまご えもん	浦志館	志摩郡	糸島市浦志2丁 目	射場			○	○	○	○			○	○	48	居館	○	
筑前	D74	小金丸氏館	こがねまる じ		志摩郡	糸島市志摩船越	殿島			○	○	○	○			○		48	居館	△	

## &lt;城館関連遺跡&gt;

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
								参考書	本編	附錄	沿革	全記	旧城	種々	金集	探訪	教義	大系	廣場	城郭
筑前	R8	光福寺城 館跡	こうふくじ		鞍手郡	直方市下境												66,175	平地 城郭	◎
筑前	R9	上頓野宮 前遺跡	かみとのの みやのまえ		鞍手郡	直方市上頓野												64	平地 城郭	◎
筑前	R10	本城南遺 跡	ほんじょう みなみ		遠賀郡	北九州市八幡西 区本城東6丁目	本城											89	丘城 か	◎
筑前	R11	上西郷二ホ ンシギ遺跡	かみさいご うにほんす ぎ		宗像郡	福津市上西郷												72	町家 遺構	◎
筑前	R12	上西郷タナ カ遺跡	かみさいご うたなか		宗像郡	福津市上西郷												203	平地 城郭	◎
筑前	R13	堀ノ内遺跡	ほりのうち		糟屋郡	古賀市庄	堀ノ内											53	平地 城郭	◎
筑前	R14	香椎A遺跡	かしいA		糟屋郡	福岡市東区香椎 2丁目												75,81	平地 城郭	◎
筑前	R15	香椎B遺跡	かしいB		糟屋郡	福岡市東区香 椎・香椎台4-5 丁目	里城											76,83	平地 城郭	◎
筑前	R16	席田青木 遺跡・中山 遺跡	せきたせい きわい おきなか やまと		中山城・席 田青木城	福岡市博多区空 港前5丁目・福 星郡志免町別府 西	城・城尾					○			○		77,84,204	丘城 か	◎	
筑前	R17	友野A遺跡	ゆのいの		那珂郡	福岡市博多区東 野3丁目												134	平地 城郭	◎
筑前	R18	諸岡B遺跡	もろおかB		那珂郡	福岡市博多区諸 岡6丁目												121,128	平地 城郭	◎
筑前	R19	諸岡鶴跡	もろおか		那珂郡	福岡市博多区諸 岡1丁目												122	平地 城郭	◎
筑前	R20	大櫻E遺跡	おおさくら え		那珂郡	福岡市南区大櫻 4丁目	矢台											127,129	平地 城郭	◎
筑前	R21	中白木遺跡	なかしろ ぎ		那珂郡	泰日市上白木5 ~6丁目												46,124,130	平地 城郭	◎
筑前	R22	井出/原遺 跡	いの出/はら	いののはる	那珂郡	筑紫郡那珂川町 中原東2丁目												119	平地 城郭	◎
筑前	R23	大塚遺跡	おおつか		那珂郡	筑紫郡那珂川町 安德												133	丘城	◎

図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	測量 網 標 高 差 量 度 差 量	免 税 地 圖	福岡県	市町村	
福岡西南部(西)					『附錄』に「鉢の蓬古城」として「本編に詳也」とある。『本編』には「鉢蓬」として「生の松原の西、油坂の東の下り口にくぼき所あり、基を鉢の蓬と云。(中略)此地はほば、櫛形枯骨など出と云。此邊は原田と大友と度重難有し所なれば、其時討死せし者の骨骸なるべし」とあり、城跡ではなく、古墳墓としている。『拾遺』にも「鉢蓬古鞍馬」として「切所也」としている。昭和35年の国土地理院の地形図にも、長垂山の東側に下山門と青木とを記ぶ跡道が記載されており、その部分に該当するものと思われるが、山道が見られるのみで、明確な城跡遺構はなく詳細は不明である。
福岡西南部(西)/前原(東)					『附錄』に「上原蓬城といふあり、芳一町斗。(高祖神社)大宮司上原氏が先祖の靈敷跡といふ」とある。『糸島郡史』(文獻48)には「高祖の西人家の側にあり、天神森とも云ふ」とある。『全集』において初めて「上原館」と称する。高祖地内に伝承地名が知られるのと、城跡遺構は確認できない。
福岡南部(西)					尾門岳(岳跡)の名称は『全集』が初出である。『糸島郡史』(文獻48)には「篠原」として「尾門岳の山麓にあり。此地は弘安の時に我主が篠原と號したのに設けられたる城跡台のありし所なり」とあり、位置や記載内容からこのことを指しているものとみられる。なお、尾門岳山頂には明確な城跡遺構は確認できず、詳細は不明である。
宮浦(東)					『本編』に「郡士元同右馬門大刀と云う者の居所なりしと云。そのみ初切など云い址あり。城跡とは見えず」とあり、『拾遺』には「本村馬場と在。今圖面にて四段許有」とある。現在、元岡地内に小字「馬場」があり、この辺となりますが、裏書となつておらず、明確な城跡遺構はなく、詳細は不明である。
宮浦(西)	610498				『全集』には「高野神社の西二町、圖中に字残れり」とある。島の分布地図(文獻221)により所在地が推測されるが、詳細は不明(本事業では未踏査)。古庄氏は本来豊後の土豪であったが、相子岳城の在番衆としてこの地に移ったとされ、相子城の城主としても名がみられる。
前原(東)	590336				『本編』には「野北(野北)村の内北の方に、豊後大友氏の家臣阿部蘿原宗云者、此地を領して實に住し屋敷跡等にあり。そのまゝ頃あり」とある。他の地誌類には里民は「野北殿の屋敷」と呼ばれており、本村東奥にあるとする。野北地内に所在するとは思はれるが、詳細な場所は不明である。なお、『全集』の「北原館」は「野北館」の誤りとみられる。
前原(東)	590359				『全集』には「池比氏毛社」として、鹿原の西十五間許地中にあり、里民池比殿の城跡と称す。鹿原と云るも、此宅地の用水名ならしとある。池比氏毛社の近傍には、里民池比殿の城跡と称す。鹿原と云るも、此宅地のシロノシロであるため、この近辺に館があつたものとみられるが、詳細な場所までは不明である。
芥屋(東)					『附錄』には「射場の天神社と號し」。此社はむしろ志摩志古衛門といふ郷士住し所という。間に堀切二重割れり」とある。『全集』などには孫右衛門は天正年間の原田氏の配下であったとする。現在捕志地内には、小字「射場」があり、そこに坡地が求められるが、明確な遺構は見つかっておらず、詳細は不明である。
					『附錄』に「船津(船津)村より西の方五六十町、山をこえて谷ふところに万廿間ばかりの平地あり。小丸の城主落成の後潜居せし屋舎の跡といふ。字をトバタ(船津)といふ」とある。地誌類の記載から、船越の半島の居候浜周辺が想定されるが、明確な根拠がなく詳細は不明である。

図幅名	調査データ		包蔵地番号		概要
	測量 網 標 高 差 量 度 差 量	免 税 地 圖	福岡県	市町村	
直方(東)	○ ○			402044	本文237ページ参照。
慈力(西)	○				本文237ページ参照。
折尾(東)	○				本文238ページ参照。
津岸崎(東)	○				本文239ページ参照。
津崩崎(東)	○				本文240ページ参照。
古賀(東)	○				新宮浜に注ぎ込む花鶴川の支流。大根川南岸。標高12~15mの低台地上に位置する。庄東地区漁群跡第3次調査として発掘調査が行われ、方形に囲もとみられる幅1.8m、深30.5m未溝の溝に囲まれた区画を検出し、内部からは建物2棟が検出されている。区画の隅部分は北側のヶ所のみ検出しており、東側は溝が約2m途切れしており、出入口であったとみられる。時期はおおむね14世紀である。当該地の字は「堀ノ内」で、関連地名と見られる。
福岡(東)	○				本文240ページ参照。
福岡(東)	○				本文242ページ参照。
福岡(東)	○ ○	020080 (福岡市) 310605 (志免町)			本文243ページ参照。
福岡南部(東)	○	0048			本文244ページ参照。
福岡南部(東)	○				本文244ページ参照。
福岡南部(東)	○ ○				本文245ページ参照。
福岡南部(西)	○				本文246ページ参照。
福岡南部(東)	○				本文247ページ参照。
福岡南部(東)	○				本文248ページ参照。
福岡南部(西)/不入道(西)	○ ○	0157			本文249ページ参照。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
								一 參 考 次 第	本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	演 講	城 郭
筑前	R24	安德台遺跡	あんとくだい		那珂郡	筑紫郡那珂川町												126,131	平地 城郭	◎
筑前	R25	平瀬遺跡	ひらいせ		那珂郡	筑紫郡那珂川町上瀬原1丁目												120,123,125	平地 城郭	◎
筑前	R26	五ヶ山網取遺跡	ごかいやまとり		那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山												135	平地 城郭	◎
筑前	R27	柏原K遺跡	かしはらK		早良郡	福岡市南区柏原6丁目												138	平地 城郭	◎
筑前	R28	福井川A遺跡	ふくいかわA		早良郡	福岡市城南区福井川3丁目											141	平地 城郭	◎	
筑前	R29	広瀬遺跡	ひろせ		早良郡	福岡市早良区西・内野8丁目											143	平地 城郭	◎	
筑前	R30	志木A遺跡	しづきA		早良郡	福岡市早良区小笠木											140	兵舎 か	◎	
筑前	R31	清末遺跡	きよすえ		早良郡	福岡市早良区東入部4-5丁目											139	平地 城郭	◎	
筑前	R32	有田・小田郎遺跡群	ありた・こたんじょ		早良郡	福岡市早良区有田・小田郎											136,186	平地 城郭	◎	
筑前	R33	原瀬遺跡	はらせ		早良郡	福岡市早良区原瀬7-8丁目		小瀬・南瀬 数									137,145	平地 城郭	◎	
筑前	R34	浦江遺跡	うらえ		早良郡	福岡市西区金武											144	砦か	◎	
筑前	R35	一町里敷跡	いつちりうしき		早良郡	福岡市西区拾六町											186,222	平地 城郭	◎	
筑前	R36	下山門乙女田遺跡	しもやまとおとめだ		早良郡	福岡市西区下山門3丁目											142	平地 城郭	◎	
筑前	R37	元寇防墻	げんくわぽう	石築地	志摩郡 博多吉原、福岡郡 福多郡	福岡市東区・博多区、早良区・西区	○ ○ ○	○ ○ ○									109~118	防壁	◎	
筑前	R38	藏持塙遺跡	くらもちさか		怡土郡	糸島市藏持											154	平地 城郭	◎	
筑前	R39	藏持古墳	くらもちふるや		怡土郡	糸島市藏持		古墳數									149	平地 城郭	◎	
筑前	R40	東玉反田遺跡	ひがしたんば		怡土郡	糸島市東											147	平地 城郭	◎	
筑前	R41	東下田遺跡	ひがしたんば		怡土郡	糸島市東											147	平地 城郭	◎	
筑前	R42	東高田遺跡	ひがしたかうだ		怡土郡	糸島市東		里敷田									148	平地 城郭	◎	
筑前	R43	曲野神社	くまのじんじゃ		怡土郡	糸島市二丈田中											157	平地 城郭	◎	
筑前	R44	石崎り田遺跡	いしざきだ		怡土郡	糸島市二丈石崎											153	平地 城郭	◎	
筑前	R45	木舟・三本松遺跡	きぶねさんば	ほんまつ	怡土郡	糸島市二丈瀬江											151,152	平地 城郭	◎	
筑前	R46	木舟の森遺跡	きぶねのもり		怡土郡	糸島市二丈瀬江											150	平地 城郭	◎	
筑前	R47	大塚遺跡	おおつか		志摩郡	福岡市西区今宿町											160,163,164	平地 城郭	◎	
筑前	R48	背木遺跡	あきぎ		志摩郡	福岡市西区今宿青木											159,161,162	平地 城郭	◎	
筑前	R49	池田牛田遺跡	いけだうに		志摩郡	糸島市波多江駅南1丁目											166	平地 城郭	◎	
筑前	R50	國古隈敷跡	くにくまふら	やしき	志摩郡	糸島市國古		古墳數									167,168	平地 城郭	◎	
筑前	R51	波多江遺跡	はたえ		志摩郡	糸島市波多江											158	平地 城郭	◎	
筑前	R52	木藤九遺跡	きふじまる		志摩郡	糸島市志摩福留木藤丸											165	平地 城郭	◎	

&lt;所在不明&gt;

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料		地誌類		基本参考文献						種 別	所在
								一 參 考 次 第	本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 委	大 系	演 講
筑前	F13	蟻塚/城	ありづか/みしろ		那珂郡	筑紫郡那珂川町		○									○		
筑前	F14	一の瀬城	いちのせ		那珂郡	筑紫郡那珂川町市瀬		○											

図幅名	調査データ 包蔵地番号			概要
	調査 測量 発表 年	福岡県	市町村	
福岡南部 (西)/不 入道(西)	○			本文250ページ参照。
福岡南部 (南)/不 入道(西)	○			本文251ページ参照。
不入道 (西)	○			本文252ページ参照。
福岡南部 (西)	○			本文252ページ参照。
福岡南部 (西)	○			本文253ページ参照。
脊振山 (東)	○			本文254ページ参照。
脊振山 (東)	○			本文254ページ参照。
福岡西南 (東)	○			本文255ページ参照。
福岡西南 (東)	○			本文255ページ参照。
福岡西南 (東)	○			本文256ページ参照。
福岡西南 (東)	○			本文257ページ参照。
福岡西南部 (東)/西				福岡市分布地図(文獻226)の掲載を初出とする。十郎川東岸の標高6mの冲積地に位置する。文献186に上れば、近年まで土壠と構が現存していたが、現在は消滅したという。東西80m、南北120mの方形区画に土壠と構が造っていたといふ。地誌類等では確認することはできない。
福岡西南部 (東)/福 岡西端 (東)	○			本文257ページ参照。
福岡西南部 (東)/ 福岡西端 (東)	○	020116		本文258ページ参照。
福岡西南部 (東)/ 福岡西端 (東)/ 福岡西南 (東)/ 福岡西端 (東)	○			本文261ページ参照。
前原(東)	○			本文261ページ参照。
前原(東)	○			本文261ページ参照。
前原(西)	○	590433	0107	本文263ページ参照。
前原(西)	○	590433	0107	本文263ページ参照。
前原(西)	○	590433	0107	本文263ページ参照。
前原(西)	○			本文265ページ参照。
前原(西)	○			本文266ページ参照。
前原(西)	○			本文267ページ参照。
前原(西)	○			本文268ページ参照。
福岡西南 (西)	○	0625		本文269ページ参照。
福岡西南 (西)	○			本文270ページ参照。
前原(東)	○			本文271ページ参照。
前原(東)	○			本文271ページ参照。
前原(東)	○			本文272ページ参照。
前原(西) 宮浦(西)	○			本文273ページ参照。

図幅名	調査データ 包蔵地番号			概要
	調査 測量 発表 年	福岡県	市町村	
				『城数之覚書』(筑紫家文書)に「鶴保ノ城」として番城であるとする。『筑紫野市史』上巻などには那珂川町に所在するが、詳細は不明であるとしている。既に知られている城のどれかにあたる可能性もあるが、どれなのか判定する根拠もないため、詳細不明である。
				『北肥戦記』に延文6年に少弐氏が守備した城の一つに「一の城」があげられる。また天正14年に筑紫氏の施城として一の城と共に一の森の名が挙がる。角ノ尾城の可能性も考えられる。

地 域	No.	名 称	よみがな	別 称	旧都名	所在地	関連地名	史料 一 参考 次	地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
									本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 授	大 系	演 講
筑前	F15	徳永城	とくなが	細峯城	怡土郡	福岡市西区徳永 か		○ ○									○		
筑前	F16	一貴寺	いぎじ		怡土郡	糸島市二丈一貴 山		○											
筑前	F17	一貴寺高嶺	いぎじたか だい		怡土郡	糸島市二丈一貴 山か		○											
筑前	F18	本園城郭	もとおか		志摩郡	福岡市西区元岡		○											
筑前	F19	秋瀬居屋敷	おぎうら		志摩郡	糸島市志摩秋瀬		○											
筑前	F20	北崎城	きたざき		志摩郡	福岡市西区北崎		○											
筑前	F21	青浦城	あおうら			不明	不明	○											
筑前	F22	春日城	かすがだ け			不明	不明	○											

<削除対象>

地 域	No.	名 称	よみがな	別称	旧都名	所在地	関連地名	史料 一 参考 次	地誌類		基本参考文献						種 別	所在	
									本 編	附 錄	拾 遺	全 誌	旧 城	種 々	全 集	探 訪	教 授	大 系	演 講
筑前 -		本城山城	ほんじょう やま		鞍手郡	宮若市本城										○ ○ ○ ○			
筑前 -		福地山城	ふくちやま		鞍手郡	直方市額野									○				
筑前 -		比津城	ひづ		遠賀郡	北九州市八幡西 区上津役									○ ○ ○ ○				
筑前 -		強洞陣	ごうとう	河頭山陣	遠賀郡	北九州市八幡西 区藤田									○				
筑前 -		城腰	じょうのこし		宗像郡	宗像市大島										○			
筑前 -		葛ヶ岳城	かずらがた け		宗像郡	宗像市赤間									○	○ ○ ○			
筑前 -		(名称記載なし)			宗像郡	福津市舍利蘿													
筑前 -		葛城	かつらぎ		糟屋郡	糟屋郡久山町久 原										○			
筑前 -		三野城	みの		那珂郡	福岡市博多区美 濃島									○	○ ○ ○			
筑前 -		観音山城	かんのん やま		那珂郡	筑紫郡那珂川町中 原											229		
筑前 -		立ノ口城	たつのくち		那珂郡	筑紫郡那珂川町大 字中原字立ノ口・春 日市上白水											229		
筑前 -		三瀬城	みつせ	城の山城	早良郡 / 肥前国	福岡市早良区曲 酒・佐賀市三瀬村三瀬									○	○ ○ ○ ○			
筑前 -		十坊山城	とんぼやま	十防山城	怡土郡	糸島市二丈吉井										○ ○	49		
筑前 -		城山城	じょうやま		志摩郡	糸島市板狩									○ ○ ○ ○				
筑前 -		城角城	じょうかく		志摩郡	福岡市西区今津										○	52,190		

図幅名	調査データ		包羅地番号		概要
	調査 範囲 強度	測量 免査	福岡県	市町村	
					『城ノ鉄』で「赤水城」として名が挙げ。細峯城が別称である可能性を指摘する。地誌類等には見えない。一次史料では「細峯城」として南北朝時代の文書に複数名が挙がる。福岡市赤水あたりに所在した可能性が考えられるが、詳細不明。
					群応3年の文書に筑前国一貴寺に立て籠もる内容のものが見られる。仙台七ヶ寺の一つ夷麓寺の事とみられるが、詳細は不明である。
					正平17年の文書に「一貴寺高殿」において国司に敵を討つたといふ内容のものが見られる。夷麓寺あるいは二大岳城の事を指している可能性が考えられるが、詳細は不明である。
					觀応元年に源氏志源家人に筑前國「本原御城」を与えたといふ文書が見られる。水崎城の事を指している可能性もあるが、水崎城の文書の年代と異なっていることから断定できない。
					永正9年の文書に西五郎兵衛尉の知行地「佐麻原屋敷」が見られる。糸島市志摩佐麻原周辺に所在したものとみられるが詳細は不明である。
					天文2年(1533)の文書に北赤崎の合戦に際した文書が確認できる。椎子岳城あるいは福岡市西区北崎周辺に所在した城を指しているものとみられるが、詳細は不明である。
					觀応4年の文書に青砥城次第にに関する記載が見られる。文書の末尾から志摩郡周辺の城を指している可能性もあるが、それ以外の地域の可能性も高く、詳細は不明である。
					嘉吉2年の文書に飯盛城(篠栗町金出)に着陣した3日後に「春日櫻」にて合戦が行われたとある。春日櫻が筑前国内に所在する可能性が高いが、詳細な場所は特定できず不明である。

図幅名	調査データ		包羅地番号		概要
	調査 範囲 強度	測量 免査	福岡県	市町村	
			410415 か・		『教委』を初出しし、以後の一覧に登場する。「教委」には出典・参考文献として『宮田町誌』(文獻18)があげられているが、そこには明確に城という記載は見られない。また県の分布図(文獻218)に抵園岳城の裏の丘陵上に城跡の記載(佐賀縣地番号410415)があり、そこが大字本郷にあたるため、ここを指している可能性もある。現地には草切のようなくぼみを見られるが、後世の地形変容が激しく、地形遺構と断定することはできない。よって城跡としての根拠も不明確であるため、対象から削除した。
					『種々』の「直方市主要史跡」の一つとして「福地山城址」を挙げる。福智山山顶所在を想定していると思われるが、有名な山にはいかぬから盆地といふ記載は全く見られないため、対象から削除した。
					『教委』を初出しし、以後の一覧に登場する。「教委」には出典・参考文献として「種々」を挙げているが、「種々」には「比良城」という城名を出てこない。所在が「比良城」であることから推定するが、竹尾城(景前210)の別称が「上比良城」で、現在も残る地名「上比良(比良)」の上に「上」を付けて読み取ってしまった結果、このような架空の城の城跡が産み出されてしまったのではないかと思われる。地図等にも一切記載がないため、上記の想定により削除対象とした。
					『城跡』を唯一の出典とし、そこには別称河頭山城、花尾城の西北、所頭山に位置。草切飛地。現地踏査では、地図版等には、所頭山に跡や城跡の記載は一切なく、また北九州州市立歴史・歴史博物館による現地踏査においても城跡遺構は認められないとみられ、城跡としての根拠は不十分であると判断し、削除対象とした。
					『城跡』には北島の北の台地に「城跡」という地名が残ることを根拠に城跡としているが、根拠が地名のみで地誌類における城跡としての記載や現地に確認な城跡構造が存在しないため、削除対象とした。
					『種々』に「葛ヶ原城社(宗像氏)」であるとの初出とし。以後の一覧に登場する。葛ヶ原といふ山名や城名は地誌などに一切記載がないが、また『種々』には宗像地成有数の城郭である「葛ヶ原城(葛ヶ原城)」が掲載されていないことを剪ると、「葛」は「馬」の誤写であることが分からず、「葛ヶ原城」を指しているものとみられる。よって「葛ヶ原城」は削除対象とした。
100006 (旧福間町)					福間町の分布地図(文獻228)に舍利藏の山城の背後の丘陵が坂城郡遭構として登録されている。福津市の担当者に聞いたところ、分布地図作成の踏査において、追跡みつけられず、改めて現地踏査を行ったところ、坂城といたりごとくあった。現地踏査を行ったところ、勝野寺の背後にやはり平坦地が残られ、築みもあつたが、追跡みつかりず、改めて現地踏査を行ったところ、坂城郡遭構は言えず、また坂城としての伝承や記載も見れないため、削除対象とした。
			0121		『城跡』には「葛ヶ原」という地名が残ることを根拠に城跡としている。根拠が地名のみで地誌類における城跡としての記載や現地に確認な城跡構造が存在しないため、削除対象とした。
					『日本書紀』記載の山城、三野城を指している。いわゆる古代山城で中近世城館ではないので、今回は対象外とする。古代山城としても所在不明である。
					JR博多南駅の南側に聳える鶴音山山頂に城跡があるとする。那珂川町の分布地図(文獻229)における記載を唯一の出典とする。町の分布調査の際の現地踏査において、城郭と思われる平坦面が見られたため、城郭としたといふことであるが、今回現地を踏査したところ、自然地形のみで、明確な城跡遺構はなく、また地誌類や伝承にも城跡の存在は裏付けられないため、削除対象とした。
			0122		鶴音山の南側の丘陵上に城跡があるとする。那珂川町の分布地図(文獻229)における記載を唯一の出典とする。町の分布調査の際の現地踏査において、城郭と思われる平坦面が見られたため、城郭としたといふことであるが、今回現地を踏査したところ、自然地形のみで、明確な城跡遺構はなく、また地誌類や伝承にも城跡の存在は裏付けられないため、削除対象とした。
○			020826		福岡市分布地図(文獻237)を初出しし、佐賀県との境にあたる通称「城の山」山頂にあるとしている。現地は特に明瞭な城跡遺構はない、また文獻54によると、山名の根拠も不明確であるといふ。佐賀県側の三輪城主、神代氏の出身であるといふ。金山城(景前319)が神代氏の出身という明確な地誌類記載もあることから、金山城と混同されている可能性も十分考えられる。以上のよううに城跡という根拠が非常に不明確であるため、削除対象とした。
			590335		『二大町誌』(文獻49)の吉井路城の説明イラストに「十防山(筋の城)」最後の謹点であると記載されるのが初出とみられ、以後の文獻に登場する。しかし、有名な山であるにもかからず、これ以外の地誌類の記載は一切なく、十坊山山頂には明確な城跡遺構がないため、城跡としては根拠が不明確であるので、削除対象とした。
					『教委』を初出しし、以後の一覧に登場する。「教委」掲載時の出典・参考文献を見るに「種々」となっている。しかし「種々」に「加布里城」は佐賀市に所在するところあり、「加布里城」(景前336)の別称である。持持は加布里の隣の行で、『教委』作成時の單なる誤し間違であり、存在しない城跡であるため、削除した。
					文獻190を初出しする。「城角」という地名を城跡としての根拠としており、現地には城跡遺構はみられないとしている。地誌類等の城跡としての記載も見られないため、削除対象とした。

## 参考文献一覧表

&lt;基本参考文献&gt;

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
1	貝原信嘉	1709	『筑前国続風土記』	
2	加藤一純・廣取周成	1798	『筑前国続風土記附録』	
3	青柳種信	文政～天保	『筑前国続風土記拾遺』	
4	臼井浅夫ほか	1875～1880	『福岡県地理全誌』	
5	和田宗八	1936	『研究旅行用面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』	金文堂
6	鳥羽正雄ほか編	1967	『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡	人物往来社
7	西谷正ほか	1977	『探訪日本の城』10 西海道	小学館
8	副島邦弘・近沢康治編	1979	『九州嚴賀自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX	福岡県教育委員会
9	磯村幸男編	1979	『福岡県』『日本城郭大系』第18巻	新人物往来社
10	廣崎篤夫	1995	『福岡県の城』	海鳥社
		1997	『福岡古城探訪』	海鳥社
11	福岡県の城郭刊行会	2009	『福岡県の城郭 戦国城郭を行く』	銀山書房

&lt;市町村都誌&gt;

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
<全般>				
12	鹿西日本文化協会	1998	『福岡県史』通史編 福岡藩（一）	福岡県
<鞍手郡>				
13	鞍手郡教育会	1934	『鞍手郡誌』全	鞍手郡教育会
14	鞍手郡教育研究所	1965	『鞍手郡郷土史』	鞍手郡教育研究所
15	直方市史編さん委員会	1971	『直方市史』上巻	直方市役所
16	鞍手町誌編集委員会	1974	『鞍手町誌』上巻	鞍手町
17	直方市史編さん委員会	1978	『直方市史』下巻	直方市役所
18	宮田町誌編纂委員会	1978	『宮田町誌』上巻	宮田町役場
19	小竹町史編さん委員会	1985	『小竹町史』	小竹町
20	若宮町誌編さん委員会	2005	『若宮町誌』上巻	若宮町
<遠賀郡>				
21	伊東尾四郎	1936	『八幡市史』	八幡市役所
22	若松市役所	1937	『若松市史』	若松市役所
23	伊東尾四郎	1939	『戸畠市史』	戸畠市役所
24	若松市史第二集編纂委員会	1959	『若松市史』第二集	若松市役所
25	遠賀郡誌復刊刊行会	1961	『増補改訂 遠賀郡誌』上巻(遠賀郡教育会1917『遠賀郡誌』全の増補版)	遠賀郡誌復刊刊行会
26	遠賀郡誌復刊刊行会	1962	『増補改訂 遠賀郡誌』下巻(遠賀郡教育会1917『遠賀郡誌』全の増補版)	遠賀郡誌復刊刊行会
27	水巻町郷土誌編集委員会	1962	『水巻町誌』全	水巻町教育委員会
28	芦屋町誌編集委員会	1972	『芦屋町誌』	芦屋町役場
29	遠賀町誌編纂委員会	1986	『遠賀町誌』	遠賀町
30	岡垣町史編纂委員会	1988	『岡垣町史』	岡垣町
31	北九州市史編さん委員会	1992	『北九州市史』古代・中世	北九州市
<宗像郡>				
32	伊東尾四郎	1931	『宗像郡誌』中編	名著出版(復刊)
33	伊東尾四郎	1944	『宗像郡誌』上編	名著出版(復刊)
34	福間町教育委員会	1972	『福間町史』明治編	福間町
35	玄海町誌編纂委員会	1979	『玄海町誌』	玄海町
36	大島村教育委員会	1985	『大島村史』	大島村
37	宗像市史編纂委員会	1999	『宗像市史』通史編第二巻	宗像市
38	津屋崎町史編さん委員会	1999	『津屋崎町史』通史編	津屋崎町
<糟屋郡>				
39	香椎町誌編纂委員会	1953	『香椎町誌』	香椎町役場
40	篠栗町文化財専門委員会	1982	『篠栗町誌』歴史編	篠栗町役場
41	須恵町誌編集委員会	1983	『須恵町誌』	須恵町役場
42	久山町誌編纂委員会	1996	『久山町誌』下巻	久山町
43	新宮町誌編集委員会	1997	『新宮町誌』	新宮町
<福岡城>				
44	福岡市史編集委員会	2013	『新修福岡市史』特別編 福岡城 - 策城から現代まで -	福岡市
<那珂郡>				
45	那珂川町教育委員会	1976	『郷土史那珂川』	那珂川町
46	春日市史編さん委員会	1995	『春日市史』上巻	春日市
<早良郡>				
47	早良郡役所	1933	『早良郡誌』全	

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
<怡土郡・志摩郡>				
48	系島郡教育会	1927	『系島郡誌』全	系島郡教育会
49	二丈町誌編集委員会	1967	『二丈町誌』	二丈町役場
50	志摩町史編集委員会	1972	『志摩町史』	志摩町
51	二丈町誌編集委員会	2005	『二丈町誌(平成版)』	二丈町
52	『新修志摩町史』編集委員会	2009	『新修志摩町史』上巻	志摩町

## &lt;発掘等調査報告書&gt;

No.	編著者名	発行年	著書名
<全般>			
53	福岡県教育委員会	2004	『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報』－平成14年度－
54	佐賀県教育委員会	2013	『佐賀県の中世城跡』第2集 各説編I (三養基・神埼・佐賀地区)
<鞍手郡>			
55	福岡県教育委員会	1977	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XVI
56	福岡県教育委員会	1978	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XX
57	福岡県教育委員会	1978	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIII
58	直方市教育委員会	1987	『筑前鷹城跡』(直方市文化財調査報告書第8集)
59	直方市教育委員会	1988	『筑前鷹城跡II』(直方市文化財調査報告書第9集)
60	直方市教育委員会	1989	『筑前鷹城跡III』(直方市文化財調査報告書第10集)
61	直方市教育委員会	1990	『筑前鷹城跡IV』(直方市文化財調査報告書第11集)
62	直方市教育委員会	1991	『筑前鷹城跡V』(直方市文化財調査報告書第12集)
63	福岡県教育委員会	1992	『大鳴III』(福岡県文化財調査報告書第100集)
64	直方市教育委員会	1993	『上頓野宮／前遺跡』(直方市文化財調査報告書第15集)
65	若宮町教育委員会	1999	『黒丸丸城跡』(若宮町文化財調査報告書第16集)
66	直方市教育委員会	2010	『光福寺遺跡』(直方市文化財調査報告書第39集)
<遠賀郡>			
67	竹中岩夫	1967	『園田浦城址発掘調査報告書』北九州市青年郷土史研究会
68	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	1981	『別当山遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告第10集)
69	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	1984	『本城南遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告第33集)
70	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	1999	『園田浦城跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第232集)
71	(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	2005	『小敷城跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第343集)
<宗像郡>			
72	福津市教育委員会	2010	『上西郷ニホンスギ遺跡現地説明会』資料
<糟屋郡>			
73	福岡県	1928	『名島城址』(史蹟名勝天然記念物調査報告書第4集)
74	福岡市教育委員会	1993	『名島城跡I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第318集)
75	福岡市教育委員会	1996	『蒲田・木ヶ元遺跡 付跡1、香椎A遺跡1次調査』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集)
76	福岡市教育委員会	2000	『香椎B遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集)
77	志免町教育委員会	2000	『中山遺跡』(志免町文化財調査報告書第10集)
78	須恵町教育委員会	2003	『筑前高島居城跡』(須恵町文化財調査報告書第8集)
79	福岡市教育委員会	2007	『名島城跡2』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第938集)
80	柏原町教育委員会	2008	『丸山城』(柏原町文化財調査報告書第27集)
81	福岡市教育委員会	2010	『香椎A遺跡3』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1072集)
82	福岡市教育委員会	2010	『名島城跡3』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1084集)
83	福岡市教育委員会	2013	『香椎B遺跡2』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1186集)
<麻布郡>			
84	福岡市教育委員会	1993	『席田青木遺跡1』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集)
<福岡城>			
85	福岡県教育委員会	1964	『史跡福岡城発掘調査概報』(福岡県文化財調査報告書第34集)
86	福岡市教育委員会	1980	『筑前国福岡城ノ丸御櫻屋敷』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集)
87	福岡市教育委員会	1981	『史跡福岡城跡環境整備報告書』
88	福岡市教育委員会	1983	『福岡城址—内堀外壁石積の調査—』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集)
89	福岡市教育委員会	1986	『福岡城肥前図』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集)
90	福岡市教育委員会	1990	『筑前国福岡城ノ丸御櫻屋敷』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集)
91	福岡市教育委員会	1991	『福岡城跡IV—内堀内壁の調査—』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集)
92	福岡市教育委員会	1991～2014	『湧天館跡発掘調査概報』I～21
93	福岡市教育委員会	1992	『福岡城肥前図第3次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集)
94	福岡市教育委員会	1992	『福岡城肥前図第4次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集)

No.	編著者名	発行年	著書名
95	福岡市教育委員会	1992	『福岡城 月見櫓』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集)
96	福岡市教育委員会	1994	『福岡城の櫓』
97	福岡市教育委員会	1995	『福岡城跡-第23次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集)
98	福岡市教育委員会	1996	『福岡城赤坂門跡-福岡城跡第26次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第463集)
99	福岡市教育委員会	1997	『福岡城跡-福岡城中堀跡の調査』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第498集)
100	福岡市教育委員会	1997	『史跡福岡城跡-東の丸の発掘調査』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第546集)
101	福岡市教育委員会	1998	『福岡城跡36次・37次調査』(福岡市埋蔵文化財年報Vol.11)
102	福岡市教育委員会	2003	『福岡城大手門-第48次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第772集)
103	福岡市教育委員会	2007	『福岡城跡-第53次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第960集)
104	福岡市教育委員会	2007	『福岡城跡-潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第969集)
105	福岡市教育委員会	2007	『福岡城跡(18・25・38次)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第970集)
106	福岡市教育委員会	2007	『福岡城跡54次調査』(福岡市埋蔵文化財年報Vol.20)
107	福岡市教育委員会	2008	『福岡城跡』15(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1005集)
108	福岡市教育委員会	2012	『福岡城新折櫓跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1247集)
<元寇防壁>			
109	福岡市教育委員会	1968	『生の松原元寇防星堀跡調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集)
110	福岡市元寇防星堀調査委員会	1969	『今津元寇防星堀調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集)
111	福岡市教育委員会	1970	『西新元寇防星堀調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集)
112	福岡市教育委員会	1995	『地蔵原空防星(5次)』(福岡市埋蔵文化財年報Vol.8)
113	福岡市教育委員会	1998	『元寇防星第6次調査』(福岡市埋蔵文化財年報Vol.11)
114	福岡市教育委員会	2001	『国史跡 元寇防星(生の松原地区)復元・修理報告書(7次)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集)
115	福岡市教育委員会	2002	『博多』85(福岡市埋蔵文化財調査報告第711集)
116	福岡市教育委員会	2002	『西新地区元寇防星堀跡調査報告書』(福岡市埋蔵文化財調査報告第726集)
117	福岡市教育委員会	2002	『元寇防星跡第9次調査』(福岡市埋蔵文化財年報Vol.15)
118	福岡市教育委員会	2007	『香椎地区遺跡確認調査報告書』(福岡市埋蔵文化財調査報告第926集)
<那珂郡>			
119	福岡県教育委員会	1976	『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集
120	那珂川町教育委員会	1980	『平成遺跡』(那珂川町文化財調査報告書第5集)
121	福岡市教育委員会	1980	『板付周辺遺跡調査報告書』6(福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集)
122	福岡市教育委員会	1984	『諸岡遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集)
123	那珂川町教育委員会	1990	『平成遺跡』II(那珂川町文化財調査報告書第22集)
124	春日市教育委員会	1993	『春日市埋蔵文化財年報』1 平成4年度
125	那珂川町教育委員会	1998	『平成遺跡』III(那珂川町文化財調査報告書第41集)
126	那珂川町教育委員会	2000	『安徳台』(那珂川町文化財調査報告書第52集)
127	福岡市教育委員会	2003	『大橋上遺跡』5(福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集)
128	福岡市教育委員会	2003	『諸岡B遺跡20次』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第776集)
129	福岡市教育委員会	2004	『大橋上遺跡』6(福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集)
130	春日市教育委員会	2006	『春日市埋蔵文化財年報』13 平成16年度
131	那珂川町教育委員会	2006	『安徳台遺跡群』(那珂川町文化財調査報告書第67集)
132	那珂川町教育委員会	2006	『岩門城跡』(那珂川町文化財調査報告書第68集)
133	那珂川町教育委員会	2009	『大塚遺跡群』(那珂川町文化財調査報告書第76集)
134	福岡市教育委員会	2009	『友野八遺跡』7(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1056集)
135	福岡県教育委員会	2013	『五ヶ山』I(福岡県文化財調査報告書第237集)
<早良郡>			
136	福岡市教育委員会	1980~2014	『有田・小田部』第1集~53
137	福岡市教育委員会	1986	『原遺跡』2(福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集)
138	福岡市教育委員会	1987	『柏原遺跡群』III(福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集)
139	福岡市教育委員会	1992	『八部Ⅲ』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集)
140	福岡市教育委員会	1995	『小笠木』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集)
141	福岡市教育委員会	2001	『舗井川人遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第682集)
142	福岡市教育委員会	2004	『下山門乙女田遺跡』3(福岡市埋蔵文化財調査報告書第796集)
143	福岡市教育委員会	2005	『広瀬遺跡』1(福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集)
144	福岡市教育委員会	2005	『金武』2(福岡市埋蔵文化財調査報告書第866集)
145	福岡市教育委員会	2012	『原遺跡』15(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1168集)
146	福岡市教育委員会	2013	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol 27 平成24年度版

No.	編著者名	発行年	著書名
<怡土郡>			
147	前原町教育委員会	1989	『長野川流域の遺跡群』I (前原町文化財調査報告書第31集)
148	前原町教育委員会	1990	『長野川流域の遺跡群』II (前原町文化財調査報告書第33集)
149	前原町教育委員会	1993	『藏持古屋敷遺跡 高祖遺跡群II』 (前原市文化財調査報告書第46集)
150	二大町教育委員会	1995	『木舟の森遺跡』 (二大町文化財調査報告書第12集)
151	二大町教育委員会	1997	『木舟・三本松遺跡』II (二大町文化財調査報告書第15集)
152	二大町教育委員会	1998	『木舟・三本松遺跡』III (二大町文化財調査報告書第16集)
153	二大町教育委員会	2001	『石崎曲り田遺跡-第3次調査- (中)』 (二大町文化財調査報告書第27集)
154	前原町教育委員会	2001	『藏持境遺跡』 (前原市文化財調査報告書第74集)
155	前原市教育委員会	2003	『高祖城』 (前原市文化財調査報告書第85集)
156	前原市教育委員会	2006	『怡土城跡』 (前原市文化財調査報告書第94集)
157	二大町教育委員会	2009	『熊野神社東遺跡』 (二大町文化財調査報告書第43集)
<志摩郡>			
158	福岡県教育委員会	1982	『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第6集
159	福岡市教育委員会	1987	『青木遺跡』 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集)
160	福岡市教育委員会	1990	『大塚遺跡・女原遺跡』 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集)
161	福岡市教育委員会	1993	『青木遺跡』2 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第350集)
162	福岡市教育委員会	2003	『青木遺跡』3 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集)
163	福岡市教育委員会	2009	『大塚遺跡』3 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第1025集)
164	福岡市教育委員会	2012	『大塚遺跡』5 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第1144集)
165	志摩町教育委員会	2006	『稲留地区遺跡群』 (志摩町文化財調査報告書第25集)
166	前原市教育委員会	2006	『池井田遺跡』 (前原市文化財調査報告書第91集)
167	糸島市教育委員会	2012	『潤遺跡群』II (糸島市文化財調査報告書第6集)
168	糸島市教育委員会	2013	『潤遺跡群』III (糸島市文化財調査報告書第7集)

<その他刊行物>

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
169	石津 司	1985~ 2001	『安楽平城物語』その1~その9	
170	柴田貞志	1986	『水巻昔ばなし』	水巻町
171	門司宣里	1993	『伝説と史話 歴史を秘めた郷土の山々』『北九州の山と自然』	帆柱自然公園愛護会
172	中村修身	1995	『八幡の山城』『わが故郷 八幡』	北九州八幡信用金庫
173	柴田貞志	2001	『ものがたり北九州合戦史』	水巻町

<論文等>

No.	編著者名	発行年	論文名	著書名	発行
174	廣崎篤夫	1969	『北九州の城』		廣崎篤夫
175	光福寺遺跡調査会	1984	『直方市下境光福寺城跡調査報告』	『地域相研究』第15号	地域相研究会
176	牛嶋英俊	1986	『歴史地理学的に見た直方城下町の成立』	『郷土直方』第14号	直方郷土研究会
177	木村幸雄・浦江敏雄	1986	『花尾城跡に関する基礎調査』	『地域相研究』第16号	地域相研究会
178	村田修三編	1987	『図説中世城郭事典』第三巻		新人物往来社
179	小川 賢	1993	『宗像氏の居城である片脇城に付いて』	『地域相研究』第20号下	地域相研究会
180	木島孝之	1995	『近世初頭九州における支城構造-黒田・綿川の支城について』	『福岡県地域史研究』No.13	福岡県地域史研究所
181	木島孝之・中西義昌	1998	『天正中・後期の北部九州における城郭の様相』	『戦国の城と城下町II』	鳥栖市教育委員会
182	中西義昌	1998	『筑前老ノ山城と香椎宮』	『福岡県史だより』96号	福岡地方史研究会
183	山崎龍雄	1998	『糸島半島の中世山城探査資料について』	『福岡市博物館紀要』第8号	福岡市博物館
184	中西義昌	1999	『小規模山城・丘城の網張り構造にみる小規模在地勢力の様相-筑前精霊郡・嵩田郡・志摩郡を中心にして』	『愛城研報告』第4号	愛知中世城郭研究会
185	大塚俊司	1999	『福岡市西区桑原』	『筑前国祐庄故地現地調査速報』(地域資料叢書3)	九州大学服部英雄研究室
186	山崎龍雄	2000	『福岡市内の中近世城館』	『香椎B遺跡』 (福岡市文化財調査報告書第621集)	福岡市教育委員会
187	中村修身	2000	『北部九州の歓空堀群』	『長野城』 (北九州市文化財調査報告書第89集)	北九州市教育委員会

No.	著者名	発行年	論文名	著書名	発行
188	中西義昌	2000	『城郭遺構にみる九州征伐—筑前西部における城郭の変容過程』	『愛城研報告』第5号	愛知中世城郭研究会
189	中西義昌	2000	『城郭遺構にみる報国後期系島半島の動向』	『福岡地方史研究』第38号	福岡地方史研究会
190	中西義昌・岡寺 良	2001	『歴史史料としての戦国期城郭—地域別構造—』(地域資料叢書4)	『九州における城郭遺構と』	九州大学服部英雄研究室
191	中西義昌	2001	『筑前高島居城の構張りと国人勢力の結集』	『城館研究論集』発刊準備号	伝称城館学会
192	中村修身	2001	『福岡県若宮盆地の中世城郭調査—天正九年段階報国大名（宗像氏貞）の軍事体勢の一側面』	『日本考古学』第12号	日本考古学協会
193	木島孝之	2001	『城郭の構造の構造と大名権力』		九州大学出版会
194	中西義昌	2002	『戦国期筑前中南部における領主権力の動向』	『福岡地方史研究』第40号	福岡地方史研究会
195	木島孝之	2003	『筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵への道程—小早川隆景による立花山城の大改修の実態とその歴史的意義』	『城館史科学』創刊号	城館史科学会
196	片山安夫	2004	『筑後黒木・高牟礼城』	『北部九州中近世城郭情報紙』7	北部九州中近世城郭研究会
197	中西義昌	2004	『戦国期城郭にみる戦国期国衆の御構造—構張り研究に基づく報国期北部九州の基礎的考察』	『中世城郭研究』第18号	中世城郭研究会
198	村上勝郎	2005	『湊川城探訪記』	『北部九州中近世城郭情報紙』8	北部九州中近世城郭研究会
199	片山安夫	2008	「当国無双」の要害・薙岳城	『因設福岡・宗像・糸島の歴史』	郷土出版社
200	藤野正人	2008	『櫛屋郡下山田城について』	『北部九州中近世城郭情報紙』14	北部九州中近世城郭研究会
201	岡寺 良	2009	『筑前一嶽城と亀尾城—一人領主・筑紫氏の城郭としての視点から』	『九州歴史資料館研究論集』34	九州歴史資料館
202	藤野正人	2009	『立花陣（三日月山城塞群）について』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』17	北部九州中近世城郭研究会
203	井浦 一	2010	『福津の歴史～上西郷タナカ遺跡が語るもの～』	『文化福津』第5号	福津市文化協会
204	山崎龍雄	2010	『福岡市博多区所在の二つの山城庶田青木城・稻屋塙城について』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』19	北部九州中近世城郭研究会
205	山崎龍雄	2011	『糸島市二丈吉井岳城の構張り調査』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』21	北部九州中近世城郭研究会
206	田中賢二・村上勝郎	2011	『筑前那珂川町の驚ヶ岳城について』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』21	北部九州中近世城郭研究会
207	藤野正人	2011	『城郭から見た宗像の歴史時代—大宮司・宗像氏貞の時代を中心として』	『むなかた電子博物館紀要』第3号	宗像市
208	藤野正人	2011	『筑前園穂屋敷立花陣について—立花山城の南に位置する二つの巨大城砦群-』	『第28回全国城郭研究者セミナー』テーマ報告「城郭遺構の認識を問う」資料集	第28回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会
209	岡寺 良	2012	『筑前園穂屋敷と豊前上伊来山城の平面構造について』	『都市・建築学研究』第22号	九州大学大学院人間環境学研究院
210	藤野正人	2013	『宗像氏貞の居城「岳山城」について』	『むなかた電子博物館紀要』第5号	宗像市
211	中村修身	2013	『城郭に敷設された横堀 北部九州山口県の例から』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』24	北部九州中近世城郭研究会
212	中村修身	2014	『福岡県垣垣町岡城について』	『北部九州中近世城郭研究会情報紙』26	北部九州中近世城郭研究会
213	藤野正人・山崎龍雄	2014	『三日月山城砦群と城／越山城砦群の考察－対面する二つの巨大な城砦群-』	『九州考古学』第89号	九州考古学会
214	山崎龍雄	2014	『福岡県糸島市二丈岳城の調査・構造と出土遺物から見た二丈岳城の意義』	『先史学・考古学論究』VI	龍田考古学会
215	木原武雄	発行年不詳	『肥前戦国史 中世肥前（佐賀県）北・中・東部編』	『佐賀学』を考える』 (佐賀大学・教育研究室内特別経費による研究報告書)	

&lt;分布地図&gt;

No.	著者名	発行年	著書名
216	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』(宗像郡編)
217	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』(中間市・遠賀郡編)
218	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』(直方市・鞍手郡編)
219	福岡県教育委員会	1979	『福岡県遺跡等分布地図』(轟屋郡編)
220	福岡県教育委員会	1980	『福岡県遺跡等分布地図』(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編)
221	福岡県教育委員会	1981	『福岡県遺跡等分布地図』(糸島郡編)
222	福岡市教育委員会	1982	『福岡市文化財分布地図』(西部Ⅱ)
223	岡垣町教育委員会	1993	『岡垣町遺跡詳細分布調査報告書』(岡垣町文化財調査報告書第16集)
224	福岡市教育委員会	1993	『福岡市文化財分布地図』(中部・南部)
225	水巻町教育委員会	1994	『水巻町遺跡等詳細分布調査報告書』(水巻町文化財調査報告書第2集)
226	福岡市教育委員会	1993	『福岡市文化財分布地図』(西部Ⅰ)
227	直方市教育委員会	1995	『直方市内遺跡詳細分布調査報告書』(直方市文化財調査報告書第19集)
228	福間町教育委員会	1995	『福間町遺跡等分布地図』
229	那珂川町教育委員会	1995	『那珂川町文化財分布地図』
230	志摩町教育委員会	1995	『志摩町遺跡等分布地図』(志摩町文化財調査報告書第17集)
231	福岡市教育委員会	1996	『福岡市文化財分布地図』(東部Ⅰ)
232	北九州市教育委員会	1997	『北九州市埋蔵文化財分布地図』(若松区・戸畠区・八幡東区)
233	古賀町教育委員会	1997	『古賀町遺跡等分布地図』
234	福岡市教育委員会	1996	『福岡市文化財分布地図』(東部Ⅱ)
235	芦屋町教育委員会	1998	『芦屋町遺跡詳細分布調査報告書』(芦屋町文化財調査報告書第9集)
236	新宮町教育委員会	1998	『新宮町文化財分布地図』
237	福岡市教育委員会	1998	『福岡市文化財分布地図』(西部Ⅲ)
238	前原市教育委員会	1998	『福岡県前原市史内遺跡等分布地図』
239	二丈町教育委員会	1998	『二丈町遺跡等分布地図』
240	久山町教育委員会	1999	『久山町文化財分布地図』
241	北九州市教育委員会	2001	『北九州市埋蔵文化財分布地図』(八幡西区)
242	篠栗町教育委員会	2001	『篠栗町文化財分布地図』
243	中間市教育委員会	2003	『中間市遺跡等詳細分布調査報告書』(中間市文化財調査報告書第4集)
244	柏原町教育委員会	2006	『柏原町文化財分布地図』(柏原町文化財調査報告書第22集)
245	須恵町教育委員会	2009	『須恵町文化財分布地図』(須恵町文化財調査報告書第9集)
246	宗像市教育委員会	2011	『宗像市遺跡等分布地図』
247	遠賀町教育委員会	2013	『遠賀町内遺跡詳細分布調査報告書』(遠賀町文化財調査報告書第19集)
248	宇美町教育委員会	2013	『宇美町内遺跡等分布地図』(宇美町文化財調査報告書第19集)

## IV 対象地域城館分布図

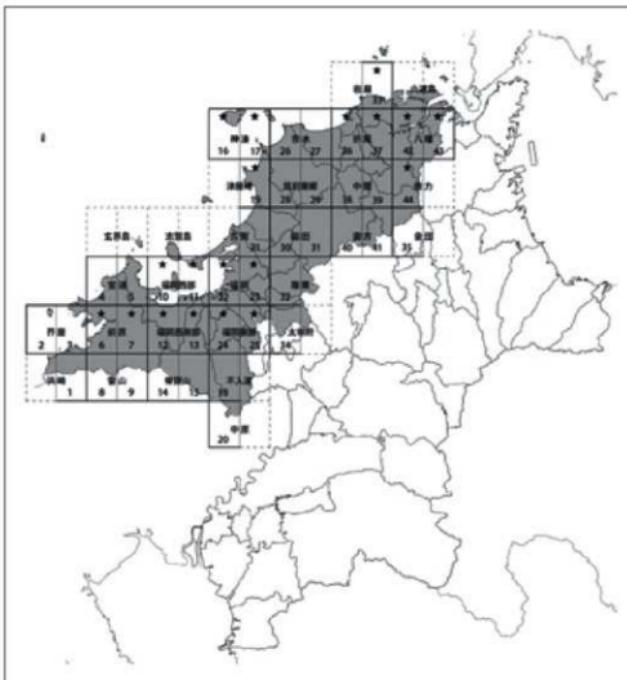
本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての位置図を示す。凡例および分布図対照図について以下のとおりである。

<凡例>

- 1 基本地図は、国土地理院長の承認を得て（承認番号 平26情復 第978号）、同院発行の数値地図25000（地図画像）を複製したもので、下の対照図に★が付されている図幅については、1/37,500に、それ以外は全て1/35,000に縮小して掲載している。
- 2 本書の対象地域になっているが、城館が存在しない図幅については割愛した。
- 3 分布図の遺跡の表記と分布図対照図は以下のとおり。

<遺跡の表記>

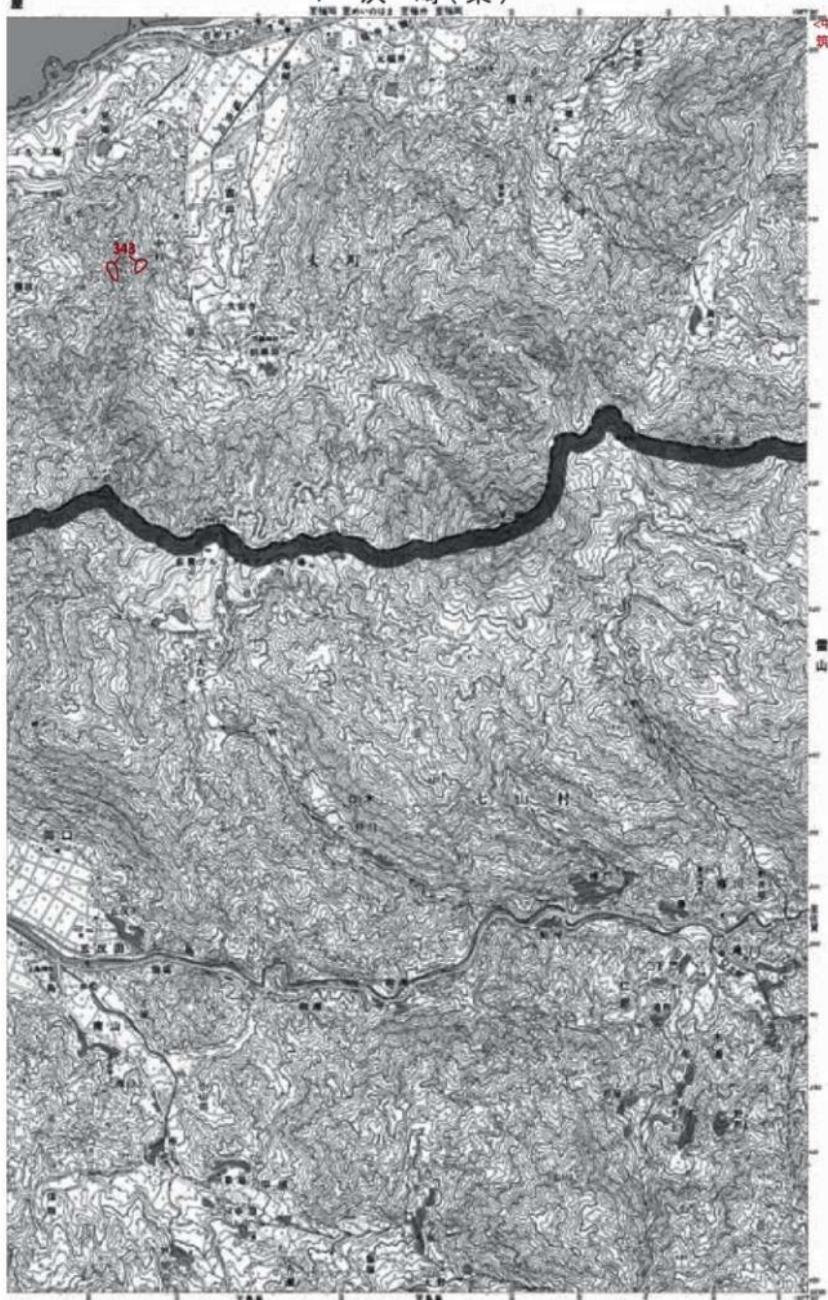
	範囲が明確なもの	所在は明確であるが範囲が不明確なもの	所在はある程度は明確なもの（小字の範囲程度）	所在は明確でないもの（大字の範囲までの把握）
中近世城館	○	●	○	表記なし (地図の欄外に名前のみ記載)
伝承地	なし	●	○	表記なし (地図の欄外に名前のみ記載)
城館等関連遺跡	○	●	○	なし



<分布図対照図>

## 1 浜崎(東)

**筑前343吉井岳城**



## 2 芥屋(西)

<中世城館>  
筑前362姫島城



呼子

3.

4.

470

### 3 芥屋(東)

(所在不明)  
<城館等伝承地>  
筑前D74  
小金丸氏前

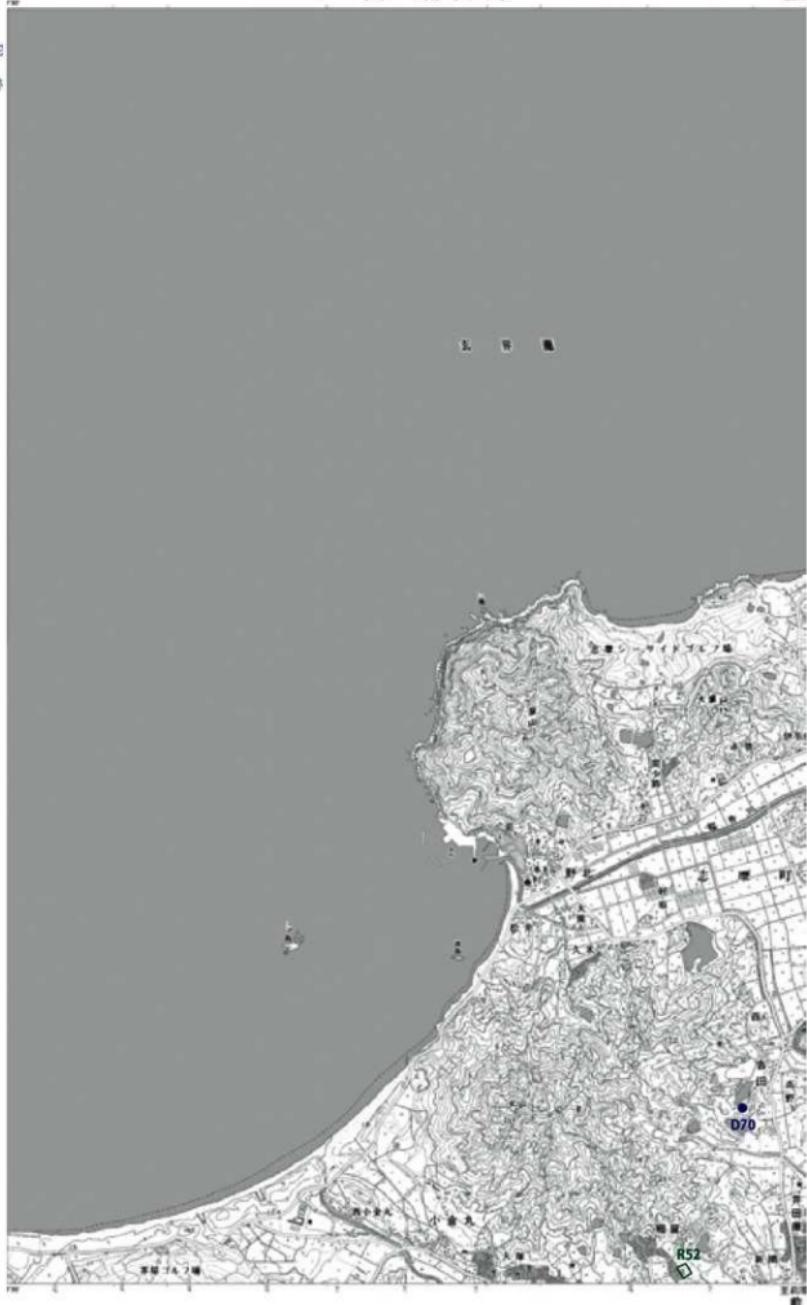


## 4 宮浦(西)

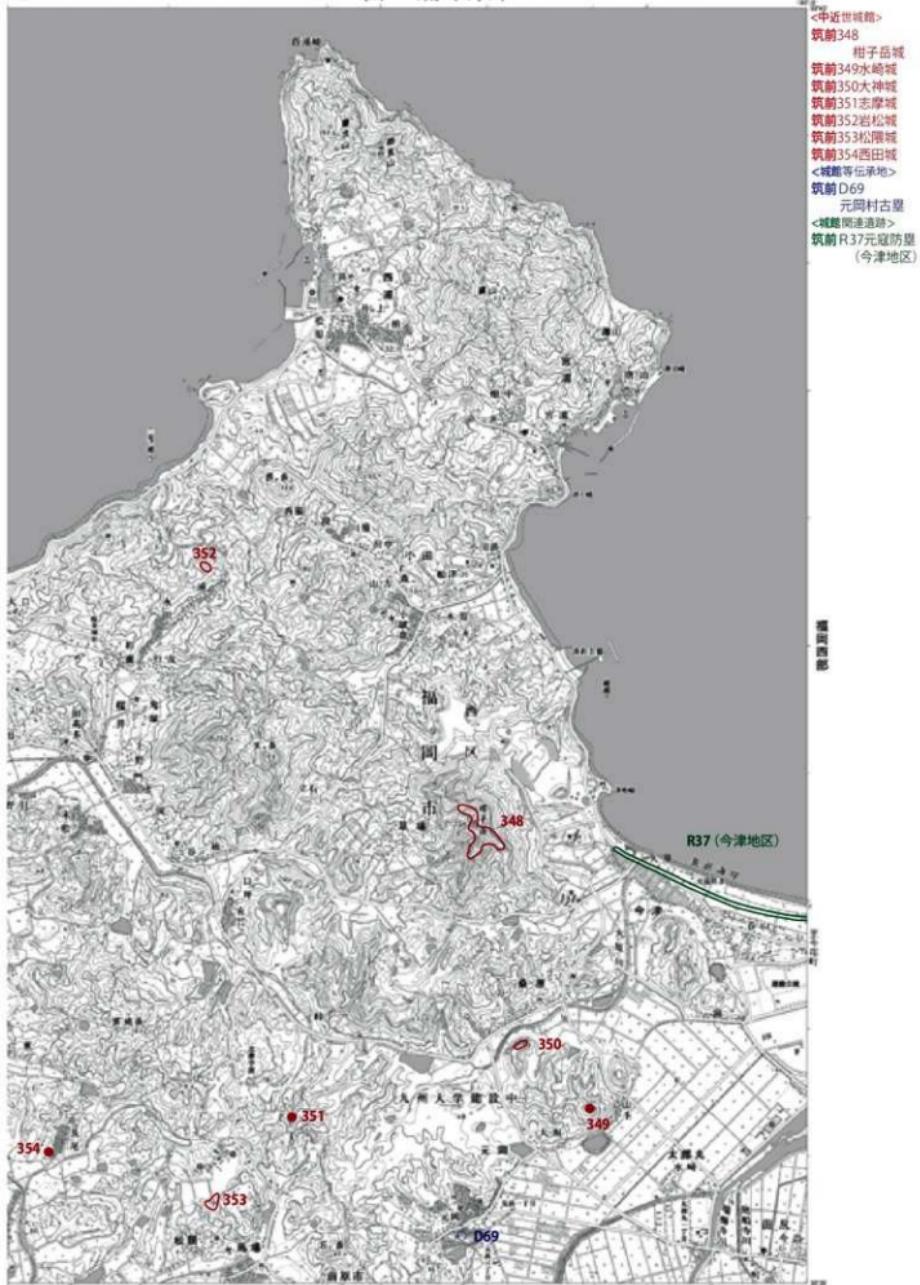
文

<城館等伝承地>  
筑前D70  
古庄能登守宅  
<城館間連遺跡>  
筑前R52木藤丸遺跡

(所在不明)  
<城館等伝承地>  
筑前D71  
野北殿館



## 5 宮 浦(東)



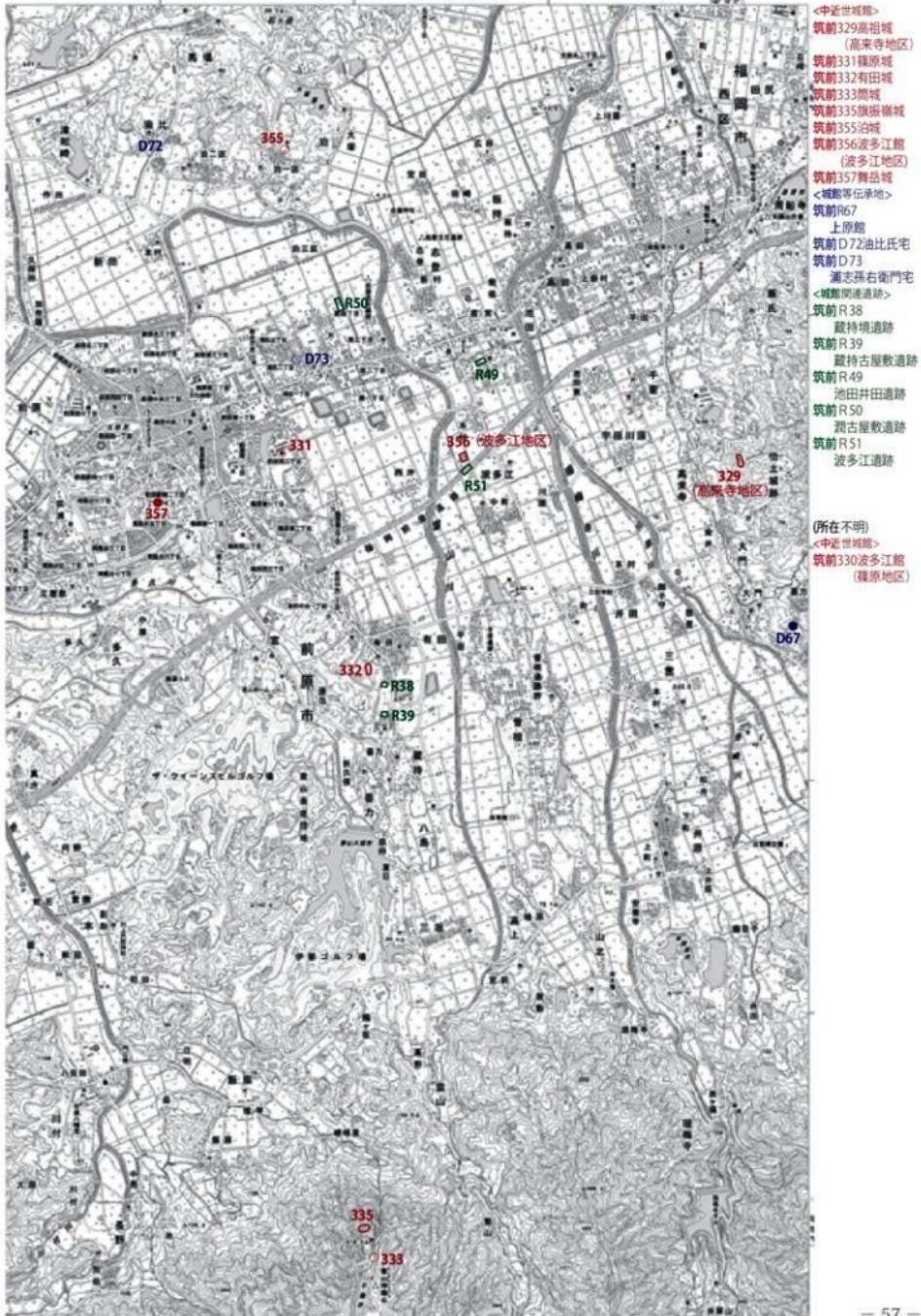
## 6 前原(西)

<中近世城跡>  
筑前336加布里城  
筑前337波呂城  
筑前338宝珠岳城  
筑前339城崎山城  
筑前340古城  
筑前358觀山城  
筑前359可也山城  
筑前K15石崎城  
筑前K16代官屋敷  
<城跡関連遺跡>  
筑前R40  
東五反田遺跡  
筑前R41  
東下田遺跡  
筑前R42  
東高田遺跡  
筑前R43  
熊野神社東遺跡  
筑前R44  
石崎曲り田遺跡  
筑前R45  
木舟・三本松遺跡  
筑前R46  
木舟の森遺跡  
筑前R52  
木藤丸遺跡

(所在不明)  
<中近世城跡>  
筑前360新城山城  
筑前361連田砦

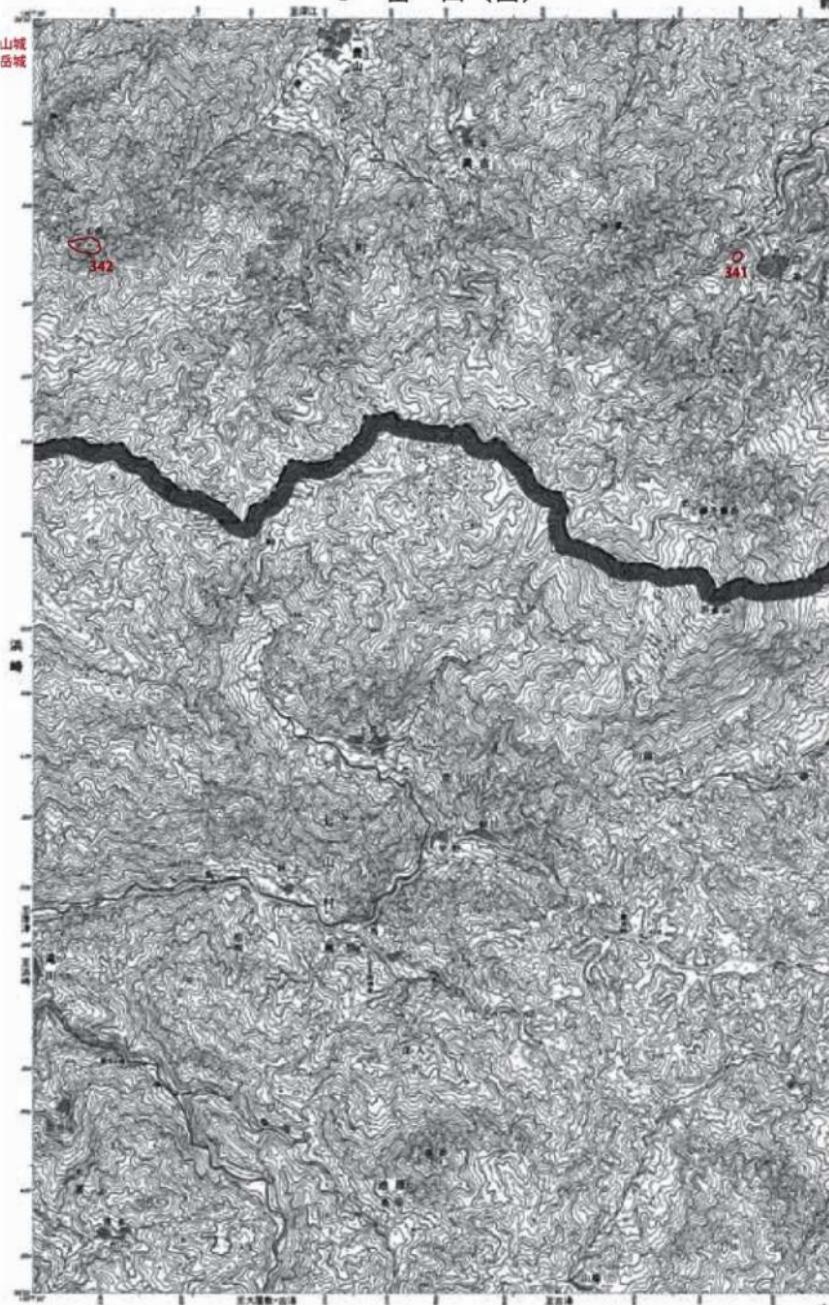


## 7 前原(東)



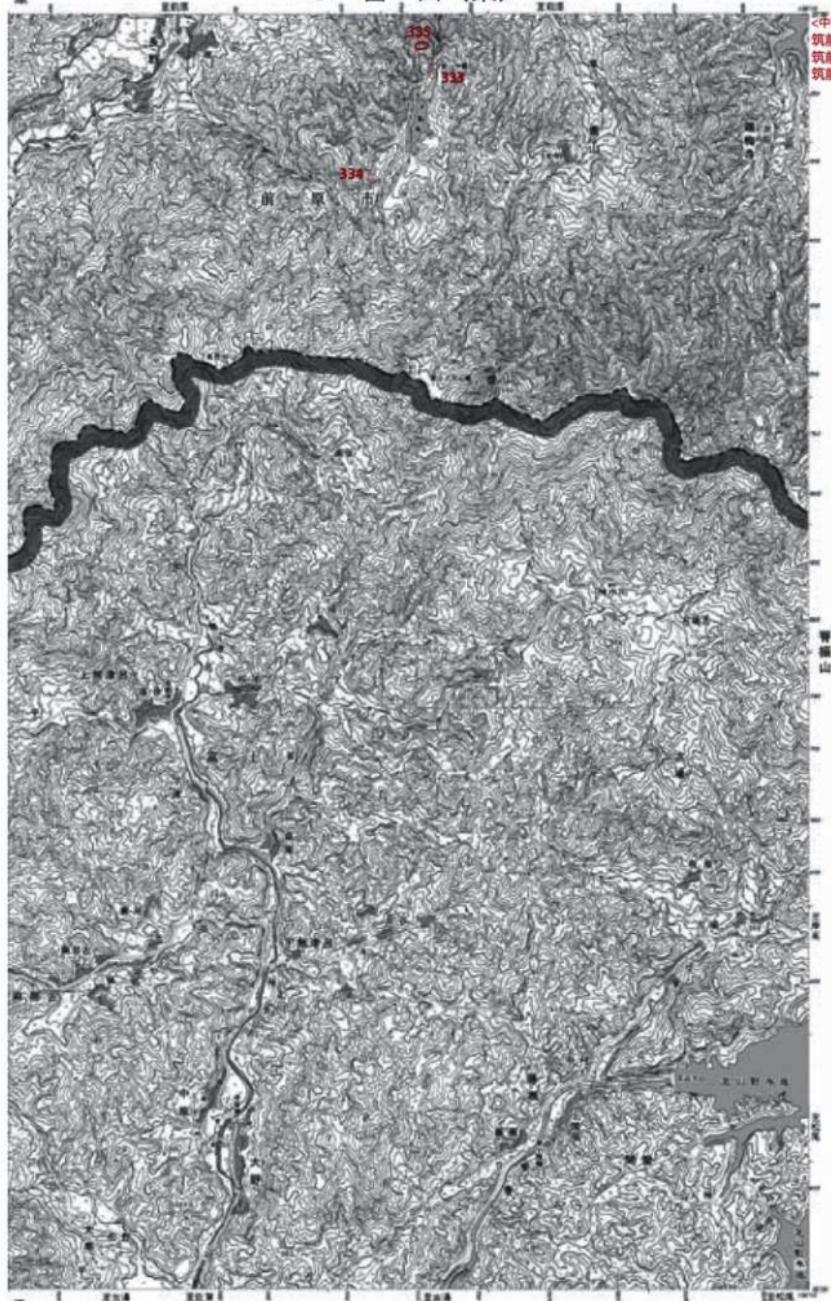
# 8 雷山(西)

<中近世城館>  
筑前341小倉山城  
筑前342二丈岳城



9 雷山(東)

<中世城館>  
筑前333筒城  
筑前334松尾城  
筑前335旗振城

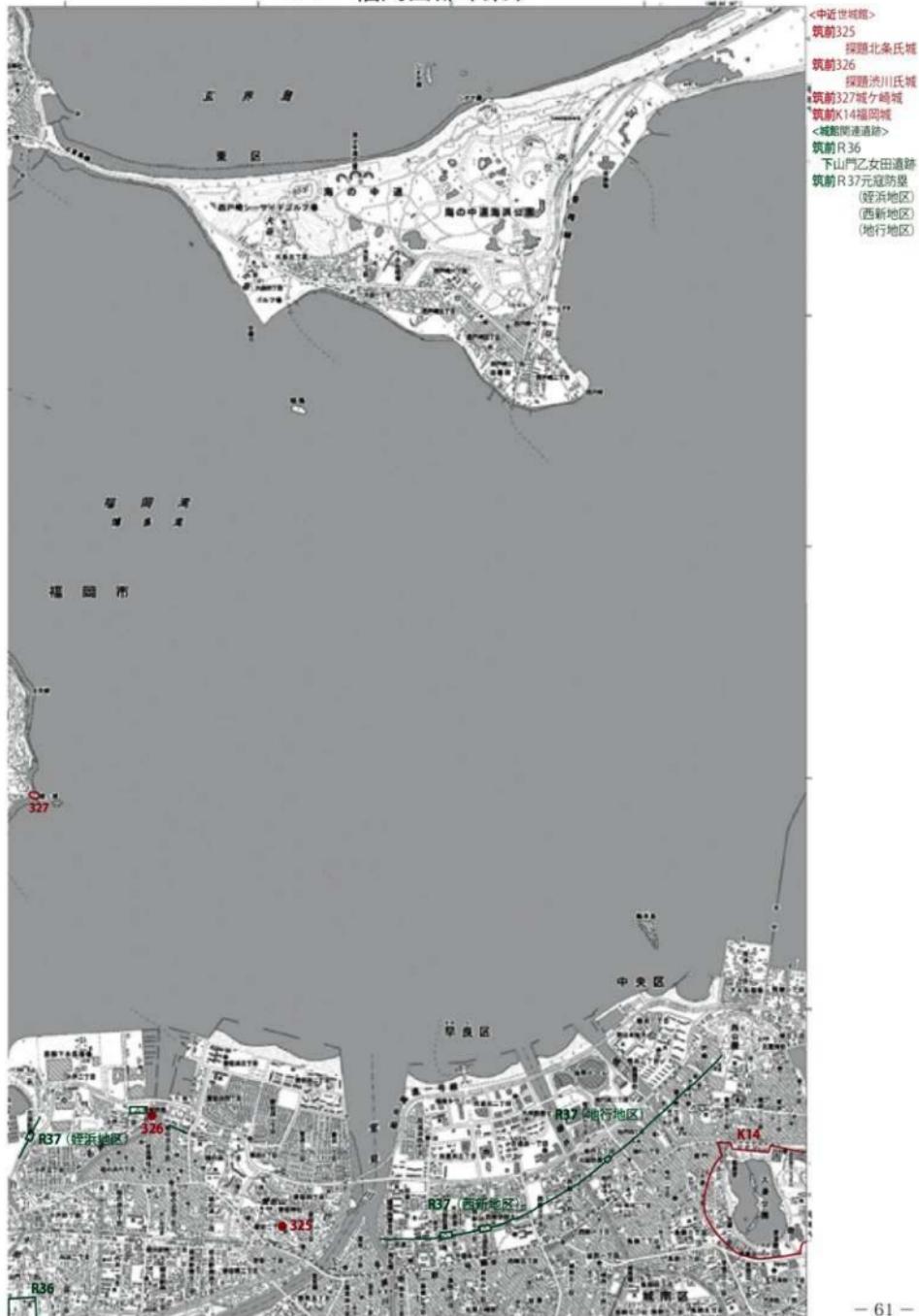


# 10 福岡西部(西)

<中世城館>  
筑前328束ノ城  
筑前346  
臼杵氏端城  
筑前347箕城  
<城館等伝承地>  
筑前D68  
昆沙門岳砦  
<城館関連道路>  
筑前R37元寇防壁  
(今津地区)  
(今宿地区)  
(生の松原地区)



# 11 福岡西部(東)

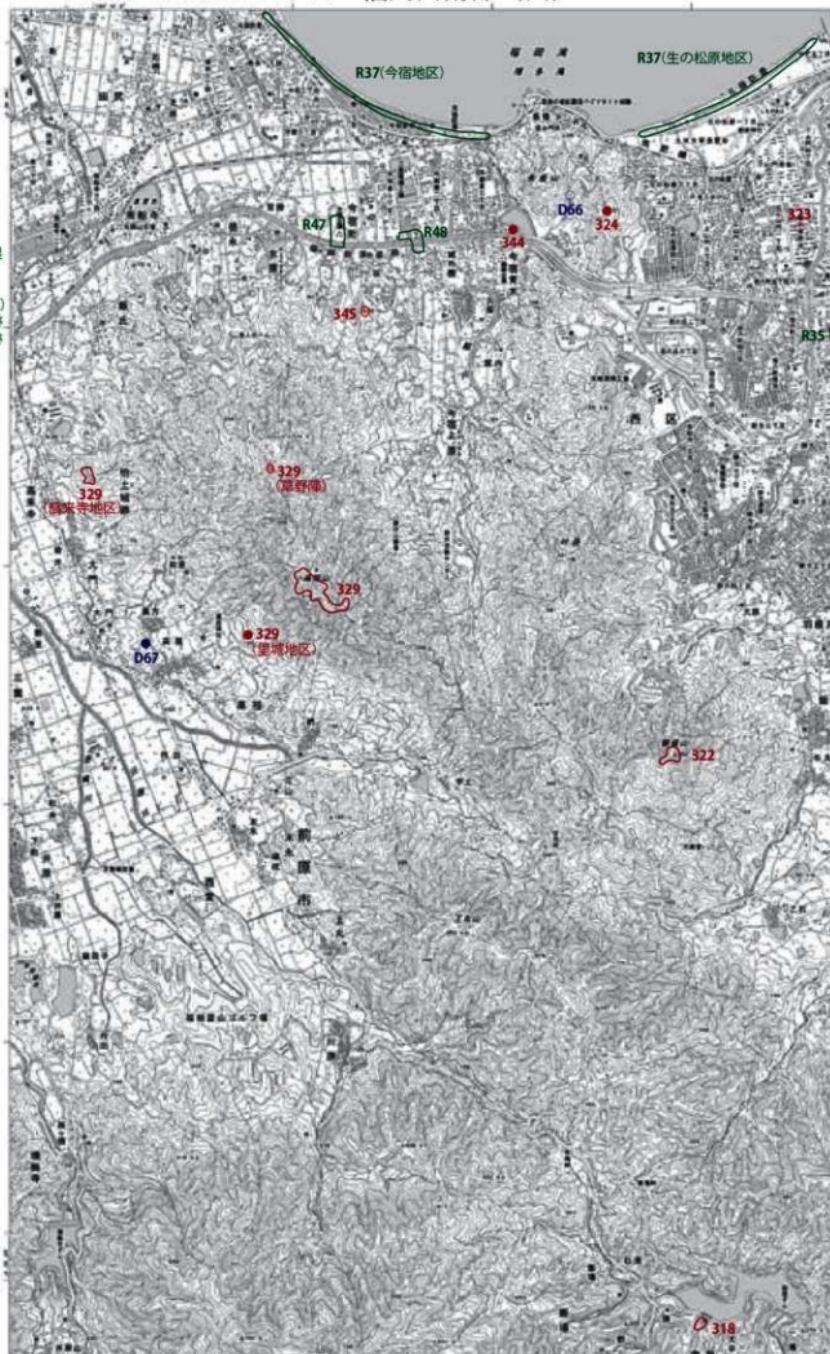


## 12 福岡西南部（西）

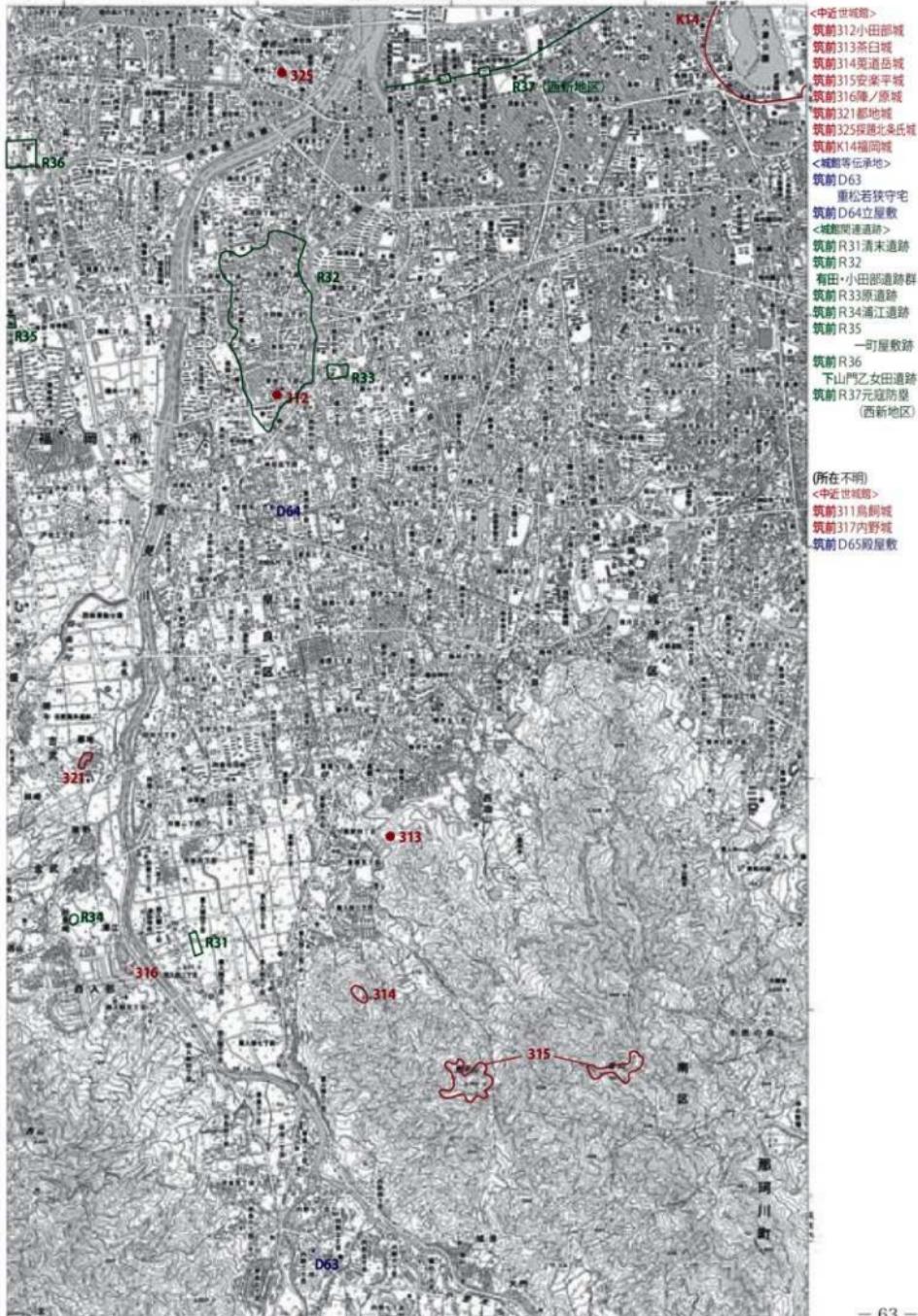
<中近世城籬>  
筑前318曲糸城  
筑前323松原城  
筑前323生松原城  
筑前324長鳥城  
筑前329嘉祖城  
筑前344星山城  
筑前345青木城  
<城籬等併承地>  
筑前D66篠跡  
筑前D67上原跡  
<城跡間通道路>  
筑前R35

一時屋敷跡  
筑前R37元迎防跡  
(今津地区)  
(今宿地区)  
(生の松原地区)

筑前R47大塚遺跡  
筑前R48青木遺跡

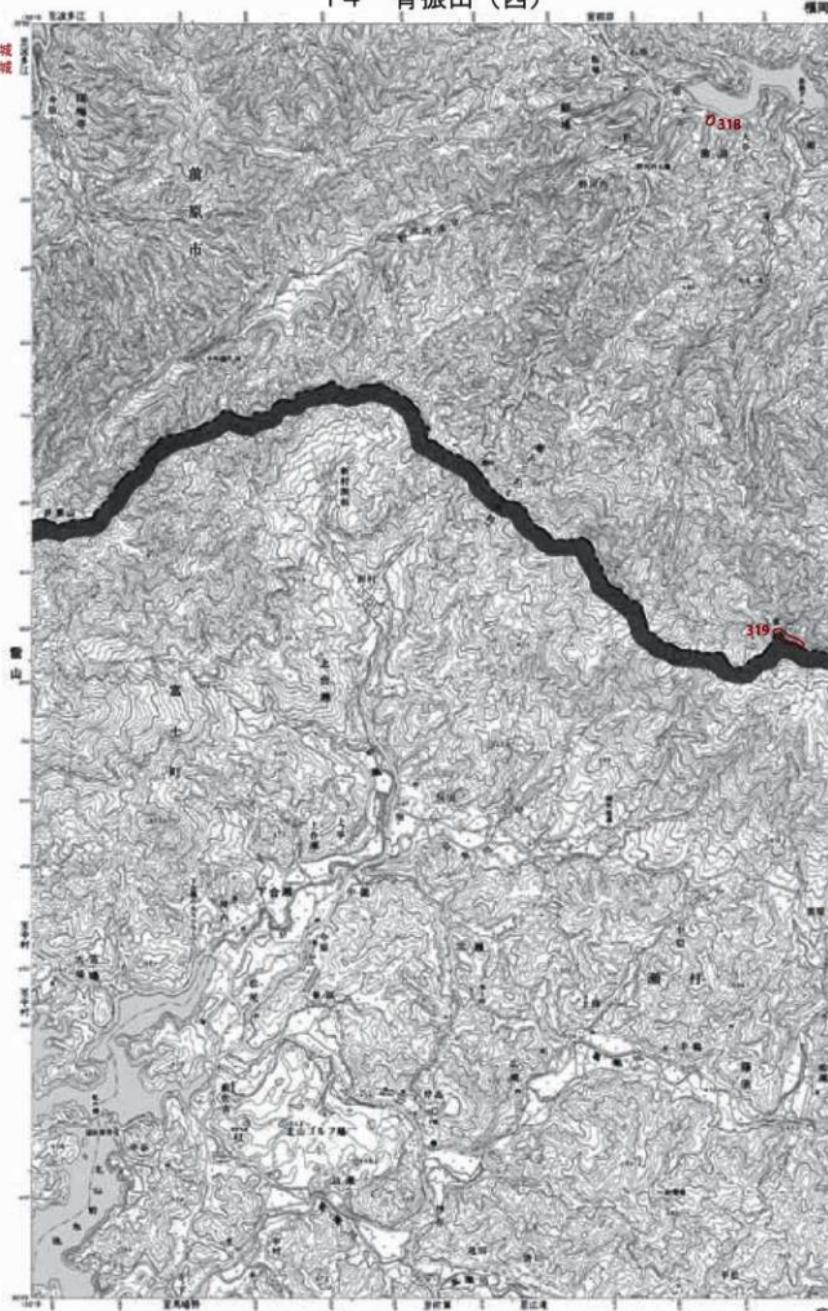


# 13 福岡西南部（東）

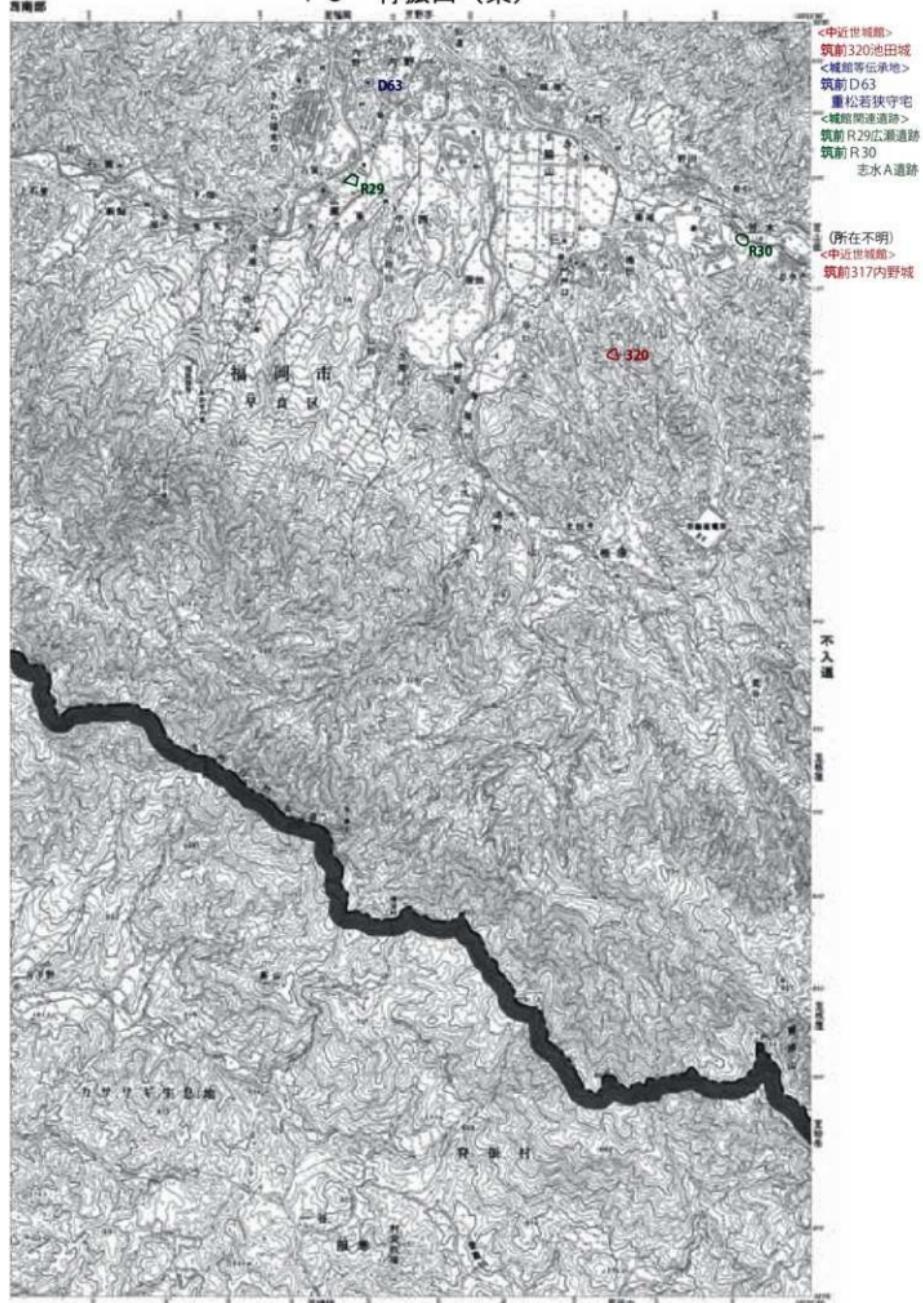


## 14 脊振山（西）

中近世城壁



# 15 脊振山（東）



16 神湊（西）

中近世城館



筑前沖ノ島

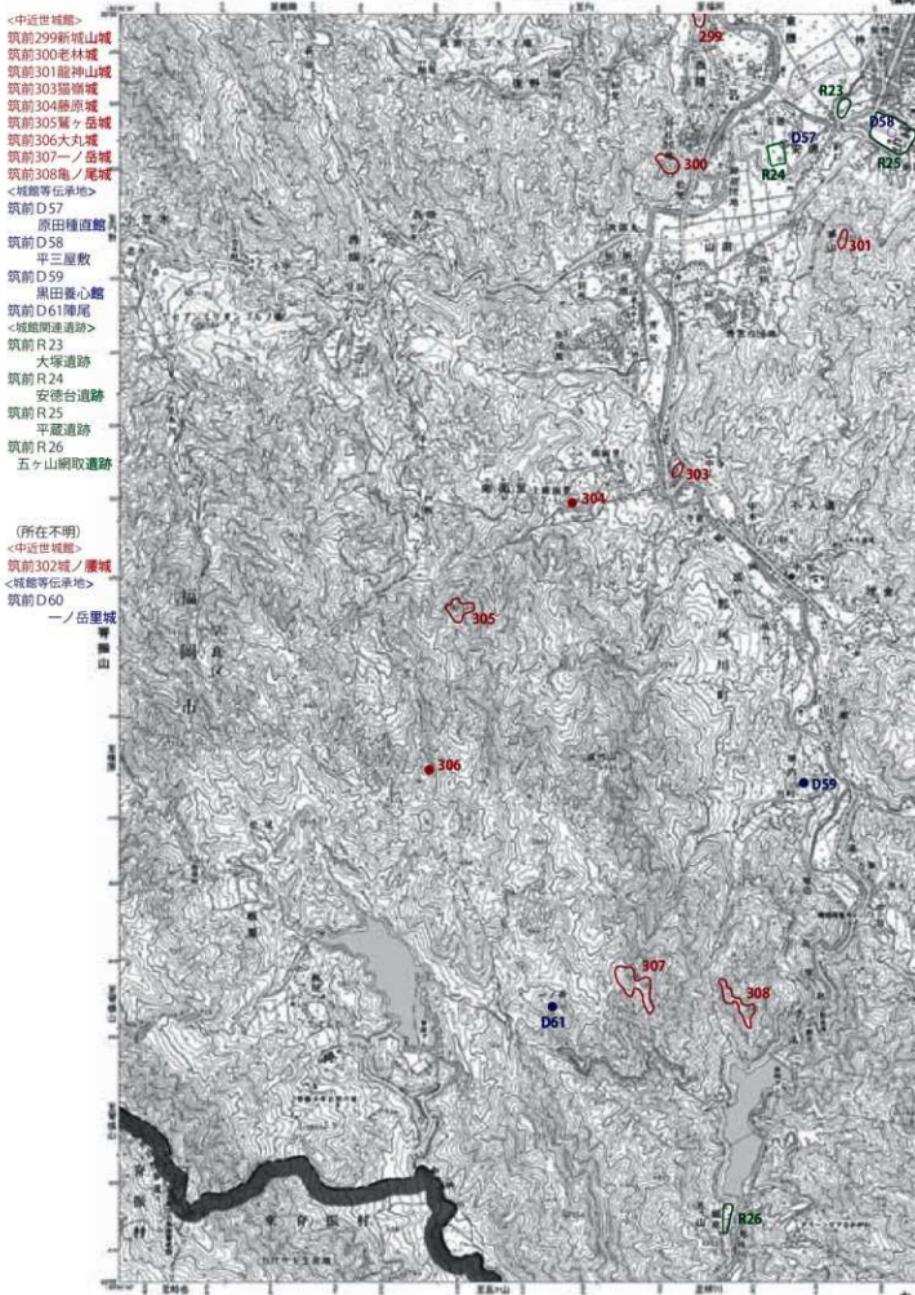


# 17 神湊(東)

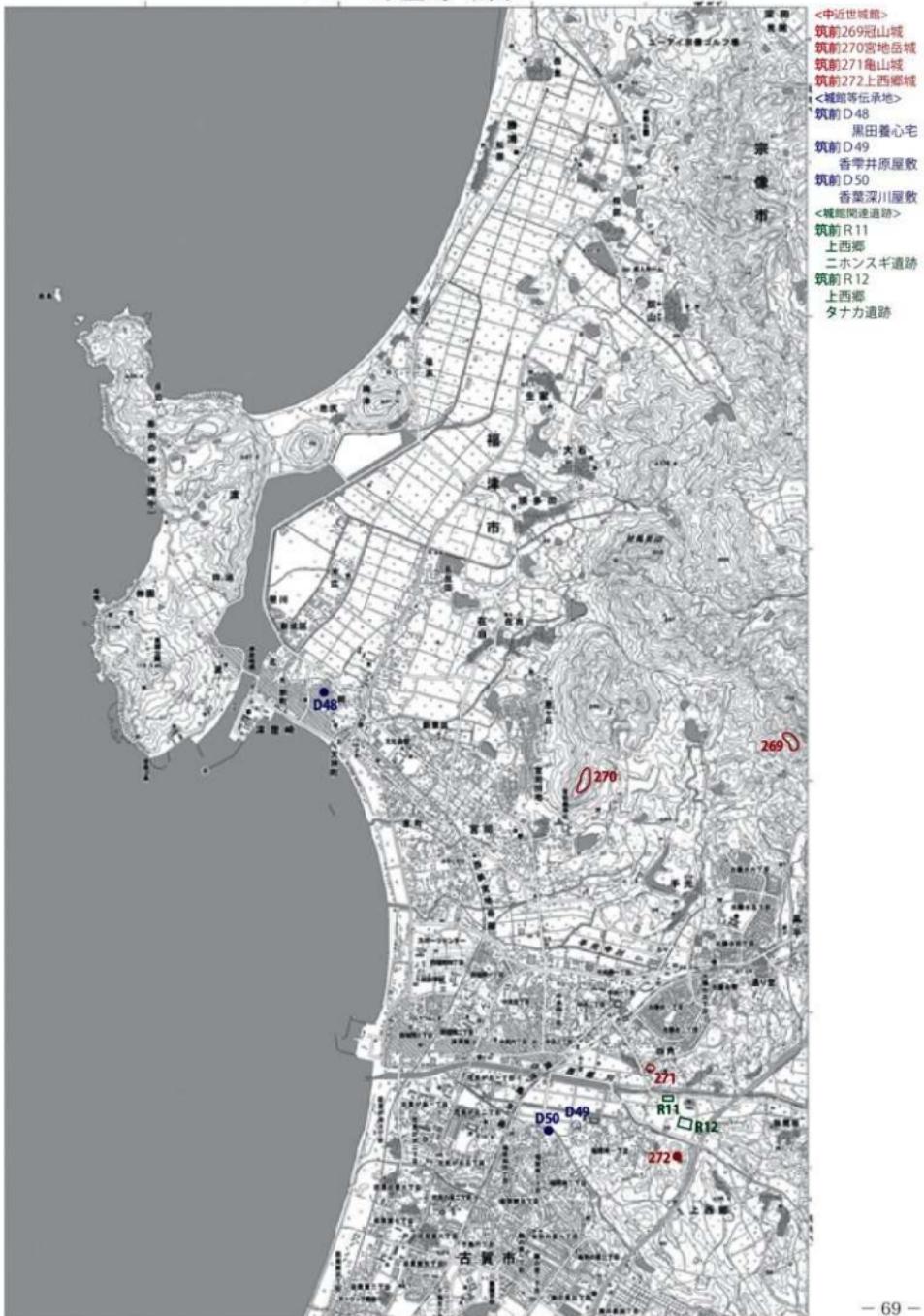
<中世城館>  
筑前245城ノ慶島城  
筑前246勝島城  
筑前247草崎城



# 18 不入道（西）

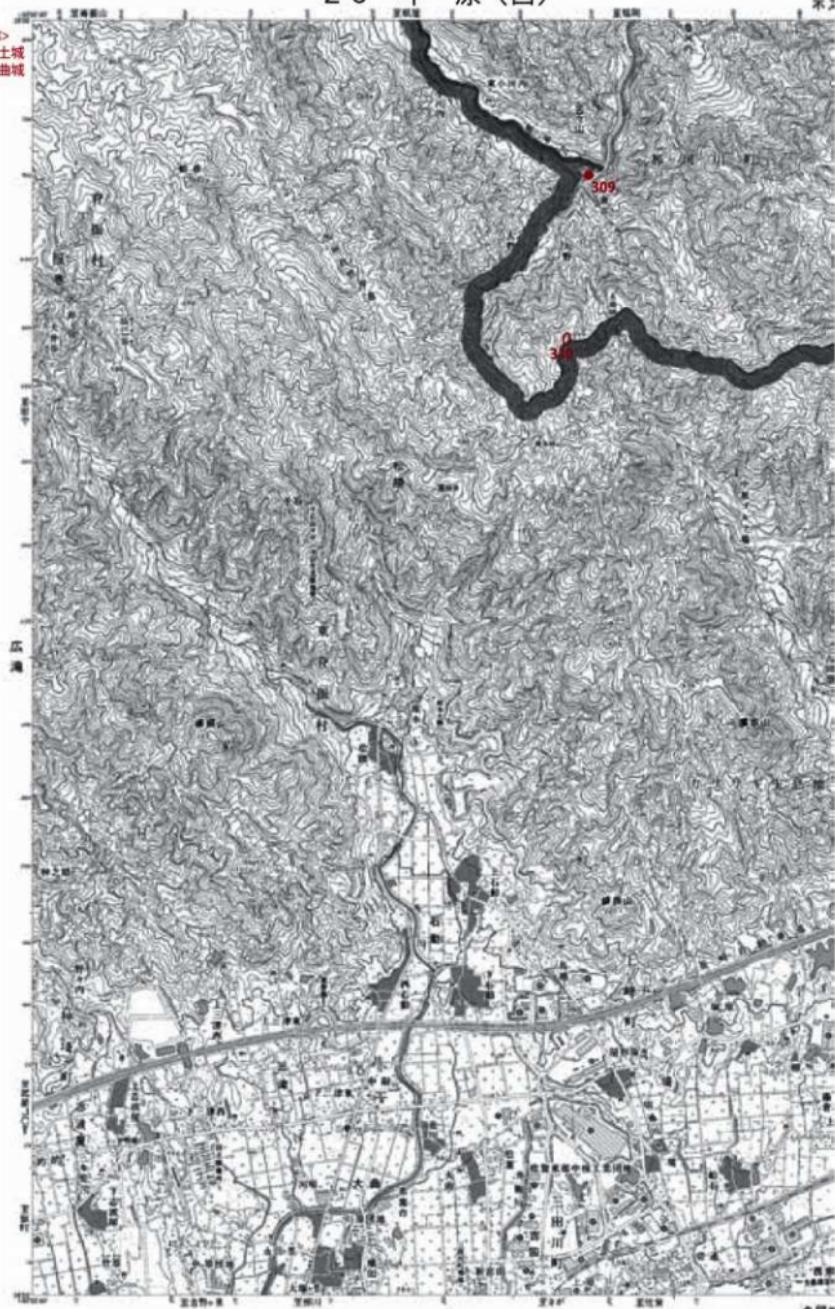


19 津屋崎（東）



20 中原(西)

<中世城跡>  
筑前309白土城  
筑前310七曲城

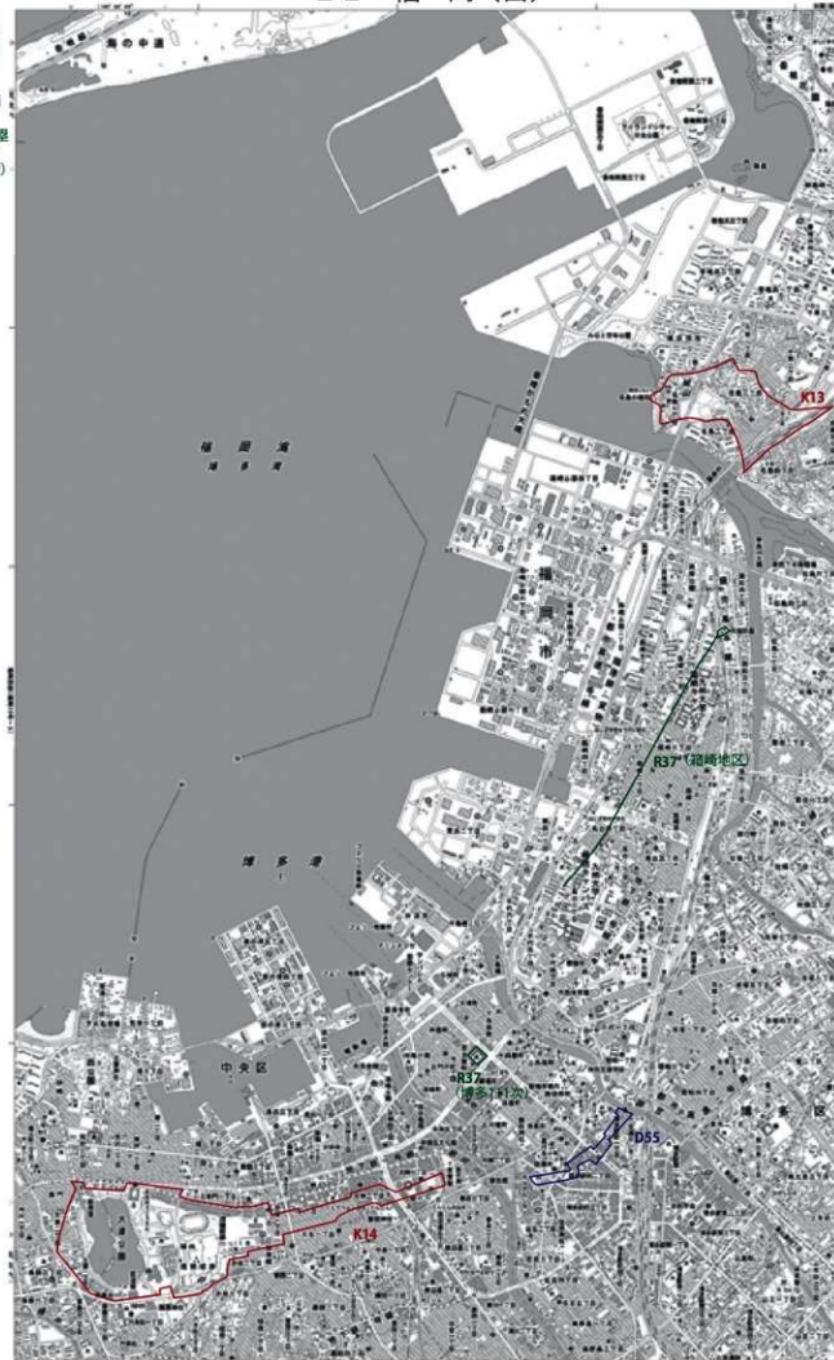


# 21 古賀(東)

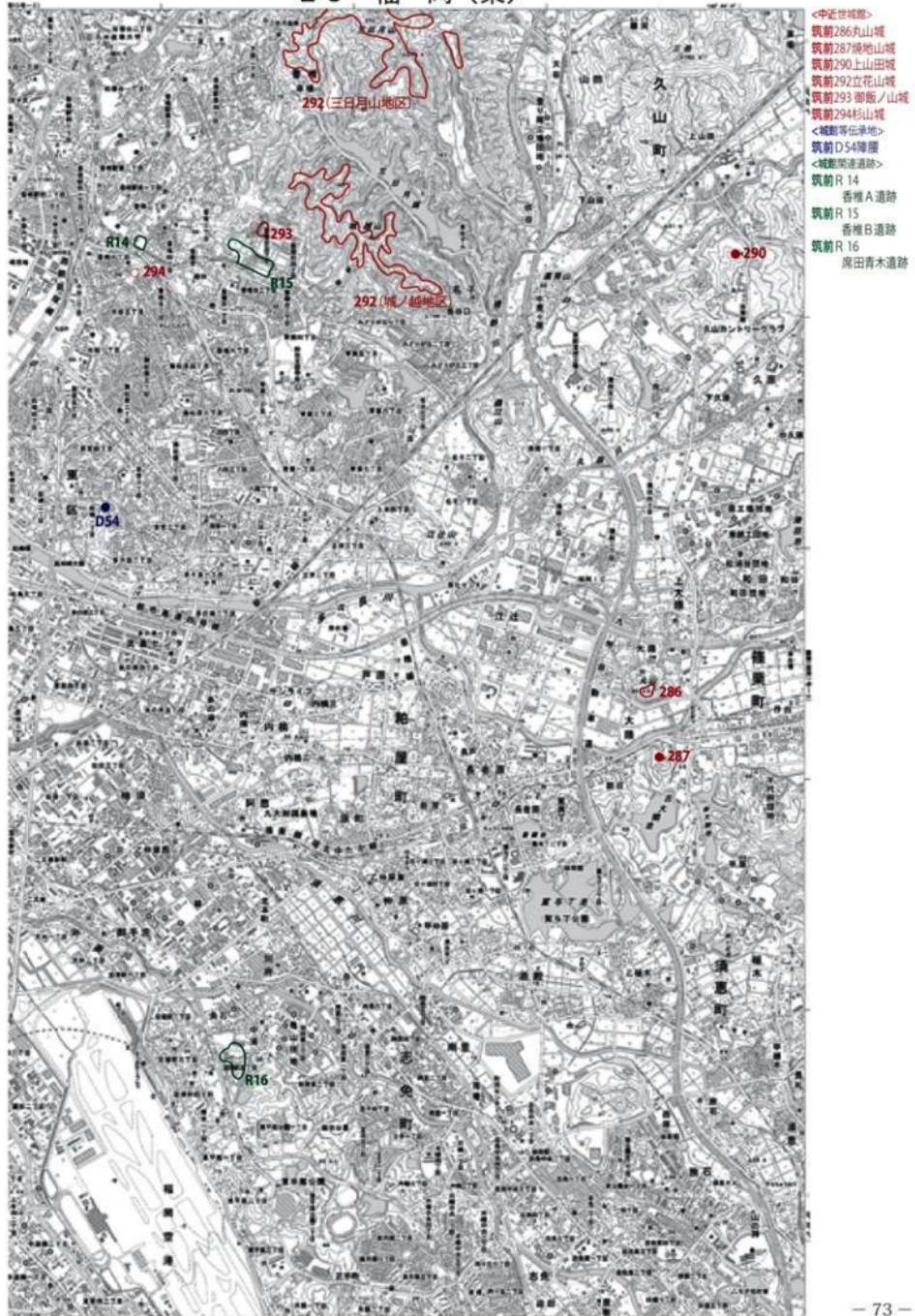


## 22 福岡（西）

<中近世城館>  
筑前K13名島城  
筑前K14福岡城  
<城壁等伝承地>  
筑前D55  
房州濠・矢倉門  
<城館関連遺跡>  
筑前R37元庭防塁  
(箱崎地区)  
(博多111次)



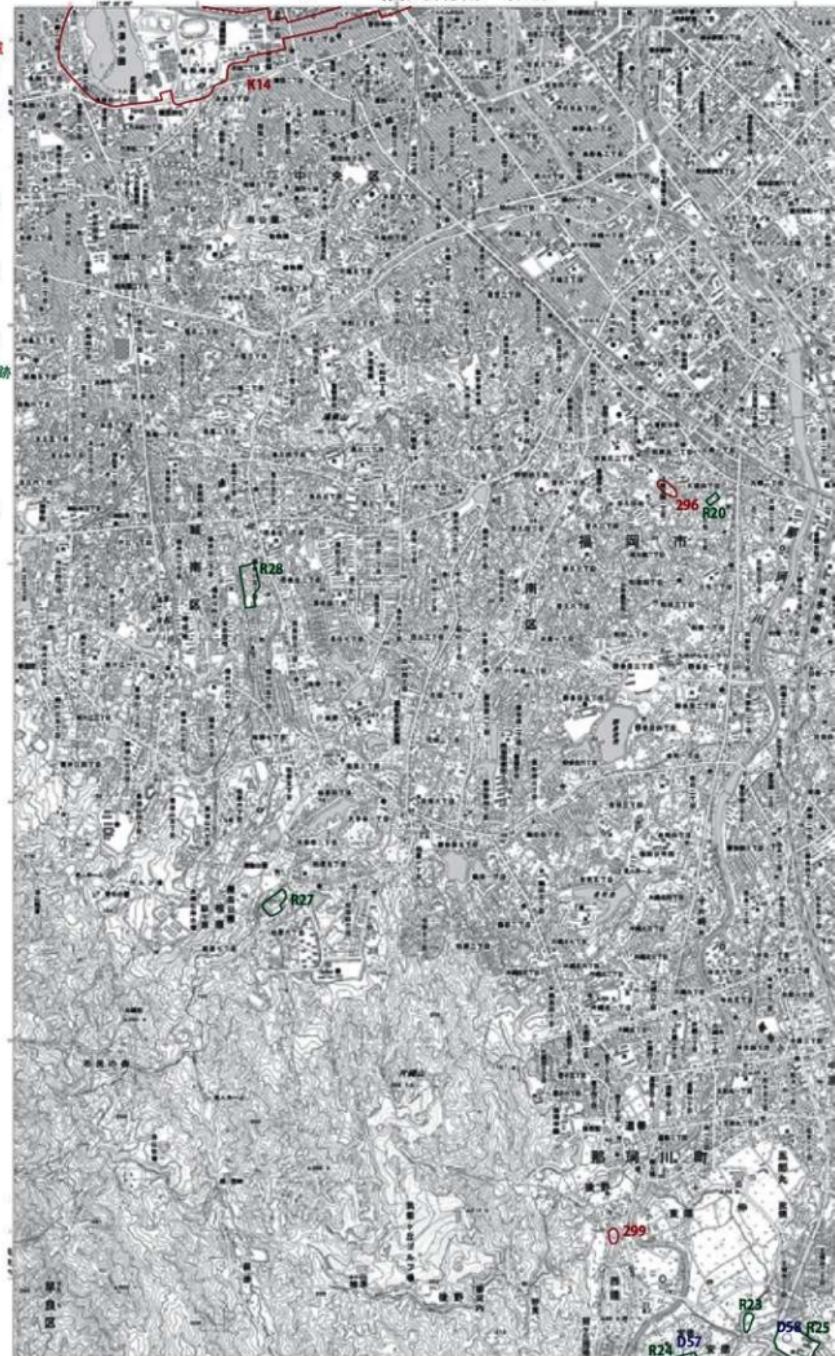
## 23 福岡(東)



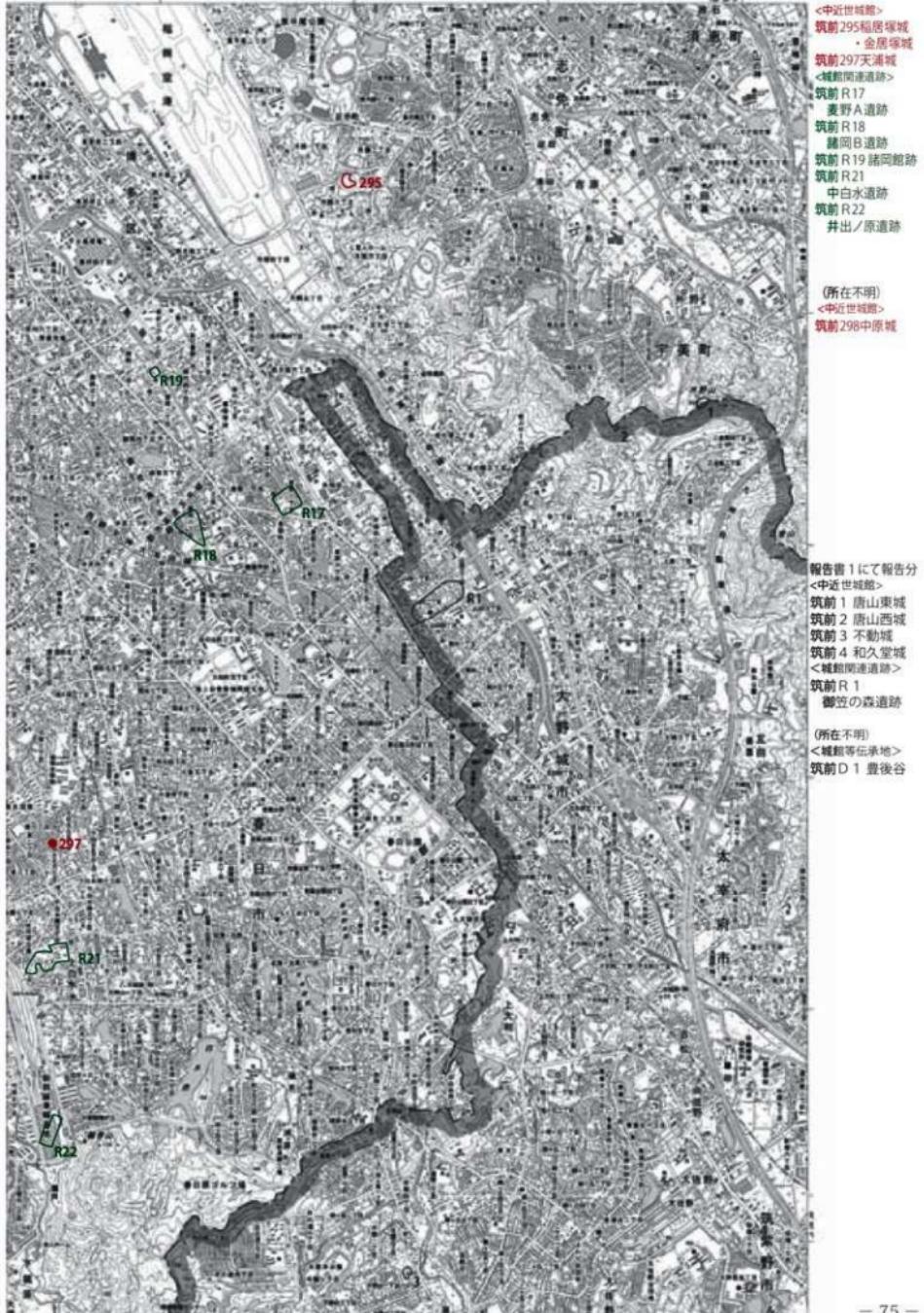
## 24 福岡南部（西）

<中世城館>  
 築前296古野城  
 築前299新城山城  
 築前 K14福岡城  
 <城館等伝承地>  
 築前 D57  
 原田種直館  
 築前 D58  
 平三屋敷  
 <城館関連遺跡>  
 築前 R20  
 大橋 E 遺跡  
 築前 R23  
 大塚遺跡  
 築前 R24  
 安徳台遺跡  
 築前 R25  
 平蔵遺跡  
 築前 R27  
 柏原 K 遺跡  
 築前 R28  
 穂井川 A 遺跡

(所在不明)  
 <城館等伝承地>  
 築前 D56  
 千葉探題宅  
 築前 D62古城



## 25 福岡南部（東）

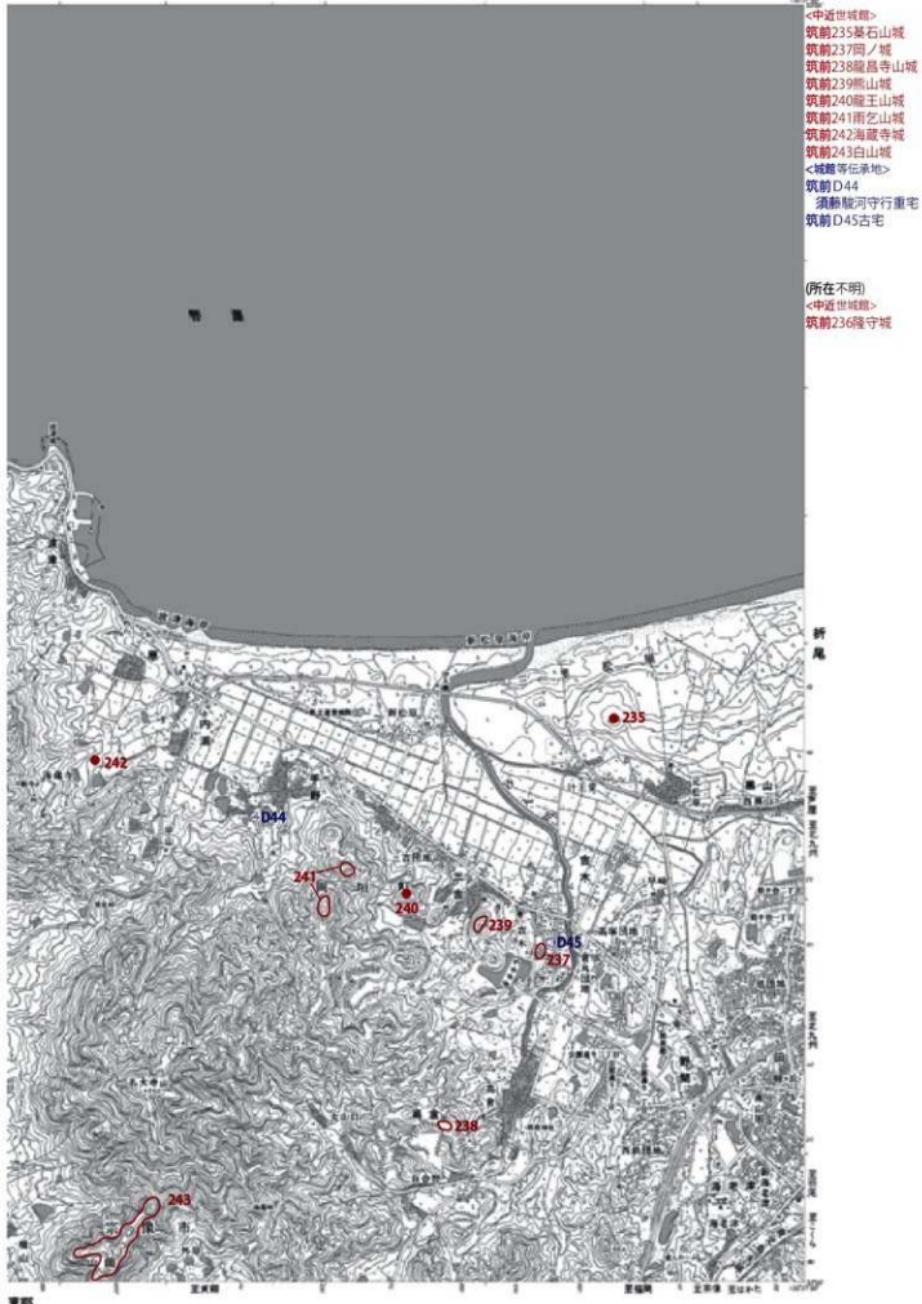


## 26 吉木(西)

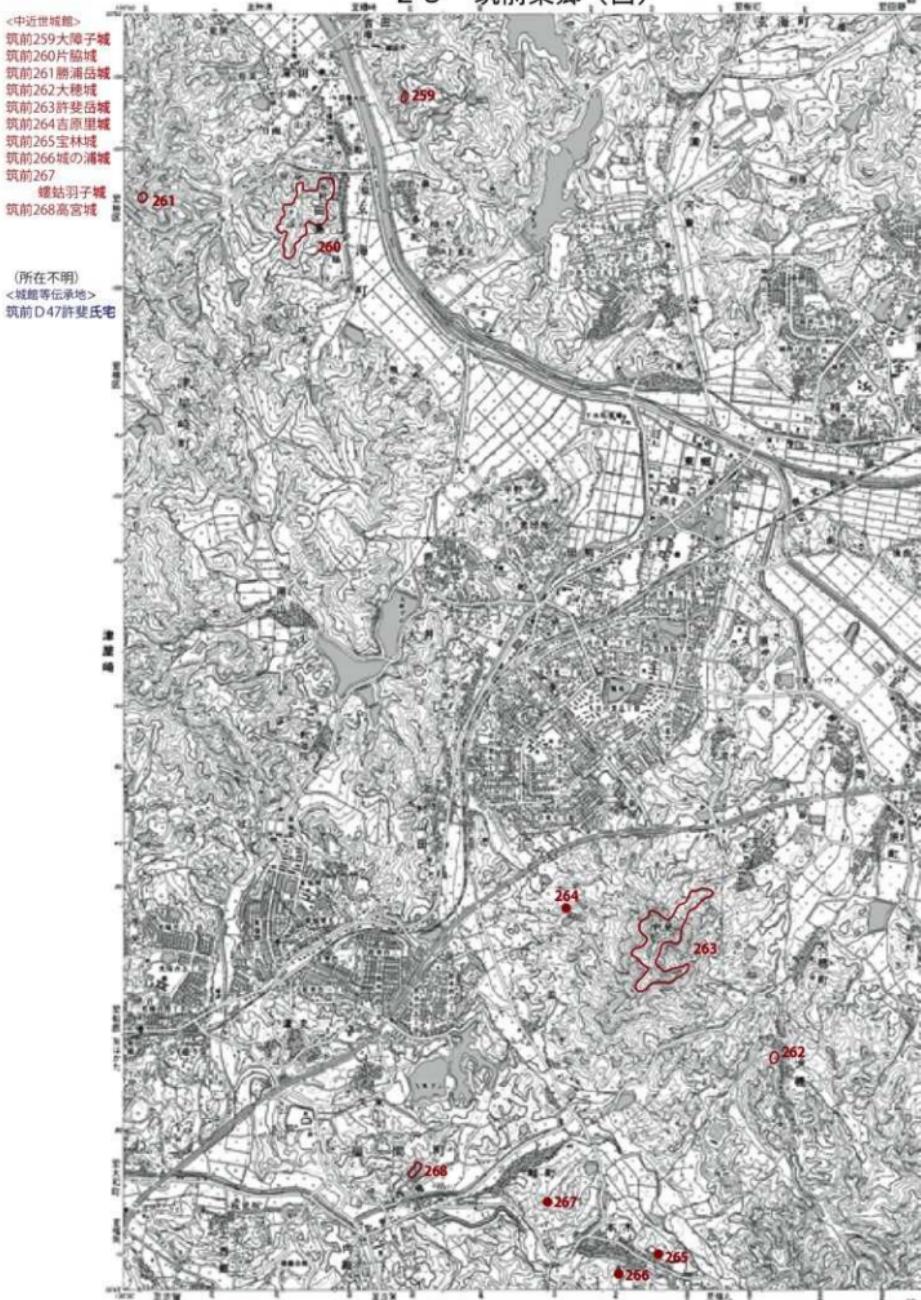
<中近世城館>  
筑前244吉田城



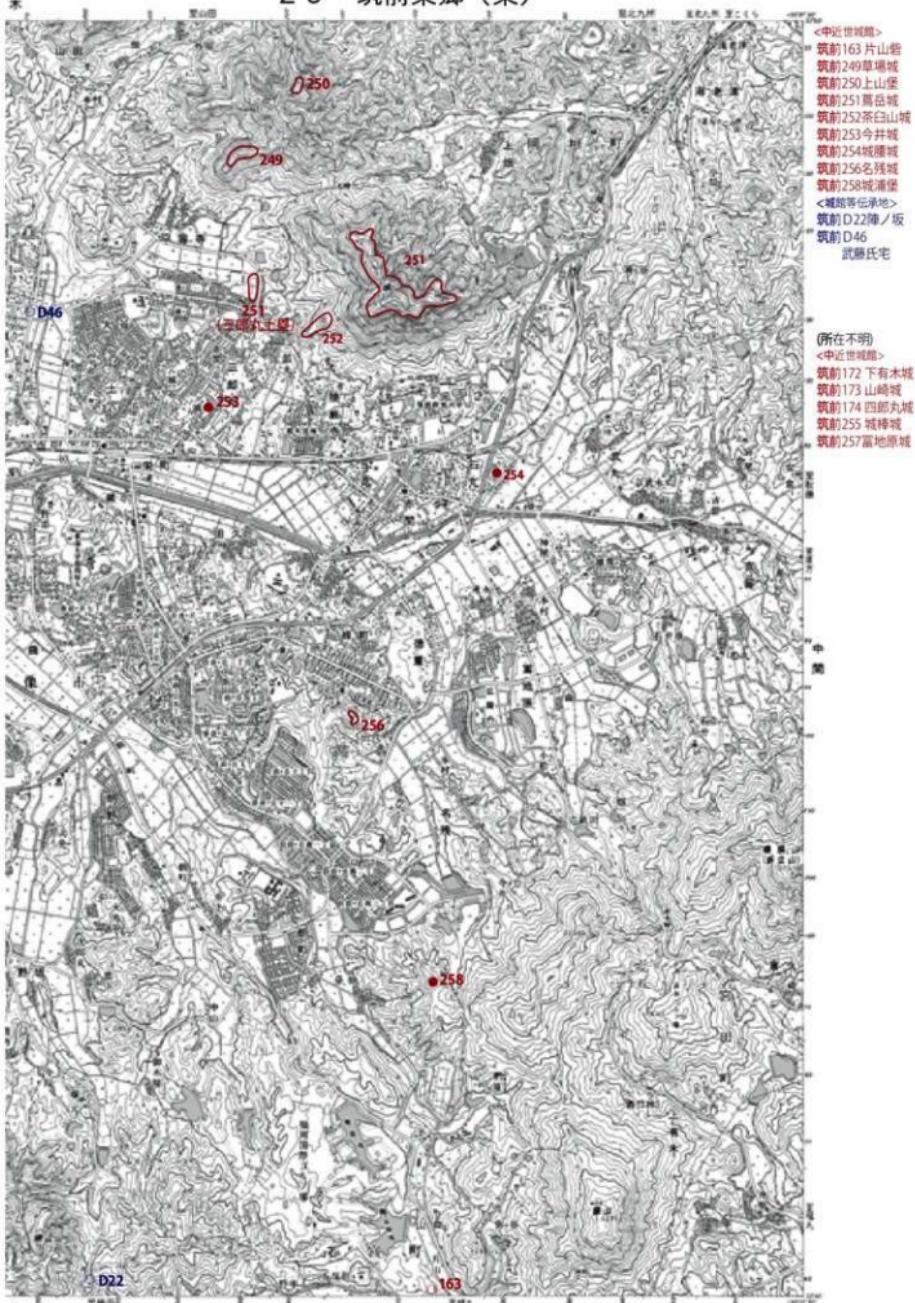
## 27 吉木(東)



## 28 筑前東郷（西）



29 筑前東郷（東）

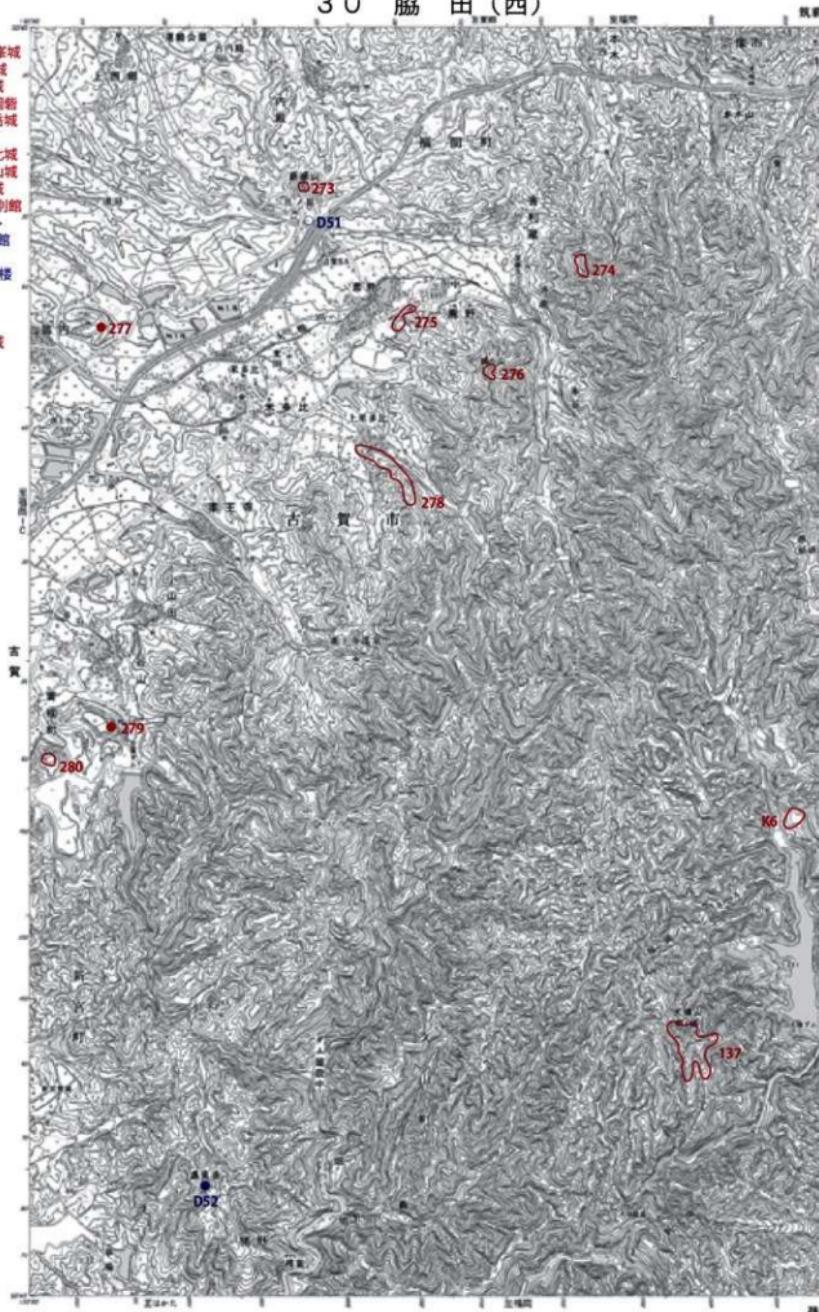


### 30 脇田(西)

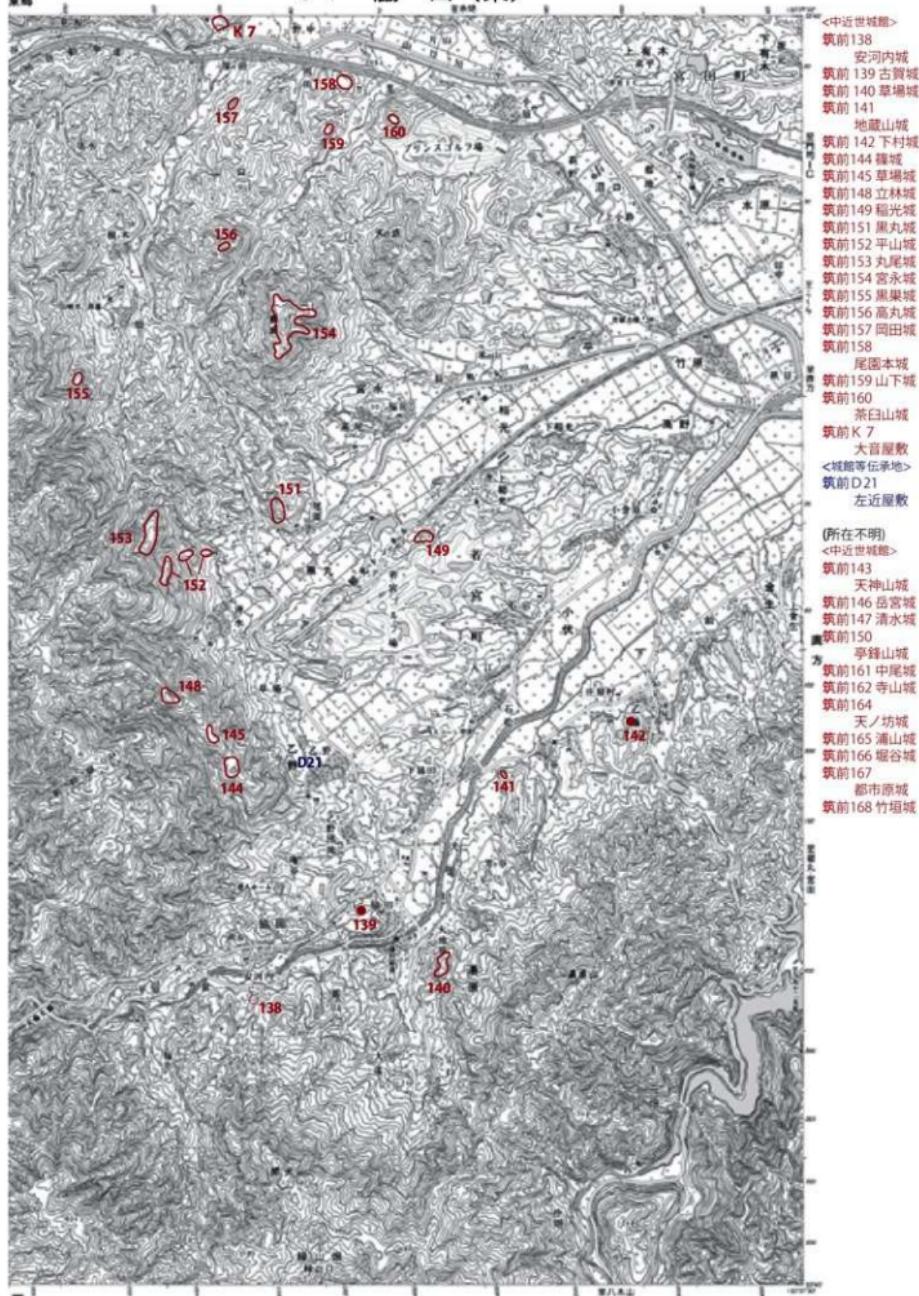
<中世城館>  
 筑前137熊ヶ峯城  
 筑前273飯盛城  
 筑前274鶴岳城  
 筑前275小松岡砦  
 筑前276臼ヶ岳城  
 筑前277鷺城  
 筑前278米多比城  
 筑前279新城山城  
 筑前280四方城  
 筑前K 6犬鳴別館  
 <城館等伝承地>  
 筑前D51園原館  
 筑前D52  
 遠見岳望楼

(所在不明)

<中世城館>  
 筑前289白山城

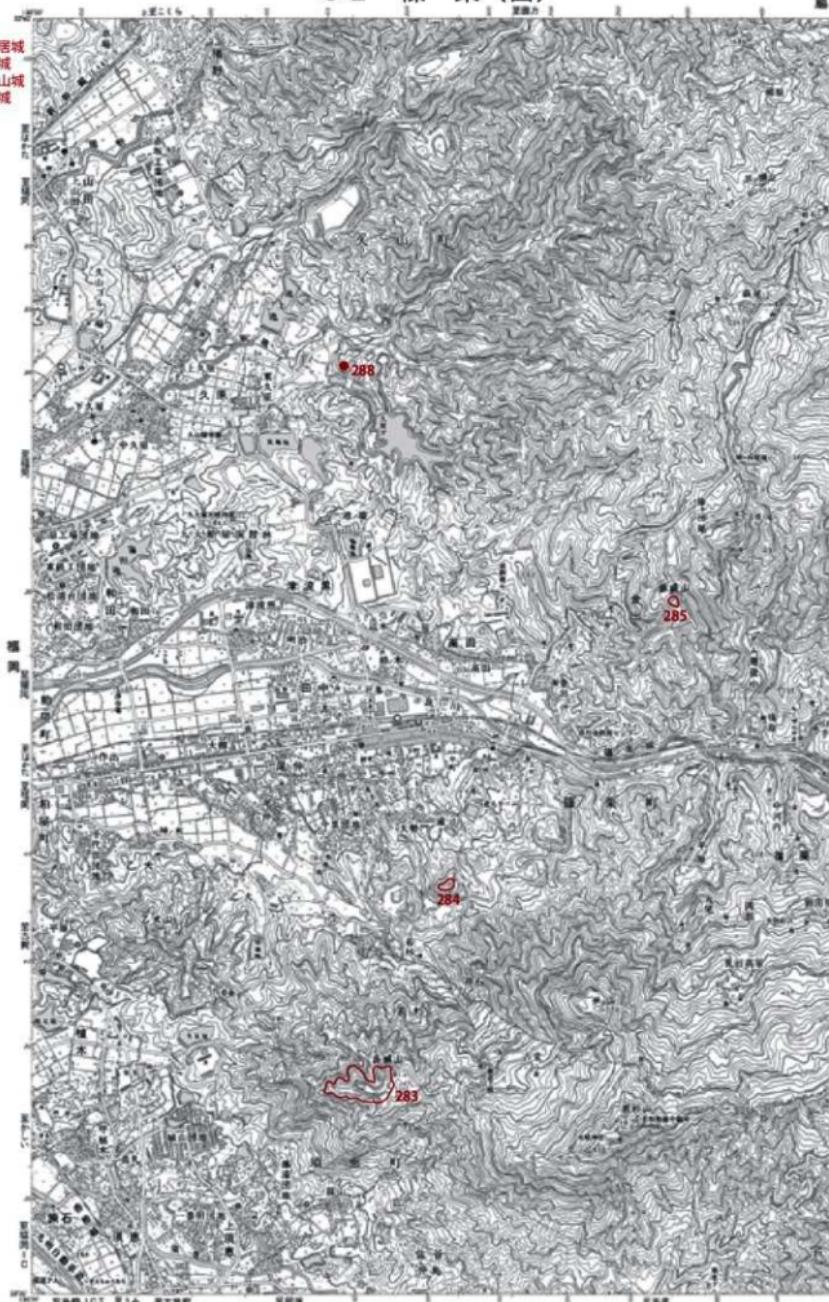


# 31 脇田(東)



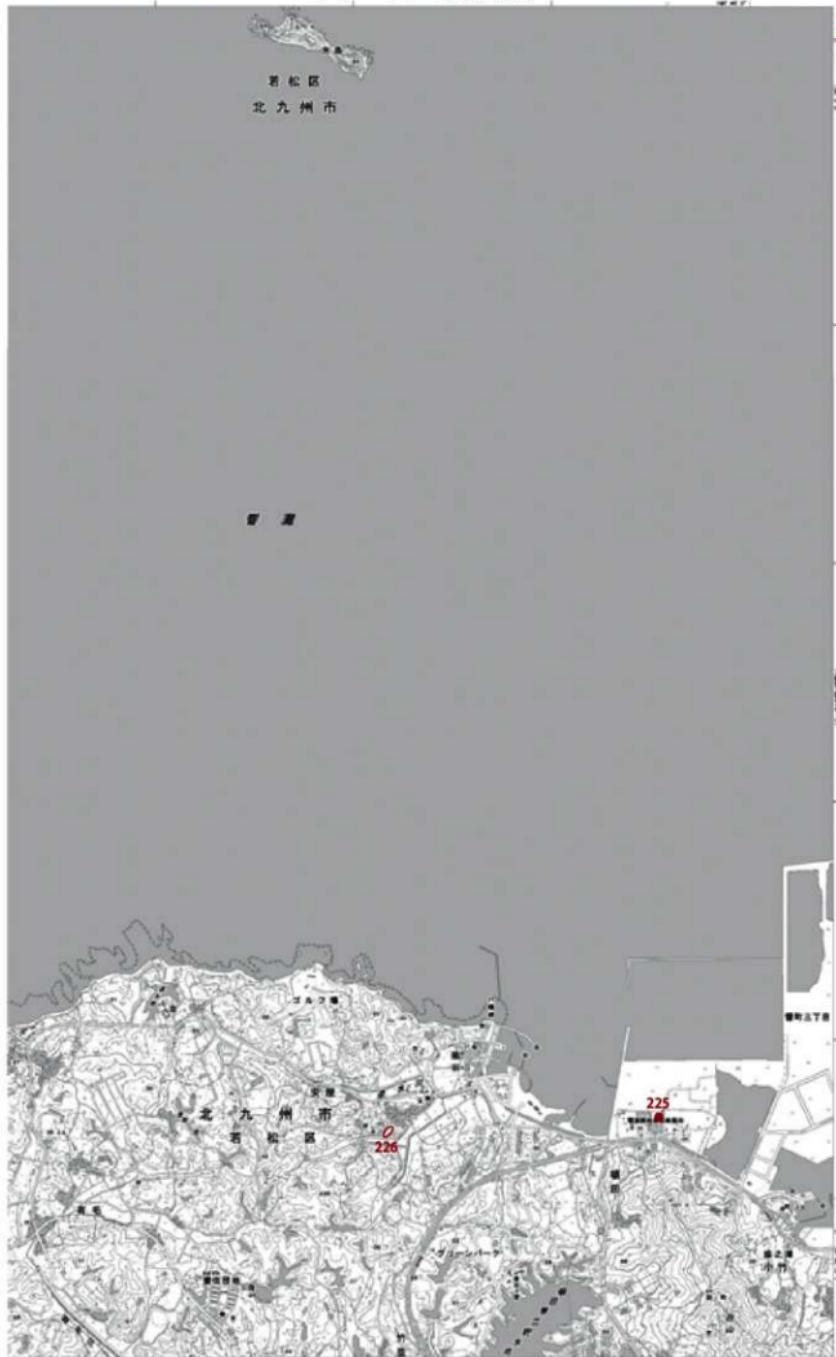
### 32 篠栗(西)

<中世城館>  
筑前283高島居城  
筑前284草葉城  
筑前285飯盛山城  
筑前288丸山城



### 33 岩屋(東)

<中世城館>  
筑前225城／崎岩  
筑前226栗丸城



### 34 太宰府（西）

282 J

<中近世城館>  
筑前282佐谷城

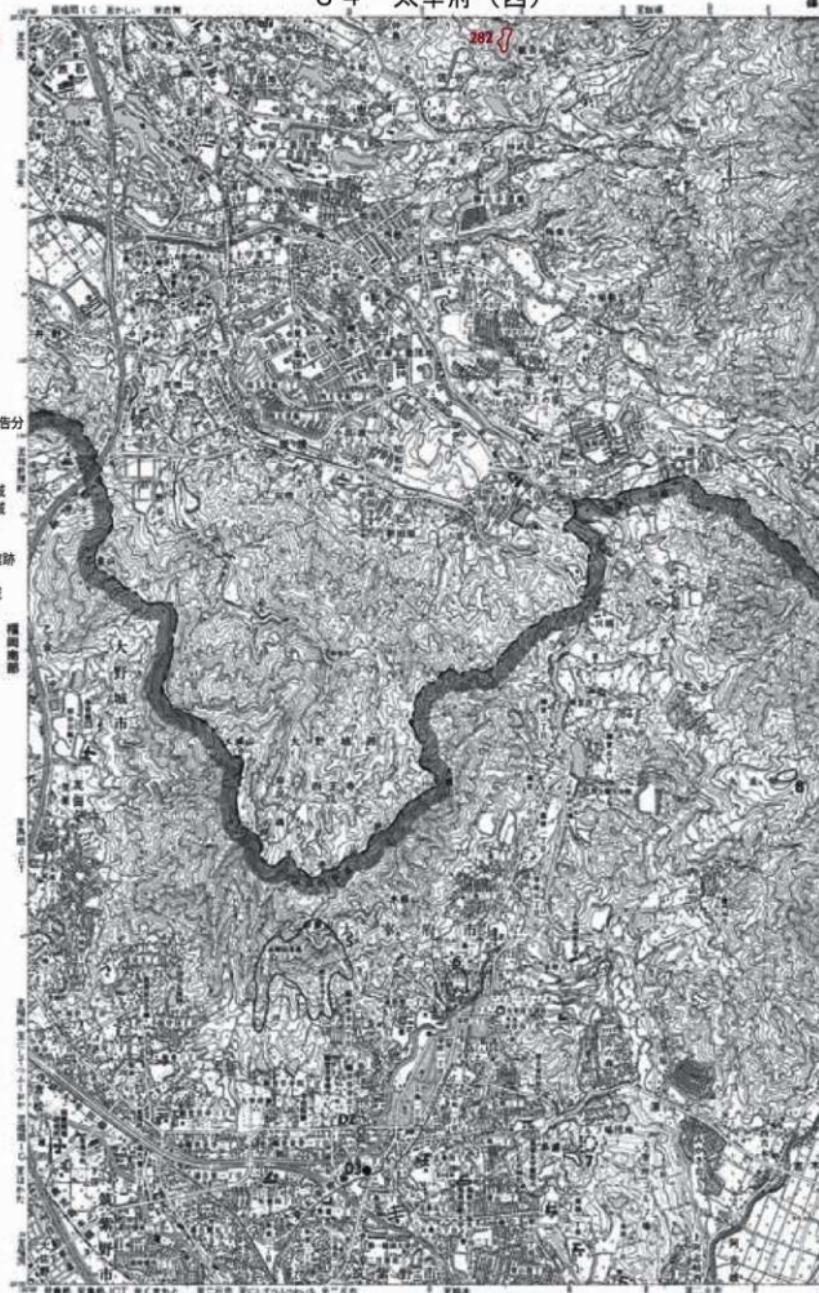
報告書1にて報告分

<中近世城館>  
筑前5 岩屋城  
筑前6 浦ノ城  
筑前7 高尾山城  
筑前8 有智山城  
<城館等伝承地>

筑前D 2

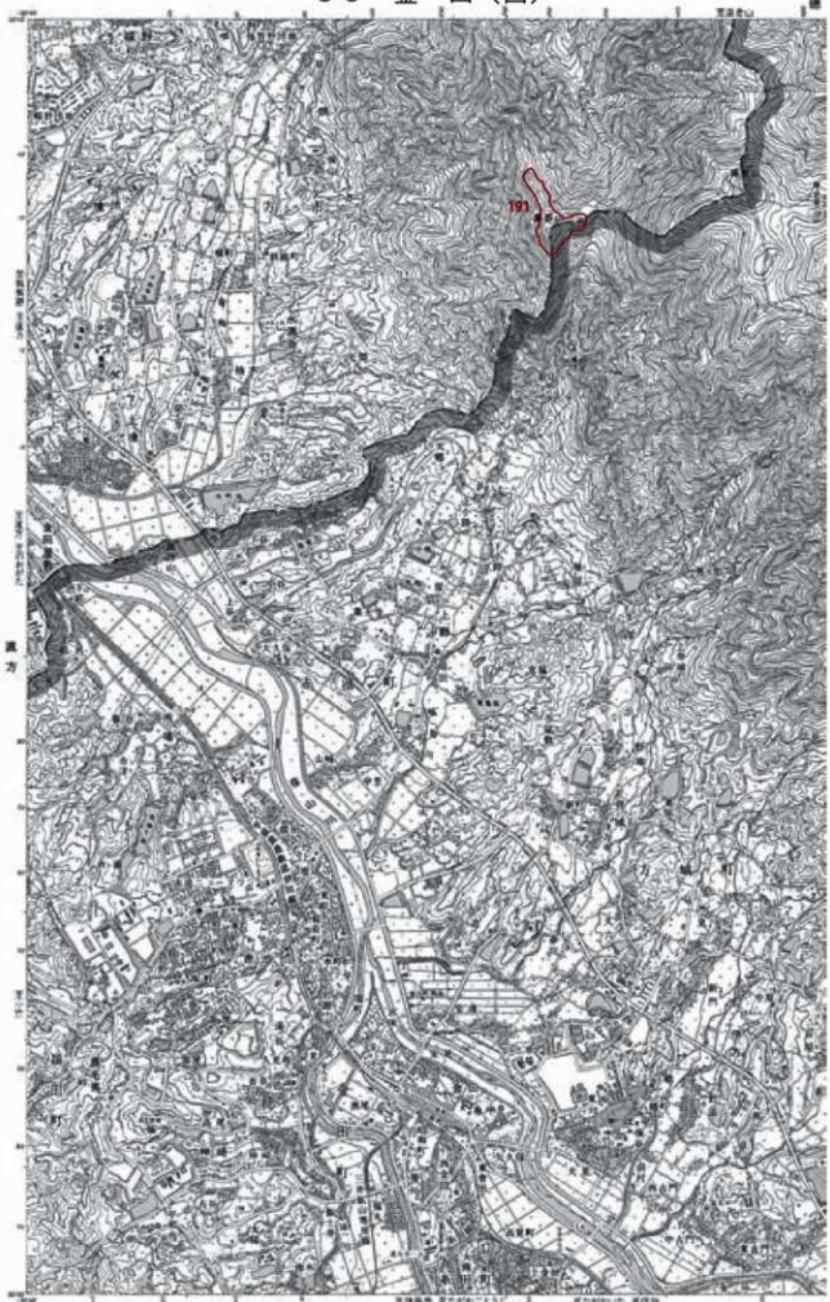
少式氏閥連跡  
筑前D 3  
今川了俊居城

福岡南部



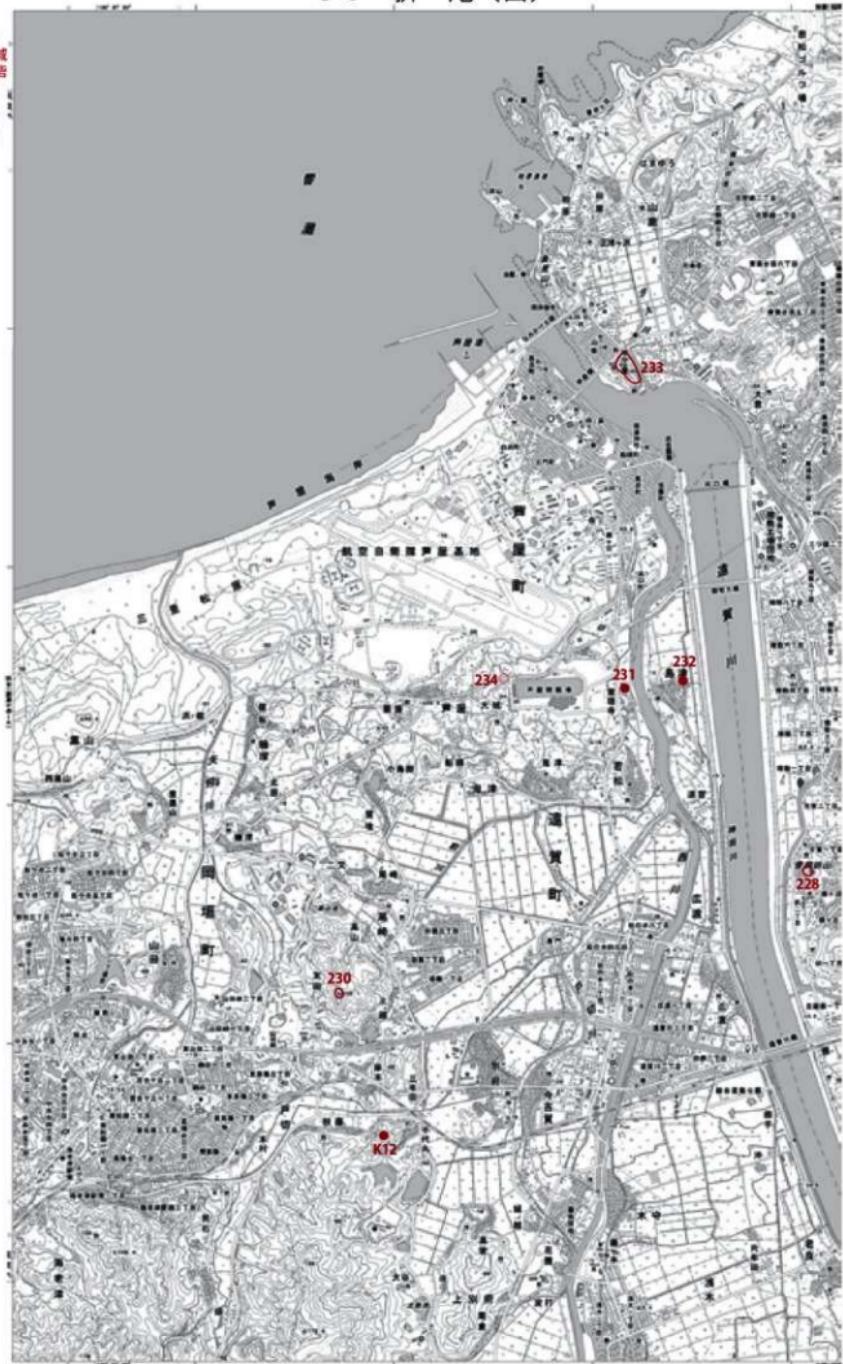
### 35 金田(西)

〈中世城館〉  
筑前191廣取城

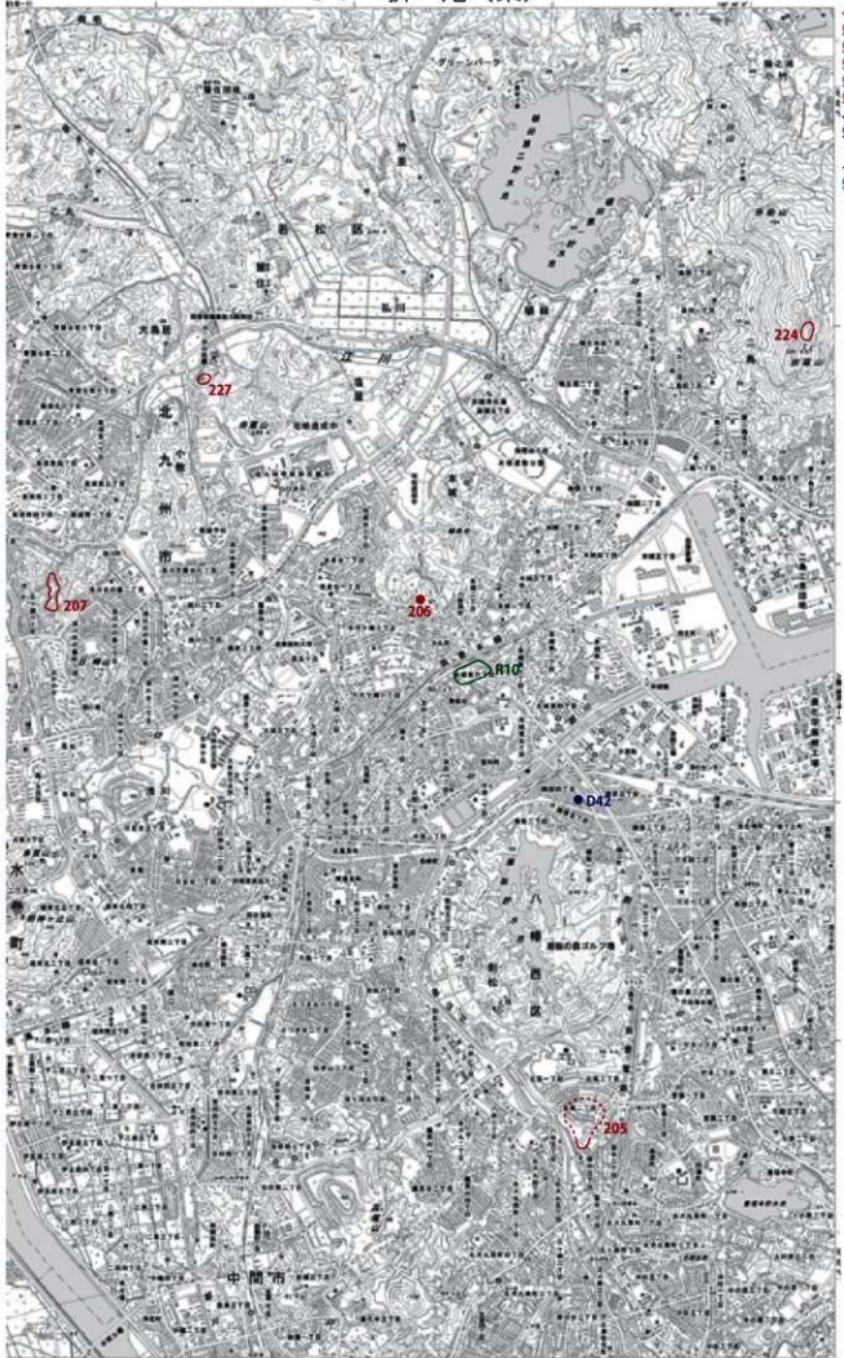


### 36 折尾(西)

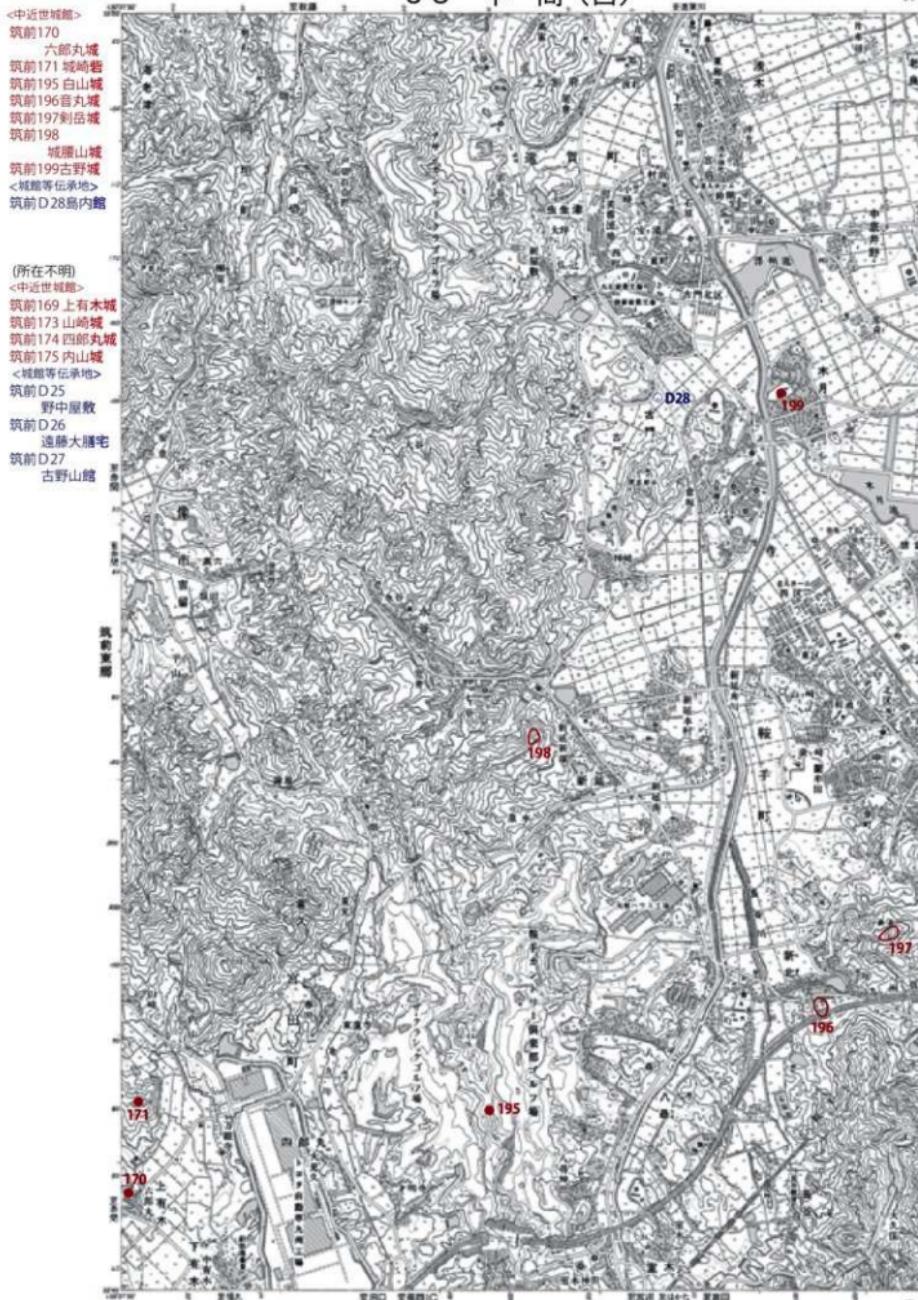
<中世城館>  
筑前228古賀城  
筑前230城之越城  
筑前231マルビ岩  
筑前232五郎城  
筑前233山鹿城  
筑前234大城城  
筑前K12城辻城



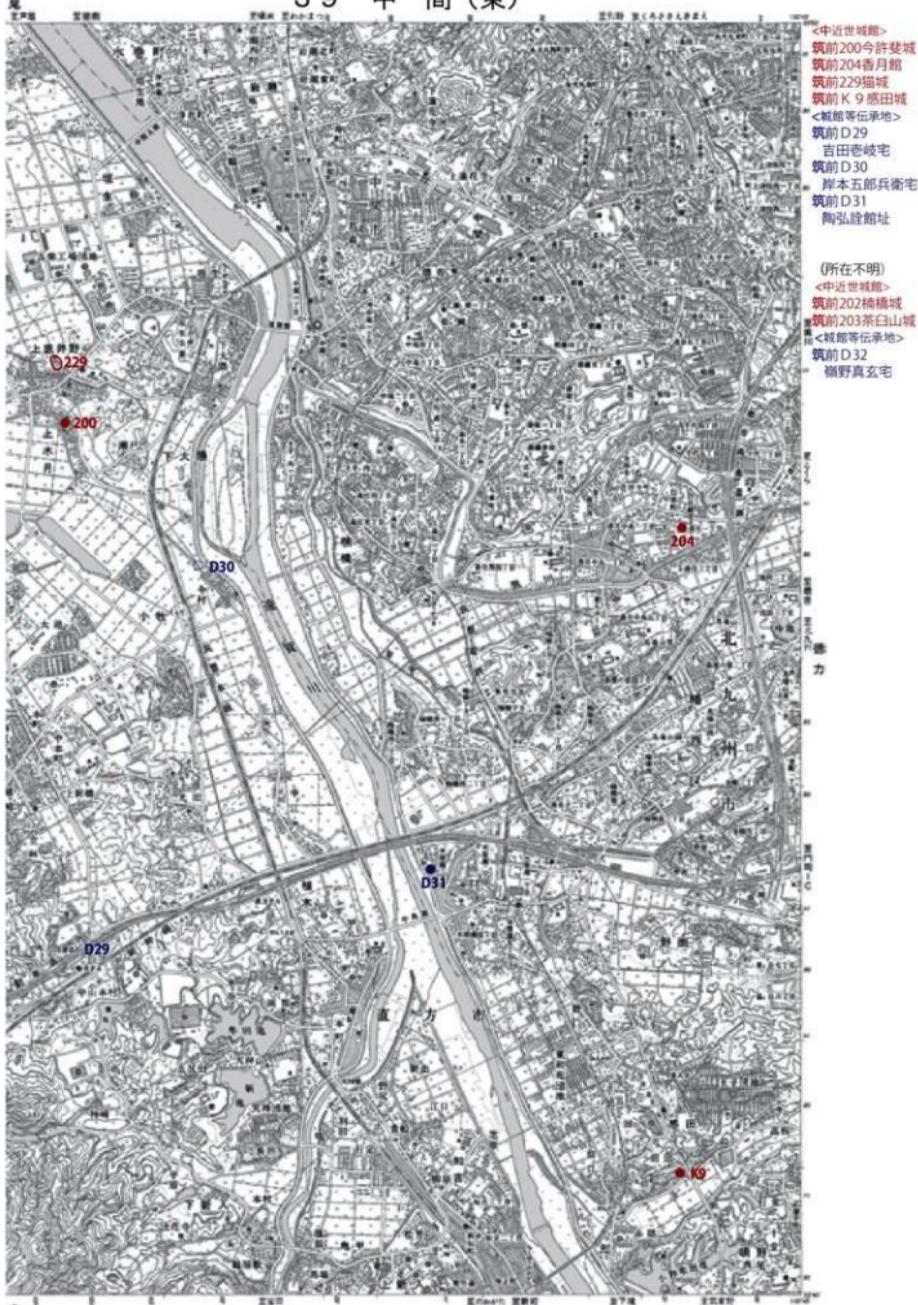
### 37 折尾(東)



### 38 中間（西）



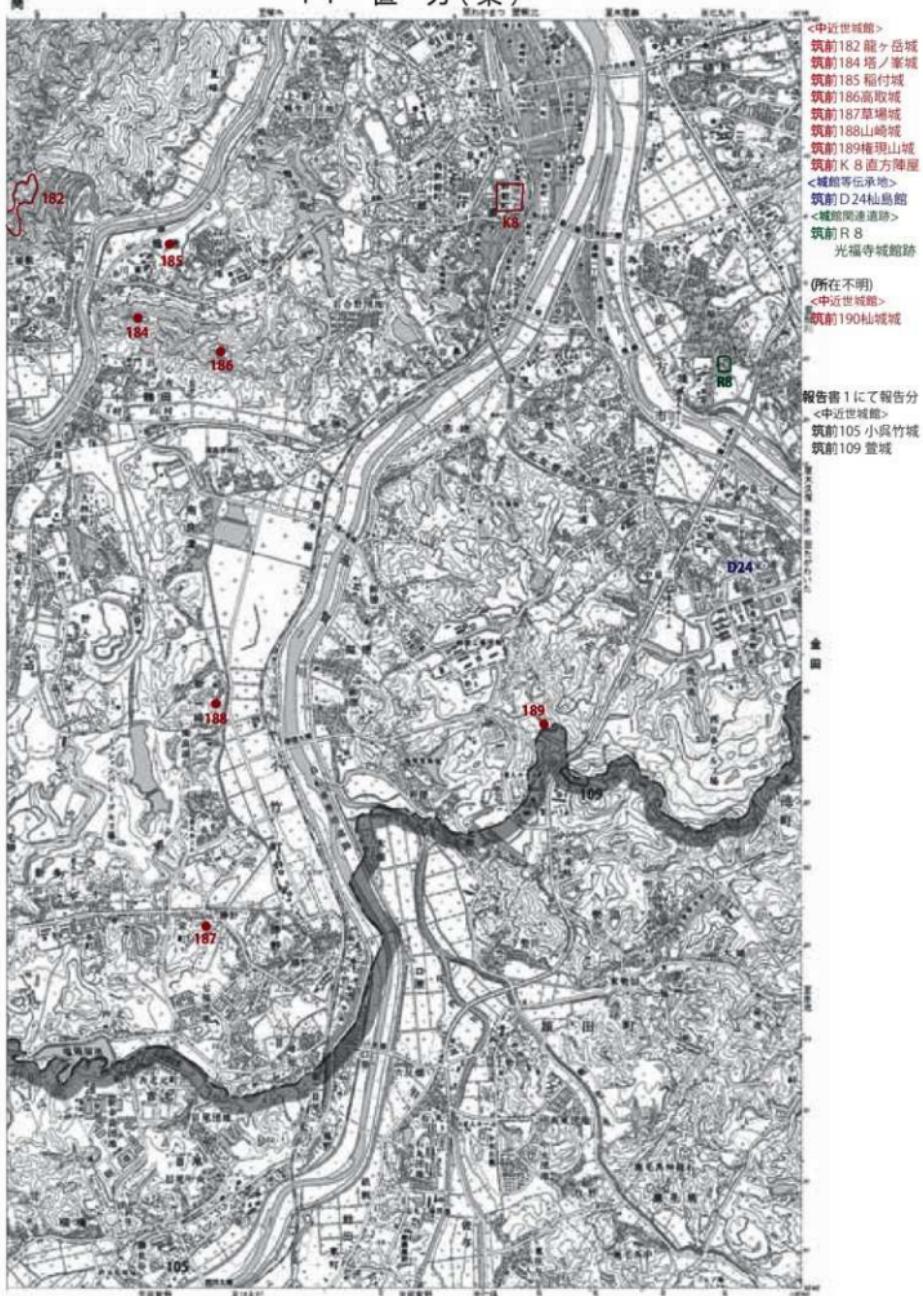
39 中間（東）



# 40 直方(西)



# 41 直方(東)



## 42 八幡(西)

<中近世城館>  
 筑前209馬乗城  
 筑前211竹尾城  
 筑前211市瀬城  
 筑前212別当山城  
 筑前213帆柱山城  
 筑前214鷹見岳城  
 筑前215花尾城  
 筑前216

多良倉丘城

筑前217尾倉城

筑前218茶臼山城

筑前222須田城

筑前223高塔峰城

筑前224房山城

筑前K10黒崎城

<城跡等伝承地>

筑前D34御屋谷

筑前D36内藤陣山

筑前D37

麻生氏臣宅

筑前D39藤村氏宅

筑前D40酒井基陣

筑前D41御屋敷

筑前D43麻生氏宅

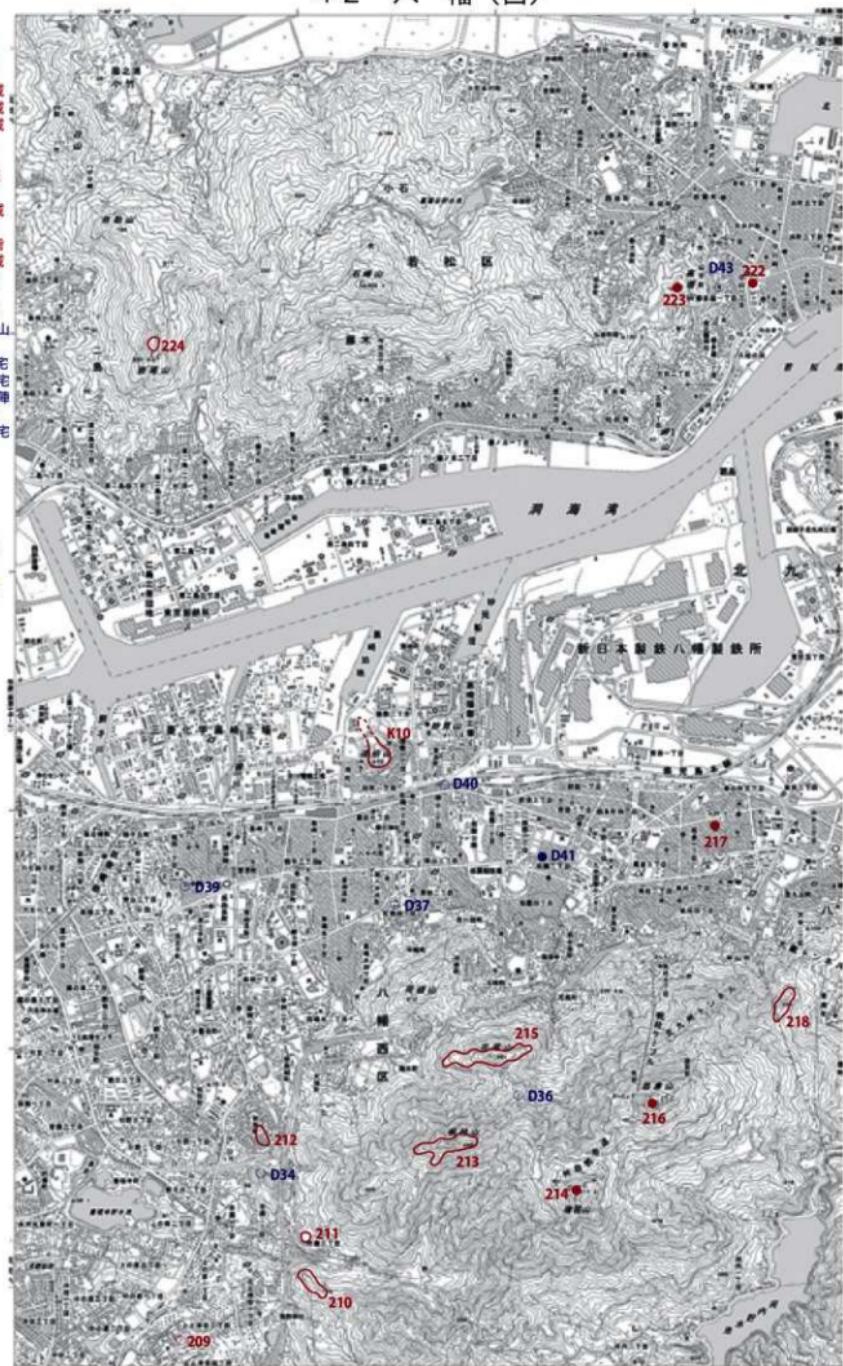
(所在不明)

<城跡等伝承地>

筑前D35古砦跡

筑前D38

井上家臣宅



# 43 八幡(東)

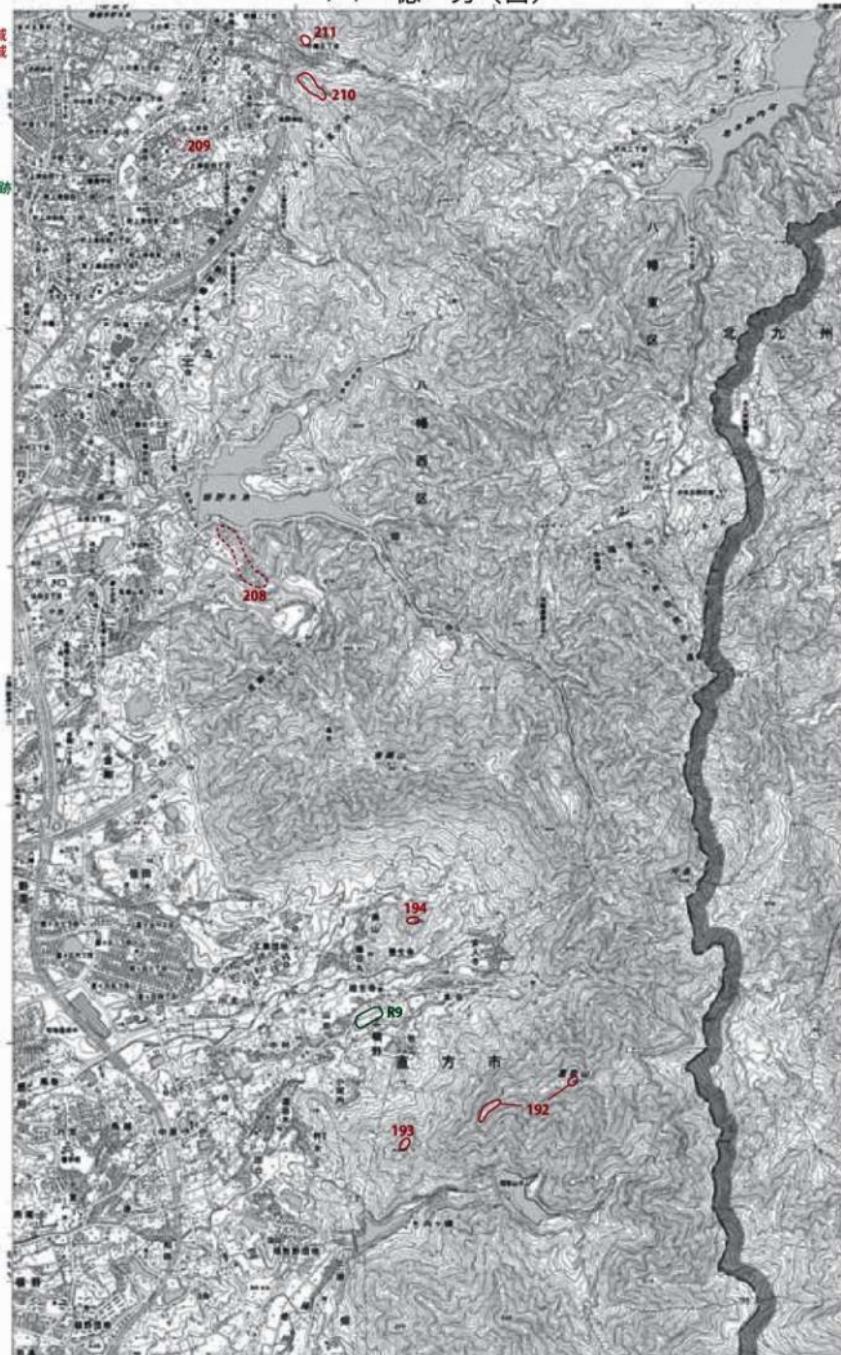


<中近世城館>  
筑前219豫谷城  
筑前221天賀城  
筑前 K11若松城  
(所在不明)  
<中近世城館>  
筑前220戸畠城

## 44 德力(西)

<中近世城館>  
筑前192 雲取山城  
筑前193 山／田城  
筑前194 髪岩  
筑前208 燐城  
筑前209 馬乗城  
筑前210 竹尾城  
筑前211 市瀬城  
<城館関連道路>  
筑前 R 9  
上頓野宮ノ前遺跡

(所在不明)  
<中近世城館>  
筑前201 金剛城  
<城館等伝承地>  
筑前 D 33 隠館



## V 個別城館報告

<凡例>

- 1 本章では、対象地域に分布する個別城館遺跡等の記載を行っている。
- 2 城館跡は、遺跡の分類単位で、なつかつ旧郡単位で収録しており、市町村単位ではない。
- 3 個別城館のタイトルに示した内容は、IVの一覧に準じている。
- 4 文中にある文献番号は、参考文献一覧（44～49ページ）と対応している。また、基本参考文献等の略号は以下のとおりである。
  - ・「本編」…『筑前国続風土記』（貝原益軒著・1629年）
  - ・「附録」…『筑前国続風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著・1798年）
  - ・「拾遺」…『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信著・文政～天保年間（未完））
  - ・「全誌」…『福岡県地理全誌』（白井浅夫ほか著・1875～1880年）
  - ・「種々」…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡県史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936年）
  - ・「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
  - ・「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録 福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）
  - ・「大系」…『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年））
  - ・「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009年）
  - ・「古城図」…『古戦古城之図』（大蔵種周・土井正就ほか筆・国立公文書館蔵）
- ※なお、本書における国立公文書館所蔵の絵図面は断り書きのない限り、全てこの絵図面集を指すものとする。
  - ・「田跡全図」…『太宰府田跡全図』
  - ・「城数之覚」…『筑紫氏城数之覚』（筑紫家文書）
  - ・「覚書」…『天正十五年四月生駒雅楽頭宛城数覚書』
- 5 個別報告文章の項目および内容は以下のとおりである。
  - 【沿革】…城館の位置、および伝承等の来歴を記す。
  - 【概要】…城館の現地の状況及び構造等を記す。
  - 【史料】…文書調査における「一次史料」・「参考史料」の記載の有無を示す。
  - 【参考文献】…参考文献一覧に示した文献の有無を示すもので、文献番号を付した。番号がゴチック体となっているものについては、記載文献に縄張り図・測量図等の調査データが搭載されているものを示す。
- 6 掲載した縄張り図の内、事務局作成分については、作成方法・表記方法等は、『発掘調査のてびき 各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じている。また、遺構名称も上記文献に準じているが、曲輪への出入口を指す用語については「虎口」を用いた。

## 1 中世城館 ①鞍手郡

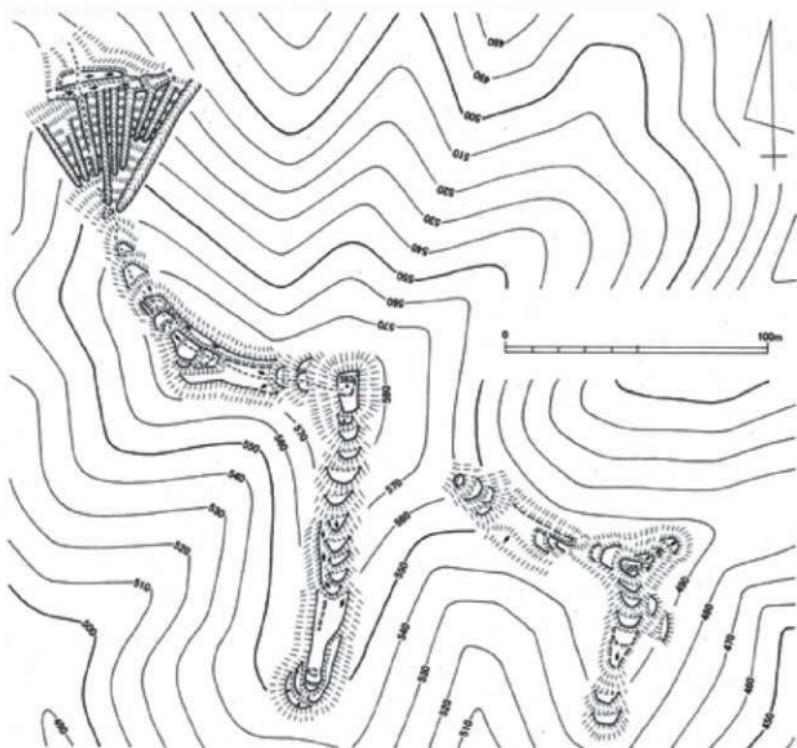
筑前 137 熊ヶ峯城 くまがみねじょう 郡名 鞍手郡 別称 熊ヶ城 図幅名 脇田(西)  
種別 山城 所在 宮若市犬鳴

【沿革】宮若市西部、糟屋郡久山町との境に近い犬鳴山山頂部に位置する。『本編』『附録』『拾遺』『全誌』は城主不詳とするも、『筑前要領』(香月文書)は黒瀬越後守を城代とする。『本編』『拾遺』には、本丸、二の丸のほか、調馬場(馬場(山の東の方))・轡洗(沓洗(山の西の麓))などの地名を記している。

【概要】犬鳴山山頂（標高 583m）に南北約 20m、東



第5図 熊ヶ峯城跡状空堀群



第6図 熊ヶ峯城縄張り図（事務局作成）

西約10mの主郭を置く。主郭は東に若宮の盆地、北西側には立花山をはじめとする糟屋郡を見渡すことのできる適所に位置する。主郭から延びる尾根上に曲輪を階段状に展開する構造を呈する。特に北西側の尾根に小曲輪群を置いたさらに先には、9本からなる畝状空堀群と1本の堀切を設け、厳重に防御している。また、主郭の南側の尾根上や、そこから東に延びる尾根上にも小曲輪群を展開するが、堀切などの防御遺構は見られず、防御性は乏しい。

前述のように黒瀬越後守を城主とする在地の城とも伝えられるが、他の事例に比べて非常に規模が大きく、比高も高く、複数の曲輪から構成されるなど構造も異なっている。『森脇飛騨覚書』(山口県史料中世編)には永禄12年(1569)に毛利勢が立花勢を攻めた際に熊ヶ峯を通過して糟屋方面へ進軍したことが記されており、当地域に見られる在地の小規模城館とは異なり、毛利もしくは大友などの大名勢力の積極的な関与が窺われる。

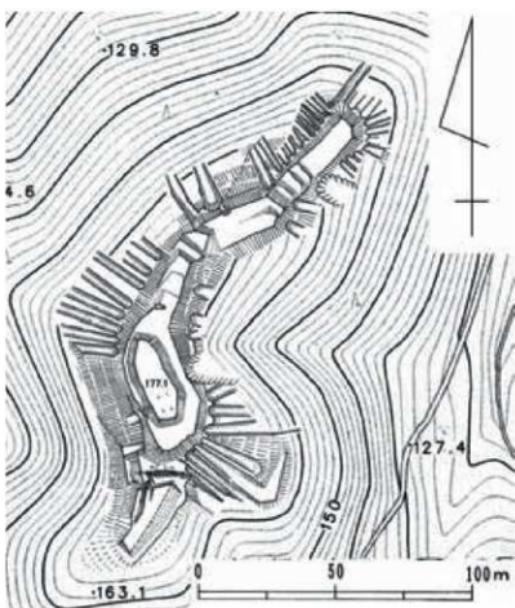
【史料】なし 【参考文献】1~5,7~9,10,11,13,14,20,192

筑前 140 草场城	郡名 鞍手郡 别称 福山城・湯原草場城 図幅名 脇田(東)
	種別 山城 所在 宮若市湯原

【沿革】湯原山の中腹、脇田温泉街の南東側の丘陵上に位置する。『本編』には大内氏、のち秋月種実の配下となった松井修理・越後守秀郷親子を城主とし、宗像氏によって落城されたとする。城下には松井屋敷という常の屋敷があるとされているが、『拾遺』には既にその所在は分からないとしている。また、『筑前要領』(香月文書)には「湯原村艸場城代 松井越後守、同修理亮主子越中丞」と記載がある。

【概要】標高177mの頂部に主郭を置き、その周囲に帯曲輪を巡らす。そして北へ延びる尾根上へ曲輪を階段状に展開しているが、その間は堀切で仕切る。それらの曲輪群の周囲には、約40本近くの畝状空堀群を巡らすと共に、南側は二重の堀切で防御する厳重な構造である。城域は全長約200m近くもあり、規模はやや大きいと言える。

草場城が所在する地は、中世吉川庄が所在する場所であり、大内氏や大友氏が重要視する場所で、吉川庄については多くの古文書が



第7図 草場城(湯原所在)縦張り図(藤野正人氏提供)

残されている。秋月氏、宗像氏を含め、周辺の大名、国人領主層が吉川庄を巡る攻防の中で、様々な勢力に取り立てられた城である可能性が考えられる。

【史料】なし

【参考文献】1～5,7,10,11,13,14,20,192



第8図 草場城（湯原所在）遠景

筑前 141	地蔵山城	郡名 鞍手郡	別称 大村氏宅	図幅名 脇田（東）
		種別 丘城	所在 宮若市湯原	

【沿革】宮若市湯原の北、中世以来の古刹、東禅寺の西にあたる字「大城」と呼ばれる尾根の突端部に位置する。江戸時代の地誌類には一切見られず、「地蔵山城」としての初出は『鞍手郡郷土史』（文献 14）掲載の「城趾（とりで）古戦場分布図」であるが、『全誌』には「大村氏宅址」として、「村ノ北五町ニアリ。今大城ト云。大村讃岐守、同弟因幡守居住ノ地ト云。」とあり、地蔵山城を指しているとみられる。

また、『福岡県の城』には、宗像氏の端城として音藤四郎が天文年間の城主であるとしているが、これは下村城（筑前 142）の事を指しているとみられる。

【概要】湯原山から北へ派生する尾根の突端の頂部（標高 82m）に位置する。径約 20m の主郭とその周囲に帯曲輪を巡らす構造で、南側の尾根続きには、深さ 4m の大きな堀切を設け、南側からの侵入を遮断する。堀切より南側や周囲の斜面は後世の畑造成による平坦面が多数みられ、城郭遺構かどうかの判断は困難である。

現在、主郭の平坦面上には寛延 2 年（1749）の銘のある地蔵石像や弘法大師石像が置かれており、これが「地蔵山」の名の由来とみられる。

なお、主郭部はその形状や立地から大型円墳を利用した可能性も考えられているが、不確定である。

【史料】なし

【参考文献】4,10,11,14



第9図 地蔵山城遠景



第10図 地蔵山城縄張り図（事務局作成）

筑前 144 篠城 しのんじょう	郡名 鞍手郡 種別 山城	別称 篠崎城 所在 宮若市乙野	図幅名 脇田（東）
---------------------	-----------------	--------------------	-----------

【沿革】犬鳴山の東、乙野集落の西側の尾根上に位置する。『拾遺』には茶臼山ともいい、清水某が居したとしている。一方、『筑前要領』（香月文書）には「乙野村篠ノ城代 毛利左衛門」と記載されるが、『鞍手郡誌』（文献 13）「吉川村」には、「篠か城址」として、「村の西十町山上にあり廣一反許 井上源五左衛門と云士の居城なりと云」とあり、『全誌』も同様の記載をとる。このように文献によって城主は全く異なる。

【概要】西山（標高 644m）から南へ派生する同一の尾根上には、北から立林城、（乙野）草場城、篠城が立地する。これらの内、篠城は最も低い場所に位置する。

篠城の縄張りは曲輪が明確ではなく、城内の最高所（標高 312m）には曲輪としてもよさそうな平坦面がいくつか見られるが、それ自体が土壘の役割とも見ることができ、単体の城としての主体がどこを想定すればよいのか不明確である。全体的には大型の堀切とそれに伴う土壘状の高まりによって、尾根上の進攻を妨げようとする意図が読み取れる。

篠城の北約 150m 地点には草場城（筑前 145）があり、両者の関係は密接で、場合によっては草場城防衛のために設けられた防御遺構とも考えられる。

【史料】なし

【参考文献】1 ~ 5.7 ~ 9.10.11.13.14.20.192



第 11 図 篠城（城内最高所の曲輪）

筑前 145 草場城 くさばじょう	郡名 鞍手郡 種別 山城	別称 乙野草場城 所在 宮若市乙野	図幅名 脇田（東）
----------------------	-----------------	----------------------	-----------

【沿革】篠城（筑前 144）から尾根上を北へ約 150m 上がった箇所に位置する。『筑前要領』（香月文書）には乙野村の内として「艸場城 藤豊後守」と記載したものがこの城郭を指しているものと推測される。文献 20 では『拾遺』記載の立林の古城跡をこの城としているが、それは立林城（筑前 148）を指す。

【概要】標高 353m を最高所とし南北約 20m、東西約 10m 規模の曲輪を置き、周囲を土壘、堀切、横堀、帶曲輪を巡らす。また、堀切を挟んで南側にもほぼ同じ標高の位置に、約 20m 四方の曲輪を設け、東側から

南側にかけて帶曲輪、横堀とそれに伴って竪堀を施しており、厳重な防御の様子を見ることができる。草場城から北へ約 400 ~ 500m さらに上ると、立林城が立地しており、篠城と合わせ、乙野や黒丸一帯の小領主が、それぞれ尾根の頂部に小規模城館を築いていた様子を窺うことができる。

【史料】なし

【参考文献】8.9.11.13.14.20.192



第 12 図 草場城（乙野所在）横堀  
(横堀部分に水が溜っている)



第13図 篠城・(乙野)草場城縄張り図(事務局作成)

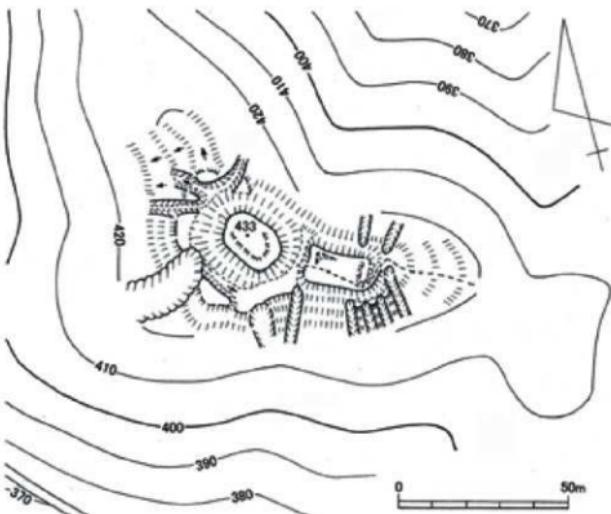
筑前 148 立林城

郡名 鞍手郡  
種別 山城

別称 なし  
所在 宮若市黒丸

図幅名 臨田(東)

【沿革】草場城（筑前 145）から北へ尾根上を約400～500m上った頂部に位置する。この場所の小字は「立林」であり、『拾遺』「黒丸古城」の記載中に「又平山立林の両所にも古城址有。いずれも安永氏が端城と云。立林の古城は犬鳴山の裏続きの別峯にて此邊古城址の内にて最も高し」とあり、この立林所在の城跡がここに当たると考えられ、実際周辺で確認されている城郭の中



第14図 立林城縄張り図（事務局作成）

で最高所に位置することとも合致する。

【概要】古刹清水寺の西側背後、標高433mの頂部に径15～20mの楕円形の主郭を置き、南北の尾根上は堀切で防御する。南西側は帯曲輪を巡らすが一部堀状となっている。南東側の堀切を挟んで東側にも曲輪を置くが、一部に土塁で囲まれた痕跡を見出すことができる。また、その曲輪の東側は土塁を伴う屈曲した虎口が構えられ、併せて6本の歓状空堀群で防御している。

『拾遺』の記載を信用すれば黒丸城の安永氏の詰めの城とも解釈できるが、近傍の尾根伝いには乙野の草場城や篠城があり、それらとも連携しながら存在していたことが推測される。

【史料】なし 【参考文献】3.4

筑前 149 稲光城

郡名 鞍手郡  
種別 丘城

別称 城山城・稻次城・小伏城  
所在 宮若市稻光・小伏

図幅名 臨田(東)

【沿革】稲光と小伏との境、現在若宮ゴルフクラブが所在する場所の北側の低丘陵頂部に位置する。『本編』「小金原」には、天正10年(1582)11月の小金原合戦において、立花方が合戦前に休息した「稲光の城山」が記載されている。また、『拾遺』「小金原古戰場」には「里民は古城と云る地也。」となり隣接する「鎧場の松」なども紹介する。また、『全誌』の稲光村の項には「城山城」として「宗像氏の臣、井原九郎と云者守れりと云。旧記に稲次城ともあり。」とする一方で、小伏村の項にも、



第15図 稲光城縄張り図(事務局作成)

「古城址」として「古城」にあり、曲輪のある山上の西方に堀切の跡が残るとしており、ともにこの稲光城を示している。

**【概要】**稲光と小伏との境は標高 100m 前後の低丘陵が細長く伸びているが、稲光城はその頂部のうちの一つ標高 114m 地点に位置する。給水塔により削平を受けていて詳細な規模は不明であるが、東西約 50m、南北約 20m の範囲内に曲輪は収まり、その西側の尾根上に堀切 2 本を設け、防御する構造をとる。恐らく単郭か 2 ~ 3 の曲輪からなる小規模城館と推測される。

**【史料】**なし **【参考文献】**3,4,8 ~ 11,13,14,20,192



第16図 稲光城遠景



第17図 稲光城堀切

筑前 151	くろまるじょう 黒丸城
--------	----------------

郡名 鞍手郡
--------

別称 古賀宗城
---------

図幅名 脇田(東)
-----------

種別 山城
-------

所在 宮若市黒丸
----------

**【沿革】**黒丸集落の北、標高 171m の丘陵上に位置する。現在も「城ノ脇」の小字を残す。『本編』には太宰少弐の端城として安永釈太郎を城主とする。『拾遺』には、安永但馬守重勝が築城し、以下五代にわたっての城主が記され、村内に安永釈太郎の墓の存在なども伝えている。『筑前要領』(香

月文書)では「黒丸村黒丸城代安永越中守子糸太郎」と記す。

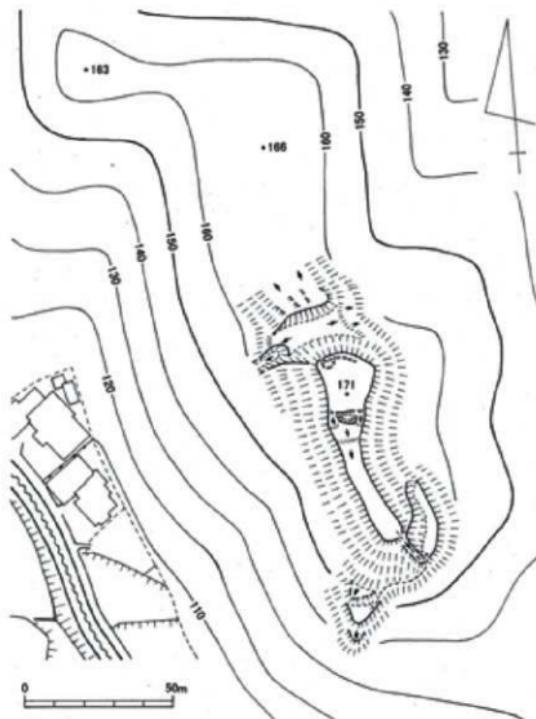
『全誌』は「本村の内、古賀宗にあり。」としている。また、『城郭』では天文12年(1543)

3月20日に大内義隆家臣で長門国守護代内藤興盛は勝間田盛保に対し、筑前国若宮庄黒丸郷の十石足地を与えており、黒丸と勝間田氏の関係が窺われるとしているが、黒丸城との関係の有無は不明である。

【概要】黒丸集落背後の標高171m地点の頂部に約25m四方の主郭を置き、その北側に残存高0.5mにも満たない土塁が残る。その北側は幅10m、深さ10mにも及ぶ大規模な堀切を設けて城域を大胆に区切っている。そのため、それより北側にも自然の平坦地形は継続するが、城域には含めず放置される。『福岡県の城』や『城郭』では主郭北側の標高163m、166mの頂部地点も曲輪が広がるところが、その一帯は基本的に人工的な造成は確認できない。

主郭の南側は、堀状の窪みを挟んで南北50mを越える細長い曲輪を置く。そしてその南東側と南側の尾根上に小規模な曲輪をいくつか設置している。近隣の小規模城館よりはやや規模が大きいと言えよう。

【史料】なし 【参考文献】1～5,7～9,10,11,13,14,20,192



第18図 黒丸城縄張り図（事務局作成）



第19図 黒丸城遠景



第20図 黒丸城堀切（南側部分・左上が主郭）

筑前 152	ひらやまじょう 平山城	郡名 鞍手郡 種別 丘城・山城	別称 六社八幡城 所在 宮若市黒丸	図幅名 脇田（東）
--------	----------------	--------------------	----------------------	-----------

【沿革】清水寺の北、江戸時代初期に焼亡したと伝える平山寺跡の谷の北側には、応神天皇、神功皇后を初めとする六柱の祭神を祀る六社八幡宮があるが、その西側の尾根上には三箇所の城郭遺構が存在する。『拾遺』「黒丸古城」には、「又立林平山の両所にも古城址有。」とし、黒丸城主の安永氏の端城と記載する。また『全誌』にも「平山城跡」としてほぼ同様の記載がなされる。現在平山城と伝える正確な場所は不明であるが、ここに報告する複数の城郭遺構は、平山寺跡に近いため、丸尾城（筑前 153）も含めて、これらのいずれかが平山城とみられるが、断定できないため、ここではこれらを一括して平山城として報告する。

【概要】六社八幡宮から西へ上る尾根上、標高 193m、237m、313m 地点にそれぞれ城郭遺構が確認できる（図中 I ~ III）。もっとも標高の低い I は、六社八幡宮社殿のすぐ裏側に当たる。長さ 20m にも満たない規模の略方形の曲輪が 2 つ並列する構造で、西側の曲輪には土塁も確認することができる。それらの曲輪の間を堀切で区切り、曲輪群の周囲は堀切、もしくは横堀、帯曲輪を巡らす。全長約 70m の規模である。文献 20 では I が平山城に当たると推測している。

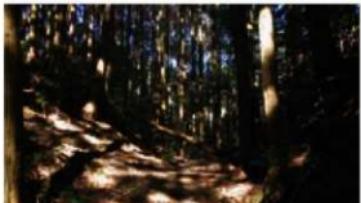
I からさらに尾根を西へ約 100m 上ると II の曲輪群にたどり着くが、I と II の間は自然地形である。II は一辺約 10m の曲輪 A を中心に B・C の曲輪が西へ延び、その西側に深さ 2m の堀切を設け上方からの防御に備える。A ~ C の曲輪の南側には階段状に平坦面が続いているが、後世の畠や植林などの際の造成面とみられ、城郭遺構をどれほど反映しているかは不明である。

II の曲輪群からさらに西方、約 150m 地点に至ると、南北に細長く伸びる尾根に行き当たるが、その尾根の標高 313m 地点を中心として III の曲輪群が築かれる。III の主郭は南北 30m、東西約 15m の楕円形を呈し、周囲は高さ 6 ~ 7m と傾斜がきつく高い切岸で防御する。北と南の尾根続きは堀切で分断し、東西両側は幅の広い帯曲輪を巡らせている。特に南側は堀切を 3 本築いている。また東側の帯曲輪の縁辺部には一部土壘状の高まりなども見られる。主郭の北側にも、南北に細長い曲輪を置き、帯曲輪を巡らしている。最北部には方形の平坦面があるが、城郭に伴うものか否かは検討を要する。全長 100m を超え、I ~ III の中の曲輪群では最も大きい。

このように、同一の尾根に I ~ III の曲輪群が見られるが、規模こそ大小あるものの、曲輪の周囲に帯曲輪、堀切を巡らせる構造は同じであり、若宮地域通有の在地の城館の在り方に近いと言えよう。

【史料】なし

【参考文献】3,4,11,20,192

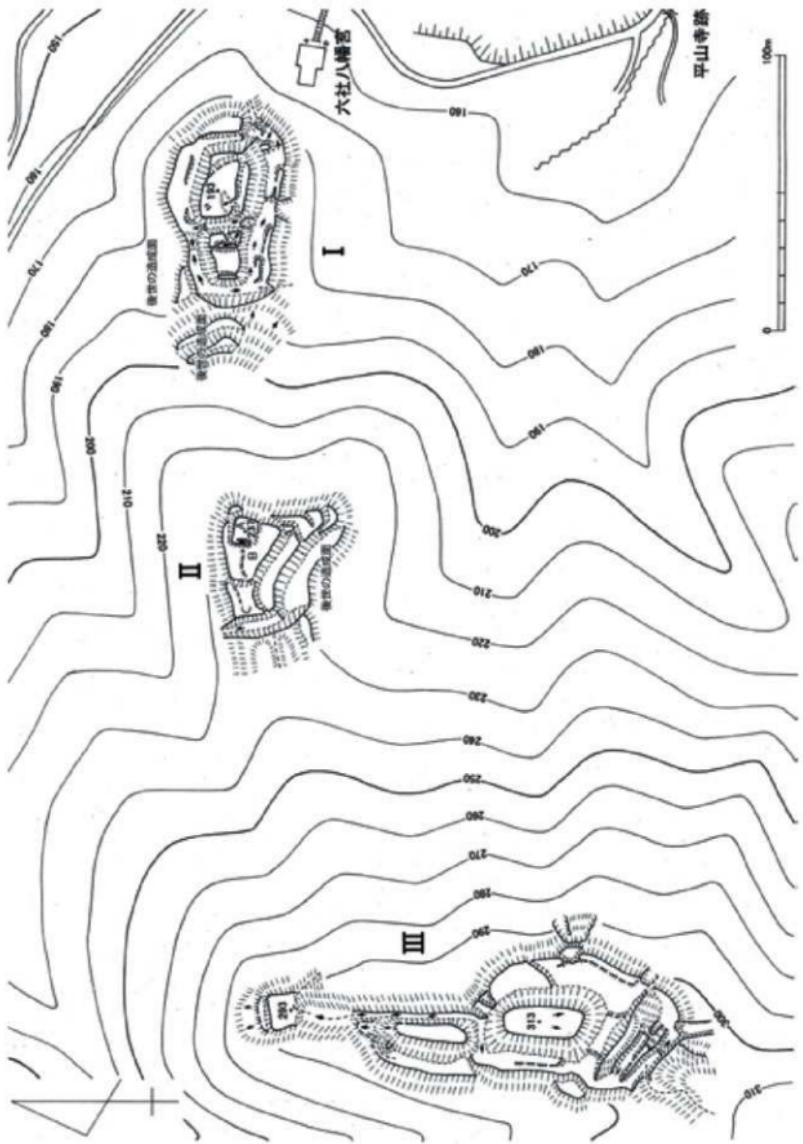


第 21 図 平山城曲輪群 I の堀切



第 22 図 平山城曲輪群 III の帯曲輪

第23図 平山城縮張り図（事務局作成）



筑前 153 まるおじょう  
丸尾城

郡名 鞍手郡 別称 黒丸丸尾城  
種別 山城 所在 宮若市黒丸・山口

図幅名 脇田(東)

【沿革】宮若市黒丸、平山城の北、標高 326m の尾根の頂部に位置する。現地からは若宮の盆地を見渡すことができる。

電力会社の鉄塔建設に伴う発掘調査の際に、新たに発見された城郭で、地誌類等に記載は見られない。調査の際には大字名称と小字名称を探り、「黒丸丸尾城」としているが、ここでは小字名のみで「丸尾城」とする。しかし、厳密には小字名は「丸尾」ではなく、「蛇谷」のようであり、また西側半分は大字山口にあたるため、名称については今後検討を要する。

【概要】南北約 50m、東西約 30m のやや大きめの平坦面を主郭とし、周囲に帯曲輪ともなる細長い平坦面を巡らし、東側には土壘状の高まりを持ち、南側の尾根続きは堀切で遮断する。堀切遺構等があるため、城郭遺構とみなすことには問題ないが、主郭に隣接して方形平坦面などが見られたり、焼土坑、集石遺構があり、各所で平安時代の須恵器や土師器、さらには室町時代の高麗の象嵌青磁なども出土しており、明らかに城郭が築かれる以前に祭祀場等、城郭以外の遺跡がこの場所に存在したことを示している。城郭以外の機能として使用されていた場所に、戦国時代になって城郭が築かれたと考えるのが妥当であろう。

現在現地には電力鉄塔が建ち、平坦面部分は不明瞭となっているが、堀切は良好に残存している。

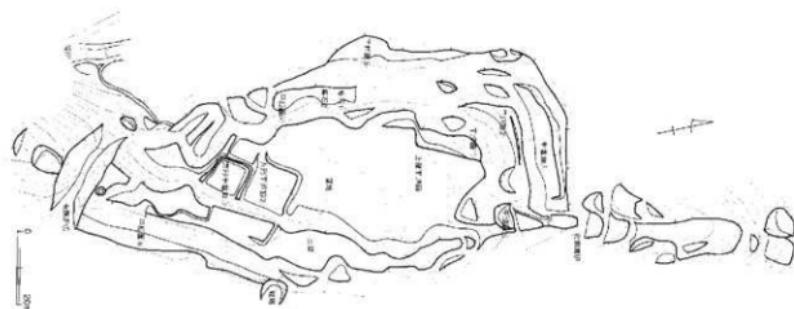
【史料】なし 【参考文献】11, 20, 65, 192



第 24 図 丸尾城から眺める若宮盆地



第 25 図 丸尾城南側堀切



第 26 図 丸尾城測量図 (文献 65)

筑前 154 宮永城

郡名 鞍手郡  
種別 山城

別称 雁城山城・繁木城  
所在 宮若市宮永・山口

図幅名 脇田（東）

【沿革】若宮盆地北西部、廻山と共にひときわ目立つ山容を見せる雁城山頂に位置する。『筑前要領』（香月文書）には「宮永城代 吉田掃部介貞昌」とあり、『本編』には「宗像氏の端城にして、吉田奎之助という者、城番たりし」とある。『拾遺』には吉田奎之助が天正9年（1581）の小金原合戦に馳せ参じたことにより宗像氏貞に勘当されたことと、「堅に群の如く堀下したり」と畝状空堀群の存在を記載している。『種々』には別称として「雁城山城、繁木城」を挙げ、城主を阿部氏とする。

【概要】雁城の山頂部に南北に細長い曲輪を置き、その周囲にくまなく畝状空堀群を配する。堅堀の数は40本を超える。その南側には堀切を2本設け、さらに南側のピークは、若干の人工的な造成加工が見られるが、明瞭な曲輪とはなっていない。また、東側の尾根上にも曲輪とみられる平坦面群が確認されるが、堀切などの防御遺構を確認することはできない。

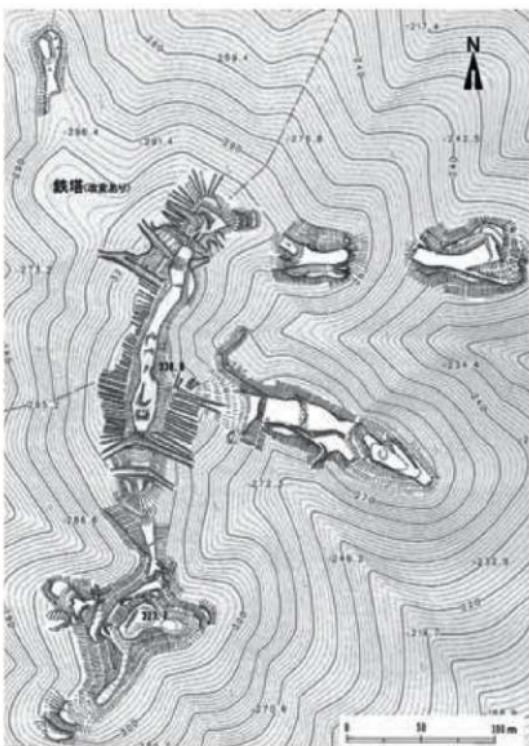
地誌類の記載に、宗像氏の端城であるように、宮永城は宗像氏の若宮地方進出の足がかりとして重要拠点であったとみられ、おびただしい数の畝状空堀群の存在はそれを示しているとみられる。

【史料】あり

【参考文献】1～5.7～9.10,  
11.13.14.20.192.210



第27図 宮永城遠景



第28図 宮永城縹張り図（文献210・藤野正人作成）

筑前 155 黒巣城

郡名 鞍手郡 別称 番黒巣城・黒鳥城 図幅名 脇田(東)  
種別 山城 所在 宮若市山口

【沿革】糟屋郡と鞍手郡の境に聳える西山から北西に延びる尾根の一角、標高 329m の頂部に位置する。『筑前要領』(香月文書)には「畠 ○黒巣城代 峯壯三郎」とする。『全誌』山口村の項には「黒鳥城址」として「本畠の西二町にあり。東西五間、南北六間。五郎と云う人(姓不詳)守れりと云」とあり、城主名は異なるものの、黒巣城を指しているものとみられる。

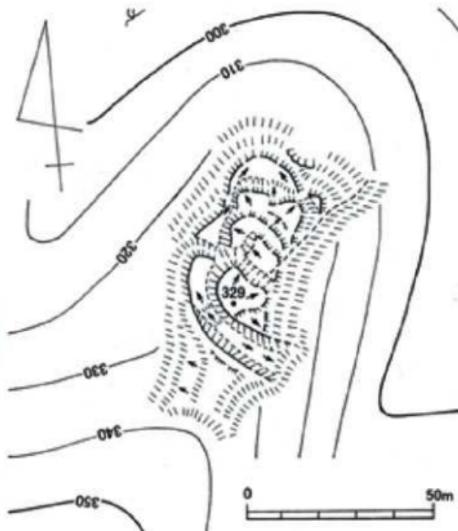
【概要】標高 329m の頂部の最高所に径約 10m の主郭を置き、その南側の尾根を幅 10m 近く、深さ 2~3m の堀切で遮断する。主郭の北側には小規模な曲輪の平坦面が 5段ほど展開する。堀切の西側は帯曲輪へと続いている。これららの曲輪群を囲い込む形状となっている。曲輪の平坦面は全体的に不明瞭である。

【文献】なし

【参考文献】4,8,9,11,13,20,192



第 29 図 黒巣城堀切



第 30 図 黒巣城縄張り図(事務局作成)

筑前 156 高丸城

郡名 鞍手郡 別称 大谷城・鷹丸城・大谷高丸城 図幅名 脇田(東)  
種別 山城 所在 宮若市山口

【沿革】宮永城のある雁城の谷を挟んで北西約 1km、高(鷹)丸山に位置する。『筑前要領』(香月文書)には「大谷 ○高丸城代 吉原源九郎、同榮田十郎宮代」とし、『全誌』では大谷城を別称とし、城主を小力又三郎とする。

【概要】高丸山がある山塊は、南側の標高 265m 地点が最高所で、県の分布地図などではここが城の推



第 31 図 高丸城(堀切から続く帯曲輪)

定地となっているが、そこには城郭遺構は存在しない。山塊の北東側の標高248m地点が半独立丘陵状の頂部となっており、その北東側の標高241m地点を中心に城郭遺構が位置する。略東西約30m、南北約10mの楕円形の主郭を置き、その南西側の尾根上には、主郭側で深さ4～5mの堀切を設けている。その堀切から帯曲輪が派生し、主郭の周囲を囲い込んでいる。

高丸城からは、宮永城など周辺地域の城郭はもとより、宗像郡の城山（篠岳城）、遠賀郡の帆柱山・花尾山なども見渡すことができ、眺望を重視した結果の立地であることが推測される。

【文献】なし 【参考文献】4.8～11,13,14,20,192

筑前 157	おかだじょう 岡田城	郡名 鞍手郡 種別 山城	別称 なし	所在 宮若市山口	図幅名 脇田（東）
--------	---------------	-----------------	-------	----------	-----------

【沿革】高丸山から北へ派生する尾根上の標高161m地点に位置する。『筑前要領』（香月文書）には「岡田城代 占部十郎 林弥左衛門」とするが、『全誌』では井原磯松の居城としている。

【概要】尾根上に約10m×30mの長方形の主郭を置き、その北東側と南西側の尾根上を堀切で遮断している。主郭の両側には不明瞭ながらも帯曲輪が若干確認できる。主郭以外には曲輪はなく、非常に小規模な城館である。

【文献】なし

【参考文献】

4.8～11,  
13,20,192



第33図 岡田城遠景



第32図 高丸城縄張り図（事務局作成）



第34図 岡田城縄張り図（事務局作成）

筑前 158	おのほんじょう 尾園本城	郡名 鞍手郡 種別 丘城	別称 尾園城・宮山城 所在 宮若市山口	図幅名 脇田(東)
--------	-----------------	-----------------	------------------------	-----------

【沿革】山口八幡宮の裏、標高 126m の丘陵頂部に位置する。『筑前要領』(香月文書) では「尾園本城 尾園加賀守 三ヶ所城アリ」とされ、尾園加賀守に関わる城が本城の他に 2~3 箇所存在することを示している（他の城は未確認）。一方『全誌』山口村の項には「宮山城址」として「宗像の臣、柴田左京居城なり」とする。

【概要】一辺 20~30m の方形を基調とした主郭を置くが、北西側の一角のみ方形基壇状に高まっている。そこには明治時代に建てられた「尾園氏古城址之碑」が建つ。主郭の北西側と南東側に堀切が設けられ、深さは約 3m を測る。堀切からさらに主郭の周間にかけて帯曲輪が派生し一部横掘状になるが、主郭の南側の角部分には低土壘が設けられ、堀切の堀底からそのまま帯曲輪へは回り込みにくいような工夫がなされている。同様の防御は、高丸城（筑前 156）にも見られる。

また、北東側斜面には造成により平坦面が築き出されているが、城郭遺構ではないとみられる。

なお、尾園本城のある丘陵の北側は、九州自動車道建設に伴い、「遠園遺跡」として発掘調

査が行われ、12世紀代を中心とした掘立柱建物群や多くの陶磁器類が出土している。

【史料】なし 【参考文献】4,8 ~ 11,13,20,55,192



第 35 図 尾園本城縄張り図（事務局作成）

筑前 159	やまとじょう 山下城	郡名 鞍手郡 種別 丘城	別称 なし 所在 宮若市山口	図幅名 脇田(東)
--------	---------------	-----------------	-------------------	-----------

【沿革】尾園本城の約 300~400m 南、谷を二つ挟んだ尾根の先端上部に城郭遺構が存在する。『筑前要領』(香月文書) には「山下城代 奥主膳正」とあるが、『全誌』には「村の北にあり（中略）宗像の臣、金子又三郎居れり」とする。山下と奥は現在でも近隣の小字に残る。

【概要】尾根の先端部、標高 117m 地点に径約 15m の不整円形の主郭を置き、その南北の尾根上に堀切を設ける。南側の堀切は深さ 3~4m もあり、主郭の大きさに比べて規模が大きい印象を受ける。

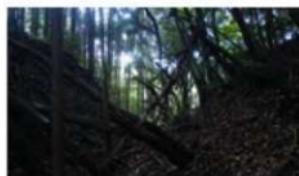
それらの堀切からは主郭の周囲にかけて帶曲輪が派生する。

『全誌』では城の規模を「東西十間、南北二十一間」としており、この城とは別の城を指している可能性も考えられる。山下地内には、他にも中尾城（筑前161）も想定されており、この城がそちらの可能性であることも考えられる。

【史料】なし

【参考文献】

4,5,8～11,13,20,192



第36図 山下城堀切

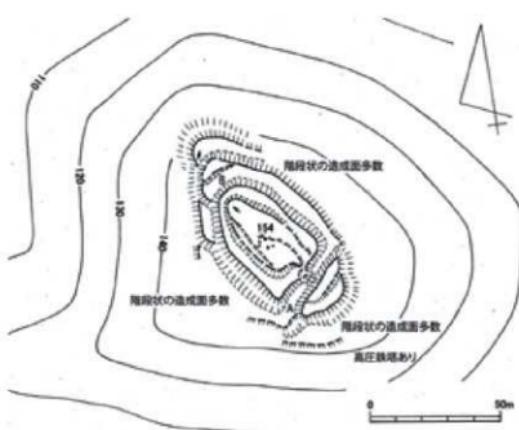


第37図 山下城縄張り図（事務局作成）

筑前 160	ちやうすやまじょう	郡名 鞍手郡	別称 茶臼岳城・茶臼城	図幅名 脇田（東）
		種別 山城	所在 宮若市山口	

【沿革】宮永城のある雁城から北東へ派生する尾根上で、山口川に面した先端部に位置する。『筑前要領』（香月文書）は、「山口村茶臼岳城代 森備中守」として天文11年（1542）に大友方により落城したとする。その一方で、『全誌』は「茶臼山城址」として「宗像大宮司の臣、峯弥三郎なり」とある。『筑前要領』では黒巣城代が峯莊三郎となっており、どちらかが誤伝の可能性も考えられる。

【概要】半独立丘陵状を呈する標高154mの頂部に南北約50m、



第38図 茶臼山城縄張り図（事務局作成）

東西約30mの主郭を中心に城域が展開しているが、後世の畠造成とみられる改変を受けており、階段状の平坦面が丘陵全体に残されている。ただし、山頂部の平坦面の南北両側A・Bには、堀切を確認することができ、AとBとで囲まれた空間については、中世城郭が存在した空間であることは間違いないようである。その外側の階段状の造成については、城郭遺構とみる向きもあるが、現段階においては城域と断定することはできない。

なお、茶臼山城から北東約300m地点の尾根上は、九州自動車道建設に伴い、福岡県教育委員会により発掘調査が行われ、丘陵裾部を取り巻くように土塁と堀状遺構が確認され、「茶臼山城跡」の一部とされている。しかし、主郭からは遠く離れた箇所にあり、また堀状遺構に隣接して曲輪や建物などの遺構・施設が確認できること、さらには堀状遺構が一部農道と重複していることなどから考えると、後世の山道遺構である可能性が高く、城郭遺構と認識することはできない。

【史料】なし 【参考文献】4,5,7～9,10,11,13,14,20,55,192

筑前178 鬱鏡山城	郡名 鞍手郡	別称 勝山城	図幅名 直方(西)
種別 山城	所在 宮若市金生		

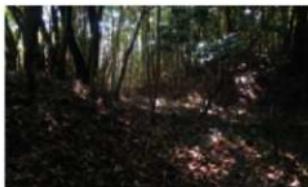
【沿革】金生集落の南、白山から北西に延びる尾根の頂部、鬱鏡山山頂に位置する。「拾遺」「金生村古城」には「鬱鏡と云茅山有。是も城跡と見へたり」とある。『全誌』には「勝山城址」として「幸山の東、鬱鏡山の頂にあり。平地三間許、堀切の址あり。有吉三郎と云者居たりと云」とする。ただ、『拾遺』には「幸山の西南の竹山を勝山と云。此頂にも切ならせる所有。」とあり、金生城（筑前179）のある場所を勝山と呼んでおり、検討を要する。

【概要】鬱鏡山山頂（標高203m）には、慶応3年の五穀神の石碑などが建つが、そこに径約30mのあまり平坦ではない主郭を置き、その南側の尾根上に堀切1本を設ける。堀切の深さは約1mである。

【史料】なし 【参考文献】3,4,8,9,11,192



第39図 茶臼山城遠景



第40図 茶臼山城堀切A



第41図 鬱鏡山城縄張り図（事務局作成）

筑前 179 かのうじょう  
金生城

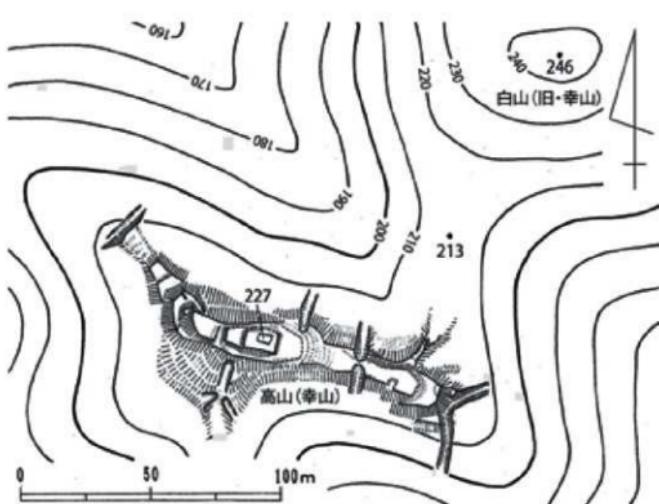
郡名 鞍手郡 別称 旗山城・白旗城 図幅名 直方(西)  
種別 山城 所在 宮若市金生

【沿革】金生集落の南に聳える白山（標高 246m）の南西側約 150m の高山（幸山）山頂（標高 227m）に位置する。『本編』『附録』『拾遺』は「金生村古城」として、幸山（現在の白山のことか）山頂およびその周辺を城地とする。『附録』では幸山山頂を本城とし、山内の赤寺（場所不明）にも城跡があるとする。『筑前要領』（香月文書）では「金生村旗山城主 入田勝全入道」とし、『本編』と同様の城主名を記載する。『全誌』では城主を入田将監（勝全或は氏勝とも）とする。『種々』では「旗山城址（黒瀬氏、入田氏）」と記載し、文献 14 では「白旗城」として記載する。

【概要】東西に延びた尾根上を約 100m にわたって幅約 20m の曲輪群が並列し、曲輪群の端部を中心に堅堀および堀切を設けて防御する。山の最高所からは近いにもかかわらず、最高所は自然の平坦地形のままの状況とみられる。金生は中世、金生庄が置かれた地であり、大内氏、大友氏が深く関与した地であって、また周辺の城よりも比高も高く、規模も大きいことから、金生庄のおさえの城として重要視されたものとみられる。



第 42 図 鏡山城（左）・金生城（右）遠景



【史料】なし

【参考文献】

1～5.7～9.11,  
13,192

第 43 図 金生城縄張り図（藤野正人氏作成・提供）

筑前 182 龍ヶ岳城  
りゅうがだけじょう

郡名 鞍手郡

別称 鶴岳城・龍徳城・粥田城

図幅名 直方(西/東)

種別 山城

所在 宮若市龍徳

【沿革】六ヶ岳から南東側に派生する尾根の支峰の一つ、龍ヶ岳に位置する。地誌類などには内氏家臣の杉氏が糟屋郡高島居城（筑前 283）と共に代々の居城とし、城主に興行、忠重、連並などの名を挙げている。また、秋月氏の持ち城の一覧を記した『覚書』には竜ヶ岳として坂田蔵人、深見駿河の城主名を挙げている。別称については『拾遺』では里民は「鶴岳城」というとするが、『福岡県の城』掲載の龍徳城、粥田城については出典は明確ではない。

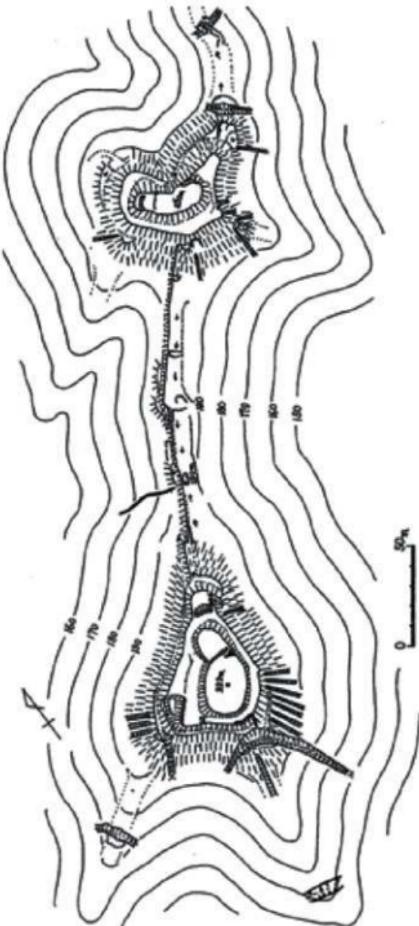
【概要】龍ヶ岳は北と南の二つの峰からなり、双方の頂部を中心に曲輪群が展開する。北側の峰（標高 230m）は、「二の丸」と伝わるが、南の峰より標高が高く、本来主郭として機能したとみられる。主郭の曲輪には土塁が一部見られ、周囲に帯曲輪を巡らし、北側と東側の尾根に堀切を設ける。南の曲輪群へ続く尾根上は緩斜面でつないでおり、西側斜面に切岸で防御する。北と南の曲輪群を一体化するための造作であろう。

一方、南側の峰（標高 222m・伝本丸）の曲輪群もまた主郭周囲に帯曲輪や横堀を巡らし、南側の斜面を中心に堀切、畝状空堀群で防御する。

以上のように、南北約 250m にわたって城域としているが、龍ヶ岳城の南麓の頂部には祇園岳城（筑前 183）、さらに麓には町屋敷、辻屋敷、門ノ内などの小字が残る。『拾遺』には東麓に御館、表口、裏口、門内などの地名、北側の下新入側にも宅跡らしき地もあるとしていることから、



第44図 龍ヶ岳城・祇園岳城遠景



第45図 龍ヶ岳城縹張り図（文献 196・片山安夫作成）

城の周囲の麓に屋敷群の存在が想定される。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,13,14,18,19,196

筑前 183 祇園岳城	郡名 鞍太郡 種別 山城	別称 なし 所在 宮若市本城	図幅名 直方(西)
-------------	-----------------	-------------------	-----------

【沿革】龍ヶ岳城から南西側に下った標高 152m の頂部に位置する。『本編』では杉太郎兵衛が在城したとし、「拾遺」では本来、杉氏はこの城を本城とし、後に龍ヶ岳城に移ったのち、城番として杉太郎兵衛を置いたと推察している。『筑前要領』(香月文書)でも城代を杉太郎左衛門とする(文献 13 は「右衛門」と誤読か)。

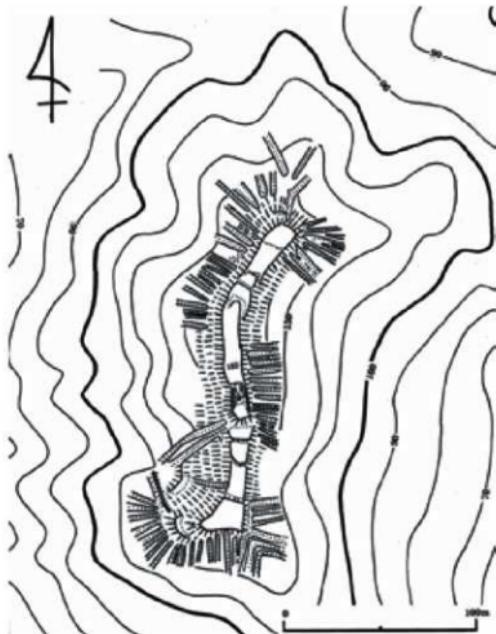
【概要】標高 152m の頂部に南北約 50m の主郭を置き、そこを中心には南北約 150m にわたって 10 近くの曲輪を配置する。主郭の南側は縁辺部に土塁を添わせて通路状としている。それらの曲輪群の周囲には約 80 本にも及ぶ膨大な数の敵状空堀群と尾根上には連続堀切群を設け、周囲の斜面を厳重に防衛する。龍ヶ岳城よりも厳重な防衛の在り方を見て取ることができる。

なお、祇園岳城の南東側、県道 21 号線を挟んだ標高約 50m 地点の頂部は字「城」といい、平坦面群と二重の堀状遺構が見られ、城郭遺構ともみられている(文献 218)。文化財番号は 410415 で城郭(名称なし)として登録している)。しかし、後世の耕作による造成が大々的にあっており、城郭遺構と即断することはできず検討を要する。

【史料】なし

【参考文献】

1～9,10,11,13,14,18,178



第 46 図 祇園岳城縄張り図(中村修身作成・提供)



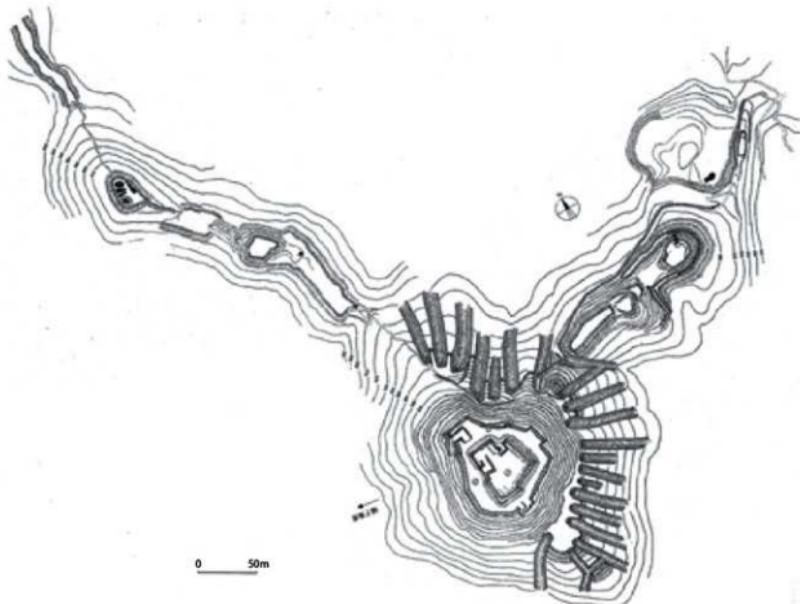
第 47 図 祇園岳城堀切・敵状空堀群

筑前 191 鷹取城 郡名 鞍手郡 / 豊前国田川郡 別称 高取(山)城・鷹取山城・高鳥居城 図幅名 金田(西)  
種別 山城 所在 直方市永満寺・頓野・田川郡福智町上野

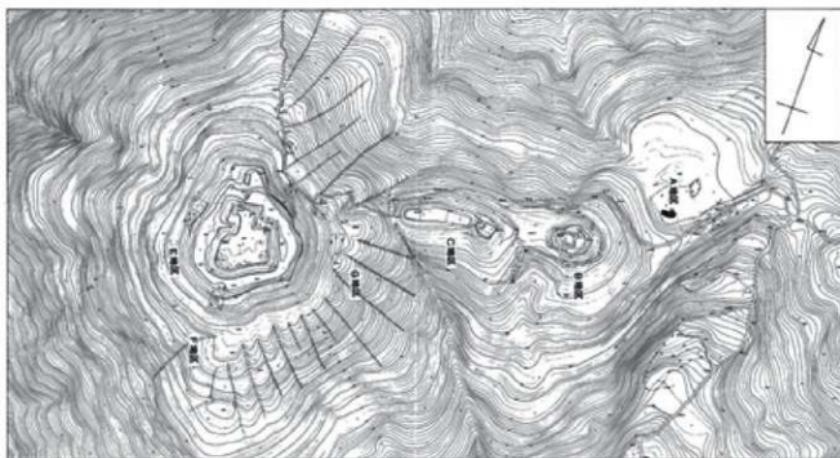
【沿革】豊前と筑前との境に聳える福智山（標高900m）から西へ延びる支峰・鷹取山山頂（標高633m）に位置する。鷹取山山頂も、豊前と筑前との境にある。築城は、永承元年（1046）頃、長谷川吉武の家臣永井宗久によると伝えられ、天正年間には大友方の毛利鎮実などが在城した。慶長6年（1601）、黒田長政が筑前に入部すると、重臣母里太兵衛が一万四千石の禄をもって入城する。いわゆる「筑前六端城」の一つに数えられる。慶長11年には後藤又兵衛に代わって、母里太兵衛は益富城主となるため、鷹取城には手塚光重が入城する。元和の一国一城令により破却され、廃城したとされる。



第48図 鷹取城遠景（雲取山山頂から）

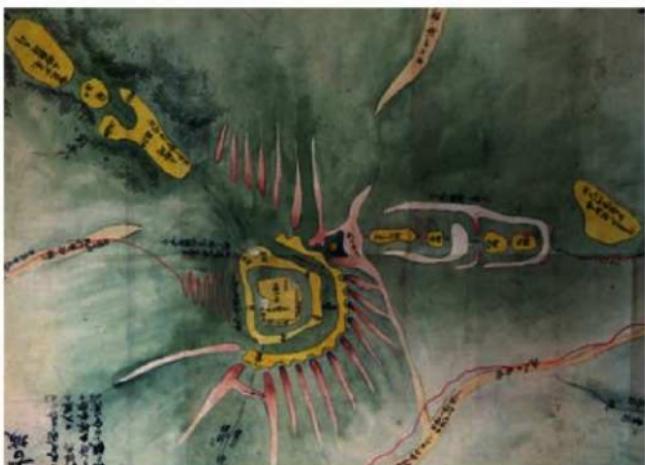


第49図 鷹取城縄張り図（文献180・木島孝之作成）



第50図 鷹取城測量図（文献62・1/3,500）

**【概要】** 城は大きく、山頂部を中心とした主郭部（本丸）、東側尾根の曲輪群（二の丸）、北側尾根の曲輪群に分かれるが、主郭部以外の曲輪群については一部に横堀などが見られる以外は、防御面はかなり弱い。その一方、主郭部には様々な防御遺構等が見られる。



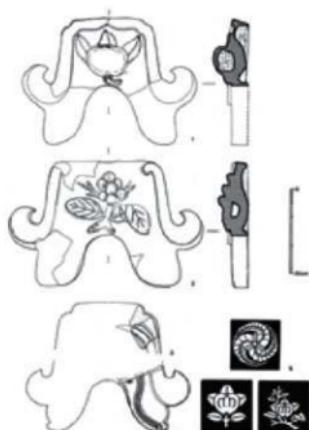
第51図 鞍手郡頓野村鷹取山古城図（部分・国立公文書館蔵）

主郭部の北側から東側にかけての斜面、つまり福智山側には、約20本の畝状空堀群が構築される。豊堀の幅が10m前後あって非常に規模の大きなものとなっている。これは戦国期、特に天正年間の改修によるものとみられ、非常に防御性の高いものとなっている。

一方、主郭部の曲輪上は総石垣や枒形虎口などが見られることから、黒田氏入部後の織豊系の築城技術によるプランである。主郭部は発掘調査が行われており、その様相はより明らかとなっている。



第52図 鷹取城主郭部測量図  
(文献62掲載図を一部改変して事務局作成)



第53図 鷹取城出土鬼板瓦(文献60)



第54図 鷹取城発掘調査状況写真(直方市教育委員会提供)  
(1:西口城門、2:南口城門、3・4:礎石建物)

主郭部は上下二段の曲輪で構成されており、それぞれ2箇所ずつの虎口が設けられ、曲輪の縁辺部は總石垣で固められている。曲輪の墨線は要所要所で直角に屈曲したり、横矢の張り出しが設けられる。虎口は、上段の2箇所(東口城門・西口城門)が防御性の高い内枠形虎口であるのに対し、下段の2箇所(南口城門・永満寺口城門)は出撃性の高い外枠形(嘴形)虎口となっており、曲輪ごとに明確な機能分化がなされていることが指摘されている(文献180)。石垣は約5m

の高さを持つが大半が上半分以上崩壊しており、廃城時の破却によるものとみられる。上段の曲輪の堤線上には東面と南面に一列、部分的に二列の礎石列が並んでおり、多間櫓が想定される。さらに南西隅には4間×6間と想定される礎石建物が検出されており、大型櫓建物が置かれていた。出土遺物には、鬼板瓦のほか、大量の瓦があり、主郭部の建物は瓦葺きであったとみられる。

このように鷹取城は、主郭部を中心に黒田氏時代の織豊系城郭の築城技術が確認できる箇所と、その周辺の歴史的遺跡群に代表される戦国期城館としての特徴の双方を残しているといえる。

また、鷹取山の城下には「鉄砲町」「町屋敷」「横町」などの字が残ることから、黒田氏の時期には、士分の屋敷や町家などの城下が形成されていたことが想定される。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,13～15,58～62,178,180,193

筑前 192	くもとりやまじょう 雲取山城	郡名 鞍手郡 别称 雲取城	図幅名 德力(西)
		種別 山城 所在 直方市上頓野・頓野	

【沿革】鷹取山から内ヶ磯の谷を挟んだ北側に聳える雲取山（標高606m）山頂およびそこから西へ延びる尾根上に位置する。地誌類の多くには、雲取山にあり、永禄・天正年間に麻生鎮益が在城したことが記される。文献13では「古書」からの引用として、畠城の香月興則が築城し、家臣の麻生三河守鎮益を置くが、大友方に寝返ったため、香月興則は鎮益を捕え、鬱の皆守・上杉興房を新たな城主にしたとする。

【概要】城があるとされる雲取山山頂部分は十数m前後の広さの平坦地形が見られるばかりで、積極的に曲輪を造り出している様子は見受けられない（第55図）。山頂の北側には若干の人工的な造成による平坦地形があり、曲輪とみられるが、堀切などの明瞭な防御構造は確認することはできない。



第55図 雲取山城（山頂部）縄張り図（事務局作成）



第56図 雲取山城・山ノ田城遠景



第57図 雲取山城（標高444m地点）堀切

その一方で、山頂から西へ延びる尾根線上に城郭遺構を確認することができる。山頂から約 500m 西にあたる標高 444m 地点（通称五合目）を中心とした一角に曲輪群が見られる（第 58 図）。10 ~ 20m 規模の曲輪が 4 箇所ほど並列し、80m にわたり尾根上に展開する。その曲輪群の前後を堀切 1 本ずつで防御する構成となっている。標高 444m 地点を中心とする曲輪群は雲取山山頂の曲輪群よりも規模が大きい。雲取山城の主体的な場所は、山頂よりもむしろこちらの方である可能性が高い。

また、ここからさらに西に 1km 先にある山ノ田城（筑前 193）も同一の尾根続きにあり、また山ノ田城は全く伝承等に出てこない城であるため、雲取山城の一部と捉えることもできよう。以上のように雲取山城は山頂部とそこから西へ延びる尾根線上の各所に曲輪群が分散する構成となっていることがわかる。

【史料】なし 【参考文献】1 ~ 5.7 ~ 11,13,15



第 58 図 雲取山城（標高 444m 地点）縄張り図（事務局作成）

筑前 193	やまとたじょう 山ノ田城	郡名 鞍手郡	別称 なし	図幅名 德力（西）
		種別 山城	所在 直方市上頓野	

【沿革】雲取山山頂から西へ尾根線を約 1.5km 進んだ半独立峰の頂部に位置する。直方市の分布調査によつて初めて確認されたもので、字名を探り、「山ノ田城」として周知化されている。地誌類などに明確な記載は見当たらない。

【概要】城がある丘陵頂部は約 200m に渡って平坦な地形が広がっているが、城郭と認識することができるものは、堀切と堀切に挟まれた約 50m の範囲にとどまる。堀切は深さ 1m 前後とあまり深くではなく、曲輪も 10m 四方の規模のものが 2 段あるばかりである。

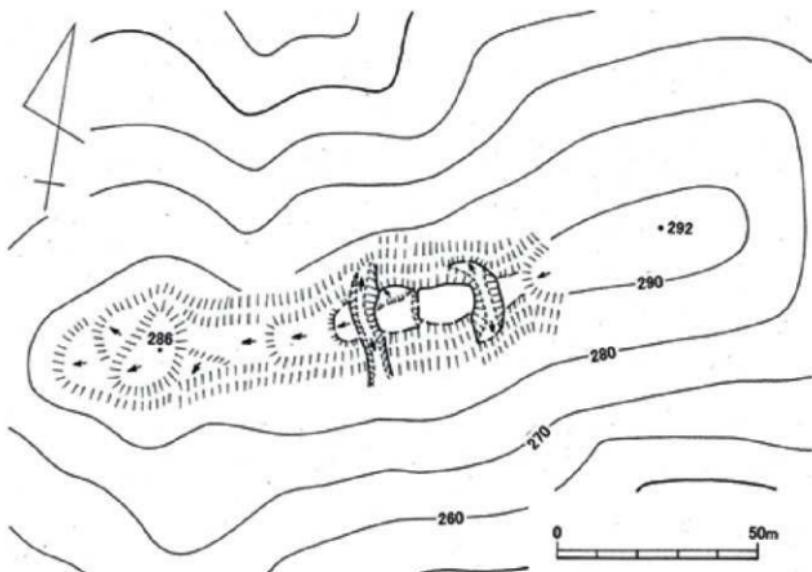
立地から見て、雲取山城の一部とみることもできるが、その一方で、文献 13 には「古書」からの引用として鷹取城と雲取山城との攻防戦の中で、畠城主香月興則は「辻ヶ城」を新たに築城して、家臣秀俊を置き、鷹取城に拠る大友方の大進を防いだとある。可能性としては山ノ田の城郭遺構が



第 59 図 山ノ田城堀切

「辻ヶ城」かもしれないが、確証にかけるため不明と言わざるを得ない。

【史料】なし 【参考文献】227



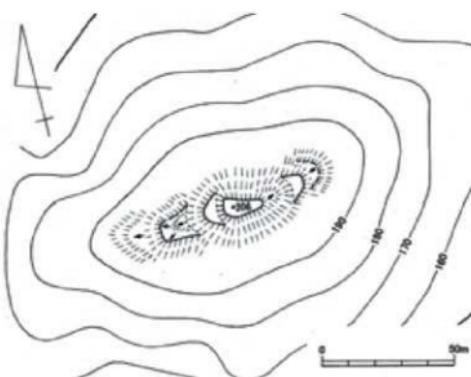
第 60 図 山ノ田城縄張り図（事務局作成）

筑前 194 もとどりとりで 髻砦	郡名 鞍手郡 種別 山城	別称 元取城 所在 直方市上頓野	図幅名 德力（西）
----------------------	-----------------	---------------------	-----------

【沿革】直方市上頓野の尺岳川の北にある半独立峰の元取山山頂（標高206m）に位置する。文献13には「古書」からの引用として、畠城主・香月興則方にあった上杉興房が髪の簪守であった記載が見られる。

【概要】山頂周辺には全長10m未満の小曲輪が5つほど階段状に展開するばかりで堀切などは見られない。ただ、周辺は全くの自然地形で、かつ切岸も明瞭にあることから、城郭遺構と考えられる。

なお、文献13記載の「古書」に



第 61 図 髻砦縄張り図（事務局作成）

は櫛の砦のほか、城の腰の砦（笹岡某）や辻ヶ城（秀俊）などの城砦名が見られるが、近辺に所在するものとみられるものの、詳細は全く不明である。また、西側の麓は藤田丸の地名を残すが、『全誌』「上頓野村」には「御立城」に「麻生藤田丸墓」があるという記載があるが、砦との関連は不明である。

【史料】なし 【参考文献】11,13,15

筑前 196 音丸城

おとまるじょう

郡名 鞍手郡  
種別 丘城

別称 音丸山城  
所在 鞍手郡鞍手町新北

図幅名 中間（西）

【沿革】六ヶ岳の山塊の北側、新分天満宮がある音丸山の小丘陵上に位置する。新北の熱田神社に伝わる金川文書の「続風土記附録御調子書上帳」<sup>(註)</sup>（文政3年（1820）・文献57所収）には「一 音丸山と申所ニ古城と申し、從以前唐堀等御座候而、只今は山上二天満宮ヲ祭居申候、何某の城と申儀相分不申候」とあり、城郭の認識はあつたことがわかる。

【概要】現在、天満宮がある丘陵頂部（標高42m）に南北約40m、東西約20mの主郭を置き、周間に横堀と土塁を巡らせる構造を呈する。土塁の外側は耕作等による後世の改変が激しく、往時の状況を確認するのは困難であるが、昭和51年に九州自動車道建設に伴い、主郭の南側の発掘調査が行われ、尾根の鞍部に幅5～10m、深さ1.5～2.5mの空堀を確認している。調査区外の路線地内にもトレンチを入れているが、部分的であり、14～15世紀代の五輪塔を伴う集石遺構が確認されるのみで、検出された堀のプランが主郭を巡る横堀か、尾根を断ち切る堀切だったのかはよくわからないが、主郭の周囲を巡る横堀のさらに外側に埋没遺構が存在する可能性が考えられる。

【史料】なし

【参考文献】8～11,16,57

【註】「続風土記附録御調子書上帳」は、青柳種信が『拾遺』編纂にあたって各町村寺社に提出を求めさせた報告書（書上）で、新北村の書上帳は福岡県立図書館が所蔵する『筑前村町書上帳』には含まれておらず、当資料は作成した村に保存分として残されたとみられる。



第62図 音丸城縄張り図  
(文献57掲載図面と現地調査を元に事務局作成)



第63図 音丸城横堀（現存）



第64図 音丸城横堀（1976年調査）

（文献57から転載）

## 筑前 197 剣岳城

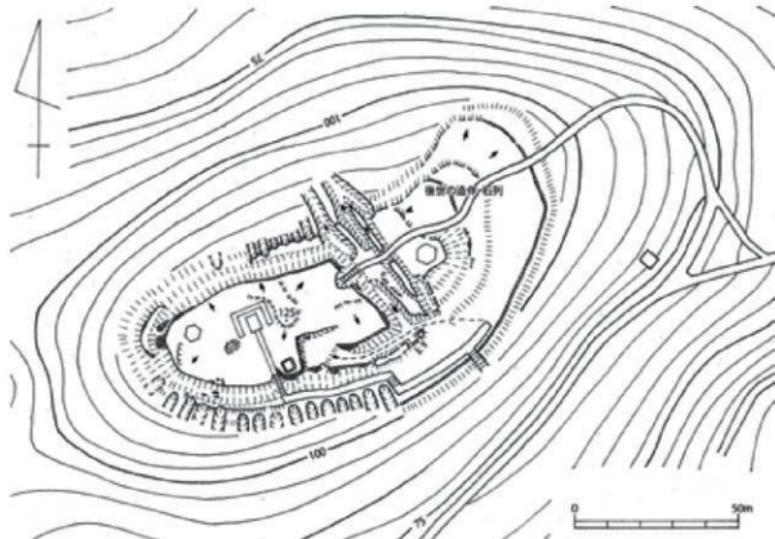
郡名 鞍手郡 別称 尾山城・中山城・剣(山)城 図幅名 中間(西)  
 種別 山城 所在 鞍手郡鞍手町中山・新北

**【沿革】**六ヶ岳の北約3km、剣岳山頂（標高125m）に位置する。『拾遺』には応仁年間に梅野土佐が居城を築いたとし、文明年間に宗像氏の出城として野中勘解由が守備したとする。その後、空城となっていたものを秋月氏家臣の跡部安芸守が入ったとある。『覚書』には剣山として重松駿河の城主名が見られる。

**【概要】**剣岳山頂には南北約30m、東西約50mの主郭が置かれ、平坦地形が続く東側には2本の堀切を設けて侵入を遮断する。堀切より東側は平坦地形だが、後世の造作地形しか確認できない。

また曲輪の周囲には南北側の斜面に畝状空堀群が構築される。一つ一つの堅堀の規模はさほど大きくなく、長さも短いが、本数は20本前後に上る。また、曲輪の縁辺部には石垣が確認でき、主郭南東隅には枡形を呈した出入り口が石垣により構築される。『附録』や『拾遺』の記載に「石壁」として記載されているのはこれらの石垣を指しているものと考えられるが、堀切や畝状空堀群などのように遮断を主目的とする防御造構に、枡形虎口のような導入させるための防御造構を組み合わせる事例は北部九州ではほとんど見られず、城郭造構とするにはさらなる検討が必要である。また、『本編』には八剣神社上宮は寛永2年（1625）まで剣岳山頂にあったとするため、廃城後に置かれた上宮に伴う石垣とも考えられる。ただ、曲輪西側の石垣などは神社とは直接関係のない位置にあるため、城郭に少しある可能性も考えられる。

**【史料】**あり **【参考文献】**1～5,7～9,10,11,13,14,16,187,209



第65図 剑岳城縄張り図（文献209・岡寺 良作成）

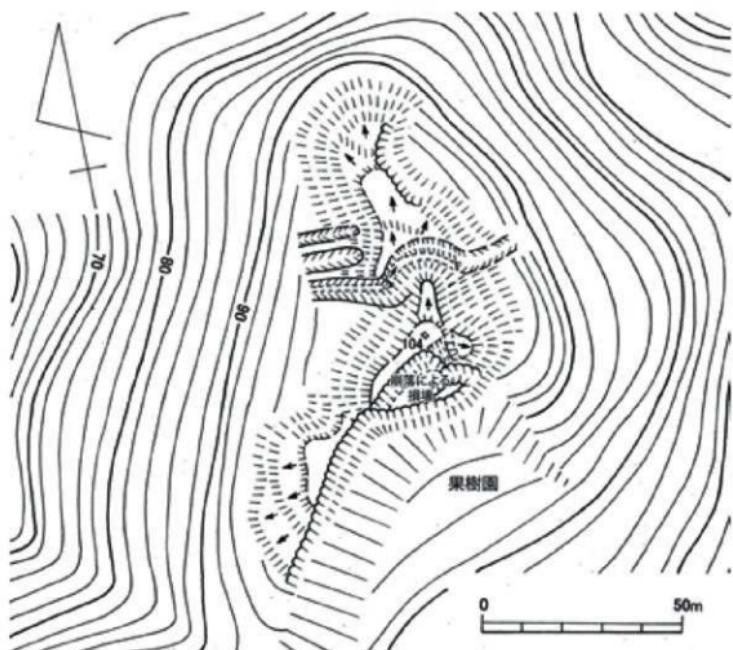
【沿革】宮若市との境にほど近い鞍手町新延の福地山と呼ばれる丘陵端部の頂部に位置する。『附録』には大友氏家臣の野中勘解由の居城とする。野中勘解由は剣岳城の城主としても名前が挙がる。文献 14 には新町城という名称で記される。

【概要】福地山山頂（標高 104m）に主郭を築くが、曲輪の南側は果樹園造成により失われ、なおかつ主郭の南半部も近年の自然崩落による損壊により失われてしまっている。主郭の北側は良好に旧地形が残存しており、横堀状に巡る堀切とその堀切に隣接して竪堀 2 本が西側斜面に築かれており、その北側は自然地形となっている。主郭の南西側には不明瞭な平坦地形があるが、現状では城郭遺構とは判断できるものではない。

【史料】なし 【参考文献】2,4,8 ~ 11,13,14,16



第 66 図 城腰山城遠景



第 67 図 城腰山城縹張り図（事務局作成）

## ②遠賀郡

筑前 205	そのだうらじょう 園田浦城	郡名 遠賀郡 别称 園田城・永犬丸城 図幅名 折尾(東)
		種別 丘城 所在 北九州市八幡西区北筑2丁目

【沿革】洞海湾に注ぎ込む金山川の東岸の丘陵上に位置する。『附録』『拾遺』は「園田城跡」として麻生近江守の砦で、園田浦にも別の砦があるとしている。尾根ごとに築かれた曲輪群をそれぞれ別の砦と認識したものと考えられる。『全誌』には本城とは別に馬貢場と呼ばれる馬場があったとする。

【概要】城域は、3箇所の尾根上に広がっており、「北郭」「本郭(中央郭)」「南郭」と呼称される。

その大半は宅地造成により発掘調査後に消滅している。本郭の南半部は残存しているが、現状では宅地造成による法面の地下に未調査の状態で埋没しており、現状では南郭のみ旧状を目



第68図 園田浦城遠景（昭和42年頃・文献67から転載）

にすることができる。

この城の発掘調査は昭和41～42年と平成8年に2回実施されている。最初の調査はセメント原料用土砂採取によるもので、北九州市青年郷土史研究会により実施され、本郭部分のトレーニング調査が行われ、曲輪上のトレーニング内からは数多くの柱穴群や本郭の「櫓台」の曲輪の裾を取り巻くように空堀が検出された。その後、本郭は土砂採取のため、櫓台付近を中心に大きく削られてしまい、詳細な状況は不明のままとなってしまった。本郭損壊前に作成したとみられる縄張り図（第69図）によると、「櫓台」の北東側にも2～3の小曲輪と堀切1本が存在したようである。

平成8年には北郭から本郭の北半部が宅地造成に伴い北九州市埋蔵文化財調査室により発掘調査が行われた。本郭は櫓台・主郭などは既に削られていたため、調査の主体は北郭部分で、調査の結果、竪穴建物、柵列などのほか、14～15世紀代を中心とした貿易陶磁器、土師器などが出土



第69図 破壊前の園田浦城縄張り図（文献31・中村修身作成）



第 70 図 園田浦城測量図（文献 70 掲載図に文献 67 掲載図面と事務局作成図面を合成して事務局作成）

している。

城の縄張り構造であるが、南北に並んだ東西方向の尾根上にそれぞれ曲輪群がみられる（北郭・本郭・南郭）。北郭は丘陵頂部に東西約 50m、南北約 20m の主郭を置き、その周囲に帯曲輪もしくは小曲輪を巡らせ、要所に竪堀を設け、北西側には堀切を置いている。平成 8 年の発掘調査では主郭の平面上では竪穴建物が検出されたほか、主郭から南西の出曲輪へ延びる尾根上では柵列が検出された。北郭南西部の出曲輪部分は保存区域となつたため調査は行われなかつたが、調査後に宅地造成により埋められてしまい、その状況を窺い知ることはできないが、出曲輪のさらに南側の尾根上に堀切 1 本が存在したようである（第 69 図）。

本郭は丘陵頂部に楕円形の曲輪（昭和 40 年代の調査では「櫓台」）を置き、そこから三～四方向に延びる尾根上に曲輪を置く構造である。「櫓台」の西側の曲輪（昭和 40 年代の調査では「主郭」と呼称）には昭和 40 年代の発掘調査では「櫓台」の裾を取り巻くように横堀が検出され、それぞれの曲輪の平面上でも柱穴が検出されている。本郭の北東側は緩やかな尾根が続いていたようであるが、未調査のまま破壊されたため、詳細は不明だが、第 69 図によると、小曲輪と堀切 1 本があったようである。また、本郭の南側斜面にも階段状の平坦面群が 10 段近くと井戸 2 基があつたが、宅地開発により未調査のまま地下に埋没したため、詳細な状況を知ることはできないものの、本郭に付随する曲輪群とみられる。平成 8 年の調査は、本郭は部分的な調査にとどまつたが、旧表土上に造成土を埋め、整地する様子などが確認されている（第 73 図）。

南郭は現状でも残されており、園田浦城の中で、現在唯一地表面で確認できる曲輪群である。長さ約 50m の主郭の周りに帯曲輪を巡らし、竪堀 2 本を設ける構造であり堀切は確認できない。以上のように、3 つの曲輪群で構成された城郭で各々の独立性は高い。出土遺物から 14 世紀後半～15 世紀前半に位置づけられる。

【史料】なし

【参考文献】2～6, 8～10, 11, 26, 31, 67, 70, 174



第 71 図 園田浦城北郭全景（平成 8 年）  
(北九州市教育委員会提供)



第 72 図 園田浦城北郭堀切（平成 8 年）  
(北九州市教育委員会提供)



第 73 図 園田浦城本郭検出の整地層（平成 8 年）  
(北九州市教育委員会提供)



第 74 図 園田浦城本郭からみた帆柱山城・花尾城（右端の森が南郭の丘陵）

筑前 207 浅川城

郡名 遠賀郡 別称 陣山城  
種別 山城 所在 北九州市八幡西区浅川

図幅名 折尾(東)

【沿革】遠賀川東岸、遠賀川と江川が合流する浅川の丘陵上に位置する。『本編』等の地誌類には麻生氏端城とするが、天正14年（1586）には秋月方となった麻生鎮里、統春親子の持ち城として機能し、10月に黒田孝高により落とされたことが黒田家文書などで確認することができ、秋月方の遠賀郡攻略の拠点であった。『全誌』では「陣山城址」として名を掲げている。

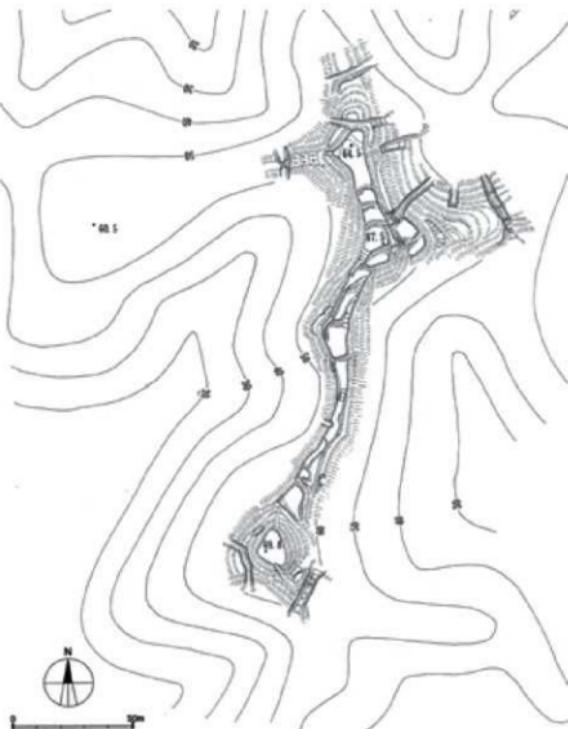
【概要】複雑な地形を呈する丘陵上だが、標高69mの最高所を含み、南北200mあまりにわたって城域が展開する。最高所の69m地点を最南端とし、そこから約20m四方の主郭を置き、そこから北へ細長く伸びる尾根上に曲輪群を並列させる。主郭の南西側と南東側には堀切を設け、南側からの防御に備える。北側は尾根の鞍部から標高67m地点の曲輪までの間に、西側に土塁を巡らせており、防壁ラインを形成する。標高67m地点の曲輪からもさらに北へ約50mの区间、階段状に曲輪を並べ、その北側と西側の尾根に堀切を設けて城域を画している。特に最北端の曲輪の周辺には堀切と共に、帯曲輪を巡らせている。

【史料】あり

【参考文献】1～4.7～10.  
11,31,172,198



第75図 浅川城遠景（手前は遠賀川）



第76図 浅川城縄張り図（北九州市立自然史・歴史博物館作成・提供）

筑前 208 番城

郡名 遠賀郡 別称 番山城・白木城・麻生城 図幅名 德力(西)  
種別 山城 所在 北九州市八幡西区畠

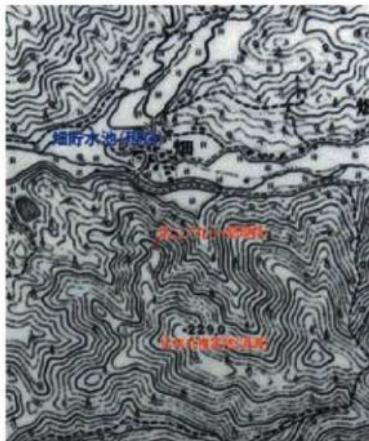
【沿革】鞍手郡と遠賀郡の境に聳える金剛山から北西に派生する尾根上、畠野水池に面した頂部に位置する。『附録』には堀、水の手の跡が残るとある。『全誌』には源平の争乱の際に香月庄司秀則が畠山に城を築き、居城としたとしているが、『本編』では南北朝時代に香月三郎左衛門則次が畠の城を居城としたと伝え、戦国時代になり香月氏代々の居城となったとする。

【概要】文献 174 によれば、かつて畠城は、畠の集落の南、標高 229m の頂部を主郭とし、集落に向かって北へ延びる尾根の頂部に二ノ丸と呼ばれる曲輪があった(第 77 図)。現在、畠の集落は畠野水池に沈み、また畠城の大部分は昭和 40 年代以降の採石によりその大半が調査されることなく失われてしまった。文献 174 には、主郭は東西 35m、南北 50m ほどで、東側に 3m 下がって幅 4m ほどの帯曲輪があり、南は深さ 3m ほど  
の空堀(堀切か?)で区切られ、主郭の周囲には土塁が残っていたとい  
う。また、周囲の山々の頂上にも砦  
跡を構えた跡が存在するとしている  
(未調査)。

現在、畠城で唯一確実に残されて  
いるのが、「二ノ丸」とされる曲輪  
である。南側は採石により消滅して  
いるが、約 20m 四方の曲輪上には  
石碑なども残されている。かつて尾  
根続きであった南側へは地形がそ  
のまま緩やかに上っているようであ  
り、曲輪を区画する切岸や堀切など  
の痕跡は残っていないため、遺構の  
有無も含めて詳細は不明である。

【史料】あり

【参考文献】1 ~ 5.7 ~ 11.26.31.172.174



第 77 図 畠城位置図(1/25,000「徳力」を一部変更)  
(大正 11 年陸地測量部作成・福岡県立図書館提供)



第 78 図 畠城・伝二ノ丸地点縄張り図(事務局作成)

筑前 210 竹尾城 たけのおじょう

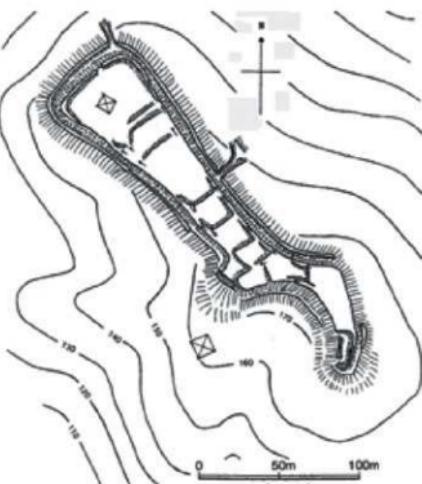
郡名 遠賀郡 別称 上津役城・竹尾山城 図幅名 徳力(西) / 八幡(西)  
種別 山城 所在 北九州市八幡西区上上津役・市瀬

【沿革】権現山の南西麓、鷹見神社の南西側の尾根上に位置する。江戸時代の地誌類には、麻生鎮里の居城として記される一方で、文献26には当初は、麻生遠江守家延、兵部大輔弘重父子の蟄居の城であったとしている。麻生鎮里は天正14年(1586)の九州平定戦においては秋月方として参戦し、竹の尾城を拠点の一つとしたが、黒田・小早川の軍勢に敗れている。『宗像追考』(文献32所収)に「上津役ノ城」として名が挙がる。

【概要】標高174mの丘陵頂部に東西20m弱、南北約40mの主郭を置き、そこから北西側へ延びる尾根上に約200m近くにわたって曲輪群が展開している。大小約10の階段状に並んだ曲輪群全体を横堀によって厳重に防御している様子を見て取ることができる。

【史料】なし

【参考文献】1～4.6～9,10,11,26,31,172,174



第79図 竹尾城縄張り図  
(文献11・村上勝郎・田中賢二作成)

筑前 211 市瀬城 いちのせじょう

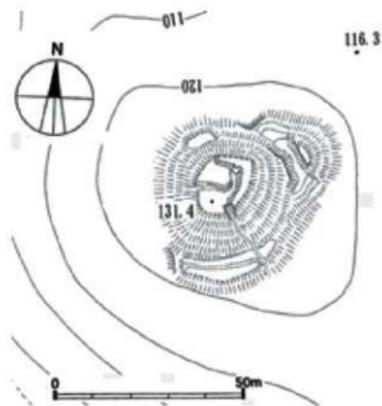
郡名 遠賀郡 別称 一瀬城 図幅名 徳力(西) / 八幡(西)  
種別 丘城 所在 北九州市八幡西区市瀬

【沿革】竹尾城と割子川を挟んだ向かい側の丘陵上に位置する。『本編』には「香月五三郎則村が初て築きし居城也。後に麻生氏の邑城なりしと云」とある。

【概要】竹尾城の北側の標高131m地点の頂部に約20m四方の主郭を築く。後世の改変等もあるが、元来は二段の曲輪ではないかとみられる。北東側に堀切1本を入れる。主郭側にも腰曲輪ともみられる平坦面があるが判然としない。50m四方にも満たない狭い城域しか持たない小規模城館である。

【史料】なし

【参考文献】1～5,7～11,26,31,172,174



第80図 市瀬城縄張り図  
(北九州市自然史・歴史博物館作成・提供)

筑前 212	べつとうやまじょう 別当山城	郡名 遠賀郡 種別 丘城	別称 なし 所在 北九州市八幡西区別当町	図幅名 八幡(西)
--------	-------------------	-----------------	-------------------------	-----------

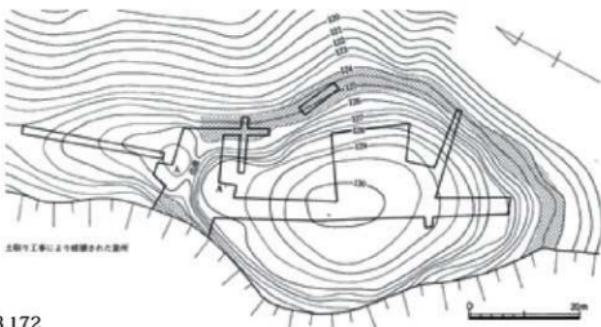
【沿革】帆柱山から西へ延びる尾根の先端部の小丘陵上の別当山山頂に位置する。別当山については『附録』に鷹見宮浮殿の記載が見られるくらいで、城館等についての記載は確認できない。

【概要】宅地開発に伴う調査に先立ち、昭和54年（1979）に新たに山城跡として確認がなされ、翌年発掘調査が行われ、城館遺構は全て消滅した。標高130mの頂部には南北約40m、東西約30mの主郭を置き、その北側に堀切1本を設け、堀切から主郭を取り巻くように帯曲輪（図中網掛け部）が展開している。堀切は幅約4m、深さは約2mで、表土により1mほど埋没していたことがわかった。土師器、擂鉢、青磁片などが出土した。

麻生氏もしくは香月氏に関わる小規模城館の一つ見ることができよう。城の南側の大字市瀬地内には小字「陣屋」があり、この城に関わる地名の可能性も考えられる。

【史料】なし

【参考文献】10,11,31,68,172



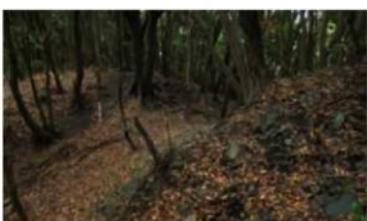
第81図 別当山城測量図（文献68）

筑前 209	ほばしらやまじょう 帆柱山城	郡名 遠賀郡 種別 山城	別称 なし 所在 北九州市八幡西区市瀬・熊手	図幅名 八幡(西)
--------	-------------------	-----------------	---------------------------	-----------

【沿革】標高617mの権現山から西へ派生して聳える支峰・帆柱山（標高488m）山頂に位置する。『本編』等には建久年間に宇都宮上野介重業が筑前へと下り、花尾城を取り立て、後に帆柱山に城を築き、麻生氏の始祖となったのが始まりとされる。その真偽は定かではないが、以後、中世を通じて頻繁に文献史料に現れる。天正14年（1586）には秋月方についていた麻生鎮里、統春らの拠点城郭であったが、黒田・小早川によって落とされている。その後は、黒田孝高家臣の三宅山太夫が城番として



第82図 帆柱山城石垣



第83図 帆柱山城堀切

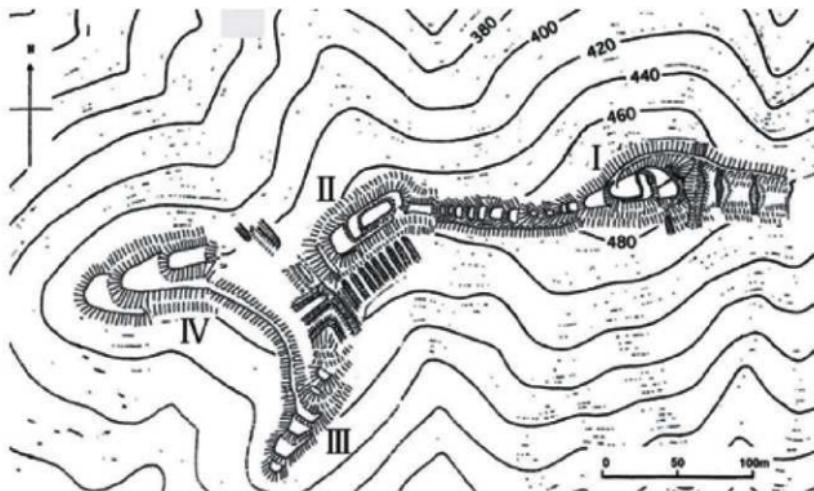
置かれたとされる。

【概要】帆柱山山頂に主郭を置き（I）、そこから西側に延びる尾根上に約400mにわたって曲輪群などの城郭遺構が展開する。曲輪群は大きくⅠ～Ⅳに大別でき、主郭を含むⅠは城内最高所を占めており、東側に大規模な堀切をはじめ何本か堀切を入れることにより城域を画している。Ⅰの西側は緩やかに尾根が下っていくが、尾根上には小曲輪がいくつも並ぶ。Ⅱはやや小高くなってしまっており、城の西側の中心ともいえる位置を占める。Ⅱの曲輪群の周りには敵空堀群や堀切群が構築され、尾根下からの攻撃に対する厳重な防備が窺われる。Ⅱから南と西へ二股に延びる尾根の突端にⅢとⅣの曲輪群が展開しており、ⅢとⅣとの間には通路状の平坦面も見られ、それぞれの連絡の意識が見られる。またⅣの曲輪群には曲輪の縁に土留めのための石垣遺構を確認することができる。

帆柱山城は花尾城と共に、洞海湾に臨む遠賀郡東部を抑えるための麻生氏の拠点としてふさわしい規模と防備の厳重さを見ることができる。

【史料】あり

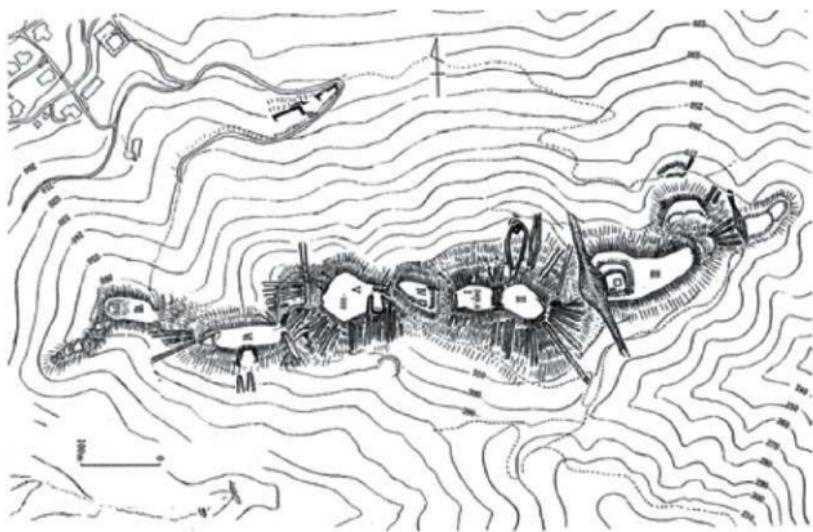
【参考文献】1～9,10,11,21,26,31,171,172,174,178



第84図 帆柱山城縄張り図（文献11・村上勝郎作成）

筑前 215	花尾城	はなおじょう	郡名 遠賀郡	別称 花尾山城	図幅名 八幡(西)
			種別 山城	所在 北九州市八幡西区鳴水・熊手・八幡東区前田	

【沿革】帆柱山から北へ派生する支峰花尾山（標高351m）山頂に位置する。『本編』には帆柱山城と同じく宇都宮重業が築城し、麻生氏代々の居城としての事績を書き連ねる。一次史料には文明年間以降、天文、永禄とたびたび合戦に関する記事が見られる。天正14年（1586）の黒田・小早川



第85図 花尾城縄張り図（文献178・八巻孝夫作成）



第86図 遠賀郡藤田村花尾山古城図（部分・国立公文書館蔵）

による帆柱山城における攻城戦の際に、帆柱山城と共に落城したとみられる。『福岡県の城』には小早川氏筑前入部の際に、小早川隆景の番城となったとあるが、出典は不明である。

**【概要】** 城域は花尾山山頂を中心に東西に延びる尾根上、約600mにもわたる。その尾根上には大きくⅠ～Ⅶの曲輪を並列させている。それらの曲輪のうち、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴの曲輪には土塁や石垣が付随する。特にⅠとⅡの間には土塁の通路とその周りを石垣で固めている様子が窺えるが、これにつ

いては近代以降の公園整備に伴う造作の可能性も考えるべきとの意見もある（文献 187）。しかしながら、江戸時代の絵図（第 86 図）に既にその場所に石垣で固められた通路状遺構（一と二の間）が描かれており、城郭遺構とみて問題ない。また、逆にⅣの曲輪は昭和 44 年（1969）のブルドーザー造成により一つの平坦面となっているが、絵図では二つの曲輪（三・四）として描かれ、しかも石垣を備えた様子も描かれている。V の曲輪は絵図の五に対応し、V の南側斜面にある石垣（第 88 図）も絵図にも描かれており、戦国時代のものとみてよいであろう。

また、曲輪群の斜面にはおびただしい畝状空掘群が構築されているが、注目すべきはⅡの北側斜面にある石垣の遺構である。長さ数十 m にもわたり二列の登り石垣を組み上げ、その最上部と最下部は二列の石列が結合し、最下部は井戸のように方形に組み上げたものである。

これについて江戸時代の絵図には、曲輪群の北側斜面に「城山ニ井ノアト在ト云未探」とあり、実際に調査は行っていないが井戸の存在を指摘している。おそらくこの石垣の遺構を指したものとみられる。また、文献 26（昭和 37 年（1962）木村幸雄による追録部分）には「花ノ尾城井戸」としてほぼ現在と同じ形状を記載する。また文献 22 には、大正 13 年（1924）発行の『黒崎商工案内』を引用し、「頂辺より高さ一間、巾七尺、石垣にて築きたる長堤の如きもの、両側に並列し、下ること二十五間、其の終点連結して井あり」とし、大正末期にもその存在を確認できる。

登り石垣の上面が階段状になっていることや、最下部外面の石垣が落し積み状となっていることから、公園整備等により改変が加えられていることは想定できるが、江戸時代の絵図に記載があることなどから、当初からの何らかの城郭遺構であることは肯定してよいと思われる。ただ、機能や性格については、井戸とそれを防御する石垣遺構とも取れるが、現段階では断定できない。また、築造時期も戦国時代の麻生氏段階に求めるのか、はたまた小早川氏、黒田氏段階まで下る可能性があるのかは今後検討を要しよう。

また、城内からは遺物が多く採集されており、明の染付・白磁の他、鉄滓、銅錢、鉄器などが見つかっている。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,26,31,171,172,174,177,178,187



第 87 図 花尾城曲輪 I の石垣



第 88 図 花尾城曲輪 V の石垣



第 89 図 花尾城曲輪 II 北側斜面の  
石垣遺構  
(上：「井戸」部分・下：登り石垣部分)

筑前 218	ちゃうすやまじょう 茶臼山城	郡名 遠賀郡	別称 大蔵城	図幅名 八幡(西)
		種別 山城	所在 北九州市八幡東区尾倉	

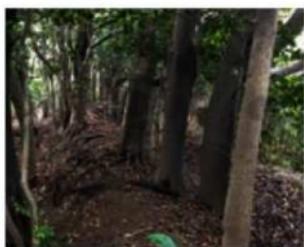
【沿革】皿倉山から北西へ派生する尾根上頂部に位置する。現在は大字尾倉の地内にあたるが、北西側は大字大蔵との境界線にあたり、地誌類の場所に該当する。『本編』「大蔵村古城」には、「大蔵村の上、尾倉村の境にあり。麻生氏の出城なりと云」とし、『附録』には「里民は茶臼山といふ」としている。『拾遺』には「大蔵村古城」を「茶臼山と云」とする一方で、「尾倉村古城」の項にも「山上には今一ヶ所茶臼山古城有」と記している。

【概要】皿倉山の北西、標高 294m の尾根の頂部に城を築く。最高所に約 20m × 40m の主郭を置き、主郭から北西側の尾根上に階段状に曲輪を 10 数ヶ所造り出し、全長は 100m を超える規模を有している。主郭の南西側には幅 10m にも及ぶ大堀切を設けて主郭を防御する一方で、堀切の東側からは主郭へと通じる通路状の掘り込みを確認することができる。堀切のさらに南西の山側には鉄塔が建っており、さらにその南西側に堀と土壙状の人工造成が見られる。その一部は山道や昭和初期の御大典記念石碑へ通じる道など、城郭とは無関係の造作もあるが、それだけで説明のつく造作ではなく、城郭遺構か否

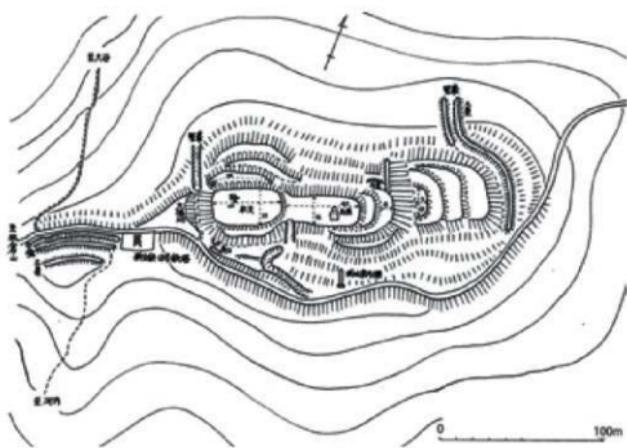
かも含め、今後検討を要する。

【史料】なし

【参考文献】1 ~ 4,  
7 ~ 9, 10, 11, 21, 22,  
26, 31, 172



第 90 図 茶臼山城南西側にある御大典記念碑（左）と土壙状遺構（右）



第 91 図 茶臼山城縄張り図（文献 10・廣崎篤夫作成）

筑前 224 花房山城

郡名 遠賀郡  
種別 山城

別称 花房城  
所在 北九州市若松区畠田・二島

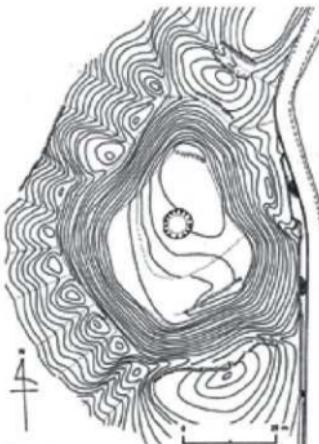
図幅名 八幡(西)

【沿革】洞海湾の奥に北面する岩尾山（標高 220m）の峰続きの頂部に位置する。『拾遺』には「或説に麻生遠江守が居とあり」としている。文献26には「此は山鹿遠江守仲中の居城ならむ、又或は麻生上総介家見の居城ならむか」とある。

【概要】約 40m 四方の曲輪の単郭構造であるが、曲輪の南北の尾根続きには堀切とそれに伴って土塁が構築され、そして、西側斜面には横堀と竪堀約 10 本からなる歎状空堀群が巡らされており、単郭ながら嚴重な防備を見て取ることができる。一次史料には出てこない城ではあるが、過剰な防御遺構の在り方から、戦国時代末期にかなり重要な役割を担ったとみられ、花尾城や帆柱山城などの秋月方にあった麻生氏に関連する出城とも考えられる。

【史料】なし

【参考文献】1 ~ 10,11,22,24,26,31,174,187



第92図 花房山城測量図  
(文献 11・中村修身作成)

筑前 226 楽丸城

郡名 遠賀郡  
種別 丘城

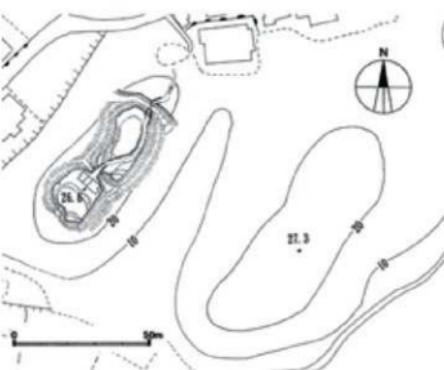
別称 安屋城  
所在 北九州市若松区安屋

図幅名 岩屋(東)

【沿革】響灘に面した安屋集落にほど近い丘陵上に位置する。『拾遺』や『全誌』では「城山」として紹介されるが、『筑前町村書上帳』の「遠賀郡出郡覚」には「楽丸古城」として青柳種信が現地を踏査して、堀切があることや、近傍に、城主・天野兵内の墓などを記載する。

【概要】安屋の中の楽丸集落に近い標高 26m の低丘陵上に位置する。約 20m 四方の主郭に堀切を挟んで 30m × 20m の曲輪を置き、その北東側にさらに堀切をもう 1 本設ける。主郭は後世の墓地となっており、一部改変が見られるが、基本的な遺構配置に齟齬はないものとみられる。

【史料】なし 【参考文献】3,4,10,11,24,26,31



第93図 楽丸城構張り図  
(北九州市立自然史・歴史博物館作成・提供)

筑前 227 小敷城 こしきじょう

郡名 遠賀郡

別称 なし

図幅名 折尾(東)

種別 山城

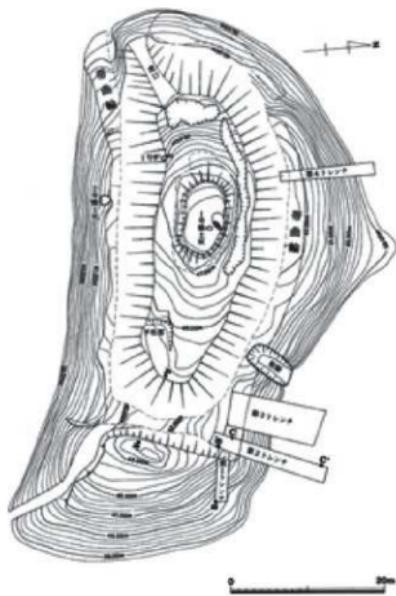
所在 北九州市若松区小敷

【沿革】江川南岸の丘陵地帯、舟尾山（標高 68m）から北西へ派生し、江川に突き出した半独立丘陵上に位置する。字は「城ノ下」で城館関連地名が残るが、城館との伝承等は一切残されておらず、土地区画整理事業に伴う発掘調査によって発見され、平成 16 年（2004）に城域全体が調査され、調査後、完全に消滅した。

【概要】丘陵頂部に東西 38m、南北 12m の楕円形の主郭を置き、その中心部分に 9 m × 5 m の高まりが見られた。主郭の東側に堀切 1 本、北側斜面に竪堀 1 本が確認されたほか、それ以外の三方には、幅 2 ~ 3 m の帶曲輪が確認され、堀切の堀底部と帶曲輪は接続していた。

また、焼土坑や炉跡等も見られたものの、城郭との関連は不明である。出土遺物は、土師器小片を除き、縄文土器、近世後期の磁器類など城郭とは無関係のものがほとんどであった。室町～戦国時代の城郭とみられる。

【史料】なし 【参考文献】71



第 94 図 小敷城測量図（文献 71）



第 95 図 小敷城遠景  
(発掘調査時・北九州市教育委員会提供)



第 96 図 小敷城堀切  
(発掘調査時・北九州市教育委員会提供)

筑前 228 古賀城

郡名 遠賀郡  
種別 山城  
別称 なし  
所在 遠賀郡水巻町古賀

図幅名 折尾(西)

【沿革】水巻町の遠賀川東岸には、明神ヶ辻山（標高 96m）、多賀山（標高 103m）、豊前坊山（標高 84m）の独立峰があるが、その内の遠賀川に面した豊前坊山（『全誌』では城山、古賀岳と称する。）山頂に位置する。近世～近代の地誌類では、麻生鎮里の端城とされる。麻生文書には、天正 14 年（1586）10 月 4 日に秋月方にあった古賀城を、剣岳城、浅川城とともに、宗像・麻生の軍勢により攻め落とされたことが記される。

【概要】豊前坊山山頂は、南北約 40m、東西約 15m の平坦面となっており、古賀城の主郭があったことが想定されるが、近世の高住神社や近年の展望台整備により平坦面上はかなりの改変を受けている。登山道に面した北側斜面には、高さ約 3 m の隅角を持った立派な石垣（第 99 図）があるが、直上には地蔵堂があり、近世以降に地蔵堂整備に伴って積まれたものとみられる。ただ、山頂の東斜面や南斜面には神社とは直接関係がなさそうな石垣（第 100 図）もあり、これらについては城郭に伴うもの的可能性がある。また、北側の久我神社近辺には、立屋敷などの関連地名が残されており、館などの関連遺跡がある可能性が指摘できる。

【史料】あり

【参考文献】

1 ~ 4.7 ~ 11.25, 27,

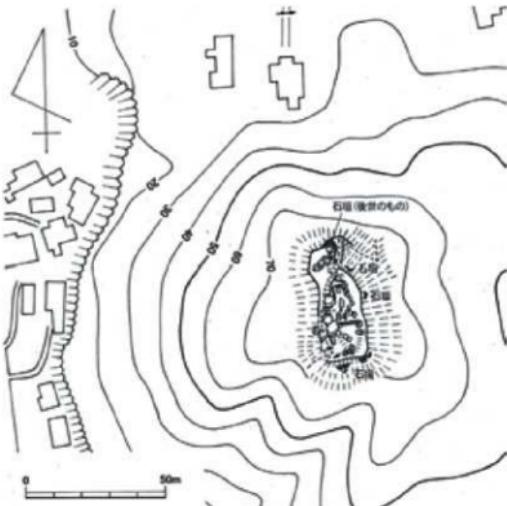
第 99 図 古賀城石垣（後に積まれたもの）

170, 173

第 100 図 古賀城石垣（南側斜面）  
(城郭に伴うもの)



第 97 図 古賀城遠景



第 98 図 古賀城縄張り図（事務局作成）



筑前 229 猫城

郡名 遠賀郡  
別称 月瀬城  
種別 丘城 所在 中間市上底井野

図幅名 中間(東)

【沿革】遠賀川下流域西岸、中間市上底井野には平野の中に低独立丘陵が所々に残存しているが、そのうちの一つ、猫城山（標高 19m）の頂部に位置する。近世～近代の地誌類には、元々麻生氏の出城であったのが、天正 6 年（1578）に宗像氏の出城となり吉田倫行が城代となるが、天正 8 年に大友方の毛利鎮実が猫城を攻めたが落とせなかったことが記される。



第 101 図 猫城遠景

【概要】現在、城のある丘陵頂部は、八幡宮の境内地となっており、約 30 m × 約 50m の平坦地が二段に分かれているが、八幡宮の社殿や新しい石垣がみられ、かなり削平を受けているようであり、平坦面の中心部分は赤土の地山が露出しているため、城郭があった当時の様子をどのくらい反映しているかは不明である。削平は受けているものの、おそらくは基本的な曲輪配置はさほどは変わらないものとみられる。また、丘陵の麓、北側を中心農業用水路が巡っており、かつては水堀の跡との伝承もあるが定かではない。丘陵南側の上底井野集落部分に館などがあった可能性も考えられるが、現在見られる姿は近世以降の街並みであり、かつての様相は、よくわからないのが現状である。

【史料】なし 【参考文献】1 ~ 11,25,174



第 102 図 猫城縛張り図（事務局作成）

筑前 230	じょうのこしじょう 城之越城	郡名 遠賀郡	別称 戸切城	図幅名 折尾(西)
		種別 山城	所在 遠賀郡遠賀町尾崎	

【沿革】遠賀町と岡垣町の境にある山田峠の東北の丘陵頂部に位置する。現在の字は「上ノ越」であるが、昭和初期の陸地測量部の地形図には「城之越」とあり（第104図）、城郭に関連する地名であることがわかる。地元では昭和40年代頃までは、岡垣町の地名を採って「戸切城」として伝承されていたようである（廣崎篤夫氏の御教示による）。

【概要】標高108mの丘陵頂部を中心に城郭遺構が展開している。頂部には、徑



第103図 城之越城遠景



第104図 城之越城位置図 (1/25,000「折尾」を一部改変)  
(昭和11年陸地測量部作成・福岡県立図書館提供)



第105図 城之越城縄張り図 (事務局作成)

15mほどの主郭を置き、北東側と南側に深さ1mにも満たない堀切によって、尾根上からの侵入に備える。そして、それらの堀切の堀底から、主郭の周囲を帯曲輪が展開している。

なお、これらの外側にも平坦な地形が多く見られるが、すべて自然地形であり、城郭遺構を確認することはできない。小規模な城館であったとみられる。

【史料】なし

【参考文献】10.11

筑前 233 山鹿城

郡名 遠賀郡

種別 丘城

別称 なし

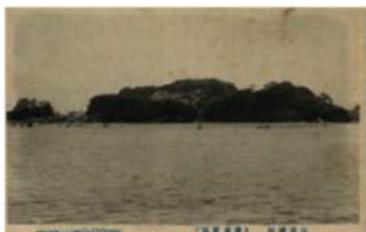
所在 遠賀郡芦屋町山鹿

図幅名 折尾(西)

【沿革】遠賀川河口付近、芦屋の対岸、汐入川が遠賀川に流れ込む山鹿の丘陵上に位置する。近世～近代の地誌類には、藤原秀郷の弟藤次が築城し、子孫は山鹿氏を名乗ったが、兵藤治秀遠は平家方



第106図 山鹿城遠景（2014年撮影）



第107図 大正～昭和初期の山鹿城（絵葉書・個人蔵）

につき滅亡。その後、東国から入部した宇都宮一族の麻生氏の拠点城郭となり、花尾城と共に重要視された。天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州平定により、麻生氏は筑後の小早川家配下とされたため、山鹿城は廢城となった。

【概要】現在、城山公園として整備されているが、古くより斜面崩落が起こっていたようであり（第107図）、また西側斜面は戦後、芦屋競艇場建設によって大幅に削られてい るため、地表観察のみでは城郭遺構の判断は困難である。江戸時代の絵図と比較すると（第108・109図）、絵図で「本丸」と「三」で朱書きされた曲輪は、現状図ではⅠとⅢにあたり、Ⅲの南西隅を除き、さほど変化していないことがわかる。しかし、「二」の曲輪は、現状では西（左）側が大幅に消滅しており、「一」の南側にわずかに残るのみとなっている。

また、絵図には「三」の西側にも南



第108図 遠賀郡山鹿古城図（国立公文書館蔵）

北に細長い曲輪が描かれており、これは現状図でのIVにあたるものと思われる。一方、絵図の「二」の南（下）側には「石取場」の記載があり、江戸時代後期の段階で既に採石により消滅していたとみられる。そして、「三」の東側にも「ハタ」の記載があるため、IIIの北側や北東側の小平坦面群は、近世の耕作による改変とも考えられる。ただ、IIIの北側斜面では、昭和52年（1977）に中世墓の発見・発掘調査が行われており、地下遺構は残存しているものとみられる（芦屋町教育委員会 1978『山鹿城址の中世火葬墓』）。また、丘陵北東隅にも、小曲輪らしき記載が三箇所、絵図には見られるが、既に削られている

かもしくは後世の耕作等により改変されているものとみられる。このように曲輪や切岸以外は、堀などの防御遺構を現状で確認することはできない。

以上のように、後世の改変が見られるものの、近世の絵図等などとの比較により、少なくとも4箇所曲輪が残存している可能性を指摘することができる。これらを域域とみると、南北の全長100mを超える規模となる。

遠賀川下流域周辺の城館は、地形の制約もあってか猫城（中間市）、岡城（岡垣町）など、堀などの防御遺構も乏しく、低丘陵上に立地するものが多いが、この山鹿城もその部類に属するものとみられる。ただ、それらの中でも最大の規模を誇っているのは、国人領主・麻生氏の遠賀郡内における拠点城郭としての性格を如実に表しているものと思われる。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,26,28,174



第109図 山鹿城縄張り図（事務局作成）

**【沿革】**三里松原に流れ込む汐入川西岸、吉木の集落の西にある低丘陵上に位置する。地誌類には天文年間に麻生隆守が城主で、その後大友家の家臣、瓜生貞延、のちに宗像氏の出城となつたとしている。

**【概要】**標高40mの低丘陵上の頂部に南北約20m、東西約10mの主郭Ⅰ(伝本丸)を置き、その北側に同規模の曲輪Ⅱ(伝二の丸)、さらに北側の下段に曲輪Ⅲ(伝三の丸)を配置する。主郭Ⅰの北側は、かつては峰続になつてゐたようであり、そのやせ尾根上には4本ほどの堀切の痕跡が確認できる。

また、丘陵西側から北西側は後世の耕作等による改変が激しく、城郭の痕跡が残されているかは不明である。Aの場所は北西側からの上り口にあたり、土壙状の高まりも見られ、虎口という見解もあるが、おそらく耕作等による改変とみておくべきと思われる。城の西側には「門田」という小字が残り、城の大手にあたるとも言われているが、城の東側には、城主麻生隆守の菩提を弔つた隆守院や、古い方格地割なども残されており、「矢口」「正矢口」「堀毛」「倉丸」「狹間」「古小路」などの関連地名が残るため、むしろこちら側が正面ではないかと考えられる。

**【史料】**なし

**【参考文献】**1~5.7~9.  
10.11.25.30.174.212



第110図 岡ノ城縄張り図(事務局作成)



第111図 岡ノ城から東を望む  
(手前に汐入川、奥に花尾城・  
帆柱山城などがみえる)



第112図 麻生隆守墓

筑前 238 龍昌寺山城

郡名 遠賀郡  
種別 山城

別称 鍋倉城

図幅名 吉木(東)

所在 遠賀郡岡垣町高倉

【沿革】遠賀郡と宗像郡との境に聳える孔大寺山の東麓、龍昌寺の標高143mの裏山の頂部に位置する。文献30には「龍昌寺山城」として『吉木旧記』(原典不明)を引用し、麻生隆守が吉田貞延に攻められて討ち死にした際、隆守が普請中であった高倉龍昌寺山の城が、内通によって吉田方に落ちたという内容が記される。

【概要】龍昌寺の南西約200mの頂部には、約20m規模の主郭が築かれ、その南側に小曲輪を置いた上で堀切1本によって、域域を画している。文献30には曲輪3、堀切1があるとしており、曲輪の残る2つは東側の標高122m、106mの頂部の事を指しているものと思われるが、ここは自然の平坦地形であり、城郭遺構を確認することはできない。

【史料】なし 【参考文献】11.30

筑前 239 熊山城

郡名 遠賀郡  
種別 山城

別称 熊鷲宅

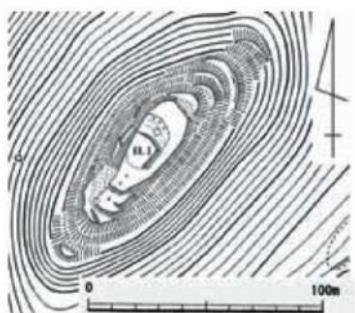
図幅名 吉木(東)

所在 遠賀郡岡垣町三吉

【沿革】三吉集落の南西にある低丘陵「熊山」の山頂に位置する。『拾遺』「童王古城」の項に「熊山有。山頂に平地有。村民ハ熊鷲の館址と云。」とあり、古代の岡県主の館跡と伝承する。古代豪族の館と伝承されるが、『城郭』において初めて戦国期城館の可能性が指摘され、熊山城と仮名された。

【概要】熊山山頂に、概ね全長50m、幅約20mの主郭を置き、その北側の尾根上には、階段状に小曲輪を5段ほど配置し、その反対の南側の尾根上にも、3~4段の階段状の小曲輪が配置される。

小曲輪の縁辺部には土壘状の高まりを持つものも



第114図 熊山城縄張り図(文献212・藤野正人作成)

見られるが、堀切などの防御遺構は確認できない。

地誌類等には、古代豪族の館跡とされてはいるが、近辺には龍昌寺山城や城之越城など、戦国期城館という伝承がほとんど見られないにもかかわらず、戦国期城館の痕跡を残す城跡が見られることから、ここもまたそのような伝承に乏しい戦国期城館の一つとしておきたい。

【史料】なし 【参考文献】3.4.11.25.30.212



第115図 熊山城遠景

筑前 241	あさぎいやまじょう 雨乞山城	郡名 遠賀郡	別称 三吉城・手野城	図幅名 吉木(東)
		種別 山城	所在 遠賀郡岡垣町手野・三吉	

【沿革】孔大寺山から北東へ派生する尾根上、手野と三吉の境界部分の頂部に位置する。『拾遺』には、永承年間に大内義興から宗像四郎氏佐に送られた文書に「天野（手野の旧称）要害落居之由・・」とあるとし、さらに『宗像追考』を引用し、宗像氏貞が三吉城（雨乞山城）を港湾の押さえとして築城を始めようとしたが、奉行人の反対に遭い、叶わなかつたことなどが記されている。

【概要】標高 232m の雨乞山（城原山）山頂には全長約 100m にわたって城域が広がる（図中 I）。山頂部の主郭の周囲には幾重にも腰曲輪が巡り、南側には堀切ともみられる堅堀状遺構を確認することができる。

また、I の曲輪群から北東約 300m 地点にある標高 174m の頂部にも梢円形の曲輪といくつかの小曲輪が見られ、堀切などは見られないものの、城郭遺構と思われる。

雨乞山城から眼下には麻生氏の岡ノ城を見下ろすことができ、宗像氏の遠賀郡進出の足掛かりとした城郭とも考えられる。

【史料】なし 【参考文献】1～5.7～11.25.30.207



第116図 雨乞山城縹張り図（文献 207・藤野正人作成）

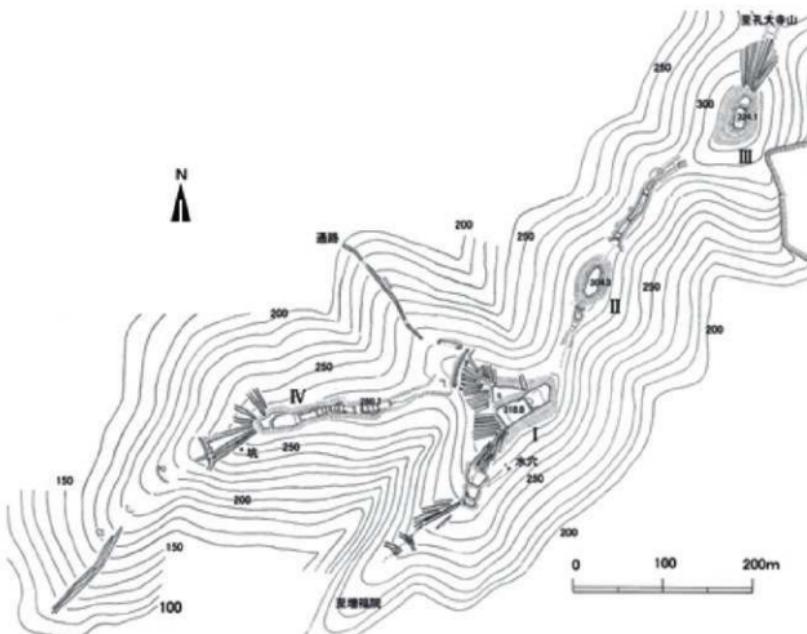
③宗像郡

筑前 243	はくさんじょう 白山城	郡名 宗像郡	別称 なし	図幅名 吉木(東)
		種別 山城	所在 宗像市山田	

【沿革】宗像郡と遠賀郡との境に聳える孔大寺山の西側の支峰・白山山頂に位置する。『拾遺』には宗像大宮司家36代の宗像氏国が築城し、代々宗像氏の居城として機能した。また、宗像大宮司家最後の当主・氏貞も『本編』には12年間居城としたとある。

【概要】白山山頂（標高318m）を中心に尾根上の頂部ごとに4箇所の曲輪群（I～IV）が配置され、全長600m以上にも及ぶ。曲輪群Iから南西側と西側にそれぞれ尾根が延びているが、その尾根方向の斜面には20本にも達する数の歓状空堀群が構築され曲輪群IVへ向かう西側の尾根には堀切1本が施される。また、曲輪群IVの南西麓方向にも歓状空堀群と堀切が置かれ、麓側に対する防御を厳重にしている。また孔大寺山に登る尾根上にある曲輪群III（標高324m）の北東側にも5本の豊堀が見られ、孔大寺山側にも防御の構えを見せている。その一方、曲輪群IとIIIとの間にある曲輪群IIには堀切や豊堀などの防御遺構はなく、尾根上の通行をはかったものとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1～4,7～9,10,11,33,37,207



第117図 白山城縄張り図（文献11・藤野正人作成）

筑前 245 城ノ腰城

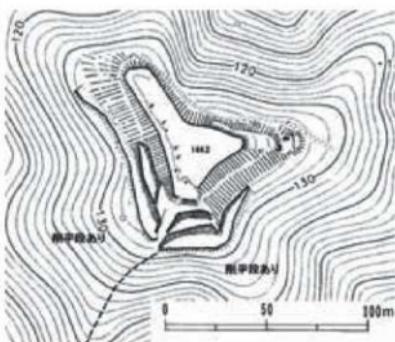
郡名 宗像郡 別称 地島城  
種別 山城 所在 宗像市地島

【沿革】玄界灘に浮かぶ地島の北東、標高 144m の祇園山山頂に位置する。『拾遺』「地島」に「白浜の上に高山あり。城腰と云。城址有。城主詳ならず」とある。『全誌』には「城ノ腰城址」として名を挙げている。

【概要】白浜港を見下ろす祇園山山頂に南北約 50m、東西約 30m の不整な形状の平坦面が見られる。周囲には後世の耕作等による改変とみられる小平坦面が点在しており、主郭部分も後世の改変を受けている可能性が高いが、何らかの城郭遺構は存在したものとみられる。

【史料】なし

【参考文献】3.4.8 ~ 11.33.35.207



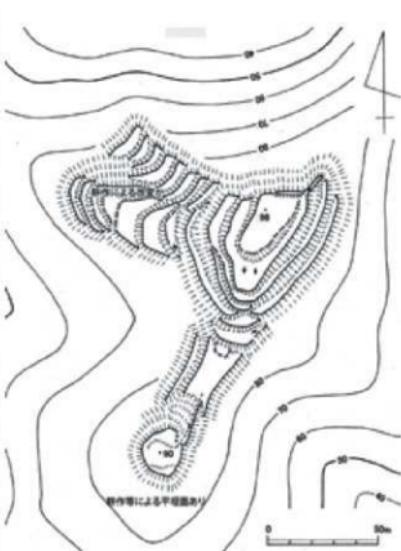
第 118 図 城ノ腰城縄張り図（文献 207・藤野正人作成）

筑前 246 勝島城

郡名 宗像郡 別称 なし  
種別 山城 所在 宗像市神湊

【沿革】神湊漁港の西に突き出た草崎半島の突端から海上約 500m に浮かぶ勝島は、現在無人島であるが、昭和 36 年（1961）まで人家があった島である。『拾遺』には「勝嶋古城」として「山上に城址有。平地二反許、宗像氏貞永禄の比、隣国の敵を避て大嶋に渡海有し時の端城なりと云」とある。『宗像追考』（文献 32 所収）には、永禄 3 年（1560）に宗像氏の家臣、占部尚安が勝島から草崎にわたって草崎城を築いたことが記される。島内には万工門屋敷という占部甲斐守の屋敷跡があったとされる（文献 35）。

【概要】勝島の高所は標高 98m と 90m の二か所あり、100m あまり離れているが、その二箇所には、現状で平坦面が確認される。また、それら二箇所の間の尾根の鞍部や、そこから海へ下る尾根や谷間には数多くの階段状の小平坦面が展開している。土壠状の高まりも見られるが、これらのはほとんどは後世の耕作等による改変地形であると思われる。無人島に渡島する機会を得たため、今後



第 119 図 勝島城縄張り図（藤野正人・事務局作成）

の検討のために城郭に直接関係のない平坦面群も図化している。

なお、『拾遺』には正徳・享保年間に勝島に南京姫商による密貿易を取り締まるために番所を置いたとされ、文献35には標高98mの最高所に遠見番が置かれたとするが、現状では番所の痕跡と確定できるものは何も確認できなかった。

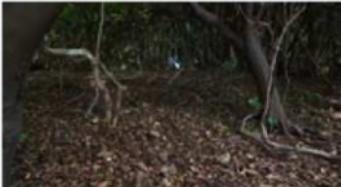
いずれにせよ、堀などの顯著な防御遺構を持つ城ではなかったものとみられ、近辺の海に臨む城館と同様に単純な構造であったものとみられる。

【史料】なし

【参考文献】1～3,5,7～11,33,35,207



第120図 勝島遠景（最高所が城跡）



第121図 島内最高所の平坦地形（勝島城跡）

筑前 247	草崎城 くさづきじょう	郡名 宗像郡	別称 四塚城・草崎山城	図幅名 神湊（東）
		種別 山城	所在 宗像市神湊	

【沿革】玄界灘に突き出た草崎半島の丘陵上に位置する。一の岳から四の岳まで四つの峰からなるため、草崎は四塚とも呼ばれる。『宗像追考』（文献32所収）には永禄3年（1560）に占部甲斐守尚安が勝島から草崎にわたって城を築き、大島からの軍勢を合わせて許斐城を奪還した記載がなされている。『本編』には宗像大宮司16代の氏俊の出城がある。

【概要】四つの峰の内、一の岳（標高69m）と二の岳（標高82m）の頂部に平坦面群を確認することができる。頂部の



第122図 草崎城遠景（勝島から）



第123図 草崎城縄張り図（文献11・藤野正人作成）

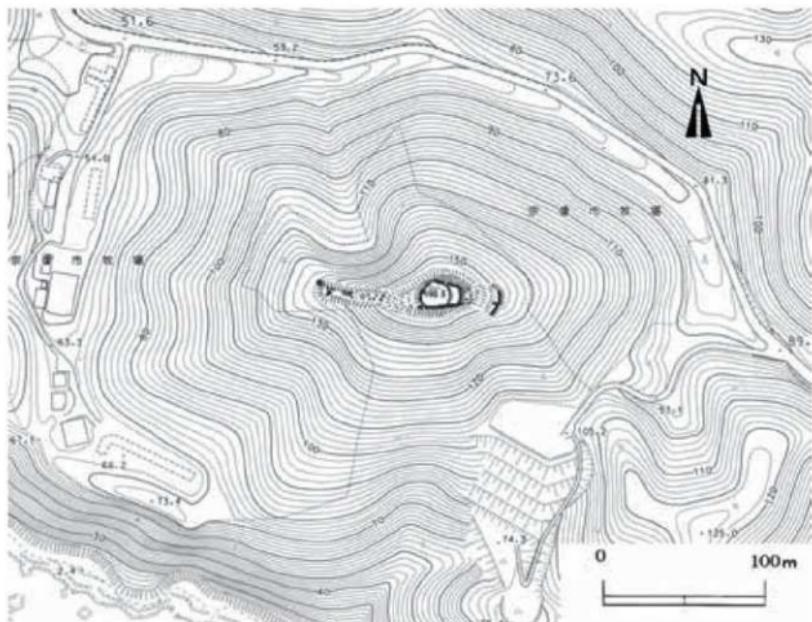
周辺にも図化していないが、平坦面が展開している。後世の耕作等による改変が想定されるが、頂部周辺については、草崎城の曲輪とみてよいと思われる。堀などの顯著な防御遺構等は見られない。  
【史料】なし 【参考文献】1～5.7～9,10,11,33,35,207

筑前 248	おおしまじょう <b>大島城</b>	郡名 宗像郡 別称 なし	図幅名 神湊(西)
		種別 山城 所在 宗像市大島	

【沿革】大島の最高峰、中津宮のある御岳（標高 214m）の南西約 1 km にある。『拾遺』には「大宮司の城山」と称し、御岳の西海岸の丸く高い峰にあるとする。永禄 2 年（1559）に大宮司宗像氏貞が避難したことなどが記される。『全誌』には、「宗像大宮司氏貞の時、乱世なれば大島を以て宗像のつめの城とせり。要害よければなり。是に依て許斐安芸守氏鎮、占部八郎貞保、吉田兵部少輔貞勝三人を遣て常に守らしむ。永禄二年己未には、氏貞も隣国の敵を此に避て、翌年まで在城せり」とある。

【概要】御岳の南西約 1 km の頂部（標高 160m）に主郭を置く。主郭の規模は南北約 10m、東西約 20m と小さく、周囲には土留めと思われる石列や石垣が見られる。堀などの顯著な防御遺構を確認することはできない。非常に小規模な城館である。

【史料】なし 【参考文献】2～5.8～10,11,33,36,207



第 124 図 大島城縄張り図（文献 11・藤野正人作成）

## 筑前 249 草場城

郡名	宗像郡	別称	平等寺城・草場山城	図幅名	筑前東郷(東)
種別	山城	所在	宗像市平等寺		

【沿革】萬岳城のある城山の北に聳える金山から南へ派生する尾根上(草場山)に位置する。城からは南東側に宗像から岡垣へ抜ける石峠を見下ろす位置にあたる。『拾遺』には白山城(筑前 243)の出城とし、『全誌』では杉権頭が一時在城したとする。

【概要】標高 237m の草場山山頂を中心に曲輪群Ⅰが形成され、そこから西へ約 200m あまりにわたって、細長い曲輪群が階段状に展開する。西側先端部分には標高 216m の頂部があり、山頂と同規模の曲輪群Ⅱが見られ、その南側には堀切 1 本が作られる。また、山頂の東側、金山へと登る尾根筋上には三本の堀切で尾根を分断して防御する。石峠を押さえる要衝の地を白山城の出城したものと思われる。

【史料】なし 【参考文献】1 ~ 5, 7 ~ 9, 10, 11, 33, 37, 210

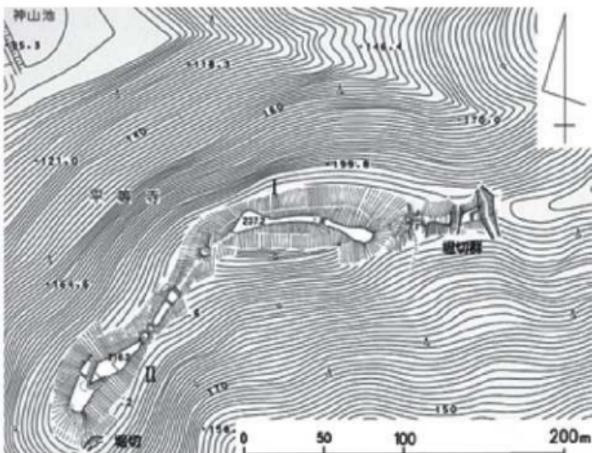
## 筑前 250 上山堡

郡名	宗像郡 / 遠賀郡	別称	なし	図幅名	筑前東郷(東)
種別	山城	所在	宗像市山田・遠賀郡岡垣町高倉		

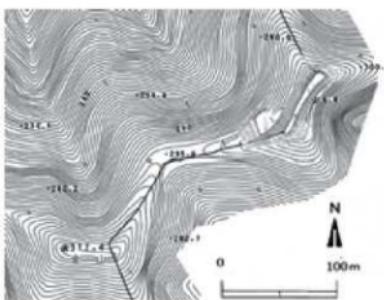
【沿革】『拾遺』「草場古城」に「谷(上山谷)を隔て北なる茂山を上山と云。山上に平地少希有。草場山よりは高し。遠方より能見ゆ。堡址なるべし。」とある。草場城の北には小字「神山」があり「上山」が訛じたものとみられる。

【概要】金山山頂(標高 317m)の東側の峰の頂部(標高 316m)に想定される(ただし小字「神山」地内でなく確定ではない)。尾根筋にそって幅約 10m の平坦地が約 100m 繼続するほか、西側斜面に平坦面が見られる程度の単純な縄張りである。

【史料】なし 【参考文献】3, 4, 11, 210



第 125 図 草場城縄張り図(文献 210・藤野正人作成)



第 126 図 上山堡縄張り図(藤野正人作成・提供)

筑前 251 蔦岳城

郡名 宗像郡／遠賀郡 別称 岳山城・赤間山城・赤馬山城・城山城  
 図幅名 筑前東郷(東) 種別 山城 所在 宗像市陵巣寺・遠賀郡岡垣町上畠

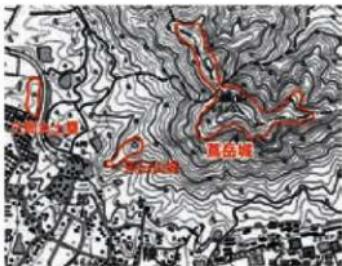
**【沿革】**小倉方面から博多へ抜ける交通の要衝、赤間宿の背後に高く聳える城山（標高 369m）の山頂を中心とし、東西約 800m、南北約 500m の広大な範囲に城郭遺構が展開する大規模な城郭である。近世以降の地誌類はもとより、一次史料にも「岳山」、「蘿（葛）岳」として頻繁に登場する宗像大宮司家最後の当主・宗像氏貞の居城として知られている。『本編』によると、小早川隆景が天正 15 年（1587）に筑前を拝領した際に、当城を破却するように命ぜられ、翌年破却されたと記される。

なお、『種々』には、「葛岳城」や「岳山城」の名称は挙げられていないが、赤間町葛嶽に「葛ヶ嶽城址（宗像氏）」なる記載が見られる。赤間周辺に葛嶽という山名や地名が確認できることから、「葛嶽」を「葛嶽」と誤記したものと思われる。

**【概要】**城域は、大きく城山山頂一帯の曲輪群 I（主城部）と、その北西側の尾根上の曲輪群 II に二分される。標高 369m の最高所 A に東西約 50m、南北約 30m の主郭を置き、そこから南西方向と東側へ延びる尾根上に曲輪群を階段状に配置するが、それらの周囲の斜面上には数十本にも及ぶ敵状空堀群によって防衛する。そして、さらに東側の尾根の鞍部に堀切を設け、その東側に曲輪 B を置く。B から東側については、堀切を幾重にも施し、曲輪 C をさらに設けて東側の尾根の突端は堀切によって城域を画している。曲輪群 I は全長 800m にも及ぶ。曲輪 A の南斜面には城郭に伴うものと思われる石垣（第 128 図）がある他、周辺では巴文軒丸瓦や宝珠文軒平瓦も採集されており、瓦葺の城郭建築があったものとみられる。

一方、曲輪群 II は全長約 500m の範囲で確認できる。『宗像追考』（文献 32 収所）のいう所の、石峠の口にある外曲輪とみられる。曲輪 D と E が中心的な曲輪となり、尾根上に小曲輪をいくつも配し、それらの周囲は曲輪群 I と同様に、敵状空堀群や堀切によって厳重に防備している。国人領主宗像氏の最後の拠点城郭にふさわしい「当国無双の城」と言えよう。

また、葛岳城周辺には関連する城館遺跡として、峰続きに茶臼山城（筑前 252）などがある。また、茶臼山城の西、三郎丸の丘陵部には、現在も横堀二本とそれに付随する土塁遺



第 127 図 葛岳城及び周辺城館位置図  
 (国土地理院発行 1/25,000 地形図「筑前東郷」を一部改変して作成)



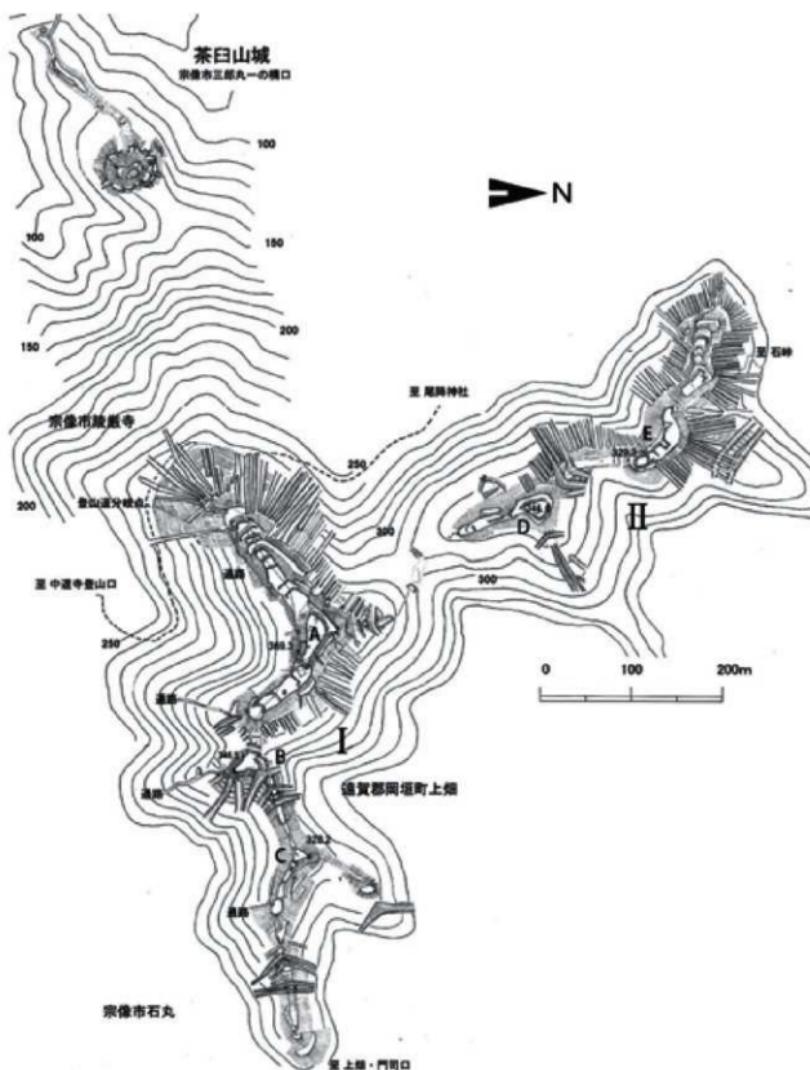
第 128 図 葛岳城石垣（曲輪 A 南斜面）



第 129 図 葛岳城堀切



第 130 図 葛岳城からの眺め  
 (白山城・玄界灘方面)



第131図 蔦岳城縄張り図（文献11・藤野正人作成）

構が残され、「三郎丸土塁」として周知の包蔵地となっている（文化財番号 00272）。土塁の南側の谷は「城ヶ谷」と呼ばれることや、篔岳城への登山口の一つでもあるため、篔岳城防衛に関連した城館遺構であろう。

また城の南山麓には番所を置いたといふ「赤城、城腰、草場」などの他、関連する地名が多数見受けられる。

【史料】あり

【参考文献】1～4,8,9,10,11,33,37,199,

207,210



第132図 三郎丸土塁の横幅



第133図 三郎丸土塁縛張り図（文献207・藤野正人作成）

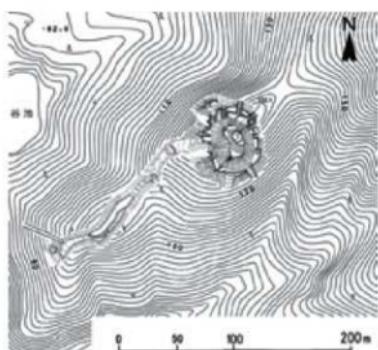
筑前 252	茶臼山城	ちやうすやまじょう	郡名 宗像郡	別称 なし	図幅名 筑前東郷(東)
			種別 山城	所在 宗像市三郎丸	

【沿革】『種々』の赤間町三郎丸に「茶臼山城」として名称が挙がるのが初出である。篔岳城の南西側に位置する。

【概要】篔岳城主郭から南西へ下る尾根上に立地する。標高 152m の丘陵頂部に約 10m 規模の主郭とその周りに腰曲輪を巡らす。腰曲輪は一部横堀状となり、間隔をおいて放射状に畝状空堀群を 10 本ほど設けている。南西へ尾根を下った先には堀切と細長い平坦面を設ける。篔岳城の出曲輪が、『種々』の段階で篔岳城と別の城と認識されたものとみられる。

【史料】あり

【参考文献】5.8～10,11,207,210



第134図 茶臼山城縛張り図（文献11・藤野正人作成）

筑前 256 名残城

郡名 宗像郡 别称 德重城・櫓(縁)城 図幅名 筑前東郷(東)  
種別 山城 所在 宗像市名残

【沿革】宗像市外を流れる釣川流域、名残の標高107mの丘陵上に位置する。『附録』には「平地五畝計あり。其下櫓有て茶臼に似たり。故に村民ハ茶臼山ともいふ。其西北に平地三畝計あり。端城の跡ならんか」とある。『拾遺』には、宗像氏統の要請により大内義隆家臣の黒川隆尚が名残城に入城したことが記される。

【概要】丘陵頂部に南北約50m東西約20mの主郭を置き、その周間に細い幅の腰曲輪を巡らす。「櫓(縁)」と呼ばれる所以である。頂部から南西側に延びる尾根上には小曲輪を階段状に配置すると共に、北西側へ延びる尾根上には、堀切2本で区切った外側にさらに曲輪を置き、その北西側も堀切1本により防御している。地誌類では大内氏関連の城郭であったことがわかるが、大内氏滅亡後は宗像氏の出城となったものと思われる。

【史料】なし 【参考文献】1～4.7～10.11.33.37.207.210



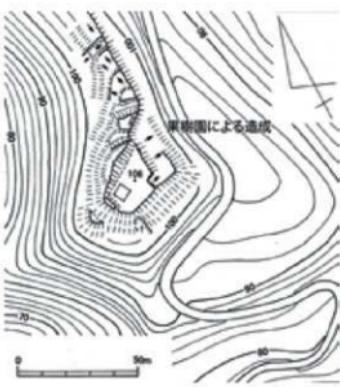
第135図 名残城縄張り図(文献11・藤野正人作成)

筑前 259 大障子城

郡名 宗像郡 别称 津瀬城・多礼城・瀧口城 図幅名 筑前東郷(西)  
種別 山城 所在 宗像市多礼

【沿革】宗像大社から釣川を挟んだ東側、鎮国寺の南側背後の丘陵上に位置する。『附録』では宗像氏貞の居城、『拾遺』では宗像大宮司家代々の城跡とする。『全誌』では上記の内容に加え、「津瀬ノ城と云しも是なるべし」とし、少弐直資が出した書状に由比重留次郎正雄がこの城における忠節を記したものがあるとする。『種々』に「瀧口城址(少弐直資)」とあるのはこれを示しているものと思われる。

【概要】鎮国寺の南の裏山の頂部からさらに南へ下った丘陵頂部に位置する。主郭があったとみられる標高106m地点は貯水施設等の建設により本来かなり削られており、旧状を残していないが、現状とほぼ同規模の曲輪があったものと思われる。その東側は果樹



第136図 大障子城縄張り図(事務局作成)

園造成により大々的に改変がなされ、旧状を推察するすべもないが、北側から西側にかけてはかつての地形を残しており、部分的ではあるが、北へつながる尾根上に堀切3本が残されている。南側にかけては急斜面となっており、曲輪などはなかったものとみられるが、東側の尾根上には曲輪や堀切などがあった可能性も考えられる。

【史料】あり

【参考文献】1～5.8～11.33.35.207



第137図 大障子城遠景(最高所のやや右)

筑前 260	かたわきじょう 片脇城	郡名 宗像郡	別称 秋葉山城	図幅名 筑前東郷(西)
		種別 山城	所在 宗像市田島	

【沿革】宗像大社の南、色定法師ゆかりの興聖寺の裏の丘陵上一帯に位置する。『本編』には「宗像大宮司清氏初て此地に住す。此後代々の社務此城に住居す」とあり、『附録』には、「山上に平らかなる地三所あり。皆南北に長し。南方三反計、北方二反計、中なるは五反ばかりあり」とあり、現状の縄張りが示す通り、広大な面積を示している。

【概要】興聖寺の裏山一帯は、現在竹林となっており、後世の改変も含め、人工的な平坦地形が無数に広がっているが、城郭に関連する曲輪群は少なくともI～IVの4箇所は確認できる。『福岡県の城』ではIを片脇城、IIを秋葉山城とする一方、文献11・179ではこれら全体を片脇城とする。ここでは後者と同様、一体のものとして報告する。

Iは標高61mの頂部に中心的な曲輪を置き、その周間にいくつかの曲輪を配置して群となし、その周囲、北側斜



第138図 片脇城縄張り図(文献11・藤野正人作成)

面を除く斜面に数多くの畝状空堀群を設ける。また、II～IVへ続く尾根上には5本の連続する堀切群を設けて周囲を厳重に防備する。城域内で、これほど厳重に防備するのはIのみである。

Iの南側は起伏の少ない丘陵が広く展開しており、頂部をいくつか含んだ地形となっている。前述したようにこの一帯は後世の改変地形も含め、無数の平坦面が展開しており、これら全てを城郭遺構とみなすのは難しい。しかし、所々に堀切遺構（IIIの北西側、IVの南側など）が見られることから城郭遺構を含んでいることは間違いない。ほとんどの平坦面群が幅5mも満たない小さいもので、なおかつ平坦面間の高さも1m内外、いわゆる腰高程度のものであり、後世の耕作等の改変地形と思われるものの、図中のA～Dについては平坦面として規模もあり、なおかつ周囲との比高が5m前後もあり、これらは曲輪とみなせるものと考えられる。このようにみると、城域はII・III・IVの3つの独立した曲輪群が点在して構成され、それらの外側に堀切を設けて防御した縄張りを想定することができる。いずれにせよ、全長は600m近くとみられる。

また、Iの東、興聖寺の裏のVにも人工的に造成された平坦地形が見られ、方形を基調とした瓦などの遺物が散在することから、城館に関わる施設（居館など）か興聖寺関連の施設が想定される。

【史料】なし 【参考文献】1～5.7～9.10.11.33.35.179.207

筑前 261	かつらだけじょう 勝浦岳城	郡名 宗像郡	別称 桂岳城	図幅名 筑前東郷(西)
		種別 山城	所在 福津市勝浦・宗像市田島	

【沿革】宗像大社から西の勝浦へ抜ける峠は名児峠（大坂越え）と呼ばれ、傍らの名児山は万葉集の歌枕ともなったところであるが、その峠の北に聳える勝浦岳（桂岳・標高158m）に位置する。『本編』では宗像大宮司36代氏国、『附録』『拾遺』では15代氏平が築城したとする。また、天正6年（1576）の宗像宮造営置札には、永禄12年（1569）に大友氏が名子山（勝浦岳城のことか）に陣取った安芸毛利勢と対峙したことが記されている。

【概要】名児峠の北には勝浦岳、その北に名児山（標高165m）が聳える。『福岡県の城』ではこれら2つの山にわたって曲輪群が展開する（II）とされているが、勝浦岳周辺を除いては自然の平坦地形で城郭ではないとみられる。勝浦岳山頂の南側に10～20m規模の曲輪を3～4箇所配したのみの小規模な遺構が確認できるのみである。堀などの防御遺構もなく、山頂部分も曲輪などに造成していないのは南側の名児峠を見張



第139図 勝浦岳城遠景  
(左の頂部が名児山、右が勝浦岳)



第140図 勝浦岳城縄張り図（事務局作成）

る機能を重視した結果の表れであろう。

【史料】あり 【参考文献】1～5.7～9.10.11.33.38

【註】『福岡県の城』および文献38では、勝浦岳と名見山の位置が、本稿とは逆となっている。

筑前 262	おおぶじょう 大穂城	郡名 宗像郡 種別 山城	別称 なし 所在 宗像市大穂	図幅名 筑前東郷(西)
--------	---------------	-----------------	-------------------	-------------

【沿革】宗像市の南西、旧唐津街道に面した大穂の丘陵上に位置する。近くには許斐岳城や小早川隆景ゆかりの宗生寺がある。地誌類などに記載はなく、近年確認されたもので、『城郭』にて「大穂城」として、「大穂集落の北。もと天満宮のあった山上（標高約90m）に単郭構造の城郭遺構らしきものがある」とあるのが唯一の記載である。

【概要】大穂川に面した標高94mの丘陵頂部に位置する。南北約30m、東西約20mの主郭を頂部に置き、その南側の尾根上に堀切2本、東側斜面に堅堀1本を設けて防御する。北側には小曲輪を確認できる（堅堀は現在消滅）。

ここから北西1kmには宗像氏の拠点城郭の一つ、許斐岳城もあり、唐津街道に面していることから、交通の要衝をおさえる出城のような機能を想定できるが、詳細は今後の課題である。

【史料】なし 【参考文献】11



第141図 大穂城縛張り図（藤野正人作成・提供）



第142図 大穂城主郭

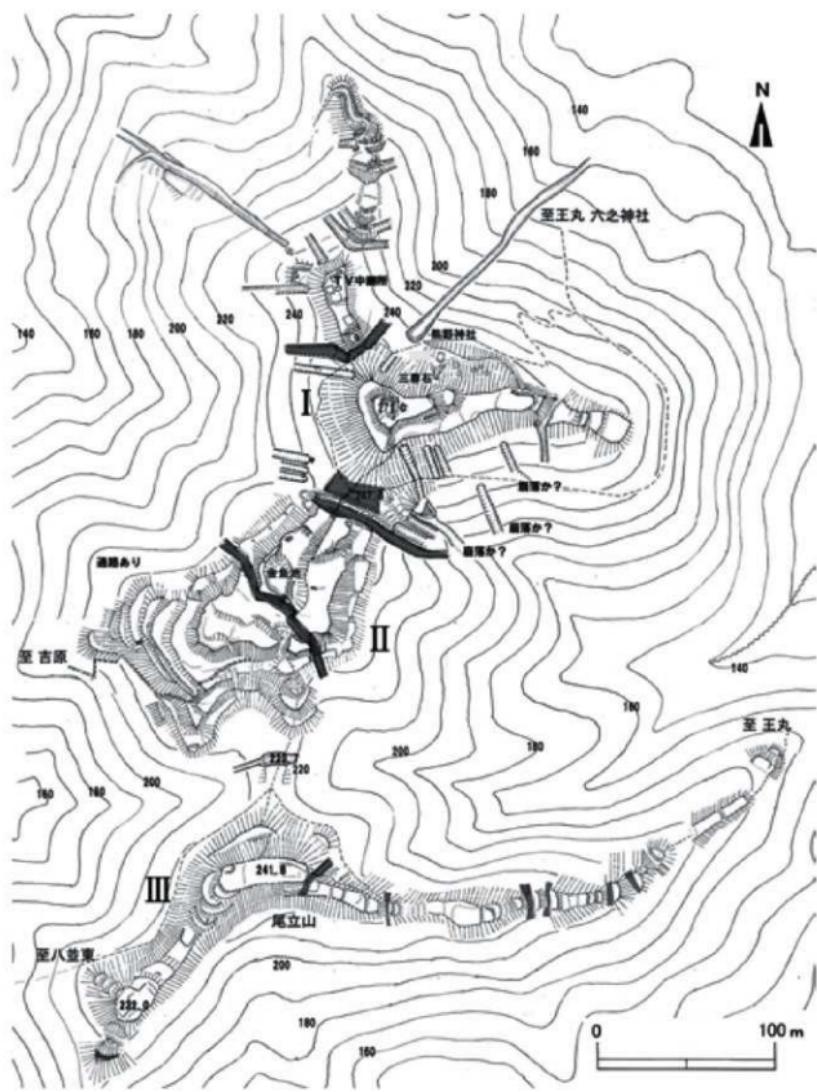
筑前 263	このみだけじょう 許斐岳城	郡名 宗像郡 種別 山城	別称 許斐山城 所在 宗像市王丸・福津市八並	図幅名 筑前東郷(西)
--------	------------------	-----------------	---------------------------	-------------

【沿革】宗像市と福津市との境に聳える許斐岳山頂に位置する。『本編』では宗像大宮司15代の氏平が築城し、家臣の許斐左馬太夫氏備が居城したとし、永禄～天正年間にかけて、大友方との争奪の歴史が繰り返されたことが記される。宗像氏の重要な拠点の一つであった。

【概要】城域は大きくⅠ～Ⅲの3つの曲輪群に分けるこ



第143図 許斐岳城遠景（左奥は立花山）



第144図 許斐岳城縄張り図（文献11・藤野正人作成。網掛け部は堀切（堀切すべては網掛けせず））

とができる。許斐岳山頂（標高 271m）を中心としたⅠは主郭の周りに帶曲輪を配し、周囲の尾根上には、堀切を何本も重ねて防御すると共に、斜面の要所には竪堀群なども確認することができる。主郭の東側の曲輪は馬場と呼ばれ、『附録』のいう「調馬場」とみられる。主郭の南は、比高10m以上もの落差を持ち、非常に規模の大きな堀切を設けて遮断をはかっている（第145図）。その南側に広がる曲輪群Ⅱには、水溜め状の大きな窪みがある。『附録』に「池あり。城の用水なりしといふ」とあるのはこれを目指す。さらに金魚が自然に生じることから「金魚池」と呼ぶとある。山の中腹にある金魚山熊野宮との関連もある可能性がある。その池状遺構の南には屈曲した堀があり、そのさらに南側にも階段状に曲輪群が続く。

Ⅱの南側は尾根の鞍部となって、城郭遺構は見られないが、その南側の尾立山には頂部を中心として曲輪群Ⅲが確認できる。一見、後世の階段状造成にも見えるが、尾根上には堀切遺構が複数確認することができ、ⅠやⅡよりは防御性が低いが、確實に城郭遺構とみてよい。

また、主郭から北東側約600m地点の麓にある六之神社の背後の丘陵上には曲輪状の平坦面があり、山頂側に1本の堀切が掘られている。また、そこと山頂との間の尾根上にも堀切が見られることから、出曲輪や居館など許斐岳城に関わるものとみられる。『全誌』には「許斐氏宅址」（筑前D47）が許斐岳の許斐権現（熊野神社）の北七町にあるとし、これに該当する可能性も考えられる。

また、山中からは玉縁を持つ白磁から龍泉窯系青磁や明の青花まで、およそ12～16世紀の中国製陶磁器が見つかっている（文献207）。平安～鎌倉時代の遺物は熊野神社に関連したものであろうが、中世後期の遺物は許斐岳城に伴うものであろう。主郭のすぐ北側には熊野三尊を象った三尊石などもあり、古く山岳靈場であった山を山城へと大々的に改修していったことが想定される。

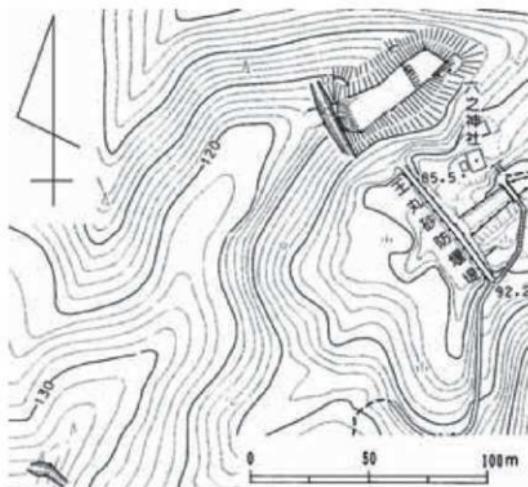
【史料】なし 【参考文献】1～5.7～9.10.11.33.34.37.174.207



第145図 許斐岳城堀切



第146図 金魚池



第147図 許斐城郷張り図（北東麓部分・文献207・藤野正人作成）

筑前 268 高宮城

郡名 宗像郡  
種別 山城

別称 高宮山城

図幅名 筑前東郷(西)

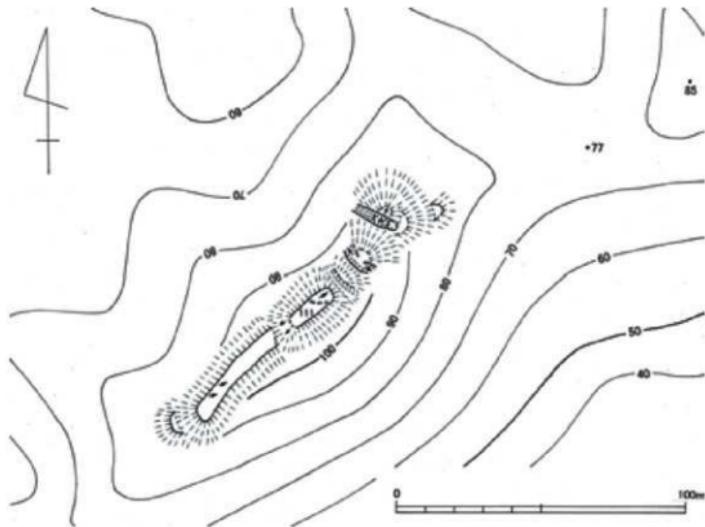
【沿革】福津市東部、西郷川の北側の標高 111m の丘陵頂部に位置する。『本編』では許斐岳城の出城で、『宗像追考』(文献 32 所収) を引用し、吉原源内左衛門が城番であつたとするが、『附録』では村民の言として深川彈正弘氏が居したとする。

【概要】標高 111m の頂部に 10m × 20m ほどの主郭を置き、その南西側にも幅 10m 未満、長さ 50m の曲輪を置く。主郭の北東側には 3 本の堀切を設け、北東側からの侵入を防いでいる。堀切部分には戦時中の地下壕と思われる大穴がいくつかおされている。小規模な城ではあるが、立花山城方面へ向かう唐津街道に面した交通の要衝をおさえており、伝承のとおり許斐岳城の出城として重要な役割を果たしたとみられる。

【史料】なし 【参考文献】1 ~ 5, 8 ~ 11, 33, 34



第 148 図 高宮城遠景



第 149 図 高宮城縄張り図 (事務局作成)

筑前 269 冠山城

郡名 宗像郡  
種別 山城

別称 冠城・手光城  
所在 福津市手光

図幅名 津屋崎(東)

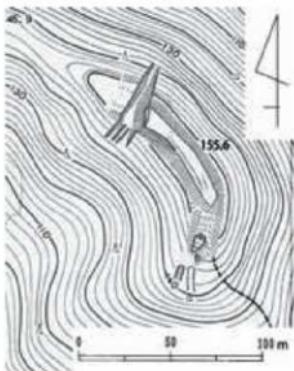
【沿革】福津市の中央部、宗像市大井との境近くの丘陵上に位置する。『本編』では宗像大宮司氏貞が番を置き立花方が城下の道を侵す押さえとしたとあり、『附録』では氏貞が河津丹後守弘業を守ら

せたとある。

【概要】冠集落の北西背後の丘陵頂部（標高 155m）に位置する。頂部に尾根筋方向に長さ 70m、幅約 15m の細長い主郭を置き、その背後の尾根続きを幅 10m、深さ 4m もある大きな堀切で分断する。主郭の麓側には、豈か若干見られるくらいであり、顕著な防御遺構は見られない。『城郭』には中腹や麓にも曲輪や土塁などの遺構があるとしているが、城郭遺構かどうかは現状での判断は難しい。冠集落から峠を越えて宗像方面へ侵入する敵をおさえには恰好の場所を選地していると言えよう。

【史料】なし

【参考文献】1～5.7～10.11.33



第 150 図 冠山城縄張り図（藤野正人作成・提供）

筑前 270	みやじだけじょう 宮地岳城	郡名 宗像郡	別称 なし	図幅名 津屋崎（東）
		種別 山城	所在 福津市宮司	

【沿革】宮地岳神社の背後、宮地岳山頂に位置する。『本編』では宗像氏貞の家臣、小樋対馬（一説には藏人）を城番としたとあり、『拾遺』では小樋藏人に加えて阿部藤七郎を城番として沿岸防備にあたらせたとある。『全誌』ではこれらに加え、宗像大宮司氏国の居城とする。

【概要】宮地岳山頂（標高 180m）は宮地岳上宮が祀られており、自然の平坦地形が広がる。また、山頂の南約 50m 地点には御来光遙拝所の岩があり、宮地岳神社の聖地となっている。その南側に堀切が 2 本、さらに山頂から北側約 50m 地点に堀切 1 本があり、その堀切と堀切の間およそ 100m を城域としていることがわかる。曲輪は基本的に自然の平坦地形をほとんど加工せずにそのまま利用しているようである。単純な構造ではあるものの、玄界灘沿岸部における宗像氏最南端の城郭であり、重要な役割を果たしたものとみられる。

【史料】あり

【参考文献】1～5.7～9.10.11.33.38



第 151 図 宮地岳城縄張り図（事務局作成）

筑前 271 かめやまじょう  
亀山城

郡名 宗像郡  
種別 丘城  
別称 なし  
所在 福津市福間駅東3丁目

図幅名 津屋崎(東)

【沿革】JR福間駅の東、西郷川の北側にある亀山神社の境内地に位置する。『附録』では「キリヨセといふ所に城跡といふ山あり。河津新四郎といふ者守れり」とある。『附録』には「周廻に堀有」とし、享禄5年に大友方と城主河津新四郎弘業との合戦の様子を記している。

【概要】亀山神社がある標高10~20mの小丘陵で、社殿がある場所が径10mほどの曲輪であったとみられる。またその東側にも曲輪が見られ、そこには河津氏の墓が安置される。

また、地割図を見ると、丘陵の周囲に堀と思われる区画の配置が見られ(第153図)、「拾遺」の示す堀と思われる。また、東約100m地点にある正蓮寺は周囲が丘陵で囲まれた方形区画を呈しており、詳細は不明であるが地元の伝承では河津氏の居館があったとされている。また、文献189では城の北東側に隣接して方形区画が見られるところから、平地居館を想定するが詳細は不明である。

【史料】なし

【参考文献】2~5.8~11.33.34.184.190



第152図 亀山城縄張り図(文献184・中西義昌作成)



第153図 亀山城周辺地割図(事務局作成)

筑前 273 いいもりじょう  
飯盛城

郡名 宗像郡  
種別 山城  
別称 飯盛山城  
所在 福津市内殿

図幅名 脇田(西)

【沿革】福津市内殿の南、旧博多往還に隣接し、飯を盛ったような特徴的な姿を呈する飯盛山山頂(標高157m)に位置する。『本編』では許斐岳城の出城として宗像方が築き、永禄11年(1568)に許斐岳城攻防の際に、立花方によって落城したことが事細かに記される。『拾遺』には翌12年の合戦についても記され、立花方と宗像方との攻防の城郭である。

【概要】飯盛山山頂に東西約20m、南北約10mの主郭を置き、東側に土塁を巡らす。主郭の北東側と北西側にも小曲輪を置く程度の単純な構造である。防御遺構も少なく、南側の登城路沿いと北西側斜面に豊堀がいくつか見られる程度である。

【史料】あり 【参考文献】1~5.7~9.10.11.33.190



第154図 飯盛城縄張り図  
(文献11・藤野正人作成)

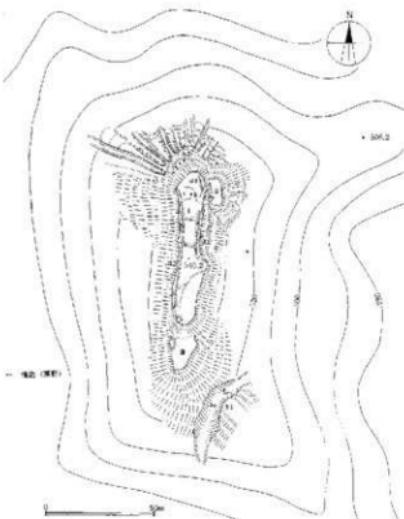
④糟屋郡

筑前 274 鶴岳城  
つくみがたけじょう  
郡名 宗像郡 / 糟屋郡 別称 鶴ノ木城・津久美ヶ城 図幅名 脇田(西)

**【沿革】**大根川上流域、古賀市薦野と福津市舍利藏との境に位置する鶴岳（標高 304m）山頂に位置する。『本編』には薦野城主丹治修理亮峯時が築城し、その弟次郎左衛門武道を置き、後年立花道雪により大鶴宗松を城番としたとある。『拾遺』には上記に加え、津久美作も豊後より城代として来たため、「津久美ヶ城」と呼ばれるようになったとある。『全誌』では舍利藏村の項で「鶴岳城址」、薦野村の項では「鶴ノ木古城」として名が記される。

**【概要】**鶴岳山頂に南北約 80m の細長い曲輪 I を主郭として置き、その北東側と南側に小曲輪 II・III を置く。I の曲輪には土塁が巡り、I の北側は 10 本ほどの畝状空堀群、III の南東側は堀切 1 本によって防護している。全長は 100m 近くにも及び、古賀市域ではかなり規模の大きい方の部類で、畝状空堀群など高度な防御技術が見られ、城の重要性が窺い知れる。

**【史料】**あり



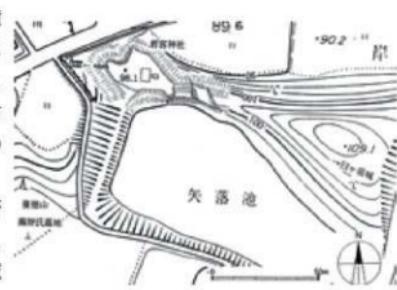
第 155 図 鶴岳城縛張り図（文献 184・中西義昌作成）

**【参考文献】**1 ~ 4.7 ~ 10.11.184.190

筑前 275 小松岡砦  
こまつがおかとりで  
郡名 糟屋郡 別称 薦野氏邑城 図幅名 脇田(西)  
種別 丘城 所在 古賀市薦野

**【沿革】**薦野氏の居城薦野城がある城の山の西側麓の矢落池のある低丘陵上に位置する。『本編』等には白ヶ岳城の邑城（里城）で、養徳山というとする。『拾遺』には白ヶ岳城の砦とあり、広さは二反、古井戸が二か所あるとし、ここに薦野峯延・増時の墓があるとしている。

**【概要】**現在、矢落池の南西側を養徳山とし、薦野氏の墓地があり、砦の推定地とも考えられるが、文献 190 では池の北西側の若宮神社の境内地を城地とみる。若宮神社境内地は、池の造成により一



第 156 図 小松岡砦縛張り図（文献 190・中西義昌作成）

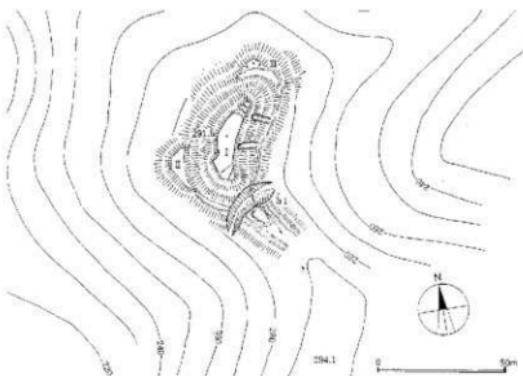
部改変があるとみられるものの、東西約20m、南北約10mの平坦面があり、東側背後には浅い堀切で防御するいわゆる単郭構造を呈する。立地などから考えて、地誌類のとおり、白ヶ岳の里城あるいは砦とみられる。

【史料】なし 【参考文献】I ~ 4.7 ~ 10,11,190

筑前 276	うすがたけじょう 白ヶ岳城	郡名 糧屋郡	別称 薦野臼岳城・茶臼山城	図幅名 臨田(西)
		種別 山城	所在 古賀市薦野	

【沿革】薦野集落の背後、城の山山頂（標高291m）に位置する。『本編』には薦野氏の祖、丹治式部少輔峯延が築城したとする。薦野氏は永禄年間には立花山城の在番衆で、天正年間には立花山城の立花氏と行動を共にする大友方の領主であった。

【概要】城の山山頂周辺は南北に細長く自然の平坦地形が続いているが、その北端部標高291m地点を中心に城域を開拓する。南北約30mの細長い主郭を置き、その北側と西側に小曲輪を備え、南西側の尾根上には堀切1本（h1）を設けて尾根続き側からの防御に備えている。そし



第157図 白ヶ岳城縄張り図（文献181・中西義昌作成）

て、東斜面には竪堀2本を置く構造となっている。

【史料】あり 【参考文献】I ~ 5.7 ~ 10,11,181,190

筑前 278	わたり びじょう 米多比城	郡名 糧屋郡	別称 なし	図幅名 臨田(西)
		種別 山城・丘城	所在 古賀市米多比	

【沿革】白ヶ岳城の南西約1km、米多比集落の背後の山稜中腹の頂部に位置する。昭和54年（1979）発行の福岡県遺跡等分布地図（文献219）を初出とし、地誌類等には一切出てこない城で、城主などの由来は一切不明である。

【概要】城域は大きく中腹部分（山城部）と山麓部分（里城部）に二分される。山城部分は標高187mの頂部に南北約100mにわたって二段に分かれて曲輪Ⅰ・Ⅱが並び、注目すべきはその周囲を土塁と30本前後に上る畝状空堀群で防御している。特に北側は竪堀と横堀からなるものである。曲輪の北東部は土塁が途切れおり、虎口（k1）となっている。また、曲輪群の北西側と南側には堀切2本（h1,h2）を掘り、厳重に防備している。

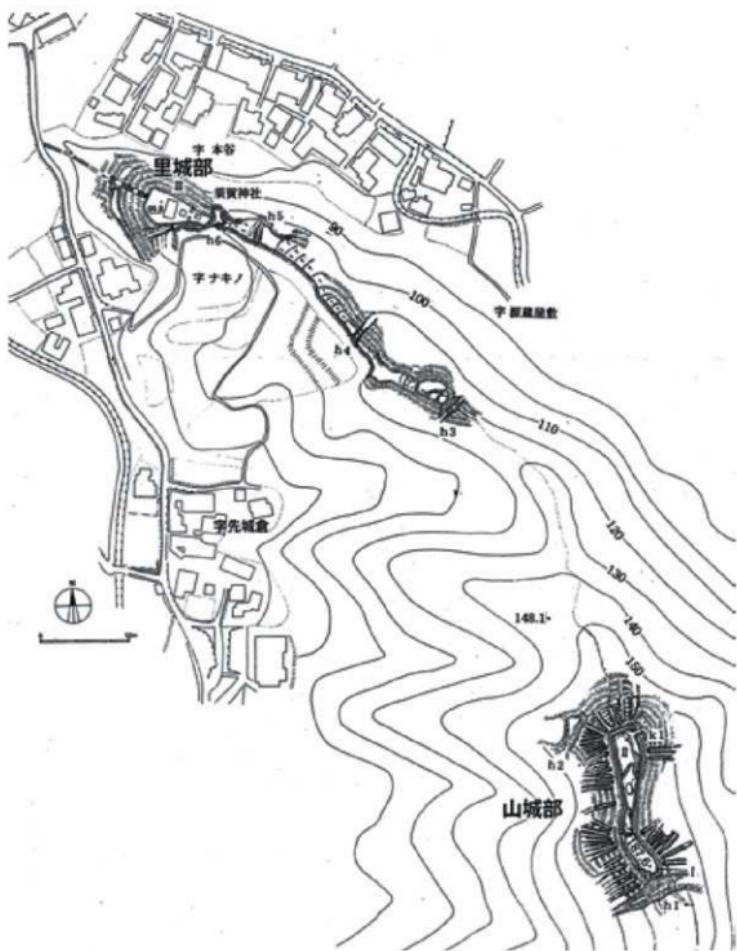
中腹の山城部から麓の里城部へは、なだらかな尾根道となっているが、その要所には堀切3本（h3 ~ h6）が設けられ、尾根上の侵攻を妨げている。

麓の里城部分は、現在須賀神社の境内となっており、東西約30m、南北約15mの平坦面（Ⅲ）となっ

ている。その平坦面の背後には堀切1本(h6)があり、神社の平坦面も曲輪として機能したものとみられる。また、周囲の集落地には字「源藏屋敷」や「先城倉」などの地名があり、集落部分には屋敷などの関連施設が想定できる。

上記のように地誌類等では城主などの由来は不明であるが、立地などから考えて、在地領主の米多比氏に関わる居城ではないかと考えられ、またおびただしい数の歎状空堀群や城域の広さなどから見ても、当地域においても優れた城郭遺構を備えたものと評価できる。

【史料】なし 【参考文献】11,181,190



第158図 米多比城縄張り図（文献190・中西義昌作成図を一部改変して事務局作成）

筑前 280 四万城

郡名 糧屋郡  
種別 山城

別称 四方城  
所在 古賀市青柳町

図幅名 脇田(西)

【沿革】青柳町の集落の南、標高 145m の独立丘陵の頂部に位置する。城名であるが、近世～近代の地誌類では「四万城」となっているが、『教委』『大系』『福岡県の城』は「四方城」としている。単に「万」を「方」と書き間違えたと思われるが、それを示唆する資料を今回確認することができた。それは九州歴史資料館所蔵の福岡県史編纂資料にある「糟屋郡史」編纂資料である。昭和 10 年代に糟屋郡史編纂のために執筆された原稿などの資料であるが(糟屋郡史は未刊)、その中にある「第九章 安土桃山時代」には「附. 城砦古戦場一束」の原稿がある。これは近世の地誌類の記載を元に糟屋郡内の城砦を紹介するもので、目新しい記載もないが、この原稿中に「四萬方城山」という記載部分が見られる。しかし、さらに修正され、最終的には「四万城」となっている。昭和 10 年代から「四万」と「四方」の混乱があったものとみられる。地誌類では、新城山城の西、もしくは南にあったとされる。

【概要】丘陵頂部は東西約 40m、南北約 20m の範囲が平坦となって主郭となしているが、自然の平坦地形が多く、あまり造成加工はなされていない。

主郭の北側と南西側は尾根が続いており、深さ 0.5m にも満たない浅い堀切で防護する。特に北側の堀切は後世の埋没により、段差が見られる程度となっているが、斜面には堅堀状の掘り込みもあり、堀切であった可能性が高い。また、南西の堀切から主郭の南側にかけては細長い帯曲輪が約 50m にわたって巡っている。地誌類では明言していないが、新城山城と同様に、立花方の小規模城館ではないかと思われる。

【史料】なし

【参考文献】1,3,4,7～11,190



第 159 図 「糟屋郡史」編纂資料「附. 城砦古戦場一束」  
中の四万城の記載  
(左: 修正稿 (四方城山)・右: 決定稿 (四万城山))



第 160 図 四万城跡張り図 (事務局作成)

筑前 281 古子城

郡名 糧屋郡  
種別 丘城

別称 古子山城  
所在 古賀市青柳

図幅名 古賀(東)

【沿革】古賀市青柳に聳える尾東山（標高 122m）東に派生する丘陵頂部に位置する。『本編』「立花山古城」には、立花鑑載が永禄 11 年に「ふるこの城」を出て立花山から逃れたことを記す。『拾遺』には、上記の事柄に加え、その後吉弘左近大夫鑑理が陣所としたと記す。『種々』には「古子山城址（立花城ノ端城）」と名を載せている。

【概要】標高 100m の頂部に南北約 30m、東西約 20m の主郭（I-1）を置き、その南に南北 30m の細長い曲輪 II を置く、さらに I-1 の北西側に小曲輪がいくつか見られる程度であり、堀などの防護構造は認められない。古子城は唐津街道に面した交通の要衝で、立花山城の出城として機能したことが窺われる。

【史料】なし

【参考文献】1.3 ~ 5.11, 181, 190



第 161 図 古子城縄張り図（文献 181・中西義昌作成）

筑前 282 佐谷城

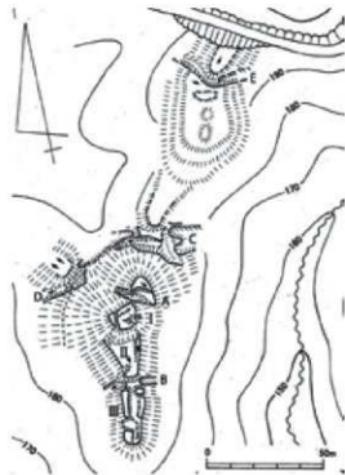
郡名 糖屋郡  
種別 山城

別称 飛尾城  
所在 糖屋郡須恵町佐谷

図幅名 太宰府(西)

【沿革】須恵町と篠栗町との境に聳える若杉山の南西、須恵川支流の觀音谷川流域の山稜中腹の頂部に位置する。『附録』佐谷村の項には、「チモチウラ（『拾遺』では「木持浦」）と云所に砦の址有。高鳥居の砦なりしと里民いへり」とあり、『拾遺』も「佐谷村古城」として同様の記載がなされる。また、『左谷山健正寺縁起』（『筑前町村書上報』所収）には「既に当山の飛尾を責む。此城は所謂、杉彈正出城なり」とあり、同書に「飛尾」に地蔵菩薩を安置し、「乳持浦（チモチウラ）」と名付けたとある。すなわち佐谷村古城と飛尾の出城は同一のものを指している。実際、城館遺構がある尾根の麓は「木持浦」と呼ばれている。『種々』には「飛尾城址（杉氏）」の記載が確認できる。

【概要】左谷山健正寺の觀音谷を挟んだ西側の山稜中腹、標高 199m の頂部に 10m 四方の規模の主郭を置き、その南に II・III の二つの曲輪を置く、それぞれの曲



第 162 図 佐谷城縄張り図（事務局作成）

輪の間には堀切Bが設けられると共に、両方の曲輪には土塁が築かれる。Ⅲの曲輪の南西部はやや窪んでおり、虎口などが想定できる可能性がある。Iの北側には堀切Aを築いて防御となし、さらにその北側、尾根の鞍部にあたる所にも堀切Cを築く。堀幅が広いことや、東側斜面の豊堀が2本になっていることから、堀切は二重であった可能性も考えられる。その堀切Cの南西側、Iからみて北西側の尾根の鞍部にも堀切Dを設けて防ぎとしている。堀切Cの北側は自然の尾根地形で、曲輪などの遺構ではなく、古墳のようなマウンド状の凹凸が見られるのみであるが、約70m先には堀切Eを設け、城域をさらに防護している。

【史料】なし

【参考文献】2～5.8～11.41



第163図 佐谷城遠景（中央。左は若杉山）



第164図 佐谷城堀切

筑前 283	たかとりいじょう 高鳥居城	郡名 糟屋郡	別称 鷹取城	図幅名 篠栗(西)
		種別 山城	所在 糟屋郡須恵町須恵・上須恵、篠栗町若杉	

【沿革】若杉山から西へ派生する峰、岳城山山頂に位置する。『本編』筑前守護大内氏に代わり、守護代として筑前に入った杉氏代々の居城で、大内氏滅亡後は、杉氏は鞍手郡に退転していたため、城は一時使用されていなかったが、天正14年(1586)に秋月方の星野頼胤・親胤兄弟(地誌類では吉実・吉兼)が入城し、秋月・島津方の最先鋒となった。翌15年、立花山城攻めの島津勢が退却するや否や、立花山城主の立花統虎(宗茂)はすぐさま高鳥居城を初めとする糟屋郡内の諸城を攻略、高鳥居城も落城し、星野兄弟も討死した。

なお、『拾遺』には、河津氏の祖、次郎祐重の子、貞重河津弥次郎が築城したとし、その他、神代紀伊守貞、岡部彦左衛門など、大内氏臣家が城主として挙げられている。

【概要】岳城山山頂(標高381m)には約20m四方の主郭I-1を置き、北側を中心に土塁が巡る。北側には小曲輪や堀切を配するのみであるが、そこから南西側の尾根上に曲輪群が展開する。大きく5つの曲輪から構成され、その総延長は200m近くにも上る。それらの曲輪群(II-1～4・III)には南側を中心に土塁が施され、その南側斜面にはおびただしい数の敵空堀群が設けられる。特に曲輪II-2の南側の尾根上には敵空堀群に加え、三重の堀切群が構築され、城内でも最も防御性を高めている。曲輪IIIは東西50mを超える城内最大の曲輪であるが、そこから北側と西側に尾根が延びており、それぞれ曲輪IVとVが構築されるが、IIIからVにかけての南側斜面にも敵空堀群がみられる。曲輪Vの北側と西側の尾根上に堀切を施し、城域を画している。

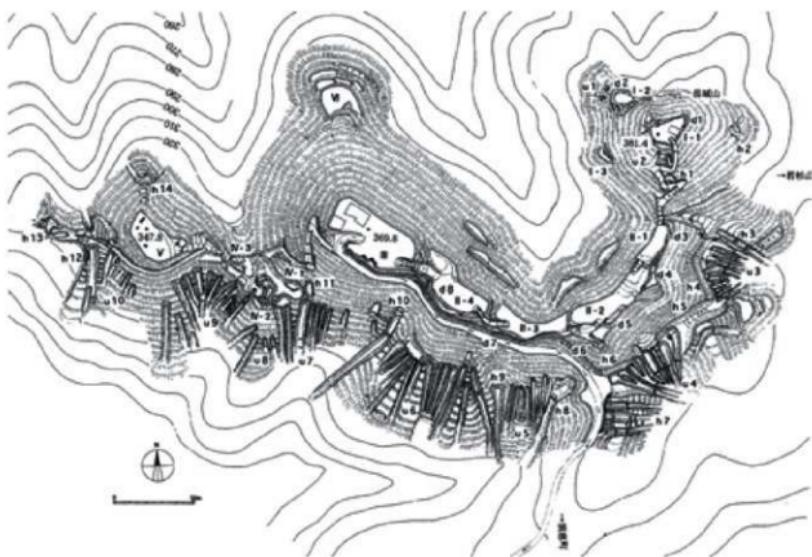
これら60本前後の敵空堀群を構築し、厳重な防備を実現しているが、これらの防御遺構は天



第165図 高鳥居城遠景（左の頂部。右は若杉山）

正 14 年の星野氏入城の際に行われた改修の結果と思われる。

【史料】あり 【参考文献】1~9,10,11,41,191



第 166 図 高鳥居城縛張り図（文献 191・中西義昌作成）

筑前 284	草葉城	郡名 糟屋郡 種別 丘城	別称 草場城	所在 糟屋郡篠栗町篠栗	図幅名 篠栗(西)
--------	-----	-----------------	--------	-------------	-----------

【沿革】若杉山、米ノ山の北西麓の丘陵頂部に位置する。

『本編』には杉権頭連並の出城とすることから、高鳥居城の出城とみられる。

【概要】標高 199m の丘陵頂部から西側に約 60m にわたって小曲輪群を構成する。周囲は急斜面であり、堀切などの防御遺構はみられない。

【史料】なし

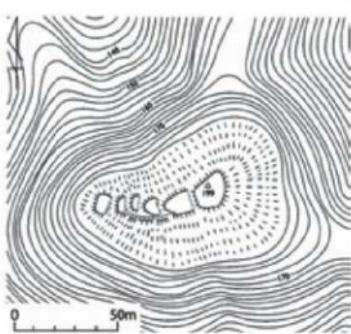
【参考文献】

1 ~ 4,7 ~ 11,40,80



第 167 図 草葉城遠景

(粕屋町教育委員会提供)



第 168 図 草葉城縛張り図（文献 80・西垣彰博作成）

筑前 285 飯盛山城

いいもりやまじょう  
郡名 糧屋郡  
種別 山城

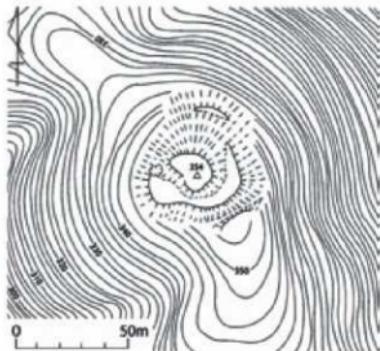
別称 なし  
所在 糧屋郡篠栗町金出

図幅名 篠栗(西)

【沿革】日々良川上流の北岸、犬鳴山系へとつながる山稜中腹部、飯盛山山頂に位置する。『本編』では「古き屋敷跡もあり」とする。『拾遺』によれば、貞治元年（1362）に長者原合戦の際に築城されたとし、天文末年頃には杉連緒に属した毛利三郎が居城としたとする。毛利三郎の子孫は飯野姓を名乗ったという。また、杉氏の高島居城の出城ともある。



第169図 飯盛山城遠景  
(柏原町教育委員会提供)



第170図 飯盛山城縄張り図(文献80・西垣彰博作成)

#### 【概要】飯盛山山

頂（標高354m）に20m四方不整円形の主郭を置き、その南側に幅10m前後の帯曲輪を配し、さらにその南東側には堀切1本を設け、南側からの備えとする。また、城の北側の峰を「陣が嶺」と称するが、城館遺構等は確認されていない。『本編』のいう「古き屋敷跡」も所在不明である。

【史料】あり 【参考文献】1～4.7～9.10.11.40.80

筑前 286 丸山城

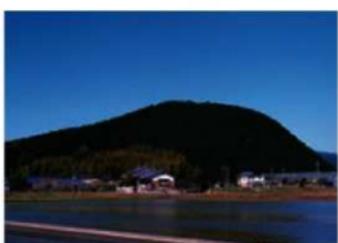
まるやまじょう  
郡名 糖屋郡  
種別 丘城

図幅名 福岡(東)

別称 城山城  
所在 糖屋郡柏原町大隈

【沿革】博多湾東岸に流れ込む日々良川北岸の丸山山頂に位置する。『本編』等では、杉権頭連並の城とし、平地二段、周間に堀が巡るとある。『種々』には「城山城址（杉氏）」とある。

【概要】丸山城の主要部分は、平成16年（2004）度に柏原町教育委員会により発掘調査がなされている。丸山山頂（標高86m）には、愛宕神社がかつてあり、神社の基壇状遺構などが見られ、後世の改変が見られるが、概ね径30mの円形の主郭を置く。発掘調査ではピットや土坑などが検出されたが、城館との関連は不明である。また、現状では主郭へは南側と西側の二方向から入ることができるが、西側については、発掘調査の結果、その部分の堀が後に埋められていたため、後世の入口とみられ、往時の虎口は南側であったことがわかる。そして主郭の周囲、南から西側にかけては横堀が、東から北側にかけては帯曲輪が巡る。特に西側については横堀が二



第171図 丸山城遠景(柏原町教育委員会提供)



第172図 丸山城堀切断面  
(柏原町教育委員会提供)

重となっており、防御をより一層厳重にしている。また、帯曲輪側を中心に斜面には堀が10本前後、間隔をあけて配置される。

主郭からは北東、北西、南東の三方向に尾根が延びているが、すべての尾根上には堀切が掘られ、侵入を妨げている。このように、丸山城は小規模ながらも嚴重な防備がなされていたことがわかる。

なお、城の東麓には、丸山城落城の際に落命した「黒殿の姫」を祀った黒殿神社があるが、その傍らには石塔群があり、また神社背後の尾根上にも平坦面に加え、石塔群がある。『本編』には石を積んで作られた杉連並の墓所の存在が記載されており、これに該当するものと考えられるし、「黒殿」の名称から在地領主の黒瀬氏に関わるものとも考えられる。

【史料】なし 【参考文献】1～5.7～10.11.80



第173図 丸山城測量図（文献80）

筑前 291	しもやまだじょう 下山田城	郡名 糟屋郡	別称 なし	図幅名 古賀(東)
		種別 山城	所在 糟屋郡久山町下山田・新宮町立花口	

【沿革】立花山山頂から南東に下る尾根上、新宮町と久山町との境の頂部に位置する。『本編』には永禄期の毛利勢の立花山城籠城の際の大友方の付城であるとする。

【概要】山稜中腹部に全長100mの長い主郭を置くが、内部は石垣で固められた階段状の小段に分かれており、縁辺部は土塁で囲まれる。そして東斜面には堀15本からなる敵状空堀群が構築されて防御すると共に、南北、南東、北西側に延びる尾根上にも堀切を設けて、尾根上の侵攻を妨げている。立花山城にも峰続きで近く、出城か付城かの議論はともかく立花山城に関わる城館の一つとしてみてよい。

【史料】なし 【参考文献】1～4.7～11.42.200

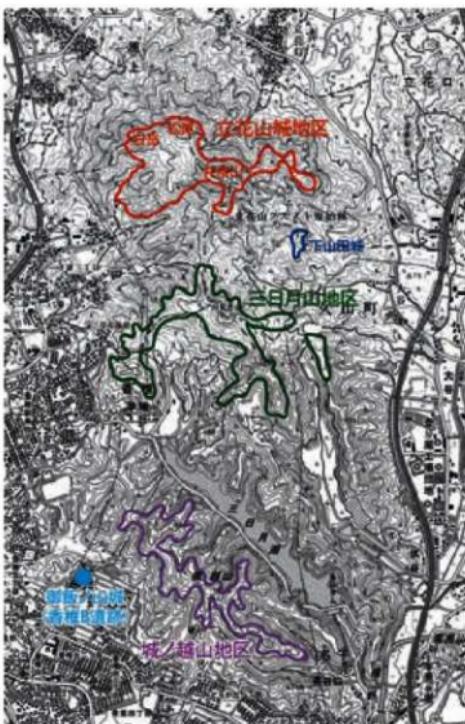


第174図 下山田城概略図（藤野正人作成・提供）

【沿革】香椎宮の北側背後に聳える立花山は、井楼山、松尾、白岳の三つの峰から構成されるが、それらの三つの峰を中心所在する。山頂からは福岡平野全体を見渡すことができ、糟屋郡はもとより福岡平野一帯をおさえる上で重要な城郭である。

元徳 2 年（1330）に大友貞載が築城して立花姓を称し、以後、代々立花氏の居城となった。糟屋郡を初めとする大友氏の筑前統治の要となった城郭であったため、たびたび周辺勢力から攻撃の目標となった。15世紀中ごろから16世紀にかけては大内氏、少弐氏によって落城している。その後、永禄年間には、立花城督の立花鑑載が、毛利氏と組み、たびたび大友氏に反旗を翻した。永禄 11～12 年（1568～69）にかけては毛利と大友が互いに立花山城を奪い合い、籠城・包囲戦が繰り広げられたが、最終的に大友方が勝利、以後、大友氏重臣の戸次鑑連（道雪）が城督につき、天正 13 年（1585）に病没すると、養子の統虎（後の立花宗茂）が跡を継ぐ。翌 14 年には北上してきた島津軍が太宰府市岩屋城を落城させたのちに、立花山城を包囲するが、一月足らずで島津軍は撤収した。

翌 15 年に豊臣秀吉により九州平定がなされたのちは筑前一国を拝領した小早川隆景の居城となり、さらに翌年隆景が名島城に居城を移すと、家臣乃美宗勝が



第 175 図 立花山城および周辺城館位置図  
(国土地理院 1/25,000 「福岡」・「古賀」を一部改変して事務局作成)



第 176 図 立花山城遠景（久山町遠見岳から）



第177図 筑前国裏柏屋郡立花山古城之図（部分・国立公文書館蔵）

入城した。慶長5年（1600）に小早川家が備前に移封となった際に廃城となった。

**【概要】** 城域は、立花山の三峰（井楼山・松尾・白岳）を中心とした地区のみならず、下山田城に加え、近年、その南側にある三日月山やさらに南側の城ノ越山の地区にも城館遺構が発見されている。三日月山地区、城ノ越山地区については立花山城とは別の山城として報告すべきかもしれないが、評価がまだ定まっておらず、その一方で立花山城と密接な関係にあることは間違いないため、ここで一括して報告することとしたい。

<立花山地区の概要> 井楼山を頂点とし、松尾、白岳の三つの峰を中心に曲輪群が構成される（第179図）。井楼山山頂（標高367m）には、東西約100mに

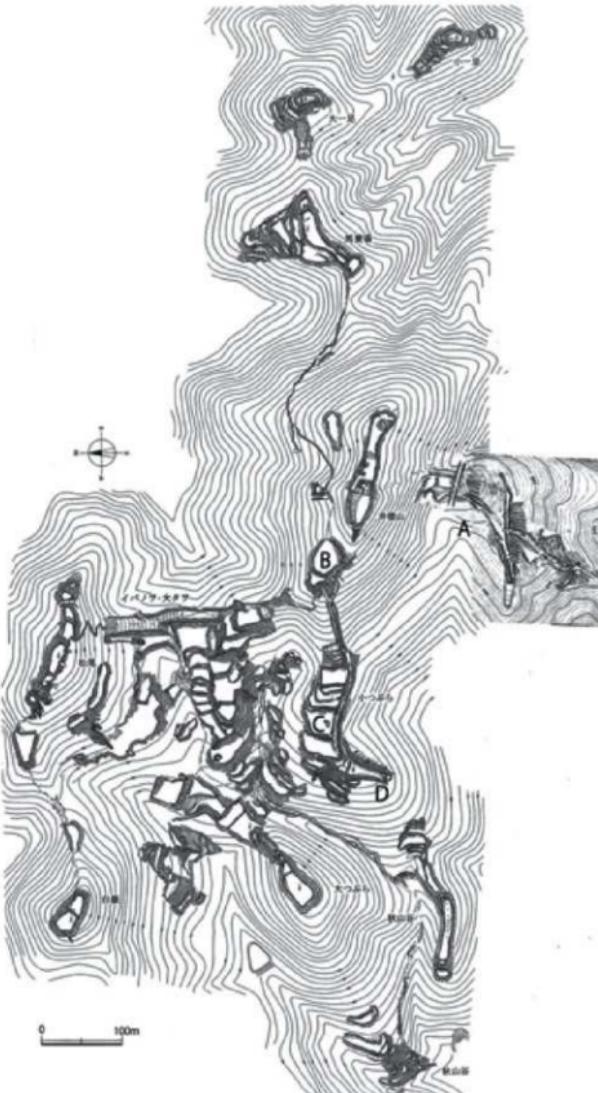


第178図 立花山城 A 地点の堀切

わたって曲輪群が形成される。特に注目すべきは、石垣で固められた外枠形虎口を3つ連続して配置し、屈曲しながら城内へ導入させる虎口プランである。これは織豊系城郭による築城技術で、織豊政権に与した小早川氏による織豊期の改修である。

井楼山から東側へ下った尾根には、馬賣場、大一足、小一足の曲輪群が、尾根の頂部ごとに形成され、東側からの押さえを果たしている。また、井楼山の南側は、三日月山へと続く尾根線であるが、A地点には堀切と畝状空堀群が過剰なまでに構築されており、戦国期（立花期）の立花山城の中では最も防御遺構が入念に施される場所である（第178図）。これは三日月山側からの侵入に対する警戒を読み取ることができる。

また、井楼山から西へ下るとBの曲輪があるが、ここでは瓦・陶磁器類が多く表探されており、立花期、小早川期双方のものが含まれ、井楼山山頂およびBの曲輪にあったものとみられる。Bの曲輪からは小つぶらとイバ



第179図 立花山城（立花山地区）縄張り図（文献195・木島孝之作成図に井楼山南斜面部分（藤野正人作成・提供図）を合成して事務局作成）

ノヲ・大タヲの二つに尾根がわかれれるが、松尾へつながる尾根の鞍部にあたるイバノヲ・大タヲには、井楼山と松尾の二つの頂部をつなぐ土塁、石垣が確認できる（第180・181図）。また、ここは新宮町の立花口からの登山道にあたり、やや谷を下った場所には井戸も残されている（第182図）。

一方、小つぶらの尾根上には、階段状に曲輪が並び、その南側には通路状遺構が通り、一部土塁状になっている。この遺構は石垣で固められており、Cの曲輪に入る箇所や通路の先端部Dには枡形虎口が設けられており、これらの造作も小早川期のものとみられる。

そして、松尾、白岳の頂部にもそれぞれ曲輪群が形成され、各々の頂部を曲輪で固めると共に、小つぶら、松尾に挟まれた福岡市側の谷部分には数十にわたる曲輪の平坦面群が展開しており、城内では最も城域の広い場所となっている。石垣などは見られず、立花期の所産とみられる。さらに西側の大つぶら、秋山谷（絵図には「休ヒ堂」）の頂部にも曲輪が形成される。

以上のように、立花山城地区は、東西約900m、南北約500mにも及ぶ広大な城域内に曲輪群を配し、尾根や峰の頂部はもとより谷部分にまで曲輪群を広く展開している。これらの内、井楼山、小つぶら、イバノヲ・大タヲの各地区には、枡形虎口や隅角部を持つ石垣など織豊系城郭の特徴を持つ遺構が見られることから、小早川期に改修・使用されたものであることがわかる。それ以外の地区については上記のような特徴は見られないため、立花期のものであり、戦国期に異常なまでに広大となった城域が小早川期には限定的に改修されて使用されたことがわかる。

＜三日月山地区＞井楼山山頂の南に聳える三日月山には、標高272mの山頂部分を中心として、そこから四方に派生する尾根上に曲輪群は展開する。その範囲は東西約1km、南北約800mで総延長は2km近くにも上り、立花山城地区に匹敵する城域を有している。曲輪群は尾根の頂部にそれぞれA～Jの頂部に核となる曲輪を置き、その周囲に階段状に小曲輪を配していく構造を探る。A・D・G・H・α・βには堀切が置かれ、特にH・αには畝状空堀群も確認できる。城域の末端部分、特に城ノ越山がある西側斜面を中心にこれらの防御遺構を配置しているようである。



第180図 立花山城イバノヲ・大タヲの石垣



第181図 立花山城イバノヲの石垣隅角部



第182図 立花山城立花口側の井戸

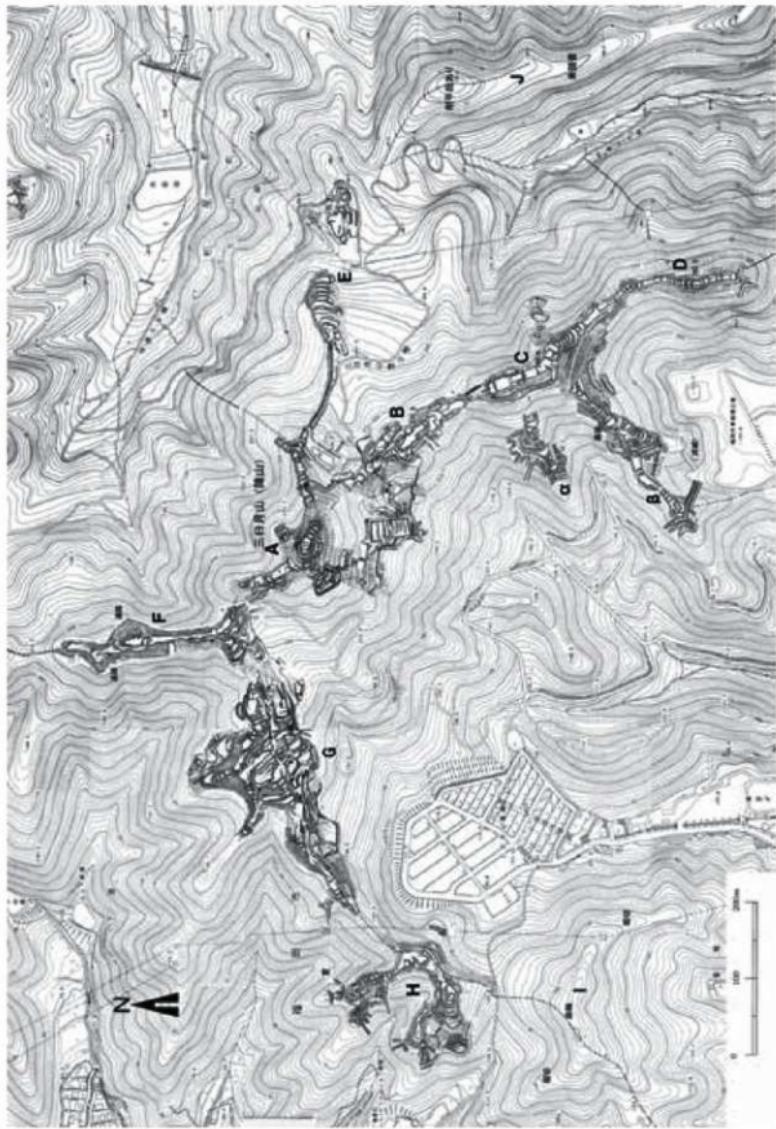


第183図 立花山城小つぶら通路遺構の石垣



第184図 立花山城曲輪Dの枡形虎口

第185図 三日月山地区縮張り図（文献213・藤野正人作成）



また、Aの南側・B・Eには石垣遺構も見られ、BやEでは枠形状の虎口があつたり、BとCとの間の斜面には登り石垣もあり、構築時期については織豊期も含めて検討する必要がある。また、A地区南側の矩形を呈する石垣に囲まれた区画などは城館遺構というより宗教施設などを想定する必要もあるし、G地区的無数に広がる小平坦面群についても、後世の耕作地の可能性も考えられ、詳細については、今後のさらなる検討課題である。

＜城ノ越山地区＞三日月山から三日月湖（かつての長谷集落）を挟んで南東側に細長く横たわる城ノ越山山頂を中心に城域が展開している。城域は大きく分けて、城ノ越山山頂部（b1）を中心とするB地区と、山頂の約400m北西に位置する頂部（a0）を中心とするA地区に二分することができるが、基本的には、尾根上の曲輪が形成できる場所はくまなく曲輪としている様子であり、その範囲は約800m四方にわたり、総延長は約2km近くにも上る。それぞれの地区ごとに説明すると、A地区は、標高164mの頂部を中心とし、そこから四方に派生する尾根上に曲輪群を配置する。平坦な地形の所はほとんど段差を設けない一方で、斜面地は階段状の小曲輪を連ねる。a0地点は標高162m地点の頂部に土塁をもった虎口を備える曲輪を配し、周囲に帯曲輪を配するが、この周辺では瓦片も採集されている。

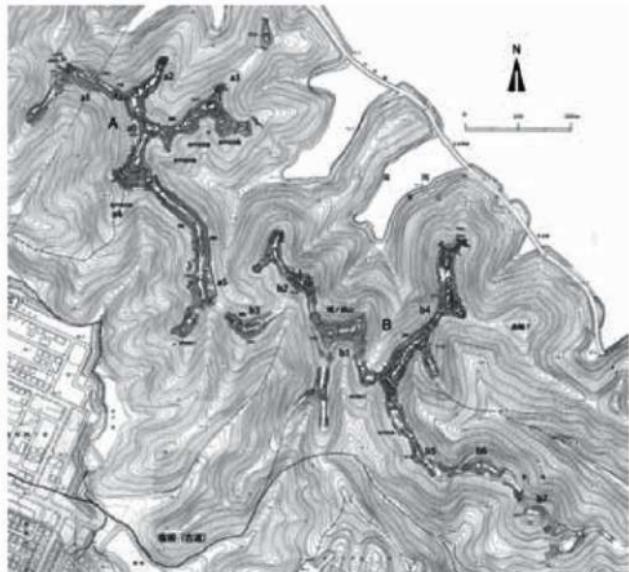
また、それぞれの



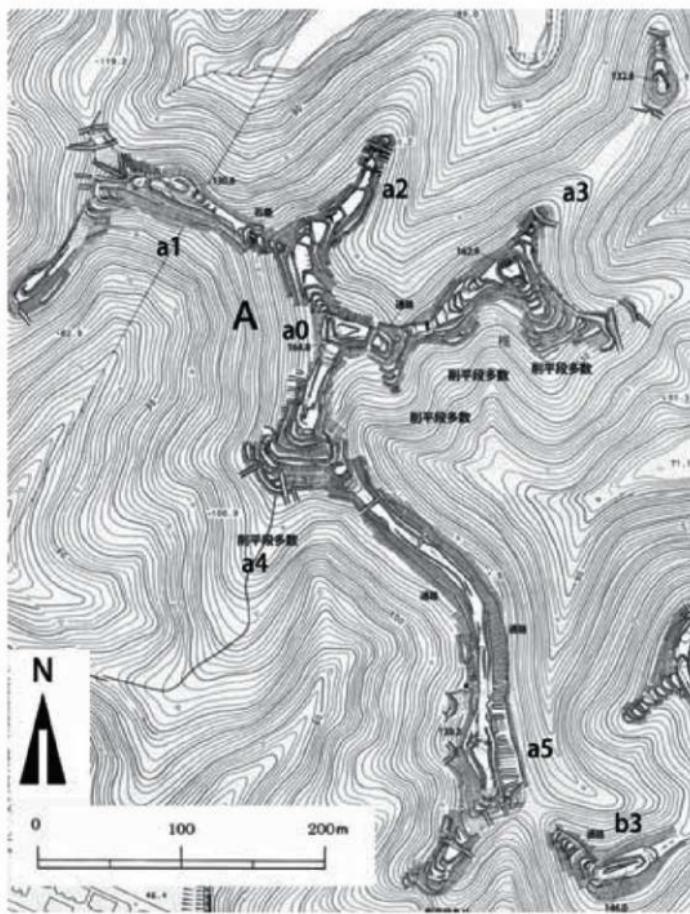
第186図 三日月山遠景（城ノ越山側から）



第187図 城ノ越山遠景（三日月山山頂から）



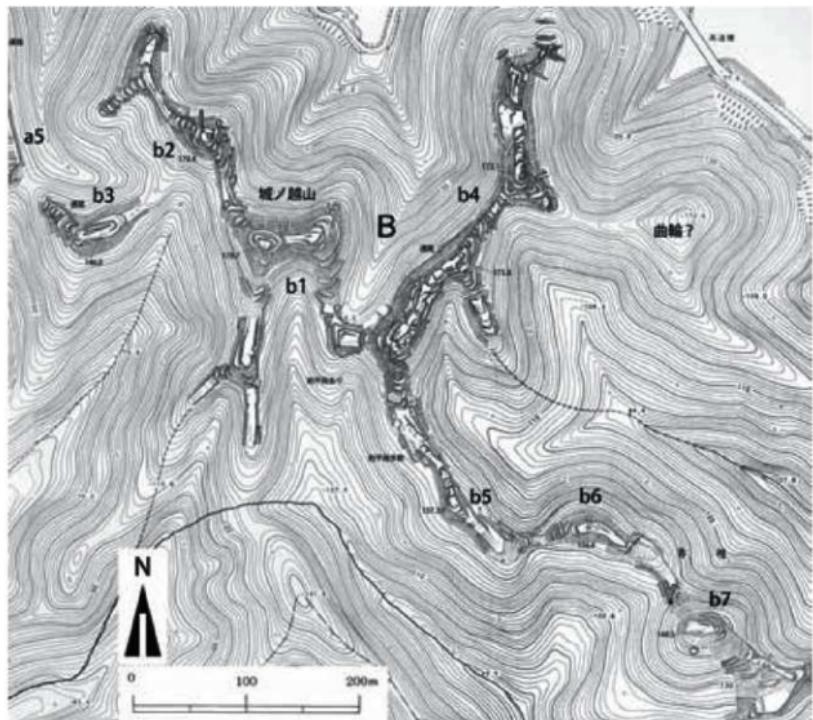
第188図 城ノ越山地区縄張り図（全体）（文献213・藤野正人作成）



第189図 城ノ越山地区（A地区部分）（文献213・藤野正人作成）

曲輪群の末端は複数本の堀切で遮断するとともに、a0の北・西側斜面やa1の北西側斜面、a5の東側斜面には敵状空堀群を設けて防御を固めている。所々には石垣も確認できる。一方、B地区は城ノ越山山頂（標高179m）の頂部に主郭を置き、小曲輪を尾根上に配置する。A地区同様、曲輪群の末端部に堀切を配置して防御し、a0やa5に見られるような敵状空堀群は確認できないが、b4の末端部の曲輪は土塁で周囲を囲み、麓の尾根側には多重の堀切を設けて厳重に防備しており、防御の工夫を見せている（第191図）。

以上のように、城ノ越山地区も他の地区同様、戦国期の城館遺構が大規模に展開していることがわかる。



第190図 城ノ越山地区縄張り図（B地区）（文献213・藤野正人作成）

＜各地区の位置づけ＞『拾遺』には「鑑種陣所」として「下原村の巽に在。山の峯をいふ。平地二反許有」とあり、ちょうど三日月山山頂を指している。「古城図」（第177図）にも、三日月山にあたる箇所に「陣山」とあり、「鑑種ノ陣か」と記され、二段の平坦面が描かれる。近世以降には永禄年間の毛利・大友の立花山争奪戦に伴う陣所と認識されている。

一方、城ノ越山は、『拾遺』「老ノ山古城」には、「香椎宮の東北大宮司が宅上の山也。峯二ツ有。



第191図 城ノ越地区的城館遺構  
 (左:a3地点の切岸(岩盤割り出しの様子がわかる))  
 (右:b4地点の土塁囲みの曲輪)

東の高峯に平地二反許有。城ノ腰と云。東ノ谷を御倉谷と云。南麓に隣の址有。北の谷を笠懸といふ。西の山下に里城の址有」とある。城ノ越山地区の南西側、同一丘陵上には御飯ノ山城（香椎 B 遺跡・筑前 293）として発掘調査がなされ、城館遺構が見つかっている。この南麓が「里城」と呼ばれていることから、これは老ノ山城（御飯ノ山城）の西側の峰にあたるものと思われる。一方、立地場所や「城ノ腰」の名称から、老ノ山城の東の峰は城ノ越山地区の城館遺構にあたる可能性が高い。以上のことから、城ノ越山地区の城館遺構は、御飯ノ山城（香椎 B 遺跡）と密接な関係にあったことが窺われる。

文献 202・208・213 では三日月山地区と城ノ越山地区の城館遺構をそれぞれ城砦群として、永禄年間の毛利・大友の立花山城争奪戦によるもので、三日月山城砦群を立花山城包囲の毛利方の城砦群、城ノ越山城砦群を立花山城救援のため陣取った大友方の城砦群であった可能性を指摘している。ただし、立花山城は戦国時代を通じて、争奪が繰り広げられた山城であり、これらの城館遺構がどの時点にどの勢力によって築かれたのかは即決するのは難しく、今後、さらなる現地調査を進めたうえで、また御飯ノ山城（香椎 B 遺跡）との関係も踏まえつつ、考察を進めていく必要があろう。

【史料】あり 【参考文献】1～9,10,11,39,43,178,181,195,202,208,213

筑前 293	おいのやまじょう 御飯ノ山城	郡名 糟屋郡	別称 老ノ山城	図幅名 福岡(東)
		種別 丘城	所在 福岡市東区香椎3丁目	

【沿革】福岡市東区、香椎宮の北東背後に所在する丘陵上に位置していたが、宅地造成により消滅した。『本編』では大友氏臣の一万田弾正が籠ったとあり、立花山城の出城ともある。『拾遺』には香椎宮が城主を置いたところではないかともしている。『拾遺』には城ノ腰と呼ばれ東西二つの峰で構成されるとある。西側の峰については発掘調査で確認された城館遺構がそれにあたり、東側の峰については不確かではあるが、城ノ越山の城館遺構がそれにあたるものと推測される。以下、概要是西側の峰部分のみとする。

【概要】御飯ノ山城の西の峰は、平成 8～9 年（2006～07）度に宅地開発に伴って、福岡市教育委員会によって香椎 B 遺跡として発掘調査が行われた。

城館遺構は、標高 90m の丘陵上に東西約 50m、南北約 20m の主郭を置き、三方向に延びる尾根に堀切、斜面には 10 本ほどの堅堀を設けて防御する。

主郭の平坦面上からは、柵が 3 列、掘立柱建物 7 棟が検出された。中でも建物 S B 01 は、16.3m



第 192 図 御飯ノ山城（香椎 B 遺跡）遠景（左：南から（奥に立花山）・右：北から）

（福岡市埋蔵文化財センター提供）

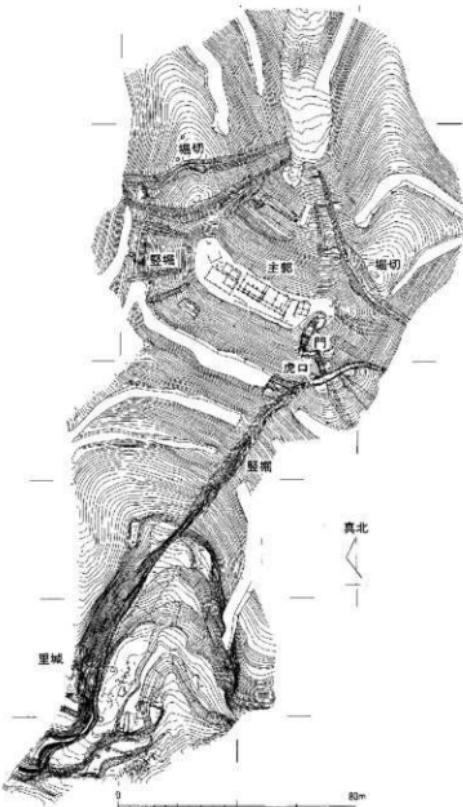
× 4.88m の規模を有し、東面と南面に廻がつく構造で、山城の建物としては非常に立派なものである。

また、主郭の南東側には虎口があり、主郭の導入部分には門と思われる柱穴6基が確認されている。虎口からは階段状の通路を通り、屈曲して堀切の堀底に降りることができるようになっている。そして、その堀底からは南側の麓まで約200mにわたって竪堀状遺構がある。麓は字が「里城」といい、居館等が想定される場所であるが、竪堀はその里城部分を取り囲むように麓部分で屈曲している（里城部分は未調査）。

この竪堀状遺構については山道が流水によって削り込まれたものであるともみることができるが、斜度のきつさや自然形成とも思えない屈曲具合から人工的なものである可能性が高い。山城と里城部分を一体的に防御しようとした可能性も考えられる。いずれにしても、近年発見された城ノ越山地区的城館遺構とも比較し、検討を進めることが必要であろう。

【史料】なし

【参考文献】1～4,7～10,11,39,76,182



第193図 御飯ノ山城(香椎B遺跡)測量図(文献76)

⑤席田郡

筑前 295

いないづかじょう

稻居塚城

郡名 席田郡

別称 上月隈城

図幅名 福岡南部(東)

かねいづかじょう

金居塚城

種別 丘城

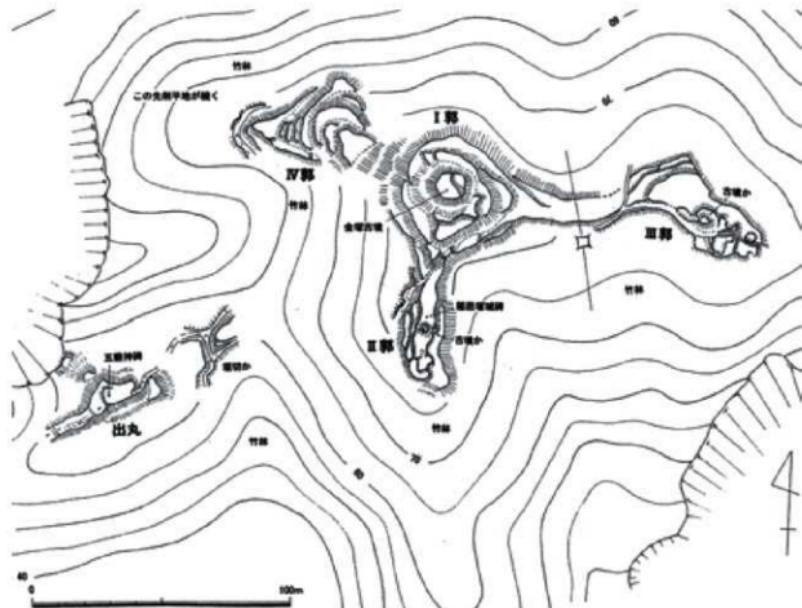
所在

福岡市博多区月隈1丁目

【沿革】福岡空港の東、糟屋郡志免町との境近くの丘陵上に位置する。『本編』では安河内遠江守が城主であるとも、また立花山城の出城で戸次治郎兵衛が築ったともしている。『拾遺』では安河内筑前守の他に、光安筑後守、隈本筑後守が居城としたとも伝え、峰続きに金居塚城という城があるとするが、これらは一連の城であるとしている。

【概要】現在、城のある丘陵全体は竹林等になっており、後世の耕作等による平坦面群が点在し、城郭遺構と区別するのが困難な状況となっている。ただ、丘陵には標高約80mの頂部を初めとして、尾根上には城館遺構と思われる曲輪の平坦面が残存しているが、堀などの明確な防御遺構は確認できない。I郭は主郭部分と想定されるが、頂部には金塚古墳があり、古墳を利用して城郭としているとみられる。また、周辺の尾根上にもII～IV郭などの曲輪群が想定できる平坦面群が見られる。伝承や地名を尊重すれば、I郭が金居塚城、II郭が稻居塚城と考えられるが、遺構の広がりの検討と共に、それらを断定するのは難しい。

【史料】なし 【参考文献】1～4,7～11,184,190,204



第194図 稲居塚城・金居塚城縛張り図（文献204・山崎龍雄作成）

## ⑥那珂郡

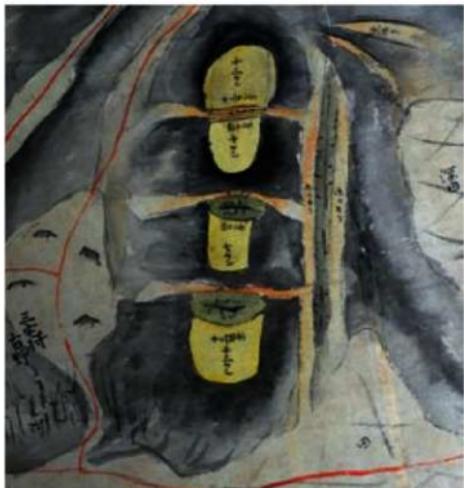
筑前 296	ふるのじょう <b>古野城</b>	郡名 那珂郡	別称 なし	図幅名 福岡南部(西)
		種別 丘城	所在 福岡市南区南大橋1丁目	

**【沿革】**福岡市南区大橋、那珂川西岸の丘陵上に位置していた。『本編』には「其名をも城か尾と云。百年前には、的野主税入道了心と云者居たりしと云伝ふ」とあるが、的野了心は黒田家の家臣であり、疑問が残る。

**【概要】**昭和30～40年代までは、那珂川西岸は、那珂川町の片縄山から北へ派生する標高40m前後の丘陵と谷があり組む地形で、古野城もそのような丘陵上の一つに築かれていたが、現在は一帯が住宅地となり、往時の姿は見る影もなくなり、にわかに所在を特定することは難しい。江戸時代の絵図と昭和30年代の地図を比較した結果(第196図)、西鉄大橋駅に近い尾根の突端に造られたと想定できる。現在は筑紫丘中学校の南東、福田学園ミネルバ会館の周辺であるとみられる。

江戸時代の絵図(第195図)等を元に、城の構造を見ると、標高30mの丘陵上に曲輪を4面尾根線に沿って並べ、その間を堀切と土塁で遮断する。また、北東の斜面側に向けて二重の横堀(絵図では「ホリキリ」)を設けると共に北側斜面に堅堀2本を置き防御を固める構造であった。

**【史料】**なし **【参考文献】**1～4,7～11



第195図 那珂郡三宅郷古野城之図  
(部分・国立公文書館蔵)



第196図 古野城の位置比較(左:那珂郡三宅郷古野城之図(江戸後期)・右:国土地理院作成1/25,000「福岡南部」(昭和35年)を一部改変して事務局作成)

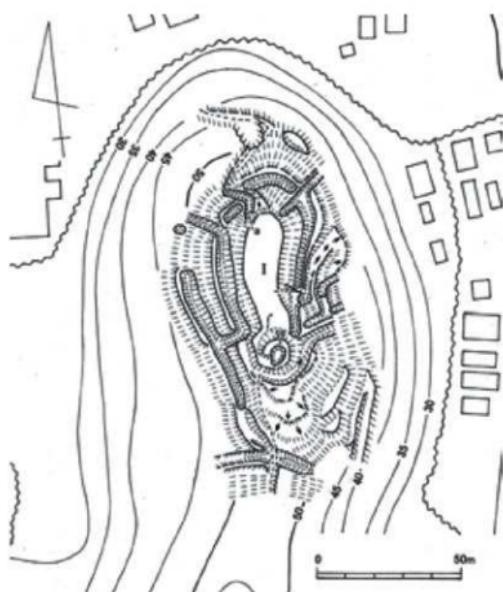
筑前 299	新城山城	郡名 那珂郡 種別 丘城	別称 隅本ノ城	図幅名 福岡南部(西) / 不入道(西)
		所在 筑紫郡那珂川町西隈		

【沿革】那珂川中流域西岸に面した丘陵上に位置する。『附録』には「(西隈)村の乾三町許に城址といふあり。城主しれず」とある。『拾遺』には「新城山古城」として所在、規模などを記し、城主不詳としている。

【概要】西隈周辺は、那珂川西岸に南北に細長い丘陵が延び、その北端の標高 59m の丘陵上に位置する。最高所は横穴式石室を持つ円墳で、その円墳を取り込みつつ、I の主郭を形成する単郭の構造である。単郭ではあるが、その南側を除く三方には横堀が巡り、要所に堅堀も入る構造を呈する。さらに I の北側にある a は北側からの虎口にあたり、斜面には堀状の通路がジグザグに掘り込まれる。当初は後世の山道かとも思ったが、堀状の通路と横堀とは交差せず、横堀からそのまま通路に移ることができないような防御の工夫がなされていることから、これが城郭遺構であることがわかる。I の南側は円墳の周溝を利用した横堀と斜面下には堀切を設け、南側の尾根上からの侵攻を防いでいる。

地誌類では城主不明だが、筑紫氏の持ち城を記した『城数之覚』には那珂郡に「隅本ノ城」が記される。現在、限本の地とされる西隈・東隈には新城山城しかない（老林城は別所地内に取まる）ため、この城が「隅本ノ城」とみられる。横堀を多用する筑紫氏の縄張りの特徴とも符合する。

【史料】あり 【参考文献】2 ~ 4,11,211



第 197 図 新城山城縄張り図 (岡寺 良作成)



第 198 図 新城山城遠景



第 199 図 新城山城堀切

筑前 300 おとなばやしじょう  
老林城 ろうりんじょう

郡名 那珂郡 別称 なし  
種別 山城 所在 筑紫郡那珂川町別所

図幅名 不入道(西)

【沿革】那珂郡と早良郡との境の小笠木峠の東、那珂川西岸に面した丘陵上に位置する。『本編』では亀ノ尾城の出城（『拾遺』では遠見城）であるとし、『拾遺』には長尾とも松尾山とも言うとある。『拾遺』別所村の頃、「火乱社」には「松尾の人家の北、城山の南の麓」という表現があることから、城山とも呼ばれていたことがわかる。なお、城名の読み方であるが、江戸時代の地誌類では「をとなばやし」とするが、明治期の『全誌』には「ラウリン」となっており、訓読みから音読みへ変わったことがわかる。

【概要】那珂川に突き出した標高 136m の丘陵上に位置する。総延長 100m 近く、幅約 10m の弓なりをした形状の主郭 I を頂部に置き、そこを中心いて城域が展開している。主郭 I は高さ 0.5m にも満たない低土塁が曲輪のほぼ全周を巡って防御するが、平坦面はあまり平坦加工がなされていない。主郭 I の東側から西側にかけての斜面に腰曲輪を、尾根上を中心に四か所ほど配している。特に北東尾根の腰曲輪は非常に平坦で広く、城内で最も曲輪らしい形状を呈している。主郭 I の南側から西側にかけての尾根には、大規模な多重の堀切が施される。堅堀なども交えつつ、かなり複雑な構



第 200 図 老林城縄張り図（事務局作成）

造を呈し、主に主郭の南～西側からの侵攻に対する警戒を読み取ることができる。

また、Iの北西の尾根筋約150m先の標高139m地点には、約10m四方の曲輪が二面、土塁と堀切を備えて構築されている（図中II）。北西側からの攻撃に備えた出曲輪と見ることができる。

以上のように、老林城は土塁と堀切、堅堀を巧みに多用した高度な縄張りであることがわかる。

【史料】なし 【参考文献】1～4.7～11.45.215



第201図 老林城遠景



第202図 老林城主郭切岸

筑前 301

龍神山城  
(岩門城)

郡名 那珂郡  
種別 山城

別称 山田ノ城・安徳城  
所在 筑紫郡那珂川町山田・安徳・上梶原

図幅名 不入道(西)

【沿革】老林城から那珂川を挟んだ対岸に聳える城山山頂に位置する。山頂からは福岡平野を一望できる好立地にある。『本編』では「龍神山城址」として安徳天皇が岩門に滞在した際の警護の城とする。南北朝期には、「岩門城」として今川了俊、少弐氏が深くかかわることを示す文書があり、また戦国時代には大内氏臣の遠田兼相・武藤次郎などが岩門在城を賞されている。そして『城数之覚』には「山田ノ城」として筑紫氏の番城となっており、この城にあたるものと思われる。このように長期にわたりさまざまなる勢力が使用した那珂郡の拠点城郭の一つである。

【概要】城山山頂（標高195m）の頂部に径約20mの主郭I-1を置き、その北側には土塁で囲まれた曲輪I-3を配置する。その北東側と南側には堀切を構えて防御する。南側

の堀切(h2)のさらに南にIIの曲輪群を構え、尾根上に曲輪が並列する構造をとる。西へ下る尾根上には堀切3本を設けて麓からの敵の侵入に



第203図 龍神山城遠景



第204図 龍神山城曲輪切岸



第205図 龍神山城からみた福岡平野



第206図 龍神山城曲輪ピット群  
(那珂川町教育委員会提供)



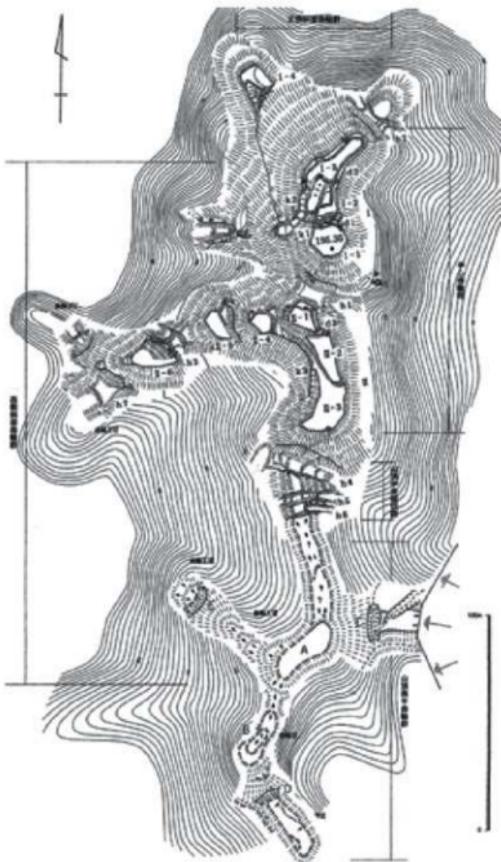
第207図 龍神山城堀切土層  
(那珂川町教育委員会提供)

備えている。一方南側の尾根はII-1・2・3と広めに曲輪を展開させ、落差をもって南側に堀切群(h4~6・山頂中央堀切群)を設ける。

その堀切群から南は一見自然地形が展開し、城域ではないという考えもあるが、やや人為的に平坦面化しているAとBの曲輪を中心、その周囲の尾根上に浅いもの人の為に掘削して生じた堀切を三方に配置していることから(C~E)、その範囲内は城域とみてよい。造成などをあまり加えない粗放な空間が広がることから、駐屯地などの機能が考えられる。

なお、平成14~16年(2002~04)度に部分的に発掘調査が行われ、主郭の平坦面上では多数のピット群と中世遺物が検出されるとともに、堀切などの埋没状況等が確かめられた。また、Bの曲輪でもトレンチ調査が行われたが、こちらではピット等は検出されず、一時的、臨時の使用を示しているのではないかと考えられる。

【史料】あり 【参考文献】1,2,4,7~9,10,11,133,194,201,215



第208図 龍神山(岩門)城縛張り図  
(文献201、那珂川町教育委員会作成測量図・中西義昌作成図・岡寺 良作成図を合成して岡寺作成)

筑前 303 猫嶺城

ねことうげじょう

郡名 那珂郡

種別 丘城

別称 猫尾ノ城・猫城

所在 筑紫郡那珂川町不入道

図幅名 不入道(西)

【沿革】城山の南に高く聳える矢岳から西へ派生する尾根は、山田と不入道あたりでは那珂川にまで突き出している。中でも那珂川が屈曲して流れる不入道の地には「<sup>ねことうげ</sup>猫嶺」と呼ばれる急峻な地形があり、その先端部に城は位置する。

近世の地誌類では山田兵部丞が居たとし、「城数之覚」では「猫尾ノ城」として筑紫氏の番城であったとみられる。

【概要】標高 104m の頂部を中心に全長約 50m の主郭 I-1 を置き、その北側には土塁囲みの曲輪 I-2 があり、東側に虎口を構える。その北側には堀切 2 本を設けて、尾根の鞍部側からの攻撃に備える。鞍部は今では国道により開削されているが、かつては「猫嶺」と呼ばれる峠越えルートであった。主郭の南側にも土塁を構えた曲輪を 2 つほど並べている。

那珂郡の南と北をつなぐ重要な交通の要衝に在り、南北の往来を厳重に監視する役割も果たしていたとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1～5,7～11,45,190,194,215



第 209 図 猫嶺城縄張り図（文献 190・中西義昌作成）

筑前 305 鷺ヶ岳城

ねしがたけじょう

郡名 那珂郡

種別 山城

別称 滑城

図幅名 不入道(西)

所在 筑紫郡那珂川町南面里

【沿革】那珂川西岸に聳える成竹山（標高 580m）から北へ派生する尾根上、鷺ヶ岳山頂に位置する。山頂からは福岡平野を一望のものとにすることができる。『本編』には大友氏の家臣、大鶴宗雲（『拾遺』では宗周）が那珂郡の拠点として築き、居城とした城とされ、天正 7 年（1579）に龍造寺隆信方の攻撃を擊破したが、同 9 年に筑紫廣門によって落城せられたとする。『拾遺』には築城年を永禄 3 年（1560）の大友方による筑紫秋月方攻略時であるとし、永禄 3 年築城の記事については、南面里の会下の岩崖の銘にあるとする。実際、この岩崖の銘は、『全誌』の他、昭和 51 年（1976）刊行の『郷土史那珂川』（文献 45）に「当城所事永禄五年（『全誌』



第 210 図 鷺ヶ岳から眺めた福岡平野



第211図 鷲ヶ岳城縄張り図（文献206・中西義昌作成図・村上勝郎・田中賢二作成図を合成して村上・田中作成）

は永禄三年）…」と刻まれているとある（「会下の岩崖」の遺跡番号は0262）。

**【概要】** 城の曲輪群は大きく三分される（I～III）。標高454m地点を中心とした曲輪群Iは山頂部に約20m四方の主郭を置き、そこから南側へ延びる尾根線上に曲輪群を並列させる。西側の尾根（A）には、大型の堀切2本を設け、城域を画す。Iの曲輪群の周囲には、東側と西側の斜面（C・D）を中心に自然石を利用した石垣が積



第212図 鷲ヶ岳城堀切

まれる。

I から尾根の鞍部を挟んだ南側には II の曲輪群が尾根上に展開する。その南側には、三重の堀切 B が構えられ、南側からの防御に備えていた。一方、東側の尾根は緩やかな傾斜の平坦面が設けられ、谷へ向かって道が続いている。谷を挟んで北側の尾根に曲輪群 III が展開している。併せて 11 ほどの曲輪面が確認でき、それらには大振りの自然石を用いた石垣が用いられている。

従来、曲輪群 III は城館遺構として認識されていなかつたが、堀切などの顕著な防御遺構はないものの、中世の火鉢なども採集されており、その時期の人為的構築物であり、また城の縄張りの配置としても違和感はないため、鷲ヶ岳城の一端とみてよいと思われる。

【史料】あり 【参考文献】1～5.7～9.10.11.190.206



第 213 図 鷲ヶ岳城曲輪群 I の石垣

第 214 図 鷲ヶ岳城曲輪群 III の石垣

筑前 307	いちのたけじょう 一ノ岳城	郡名 那珂郡	別称 五箇山城	図幅名 不入道(西)
種別	山城	所在 筑紫郡那珂川町五ヶ山・市ノ瀬		

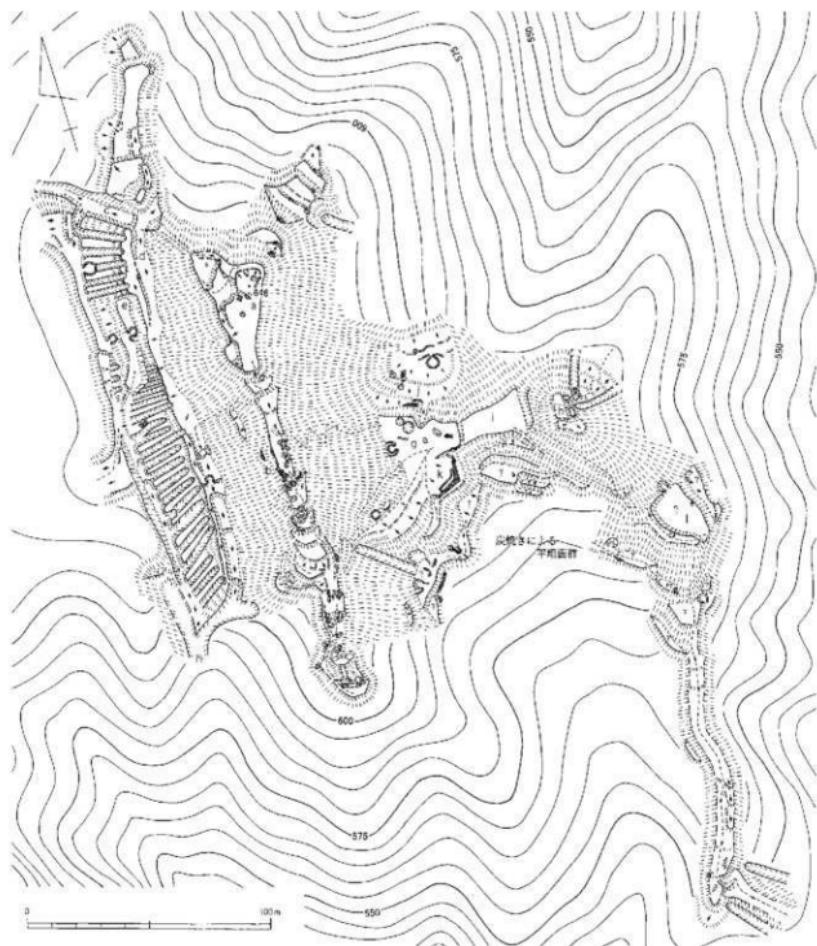
【概要】那珂川町の平野部の最奥部、亀ノ尾峠の西に聳える一ノ岳山頂に位置する。『本編』では九州探題千葉氏の居城で、後に筑紫廣門の出城であったとする。『城数之覚』では「一ノ嶽ノ城」で、筑紫氏の番城として記載される。天正 14 年（1586）に島津方によって落とされ、翌年の豊臣秀吉の九州平定まで秋月氏の持ち城となった。

【概要】標高 646m の一ノ岳山頂を中心 に城域は展開する。



第 215 図 一ノ岳城と亀ノ尾城

第 216 図 一ノ岳城堀切



第217図 一ノ岳城縛張り図（文献201・岡寺 良作成）

山頂部に南北約50m、東西約20mの細長い主郭aを置き、その南側の尾根上に細長く曲輪群が並列する。その西側には自然石による石垣bが築かれ。これらの曲輪群の西側斜面一帯には、横堀dが築かれ、その横堀の下には一面に敵空堀群が築かれ。竪堀の数は、後世の炭焼による破壊を考えれば、30本を超える規模とみられる。竪堀のさらに斜面下にも横堀を設け、さらに防御を固くしている。その敵空堀群の北側は北西側につながる尾根を堀切で断ち切っているが、尾根の先には一部曲輪も認められる。

一方、山頂の曲輪群の東側斜面には特に防護遺構はみられず、そのまま尾根の鞍部へと続いている。尾根の鞍部は約40m四方の曲輪g、曲輪iが並び、その南北側の斜面には石垣遺構が見られる（石垣j,k）。特に南側斜面の石垣kは高さが3m前後にもなる大掛かりなもので、最も高くなる箇所は二段に分けてセットバックして積んでいる様子がわかる。隅角部を造り出しているが、いわゆる算木積みとはなっておらず、戦国期のものとみられる。曲輪群はその東の頂部hにも見られ、土塁と堀切でその北東側斜面からの防護としている。

そこから南側へ延びる尾根上には1などの平坦面があるが、周囲は炭焼き遺構が多く存在し、城館遺構と断定することは難しい。ただ、南の尾根の先端部mには登山口の両側に豊堀を掘っており、いわゆる城に出入りする虎口のような機能を持っていたものとみられる。

以上のように、一ノ岳城は、総延長500m近くもある規模を誇るのみならず、膨大な数の畝空堀群を持つ那珂郡の中でも屈指の戦国期城館であり、筑紫氏の筑前進出の足掛かりとなる城館として機能したものとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1～5,7～9,10,11,201,215

筑前 308	かめのおじょう 亀ノ尾城	郡名 那珂郡 别称 虎ヶ岳城・虎ヶ山城・ 笹城 図幅名 不入道(西)
		種別 山城 所在 筑紫郡那珂川町五ヶ山・市ノ瀬

【沿革】亀ノ尾峠の東に聳える亀ノ尾山の二つの峰に位置する。『本編』には「網取（五ヶ山の枝村）村の境内に虎か岳とて古城の址あり。城主しれず。亀尾山につづきて少東南の方にあり」とし、「麻生氏の端城と云伝ふ」とある。また、「亀ノ尾城」についても「是は大友家の旗下麻生民部少輔が居城」とする。『拾遺』には亀尾古城と虎ヶ嶽古城を併記し、亀ノ尾城の南に虎ヶ岳城があるとし、虎ヶ岳城を篠城ともいうとある。現状確認できる亀ノ尾城は二つの峰にまたがっているため、亀ノ尾城と虎ヶ岳城（篠城）は一体の城郭であったとみてよいと思われる。

なお、一次史料では亀尾城は九州探題渋川氏の居城で、渋川氏衰退後は大内氏臣の遠田弘常が城督となっている。さらに『本編』によると天正14年（1586）の島津方の一ノ岳城攻略の際には、亀ノ尾城は島津方の向陣（付け城）として利用されたとある。

【概要】亀ノ尾山は標高420m前後の頂部が南北に二つ並んでおり、地誌類の記載から、北を亀ノ尾城、南を虎ヶ岳城と呼ん



第218図 一ノ岳城石垣j



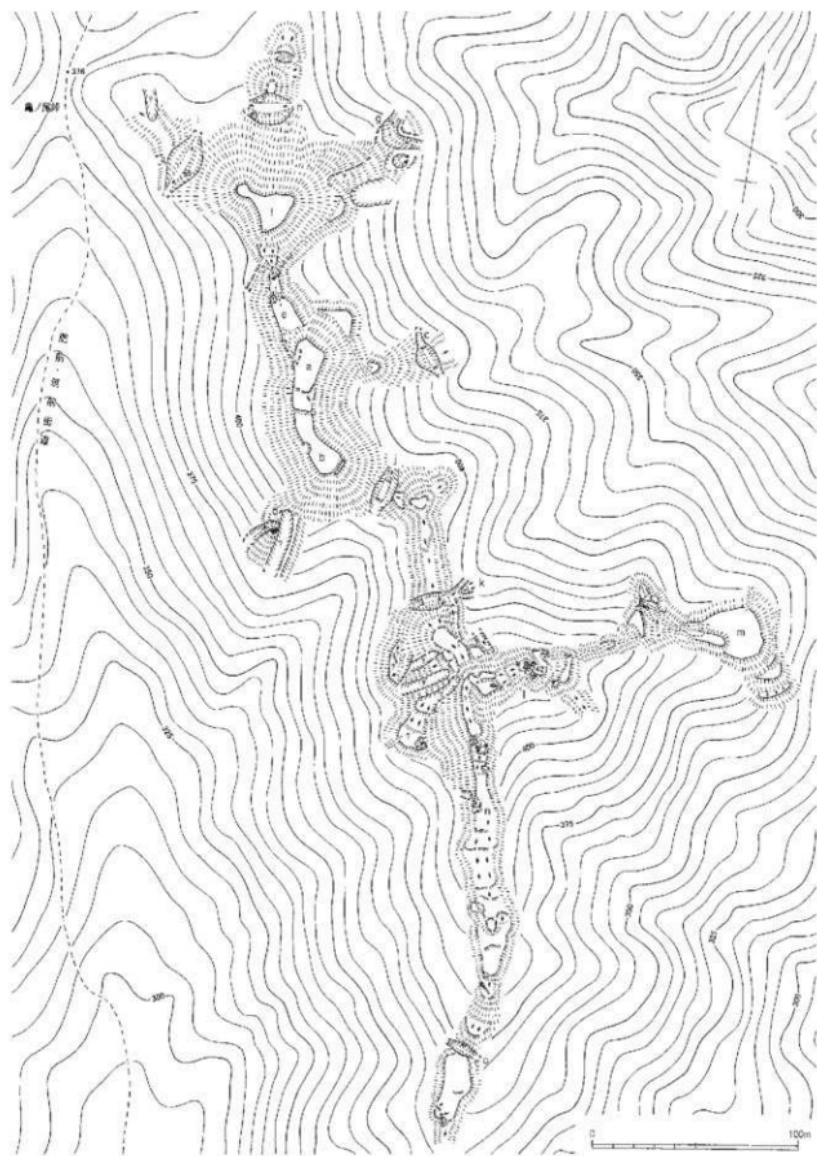
第219図 一ノ岳城石垣k



第220図 亀ノ尾城遠景



第221図 亀ノ尾城堀切



第222図 亀ノ尾城縄張り図（文献201・下高大輔・岡寺 良作成）

でいたとみられる。北側の曲輪群（a,b,e,f）は非常に平坦加工がなされており、周囲の尾根すべてに堀切を設け、厳重に警戒する。一方、南側の曲輪群（l,m,n）は自然地形に近い平坦地形で、ほとんどが一見城郭の曲輪ではないようにも見えるが、堀切kやoが縁辺部に見られ、その内部を防御していることから、これらも城域に含めてみるべきである。龍神山城（岩門城）の南半部と同様、駐屯地的な機能を考えるべきであろう。

以上のように亀ノ尾城は、全長が500mを超える規模であり、当初は渋川氏の拠点、大内氏の那珂郡支配の要となり、後には一ノ岳城と共に筑紫氏の那珂郡の拠点として重要な機能を担ったものとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1～3,5,7～11,201,215

なまがりじょう 筑前 310 七曲城	郡名 那珂郡 / 肥前国	別称 なし	図幅名 中原(西)
	種別 山城 所在 筑紫郡那珂川町五ヶ山・佐賀県三養基郡みやき町原古賀		

【沿革】那珂川から佐賀県みやき町中原と神埼郡坂本へ抜ける県境、七曲峠と坂本峠との間の稜線上の頂部に位置する。那珂川町教育委員会の遺跡分布図（文献229）に「七曲城」として周知の包蔵地として掲載されるのを初出とし、佐賀県教育委員会による中世城館跡緊急分布調査報告書（文献54）に現地の調査報告が掲載される他は、地誌類等には一切見られない。

【概要】標高600mの頂部は、現在電波鉄塔が建つが、若干の平坦面が見られ、そこから曲輪の縁に沿って土塁が延びる。主郭とみられる

Iは約20m四方の平坦面が確保でき、その東側の土塁には大振りの自然石を用いた石垣が確認できる（図中A）。

Bの箇所は堀切状に掘られているが、防御的な意味をあまりなしておらず、城郭構造か否かは微妙である。Iの南には脊振山系の稜線上を通る山道が走るが、明確な城館遺構は特に見られない。頂部の北東側はなだらかな尾根地形が200mほどにわたって続くものの、曲輪など人为的な造成はなされていない。

文献54には渋川氏の筑前への足掛かりとしての性格を想定しているが、文献記載等が全くないため、断定することは難しい。

【史料】なし 【参考文献】54・229



第223図 七曲城石垣



第224図 七曲城縛張り図（事務局作成）

## ⑦早良郡

筑前 312	こたべじょう	郡名 早良郡 别称 小田部氏宅・堀ノ内城・月城 図幅名 福岡西南部(東)
		種別 平地城館 所在 福岡市早良区有田2~3丁目

【沿革】福岡市早良区の平野部、室見川と金屑川との間に挟まれた有田の地に位置する。現在では、宅地化が進み、旧地形を窺いにくくなつたが、昭和 30 年代の地図を見ると、両側の河川に挟まれた低丘陵上に位置する。

『拾遺』には「古宅」として「村内に在。堀内といふ。堀址残れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏が里城なるべし。其邊に小田部氏墓といふもあり。塚上に切石二重を置り」とあり、さらに「又村南に築城といふ所あり」とし、鎮西要略の小田部城はこれかと推測する。

【概要】『拾遺』編纂の際に青柳種信が作成した「早良郡廻村覚帳 下 文政六年未十月」(『筑前町村書上帳』所収)には、「有田村ノ内小田部氏宅址」として、第 226 図が載せられている。それには、面積五段、三十間四方の方形区画で北側と西側に堀を巡らせた構造の「小田部氏宅」が、小田部氏墓と共に載せられている。福岡市分布地図(文献 226)等では宝満宮を含む 100m × 140m の範囲が推定されている。文献 186 によるとかつて土塁や堀の跡があったという。また、築城の場所は、文献 47 によれば有田高等小学校(現在の福岡講論館高校)の敷地であるというが、城館遺構の存在は見られない。

なお、有田から小田部の台地上の一帯の発掘調査では、有田・小田部遺跡群として 15~16 世紀の堀で囲まれた居館遺構が数多く見つかっており、小田部城に関連するものとみられる。

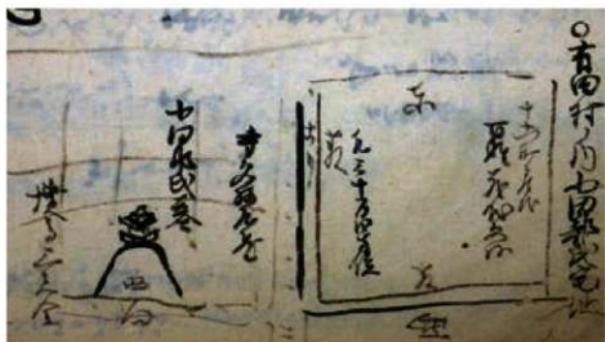
【史料】なし

【参考文献】

3 ~ 5, 10, 11, 47, 186



第 225 図 小田部城位置図(国土地理院作成 1/25,000 地形図「福岡西南部」(昭和 35 年)を一部変更して事務局作成)



第 226 図 有田村ノ内小田部氏宅址図  
(「早良郡廻村覚帳(下)」「筑前町村書上帳 早良郡四」・福岡県立図書館蔵)

筑前 314 荛道岳城

郡名 早良郡 別称 東入部城 図幅名 福岡西南部(東)  
種別 山城 所在 福岡市早良区東入部

【沿革】安楽平城のある荒平山から北西へ延びる尾根上、標高約200mの頂部に位置する。

『拾遺』には「安楽平の出城なり」とある。『本編』や『拾遺』の安楽平城の「はるか西に出城(東入部古城)」があるとしているが、この城に該当するものと思われる。文献47には弘安の役の見張所の跡ともあるが、真偽は定かではない。

【概要】尾根の頂部に主郭Ⅰを設け、南側は土塁で囲み、その南側は、所々に小曲輪群Ⅱを挟みつつ、多重の堀切で防衛する。主郭の北側はやや広い腰曲輪となっており、その曲輪と主郭との間の切岸は非常に急角度となる。また、その北側斜面は堀切、豊堀群で厳重に防衛する構えを見せる。

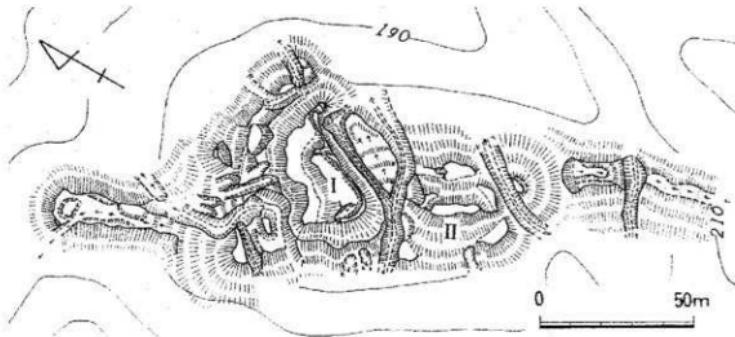
【史料】なし 【参考文献】2~4,11,47



第227図 荛道岳城主郭の土塁



第228図 荛道岳城切岸と曲輪面



第229図 荛道岳城縄張り図(山崎龍雄作成・提供)

筑前 315 安楽平城

郡名 早良郡 別称 荒平城 図幅名 福岡西南部(東)  
種別 山城 所在 福岡市早良区東入部

【沿革】福岡平野に突き出るようにそびえたつ油山山頂の西の別峰・荒平山山頂に位置する。『本編』には天文22年(1553)に大友氏家臣・小田部民部大輔鎮通入道紹叱が城主となり、早良郡を治める拠点としたが、天正7年(1579)に龍造寺隆信に攻められ、落とされたとある。『本編』

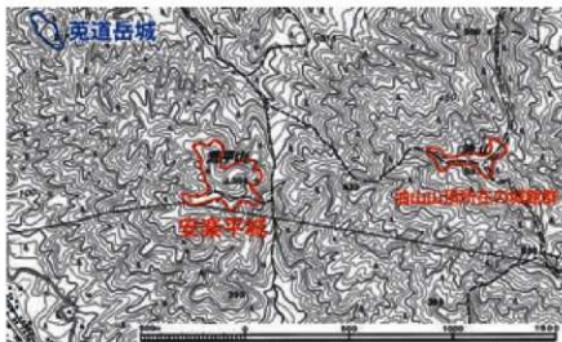


第230図 安楽平城・周辺城館遠景(脇山側から)

には落城の際のことが事細かに記載されている。『拾遺』には同9年に龍造寺方に明け渡し、小田部紹叱は立花山城に退転し、隆信は小田部常陸介増光・空閑三河入道可清を入れ置いたとする。

**【概要】**安楽平城は、油山山頂の西約1km地点の荒平山山頂（標高394m）に所在するが、安楽平城の北西約1km地点の東入部側の尾根上には菟道岳城があり、また油山山頂にも城館群を確認することができる。ここでは安楽平城と油山山頂の周辺城館群をそれぞれ報告する（菟道岳城は筑前314（P.196）として報告）。

<安楽平城>荒平山山頂に東西約30m、南北約20mの主郭Ⅰ-1を置き、そこから北と東へ延びる尾根線上に曲輪群を配置する。東側の尾根は主郭の直下に曲輪Ⅰ-2～4を置く。Ⅰ-3はやや高くなっている、周囲を石垣で固めている。曲輪Ⅰ-4の下に堀切1本を設け、東側からの備えとし、南側斜面にも石垣(i2)を備えている。一方、北側斜面は、尾根の鞍部を石垣(i1)と土塁で防護し、Ⅱの曲輪群へとつなげている。南北に細長くⅡ-1～3の曲輪が並ぶが、西側に低土塁を設けて防壁ラインとしている。北側の尾根の要所は多重の堀切によって厳重に防備する。



第231図 安楽平城及び周辺城館群位置図（国土地理院1/25,000地形図「福岡西南部」を一部改変して事務局作成）



第232図 安楽平城から望む早良平野



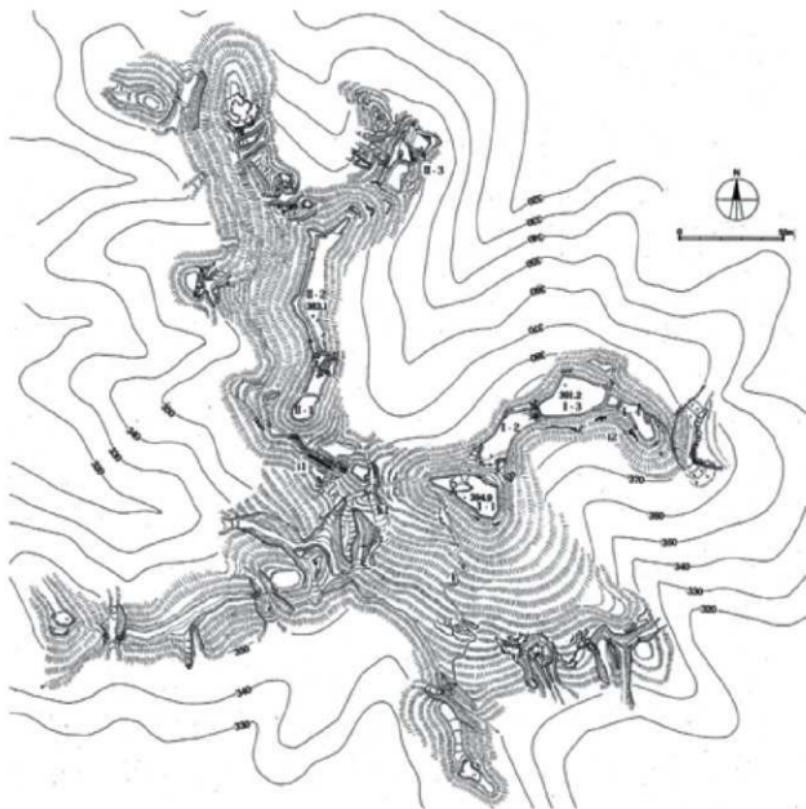
第233図 安楽平城堀切



第234図 安楽平城石垣

主郭の西側の尾根は基本的には曲輪にはせず、尾根上を大きな多重の堀切や堅堀によって通行を遮断し、城域を画している。主郭の南側は急斜面となっており、やや平坦になった尾根の鞍部に堀切を設けて防御している。曲輪群周辺の斜面には所々に、自然石を用いた石垣が見られ、城域内のかなりの部分に石垣が用いられていたことがわかる。安楽平城からは、早良平野が南北を通して一望することができる場所に在り、早良郡をおさえる上で非常に重要な位置にあったことがわかる。

＜油山山頂所在の城館群＞油山山頂周辺にも城館群が所在する。山頂周辺には大きく2箇所、城館遺構が確認できる。山頂周辺の曲輪群Ⅰは、山頂部の主郭Ⅰを中心にして東西に2と3の曲輪を配する。山頂からは、北側を除く三方に緩やかな尾根が伸びているが、南側は三重の堀切群（あるいは堅堀群）Aによって遮断し、南側からの侵入に備えている。東側の尾根にも3の曲輪の先に堀切Bを設けて



第235図 安楽平城縛張り図（中西義昌作成・提供）

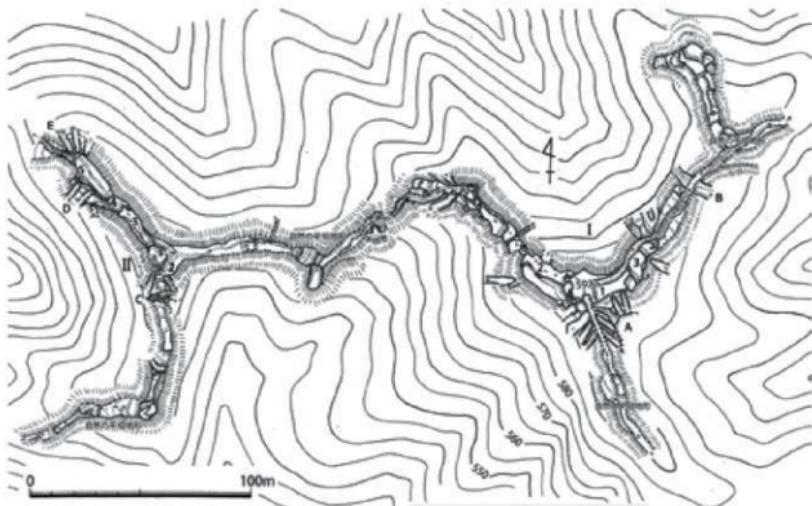
いる。その一方で、西側の尾根は堀などの防御遺構を設けず、自然の平坦な尾根地形がそのまま継続している。また、曲輪周辺の斜面にも堅堀が何本か見られる。

もう一つの曲輪群IIは山頂から西へ約200m離れた頂部を中心に形成される。土塁を備えた径約15mの曲輪Iを中心とし、2の腰曲輪を置き、北西側の尾根にかけて3～5の曲輪を配する。ここも東、南、北西の三方に尾根が延びているが、南側には堅堀と堀切Cで防御を固め、北西側にも堅堀群Eを配し、尾根下からの攻撃に備える。5の曲輪の南側斜面にも堅堀群Dなどが見られる。しかし、東側の尾根は自然の平坦な尾根地形となっており、堀などの防御遺構はみられない。

以上のように、油山山頂周辺には大きく2つの城館遺構群が確認できるが、全体の配置を見ると、曲輪群IとIIはそれぞれ城館として独立した縄張りを呈しているように見えるものの、それぞれの曲輪群の間をつなぐ尾根に対しては堀などの遮断するような防御遺構は一切見られず、IとIIの間の通行が非常に容易にしていることがわかる。よって、これら2つの曲輪群は別々に存在しているのではなく、お互い連携してこそ縄張りが完結していることがわかる。IとIIの間の自然平坦地形は、戦時における駐屯地として機能することも想定できよう。

この城館群については明確に地誌類には記載が見られない。ただ『本編』には天正7年に龍造寺方が安楽平城を攻撃した際に、「やだけ」の山の頂上に原田氏と草野氏が在陣したとある。『拾遺』によれば、現在の油山山頂を「矢竹ノ山」と呼んでいることから、『本編』記載の原田・草野氏が在陣した場所は油山山頂ということになる。偶然かもしれないが二つ曲輪群があるのは原田氏と草野氏がそれぞれ在陣した可能性も考えられるが、即断は難しいであろう。いずれにせよ、安楽平城に深くかかわった城館群であることは疑いないであろう。

【史料】あり 【参考文献】1～5.7～9,10,11,47,169,181,190



第236図 油山山頂所在の城館群（山崎龍雄作成・提供図を一部改変して事務局作成）

筑前 318 まがりぶちじょう 曲渕城

郡名 早良郡 別称 飯場城 図幅名 福岡西南部(西) / 脊振山(西)  
種別 丘城 所在 福岡市早良区曲渕

【沿革】早良から肥前へ抜ける三瀬峠への入口にあたる曲渕集落の東の丘陵上（城の山）に位置する。『本編』では曲渕の領主で、高祖城主・原田氏の家臣、曲渕河内守氏助、その子信助が、元亀・天正年間に在城したとある。麓に居館もあったとするが、現在貯水池の底になっており、詳細は不明である。

【概要】丘陵頂部には、現在曲渕神社があるが、麓の集落にあったものを曲渕貯水池建設の際に移転したものである。現状では約30m四方の平坦面となっているが、神社移築に伴い、曲輪面はかなり削られており、改変されているものとみられるものの、主郭の所在とみてよい。南側は尾根の鞍部になっており、一部堀切状の掘り込みなども見られる。「附録」にある「堀切の跡」であろう。

【史料】あり 【参考文献】1～5.7～11,47,190

筑前 319 かなやまじょう 金山城

郡名 早良郡 / 肥前国 別称 熊の城・神代氏城 図幅名 脊振山(西)  
種別 山城 所在 福岡市早良区石釜・佐賀県佐賀市三瀬村三瀬

【沿革】福岡県と佐賀県との県境をなす脊振山系で、脊振山に次いで二番目に高い金山山頂に位置する。『全誌』には「神代氏城址」として、「三瀬城と云。是本城なり。永禄六年癸亥、神代勝利是を築く。其子長良まで此所に居れり。山内に砦十六所あり」とある。三瀬城の本城は佐賀県側の麓近くに「三瀬城」としてあるため、立地等から考えてもにわかには信じがたく、神代氏の詰城と考えられる。また明治時代の『神埼郡村誌』に「金山城」として報告されている。

【概要】金山山頂（標高967m）に位置する。山頂部に東西約20m、南北約10mの主郭を置き、そこから東側に曲輪群を展開する。もつとも東側の曲輪は土塁で囲まれている。主郭から東へ約150mの地点には堀切1本を設ける。深さ0.5mに満たない緩やかな堀切ではあ



第237図 曲渕城縄張り図（文献190・中西義昌作成）



第238図 金山城遠景  
(上：早良区脇山から・下：西から)

るが、東の小爪岬からの侵攻を防いでいる。

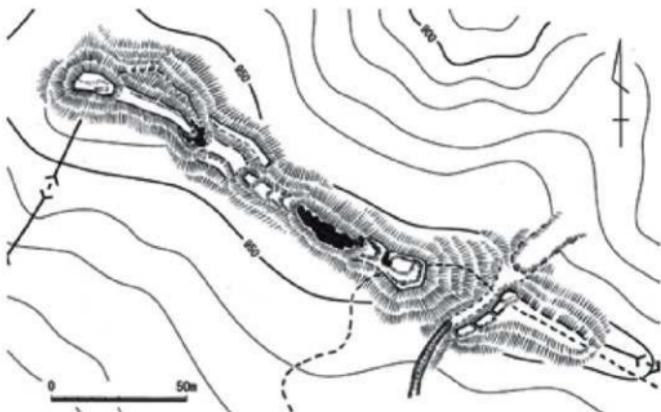
『早良郡誌』(文献 47)には山頂に「神代勝利の墓」や「人見岩」があるとしているが、山頂にいくつか確認でき立石状の自然石はこれらを示しているのかも知れない。

金山城からは佐賀側は固より安楽平城などの早良郡を一望することができ、神代氏が筑前側を窺うために構築した城郭としての性格が想定できる。

【史料】なし

【参考文献】

4,11,47,54



第239図 金山城縄張り図(文献 54・宮武正登作成)



第240図 金山城堀切



第241図 金山山頂の立石状自然石

筑前 320	いけだじょう 池田城	郡名 早良郡	別称 なし	図幅名 脊振山(東)
		種別 山城	所在 福岡市早良区脇山	

【沿革】早良平野の奥部、脇山の池田集落の南側背後の山稜上の頂部(池田山)に位置する。『本編』「安楽平城跡」の項には、池田城は安楽平城の小田部氏配下の大教坊兼光が守備していたが、天正 7 年(1579)の安楽平城攻防戦において、龍造寺方に寝返ったため、小田部方が攻めたことが記載される。

池田の大教坊は背振山脇山東門寺の有力坊で、池田集落の最奥部には大教坊があったとされる大日堂があ



第242図 池田城遠景



第243図 大教坊墓石

り、天正 11 年銘の墓石が残されている。

【概要】北西へ突き出した尾根の先端頂部（標高 240m）に約 10m 四方の主郭を置き、西側に曲輪 2 面と、南側の尾根上に堀切 1 本を設けている。北および北東方向の尾根上は緩やかな地形だが、曲輪や堀などの防御構造はみられず、麓側からの防御よりも南の尾根側からの防御に対する配慮が見られる。

全長が 50m に満たない小規模な城館で、池田の集落をおさえていた領主でもあった大教坊に関する城館とみてよいと思われる。

【史料】なし

【参考文献】1,4,11,47



第 244 図 池田城縄張り図（事務局作成）

筑前 321 とじじょう  
**都地城**

郡名 早良郡 別称 都地若狭守宅 図幅名 福岡西南部（東）  
種別 平地城館 所在 福岡市西区金武

【沿革】室見川西岸、吉武との境に近い、金武の字都地に位置する。『全誌』では「都地若狭守宅址」として「廣四十歩許り、周に堀の址のこれり」とあり、細川五位尉蔵人光行と名乗り宮中に奉仕していたが、天文元年（1532）に足利義輝の命により、同地に下向して土着、都地姓を名乗ったと家記に記されるという。子孫の若狭守の時に「都地原屋敷」に移り住み、それがこの若狭守宅にあたるという。若狭守の子左近助は、後に小早川隆景の配下として早良郡の代官になったとある

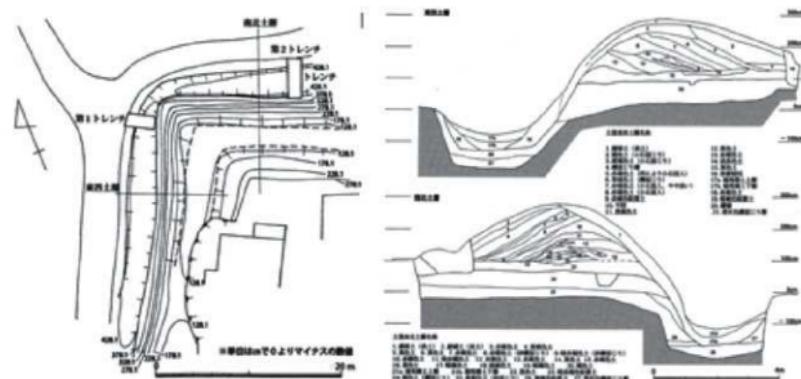
が、近世の地誌類には一切登場せず、定かではない。文献 47 にて初めて「都地城跡」として紹介される。【概要】都地の集落には、水路が流れ、一部には土壘状遺構も森として残存し、城館の様相を色濃く残していたが、現在は改変等によりかなりわかりにくい状況となってきている。南北二つの区画が認められ、それぞれ土壘と堀や溝で囲まれている。北側の区画は一辺 50～80m の方形で中心的な曲輪である一方、南側は一辺 30～50m の方形で、北側より小さく副郭とみてよい。二つの区画の間には現在水路が通っている。また、北側区画の北西側は、昭和 50 年（1975）に畠地造成に伴い発掘調査が行われ、堀底か



第 245 図 都地城縄張り図（文献 11・山崎龍雄作成）



第246図 都地域遠景（左：南から、右：西から・福岡市埋蔵文化財センター提供）



第247図 都地域跡発掘調査図（左：平面図・右：土塁土層図・文献146）

らの高さ4mもある土塁の状況を確認している。土塁は区画内部に傾斜するように斜めに少しづつ積まれている様子が窺われる。また、土塁盛土から出土した遺物の下限は14世紀であることから、それ以降に築造時期が求められる。

戦後の早い段階で開発が進んだ福岡市内にあって、地表面で確認できる土塁遺構を持つ平地域館が残されているのは貴重な事例である。

【史料】なし 【参考文献】4,5,8～10,11,47,146

筑前 322	飯盛城	郡名 早良郡	別称 飯盛（森）山城	図幅名 福岡西南部（西）
		種別 山城	所在 福岡市西区飯盛・羽根戸	

【沿革】室見川西側、怡土郡のほど近くに神奈備形にきれいにそびえる飯盛山山頂に位置する。『拾遺』には文和2年（1353）、九州探題の一色直氏が築城したとし、『本編』等では南北朝の争乱において戦場となったが、戦国時代には高祖城主の原田了栄の出城であったとしている。

【概要】標高382mの飯盛山山頂には、飯盛神社の上宮が祀られており、平安時代後期の瓦経を大量に埋納した飯盛山経塚が大正年間に発見されている。そのため、発見の際の改変は若干想定はできるが、城

館遺構は比較的良好に残存している。山頂部に約10m四方の主郭1を置き、その周囲に複数の曲輪を配置する。それらの曲輪は基本的に土塁で囲まれ、土塁の途切れたところが虎口となる。主郭周囲には地誌類にあるように、石垣が断片的にみられる。南側斜面には10本を超える畝状空堀群を設けると共に、郡境にあたる日向峰に向かって西側の尾根上にも堀切2本を設けて防御する。『拾遺』には東側にも所々に堀切ありとするが、現状では見つかっていない。また、『全誌』には、山の北東側の山腹に「八貫櫓」(『本編』では「千貫矢倉」)という岩があり、岩の上に櫓を置いたところと伝える。

高祖城からも峰伝いに渡ることができ、原田氏が早良郡を窺う足掛かりとしたことが想定される。

【史料】あり 【参考文献】1～5.7～10,11,47,186,197



第248図 飯盛城縄張り図（文献197・中西義昌作成）

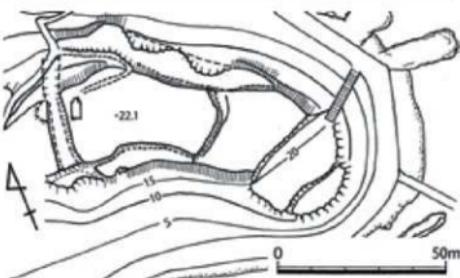
筑前327	じょうがさきじょう	郡名	早良郡	別称	北浦城・城崎砦	図幅名	福岡西部（東）
		種別	丘城	所在	福岡市西区能古		

【沿革】能古島の東南、北浦集落の近くにある「浦ノ城」という岬に位置する。『附録』では「古城地」として城主不明とするも、『拾遺』では「城ヶ崎古城」として、平安時代の藤原純友に従った伊賀壽太郎が砦を築き、海賊行為を働いた拠点であったとする。文献47が「北浦城」の名称の初出である。

【概要】博多湾に面した岬の突端の標高22m地点の頂部に20～30m四方の曲輪が突端に向けて階段状に展開する。主郭の西側には堀切が掘られ、北側端部は土橋状になっている。第250図は江戸時代に描かれた城ヶ崎城の略図で、左下の「ホリ」が土橋状となっており、往時からの形態であることがわかる。また、北東側には「エン（縁）」の記載があり、腰曲輪の存在を示しているものと思われる。

【史料】なし

【参考文献】2～5.8～11,47,186



第249図 城ヶ崎城縄張り図（山崎龍雄作成・提供）



第250図 城ヶ崎城図  
（「早良郡郷村覚帳（上）」  
『筑前町村書上帳 早良郡四』・福岡県立図書館蔵）

## ⑧怡土郡

筑前 329	たかすじょう 高祖城	郡名 怡土郡 / 志摩郡 别称 なし	図幅名 福岡西南部(西) / 前原(東)
		種別 丘城 所在 糸島市高祖・高来寺、福岡市西区今宿上ノ原・女原・千里	

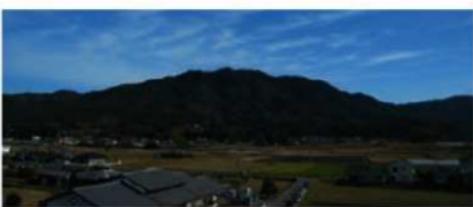
【沿革】福岡市西区と糸島との境にひときわ大きく聳える高祖山山頂に位置する。15世紀末に大内氏が取り立て、烏田氏などが城督となつたが、大内氏滅亡後は、在番衆であった原田氏が城主となり、怡土郡・志摩郡から肥前松浦郡にかけて勢力を誇った。

【概要】高祖山山頂にある高祖城を初めとして、山内には、何箇所か中世の城館遺構と認められる場所がある。ここではそれらを便宜的に山頂の「主城地区」、「草野陣地区」「高来寺地区」「里城地区」に分けてそれぞれ記載する。

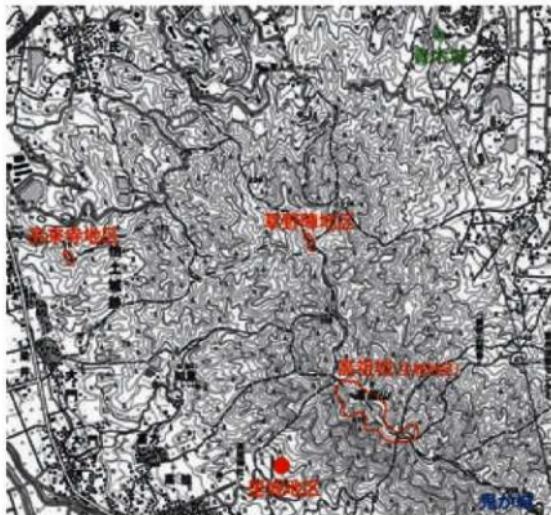
なお、『本編』にある「鬼が城」(『拾遺』では「高取城」)は主城地区の南東の峰、標高358mの山を指しているが、現地には城館遺構はない。『本編』も鬼が城のことを「名高き山」と山の名前として紹介しており、現段階では城館とは認めがたい。また同じく『本編』にある

北麓の青木村の三重の空堀の搦手は、「青木城(筑前345)」を指しているものと思われる。

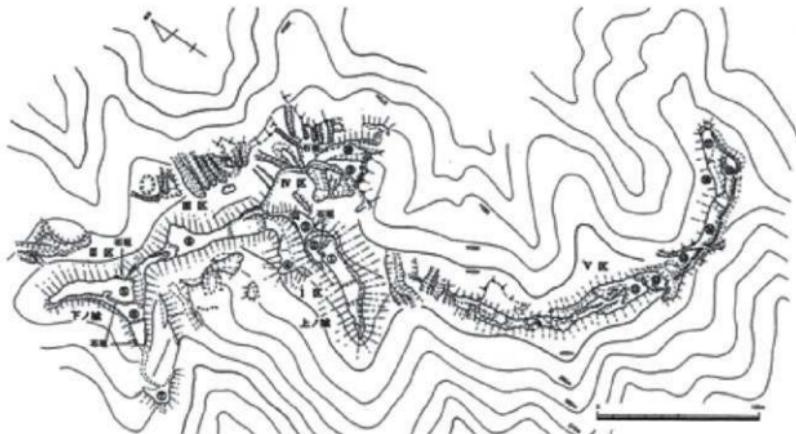
＜主城地区＞高祖山山頂(標高416m)の頂部を中心に、I～Vの大きく五地区に分かれ(第253図)。I地区は主郭①が置かれ、「上の城」と呼ばれている。平成10年(1998)度の発掘調査では北側の切岸に石垣が見られ、上部が一部崩れている状況が見受けられた(第254図)。主郭の一段下の②の曲輪には虎口ともいるべき石段遺構の他、①では礎石群も見つかっている。一方、II地区は「下の城」と呼ばれており、I地区と同規模の曲輪群が並列する。こちらの曲輪群にもI地区同様、石垣遺構を確認することができる。また、I地区とII地区の間の鞍部にはIII地区として⑧の曲輪が置かれている。このI地区とII地区では瓦が多く出土、採集されている。主に巴文軒丸瓦、



第251図 高祖城遠景



第252図 高祖城および周辺城館位置図(国土地理院1/25,000地形図「福岡西南部」を一部改変して事務局作成)



第253図 高祖城測量図（文献156・山崎龍雄・瓜生秀文ほか作成）

宝珠唐草文軒平瓦の他、菊菱文を表現した袖をもつ軒平瓦なども見つかっており、ここに瓦葺きの建物が少なからず建っていたと想定される。

そしてⅠ地区とⅢ地区の北側斜面一帯には堀切群と畝状空堀群(Ⅳ地区)が構築されている。『本編』にいう「姪浜堀」も考えられる。Ⅰ地区から南東方向に尾根が延びており、堀切群で大きく断ち切った後、緩やかに続く尾根上に平坦面の不明瞭な曲輪群が並び、それらを土塁で囲んでいる。このV地区は他の曲輪群と比べ、あまり平坦ではなく明らかに性格の異なるものである。駐屯地などの性格も想定できよう。以上のように「主城地区」は「上の城」と「下の城」の曲輪群を中心に全長500mにも及ぶ大規模な城域を有し、周囲の斜面に堀切群や畝状空堀群を構築した非常に高度な防御施設を備えていたことを示している。

＜里城地区＞『本編』には「城の上に谷間より登る道有。其麓に原田氏の當の居宅の跡あり。高祖社よりはるか上なる所也。村民は御館と云。今は田となれり」とある。高祖神社から山上へ約200m登った場所から、軒丸瓦、軒平瓦が採集されており、主城地区のものと類似する。『本編』のいう「御館」の推定地に該当する場所と考えられる。現状では何面かの平坦面が認められるが、後世の開墾等に伴う改変が少なからず存在し、詳細な構造についてはよくわかつ



第254図 高祖城上の城の石垣遺構  
(糸島市教育委員会提供)



第255図 高祖城堀切



第256図 高祖城V地区の土塁ライン

ていない。『糸島郡誌』(文献 48)には神社と御館との間には「桜馬場」という馬場もしくは堀があるというが、現状ではよくわかつていない。また、里城地区の山頂側には一の坂礎石群という怡土城関連の礎石群のある平坦面があるが、ここでは中世の土師器の小片が多数散乱している。堀などの明確な防御遺構はみられないが、これらの遺物から城館に関連した施設があった可能性が高い。

〈草野陣地区〉『本編』怡土郡「安上」の項には「上原村の上に、小田部陣、草野陣など云所あり。是むかし原田を攻し時、寄手の陣所なりと云」とある。小田部陣については、所在はよくわからないが、文献 48 には「草野陣の鐘撞」は飯氏、女原、上ノ原の境にあるとあり、怡土城の第一望楼のある頂部がそこにあたる。第一望楼の南側に戦国期の城館遺構を確認することができる(第 257 図)。

城館遺構の構造は、高祖山山頂側の尾根上に堀切 1 本を入れ、頂部およびその周辺に小曲輪を配置する単純な構造である。おそらく第一望楼のある平坦面も城域に含めていたものと思われる。山頂側に堀切を掘っているため、『本編』のいうように、高祖城を攻める際の付城の可能性も十分考えられる。

〈高来寺地区〉文献 48 には怡土城第四望楼のある峰の平地を「古城」というとある。実際、ここは高来寺と千里との境にあたり、戦国期の城館遺構が確認できる。望楼の礎石群のある標高 104.5m の頂部に南北約 30m の曲輪を置き、其の北東側に堀切 1 本を設ける構造である。草野陣地区の城館遺構と一見構造は似ているが、堀切が麓側に入っているのが対照的である。

以上のように、山頂周辺のみならず、山麓一帯にかけて、広く高祖城に関連すると思われる城館遺構が確認されており、今後さらなる詳細な検討が必要である。

【史料】あり 【参考文献】1 ~ 9, 10, 11, 48, 155, 156, 188 ~ 190



第 257 図 草野陣地区的城館縄張り図(山崎龍雄作成・提供)



第 258 図 高来寺地区的城館縄張り図(文献 190・中西義昌作成)

筑前 332 有田城

郡名 怡土郡

別称 なし

図幅名 前原(東)

種別 丘城

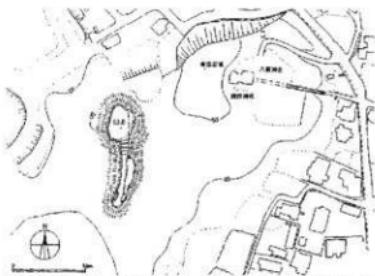
所在 糸島市有田

【沿革】雷山川の西、有田の熊野神社背後の丘陵上に位置する。『本編』では城主が有田因幡守と伝えるとある。

【概要】標高 53m の頂部に東西約 20m、南北約 30m の曲輪を置くのみの単純な構造である。曲輪の南側はなだらかな地形が続くが竹林による造成が見られる程度で堀などの明確な城館遺構は認められない。原田方にあった有田氏の居城であろう。

【史料】なし

【参考文献】1.5.7 ~ 11.48.197



第 259 図 有田城縄張り図 (文献 197・中西義昌作成)

筑前 335 旗振嶺城

郡名 怡土郡

別称 旗振山城

図幅名 前原(東) / 雷山(東)

種別 丘城

所在 糸島市飯原

【沿革】「筒城」と称された古代山城・雷山神籠石の西側の山稜上に位置する。『本編』「怡土城」に「旗振嶺の西南に、少きなる城址有。其下にから隈有」とあり、原田氏の旗下で宝珠岳城主の西左近鎮兼が原田氏に反逆して立て籠もった城とする。

【概要】山稜頂部は南側に大きな堀地形があり込み、半独立丘陵状となっている。底の部分のみ掘削などの造作がある可能性があるが、頂部から 20m 近くも比高差があり、元々の谷地形をかなり利用したものとみられる。頂部はほぼ自然地形で北東側に若干の小平坦面が認められるくらいで、ほとんど人工的な造成は行われていない粗野な単郭構造である。

第 262 図には雷山神籠石周辺に旗振嶺・筒山城(筒城)・松尾城が描かれる。この城館遺構の場所には「筒山城址」との記載があり、旗振嶺城と筒山城が重複あるいはここが筒山城の可能性も考えられる。

【史料】なし

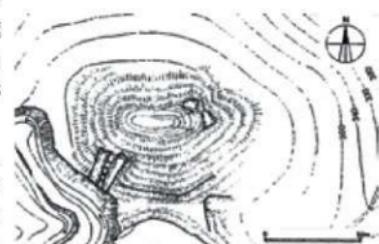
【参考文献】

1.4 ~ 6.8 ~

11.48.197



第 261 図 旗振嶺城南側にある堀切状の谷



第 260 図 旗振嶺城縄張り図  
(文献 197・中西義昌作成)



第 262 図 訂正怡土郡図(部分・国立公文書館蔵)  
(上方南。一部改変して事務局作成)

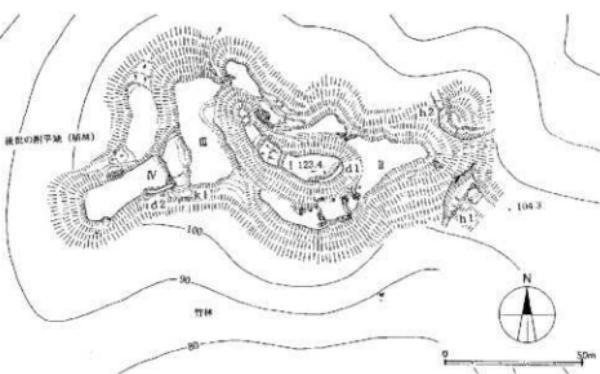
筑前 336 加布里城	かぶりじょう	郡名 怡土郡 種別 山城	別称 城山城・高岳城・浜窪城	所在 糸島市加布里・二丈浜窪	図幅名 前原(西)
-------------	--------	-----------------	----------------	----------------	-----------

【沿革】糸島半島の西側の付け根にある加布里に聳える城山山頂に位置する。『本編』では「原田了栄端城なり。岩熊河内といふものを城代として籠置たり」とし、『全誌』では「城山城址」と称する。『訂正怡土郡圖』(国立文書館蔵)には「高岳城址」と記載される。

【概要】城山山頂(標高 123m)に東西約

20m、南北約 10m の主郭を中心に城域が展開する。主郭 I の周囲には帯曲輪 II が取り付き、I の西側には III、IV の比較的大きな広さを持つ曲輪が尾根上に展開する。I と IV の曲輪には部分的に土塁も設けられる。II の北東側と南東側の尾根上にはそれぞれ堀切 1 本が設けられ、東側からの攻撃に備えている。全長は 200m 近くにも及び、高祖城や柑子岳城を除いては、周辺の城館の中では群を抜いて大きく、原田方の重要な拠点であったとみられる。

【史料】あり 【参考文献】1,4 ~ 10,11,48,49,51,184,190



第 263 図 加布里城縄張り図 (文献 184・中西義昌作成)

筑前 338 宝珠岳城	ほうじゅだけじょう	郡名 怡土郡 種別 丘城	別称 なし	所在 糸島市二丈長石	図幅名 前原(西)
-------------	-----------	-----------------	-------	------------	-----------

【沿革】長石集落にある宝満宮の西隣、「城山」と呼ばれる低丘陵上に位置する。『本編』には、大友方の西左近鎮兼が居城していたが、鎮兼は永禄 10 年 (1567) に高祖城主原田隆種に滅ぼされたことが記される。最終的に鎮兼は宝珠岳から一貴山、さらには旗振嶺に逃れ、打ち滅ぼされる。

【概要】標高 62m の丘陵上に約 20m 四方の主郭を造り出し、その北側に幅 10m を超える大きな堀切で北半分を断ち切っている。南側は緩やかな自然地形が見られる単郭の構造である。

【史料】なし

【参考文献】1,4 ~ 11,48,49,51,197



第 264 図 宝珠岳城縄張り図 (文献 197・中西義昌作成)

筑前 341 小倉山城

おぐらやまじょう

郡名 怡土郡

別称 小藏城・小倉城

種別 山城

所在 糸島市白糸

図幅名 雷山(西)

【沿革】白糸の滝の北約1kmにある白糸集落から川を挟んだ西側の丘陵上に位置する。『本編』では原田了栄の出城とする一方で、『全誌』には「砦址」として原田氏の家臣、波多江兵庫頭種載が居城したとある。

【概要】標高382mの丘陵上に一辺約20~30m規模の主郭Ⅰを置き、その南側にⅠよりやや広い曲輪Ⅱを配置する。Ⅰの東西に小曲輪がいくつか見られるが、堀などの防御遺構は確認できない。白糸集落と密接にかかわる小規模城館と言えよう。

【史料】なし

【参考文献】1.4~6.8~11.48.197



第265図 小倉山城縄張り図（文献197・中西義昌作成）

筑前 342 二丈岳城

にじょうだけじょう

郡名 怡土郡

別称 二城岳城・深江岳城・二重城

図幅名 雷山(西)

種別 山城

所在 糸島市二丈深江・二丈一貴山・二丈福井

【沿革】糸島市西部、玄界灘に突き出すように大きく聳える二丈岳山頂に位置する。山頂からは怡土郡・志摩郡全体を見通せ、さらに肥前唐津から壱岐まで見渡すことのできる絶好の場所である。『本編』では「深江岳城」として記載され、永禄年間は原田氏の配下の草野鎮永が居城し、豊臣秀吉に打ち滅ぼされたとある。『全誌』には草野氏入城前は深江豊前守良治が城主であったとする。

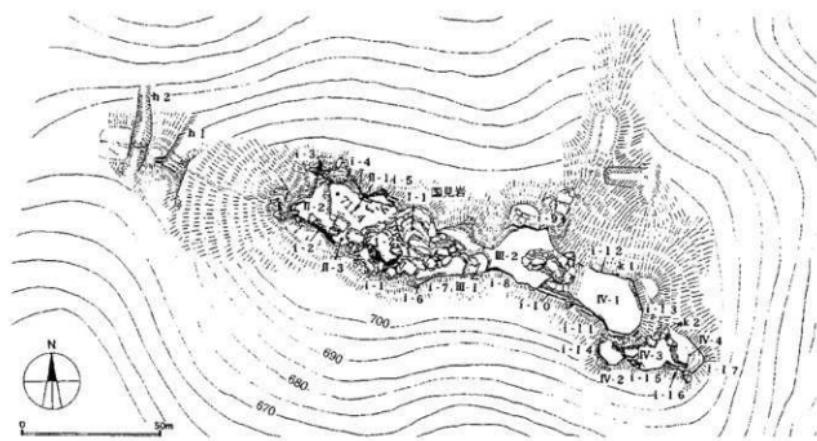
【概要】二丈岳山頂（標高711m）を中心に、東西約200mの範囲に城域を確認することができる。山頂一帯は、花崗岩の露頭が集中しており、その岩と岩の間を縫うように曲輪の平坦面が形成されている。山頂部の国見岩の東西両側に曲輪の平坦面群が確認できるが、特に東側のⅢ-2、Ⅳ-1の曲輪が約20~30mの規模を有し、城内では中心的な曲輪となっている。また、それらの曲輪の縁辺部は断崖絶壁となっているが、南側を中心に、石塁により周囲を固めている。石塁は露頭の



第266図 二丈岳城からの眺め（糸島半島）



第267図 二丈岳城堀切



第268図 二丈岳城縄張り図（文献197・中西義昌作成）

岩と岩の間の隙間を埋めるように人頭大の自然石が積まれ、1m前後の高さを測る。また西側は最も緩やかな尾根になっており、尾根の鞍部に堀切2本を設置して尾根筋からの侵攻に備えている。



第269図 二丈岳城石壁

山頂周辺では、土師器や瓦片が数多く採集されており、瓦葺き建物の存在が想定される。

また、山頂の北側約300m地点は広い尾根の鞍部になっており、「全誌」にも「五段ほどの宅地もあり」とあるように、広い平坦面群が広がっていて、中世の遺物が多く採集されている。ここを城館遺構とする考え方もあるが（文献214）、日常的な屋敷群にしては近辺に水場がなく、あまりに高地にあり、また散漫に広がる平坦面群がある一方で、堀などの明確な防御遺構は存在せず、経塚や竈など城館とは性格の異なる遺構の色合いが強く、宗教施設を見るべきである。その廃絶後に城館として再利用した可能性は否定できないが、二丈岳城本来の遺構とは言えないもので、ここでは除外しておく。いずれにしても、唐津近辺を本拠とする草野氏にとっては怡土郡西部において重要な位置を占めた城館であったとみられる。

【史料】あり

【参考文献】1,4～9,10,11,48,49,51,183,197,214

筑前 343 吉井岳城

郡名 怡土郡

種別 山城

別称 なし

所在 糸島市二丈吉井

図幅名 浜崎(東)

【沿革】吉井の南に聳える十坊山（標高 535m）から北へ延びる山稜の中腹、「城山」と呼ばれる頂部に位置する。『本編』では在地領主で原田氏配下にあった吉井左京亮隆光の居城と伝える。元亀2年（1571）に草野永久（原田了栄の三男である草野鎮永の養父）との争いがあったことが記される。

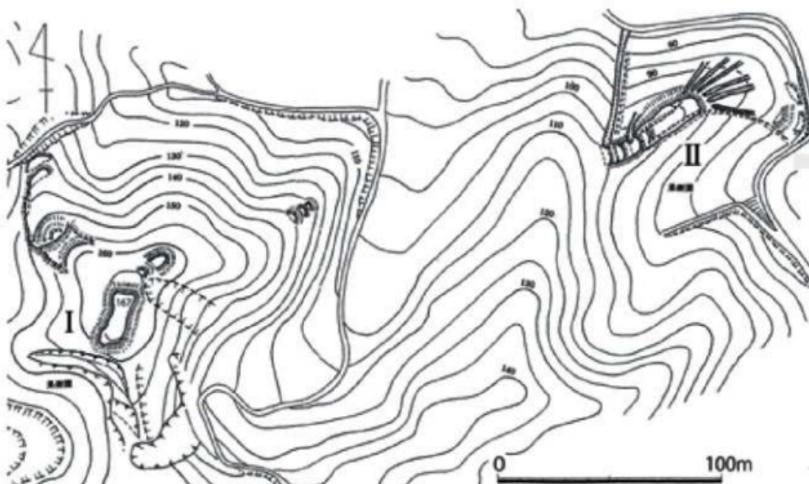
【概要】城域は大きく分けて吉井集落西側の標高167mの城山の頂部（I）と、そこから南東方向へ200mほど下った中腹部（II）の2か所からなる。

Iは城山の頂部に南北約20m、東西約10mの曲輪一つを置き、その北西側の尾根に幅約7mの大きな堀切により防御する。一方、麓に近いIIの曲輪は東西約40m、南北約10mの範囲に複数段の曲輪を設け、その東側斜面に6本の敵状空堀群を置いて、麓側からの防御としている。また、文献49には十坊山から下る稜線上にも何箇所か出城跡が存在するとあるが、詳細は不明である。

【史料】なし 【参考文献】1,4,8 ~ 11,49,51,197,205



第270図 吉井岳城・城山山頂の堀切



第271図 吉井岳城縄張り図（文献205・山崎龍雄作成）

⑨志摩郡

筑前 345	あおきじょう <b>青木城</b>	郡名 志摩郡	別称 なし	図幅名 福岡西南部(西)
		種別 丘城	所在 福岡市西区今宿町	

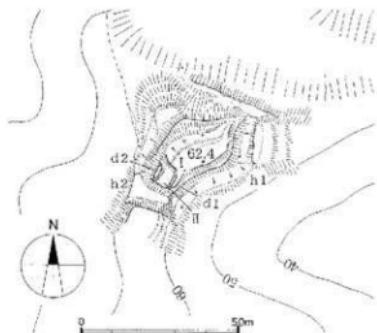
【沿革】今宿町と今宿上ノ原との境にほど近い、丘陵上に位置する。福岡市の遺跡分布地図（文献222）に「青木城」として名称と位置が示されるのが初出であるが、『訂正志摩郡図』・『訂正怡土郡図』（国立公文書館蔵）をみると、志摩郡谷村と怡土郡上原村との境に「古城」という記載が見られ、この城を示しているものと思われる。また、『本編』「高祖古城」に「上の原青木村に三重のからほり有。其かまえ夥し。是此城の搦手の要害なるべし」とあり、『拾遺』「安上」の記載からはもっと大がかりな構築物の可能性もあるが、ここが高祖城の出城との位置づけを示している可能性がある。

【概要】標高62mの丘陵上に小曲輪を2面ほど配置し、東側と南側の尾根上に堀切を設け、堀底から、曲輪の周間に帯曲輪が接続する。曲輪の一部に土塁遺構なども見られるが、概して小規模で単純な構造である。在地の小領主層などが築城主体として想定できる小規模城館だが、上記『本編』のいうように高祖城の出城との性格も含めて考えるべきであろう。

【史料】なし 【参考文献】1,11,52,186,190,222



第272図 訂正志摩郡図(部分・国立公文書館蔵)



第273図 青木城縄張り図(文献190・中西義昌作成)

筑前 346	うすきしじょう <b>臼杵氏端城</b>	郡名 志摩郡	別称 鎌倉城	図幅名 福岡西南部(西)
		種別 丘城	所在 福岡市西区今津	

【沿革】糸島半島の東側の付け根部分にあたる瑞梅寺川河口の今津湾に面した低丘陵上に位置する。『本編』には「大友の臣臼杵重察が邑城なりといふ。其所に重察が墓あり」とある。北東150m地点には鷺城のある丘陵が所在する。

【概要】今津集落の西、今津湾に面した標高15mの低丘陵上に位置する。東西約70m、南北約20～30mの範囲に二段にわたって曲輪が形成される。周

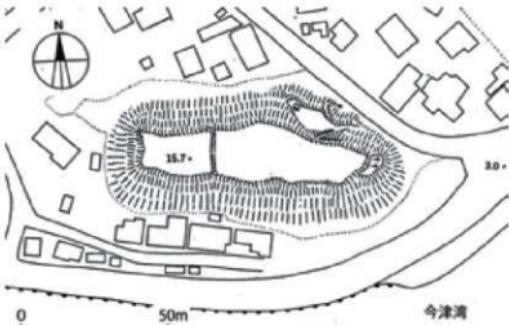


第274図 白杵氏端城遠景(右手前・左奥は柏子岳)

囲は急傾斜の切岸となっているが、東側を中心に腰曲輪なども認められる。堀などの防御遺構は確認できない。地誌類にある城主の墓は、曲輪の西端にある。近世以来耕作地であったとみられ、若干は改変がなされているとみられるが、基本的な構造は踏襲しているものと思われる。中世の今津集落や港が見下ろすことができ、それらを監視する役目を果たすことができる位置にあると言えよう。

なお、平成 26 年度に曲輪の東端部が福岡市役所により発掘調査が行われ、柱穴などの遺構や当時の遺物などが出土した。詳細は近年中に報告される予定である。

【史料】なし 【参考文献】1～4,6～10,11,48,52,184,190



第 275 図 白杵氏端城縄張り図（文献 184・中西義昌作成）

筑前 348	こうじだけじょう	郡名 志摩郡 別称 好士岳城・香地岳城・草場城 図幅名 宮浦(東)
柑子岳城		種別 山城 所在 福岡市西区今津

【沿革】今津湾の北西にひときわ南北に高く聳える柑子岳山頂に位置する。柑子岳山頂からは怡土・志摩の各郡の他、博多湾から立花山、宗像連山まで見通すことができる適所である。『本編』では、永禄年間に大友宗麟が志摩郡支配のために親山城とともに築城し、白杵新助鎮賤を城代とし、元亀 2 年（1571）に新助に代わり白杵進士兵衛鎮氏が城代となったが、原田了栄を滅ぼそうとして逆に攻め滅ぼされたとする。『拾遺』はさらに詳しく、天文 3～4 年（1534～35）に大内氏家臣仁保宮内少輔が築城、梅月頼致、その子致定が城番を勤めたが、天文 7 年に大友方の城となり、白杵安芸守、安房守鎮統が在城、上記の白杵鎮氏の後は、小金丸などの近郷の領主が在番、天正 5 年（1577）には木付少輔鎮実が城督となるも、同 7 年に原田氏により攻められ、大友方は柑子岳城もろとも志摩郡を放棄したとある。

【概要】柑子岳山頂（標高 254m）を中心に南北 300m を超える規模の城域を有する。曲輪群は大きく山頂部分周辺（I-I～4）と南側の峰（III-I・2）の二つに分かれ、それぞれ地誌類の本丸（城の上）、二の丸（下城の上）にあたる。それらの間の II



第 276 図 柑子岳城から見た眺望  
(長浜海岸・能古島・博多湾)



第 277 図 柑子岳城堀切

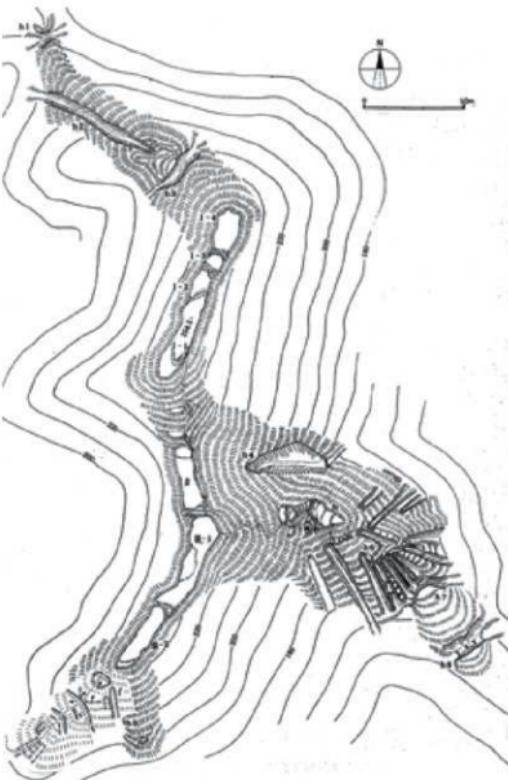
の曲輪を調馬場（馬場跡）と呼ばれる。主郭を中心とした曲輪群Ⅰは全長約100m近くあり、緩やかな段によっていくつかの面に分かれる。北側斜面は堀切2本に豊堀を掘り、北の峰からの攻撃に備える。この北側にも2つほど曲輪の造れそうな頂部があるが、自然地形のままであり、城域には含まれていない。

一方、Ⅱ・Ⅲの曲輪群も主郭と同じくらいの規模を有する3つの曲輪が並列する。曲輪Ⅲ-1の東側には尾根が派生しており、50mほど下った先にⅣの小曲輪を置き、その直下に畠状空堀群と堀切2本を設ける。城内において最も防御を固めている場所である。さらに、Ⅲ-2の南西側の尾根上にも堀切2本と若干の豊堀を設けて南側からの攻撃に備えている。

以上のように、小規模城館が多数存在する志摩郡にあって、柑子岳城は、規模と畠状空堀群などの高度な防御遺構の存在は特異であり、志摩郡一円をおさえる役割を十分に発揮したものと思われる。

なお、地誌類には柑子岳城の南の独立峰に「陣尾山」と呼ばれる原田氏の柑子岳攻城の際の陣跡があるとされる。柑子岳城の南側にも尾根が延びており、所々、頂部を形成しているが、それらに明確な城館遺構は認められないが、さらに南に存在する可能性もあり、さらなる踏査が必要である。

【史料】あり 【参考文献】1~9,10,11,48,50,52,181,183,190



第278図 柑子岳城縄張り図

(文献181・中西義昌作成図を一部改変して事務局作成)

筑前 349 水崎城  
みずさきじょう

郡名 志摩郡  
別称 なし  
種別 山城  
所在 福岡市西区元岡

図幅名 宮浦(東)

【沿革】柑子岳から南に派生する丘陵地帯の末端部、元岡の集落の北東側に聳える水崎山山頂に位置する。「拾遺」では「山上に平地有。縁有て周れり」とあり、地元には城の伝承が伝わっていないいためか、古文書を引いている。永享長禄年間の大友親綱からの書状を初出とし、応仁、永正年間の少弐・大友と大内との合戦などの古文書などを示している。実際に一次史料にも水崎城は頻出しており、

城館があったことは疑いないようである。

【概要】かつては今津湾に面していた水崎山山頂（標高約80m）に位置するというが、実際山頂には人工的に平坦に造成がなさ



第279図 水崎山（水崎城）遠景



第280図 水崎山山頂周辺の平坦面

（城郭遺構かは不明）

れた平坦面群を確認することができ、所々には土留めとも

考えられる石列なども見られ、山頂一帯が人工的な造成の手が入っていることは間違いない。しかし、平坦面の周囲が急角度の切岸にならずに自然地形になっていることや、周間に明らかに後世のものとみられる造成段がいくつか見られること、直近に堀切などの明確な城館遺構が確認できず、山頂部の平坦面が果たして城館遺構か否かは即断することはできない。詳細については発掘調査などのさらなる調査を待つほかない。

【史料】あり 【参考文献】3～5.8～11,48,52,186,190

筑前 350 大神城

郡名 志摩郡

別称 戸山城・大神出雲守宅

図幅名 宮浦（東）

種別 丘城

所在 福岡市西区桑原

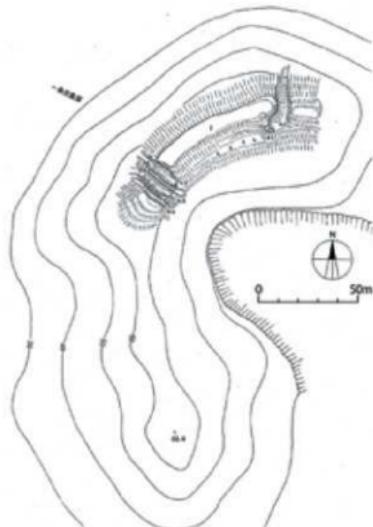
【沿革】水崎山の北側、桑原集落の南の丘陵上に位置する。文献184・185では仮称「戸山城」としていたが、地誌類の記載に基づき、『全集』掲載の呼称「大神城」として報告する。

『拾遺』桑原村の項には「民家の上に大神出雲と云者の墓とて有。其邊に出雲が居宅二十間に三十間の跡もありて堀切など猶残れり。里民は城跡といへり」とあり、ここで報告する城館遺構を指しているものとみられる。また文献190によれば城の麓に「オオガミノシロ」という地名も存在するという。

【概要】標高66m、南北に細長く伸びた丘陵の北半分を利用して城域とする。全長約60mの細長い主郭を置き、その尾根つながりの前後に北側は1本、南側は3本の堀切を設け、尾根上からの攻撃に備える。北側の堀切の片側にはd1のスロープ状土塁が見られ、虎口としての機能を有している。集落側からの出入りを想定しているといえよう。大友配下とみられる在地領主大神氏の居城と考えられよう。

【史料】なし 【参考文献】3,4,6,11,48,52,184～

186,190



第281図 大神城縄張り図（文献184・中西義昌作成）

筑前 352 岩松城

郡名 志摩郡  
種別 丘城

別称 浦城  
所在 糸島市志摩浦

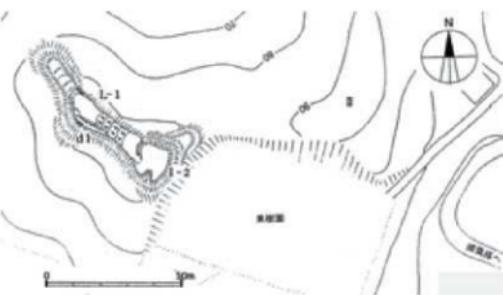
図幅名 宮浦(東)

【沿革】糸島半島のほぼ中央部、桜井集落から北東方向に延びる谷の最奥部、浦集落の北側の丘陵に位置する。『拾遺』には「岩松古城」として「桜井村浦の上」という所に在。故に浦城共云。浦刑部(『全誌』では浦刑部大輔次永)が居城なりとぞ」とある。

【概要】丘陵上は東西二つの頂部があるが、西側の丘陵上に全長約50mの曲輪が形成される。土塁なども認められるが、縁辺部の切岸

加工などはあまり明確ではない。また曲輪面上は緩やかに傾斜している。近世以降の墓石なども見られることから、後世の改変も若干は受けていると思われる。至って単純な構造と言えよう。

【史料】なし 【参考文献】3~6.8~11.48.52.184.190



第282図 岩松城輪張り図(文献184・中西義昌作成)

筑前 353 松隈城

郡名 志摩郡  
種別 山城

別称 松隈伊賀守宅  
所在 糸島市志摩松隈

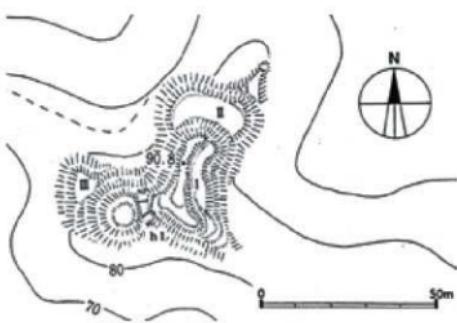
図幅名 宮浦(東)

【沿革】志摩城の南西、松隈集落の北にある低丘陵上に位置する。「松隈氏代々記」(「怡土志摩古文書」)のうち『筑前町村書上帳所收』には新田伊賀守正家が松隈に姓を改め、「松隈里に居城を構えた」とある。

また、『拾遺』「松隈村長音寺」にも村内に松隈氏の宅跡の存在が示されているほか、『全誌』・『糸島郡志』(文献48)・『種々』には「松隈伊賀守宅」として名が挙がっている。『全誌』には子孫が旧宅跡に在住しているとある。

【概要】松隈集落の北の標高90mの低丘陵上に堀切を挟んで二つの頂部がある。堀切は至って浅く、また二つの頂部は共に曲輪などの造成加工は施されていない。しかし、東側斜面には曲輪が二面ほど確認できる。南東側の麓への道筋には「ジョウノサカ」、「ナカノヤシキ」などの通称地名が残り、城館との関連が窺われる。

【史料】なし 【参考文献】3~6.11.48.52.190



第283図 松隈城輪張り図(文献190・中西義昌作成)

筑前 356 波多江館 郡名 志摩郡 別称 波多江城・丹波屋敷 図幅名 前原(東)  
種別 平地城館 所在 糸島市波多江

【沿革】雷山川と瑞梅寺川に挟まれた水田地帯で、波多江集落そばに位置する。『本編』「波多江」の項には「波多江村の内に、丹波屋敷と云所有。是波多江丹波が居たりし宅の址也。四方大堀をかまへ、高築地あり」とする。『拾遺』では波多江丹波守種敦の宅跡とし、二方に堀の跡があるとしている。

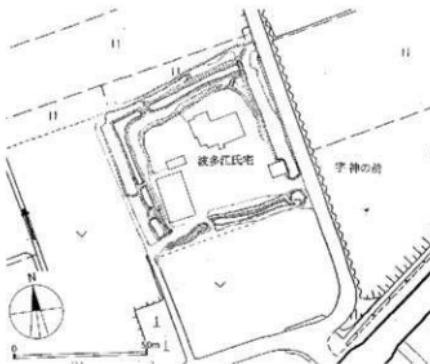
【概要】水田の中に一辺約50m四方の方形区画が良好に残っている。周囲には堀と土塁が巡っており、南側と東側が一部損なわれているほかは、双方とも良好に残存している。堀と土塁はそれぞれ幅約3~4mある。土塁の内側にも堀が巡っているが、防御の役割と言うよりは排水のためのものと考えられる。

なお、館の南側を走る国道202号バイパス建設の際に、館に近接する場所において中世の集落遺跡（波多江遺跡）が見つかっており、館との関連が窺われる（筑前R51参照）。

【史料】なし

【参考文献】

1,3,4,6,10,11,190



第284図 波多江館縄張り図（文献190・中西義昌作成）



第285図 波多江館遠景



第286図 波多江館堀・土塁

筑前 358 親山城 郡名 志摩郡 別称 小山城・小金丸城 図幅名 前原(西)  
種別 丘城 所在 糸島市志摩小金丸

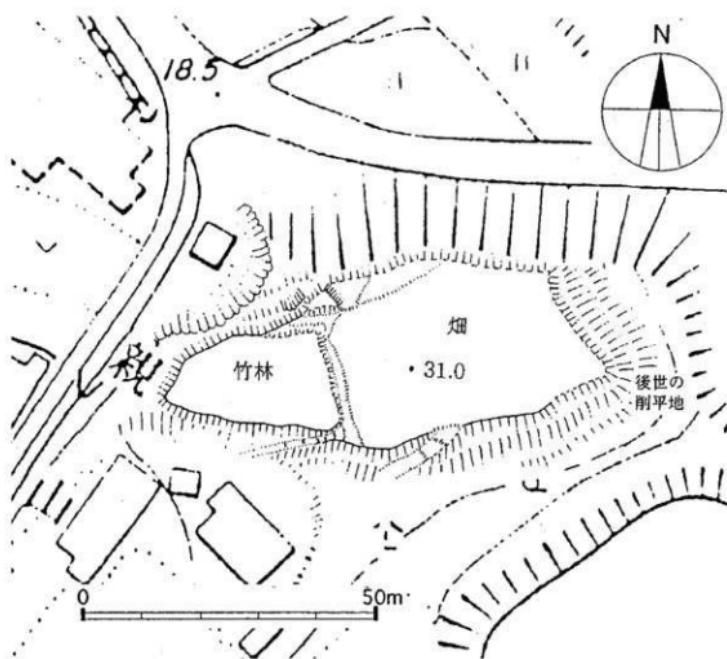
【沿革】可也山北麓、小金丸集落の親山集落の東の低丘陵上に位置する。『本編』「加也山古城」として、可也山山頂に古くに城があったとし、「又此山の北の麓にも城跡有。是は小金丸民部大輔政種守りしと云。又大友氏より志摩郡の目代として、日野三九郎と云ものをもしばらく此城に置れしと云」とある。

【概要】親山集落の東、親山川の東に面した標高31mの低丘陵上に位置する。丘陵上は畠と竹林になっており、後世の改変がある程度想定されるが、現状では東西約30m、南北約20mの曲輪とその東側に東西約20m、南北約15mの小曲輪の二面が確認される。堀や土塁などの明確な防御遺構

は認められない。『全誌』には「字を立（タテ）と云」とあり、関連地名とみられる。

【史料】なし

【参考文献】1～9,11,48,50,52,190



第287図 鍾山城郭張り図（文献190・中西義昌作成）

## 2 近世城館

筑前 K6 犬鳴別館

郡名 鞍手郡  
種別 館

別称 犬鳴城・御別館  
所在 宮若市犬鳴

図幅名 脇田(西)

【沿革】鞍手郡の最も西、糟屋郡との境に近い犬鳴谷の奥部の丘陵上に位置する。『新訂黒田家譜』に「福岡者海岸故、攘夷之時也或ハ長防御征伐ニ付而者、英夷加担致すべき間、海岸之城ハ不都合とて、右様犬鳴山え別館取立候」とあるように、幕末の元治元年（1864）、福岡藩が国内外に対する防備のため、有事に備えて藩主をかくまうため、家老加藤司書の推挙により犬鳴谷に別館の建設が始められた。途中、乙丑の獄と呼ばれる藩内における勤皇派への弾圧が行われ、加藤の切腹により建設は頓挫したが、慶応元年（1865）11月には完成した。明治初期まで福岡藩の施設として利用されたが、明治17年（1884）に建物が倒壊した。

【概要】現在、犬鳴ダムがある犬鳴谷の奥部、標高290mの丘陵の腹部を切り込むように平坦面が築かれる。階段状に5～6段の平坦面を造り出し、合計13面程に上る。最上段は約50m四方の方形を呈する最大の平坦面を造り出し、左右二か所の石段、石垣を備えた虎口を持つ。その下段には約20m×50mの長方形の平坦面が8面ほど続き、最下段は地形に即して不整円形となる。基本的には全ての平坦面に石垣が築かれている。昭和62年（1987）に犬鳴ダム建設に伴い、福岡県教育委員会により発掘調査が行われ、下段の石垣を中心に調査が行われた。藤巴文軒丸瓦なども出土し、藩の施設であることを示す。二段目以下は、ダム工事に伴い地中に埋没しているが、最上段は現在でも見ることができる。『犬鳴御別館絵図』（宮若市教育委員会蔵・第292図）は、建物配置も含めた犬鳴別館の様子を描いた絵図であるが、これを見ると、最上段の最大の平坦面に別館の藩主館が建てられていた。館の間取りに



第288図 犬鳴別館遠景（昭和62年調査時）



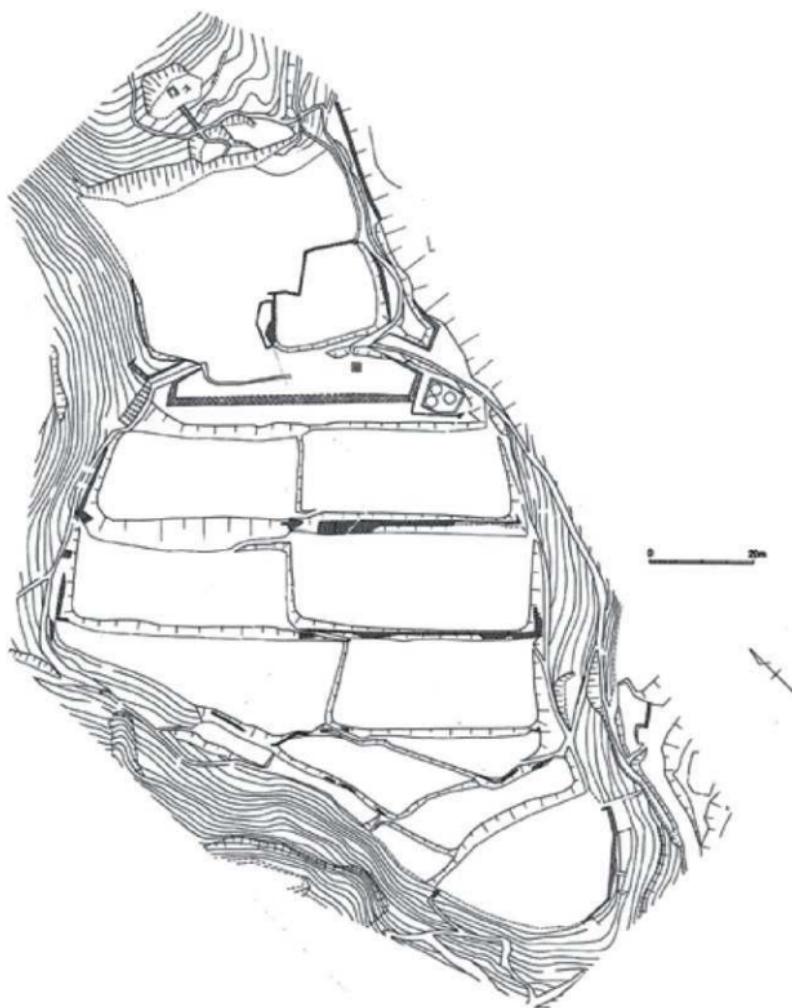
第289図 犬鳴別館石垣（下段）



第290図 犬鳴別館裏門の石垣

は御居間、御湯殿、御台所、大溜りなどが描かれている。

また、館の東側には園池が描かれているが、現地には池の石垣などが残されている。そして表門の傍らには番所の建物が描かれている。



第291図 犬鳴別館測量図（文献63）

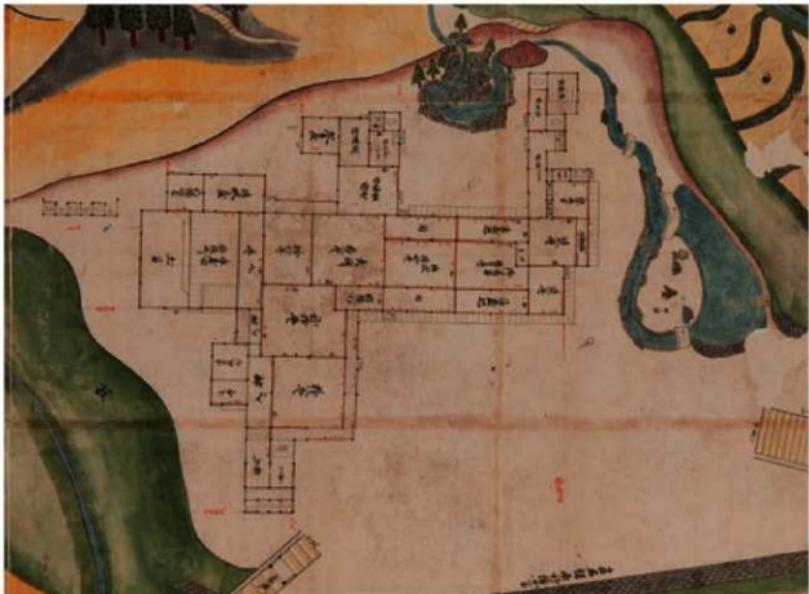
下段側は大きく三段に描かれ、物置蔵、上長屋、下長屋が置かれ、最下段には犬鳴谷庄屋の篠崎文内宅が置かれる。以上のようにこの絵図は犬鳴別館の構造を知る上で非常に重要な資料である。

幕末期には各藩は国内外の防衛に備え、別館や御殿という名目で、非常時の避難施設を構築する事例が多く（下関市勝山御殿など）、犬鳴別館もそのような幕末期の築城の一つと位置付けられよう。

【史料】あり 【参考文献】5.10.13.20.63



第292図 犬鳴御別館絵図（宮若市教育委員会蔵・宮若市指定文化財）



第293図 犬鳴御別館絵図（藩主館部分・宮若市教育委員会蔵）

筑前 K7	おとやしき <b>大音屋敷</b>	郡名 鞍手郡 種別 館	別称 明專寺城 所在 宮若市山口	図幅名 脇田(東)
-------	----------------------	----------------	---------------------	-----------

【沿革】明專寺城は、文献56などの分布地図記載を初出しとし、明專寺背後の丘陵上にある中世城館とされているが、実際には同所には城館遺構はない。一方で『教委』には戦国期としながらも大音氏の居城としていることから、明專寺南側にある大音屋敷のことを指しているものと思われる。大音屋敷は福岡藩の幕末の家老・大音青山の屋敷であった。明治7年（1874）に屋敷の演武場を山口小学校の校舎に転用、同15年には書院大広間を教室に充てた（文献20）。

【概要】明專寺の南側に東西約100m近くの石垣を備えた区画を屋敷地とする。石垣の中央部には内折形の虎口を備える。大正初期の写真には石垣の上に築地塀が築かれているが、現在は見られない。

【史料】なし 【参考文献】8～10,20



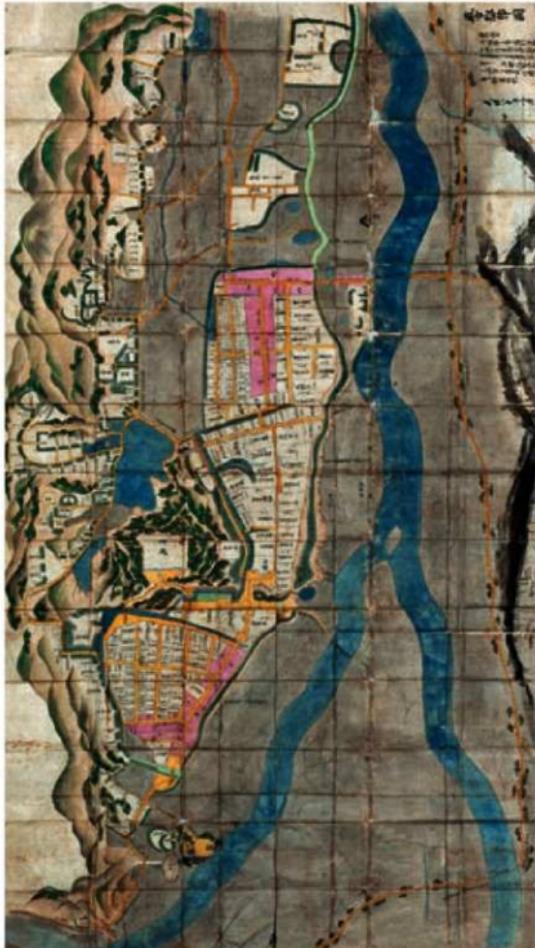
第294図 大音屋敷  
(上：石垣全景・下：折形虎口)

【沿革】遠賀川西岸、直方市の市街地を見下ろす御館山を中心に、江戸時代、福岡藩の支藩・東連寺・直方藩の城下は形成された。元和9年（1623）に黒田長政の遺言に従い、長政四男の高政は鞍手郡東部に四万石が分知され、東蓮寺（現在の直方）の地に居館が置かれた。東蓮寺藩の創始である。延宝3年（1675）、東蓮寺の府

名を直方に改名したが、同5年に三代藩主・黒田長寛が、福岡藩の世子を継いたため（後に福岡藩四代藩主綱之となる）、一時的に藩主不在となり福岡藩預かりとなった。11年後の元禄元年（1688）に黒田長清が四代藩主となると、五万石に加増、同5年に御館山に居館を新築した。長清の子、継高は、享保5年（1720）に福岡藩六代藩主を継いたため、継嗣がなくなり、直方藩は廃藩、福岡藩に収公された。

【概要】東蓮寺藩の居館は、直方城下町のほぼ中央、居館移転後に双林院が置かれた場所にあったという。江戸後期に描かれた『直方惣郭図』（個人蔵）には双林院の場所に「以前四万石ノ節之御館、只今祈禱所双林院」と書かれている。絵図には双林院の周りには、旧藩主館を囲んでいたとみられる水堀の名残が描かれている。双林院は現在も殿町の宅地の中にある。

一方、元禄5年に移転した居館は、双林院の西の丘陵、御館山の頂部にあった。現在は、体育館や公園となって、往時の状況はよくわからないが、絵図に



第295図 直方惣郭図（個人蔵）



第296図 直方惣郭図（部分・個人蔵）（御殿の右上の鉤形の堀の下が旧藩主館跡地）

は「御殿」と書かれた方形の区画が描かれ、丘陵の東側から南側にかけて水堀が巡っていたのがわかる。館の南側には、水堀に面して虎口空間を持つ表門と、単に門を構えた裏門があり、それぞれ別々の道で丘陵を登り、居館へも別の門口から入る構造となっていた。

居館内部は、表門からの道は、東側の中門、裏門からの道は西側の門へと通じ、館内部に入る。中門からは御玄関へそのまま入るのに対し、裏門からのルートでは、いわゆる裏方の御台所へと入るようになっており、表と裏が入口により分化されていることがわかる。館内部には、御用部屋、大書院御能舞台、家老衆詰所などがあり、最も奥に御風呂屋、御寝間など、藩主の私的な空間が設けられている。

なお、『直方旧考』には「東蓮寺御旧館の建さる已前は、此の所に杉連並が老臣、尾仲加賀と云し者居れりとぞ」とあり、戦国時代、大内氏に仕え、大内氏滅亡後は秋月氏の配下となつた杉連並の家臣、尾仲加賀が館を構えていたということである。そして『直方旧考』には「東蓮寺に居宅のまま数年住せしが、此の所に新館御築立に依りて山辺村に移され云々」があり、尾仲氏の屋敷地がそのまま

東蓮寺藩の居館の建設地となつたといふことである。尾仲氏の館の構造がどこまで反映されているのかは不明である。

【史料】あり 【参考文献】4～6,9,10,12,13,17,176



第297図 直方御殿御絵図（個人蔵）

筑前 K10 黒崎城

郡名 遠賀郡 別称 道伯山城 圖幅名 八幡(西)  
種別 山城 所在 北九州市八幡西区屋敷1丁目・船町

【沿革】洞海湾南岸に聳える道伯山山頂に位置する。黒田長政が関ヶ原合戦の後に筑前に入部した際、築かせた出城「筑前六端城」の一つである。御牧（遠賀）郡奉行にして重臣の井上之房が 17,000 石の高禄にて封ぜられるが、他の端城同様、元和の一国一城令にて廃城となる。廃城後は、城の南側が、長崎街道の黒崎宿として発展を見せる。

【概要】標高 62m の道伯山は現在、山頂部に大きな貯水槽が建設されており、建設の際に山頂周辺の遺構はほとんど壊されてしまっております。しかし、江戸時代の絵図を見ると、およその状況を知ることができます。山頂部に方形の主郭（本丸）を置き、その北側と西側に土塁と石垣を巡らせる。北側には、内枡形と思われる虎口を構え、下段へと続いている。本丸の周囲は帯曲輪が巡っているが、特に東側と北側は広くなっています。そして、その北側に南北に細長い曲輪（三の丸）を築いている。本丸の一部を除いては、破城の影響か、石垣などの表記は認められない。

前述のように、貯水槽建設により、現状ではほとん



第 298 図 遠賀郡黒崎古城図（部分・国立公文書館蔵）

ど遺構が残されていないと考えられていた黒崎城ではあるが、近年北九州市が確認調査を行い、その実態が徐々に明らかとなってきた。

本丸部分についてはほとんど残存していないが、その周囲の二の丸や三の丸の縁辺部では石垣が残存している。ほとんどは玄武岩質の石材を用いて積んでいる。道伯山内には矢穴痕跡の残る石材(ただし、石垣中の玄武岩には矢穴は見られない)があり、域内で石材を調達していたものとみられる。また、本丸跡に方形の花崗岩石材が数点確認でき、石垣の隅角部分専用の石材として利用された可能性も考えられる。他に瓦などが出土しており、瓦葺き建物が想定される(詳細は刊行予定の発掘調査報告書を参照)。

また、絵図には山の北側の岬には「御舟入」と横矢がかかった石垣で護岸された箇所(矢倉台)があるが、現在は埋め立てられてしまい、よくわからなくなっている。しかし、大正時代の地形図を見ると、江戸時代と類似する形態で石垣の表記があり、大正時代頃までは残されていた可能性が高い。しかし、この遺構が六端城の当時まで遡るかどうかは今後の検討課題である。

【史料】あり

【参考文献】

1 ~ 4,7 ~ 11,21,26,180,193



第299図 黒崎城石垣



第300図 黒崎城南斜面にある矢穴痕跡の残る玄武岩

第301図 黒崎城本丸跡の花崗岩石材



第302図 黒崎城北側の護岸の石垣表記(陸地測量部作成 1/25,000 地形図「八幡市」(大正 11 年)を一部改変して事務局作成)(福岡県立図書館提供)

筑前 K11 わかもつじょう  
若松城

郡名 遠賀郡  
種別 平城

別称 中島城  
所在 北九州市戸畠区中島

図幅名 八幡(東)

【沿革】戸畠と若松との間の洞海湾上に浮かぶ中島にあった。福岡藩の六端城の一つで、船手頭の三宅若狭守家義が2,750石で支城主として置かれたが、元和の一国一城令により廃城となった。『全誌』には永正年間に竹内治部が居城したとあり、黒田氏以前にも城があったことになっているが定かではない。

【概要】大正時代の洞海湾開削により、中島は消滅している。そのため、若松城はおろか中島の正確な位置すら、現状ではよくわからないが、大正時代の地図を見ると、洞海湾が最も狭くなる場所のすぐ北側にあることがわかる。現在の若戸大橋の真下あたりとなる。

第304図は元禄十二年作「筑前国絵図」(福岡県立図書館蔵)を昭和8年(1933)に模写したとされる絵図である(原図は戦災にて焼失)。この中島の部分が「古城」となっている。島の周囲には岩礁が描かれ、島の中には草地が描かれるばかりであり、残念ながら城の構造を知る手がかりは現在の所、存在していない。

【史料】あり

【参考文献】1~4,6~11,23,26,180,193



第303図 中島(若松城)の位(陸地測量部作成 1/25,000 地形図「八幡市」(大正11年))(福岡県立図書館提供)



第304図 元禄十二年若松附近古絵図(写)  
(部分・北九州市自然史・歴史博物館所蔵・提供)

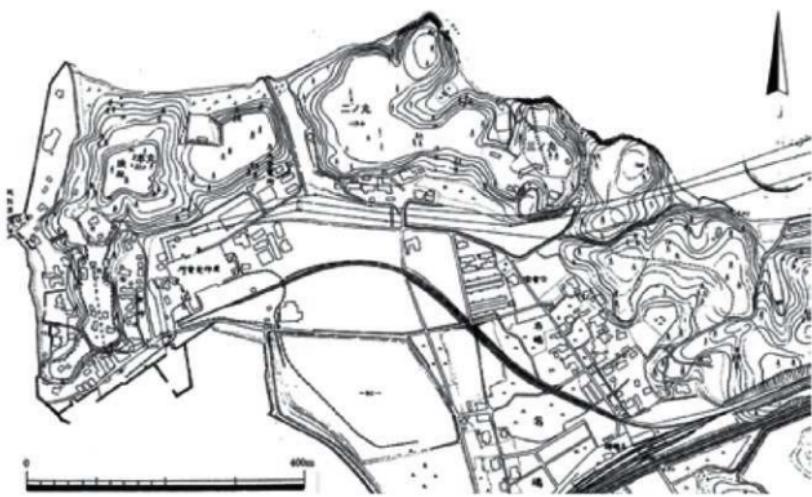
筑前 K13 なじまじょう  
名島城

郡名 糟屋郡  
種別 平山城

別称 なし  
所在 福岡市東区名島1~3丁目

図幅名 福岡(西)

【沿革】博多湾の東奥部に面した名島の丘陵上に位置する。『本編』には「初め立花但馬守鑑載が築きし立花の端城あり」とあり、戦国時代後期に既に名島城が築城されていたことが記されるが、真偽のほどは定かではない。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定により筑前を与えられた小早川隆景は立花山城に入城するが、翌16年には名島城の築城を始め、ほどなく入城した。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の戦功により、小早川隆景は備前に移封、代わって入城した黒田長政は、当初この名島城を居城としたが、すぐさま福岡城築城に取り掛かり、7年内に完成を見た。『本編』によると、福岡築城に際し、名島城の石材や建築部材の多くは福岡城に転用されたとある。福岡城



第305図 名島城跡地形図（文献79・昭和初期）



第306図 表柏屋郡名島古城之図（小早川期・国立公文書館蔵）

完成により、名島城は廃城となった。

【概要】かつて半島状に博多湾に突き出していた名島の丘陵の最先端（標高 21m）の最高所の本丸（黒田期を描いた絵図では天守）から東側に長天守（黒田期を描いた絵図では本丸）、二の丸、三の丸と曲輪が展開していた。曲輪群の南側に水堀が巡り、長天守と二の丸の間にも水堀が走っていた。三の丸の東側は空堀となっていた。

昭和 30 年代頃までは往時の様相が濃く残っていたが、道路建設や宅地化により、公園となつた本丸以外の曲輪は、宅地や道路なつてしまい、現状の残存状況は不明である。本丸部分についてもかなりの部分が残されていないと思われていたが、近年の確認調査により、櫓台、石垣、枡形虎口が良好に残存していることが確認されている。

また、発掘調査では肥前名護屋城出土品と同範の巴文軒丸瓦や唐草文軒平瓦が多く出土したが、過去の採集品には桐文の塊や鰐瓦などもみられ、大型の天守か櫓を備えていたと類推される。

なお、関連資料として名島城の館を描いたとす  
る絵図（第 310 図）がある。形状などから見て最も西側の曲輪（小早川期の本丸）が妥当とみられるが、証拠に乏しく断定できない。名島城で使用された建築部材の多くは福岡城に運ばれたとするが、福岡市博多区の崇福寺の唐門（第 309 図）など、近隣の寺院等に移築されたとする伝承も数多く残る。

【史料】あり 【参考文献】1 ~ 11, 73, 74, 79, 82



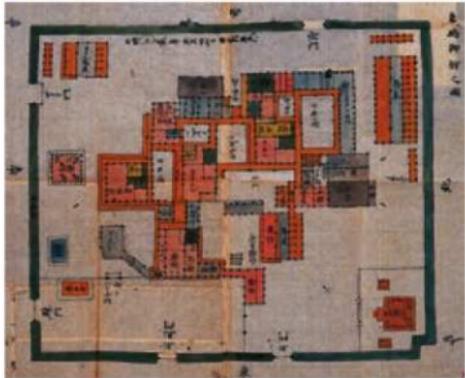
第 307 図 名島城本丸枡形虎口の石垣  
(福岡市埋蔵文化財センター提供)



第 308 図 発掘調査で確認された名島城本丸石垣  
(文献 82)



第 309 図 崇福寺唐門（重要文化財）



第 310 図 名島御館之図（九州大学附属図書館蔵）

筑前 K14 福岡城

ふくおかじょう  
郡名 那珂郡 / 早良郡 別称 舞鶴城 図幅名 福岡(西) / 福岡西部(東) / 福岡南部(西) / 福岡西南部(東)  
種別 平山城 所在 福岡市中央区城内・大濠公園

【沿革】近世以降、博多に加え、福岡の中心となった福岡藩主の居城である。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦に勝利した東軍方にいた黒田長政は、豊前中津から筑前一国52万石を与えられ、翌年筑前に入部した。当初、前領主の小早川秀秋の居城であった名島城に入るが、すぐさま新たな居城を移す場所の選定に入った。最終的に那珂郡警固村の福崎の地に決定して、街の名を福岡と改名、六端城（『本編』では7か所）と共に7年内に完成を見た。以後、明治維新に至るまで福岡藩主の居城として機能した。

【概要】<縄張り>城が築かれたのは福岡平野の中央、赤坂の丘陵地の北端の海浜部であり、古代には大宰府の役所の一つ鴻臚館が築かれた場所でもあった。西側には元々入江だった草香江を巨大な湿地帯の池「大堀」として防備、南側は丘陵を断ち切って水堀を通し、北側と東側は所々に屈曲した横矢の入った巨大な水堀を巡らして守りを固めた。これらの濠や天然の池で囲まれた「内城」には、本丸、二ノ丸、三ノ丸が順次配置されていた。さらにその北側（海側）から東側にかけては「外城」の町割が形成され、三ノ丸の東側からは中洲へ向かって東西方向に中堀、肥前堀が掘られていた。さらに東に中洲を挟んで古代以来の商業都市博多の南側にいわゆる「房州堀」の空堀により城下町として取り込んで、城と併せて一体的な「福博」城下となっていた。



第311図 福岡城堀石垣（腰巻石垣）

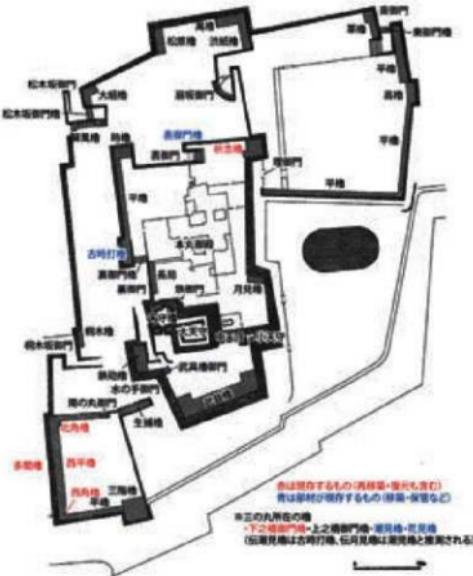


第312図 福博懸絵図（部分・福岡市博物館蔵、一部改変して事務局作成）

本丸から三ノ丸を囲んだ水堀は幅50~70mと広大で、高さ7m以上の土塁で周囲を囲み、土塁下部には土留めのための腰巻石垣（堀石垣）で囲まれていた。城内に入るには北側の上之橋、下之橋と、南側の追廻橋の3箇所しかなく、特に正面となる上之橋と下之橋は、内折形の二重櫓門が備えられていた。三ノ丸には家祖如水が隠居したという御鷹屋敷の丘陵のほか、家老クラスの重臣の屋敷群が並ぶ。二ノ丸から内部は御殿、櫓のみとなる。二ノ丸に入る東御門や松木坂御門は内折形の虎口で、メインルートの東御門には石垣前面に巨石を象徴的に配する鏡石が置かれている。二ノ丸から内側の虎口は全て折れを伴う折形虎口となり、ますます防備を固めている。正面北側の扇坂御門、本丸に上がる表御門などは内折形であるのに対し、本丸天守台裏側にはL字形に飛び出した石垣を持つ外折形虎口を重層的に配置し、非常に出撃性の高い空間に仕上げている。

なお、現在、中堀、肥前堀、本丸南側の堀は埋め立てられている。

＜門と櫓建物＞福岡城には数多くの門と櫓が存在したが、その多くは本丸と二の丸に集中している。現存するものは、二の丸南の丸の多間櫓と祈念櫓のみで、祈念櫓は再移築のため、元の姿からはかなり異なっている。また、三の丸下之橋御門は重層



第313図 福岡城本丸・二ノ丸所在の門・櫓位置図  
(文献193掲載図を一部改変して事務局作成)



第314図 福岡城二ノ丸表御門



第315図 福岡城二ノ丸裏御門



第316図 福岡城三ノ丸土塁



第317図 福岡城大天守台

構造が一層構造に建て替えられて残されていたが、焼失したため、現在は元の姿に復元している。また、その下之橋御門の傍らにある伝潮見櫓は再移築されたもので、調査の結果、元々潮見櫓の部材ではなく、古時打櫓の部材である可能性が高いとされている。城内なく、他所に再移築や保管されているものとしては、本丸表御門が福岡市博多区の崇福寺の山

門として再移築されているほか、伝本丸月見櫓と伝三ノ丸花見櫓も崇福寺の仏殿と拝殿として利用されていたが、現在は解体されている。調査の結果、伝月見櫓については、三ノ丸潮見櫓の部材である可能性が高いとされている。

＜発掘調査＞福岡城の城内では、現状変更や史跡整備等に伴う発掘調査が行われており、その回数は50次を超える。その内、門については上之橋御門、下之橋御門(大手門)の調査がなされている。また櫓は、本丸祈念櫓、月見櫓、時櫓、武具櫓、三の丸潮見櫓、花見櫓の確認調査が行われている。その他、三の丸については、御鷹屋敷を初め、鴻臚館の調査に伴い重臣屋敷の調査が多く行われ、濠については地下鉄建設ほか開発行為に伴い、内堀、中堀、肥前堀の調査が行われている。

詳細は各発掘調査報告書を参照されたい。

【史料】あり

【参考文献】

1.4 ~ 11,44,85  
~ 108,193



第318図 福岡城多聞櫓



第319図 福岡城祈念櫓



第320図 福岡城旧本丸表御門櫓



第321図 福岡城下之橋御門と伝潮見櫓



第323図 福岡城祈念櫓調査状況  
(福岡市埋蔵文化財センター提供)



第322図 福岡城下之橋御門調査状況  
(福岡市埋蔵文化財センター提供)



第324図 福岡城上之橋御門調査状況  
(福岡市埋蔵文化財センター提供)

**【沿革】**怡土郡西部に聳える二丈岳の北東麓、現在の糸島市葬祭場の北側、標高約20mの通称「城山」に位置する(一貴山小学校の敷地に位置する説もある)。江戸後期に唐津藩郷木浦河内庄屋の秀島鼓溪が著した『松浦記集成』(原本は唐津市寄託)には、「石崎城 怡土郡石崎村寺沢公出張城」とある。

『全誌』には「高祖崎城址」として「本村の北

五町余、原田氏の端城なり。寺澤志摩守広高、此邊を領せし時、支庁とし国枝小兵衛と云者を代官として置しか。天草賊乱の後、廢して深江駅に移せしと云」とあり、石崎の地に戦国時代は原田氏の出城、江戸時代初期の寺澤領の時期に唐津藩の支城が置かれていたことがわかる。

**【概要】**現在、城があったとされる丘陵は残っており、丘陵上は人為的に造成された広い平坦地形が残されているが、祠などに用いられた瓦の散布や石垣が残っていたりするものの、地表面では明確な城館遺構を確認することはできない。

なお、『肥前慶長国絵図』(第325図)には「いしざき古城」が描かれており、唐津領内では唐津城の他に、名護屋城、岸岳城、獅子ヶ城が記されている。この絵図の記載内容は佐賀領内に蓮池城や龍造寺城があることから慶長12年(1607)以前段階の情報を描いているとみられ、既にこの段階で石崎城は廃城となっていることがわかる。島原の乱後に廃したという『全誌』の記載内容とは齟齬を来しているが、他の唐津藩内に描かれた城がいずれも重要な城であることを考えると、この石崎城も唐津藩にとって重要な位置を占めていたと推測される。

**【史料】**なし

**【参考文献】**4~6,10,11,48,49,51



第325図 肥前慶長国絵図に描かれた石崎古城  
(部分・佐賀県立名護屋城博物館蔵)



第326図 石崎城遠景

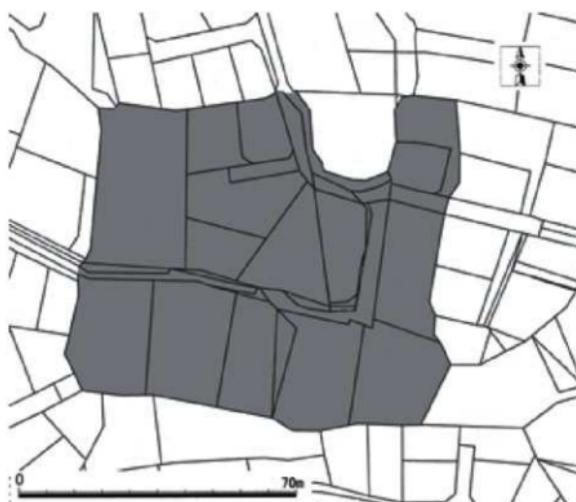
### 3 城館等伝承地

筑前 D49 香零井原屋敷

郡名	宗像郡	別称	香零城	図幅名	津屋崎(東)
種別	居館	所在	福津市福間南1丁目		

【沿革】西郷川に面した南側の丘陵上に位置する。文献34には、「香零井原屋敷」として、小金原合戦に敗れた井原一族の館のあった場所が「香零」といい、江戸時代中期までは民家が点々とあり、観音堂が祀られていたという。『種々』には「香零城（井原氏）」と名を挙げている。

【概要】現在、字「香零」の地は、耕作地の他、民家が建っており、地表観察の限りでは城館遺構は見当たらない。しかし、地割を見ると、南北約80m、東西約90mの方形区画を確認



第327図 香零井原屋敷地割図（事務局作成）

することができ、これが井原屋敷の区画を示している可能性があるが、発掘調査等を行っていないため、断定できない。

【史料】なし

【参考文献】5.8～11.34

#### 4 城館関連遺跡

筑前 R8 こうふくじじょうかんあと  
光福寺城館跡

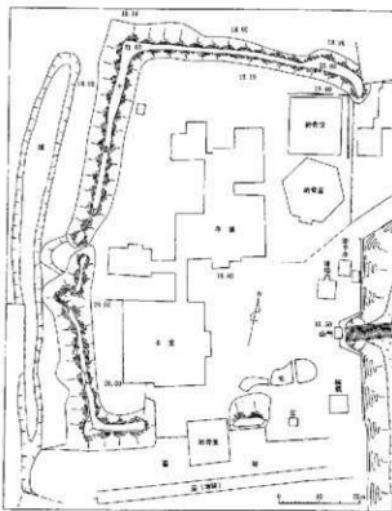
郡名 鞍手郡  
種別 平地城館

図幅名 直方(東)  
所在 直方市下境

【位置】遠賀川支流の彦山川東岸、広い台地の南端に位置する。

【概要】享禄元年（1528）に開基したと伝える光福寺の境内は、周囲に土塁と堀が巡っている。東側には土塁が見られず、南側も一部しか残存していないが、西側には南北約100m、北側には東西約70mの土塁が巡り、西側の土塁の外には幅約3m、深さ約1mの空堀が巡っている。土塁の規模は基底部幅約10m、高さ約2mである。部分的に発掘調査が行われており、12～13世紀の柱穴群なども見つかっており、敷地内に中世前期にまで遡る遺構が存在することが判明したが、土塁や堀の形成時期については不明である。

【参考文献】66.175



第328図 光福寺城館跡測量図（文献 175）

筑前 R9 かみとんのみやのまえいせき  
上頓野宮ノ前遺跡

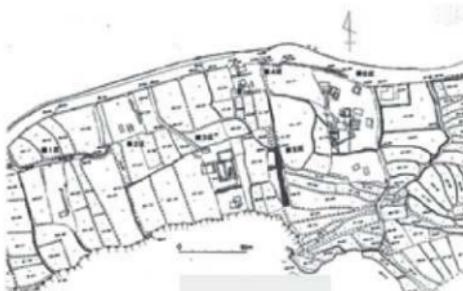
郡名 鞍手郡  
種別 平地城館

図幅名 德力(西)  
所在 直方市上頓野

【位置】直方市上頓野、近津川上流北岸の平坦地に所在する。

【概要】7地区約8,000m<sup>2</sup>の発掘調査が行われ、14～16世紀を中心とする掘立柱建物約40棟、溝約10条、土坑約80基が検出され、15～16世紀が最盛期であることが判明した。

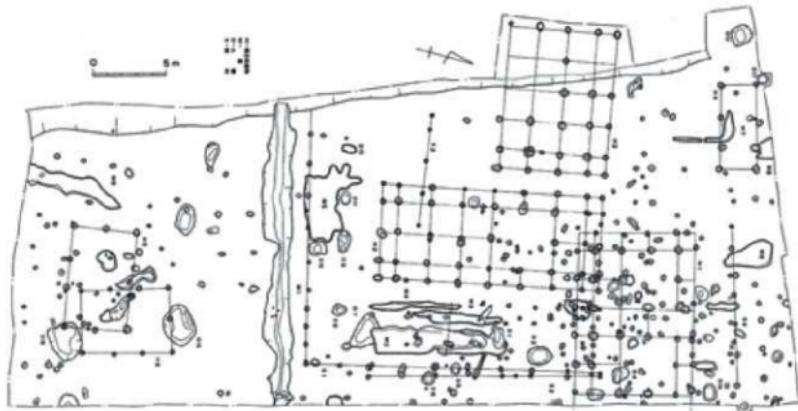
特に第3区では、2間×6間で四面に庇が巡る大型建物群が溝と柵で囲まれた状況で検出され（第330図）、発掘された遺跡の中でも核となる建物群であると考えられ、在地領主の邸宅と



第329図 上頓野宮ノ前遺跡調査区位置図（文献 64）

みられる。調査区の制約もあり、堀や溝が四方を巡る状況は確認されなかったが、区画溝がいくつか見られ、建物群を囲んでいる可能性も考えられる。雲取山城の麻生氏との関連が想定されている。

【参考文献】64

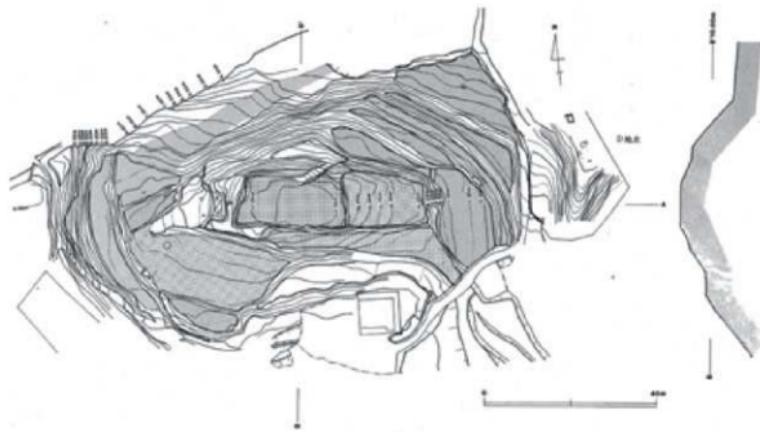


第330図 上領野宮ノ前遺跡第3区遺構平面図（文献64）

筑前 R10	ほんじょうみなみいせき <b>本城南遺跡</b>	郡名 遠賀郡	図幅名 折尾（東）
	種別 丘城か	所在 北九州市八幡西区本城東6丁目	

【位置】洞海湾の最奥部、低丘陵が複雑に入り組む丘陵の頂部に位置する。

【概要】発掘調査が行われた範囲内、城館関連遺構とみられるものが検出されたのはC地区の小



第331図 本城南遺跡C地区遺構平面図（文献69）

丘陵である。標高 17m の小丘陵全体に地山整形を行い平坦面と切岸が造り出されている状況が検出された。頂部に 10m × 20m の方形の曲輪を置き、その周間に階段状に平坦面を展開している。堀切などの明確な防護遺構は確認できないが、丘陵の南東側に断面 V 字を呈する切通しがあり、元々堀切であった可能性も考えられる。遺構面は削平されたためか、建物などの明確な遺構は確認されなかったが、周囲の谷からは 12 世紀後半～13 世紀前半の瓦・陶磁器類が多く出土しており、概ねその時期の遺構とみられるが、周囲の丘陵上からは同時期の墓群なども見つかっており、遺跡の詳細な性格については断定できない。

【参考文献】69



第 332 図 本城南遺跡 C 地区調査状況  
(北九州市教育委員会提供)

筑前 R11	かみさいごう 上西郷ニホンスギ遺跡	いせき 種別	郡名 宗像郡 種別 町家遺構	図幅名 津屋崎(東) 所在 福津市上西郷
--------	----------------------	-----------	-------------------	-------------------------

【位置】西郷川中流域、亀山城の川を挟んだ標高 8 m の平地上に位置する。

【概要】発掘調査区 2,000m<sup>2</sup>の範囲から、幅約 8 m、長さ約 20 m 弱の短冊形地割が少なくとも 9 区画確認された。それぞれの区画からは主に東西方向を長軸とする 2 間 × 3 間の掘立柱建物が 1 ～ 2 棟ずつ、併せて 19 棟が検出された。他には井戸 1 基と柱穴・土坑多数が見つかっている。調査区の北側は西郷川の氾濫原となり、状況は詳細にはわからないが、南側は東西方向の現道に接続し、旧来から道路があった可能性も考えられる。

出土遺物は瓦質土器、土師器、陶磁器、銅錢、笄、土錘など、15 世紀後半～16 世紀に位置づけられる。

短冊形地割などの状況からいわゆる町家遺構と

見られるが、川を挟んだ向かい側に亀山城、南東側には武家居館と見られる上西郷タナカ遺跡が隣接する。さらにその南側には鷺城の想定される丘陵も位置し、上西郷の一帯が、丘城、居館、町家が一体となった城下的な様相を呈していた可能性が考えられる。

【参考文献】72



第 333 図 上西郷ニホンスギ遺跡（奥左側に亀山城）  
(福津市教育委員会提供)



第 334 図 上西郷ニホンスギ遺跡全景（上が北・福津市教育委員会提供）

筑前 R12	かみさいごう 上西郷タナカ遺跡	いせき 種別 平地城館	郡名 宗像郡	図幅名 津屋崎(東)
			所在 福津市上西郷	

【位置】西郷川に面して町家遺構が見つかった上西郷ニホンスギ遺跡の南東約 200m 地点、標高 8 m の平地に位置する。

【概要】調査区からは、溝により方形に区画された箇所が 2 ~ 3 箇所検出された。その内の一区画は、東西 35m 以上、南北 25m 以上の規模を有し、区画内部からは掘立柱建物 7 棟の他、多数の柱穴、土坑が検出された。銅錢、動物骨、漆器、下駄、羽子板など、日常生活に関わる遺物から、鉄滓、轍羽口など鍛冶などに関わる生産遺物なども出土している。時期は 14 世紀後半 ~ 17 世紀後半までと長期にわたるものである。中世においてはニホンスギ遺跡や亀山城、鷺城との密接なかかわりが想定されるほか、近世以降、在地有力層の拠点が解体された様相を示しているものと思われる。

【参考文献】203



第 335 図 上西郷タナカ遺跡全景（上が北・福津市教育委員会提供）

筑前 R14	かしい 香椎 A 遺跡	いせき 種別 平地城館	郡名 糟屋郡	図幅名 福岡(東)
			所在 福岡市東区香椎 2 丁目	

【位置】香椎宮の西約 500m、御飯ノ山から西へ派生する丘陵の麓の標高 4 m の平地に位置する。

【概要】香椎宮の北側一帯の範囲を包蔵地とする香椎 A 遺跡は、過去に 6 回発掘調査が行われているが、その内、1 次調査と 4 次調査 1 区で溝に囲まれた方形区画の屋敷地群が検出されている。4

次調査Ⅰ区は南北90m、東西55mの範囲で調査が行われ、調査区からは溝で囲まれた方形区画2面と、調査区全面から多数の掘立柱建物群、柵、土坑、井戸が検出された。溝で囲まれた方形区画は、南北に2面並列し、南北約30m、東西約30m以上の規模を有する。

出土遺物の時期は13～16世紀で、出土遺構もそれらの時期の間に3期にわたる変遷案が提示されている。溝による方形区画が形成されるのは最終の3期とされており、大半の掘立柱建物は溝がない時期の1～2期に当たるとされるが、溝の方向と大半の建物の方向が並行していることから、溝の最終的な埋没の時期が16世紀代であり、成立時期は遡る可能性も考えられる。

また、第4次調査Ⅰ区の西約20m地点では第1次調査として南北44m、東西12mの範囲の発掘調査がなされており、4次調査



第336図 香椎A遺跡第4次調査Ⅰ区遺構平面図（文献81）

I区で検出された溝に並行する東西方向の溝が数本、掘立柱建物を含む多数の柱穴群と共に検出されている。出土遺物の報告がないために詳細は不明であるが、報告書には、年代は概ね12世紀代としている。しかし、溝の方向などを考え合わせると、4次調査Ⅰ区と同時期の可能性も考えられる。

少なくとも4次調査の成果を考えると、13世紀以降、中世末期まで屋敷地が展開していた想定され、香椎宮関連の屋敷跡とも考えられる一方で、時代的な背景をみると元寇を発端とする大友氏による異国警固番役が始まる時期でもあり、武家居館の可能性も十分考えられる。

【参考文献】75.81

筑前 R15 香椎 B 遺跡

郡名 糟屋郡

図幅名 福岡(東)

種別 平地城館

所在 福岡市東区香椎・香椎台4~5丁目

【位置】香椎宮の東約 500m、御飯ノ山城のある老ノ山の南側麓の標高 15~18m の台地上に位置する。

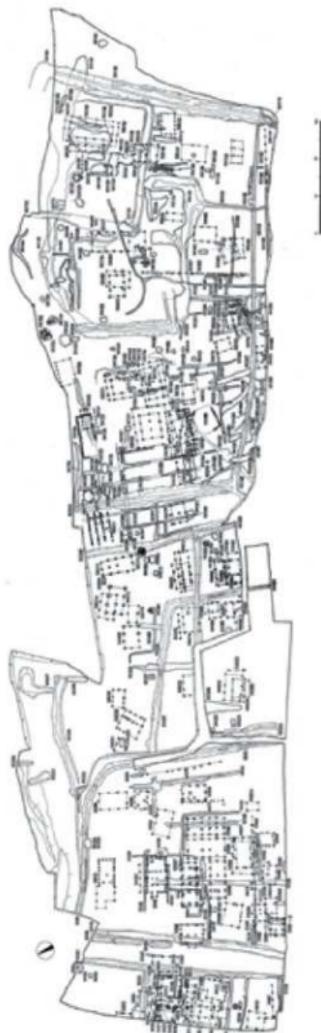
【概要】老ノ山の南麓の山裾には、東西に細長く耕作地となっている平坦地が伸びている。香椎 B 遺跡の第 1・2 次の発掘調査は、その平坦面の東西約 200m、南北約 50m の範囲が行われ、調査区ほぼ全面に中世の屋敷地が出土した。

検出した遺構は、屋敷地を区画する多数の堀、柵、溝などの施設と、屋敷地を構成する掘立柱建物、井戸、苑池、土坑墓、土坑などがあげられる。

屋敷群は 12 世紀前半に発生し、13 世紀前半~14 世紀前半にかけて一時期衰退する。その後、屋敷群を西側へ拡張して再び発展を迎え、16 世紀には衰退したと想定されている。前半の発展期に当たる 12~13 世紀の遺物には大量の陶器の他、中国瓦や円文軒丸瓦なども出土し、箱式木棺墓も出土するほか、背後の小倉谷では数多くの火葬墓群が検出されていることなどから、禪宗寺院が存在したとみられる。「寺熊」という字もこの時の寺院に由来している可能性が考えられる。

後半期の室町~戦国時代の発展期には、屋敷を構成する掘立柱建物群に付随して、東側(寺熊調査区)には東西 100m × 南北 50m 以上の溝に囲まれた方形区画、西側(生水調査区)には一辺約 50m の方形区画が発生し、生水調査区の方形区画は南側を除く三方を断面 V 字形で深さ 1.5m もある溝で囲まれ、南側は柵と門が構えられており、防衛的機能を兼ね備えたものとなっている。

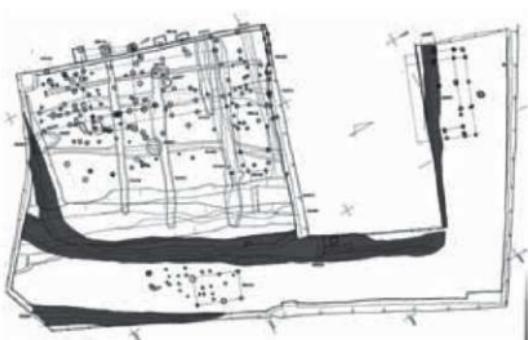
また、1・2 次調査区の西側の平坦面が第 8 次調査として発掘調査が行われており、調査区の内の 1~3 区では、南北約 30m、東西約 30m 以上の溝で囲まれた方形区画が検出され、その区画の内外から掘立柱建物群が検出されている。出土遺物はおおむね 12~13 世紀代で、多くの陶器に加えて、平安時代後期の軒瓦、平瓦、滑石製石鍋なども出土しており、寺院などの宗教施設が想定される。



第 337 図香椎 B 遺跡生水・寺熊調査区遺構配置図(文献 76)

このように香椎 B 遺跡では、中世全般にわたって、屋敷地が密集して存続していることが確認されている。これらは多くは溝で囲まれた方形区画をもつ屋敷地であるが、武家勢力に限らず、寺院などの宗教勢力の屋敷地も存在していることが想定されている。香椎宮や国際貿易港としての博多とのつながりによる繁栄と見られよう。

【参考文献】76.83



第 338 図 香椎 B 遺跡第 8 次調査 3 区遺構平面図（文献 83）

**筑前 R16 席田青木遺跡・中山遺跡**

都名 糟屋郡 / 席田郡

図幅名 福岡（東）

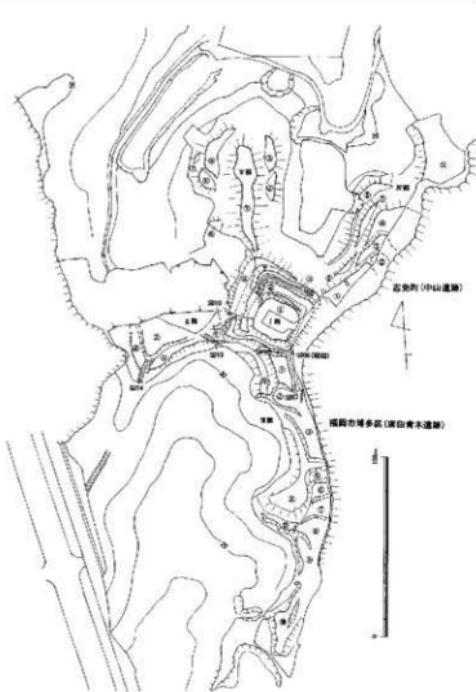
種別 丘城か

所在 福岡市博多区空港前5丁目・糟屋郡志免町別府西

【位置】福岡空港の東、席田郡と糟屋郡との境をなす丘陵上に位置する。『拾遺』『別府村』の項には「青木村の堺ひ山の最も高き所を城と云。平地少しあり。砦などの有し跡ならんか」とあり、城館遺構の存在をほのめかしている。

【概要】青木と別府との境にあたる標高約 40m の丘陵頂部に一辺約 20m の方形を呈する平坦面が形成され、その周囲の尾根上に階段状に平坦面が南北約 300m、東西約 200m の範囲に展開している。発掘調査では、弥生時代や江戸時代の遺構が濃密に重複しているため、これらの遺構がどれほど城館遺構を反映したのかは断定できないが、頂部の平坦面（I 郭①）のすぐ南側には堀切と思われる溝が検出されており、16世紀の遺物も出土している。よって、少なくとも丘陵頂部の一角について城館遺構と判断できるのではなかろうか。

【参考文献】3,11,77,84,204



第 339 図 席田青木遺跡・中山遺跡遺構配置図（文献 204・山崎龍雄作成）

筑前 R17 麦野 A 遺跡

郡名 那珂郡  
種別 平地城館  
図幅名 福岡南部(東)  
所在 福岡市博多区麦野3丁目

【位置】福岡平野東部を流れる御笠川とその支流の諸岡川との間に挟まれた中位段丘に位置する。

【概要】麦野 A 遺跡では、これまで 20 次にわたる発掘調査が行われてきており、その中で中世の溝で囲まれて方形区画の様相が明らかとなってきている。現状では北東隅と南西隅のコーナー部および、東側と西側の一部で一連と思われる溝が検出されている。東側の 20 次調査で検出された溝は幅 3 ~ 3.5m、深さは 1.7m で底面幅約 0.4m の断面箱形の形状である。

これまでの調査を合わせると、東西約 110m、南北約 150m の大きな方形区画が想定されるが、内部はほとんど未調査であり、内部には区画をさらに細分する溝が検出される可能性が残されている。

【参考文献】134



第 340 図 麦野 A 遺跡遺構配置図全図 (文献 134)

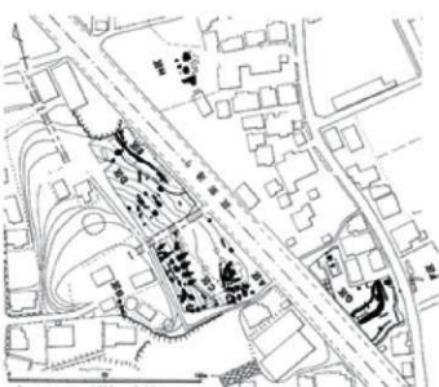
筑前 R19 諸岡 B 遺跡

郡名 那珂郡  
種別 平地城館  
図幅名 福岡南部(東)  
所在 福岡市博多区諸岡6丁目

【位置】諸岡川西岸に面して鎮座する諸岡八幡宮の丘陵地に位置する。

【概要】諸岡 B 遺跡ではこれまで 20 次の調査が行われ、中世居館に関する遺跡が見つかっている。八幡宮東側の段丘上を調査した 9 次調査 (G 区) や 13 次調査では溝に囲まれた方形区画とその内部から中世の掘立柱建物群が検出されている。

特に、9 次調査では、南北約 30m、東西約 25m 以上と想定される方形の区画の周囲を溝が巡り、その内部からは少なくとも 1 棟の掘立柱建物 (S B 01)、井戸 1 基、柱穴多数が検出され、区画外からも、多数の柱穴や井戸が検出された。



第 341 図 諸岡 B 遺跡調査区位置図 (文献 121)

溝の隅部は、南東側のみ検出され、幅は2~3m、深さは1~1.5mで、南側部分は、二段堀りの様相を呈していた。

方形区画の屋敷地が形成されるのは14世紀代と見られているが、溝の埋土から明の染付碗なども出土・報告されており、最終埋没はもう少し時期が下る可能性がある。出土遺物は他に土師器・瓦質土器・石臼などが見られる。

また、諸岡B遺跡地内では、八幡宮の丘陵の東側斜面を調査した2・4~6次調査区（A・C・D区）では、多くの中世の地下式横穴が見つかっており、屋敷地との関連が想定されるとともに、未調査である八幡宮の丘陵上にも関連遺構の存在が想定される。

【参考文献】121,128



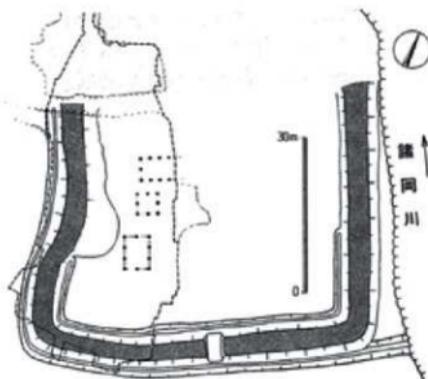
第342図 諸岡B遺跡9次調査(G区)遺構平面図(文献121)

筑前 R19	もうおかやかたあと 諸岡館跡	郡名 那珂郡	図幅名 福岡南部(東)
		種別 平地城館	所在 福岡市博多区諸岡1丁目

【位置】諸岡川西岸の標高11mの段丘上に位置する。諸岡八幡宮からは北へ約400mの地点にあたる。

【概要】調査前より部分的に土塁遺構が残存していたが、昭和55・57年(1980・82)に諸岡遺跡14次・17次調査として行われた発掘調査の段階では、土塁が残存していた西側半分が調査対象となったが、既に東半分は宅地化によって土塁遺構は消滅していた。調査では土塁の外側に溝が全周するが、土塁の内側の溝は屋敷地の南側のみ巡る状況が確認された。土塁幅は約5m、残存する高さは1m、溝の深さは約1mであった。

想定される土塁の平面プランは南北約



第343図 諸岡館跡全体復元図(文献122)



第344図 諸岡館跡土堀遺構（福岡市埋蔵文化財センター提供）

40m以上、東西約50mの方形を呈するもので、内部には幾度も建て替えがなされた結果、掘立柱建物が併せて24棟見つかったほか、地下式土坑が6基、土坑7基が見つかった。多くの貿易陶磁器や石塔類が出土し、それらの年代から、14世紀後半から16世紀の活動期間が想定されている。近世以降は隣接する寺院によるものとみられる一字一石経が検出された。

#### 【参考文献】122



第345図 諸岡館跡遺構平面図（文献122）

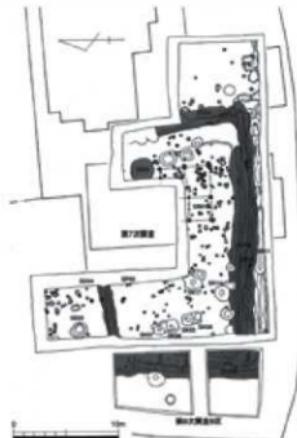
筑前 R20	おおはし 大橋 E 遺跡	郡名 那珂郡
		種別 平地城館

図幅名 福岡南部（西）  
所在 福岡市南区大橋4丁目

【位置】那珂川中流の西岸に面した標高10mの沖積微高地上に位置する。

【概要】大橋E遺跡ではこれまで約10次の発掘調査が行われているが、中でも7次と9次B区で明確な中世の居館遺構が見つかっている。東西約22m、南北約11mの長方形を呈する溝で囲まれた方形区画が検出され、溝はほぼ東西・南北方向を示しており、溝の規模は西側で幅約2.4m、深さ0.5mである。区画の内部からは2間×2間の総柱の掘立柱建物が1棟と井戸1基と土坑がいくつか検出されている。時期は概ね16～17世紀である。区画外でも北側に井戸1基があることから区画外にも他の屋敷地が展開しているとみられる。この調査区を南西隅として一辺約100mの範囲に方形区画が広がる復元案も出されているが、調査範囲が狭く不明確である。

#### 【参考文献】127,129



第346図 大橋 E 遺跡遺構平面図（文献129）

筑前 R21 中白水遺跡

郡名 那珂郡  
種別 平地城館

図幅名 福岡南部(東)  
所在 春日市上白水5～6丁目

【位置】那珂川を西方に見下ろす標高約30mの河岸段丘上に位置する。

【概要】白水八幡宮の西、現在の上白水5・6丁目の一帯、東西約300m、南北約200mの範囲に溝で囲まれた方形区画が複数個所で検出されており、中世の居館群が存在したことが判明している。

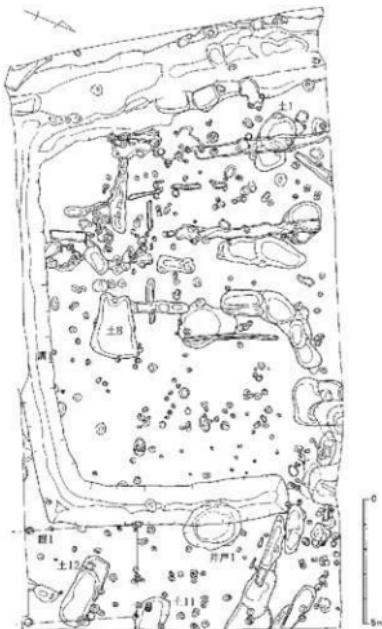
中でも最も状況が判明しているのが、八幡宮の西約100m地点の上白水館跡1次調査区で、一辺42～50mの溝で囲まれた方形区画が検出され、その内部からはおびただしい数の柱穴、土坑、井戸が見つかった。溝は南東隅と南側の2箇所で途切れており、出入口となっていると想定される。出土遺物も高麗青磁梅瓶など高級陶器類も



第347図 中白水遺跡平地城館遺構配置図（文献46）



第348図 中白水遺跡 12次調査全景  
(春日市教育委員会提供)



第349図 中白水遺跡 12次調査遺構平面図  
(文献130)

散見され、中世白水庄の中心施設と目されている。時期は14～16世紀とみられる。

また、その南側約50m地点の上白水館跡5次調査でも掘立柱建物4棟、井戸3基などが見つかり、少なくとも南側と東側の2箇所に溝が巡ることが判明し、1次調査の居館の周りにも同様な屋敷地が存在していたと想定される。一方、上白水館跡1次の北側では、近年、中白水遺跡12次調査が行われ、東西約15m、南北10m以上の方形に溝が巡る屋敷地が検出された。溝は幅1.5～3m、深さは約1mの断面逆台形である。

この他、上白水西遺跡などでも方形に巡る溝の一部と掘立柱建物が検出されており、居館群が広範囲にわたることが類推されるほか、南側の天神ノ木遺跡でも、小範囲の調査で中世の溝遺構がいくつか見つかっており、今後中世の居館遺跡が確認される可能性があり、白水一帯に上白水八幡宮を中心とした屋敷地群が想定される。

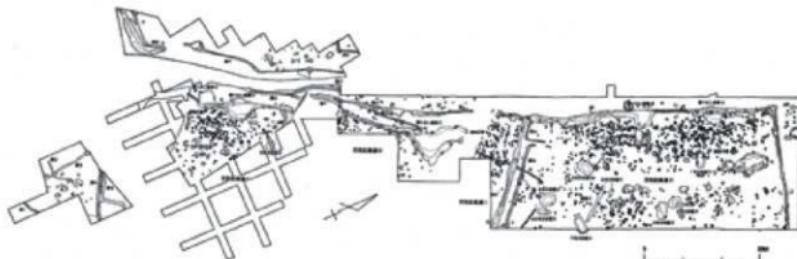
【参考文献】46.124.130

筑前 R22	いでのはるいせき 井出ノ原遺跡	郡名 那珂郡	図幅名 福岡南部(東)
		種別 平地城館	所在 筑紫郡那珂川町中原東2丁目

【位置】那珂川支流の梶原川東岸、観音山の北麓の標高38mの低台地上に位置する。現在はJR博多南駅博多総合車両所となっている。

【概要】調査では、南北約200m、東西約40～50mの範囲の発掘が行われ、溝で囲まれた方形区画が3～4面南北に並列する状況が確認された。いずれも東西30m以上、南北約40～60mの規模を有し、区画の内部からは掘立柱建物群を構成する夥しい数の柱穴群が検出された。中でも最も内容が判明しているのが北側の方形区画Ⅱで、南北60m、東西30m以上の区画を有し、囲まれた溝は幅約1m、深さ0.6mであるが、溝の要所に内側に張り出した窪み（報告書では「張り出し遺構」）を有している（機能は不明）。出土遺物は土師器、陶磁器、茶釜、石臼、瓦などがあり、時期は概ね14～15世紀代で、館の機能した時期にあたるものと思われる。

【参考文献】119



第350図 井出ノ原遺跡全景（文献119）

筑前 R23 大塚遺跡

郡名 那珂郡  
種別 丘城

図幅名 福岡南部(西) / 不入道(西)  
所在 筑紫郡那珂川町安徳

【位置】那珂川を西に見下ろす大塚古墳に隣接する標高 55m の丘陵上に位置する。

【概要】丘陵頂部から南側斜面の発掘調査がなされており、丘陵頂部に城館遺構が検出された。

発掘調査前までは丘陵頂部に平坦面とその東側と南側に堀切状の窪みが見られるのみで、城館遺構という認識がなかったが、発掘調査により城館遺構と判明した。

丘陵頂部の主郭は東西 21m、南北 37m で、その周間に横堀が巡る。横堀は幅約 3 m、深さ約 2 m であるが、調査前まではほとんど埋没していた。横堀の断面形態は箱型あるいは U 字型である。その横堀の東側に堀に並行するように堀切 1 本が確認されている。

主郭の平坦面上からは、柱穴群の他、楕円形の外溝と方形の内溝遺構が見つかっているが、機能等については不明である。

また、この城館遺構から南側の斜面を下った平坦面には多数の柱穴群が検出され、少なくとも 5 棟の掘立柱建物が存在することがわかった。

出土遺物については、陶磁器類は少なく、土師器、瓦質土器が主体をなし、およそ 14 世紀後半～16 世紀代に位置づけられる。当遺跡の活動期間を示しているものと思われる。

現在の所、地誌類等に記載は見られないが、周辺には龍神山城（岩門城）や安徳台遺跡、平蔵遺跡など、中世の城館遺跡が立地し、それらとの関連が窺われる。

【参考文献】11,133



第 351 図 大塚遺跡全景 (那珂川町教育委員会提供)



第 352 図 大塚遺跡遺構配置図 (文献 133)

筑前 R24 安徳台遺跡

郡名 那珂郡

種別 平地城館

図幅名 福岡南部(西) / 不入道(西)

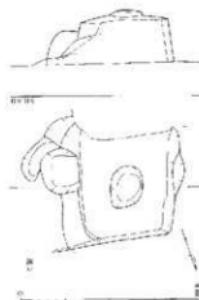
所在 筑紫郡那珂川町安徳

【位置】大塚遺跡の西に所在する標高 60m の安徳台の台地上に位置する。

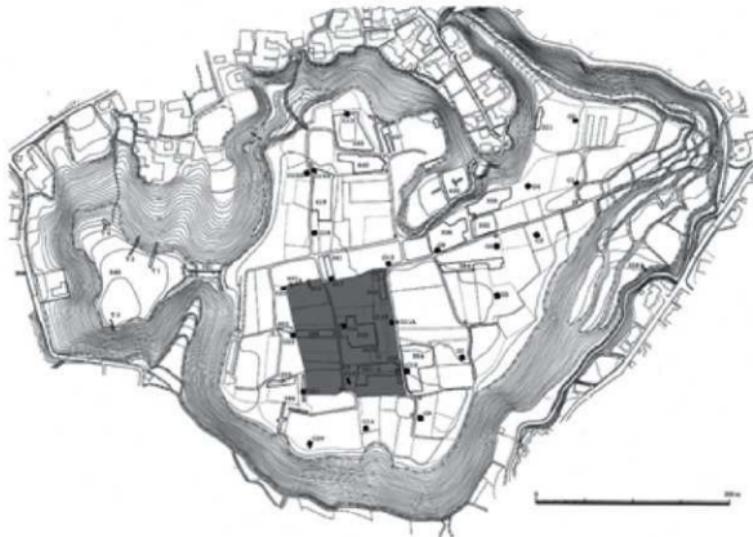
【概要】安徳台の台地は東西約 400m、南北約 300m の範囲が平地状となつており、弥生時代の襄柏墓群が検出されたことでも知られている。その一方で、日本書紀の神功皇后にまつわる迹駿岡として記載され、平家と共に西下した安徳天皇の仮行宮を置いた原田氏の居館があった場所ともされている。

発掘調査においても上記の弥生時代の他、中世の遺構・遺物が検出されている。特に台地の西側中央部では、中世の溝や地下式横穴遺構、掘立柱建物などを検出している。部分的なトレンチ調査であるため、全体像は不明確な部分が残されるが、一辺約 100m の範囲で溝に囲まれた方形区画が想定されている。時期は 15 世紀後半～16 世紀に位置づけられ、大内氏が岩門城に城督を置いた時期と重複することから、岩門城（龍神山城）との関連が指摘されている。

【参考文献】126,131



第 353 図  
安徳台遺跡地下式横穴  
(文献 131)



第 354 図 安徳台遺跡遺構配置図 (文献 131 掲載図を一部改変して事務局作成) アミカケ部が居館推定域

筑前 R25	平蔵遺跡 へいぞういせき	郡名 那珂郡	図幅名 福岡南部(西) / 不入道(西)
		種別 平地城館	所在 筑紫郡那珂川町上梶原1丁目

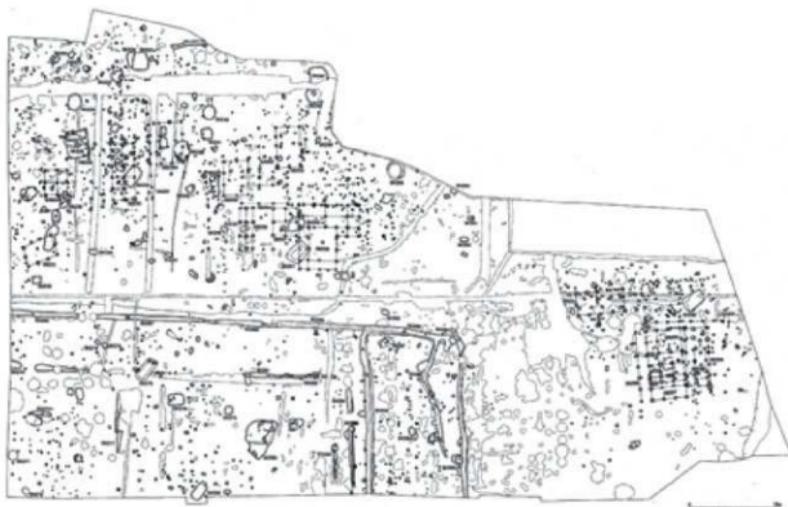
【位置】龍神山城（岩門城）の北東約1,000m、梶原川の谷に面した標高45mの台地上に位置する。

【概要】遺跡が所在する台地は南北約250m、東西約300mの平地となっている。中学校建設等に伴い、過去3回の発掘調査が行われ、台地上のかなりの部分で、建物群や製鉄関連遺跡など、濃密に中世の遺構が確認されている。特に、台地の北東側を対象とした3次調査では、掘立柱建物15棟、柵3列と区画溝が確認された。区画溝は建物群の南側を大きく囲むように方形に巡っており、区画内部からも多く柱穴群が検出されている。広大な面積の屋敷地の存在が想定される。区画された溝は幅1m内外、深さも1mほどで防御の堀というよりは敷地を区画するための溝に近い印象を受ける。溝は所々で約5m途切れている箇所がいくつか見られ、出入口であったとみられる。

出土遺物は、耳皿を含む大量の土師器皿と若干の陶磁器、瓦質土器が見られ、年代は15世紀代に位置づけられる。また、3次調査区の南約100m地点では2次調査の際にⅢ区として調査がなされ、10m×20～30mの範囲を溝で方形に囲まれた区画が5面隣接した状況で確認され、内部からは数棟の掘立柱建物群が検出されている。年代は不明確だが、隣接して検出された古墳の横穴式石室からは、再利用によると思われる12～14世紀の遺物が出土しており、概ねその頃のものと思われる。

なお、当該地は梶原景時の後裔、梶原平三が慶長年間に屋敷を構えた「平三屋敷」と伝えられており、平蔵遺跡の中世屋敷地が伝承として記憶された可能性も考えられる。

【参考文献】120,123,125



第355図 平蔵遺跡3次調査遺構配置図（文献125）

筑前 R26 五ヶ山網取遺跡

郡名 那珂郡 図幅名 不入道(西)  
種別 平地城館 所在 筑紫郡那珂川町五ヶ山

【位置】那珂川上流、筑紫郡馬渓を  
遡った五ヶ山の入口にあたる旧網  
取集落に位置する。

【概要】那珂川西岸に面した標高  
280mの河岸段丘上にあたり、東西  
20~50m、南北約100mを対象に発掘調査が行われている。

調査区のほぼ全面において中近世の遺構が確認された。特に北側の3区・7区では、一辺30mほどの大溝に囲まれた方形区画が少なくとも3面検出され、その内部からはおびただしい数の柱穴群が検出され、堀立柱建物群が想定されている。区画の周りを囲む溝は、幾度かの掘削と埋没を繰り返しており、中には幅4m、深さ2m近くにもなる大型の溝も確認された。

溝からは茶白を含む大量の石臼や砥石、鉄滓などの遺物の他、中国陶磁、朝鮮陶磁、唐津焼などが出土した。時期は概ね15~16世紀を最盛期としつつ、方形区画の溝などは17世紀に最終的に埋没している。5区などではその後の時期の遺構なども検出されており、平成期まで続く網取集落に継続していくものとみられる。

【参考文献】135



第356図 五ヶ山網取遺跡遺構配置図（文献135）

筑前 R27 柏原K遺跡

郡名 早良郡 図幅名 福岡南部(西)  
種別 平地城館 所在 福岡市南区柏原6丁目

【位置】桶井川上流東岸の標高約45mの段丘上に位置する。

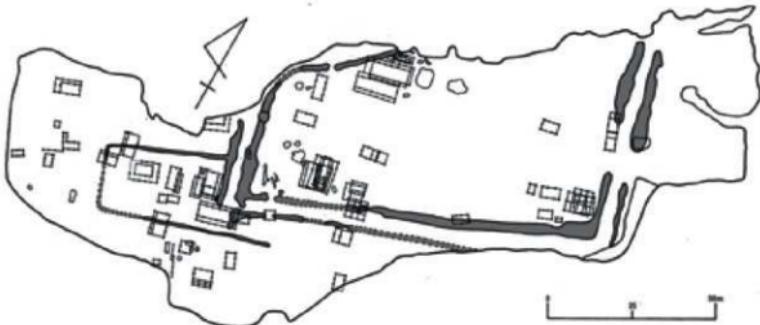
【概要】発掘調査では、東西約200m、南北約80mの範囲が対象として行われ、ほぼ全域に中世の屋敷地が検出された。

検出された屋敷地は、東西約 100m、南北約 50m の区画を二重の溝で方形に囲み、その西側に付属して東西約 40m、南北約 25m の溝で囲まれた方形区画をなし、区画の内外からは多くの掘立柱建物が検出された。溝の幅は 1 ~ 2 m、深さは 1 m 未満であった。

出土遺物は、土師器、陶磁器の他、中国端渓産の石硯などの特殊遺物も見られ、13 世紀中頃～14 世紀中頃が主体を占め、屋敷の活動期間を示しているものと思われる。

なお、弘安の役で戦死した渋谷有重の勳功賞として、筑前早良郡比伊郷の地頭職が配分された書状が入来文書にあり、現地地名の比較から、当遺跡が勳功賞として配分された惣檢校入道屋敷と六郎屋敷と想定されている。

#### 【参考文献】138



第 357 図 柏原 K 遺跡中世遺構配置図（文献 138）

筑前 R28	ひいがわ いせき	郡名 早良郡	図幅名 福岡南部(西)
		種別 平地城館	所在 福岡市城南区樋井川3丁目

【位置】樋井川西岸、標高 20m の段丘上に位置する。

【概要】南北約 100m、東西約 80m の範囲の調査が行われ、ほぼ全面に中世後期の遺構が検出された。

検出した遺構は、溝 12 本、土坑 18 基、墓 7 基、掘立柱建物 1 棟以上、地下式土坑 27 基で、溝は調査区を十字形に走っており、区画を四分しているとみられる。溝の幅は約 2 m、深さは 1 ~ 2 m である。数多く検出した地下式土坑の一つからは、完形の龍泉窯系青磁盤なども出土している。

これらの遺構の時期は概ね 15 ~ 16 世紀で、17 世紀以降は、隣接する長徳寺に関連して造成などがなされ、前代とは異なった区画溝などが形成される。

戦国時代の名主層の屋敷地とみられる。

#### 【参考文献】141



第 358 図 樋井川 A 遺跡中世遺構配置図（文献 141）

筑前 R29 広瀬遺跡

郡名 早良郡  
種別 平地城館

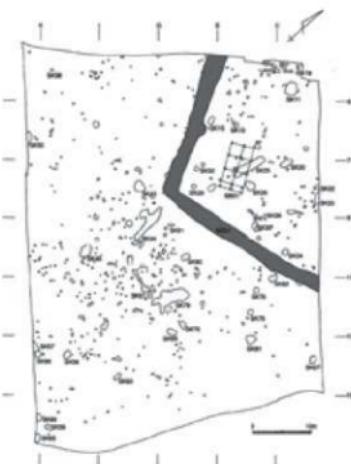
図幅名 脊振山(東)  
所在 福岡市早良区西・内野8丁目

【位置】室見川上流の東岸、標高 78 ~ 89m の河岸段丘上に位置する。

【概要】1次調査1区では、東西約50m、南北約60mの範囲を調査した結果、調査区の北側に溝で囲まれた方形区画の隅部が検出された。方形区画は、東西30m以上、南北25m以上の規模を有し、区画内部からは掘立柱建物1棟、土師器焼成構造1基と区画の内外からは多くの柱穴群と焼土坑が検出された。溝の幅は約2.5m、深さは0.5~0.9mである。南側の溝で陸橋部が検出されており、区画の中心と想定した場合、区画の一辺は約50mとなる。

出土遺物から15~16世紀の活動時期が想定されている。

【参考文献】143



第359図 広瀬遺跡1次調査中世遺構配置図（文献143）

筑前 R30 志水 A 遺跡

郡名 早良郡  
種別 兵舎か

図幅名 脊振山(東)  
所在 福岡市早良区小笠木

【位置】室見川支流、小笠木川の南岸の標高110mの段丘上に位置する。

【概要】約20m四方の範囲を発掘調査したC区において、1.4~1.5mの間隔で併行する柱穴列7列を確認した。柱穴は円形もしくは不整方形で、一部柱穴列が布掘りとなっていた。柱間は0.5~



第360図志水 A 遺跡 C 区遺構配置図（文献140）



第361図 志水 A 遺跡 C 区全景  
(福岡市埋蔵文化財センター提供)

0.7mと不規則である。この特異な柱穴群の配置は、熊本県和水町田中城跡で検出されている連棟式長屋建物に類するものとみられ、兵舎とも考えられている。時期は周辺遺構の出土遺物から16世紀後半とみられ、安楽平城を巡る攻防に関連したものとみられている。

【参考文献】140

筑前 R31	きよすえいせき <b>清末遺跡</b>	郡名 早良郡	図幅名 福岡西南部(東)
		種別 平地城館	所在 福岡市早良区東入部4~5丁目

【位置】室見川中流域東側の標高28mの沖積地上に位置する。

【概要】第2次調査4区では、12~14世紀の遺構・遺物が多数出土した。12世紀中頃には平面コの字形の大型建物群が見られ、14世紀代になると、溝で囲まれた方形区画が出現する。4~1区の調査区内では南北約50m、東西約30mの範囲で方形区画を確認したが、区画の溝はそれよりもさらに南側へ延び、部分的なトレンチ調査の成果を含めると、南北長は70m前後となる。溝は西側で幅3~5m、深さ1.3mで断面はV字形となる。東側は幅1.8m、深さ0.4mで溝の中には人頭大の礫が大量に入っている。石垣などがあったとも想定されている。北東隅は陸橋となっている。

区画の中からは大量の柱穴群と共に、掘立柱建物、井戸などが検出されている。溝に囲まれた方形区画の年代は14世紀初頭~前半頃とみられる。

【参考文献】139

筑前 R32	ありた こたべ いせきぐん <b>有田・小田部遺跡群</b>	郡名 早良郡	図幅名 福岡西南部(東)
		種別 平地城館	所在 福岡市早良区有田・小田部

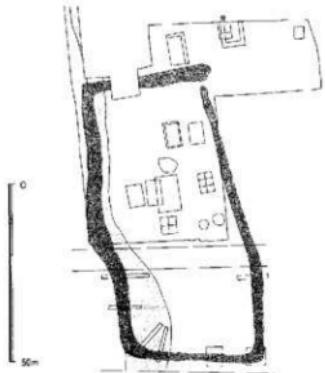
【位置】室見川と金屑川との間に挟まれた有田・小田部の台地上に位置する。

【概要】台地上では有田遺跡群として200次前後の調査が行われ、小田部城(筑前312)を中心として、数多くの中世の城館関連遺跡が検出されている。

特に小田部3丁目、5丁目、有田1・2丁目地区においては、溝で囲まれた方形区画が複数箇所確認されている。

中でも、有田1・2丁目地区では、

復元すると一辺約100mにも上る規模 第363図 有田・小田部遺跡群中世遺構配置図(文献186・右は復元図)

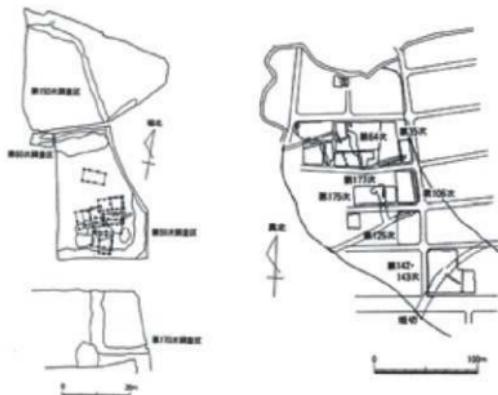


第362図 清末遺跡中世後期遺構配置図(文献139)



の溝で囲まれた方形区画が複数箇所確認されており、また小田部城にも近いことから、城との密接な関係が窺われる。

【参考文献】 136-186



第364図 有田・小田部遺跡群中世城館関連遺構配置図（文献186）  
 （左：小田部3工目地点、右：小田部5工目地点）

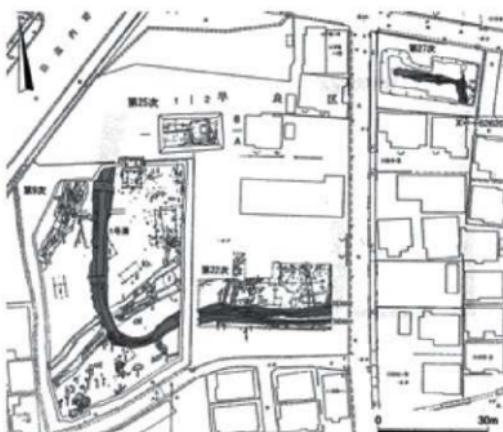
筑前 R33	はらいせき 原遺跡	郡名	早良郡	図幅名	福岡西南部(東)
		種別	平地城館	所在	福岡市早良区原7~8丁目

【位置】有田遺跡群の東、金屑川東側の標高5mの沖積地上に位置する。

【概要】原遺跡では過去30次近くの発掘調査が行われており、中世の城館関連遺跡が検出されている。それらを総合的に併せると、東西約100m、南北約65mの溝で囲まれた屋敷地の方形区画を想定することができる。区画の南西側を調査した9次調査では、幅2.5～5.2m、深さ0.5～1mの大溝の南西隅部が検出され、区画内部からは掘立柱建物群が検出されている。9次調査の東隣の22次調査区では9次から続く溝が東西方向に検出され、二股に分かれている。区画内部を区切る溝が派生している可能性も考えられている。

北東側の27次調査区の方形区画の溝は、幅2m弱、深さ約1mと他の調査区よりは小規模の溝ではあるが、一連の溝とみられている。溝からは土師器・陶磁器に加え、呪符木簡なども出土した。年代は15世紀初頭～16世紀後半とみられている。

【参考文献】 137-145



第365図 厚遺跡遺構配置図（文献145）

うらえいせき  
筑前 R34 浦江遺跡

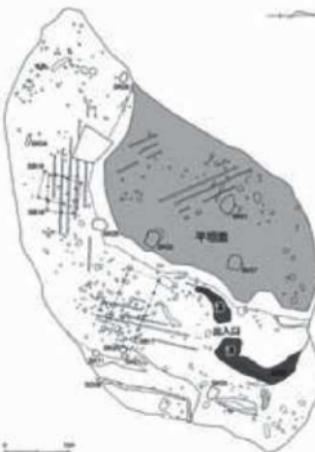
郡名 早良郡  
種別 砂か

図幅名 福岡西南部(東)  
所在 福岡市西区金武

【位置】室見川の西、支流の竜谷川によって形成された標高48mの扇状地に位置する。

【概要】5次調査13区では、楕円形に残丘部が残り、発掘調査で中世の遺構が検出された。調査区は大きく上下二段に分かれており、上面に侵入するための出入口が溝によって虎口状に形成されていた。この溝を積極的に城館遺構としてとらえるならば、上段の平坦面を主郭とし、そこへ導入するための虎口をその東側に敷設し、下段の曲輪へと接続する様子が想定できる。下段では掘立柱建物なども検出されており、城館に関連する施設が存在した可能性が考えられる。しかし、周囲は早くに耕作地化してしまっており、これが中世遺構の全体像であるか不明であるため、その性格については今後検討を要する。

【参考文献】144



第366図 浦江遺跡5次調査13区遺構配置図  
(文献144掲載図を一部改変して事務局作成)

しもやまとおどめだいせき  
筑前 R36 下山門乙女田遺跡

郡名 早良郡  
種別 平地城館

図幅名 福岡西南部(東) / 福岡西部(東)  
所在 福岡市西区下山門3丁目

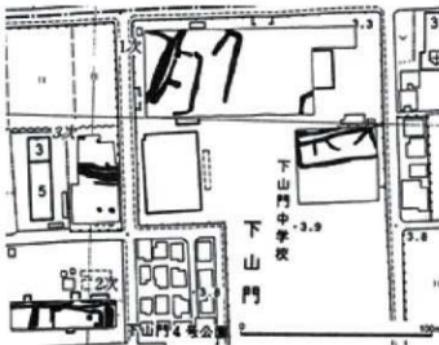
【位置】十郎川の東、標高2mの沖積地に位置する。

【概要】下山門乙女田遺跡では過去3回調査が行われ、各所で中世の溝で囲まれた方形区画が確認されている。

いずれの調査区においても、溝、井戸、柱穴群が見つかっており、全体で大きな方形区画を形成するのではなく、一辺50mほどの方形区画が複数切り合いかながら各所に点在するという状況とみられる。

出土遺物には1次調査で木製仏像なども見つかっているが、土師器・須恵器などから15~16世紀頃に位置づけられるものとみられる。

【参考文献】142



第367図 下山門乙女田遺跡中世遺構配置図 (文献142)

筑前 R37 げんこうぼうりい  
**元寇防塁**

郡名 志摩郡 / 早良郡 / 那珂郡 / 糟屋郡

図幅名 福岡(西) / 福岡西部(東 / 西) / 福岡西南部(東 / 西) / 宮浦(東)

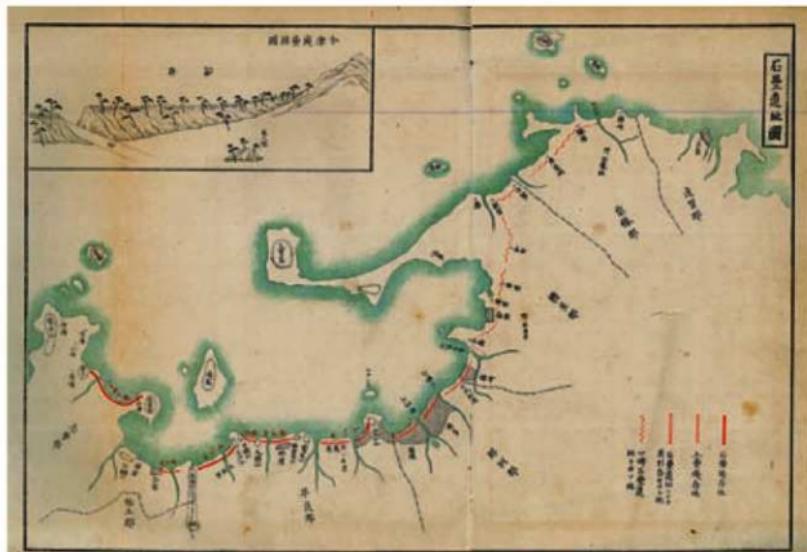
種別 防塁 所在 福岡市東区・博多区・早良区・西区

【位置】元寇防塁は、蒙古襲来の文永の役（1274）での戦禍を教訓に、再度の襲来に備え、九州各國の鎌倉御家人により博多湾沿岸を中心に約20kmにわたり築かれた防塁遺構である。当時は「石築地」として文献史料に登場するが、大正2年（1913）に中山平次郎により「元寇防塁」と命名され、さらに昭和6年（1931）に「今津」「今宿（2地点）」「生の松原」「姪浜（2地点）」「西新（2地点）」「地行」「箱崎」の7地区10地点が国史跡「元寇防塁」に指定された。

【概要】現在、防塁遺構自体が確認されているのは、指定されている上記地点であるが、博多地区においても発掘調査により元寇防塁と推測されている石塁遺構が見つかっている。その他、文献史料の記載から、博多湾東側の香椎地区にもその存在が確認できるが、実際の遺構は見つかっていない。また、博多湾の東岸から、糟屋、宗像の沿岸部にかけても口碑として元寇防塁が存在したとされる箇所もあるが、これらについては実在自体も不明なところである。以下、発掘調査の成果を元に概要を説明する。

指定された地区およびその周辺で確認調査が行われたのは、生の松原、今津、西新、姪浜、箱崎、百道の各地点である。

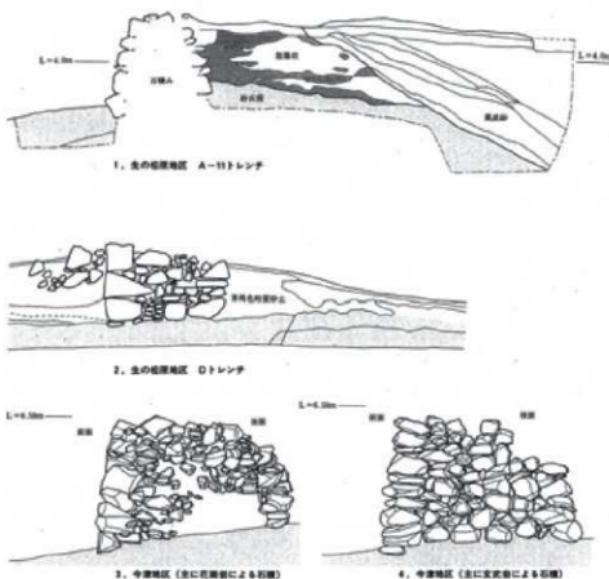
これまでの調査成果から見ると、防塁遺構の構築方法は大きく2つに分かれている。今津地区の内、玄武岩を用いた地区では断面台形の石積み部分がすべて石材によって構築されるのに対し、その他



第368図 元寇防塁の位置を描いた「石壁遺跡図」(『伏敵編』(明治24年)より転載)

の地区（今津地区内で花崗岩を用いて築かれた地区を含む）では、前面と背面のみ石を積み、内部は砂や小砾を充てんする工法を探っている。中でも、西新地区では粘土と砂の互層により堅固にしている事例も見られる。

また、生の松原地区では、石積みの背後に砂と粘土により版築状に盛土を築いている。これは石積み自体を安定させるばかりではなく、「蒙古襲来絵詞」に描かれているように、背面から石積みの天端に容易に登ることができるようにするためのもの



第369図 各地区的防壁構造断面図（文献114）



第370図 元寇防壁（指定地）の現状（1：今津地区・2：生の松原地区・3：西新地区・4：姪浜地区）

とみられる。

そして石積みは、現在は崩落し、かなり高さが低くなってしまっているが、遺存が良好な今津地区では2.83mの高さまで積まれていることが確認されており、他の地区についても当初はそれぐらいの高さを持っていたとみられる。

また、平成11年（1999）に西南学院大学構内で行われた8次調査では、砂と粘土の互層によって積まれた土塁遺構が、従来確認されている石積み遺構に並行して築かれていることが確認されている。石積み遺構については、同じ西新地区指定地内のものと同様、前面と背面に石を積み、内部を版築状に突き固めていた。

平成10～11年（1998～99）には、博多区奈良屋町にある博多小学校改築に伴う調査が、博多遺跡群第111次調査として行われた。この場所は博多遺跡群の北側、息浜（沖の浜）に位置し、旧海岸線に沿って、東西50mの範囲で石塁遺構が検出された。基底部付近しか残存していないかったが、最も残存状況の良いA区では残存長8.5m、最大幅3.8m、最大高1.3mで、前面と背面には、70cm×50cm以下の大きな石を積み上げ、その間には50cm×40cm以下の小さな石を詰め込む構築方法であった。他の区でも、所々には石塁と直交方向に地区割りを示すかのように方形の石が並べられていた。石材は礫岩と砂岩が圧倒的に多い。

石積みの石の間やその周囲からは、中世後半期以降の新しい時期の遺物が多数出土した。これらは石積み遺構の時期を直接示すものではなく、遺構を破壊した際に混入したものとみられ、その一方で、石積み前面からは13～14世紀の遺物も出土している。そして石積みの規模や構造が今津地区の元寇防塁に非常に類似することや、海岸の砂丘に沿ったラインで構築されていることなどから、この石積みが元寇防塁であると推測されている。現在、この遺構は一部が校内にて保存されている。

平成17年（2005）には、博多湾東岸の香椎1丁目において調査が行われ、旧海岸線に沿う形で石積み遺構が検出された。当初、香椎地区では新発見の元寇防塁ではないかという意見もあったが、従来の元寇防塁の基底部が標高3.5m前後であるのに対し、当該遺構が標高1m以下で、かつての波打ち際にあたる高さで築かれていること、石積み基底部には胴木が敷かれており、他では見られない工法であると共に、胴木のすぐそばからは寛永通宝が出土していることなどから、江戸時代以降に築造された護岸遺構と判明し、元寇防塁ではないとされている。

【参考文献】109～118



第371図 元寇防塁8次調査で見つかった

石積み遺構

（福岡市埋蔵文化財センター提供）



第372図 元寇防塁8次調査防塁遺構復元状況

筑前 R38 蔵持境遺跡

郡名 怡土郡  
種別 平地城館

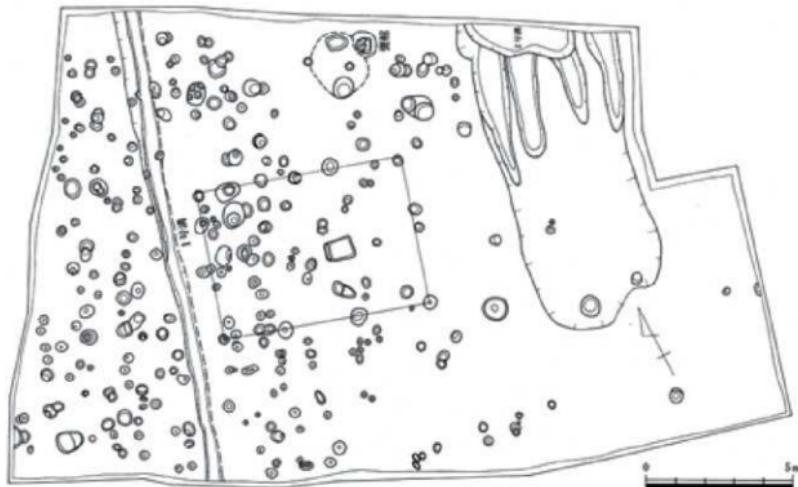
図幅名 前原(東)  
所在 糸島市藏持

【位置】雷山川西岸、雷山から北へ派生する丘陵の東麓、藏持と有田の集落の境付近の標高 36m の平地上に位置する。

【概要】東西約 25m、南北約 15m の範囲の発掘調査が行われ、南北に走る溝 1 本を検出した。幅 0.5m、深さ 0.7m と小規模で、さらに調査区内では屈曲しないが、調査区の南側をトレンチ調査したところ、東側に直角に屈曲していることが判明している（糸島市教育委員会の教示による）。

他の調査区との位置関係から、想定される区画は一辺約 25m とみられ、区画内部にあたる溝の東側からは掘立柱建物 1 棟が検出されている。出土遺物は土師器や土師質土器の火鉢などの他、完形に近い白磁管耳花生などの希少な陶磁器も出土しており、14～15 世紀代に収まる。屋敷地の活動時期を示している。

【参考文献】154



第 373 図 蔵持境遺跡遺構平面図（文献 154）

筑前 R39 蔵持古屋敷遺跡

郡名 怡土郡  
種別 平地城館

図幅名 前原(東)  
所在 糸島市藏持

【位置】藏持集落の北側、標高 40m の低台地上に位置する。

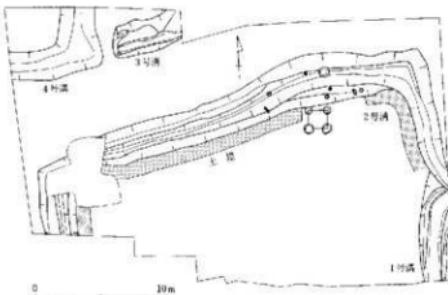
【概要】東西約 25m、南北約 20m の範囲の発掘調査が行われ、東西約 20m、南北 15m 以上の溝に囲まれた方形区画を検出した。溝の一部は切り合い関係があり、方形に巡るか否かは不明である。

溝の幅は2～3m、深さは1.1mで、断面V字形を呈している。区画の内部からは多数の柱穴群は見つかったものの、同時期の明確な建物などの遺構は確認できなかった（2間×2間の掘立柱建物は奈良時代）が、想定図では溝に面した4つの柱穴が檜ではないかという見解もある（溝に沿った土壁の根拠は不明。）。

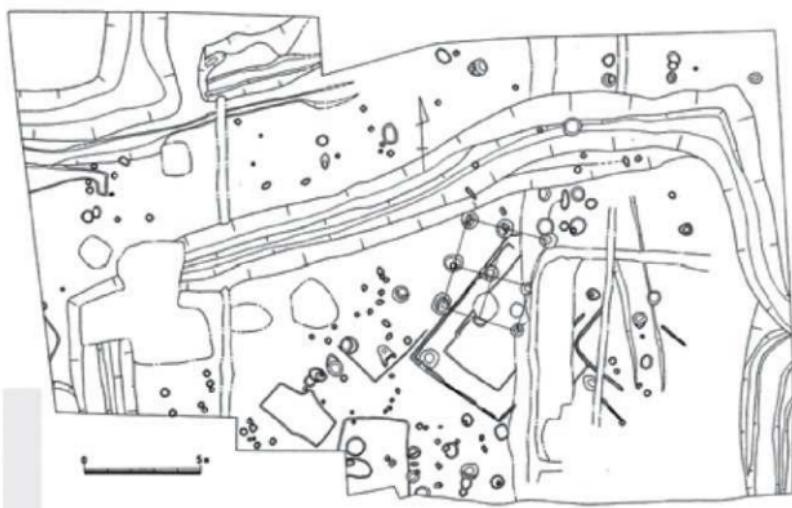
また、区画の北側は約5mの間隔を置いて、同規模の溝が東西方向に走り、一部は直角に屈曲している。通路を挟んで他の屋敷地の区画が存在している可能性が高いものと見受けられる。

なお、出土遺物は、区画する溝の下層からは14～15世紀の遺物が出土しているが、中層は18世紀、上層は19世紀に至る遺物が出土しており、近世のかなりの期間を要して自然埋没していったものとみられる。区画内部の遺構が明確ではないために断定できないが、近世以降も屋敷地は存続している可能性も考えられる。

#### 【参考文献】149



第374図 藏持古屋敷遺跡復元想定図（文献154）



第375図 藏持古屋敷遺跡遺構配置図（文献149）

筑前 R40	ひがしさただいせき 東五反田遺跡	郡名 怡土郡 種別 平地城館	図幅名 前原(西) 所在 糸島市東
--------	---------------------	-------------------	----------------------

【位置】長野川中流域、東集落の東で、長野川東岸の標高 10m 前後の平地に位置する。東八幡宮の東約 500m の地点にあたる。

【概要】昭和 62 年（1987）度の調査では、東西 55m、南北 40m の溝で囲まれた方形区画が検出され、内部からはおびただしい数の掘立柱建物群が構成する柱穴群が検出された。

【参考文献】147

筑前 R41	ひがしもだいせき 東下田遺跡	郡名 怡土郡 種別 平地城館	図幅名 前原(西) 所在 糸島市東
--------	-------------------	-------------------	----------------------

【位置】長野集落の南、長野川西岸の標高 10m 前後の平地に位置する。

【概要】東下田遺跡では、4 地点の調査が行われており、中世の居館遺構が検出されたのは 3 地点である。調査区からは東西約 30m の区画溝が複数本並走し、南西隅で北側に屈曲する状況が確認されている。方形区画をなすものとみられ、区画の内外からは多くの柱穴群が検出された。

【参考文献】147



第 376 図 東五反田遺跡全景（糸島市教育委員会提供）



第 377 図 東下田遺跡（糸島市教育委員会提供）

筑前 R42	ひがしたこうだいせき 東高田遺跡	郡名 怡土郡 種別 平地城館	図幅名 前原(西) 所在 糸島市東
--------	---------------------	-------------------	----------------------

【位置】長野集落の南約 500m、長野川中流域西岸の標高 11m の微高地上に位置する。

【概要】高田遺跡は 4 地点の調査が行われ、その内の第 3 地点で中世居館とみられる遺跡が検出された。第 3 地点では南北約 50m、東西約 10 ~ 15m の範囲で調査が行われ、東西方向に並行して走る溝 2 本（4・5 号溝）が検出され、その北側に 4 棟の掘立柱建物が検出された。

5号溝は現在の地割と一致しており、地籍図や部分的なトレンチ調査等による検討から、一辺約100mの方形区画が想定されている。また、第2地点においても掘立柱建物が2棟検出されており、推定される方形区画の内部にあたる。溝や柱穴から出土した遺物の年代から、13世紀前半頃とみられている。

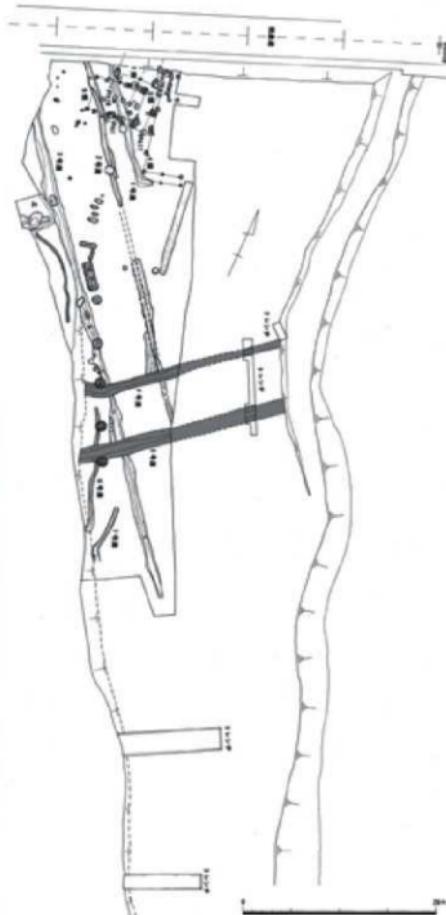
なお、調査地の小字は「屋敷田」で、地元では波多江兵庫守屋敷跡あるいは古屋敷と呼ばれていたといい、この遺跡と関連があるものとみられる。

【参考文献】148



第378図 東高田遺跡第3地点全景

(糸島市教育委員会提供)



第379図 東高田遺跡第3地点遺構配置図（文献148）

筑前 R43 熊野神社東遺跡  
くまのじんじやひがしいせき

郡名 怡土郡  
種別 平地城館

図幅名 前原(西)  
所在 糸島市二丈田中

【位置】羅漢川の東岸、丘陵裾部の標高 12m の低台地上に位置する。田中の集落の中にあたり、西隣には熊野神社が鎮座する。

【概要】約 30m 四方を対象として発掘調査が行われ、南北 20m 以上、東西 20m 以上の溝で囲まれた方形区画が検出された。区画近辺からは 2 棟の掘立柱建物が検出され、うち 1 棟は方形に区画する溝に切られていたが、もう 1 棟は溝と同時期の可能性がある。溝の幅は 2 ~ 3m、深さは約 1m である。区画の外からも小型の柱穴が多數検出されており、明確ではないが、小型の掘立柱建物が存在する可能性が高い。出土遺物は、溝出土の遺物は 12 世紀後半までを主体とするが、区画外の柱穴からは 13 世紀前半代の龍泉窯系青磁が多く出土しており、溝の埋没後も屋敷地が存続した可能性が高いとみられる。

【参考文献】157



第380図 熊野神社東遺跡遺構配置図（文献 157）

筑前 R44 石崎曲り田遺跡

郡名 怡土郡  
種別 平地城館

図幅名 前原(西)  
所在 糸島市二丈石崎

【位置】一貴山川と荒巻川に挟まれた石崎の標高 8 m の低丘陵上に位置する。縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡として名高い遺跡であるが、中世遺構が検出された 3 次調査区は、縄文～弥生時代の遺構が検出された 1 次調査区の北側にあたる。

【概要】3 次調査IV区は、丘陵の西側裾部にあたる箇所で、南北約 60m、東西約 30m の範囲の発掘調査を行い、併せて 3 層の遺構面が確認された。その内、最上層において関連遺構が検出された。調査区の南側において、東西に道路状遺構が検出され、それに並行するように東西 15m 以上、南北約 10m の直角に折れる区画溝が検出された。溝は幅 0.6m と狭いものの、深さは約 1.2m もある。区画の内部からは掘立柱建物 1 棟の他、多数の柱穴群が検出された。

また、区画外からも多数の柱穴群と共に、部分的に区画溝なども検出された。これらは溝の出土遺物から 12 世紀後半頃のものとみられる。

なお、下層では、古墳時代の竪穴住居の他、8～9 世紀代の掘立柱建物、鍛冶遺構、井戸などが検出され、邢窯系白磁、越州窯系青磁、製塙土器、墨書き土器、刻書き土器などが出土した。調査区内で検出された道路状遺構が古代「西海道」の官道とみられており、「深江駅家」などの古代交通関連の遺跡とみられている。

【参考文献】153



第381図 石崎曲り田遺跡3次調査IV区上層遺構平面図（文献153）

筑前 R43 木舟・三本松遺跡

郡名 怡土郡  
種別 平地城館

図幅名 前原(西)  
所在 糸島市二丈深江

【位置】一貴山川の西岸、標高 2m の沖積地上に位置する。北東約 500m には木舟の森遺跡が所在する微高地がある。

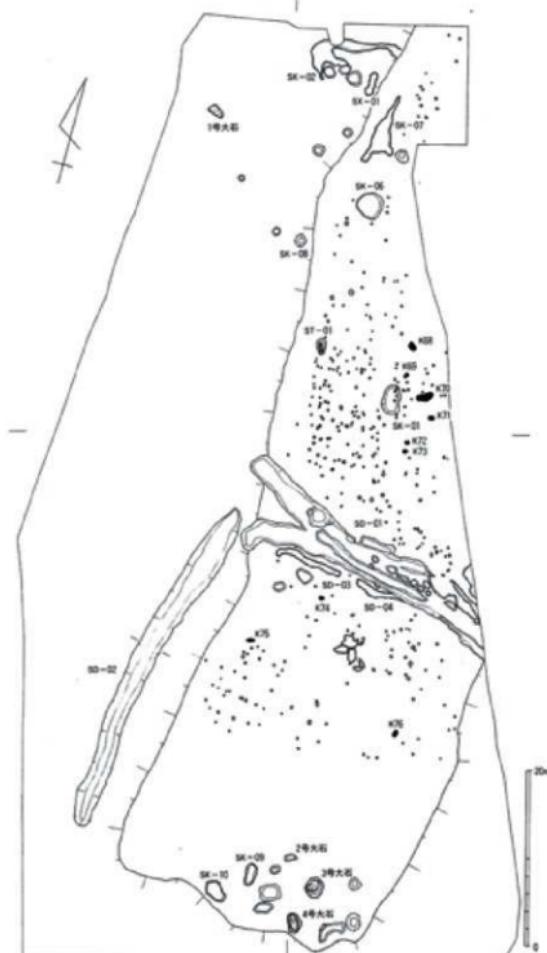
【概要】木舟・三本松遺跡では 3 次にわたる調査が行われており、中世城館関連遺跡は 3 次調査区で検出されている。調査区南側において東西 36m、南北 40m の方形区画が検出され、北側と西側に溝が巡っていた。

溝は幅 3.5 ~ 4.5m と広いが、深さは 0.5m 程度と浅い。区画の東側と南側には溝は見られないが、一段下がっており、明確に方形区画の意識があったものとみられる。

区画内部からは小さな柱穴群が見つかり、明確ではないが、小規模な掘立柱建物があったものとみられる。溝などからの出土遺物は白磁、高麗産無釉陶器など、11 世紀後半～12 世紀初頭に位置づけられ、遺跡の活動時期を示している。

区画の北側も明確な溝は見られないが、微高地となつており、柱穴群や完形の白磁碗を副葬した木棺墓なども見つかっている。

【参考文献】151,152



第 382 図 木舟・三本松遺跡 3 次調査遺構配置図 (文献 152)

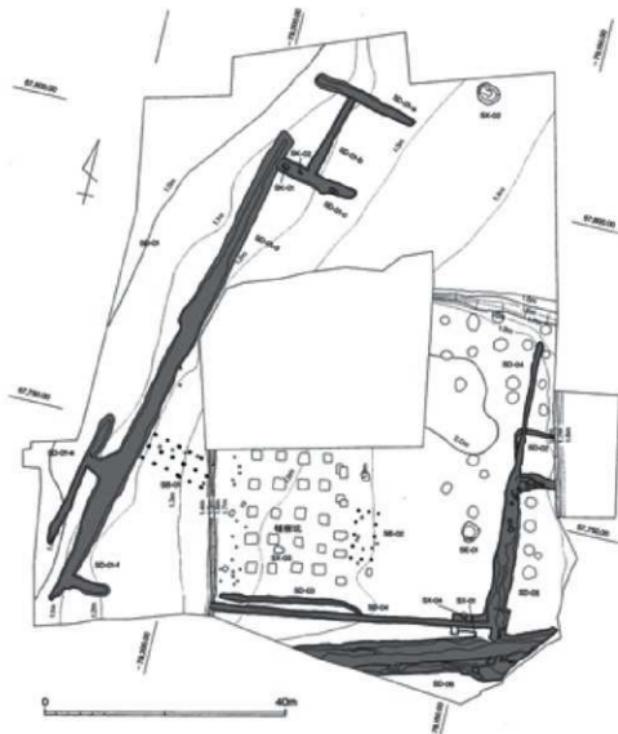
【位置】二丈岳から流れる一貴山川による標高1～2mの沖積地に位置する。周囲は一面の水田地帯であるが、遺跡の場所は古くより「木舟の森」と呼ばれ、鬱蒼とした木立の中に小さな祠が建てられ、神聖視されていた場所である。

【概要】東西約80m、南北約80mの範囲が調査され、調査区内からは直線的な溝や、直角に屈曲する溝など合わせて6本が検出された。溝の方向軸が調査区の東側と西側で異なっているため、全体的な平面プランを推測することは困難で、調査区の東側に本体部分があるのではないかとみられている。溝の幅は1～3m、深さは1m前後で、溝の中からは多くの土師器丸底杯・小皿や瓦器椀、玉縁を持つ白磁碗、同安窯系青磁皿・碗、龍泉窯系劃花文青磁碗が出土した。そして区画の内側と思われる箇所からは

掘立柱建物2棟が検出され、屋敷地であると想定される。

出土遺物から12世紀初頭～後半と考えられる。糸島半島の西側の付け根にあたり、かつて入り江になっていた海岸近くに所在することから、平氏政権がかかわった交易施設に関する居館ではないかと類推されている。

#### 【参考文献】150



第383図 木舟の森遺跡遺構平面図（文献150）

【位置】早良郡と怡土・志摩郡とを分かつ長垂丘陵の西、高祖山から北へ延びる標高 10m の丘陵先端部に位置する。

【概要】国史跡今宿大塚古墳の北側を中心に広がる大塚遺跡は過去に 20 次近くの調査が行われ、弥生・古墳・古代の遺跡と共に、戦国時代の居館群の遺構が検出されている。

特に古墳の北側を調査した 17 次調査では、南北約 30m 、東西約 15m の溝に囲まれた長方形区画が少なくとも 5 面、東西に並列して検出されている。さらに周囲にも方形区画があり、併せて 10 区画程度が想定されている。取り囲む溝は、隣り合う区画で共有するのではなく、各々溝を有しており、溝と溝の間は通路のような役割を果たしていたものとみられる。

これらの区画の中で中心的なものは区画 F で、大型建物や唯一の石組井戸の他、東南隅に陸橋部と 1 間 × 1 間の門遺構が構えられている。これらの遺構群は



第 384 図 大塚遺跡遺構配置図（文献 164）

南北 260m 、東西 130m の範囲にわたる。概ね 16 世紀代だが、主体は 16 世紀前半である。鉄砲玉であろう鉛玉も出土しており、武家の屋敷群とみられ、高祖城の原田氏との関連が指摘されている。

【参考文献】160,163,164

【位置】高祖山東麓から流れ出る七寺川の西岸、標高8mの平地に位置する。

【概要】青木遺跡は過去4次の調査が行われ、2次調査と4次調査において明確に関連遺構が検出されている。

今宿バイパスの南側にあたる2次調査区では、約40m四方の範囲の発掘調査が行われ、南北約40m、東西30m以上の溝に囲まれた方形区画が検出された。区画の中からは1間×1~3間の小型の掘立柱建物群が見つかっている。区画する溝は幅4mで、東側は検出されていないが、地形上、そのまま谷へ流れ込んでいたものと思われる。また、調査区西側の南北溝は、断面がV字形で幅約1m、深さは約1mである。溝の西側からも掘立柱建物が検出されており、西側にも方形区画が存在する可能性が考えられる。時期は概ね12世紀である。

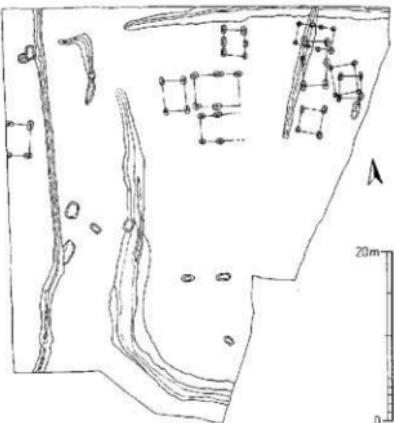
なお、2次調査区の北側にあたる1次調査区においても概ね13世紀頃と想定される掘立柱建物群が多く検出されている。それと併せて区画溝とも想定できるL字形の溝も複数検出されているが、掘立柱建物群と併存するか否かは不明である。

1次調査の西側の4次調査区では、東西約30m、南北10mの範囲を調査し、掘立柱建物8棟と東西方向、南北方向の区画溝が検出された。時期は16世紀後半~18世紀まで、溝は概ね18世紀代までに埋没するが、調査区西側の南北溝だけは18世紀以降に掘り直されている。中世末から近世にかけての集落の変遷を示しているものと思われる。

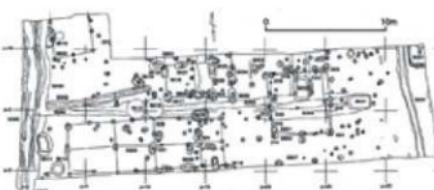
【参考文献】159,161,162



第385図 青木遺跡調査地位置図（文献162）



第386図 青木遺跡2次調査区中世遺構配置図（文献161）



第387図 青木遺跡4次調査遺構配置図（文献162）

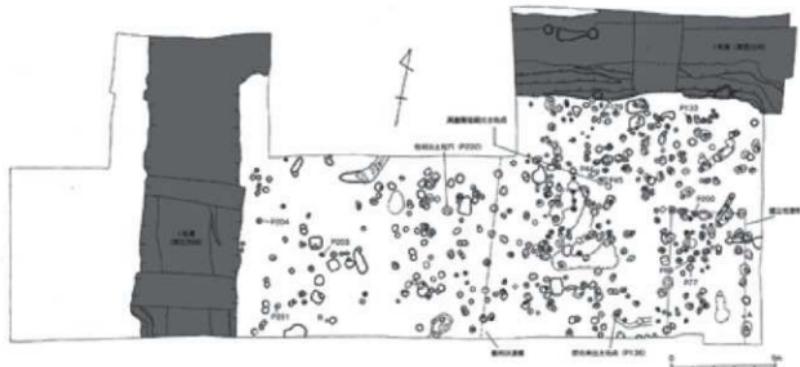
筑前 R49	いけだいだいせき 池田井田遺跡	郡名 志摩郡	図幅名 前原(東)
		種別 平地城館	所在 糸島市波多江駅南1丁目

【位置】瑞梅寺川と雷山川に挟まれた標高 8 m の低地に位置する。

【概要】東西約 20m、南北約 10m の範囲を調査したところ、L 字形の溝を検出した。溝の幅 4.5m、深さは約 2 m と大きい。北西隅部と共に南北方向 14.5m、東西方向 13.8m 分を検出した。溝の内側からは多数の掘立柱建物や柵が検出された。出土遺物は 14 ~ 15 世紀の土師器と共に、高麗産の象嵌青磁碗なども出土していて、館が営まれた時期も概ねその頃に位置づけられる。

地誌類には当該遺跡の館の記載は見られないが、波多江一族の池田氏の居館ではないかとも考えられている。また、この調査では北西隅しか検出されていないが、南東側の産宮神社には土壘状遺構が残存するとも言われており、それを区画の東限とした場合、一辺約 100m の規模を有することとなるが、明確には今後の調査次第である。

#### 【参考文献】166



第 388 図 池田井田遺跡遺構配置図（文献 166）

筑前 R50	うろふるやしきせき 潤古屋敷遺跡	郡名 志摩郡	図幅名 前原(東)
		種別 平地城館	所在 糸島市潤

【位置】雷山川西岸、標高 4 m の低地に位置する。

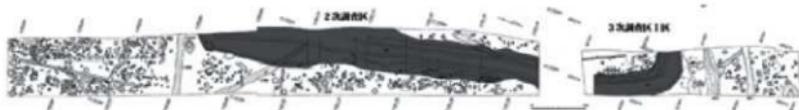
【概要】潤古屋敷遺跡は過去、3 回の調査が行われており、2 次調査と 3 次調査 1 区において、方形区画を囲むと想定される大溝が検出されている。方形区画は一辺約 90 ~ 100m の規模を有し、発掘調査では、東辺部分にあたる箇所の調査が行われ、大溝遺構の東辺部がほぼ調査がなされる形となった。大溝は幅 7 m、深さ 1.2 m を有し、断面は緩やかな V 字形を呈している。溝の下層からは 14 世紀を下限とする遺物が出土しており、溝の機能した時期を示しているものと思われる。上層からは 17 世紀を下限とする遺物が出土しており、15 世紀代に屋敷地が廢絶後、近世初頭に最終的に溝が埋没したものとみられる。

区画の内部はほとんど調査区に入っていないため、明確な遺構は確認できていないが、溝に沿つ

た小面積の中にも多数の柱穴群があり、屋敷地が展開しているものとみられる。

また、潤古屋敷遺跡の南側の潤番田遺跡でも調査区が細いために明確なプランは不明であるが、方形区画を画するような多数の溝やそれに付随する井戸や建物、さらには高麗青磁の陶枕など、希少な陶器も出土している。東隣の潤地頭給遺跡は、古墳時代の大規模玉作工房が検出された遺跡として有名だが、ここでも敷地を囲うと目される東西溝が検出されているが、全体的なプランは不明なままである。今後の調査の進展により、潤地区においてさらに城館関連遺跡が明確になっていくものと思われる。

【参考文献】167,168



第389図 潤古屋敷遺跡遺構配置図（文献167・168掲載図を一部改変して事務局作成）

筑前 R51	はたえいせき	郡名 志摩郡	図幅名 前原(東)
	波多江遺跡	種別 平地城館	所在 糸島市波多江

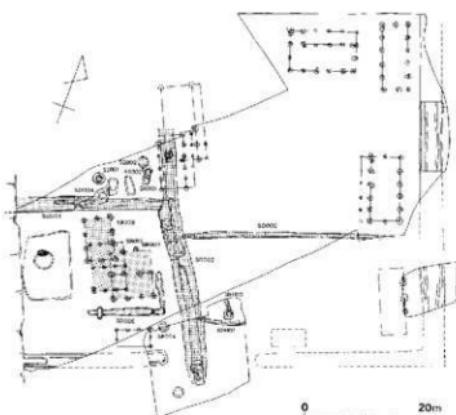
【位置】波多江の本村の集落の南、丹波屋敷の南に隣接する標高13mの沖積地上に位置する。

【概要】発掘調査では9世紀の遺構と16～17世紀の遺構に二分された。

9世紀代には、一辺60m以上の方形区画が想定され、その周囲を幅3.5～4m、深さ0.6mの溝に囲まれており、区画の方向に並行して掘立柱建物が検出された。その他、竪穴住居、井戸なども見つかっており、公的な官衙か豪族居館が想定できるのではないだろうか。

一方、戦国期の遺構としては、現状の地割（条里地割の中の小地割）の境と同一の場所に、南北、東西方向に溝が検出され、溝に囲まれた区画内部に掘立柱建物や井戸が検出された。短辺20mほどの小さな区画が複数並列すると想定される。北側に隣接する丹波屋敷に付随する武家屋敷あるいは町家などが想定されるのではなかろうか。溝からは16世紀の明の染付から17世紀の唐津焼・肥前陶磁なども出土しており、その頃の時期が屋敷の活動時期を示していると思われる。

【参考文献】158



第390図 波多江遺跡遺構配置図（アミカケ部は中世後半期・文献158）

筑前 R52 木藤丸遺跡

きふじまるいせき

郡名 志摩郡

種別 平地城館

図幅名 前原(西) / 宮浦(西)

所在 糸島市志摩稻留

【位置】志摩半島の可也山と火山に挟まれた初川北側、標高 14m の低台地上に位置する。

【概要】東西約 25m、南北約 30m の範囲の発掘調査が行われ、調査区内を取り囲むように、直角に折れる区画溝が検出され、区画内部からは掘立柱建物を構成すると思われる柱穴群が検出された。屈曲する溝 (SD03) は幅約 1m、深さは 0.6 ~ 1m で、溝の埋土は概ね単層であることから、人為的に埋め戻した可能性が指摘されている。しかし一部では明らかに別の埋土で部分的に溝を埋めていることから、北側に陸橋部があった可能性も考えられている。方形区画の大きさは南北 30m 以上、東西 20m 以上で、西側と南側は検出されていないため、全体の様相は不明である。出土遺物は洪武通宝の他、15世紀代の土師器が溝から出土しており、概ね活動時期を示している。

【参考文献】165



第 391 図 木藤丸遺跡遺構配置図（文献 165）

VI 城館閥連文献史料一覽

は、本筋の筋肉群が、筋肉の収縮によって、骨格を動かす力（運動力）を発揮する。筋肉の収縮には、筋肉の構成要素である筋線維の収縮によるものと、筋膜の収縮によるものがある。筋膜の収縮による筋肉の運動は、筋肉の構成要素である筋線維の収縮によるものと、筋膜の収縮によるものがある。

年月日	被験者名	性別	被験者現状		発見日	発見場所	発見時
			年齢	性別			
文政4年1月17日 黒田水道	黒田水道	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	文政4年1月17日 黒田水道	黒田水道	午後
文政4年1月17日 黒田水道	黒田水道	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	文政4年1月17日 黒田水道	黒田水道	午後
文政4年1月26日 黒田水道	黒田水道	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	文政4年1月26日 黒田水道	黒田水道	午後
文政4年1月27日 黒田水道	黒田水道	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	文政4年1月27日 黒田水道	黒田水道	午後
(3) (癡呆) 黒田長義	黒田長義	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	(3) (癡呆) 黒田長義	黒田水道	午後
(4) (癡呆) 黒田長義	黒田長義	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	(4) (癡呆) 黒田長義	黒田水道	午後
(5) (癡呆) 黒田長義	黒田長義	男	生野原高畠高見草 中[79]	中[79]	(5) (癡呆) 黒田長義	黒田水道	午後
参考元 元和2年1月 元和2年6月13日	元和2年6月13日	江戸幕府老中通音を察	黒田家文書「黒田家文書」P94、黒田家文書「黒田家文書」P49	江戸幕府老中通音を察	黒田家文書「黒田家文書」P94、黒田家文書「黒田家文書」P49	黒田真守守(毛利重良)	午後
元和5年11月6日 黒田高畠草状	黒田高畠草状	元和5年11月6日 黒田高畠草状	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田五郎助(毛利重良)	午後	元和5年11月6日 黒田高畠草状
(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状	黒田高畠草状	(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田五郎助(毛利重良)	午後	(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状
(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状	黒田高畠草状	(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田五郎助(毛利重良)	午後	(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状
(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状	黒田高畠草状	(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田五郎助(毛利重良)	午後	(1) (天正14年)10月16日 黒田高畠草状
(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状	黒田高畠草状	(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田家文書「吉田家文書」P95、吉田家文書「吉田家文書」P96	吉田五郎助(毛利重良)	午後	(2) (天正15年)4月 黒田高畠草状
参考元 元和2年6月13日	元和2年6月13日	朝注山城	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	参考元 元和2年6月13日
(1) 文政10年10月9日 朝注山城	朝注山城	(1) 文政10年10月9日 朝注山城	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(1) 文政10年10月9日 朝注山城
(2) (水保2年)7月16日 朝注山城	朝注山城	(2) (水保2年)7月16日 朝注山城	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(2) (水保2年)7月16日 朝注山城
(3) (水保2年)7月16日 朝注山城	朝注山城	(3) (水保2年)7月16日 朝注山城	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(3) (水保2年)7月16日 朝注山城
(4) (水保2年)7月16日 朝注山城	朝注山城	(4) (水保2年)7月16日 朝注山城	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(4) (水保2年)7月16日 朝注山城
(5) (天正14年)10月4日 黒田孝次等書状	黒田孝次等書状	(5) (天正14年)10月4日 黒田孝次等書状	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(5) (天正14年)10月4日 黒田孝次等書状
(6) (天正14年)10月16日 黒田孝次等書状	黒田孝次等書状	(6) (天正14年)10月16日 黒田孝次等書状	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	参考元 元和2年6月13日	午後	(6) (天正14年)10月16日 黒田孝次等書状





No.	名前	性別	年月日	遺體	史料題名・副題・著者	出	史料題名・副題・著者	出	内 容
263	井岸誠	(2)	(昭和26年)1月19日	示禁兵正直者著者著手	令官署守御所 外古高畠三河 貢質	占部在支助 占部在支助	天文24(弘治元年、占部朝持が計画)をもととする 天文24(弘治元年、占部朝持が計画)をもととする		
	参考	近松(49)		占部守正臣	占部文書「近松守正臣」		占部安能、占部守正臣の死後岳に立つ。		
	参考	近松(31-27)		占部守正臣	占部文書「近松守正臣」		占部安能、占部守正臣の死後岳に立つ。		
	参考	近松(4)18-19		占部守正臣	占部文書「近松守正臣」		占部安能、占部守正臣の死後岳に立つ。		
(3)	(昭和3年)3月29日			毛利晴元・元就通源死	〔示禁兵正臣〕 〔毛利晴元〕 〔毛利晴元〕 〔毛利晴元〕	占部守正臣	4月18-19日「許慶山」跡の対応をすすめます。		
	参考	近松(10)10日		占部守正臣	占部文書「近松守正臣」		許慶山氏・姫・占部守正臣夫婦を守護する。		
(4)	(承和1)6月28日			大友義統死状	〔示禁兵正臣〕 〔大友義統〕	占部守正臣	〔示禁兵正臣〕はもじる占部守正臣夫婦を守護する。		
(5)	(承和1)3月17日			斯・吉備守宣頼死(天正6年6月1日)	〔示禁兵正臣〕 〔吉備守宣頼〕	占部守正臣	〔示禁兵正臣〕はもじる占部守正臣夫婦を守護する。		
(6)	(承和3年)8-9月			示禁兵正臣食住注	〔示禁兵正臣〕 〔毛利晴元〕 〔毛利晴元〕	占部守正臣	〔示禁兵正臣〕はもじる占部守正臣夫婦を守護する。		
(7)	(承和4年)4月1日			示禁兵正臣資通状	〔示禁兵正臣〕 〔毛利晴元〕	占部守正臣	3月28日「許慶善等改めての対応を實す。」		
(8)	(承和4年)5月28日			毛利晴元・元就通源死状	〔示禁兵正臣〕 〔毛利晴元〕 〔毛利晴元〕	占部守正臣	3月28日「許慶善等改めての対応を實す。」		
(10)				示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕 〔毛利晴元〕 〔毛利晴元〕	占部守正臣	3月28日「許慶善等改めての対応を實す。」		
	参考	承和4年8月16日		示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	戸次連通ら、「示禁兵正臣の白山城」が示禁営帳「吉備の里城」を实証する。		
(11)	(承和4年)8月23日			天正4年半邊通手手	〔示禁兵正臣〕	大友氏・主兵・野寺守	大友氏、「許慶善等改めての対応を實す。」		
(12)	承和24年			斯・吉備守宣頼死(天正6年6月1日)	〔示禁兵正臣〕 〔吉備守宣頼〕	毛利利長・若翁	毛利利長、「許慶善等改めての対応を實す。」		
	参考	(承和11年)4月26日		示禁兵正臣死状	〔示禁兵正臣〕	天正6年4月14日「戸次連通等の原団目」「吉備守宣頼」、大友氏「吉備守宣頼へ通す」、杉原正臣「吉備守宣頼へ通す」。吉備守宣頼の死をもとめます。	戸次連通等、吉備守宣頼の死をもとめます。		
264	吉原延輔			示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕 〔吉原延輔〕	吉原延輔	戸次連通ら、「示禁兵正臣の白山城」が示禁営帳「吉備の里城」を实証する。		
	参考(2)	(承和3年)1月19日		示禁兵正臣死状	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月17日の大友勢による「吉備城」攻撃の軍勢を實す。		
(2)				示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月17日の大友勢による「吉備城」攻撃の軍勢を實す。		
(3)	承和4年8月20日			示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月17日の大友勢による「吉備城」攻撃の軍勢を實す。		
(4)	承和4年8月23日			示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月17日の大友勢による「吉備城」攻撃の軍勢を實す。		
(5)	(承和4年)3月20日			示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月17日の大友勢による「吉備城」攻撃の軍勢を實す。		
(6)	(承和4年)4月1日			大友義統死状	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	8月14日の「吉備の里城」攻撃ににおける吉備の軍勢を實す。		
(7)	(承和4年)10月20日			示禁兵正臣死状	〔示禁兵正臣〕	占部守正臣	9月16日の大友勢による「吉備城」攻撃ににおける吉備の軍勢を實す。		
(8)	(承和4年)10月20日			立毛虎丸・久政通首状	〔立毛虎丸〕 〔久政通〕	立毛虎丸・久政通	3月16日の「吉備口防禦」の軍勢、おもむりて四、五年は來の」忠勤を實す。		
(9)	(承和4年)10月20日			立毛虎丸・久政通首状	〔立毛虎丸〕 〔久政通〕	立毛虎丸・久政通	3月16日の「吉備口防禦」の軍勢を實す。		
(10)				示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	示禁兵正臣	3月16日の「吉備口防禦」の軍勢を實す。		
270	吉原延輔			示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	吉原延輔	空氣動力研究所可視・UV-C感度の測定結果、「吉備守・吉備守・吉備守・吉備守」を立毛虎丸・久政通の「吉備の里城」攻撃に立てる。		
	参考(1)	(承和4年)3月11日		示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	示禁兵正臣	3月11日「吉原延輔」、立毛虎丸・久政通の「吉備の里城」攻撃に対する吉備の軍勢を實す。		
(2)				示禁兵正臣	〔示禁兵正臣〕	示禁兵正臣	3月11日「吉原延輔」、立毛虎丸・久政通の「吉備の里城」攻撃に対する吉備の軍勢を實す。		





No.	名稱	枚数	年月日	整理者番号	整理者番号	整理者番号	整理者番号
283	馬鹿城	(53)	嘉定嘉定 1274	馬野文書86 /「編類別史 資料編 中世1」 P27	馬野文書86 /「編類別史 資料編 中世1」 P27	馬野文書86 /「馬野文書弘」 P27	馬野文書86 /「馬野文書弘」 P27
(54)	(天正14年)9月15日	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状
(55)	新納山元寇状						
(56)	天正14年9月21日	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状
(57)	高津城入城状						
(58)	(天正14年)10月3日	鷹臣高麗状	鷹臣高麗状	鷹臣高麗状	鷹臣高麗状	鷹臣高麗状	鷹臣高麗状
(59)	立花文書117 /「鶴川山史 安井編5 近代文書(前)」P266						
(60)	鷹臣高麗状						
(61)	(天正14年)10月11日	高津三高麗状	高津三高麗状	高津三高麗状	高津三高麗状	高津三高麗状	高津三高麗状
(62)	(天正14年)9月21日	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状	鳥津城入城状
(63)	(永正14年)9月15日	馬津城入城状	馬津城入城状	馬津城入城状	馬津城入城状	馬津城入城状	馬津城入城状
(64)	参考 (年 日本経)	重慶城代官三人數	重慶城代官三人數	重慶城代官三人數	重慶城代官三人數	重慶城代官三人數	重慶城代官三人數
(65)	(嘉慶20年)8月19日	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状
(66)	(永禄3年)12月19日	小早川廣景・吉川定兼書状	小早川廣景・吉川定兼書状	小早川廣景・吉川定兼書状	小早川廣景・吉川定兼書状	小早川廣景・吉川定兼書状	小早川廣景・吉川定兼書状
(67)	門司朝敵軍状						
(68)	貞徳院4月4日						
(69)	(承和5年)5月20日	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。
(70)	(承和6年)8月1日	細川忠長の上洛	細川忠長の上洛	細川忠長の上洛	細川忠長の上洛	細川忠長の上洛	細川忠長の上洛
(71)	(承和3年)7月8日	細川忠長之御状	細川忠長之御状	細川忠長之御状	細川忠長之御状	細川忠長之御状	細川忠長之御状
(72)	(承和3年)7月16日	細川忠長御状	細川忠長御状	細川忠長御状	細川忠長御状	細川忠長御状	細川忠長御状
(73)	大友氏の立花城を攻め滅ぼす。						
(74)	参考 実業中、文安2年8月						
(75)	(承和6年)12月1日	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状
(76)	承和17年1月12日	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状
(77)	(承和17年)2月14日	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状
(78)	承和17年2月22日	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状
(79)	(承和6年)5月21日	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状	田原城追廻行廻状
(80)	(承和6年)5月30日	大友氏の立花城	大友氏の立花城	大友氏の立花城	大友氏の立花城	大友氏の立花城	大友氏の立花城
(81)	立花文書7 /「編類別史 資料編 中世2」 P194						
(82)	立花文書7 /「編類別史 資料編 中世2」 P227						
(83)	立花文書7 /「編類別史 資料編 中世2」 P228						
(84)	参考 大友氏の立花城を攻め滅ぼす。						
(85)	(承和6年)5月31日	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状
(86)	(承和6年)6月19日	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状	大内家内裏書状
(87)	参考 大友氏の立花城を攻め滅ぼす。						



No.	地名	社号	年月日	本山忠教見次序	範囲	史跡名・遺跡名	出典	提出	備考	内書		
										(大正末期)	(平成初期)	
292	立花山城	(45)	令和11年7月9日	大矢宗綱著状	小野文部(中野ノ原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	同上、出石市家業書記(原)の写し。				
			令和11年7月17日	大矢宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	前日の立花宗綱著状に「矢忠を貰ひ、遂にかかひ先祖御神等」を記して、「後山之事」第1回第2章第1節「矢忠を貰ひ、遂にかかひ先祖御神等」を記す。				
			(46)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	前日の立花宗綱著状第2回第1節「矢忠を貰ひ、遂にかかひ先祖御神等」を記す。				
			(47)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	この年の立花宗綱著状(原)第1回「西城」における父矢忠の死の事を記す。				
			(48)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	この年の立花宗綱著状(原)第1回「西城」防衛における忠忠を賞す。				
			(49)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	古弘麻理・吉水義清による立花宗綱著状、「前田家」を賣す。(佐々木地圖)				
			(50)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	吉水義清・古弘麻理による立花宗綱著状、「前田家」を賣す。				
			(51)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	戸次伯耆守延喜院				
			(52)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	同上、立花文部(原)の写し。				
			(53)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	毛利氏・安芸守より立花宗綱へ一族を承認する。				
			(54)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	前田直義が改姓した1515年以來の承認あり、日田右近直義に於ての「手当の立花宗綱著状」に「立花宗綱も改姓せし者也」と記す。			
			(55)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	飯田義綱の立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋				
			(56)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(57)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	毛利氏・安芸守より立花宗綱へ一族を承認する。				
			(58)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	毛利氏・安芸守より立花宗綱へ一族を承認する。			
			(59)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(60)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(61)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(62)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(63)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(64)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(65)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(66)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(67)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(68)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(69)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(70)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(71)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			
			(72)	立花宗綱著状	大矢宗綱著状	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋	立花宗綱著状(原) / (原)出石市 安井屋			



No.	名前	性別	毎日	見出	説明
292	立石山彌 (101)	男	(水海24)10月25日 (水海24)10月25日	小早川豊喜 小早川豊喜	新家文書「福原山中」資料編 中世125 P780
	(水海24)10月25日	天女	天女	天女	天女
	(102)			天女	天女
	(103)		天女	天女	天女
	(104)		天女	天女	天女
	(105)		天女	天女	天女
	(106)		天女	天女	天女
	(107)		天女	天女	天女
	(108)		天女	天女	天女
	(109)		天女	天女	天女
	(110)		天女	天女	天女
	(111)		天女	天女	天女
	(112)		天女	天女	天女
	(113)		天女	天女	天女
	(114)		天女	天女	天女
	(115)		天女	天女	天女
	(116)		天女	天女	天女
	(117)		天女	天女	天女
	(118)		天女	天女	天女
	(119)		天女	天女	天女
	(120)		天女	天女	天女
	(121)		天女	天女	天女
	(122)		天女	天女	天女
	(123)		天女	天女	天女
	(124)		天女	天女	天女
	(125)		天女	天女	天女
	(126)		天女	天女	天女

No.	名前	年月日	長さ	表面状況		発見者	発見場所	発見年月日
				天文	大友			
292	立花山城	(天文20年2月1日)	天文	天文磨滅状	天文	天文	田代五郎助	天和5年正月 立花山城に在城して出陣をし、立花山に在城して出陣をし、そ の後方に立花山城へ入ることと伝える。
(127)								
(128)	戸畠400年10月日		小豆川陥落状					
(129)	(天文)4月27日		戸畠越過状					
(130)	(天文)9月1日							
(131)	(天文)9月18日		戸畠越過状					
(132)	(天文)9月18日		戸畠越過状					
(133)	正月3日							
(134)	正月4日3日							
(135)	(天文)3月10日		天友城跡・鶴間通					
(136)								
(137)	正月5月26日		戸畠越過状					
(138)	(天文)3月6月16日		天友城跡・鶴間通					
(139)	(天文)8月18日		小豆川陥落状					
(140)	(天文)7月5月1日		天友城跡					
(141)								
(142)								
(143)								
(144)								
(145)	(天文)9月3日							
(146)								
(147)								
(148)								
(149)								
(150)	(天文)8月2月1日		天友城跡					
(151)	(天文)8月7月25日		天友城跡					
(152)	(天文)8月11月27日		天友城跡					
(153)	(天文)8月11月28日		天友城跡					
(154)								
(155)								
(156)	(天文)9月2日		天友城跡					













No.	名前	性別	年月日	受付番号	登録	提出	提出者	内書
329	高田誠	(女)	〔文政2年8月3日〕	少次郎顕感状字	〔少次郎顕感状字〕	高次郎顕感状字(正)	高次郎顕感状字(正)	前年9月30日 是利傳氏が「少次郎顕を攻撃した際、影響の定期を貰う。」
(2)	(文政16年6月26日)	野近源一忠状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	前年9月30日 是利傳氏が「少次郎顕を攻撃して、而して少次郎顕を所持する。」
(3)	大和(16年9月5日)	大内義久下文	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	前年9月30日 是利傳氏が「少次郎顕を攻撃して、而して少次郎顕を所持する。」
(4)	〔文政16年10月13日〕	大内義久下文	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	前年9月30日 是利傳氏が「少次郎顕を攻撃して、而して少次郎顕を所持する。」
参考	〔文政16年1月〕							
(5)	〔文政5年6月21日〕	大内義久官途詔伏状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(6)	大内氏忠行人通事番書	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(7)	〔永文8年9月27日〕	大内氏忠行人通事番客	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(8)	〔享和4年10月19日〕	杉原良忠状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(9)	〔享和4年11月20日〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(10)	〔天文7年8月22日〕	杉原良忠状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(11)	〔天文22年4月17日〕	王九郎手注文	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(12)	〔天文22年4月18日〕	毛利氏広感状字	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(13)	〔天文22年4月24日〕	宗家次郎顕感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(14)	〔天文22年4月6日〕	梶原利顕感状字	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(15)	〔天文22年4月17日〕	参考	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(16)	〔天文22年7月27日〕	大内義久感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(17)	〔天文22年7月17日〕	大内氏忠行人通事番書	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(18)	〔天文22年11月4日〕	弘中義兼感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(19)	〔天文22年11月10日〕	大内氏忠行人通事番客	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(20)	〔天文22年11月15日〕	矢野英輔感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(21)	〔天文22年11月20日〕	鷹野英輔感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(22)	〔天文22年11月27日〕	原田信重感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(23)	〔天文22年12月3日〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(24)	〔天文22年12月10日〕	参考	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(25)	〔天文22年12月15日〕	参考	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(26)	〔天文22年12月20日〕	毛利元蕃感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(27)	〔天文22年12月26日〕	豊臣秀吉感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(28)	〔天正14年1月1日〕	参考	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(29)	〔天正14年1月10日〕	毛利元蕃感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(30)	〔天正14年1月20日〕	豊臣秀吉感状	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕
(31)	〔天正14年1月27日〕	参考	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔少次郎顕感状字〕	〔高次郎顕感状字〕

No.	名稱	枚数	年月日	著者	書類	著出	歴史
329	高岡城	(25)	天正16年8月12日	豊臣秀吉美印狀	小早川文政「高岡市本占文書」11-1「豊臣秀吉」	元忠原傳代「小早川文政」のへ P181 P065	原田信綱を肥後に、城十郎太左衛門・信蕃を箕輪に移す。
		(26)	(天正)8月27日	高岡別状	「高岡市本占文書」11-1「高岡別状」	元忠原傳代「小早川文政」のへ P065	敵方の高祖、安東守宗政の恩を報す。
		(27)	(天正)9月10日(16)	高岡別状	「高岡市本占文書」11-1「高岡別状」	元忠原傳代「小早川文政」のへ P065	「高岡市本占文書」に記載の事で、あくまでも「高岡別状」。
		(28)	天正16年6月4日	戸次連絡状	「戸次連絡状」	元忠原傳代「小早川文政」のへ P065	三井義昌の「戸次連絡状」に記載の事で、あくまでも「戸次連絡状」。
334	尼山城	(1)	(天文)15年6月4日	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主家臣」	尼山城主家臣「尼山城主」のへ P181 P065
336	尼山城主家臣	(1)	文永11年1月	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065
		(2)	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065	
342	二又山城	(2)	(天文)19年5月	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065
344	尼山城	(1)	(天文)11年1月18日	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065
		(2)	(天文)10月22日	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065
		(3)	(天文)12月27日	尼山城主家臣	尼山城主家臣「大日本定」	元忠原傳代「尼山城主」のへ P181 P065	「尼山城主」のへ P181 P065
346	南子岳城	(1)	(天文)20年3月19日	日赤通牒行跡状	日赤通牒行跡状	元忠原傳代「日赤通牒行跡状」	「当時、屋敷・施設所等における軍忠親王、天満御内を守る間に、
		(2)	天文20年7月11日	地主領兵攻撃状	地主領兵攻撃状	元忠原傳代「地主領兵攻撃状」	「当時、屋敷・施設所等における軍忠親王、源氏公会を守る間に、
		(3)	天文20年7月24日	三井以下下三条家連署	三井以下下三条家連署	元忠原傳代「三井以下下三条家連署」	「好子」屋敷などにおける記録を真し、局名の内町頭に記す。
		(4)	天文20年7月26日	地主領兵攻撃状	地主領兵攻撃状	元忠原傳代「地主領兵攻撃状」	「好子」屋敷を真し、貴重の御跡等跡所の記録が13件ある。
		(5)	天文20年7月26日	地主領兵攻撃状	地主領兵攻撃状	元忠原傳代「地主領兵攻撃状」	「好子」屋敷を真し、貴重の御跡等跡所の記録が13件ある。
		(6)	天文20年7月26日	地主領兵攻撃状	地主領兵攻撃状	元忠原傳代「地主領兵攻撃状」	「好子」屋敷を真し、貴重の御跡等跡所の記録が13件ある。
		(7)	天文20年7月26日	地主領兵攻撃状	地主領兵攻撃状	元忠原傳代「地主領兵攻撃状」	「好子」屋敷を真し、貴重の御跡等跡所の記録が13件ある。
		(8)	天文20年9月26日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「当時、屋敷・施設所等における軍忠親王、『宝珠』平賀兼能番に移す。
		(9)	天文20年9月29日	原了実行跡行跡状	原了実行跡行跡状	元忠原傳代「原了実行跡行跡状」	「志摩郡山田に移りした行跡を真し、御跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(10)	(天文)20年5月28日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(11)	天文20年6月10日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(12)	天文20年6月10日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(13)	(天文)20年11月27日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(14)	(天文)20年11月28日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(15)	天文20年11月29日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
		(16)	天文20年11月29日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	「行跡を真し、志摩・高月の内町頭に記す。
鷹考	(天文)8年9月	(17)	(天文)8年4月16日	赤木連絡行跡行跡状	赤木連絡行跡行跡状	元忠原傳代「赤木連絡行跡行跡状」	赤木連絡行跡行跡状、前前記を切り更々、西野・奥・河野・伊予・松坂・高野等の領二等得を置く。
		(18)	(天文)8年9月11日	赤木連絡状	赤木連絡状	元忠原傳代「赤木連絡状」	赤木連絡行跡行跡状の「好土田」入城を以て、如何を切る。
		(19)	(天文)8年7月6日	大友連絡状	大友連絡状	元忠原傳代「大友連絡状」	木木松美の「好土田」に置いた着どもの懸念に對し、断続を記述。
		(20)	(天文)8年10月6日	某事書	某事書	元忠原傳代「某事書」	去年の「好土田」の懸念における忠を質す。
		(21)	(天文)8年10月6日	某事書	某事書	元忠原傳代「某事書」	佐野連絡行跡品目を下城する點に、義詮の忠於である事が博多港で發見したことを質す。
349	水崎城	(1)	(天文)7年1月20日	大友連絡行跡状	大友連絡行跡状	元忠原傳代「大友連絡行跡状」	「荒川御内における忠を質す。」



No.	名稱	社番	年月日	範囲	提出	異文
N.8	地方論議	(8)	大正9年9月 (9) (8月月末)	滋賀県高島市中野町口原集落	高田日記〔正文又節〕/〔付〕方志史資料	古間宗益(高方志史資料)の手本を複製し、そのうちの引首たる「古間宗益」の筆跡を複製し、そのうちの引首たる「古間宗益」の筆跡を複製し、そのうちの引首たる「古間宗益」の筆跡を複製し、そのうちの引首たる「古間宗益」の筆跡を複製し、其の上に原稿を記す。
N.10	地圖	(1)	参考 墓誌(中野町口原集落)	井上家始末(嘉慶27年7月5日)	高田日記〔付〕方志史資料 上	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(2)	参考 墓誌(中野町口原集落)	黒田長政改姓状	竹林寺(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(3)	参考 墓誌(中野町口原集落)	黒田長政改姓状	吉田家(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(4)	参考 元和年表	元和1年四月13日	〔丁〕幕府所老中選舉書	黒田家(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(5)	参考 (元和1年九月11日22日)	井上之所家改姓狀	黒田家(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
N.11	葬儀禮(中島城)	(1)	〔大正12年〕3月26日	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(2)	参考 墓誌(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、	
	(3)	参考 元和年表	元和1年四月13日	〔丁〕幕府所老中選舉書	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(4)	参考 (元和1年九月11日11日)	井上之所家改姓狀	黒田家(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(5)	参考 (大正16年2月21日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(6)	参考 (大正16年2月25日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(7)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(8)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(9)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(10)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(11)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(12)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(13)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(14)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(15)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(16)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(17)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、
	(18)	参考 (大正16年3月16日)	水車川墳墓・百川元治改姓狀	高野神社(中野町口原集落)	高野神社(中野町口原集落)	直方駅内の高島町口原の地図以降は複数の地図を載せるが、



项目	史籍特征	特征出新	提出	年代
史籍名、事件、人物、时间	原书「宋史」行文顺序 宋亡后，又以「宋史」为正统，故称「宋史」。	原书「宋史」行文顺序 宋亡后，又以「宋史」为正统，故称「宋史」。	宋史三月版次稿 「宋史」尚属原稿，待审定后，再行出版。	宋史三月版次稿

No.	地名	郵便番号	施設名・建物・出張所	施設の開設・廃止年月日	運営者	監査	監査	
							監査日	検査
(1)	少子高齢化対策促進課	72671	高齢者住宅(高齢者住宅)、介護施設(介護施設)	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	少子高齢化課	深江村社会課	監査	巡回監査・少子高齢化課 担当者訪問による監査
(2)	石巻地区税務課	981-0001	税務課(税務課)	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	税務課	深江村社会課	監査	巡回監査・税務課
(3)	施設久慈石巻危機緩和課	981-0001	施設久慈石巻危機緩和課	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	施設久慈石巻危機緩和課	深江村社会課	監査	巡回監査・施設久慈石巻危機緩和課
(4)	少子高齢者課	981-0001	少子高齢者課	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	少子高齢者課	深江村社会課	監査	巡回監査・少子高齢者課
(5)	高齢者福祉課	981-0001	高齢者福祉課	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	高齢者福祉課	深江村社会課	監査	巡回監査・高齢者福祉課
(6)	少子高齢化対策課	981-0001	少子高齢化対策課	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	少子高齢化対策課	深江村社会課	監査	巡回監査・少子高齢化対策課
(7)	山形支所	981-0001	山形支所	建物(平成31.10.11) 参考(令和3.5.1)	山形支所	深江村社会課	監査	巡回監査・山形支所



No.	題名	著者	刊行年月日	内容	受取者	備考
(33)	元寇の歴史	吉田守謙(後石川守謙)著	寛政4年4月21日	「少翁傳」、「小治傳」、「元寇傳」、「元寇御用軍年史」等	菅原文矩著、「注解・元寇御用軍年史」	配本守護地、五島高麗日方骨の方のいへづち(費用60文を受け取る)。
(39)	元寇の歴史	吉田守謙(後石川守謙)著	寛政4年8月1日	「元寇御用軍年史」	大友文矩著、「注解・元寇御用軍年史」	配本守護地、五島高麗日方骨の方に(費用60文を受け取る)。
(40)	元寇の歴史	吉田守謙(後石川守謙)著	寛政4年11月1日	「元寇御用軍年史」	大友文矩著、「注解・元寇御用軍年史」	配本守護地、五島高麗日方骨の方に(費用60文を受け取る)。
(41)	東洋の歴史	足利義氏著(河野義義著)	寛政5年3月1日	「元寇御用軍年史」	大友文矩著、「注解・元寇御用軍年史」	配本守護地、五島高麗日方骨の方に(費用60文を受け取る)。
(42)	元寇の歴史	吉田守謙(後石川守謙)著	寛政5年11月6日	「元寇御用軍年史」	大友文矩著、「注解・元寇御用軍年史」	配本守護地、五島高麗日方骨の方に(費用60文を受け取る)。

<所在地(本町区)の>

## VII 城館関連地名一覧

<凡例>

- 1 本章では、報告対象地域における城館に関連する地名を一覧にしたものである。
- 2 城館に関連する地名とは、城（シロ・ジョウ）・館（タチ・タテ）・屋敷・門・矢倉・園・垣内・土居（トイ）・府・丸・蔵（クラ）・城戸（キド）・鍛冶・射場・的場・堀切のほか、武器あるいは合戦に関連すると思われる地名、あるいはその他城館に関連すると思われる地名を指す。
- 3 地名の抽出は、「明治十五年字小名調」（『福岡県史資料第七輯』1937年福岡県編集・発行）に搭載された地名を基本とし、これらに搭載されていない現在残る小字を補完的に追加したものである。地名の抽出に当たっては、服部英雄氏（福岡県中近世城跡詳細分布調査指導委員・九州大学大学院教授）が作成したデータを利用した。
- 4 現在、城館と判明しているものと直接つながりがある地名については、別の欄を設けて、他の地名と区別した。なお、今回あげられた大半の地名には、中近世城館とは無関係のものが多数含まれていると考えられるが、それらの岐別は困難であり、また今後の調査研究の備えとして、あえてその全てを掲載することとした。

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	鞍手郡	直方市	直方町	K9. 直方陣屋	西殿町・東殿町・御館山・殿町・鉄砲町
筑前	鞍手郡	直方市	感田	K8. 感田城	城尾・尾城・城の腰・大手門・御所坂・櫓下
筑前	鞍手郡	直方市	知古		新屋敷・古屋敷・鹿ノ尾丸
筑前	鞍手郡	宮若市	礪光		薬師丸・龜ノ丸
筑前	鞍手郡	宮若市	鶴田		古屋敷・門田
筑前	鞍手郡	宮若市	上大隈		前田・上ノ屋敷
筑前	鞍手郡	小竹町	奈良津		古屋敷
筑前	鞍手郡	小竹町	新山崎	188. 山崎城	堀越 城尾
筑前	鞍手郡	小竹町	勝野		堀川口・馬場田・倉谷・古賀ノ園・作リ倉・土井ノ下
筑前	鞍手郡	宮若市	宮田	102. 笠木山城	太蔵・門田・堀田・柳ノ丸
筑前	鞍手郡	宮若市	長井鶴		打蘭・殿ヶ坂・門田・村屋敷・内屋敷
筑前	鞍手郡	宮若市	金生	179. 金生城	門田・中小路 城の内・古城
筑前	鞍手郡	宮若市	原田		屋舗田・新堀・中園・西ノ屋舗・奥園・先園
筑前	鞍手郡	宮若市	下		小倉・乙丸・力丸・勝負ノ谷・城ノ尾 (現地に遺構なし。笠木山城関連の可能性あり)・上木屋
筑前	鞍手郡	宮若市	稻光	142. 下村城	堀ノ内
筑前	鞍手郡	宮若市	稻光	149. 稲光城	杉園・園田 古城
筑前	鞍手郡	宮若市	黒丸		中園・尾園・南ヶ園・角正園・奥園・井手屋敷・横小路・門田・間所・平園・御地頭・下小路
筑前	鞍手郡	宮若市	宮永	151. 黒丸城	城ノ脇
筑前	鞍手郡	宮若市	駿田	154. 宮永城	城山・陣屋谷
筑前	鞍手郡	宮若市	小伏		園田・矢床
筑前	鞍手郡	宮若市	湯原	149. 稲光城	金丸田・射場ヶ元 古城原
筑前	鞍手郡	宮若市	三ヶ烟	141. 地藏山城	大城ノ前・大城 縄丸
筑前	鞍手郡	宮若市	龍徳	182. 龍ヶ岳城	古屋敷・城ノ尾 町屋敷・小路・辻屋敷・門ノ内・小路・表口・裏口
筑前	鞍手郡	宮若市	本城	185. 稲葉城	稻葉
筑前	鞍手郡	宮若市	倉久	183. 抵園岳城	金丸・和田屋敷・德城・小星丸・徳丸 城・城上
筑前	鞍手郡	宮若市	上有木	175. 内山城	小倉・大門 古殿・古殿の前
筑前	鞍手郡	宮若市	四郎丸	170. 六郎丸城	井堀 六郎丸
筑前	鞍手郡	宮若市		174. 四郎丸城	四郎丸

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	鞍手郡	宮若市	四郎丸	171. 城崎砦	城先
筑前	鞍手郡	宮若市	芹田		勝負尻
筑前	鞍手郡	宮若市	下有木		五郎丸・下五郎丸・丸ノ内・上ノ園・小路口・名ゴヤデン
筑前	鞍手郡	宮若市	山口	172. 下有木城	城崎
筑前	鞍手郡	宮若市	沼口		遠園・種屋谷・川關・馬口
筑前	鞍手郡	宮若市	竹原		上小路・古ノ園
筑前	鞍手郡	宮若市	平		堀ノ内
筑前	鞍手郡	宮若市	高野		中小路
筑前	鞍手郡	宮若市	福丸		門田
筑前	鞍手郡	宮若市	金丸		屋敷田・切立・仲園・サヤノ下・前田
筑前	鞍手郡	宮若市			櫻門田・柿添
筑前	鞍手郡	宮若市			金丸屋敷・臺ノ上・屋敷田・向府州・府州
筑前	鞍手郡	宮若市		176. 金丸城	金丸
筑前	鞍手郡	宮若市	水原		霍丸・矢代・弓手・堀切
筑前	鞍手郡	直方市	下新入		倉谷・勝負坂
筑前	鞍手郡	直方市	上新入		馬場・石丸・鶴屋敷・王子丸
筑前	鞍手郡	鞍手町	中山	182. 龍ヶ岳城	城ヶ谷
筑前	鞍手郡	鞍手町	植木		櫻・町屋敷・古屋敷・破魔射場・堂屋敷
筑前	鞍手郡	鞍手町	D29. 吉田老岐守宅		土奥丸・五郎丸・銀治屋ノ辻・殿原
筑前	鞍手郡	鞍手町	197. 劍岳城		中ノ屋敷・辻屋敷
筑前	鞍手郡	鞍手町	新北		城ヶ崎
筑前	鞍手郡	鞍手町			音丸・太郎丸・板垣・大門
筑前	鞍手郡	鞍手町	八尋		中國・山ノ殿・倉田・太郎丸・丸ノ内・土井ノ浦・安城・立仙・新立
筑前	鞍手郡	鞍手町	室木		鍋倉
筑前	鞍手郡	鞍手町	古門	D25. 遠藤大膳宅	城尾
筑前	鞍手郡	鞍手町	長谷		榎園・屋敷ノ内・五郎丸
筑前	鞍手郡	鞍手町	新延	198. 城腰山城	園田・大王丸・冠者ヶ崎
筑前	鞍手郡	鞍手町	上木月		城ヶ谷
筑前	鞍手郡	鞍手町		200. 今許斐城	殿田・下屋敷・上屋敷
筑前	鞍手郡	鞍手町	小牧		門前
筑前	鞍手郡	中間市	下大隈		五郎丸
筑前	鞍手郡	北九州市	木屋ノ瀬		殿半田
筑前	鞍手郡	北九州市	野面		太郎丸・丸堀
筑前	鞍手郡	北九州市		201. 金剛城	金丸・四郎丸・城ヶ崎
筑前	鞍手郡	北九州市	金剛		馬場尻
筑前	鞍手郡	北九州市	篠田	201. 金剛城	辻畠・門田・前田
筑前	鞍手郡	直方市	頓野		門前
筑前	鞍手郡	直方市	上頓野		荒堀
筑前	鞍手郡	直方市	永満寺		馬場・小路・龜倉・堀江
筑前	鞍手郡	直方市	上境		御立處・の場・徳丸・古屋敷・内屋敷・大城原・古家園・後の場・藤田丸・屋敷田
筑前	鞍手郡	直方市	下境		善喜屋敷・櫻ノ馬場・町屋敷・鐵砲町・倉床
筑前	鞍手郡	直方市	中泉		上ノ堀・丸ノ内・堀新田・谷屋敷・中堀・久保・前屋敷
筑前	遠賀郡	岡垣町	波津		城ノ越・屋敷・堀ノ内・和倉・長堀
筑前	遠賀郡	岡垣町	原		藏崎・土手外
筑前	遠賀郡	岡垣町	手野	241. 雨乞山城	大道
筑前	遠賀郡	岡垣町	内浦		金倉・堀地
筑前	遠賀郡	岡垣町	三吉		小堀・中園・垣ノ内・裏門
筑前	遠賀郡	岡垣町	吉木		城ヶ原
					茶屋ノ前
筑前	遠賀郡	岡垣町	吉木		安丸
				D45. 古宅	倉丸・狭間・堀毛・門田・矢口・古小路・正矢口・出口
筑前	遠賀郡	岡垣町	高倉		横田屋敷・上般屋敷・堀・堂葉屋敷・城山

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	遠賀郡	岡垣町	上畠		門司口・堀田・泉水
筑前	遠賀郡	岡垣町	山田		登立
筑前	遠賀郡	岡垣町	海老津		廣丸
筑前	遠賀郡	岡垣町	戸切		上丸
筑前	遠賀郡	岡垣町	糠塚		高丸・松木園・藏ノ上・堀切
筑前	遠賀郡	岡垣町	黒山		藏ノ下
筑前	遠賀郡	遠賀町	尾崎	230. 城之越城	馬場ノ久保・金丸 上ノ越(城之越)
筑前	遠賀郡	遠賀町	鬼津		老門・堀川・唐戸口・矢倉・丸ノ内・大城道
筑前	遠賀郡	遠賀町	島津		丸ノ内・郷右衛門田・宮園・居場ノ元
筑前	遠賀郡	遠賀町	別府		尾倉下・尾倉・花園・城ノ越・千代丸・千代丸下・門前
筑前	遠賀郡	遠賀町	虫生津		打越・新屋敷・倉谷
筑前	遠賀郡	中間市	中底井野		小路・木屋ノ瀬田・土居・堀口・砂堀・御所園・瀬地丸・水門・堀川
筑前	遠賀郡	遠賀町	木守		津丸・狹間・土手ノ外・土手ノ内・丸ノ内
筑前	遠賀郡	中間市	下底井野		葉城・切戸
筑前	遠賀郡	中間市	垣生		城丸・番城田
筑前	遠賀郡	中間市	上底井野	229. 猫城	梅園・小屋根・柿添 城ノ下・猫城山
筑前	遠賀郡	遠賀町	廣渡		安丸・大久保・唐戸口
筑前	遠賀郡	水巻町	古賀		左馬殿・城ノ元・石城・塔ノ城・藏ノ下・京殿
				228. 古賀城	古城・立屋敷・内屋敷・城ノ腰・堀ノ上・古屋敷・城山
筑前	遠賀郡	水巻町	机		藏納・堀添
筑前	遠賀郡	水巻町	猪熊		丸ノ内
筑前	遠賀郡	水巻町	立屋敷		の場・丸ノ内・土手端
筑前	遠賀郡	水巻町	下二		四反丸
筑前	遠賀郡	水巻町	頃末		丸ノ沖・丸・丸ノ西・先ノ園・丸ノ東・小路・外屋敷
筑前	遠賀郡	水巻町	二		古屋敷・門田・新屋敷
筑前	遠賀郡	中間市	岩瀬		御館・宮園
筑前	遠賀郡	水巻町	吉田		前田・車返・堀添・柳土手
筑前	遠賀郡	中間市	中間		古屋敷・歸倉・門前・治郎丸・鉢崎・車屋・御館・室園
筑前	遠賀郡	北九州市	楠橋	202. 楠橋城	一丁丸・童子ヶ門・新屋敷・殿屋敷 城ノ辻・大門・堀
筑前	遠賀郡	北九州市	香月		鳴屋敷南・鳴屋敷北・本城前・石園・大垣・西小路・城ノ前・城下・鬼城
				203. 茶臼山城	殿屋敷・則木屋敷・末兼屋敷
				204. 香月館	上殿・殿屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	馬場山		紅梅園・金丸
筑前	遠賀郡	北九州市	烟	D33. 隠館	堀子・城戸・屋敷田・丸ノ内 隠窟
筑前	遠賀郡	北九州市	上上津役		陳ヶ原・馬場・古陳田・垣内・松屋敷・穴倉・陳出原
				209. 馬乘城	城ノ腰
筑前	遠賀郡	北九州市	小瀬		城戸・烟ヶ堀・猪堀
筑前	遠賀郡	北九州市	下上津役		門田
筑前	遠賀郡	北九州市	永大丸	205. 園田浦城	殿間・切塞・五郎丸 園田・馬賣場
筑前	遠賀郡	北九州市	市ノ瀬	D34. 陣屋谷	切詰・下堀田・山木屋 陳屋
筑前	遠賀郡	北九州市	引野		の場・大門・馬場園・大屋敷・内屋敷・鉢ノ元
筑前	遠賀郡	北九州市	穴生		古屋敷・三郎丸
筑前	遠賀郡	北九州市	陣ノ原		切貫・木屋ヶ谷
				D41. 井上氏宅	下屋敷・東屋敷・西屋敷・町屋敷・本町・袋町・福岡路
筑前	遠賀郡	北九州市	折尾		大膳堀・木屋ヶ谷・紺屋倉・倉谷
筑前	遠賀郡	北九州市	則松		堀池・御所ノ尾・殿屋敷・現道藏・堀ノ辻・堀・馬洗場・丸ノ内

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	遠賀郡	北九州市	黒崎	K10. 黒崎城	城山・屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	熊手	D39. 藤村氏宅	茶屋ノ原・城石・京良城 上ノ屋敷・御屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	鳴水		古屋敷・武者田 東城石水溜・城石際・西城石・西城石水溜・城石
筑前	遠賀郡	北九州市	藤田	D38. 井上家臣宅	屋敷・殿町・御屋敷・土居屋敷・源入屋敷・石坪・玄界屋敷
				215. 花尾城	城ノ尾・北城ノ腰・東城ノ腰・城山・西城ノ腰・南城ノ腰
				D36. 内藤陣山	陣山
				D. 37 麻生氏家臣宅	古館
				D40. 源経基陣	陳山
筑前	遠賀郡	北九州市	前田		門田・大門・西尾倉
筑前	遠賀郡	北九州市	尾倉	217. 尾倉城	城山
筑前	遠賀郡	北九州市	戸畠	220. 戸畠城	藏屋敷・殿小路・蔵藪・堀
筑前	遠賀郡	北九州市	大藪		猪ノ倉・園田・傾城ヶ谷
筑前	遠賀郡	北九州市	中原		今屋敷・堀損
筑前	遠賀郡	北九州市	小石		弓田
筑前	遠賀郡	北九州市	須多羅	D42. 麻生氏宅	濱ノ土井・中丸・辻ヶ谷・溝百堀・殿屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	藤木		辻ヶ谷・矢倉ノ下・入道丸・溝土井・中國・宮丸・小路・童子丸
筑前	遠賀郡	北九州市	小竹		園田・堀田・西ノ門・丸ノ内・狭間・中屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	二島		下小倉畑・上小倉畑・角力場・垣添・宮ノ馬場・的場・古屋敷
筑前	遠賀郡	北九州市	畠田		城ノ前・狩屋山・狩屋・城山・下ノ堀・關所・矢掛
筑前	遠賀郡	北九州市	頓田	225. 城ノ崎砦	櫻ノ丸・垣ノ外・矢戸・今丸・三郎丸・屋敷田
筑前	遠賀郡	北九州市	竹並		城ノ崎
筑前	遠賀郡	北九州市	有毛		丸ノ内・戀ノ丸
筑前	遠賀郡	北九州市	安屋		大園・古屋園・大門・八光丸
					堀田・下ノ木戸・古城戸・鍛冶屋園・倉谷・丸ノ内・堀川・遊屋丸・牛丸・樂丸・蕪倉
				226. 樂丸城	城ヶ山
					猪廻・矢戸
筑前	遠賀郡	北九州市	鹽屋		的場・五郎城戸・堀・城ノ腰・堀ノ下・丸ノ内
筑前	遠賀郡	北九州市	蟹住		矢戸・鞍谷・向堀・力丸・堀切・奥治郎丸・的場・的場前・土井添・次郎丸・西屋敷附・東屋敷附
筑前	遠賀郡	北九州市	本城	206. 本城城	城山
筑前	遠賀郡	北九州市	淺川		丸ノ内
筑前	遠賀郡	北九州市	小敷	207. 淺川城	陣山
筑前	遠賀郡	北九州市	大鳥居	227. 小敷城	城ノ下
筑前	遠賀郡	芦屋町	山鹿		丸ノ内
				233. 山鹿城	城ヶ浦・倉谷・丸ノ内・築廻・城山・雁木
筑前	遠賀郡	北九州市	鹽屋	234. 大城城	中小路・柳ノ丸 大城前・大城
筑前	宗像郡	宗像市	河東・田島		保運・菖蒲ヶ池・井堀
筑前	宗像郡	宗像市	多禮		コギソノ・寺屋敷
筑前	宗像郡	宗像市	池ノ浦		井堀
筑前	宗像郡	宗像市	田島		上殿・大門
筑前	宗像郡	宗像市	吉田		倉田
筑前	宗像郡	宗像市	大井		三倉・地蔵丸・金丸・大屋敷・舛丸・中屋敷
筑前	宗像郡	宗像市	用山		前田
筑前	宗像郡	宗像市	牟田尻		土手外・堀ノ尻・内ヤシキ・木戸ノ内・屋敷・大丸・外ノ丸・母倉・新屋敷

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	宗像郡	宗像市	江口		猪塙
筑前	宗像郡	宗像市	名残		伊豆丸
筑前	宗像郡	宗像市	陵巖寺	251. 萩岳城	一ノ丸・二ノ丸・三ノ丸・芦屋堀・新堀・馬立場・馬責場・廣丸・城道・陣尾・先陣橋・屋形口・大門口・赤城・城體・城ヶ谷・城山・大門・馬場
筑前	宗像郡	福津市	奴山		花園・大門・屋敷・正園・堀・馬場・丸・勝負
筑前	宗像郡	福津市	大石		垣内
筑前	宗像郡	宗像市	池田		堀田・大古野・小路ヶ谷・堀坊・馬場
筑前	宗像郡	宗像市	田野		荒堀
筑前	宗像郡	宗像市	吉留		松丸・安ノ倉・倉ツバ・堀・下丸山・上丸山・松丸・京殿・安ノ倉・陣尾・安ノ倉前
筑前	宗像郡	宗像市	田久		内園・食谷・中園
筑前	宗像郡	福津市	舍利藏		鍋倉・大門田
筑前	宗像郡	福津市	津屋崎	D48. 黒田養心宅	新屋敷・古小路町
筑前	宗像郡	福津市	下西郷		殿屋敷
筑前	宗像郡	福津市	勝浦		勝負坂・六郎丸・四郎丸・大門・太郎丸
筑前	宗像郡	宗像市	光岡		高堀・鍛冶屋ヶ浦・大溝・石丸・藏ノ元・前田・堀切・古屋敷・丸ノ内
筑前	宗像郡	宗像市	久原		辻ノ園・屋敷田
筑前	宗像郡	宗像市	名残	258. 城ヶ浦堡	古屋敷
筑前	宗像郡	宗像市	朝町	258. 城ヶ浦堡	堀田
筑前	宗像郡	宗像市	曲		荒堀・城鐘・新屋敷
筑前	宗像郡	宗像市	神塗		堀田
筑前	宗像郡	宗像市	福元		門田
筑前	宗像郡	宗像市	土穴		土井ノ内
筑前	宗像郡	宗像市	東郷		尾園・土井ノ内・古屋敷
筑前	宗像郡	宗像市	田熊		堀・堀前
筑前	宗像郡	福津市	畔町		前田・古屋敷
筑前	宗像郡	福津市	久末		久城
筑前	宗像郡	福津市	渡		御園
筑前	宗像郡	宗像市	三郎丸	251. 萩岳城	城
				252. 茶臼山城	一ノ構口・二ノ構口
				253. 今井城	今井城
筑前	宗像郡	宗像市	上八		丸ノ内・鉢ノ尾・門口・番場
筑前	宗像郡	福津市	上西郷	272. 上西郷城	門田・大矢・新屋敷・馬場ノ谷
筑前	宗像郡	福津市	八並		城山・城
筑前	宗像郡	福津市	津丸		藏ノ前・堀田・上屋敷・前田
筑前	宗像郡	宗像市	村山田		侍部殿谷(十殿谷)・右近屋敷
筑前	宗像郡	福津市	在自		五郎丸・四郎丸・松ノ木戸・馬場・鬼丸・屋敷ノ浦・宮城
筑前	宗像郡	福津市	須多田		泉園・原屋敷
筑前	宗像郡	福津市	本木	264. 吉原里城	劍塚・下ノ園
筑前	宗像郡	宗像市	大島	266. 城の浦城	前田・堀田・伊王丸
筑前	宗像郡	宗像市	地島	245. 城ノ腰城	萬歳丸・小路口・門田
筑前	宗像郡	宗像市	大穂町		下城ノ裏・城ノ裏
筑前	宗像郡	宗像市	大穂	248. 大島城	舟倉・長者倉・家門田
筑前	宗像郡	宗像市	王丸		城山
筑前	宗像郡	宗像市	山田		小路山・政所・矢倉瀬・倉瀬
筑前	宗像郡	宗像市	須恵	245. 城ノ腰城	城體
筑前	宗像郡	宗像市	平等寺	262. 大穂城	園田
筑前	宗像郡	宗像市	野坂	249. 草場城	湯園・德丸
筑前	宗像郡	宗像市			大屋敷・堀田・丸・下丸・原ノ辻
筑前	宗像郡	宗像市			的整
筑前	宗像郡	宗像市		D46. 武藤氏宅	堀之内・城
筑前	宗像郡	宗像市			馬場口・畠屋敷
筑前	宗像郡	宗像市			城の口
筑前	宗像郡	宗像市			館原・城田・丸ノ内・土井ノ内・木倉・扇園・武丸・藤倉

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	宗像郡	福津市	内殿		土井丸・古内殿・坂丸
筑前	宗像郡	宗像市	武丸		大ノ馬場・的場
筑前	宗像郡	宗像市	石丸	254. 城腰城	城ノ越
筑前	宗像郡	福津市	手光		馬場
筑前	宗像郡	福津市	宮司		的岡
筑前	糟屋郡	福岡市	箱崎		勝負田・七小路・馬場・藏本・後小路・中小路・堅小路裏・堅小路・浜小路
筑前	糟屋郡	志免町	御手洗		屋敷
筑前	糟屋郡	志免町	別府		五郎丸・小路・太郎丸・古屋敷・升角・五斗藏
筑前	糟屋郡	志免町	南里		門田・大府・クラエ・イヤシキ
筑前	糟屋郡	志免町	志免		古屋敷・城戸・頭ノ園・園ノ木・大的・浦園
筑前	糟屋郡	志免町	吉原		屋敷
筑前	糟屋郡	須恵町	旅石		芋塚・篠塚・屋敷
筑前	糟屋郡	粕屋町	坂殿		矢ノ坪・古賀ソノ・奥小路
筑前	糟屋郡	須恵町	植木		貝藏・山城戸
筑前	糟屋郡	宇美町	炭焼		鍛田
筑前	糟屋郡	宇美町	井野		勝負ヶ坂・本城古城
筑前	糟屋郡	須恵町	田富		庄屋園・高園・牛丸
筑前	糟屋郡	須恵町	佐谷		花園・馬立
筑前	糟屋郡	須恵町	須恵		土極ノ本・中園・下ノ屋敷
筑前	糟屋郡	須恵町	上須恵	283. 高島居城	城山・城山・岳城
筑前	糟屋郡	粕屋町	内橋		中園・下ノ屋敷
筑前	糟屋郡	古賀市	青柳町	283. 高島居城	城山
筑前	糟屋郡	古賀市	川原		下屋敷・上屋敷・徳王丸
筑前	糟屋郡	古賀市	今在家		古屋敷・屋敷田・屋敷田
筑前	糟屋郡	粕屋町	戸原		五郎丸・屋敷田・武節ヶ浦
筑前	糟屋郡	福岡市	蒲田		垣ノ内
筑前	糟屋郡	福岡市	名子		土井ノ前・土井
筑前	糟屋郡	福岡市	土井		土居ヶ浦・奥ソノ・イボリ・東園・中木戸
筑前	糟屋郡	福岡市	八田		
筑前	糟屋郡	粕屋町	仲原		上御所陣・中御所陣・下御所陣・川園・峯屋敷・土井ノ内
筑前	糟屋郡	粕屋町	原町		土井ノ内
筑前	糟屋郡	久山町	久原		堀田・出シ丸・薬丸
筑前	糟屋郡	粕屋町	新長者原		内園・屋敷ノ前
筑前	糟屋郡	粕屋町	阿恵		古屋敷・横挾
筑前	糟屋郡	篠栗町	若杉		横居場・切通
筑前	糟屋郡	篠栗町	尾中		北園・溝ハサマ・垣ノ内・奥小路・築出
筑前	糟屋郡	篠栗町	乙犬		上小路・中國・扇園・馬轉・馬場ノ谷
筑前	糟屋郡	篠栗町	篠栗		城戸・茶屋・下ノ屋敷・茅ノ倉・勝負谷
筑前	糟屋郡	篠栗町	金出	285. 飯盛山城	屋敷
筑前	糟屋郡	篠栗町	萩ノ尾		陣ヶ田尾・(陣が瀬)
筑前	糟屋郡	篠栗町	高田		屋形葉山・切通シ
筑前	糟屋郡	篠栗町	田中		大倉・下ノ屋敷
筑前	糟屋郡	篠栗町	和田		古屋園・屋敷
筑前	糟屋郡	福岡市	津屋		園田・今屋敷
筑前	糟屋郡	福岡市	松崎		藏ノ元
筑前	糟屋郡	福岡市	名島	K13. 名島城	引陣・古屋敷
筑前	糟屋郡	福岡市	香椎		七兵衛屋敷・内堀
					城山
					堂園・門田・杭園・中小路・奥小路・馬場・蔵谷・横射場
				292. 立花山城	城ノ越・陣山
				293. 御飯ノ山城	里城

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	糟屋郡	福岡市	濱男		遠矢ヶ原・藏ノ木・古園・屋敷・鎧坂
筑前	糟屋郡	新宮町	原上		大蔵
筑前	糟屋郡	古賀市	谷山		古ノ屋敷
筑前	糟屋郡	古賀市	小山田		井堀
筑前	糟屋郡	古賀市	葉王寺		堂園・ヤシキ
筑前	糟屋郡	古賀市	古賀		古賀屋敷・下屋敷・上屋敷・屋敷・新屋敷
筑前	糟屋郡	古賀市	鹿部		庵ノ園
筑前	糟屋郡	古賀市	庄		屋敷・堀ノ内
筑前	糟屋郡	新宮町	新宮		屋敷
筑前	糟屋郡	新宮町	湊		古屋敷・屋敷・石生丸
筑前	糟屋郡	新宮町	相ノ島		日ノ丸
筑前	糟屋郡	新宮町	下ノ府		元屋敷・馬場崎・上ノ屋敷・町屋敷・大蔵
筑前	糟屋郡	新宮町	上ノ府		土井ノ浦・前田・馬場山・道その・太郎丸
筑前	糟屋郡	古賀市	蓮内		木屋ノ脇・小路・藏園・中小路・三郎丸・田倉・大門・陣ノ屋敷
				277. 鷲城	城ノ裏・城ノ谷
筑前	糟屋郡	古賀市	久保		太郎丸・屋敷田・小倉・堀田
筑前	糟屋郡	福岡市	上和白		大蔵・屋敷・古賀ノ堀
筑前	糟屋郡	福岡市	下和白		裏ノ屋敷
筑前	糟屋郡	福岡市	鹽瀬		古土手
筑前	糟屋郡	福岡市	三苦		門田・ヤシキ
筑前	糟屋郡	福岡市	志賀島		馬場・小路・イバ・首切レ・ゲンカ小路
筑前	糟屋郡	柏屋町	江辻		千藏屋敷・藏ヶ元・中小路・古屋敷
筑前	糟屋郡	柏屋町	大隈	286. 丸山城	大城戸・辻烟・城山
筑前	糟屋郡	久山町	猪野		小城戸・岩木屋・神屋敷・今屋敷・藤藏園・中ノ丸・屋敷
					馬場・外園・瓜生園・小路ノ後・園田・古門・堀内・尾園・小路・古屋敷・倉谷・大城戸・垣ノ内・前城谷・舟ヶ倉
筑前	糟屋郡	久山町	山田		290. 上山田城
					古城
筑前	糟屋郡	宇美町	宇美		石垣・屋敷ノ下・辻ノ園・上角・太郎丸・後小路・今屋敷
筑前	糟屋郡	新宮町	立花		鹿堀・左屋ノ下・前城・太刀洗・大屋敷・屋敷・奥屋敷・中屋敷・園田・三城岳・園田・三城岳・大門・丸ノ内
筑前	糟屋郡	新宮町	的野		木戸ヶ谷・屋敷・園田
筑前	糟屋郡	古賀市	小竹		犬ノ馬場・向屋敷・コゾノ・屋敷・官日屋敷
筑前	糟屋郡	古賀市	青柳		忠藏ソノ・小路・九郎丸
筑前	糟屋郡	古賀市	米多比	278. 米多比城	杉その・門田
筑前	糟屋郡	古賀市	薦野		先城倉・源藏屋敷
					失落・うら門口
				275. 小松岡砦	古屋敷
筑前	席田郡	福岡市	金隈		ヤクラ・門戸口・大府・上ノ園・上屋敷
筑前	席田郡	福岡市	立花寺		屋敷・上ノ園
筑前	席田郡	福岡市	上月隈		藏ノ後
筑前	席田郡	福岡市	下月隈		居屋敷・天神丸・須丸・米丸
筑前	席田郡	福岡市	上臼井		蓑丸・屋敷
筑前	席田郡	福岡市	下臼井		向小路
筑前	席田郡	福岡市	雀井		ミヤシキ・居屋敷
筑前	席田郡	福岡市	平尾		今屋敷・ヤシキ・奥小路・クボゾノ
筑前	席田郡	福岡市	青木		カゲ丸・城ノ尾・クエ丸・城岡・前田
筑前	那珂郡	福岡市	屋形原		中園
筑前	那珂郡	福岡市	若久		新開・溝添・大屋敷・堀田・住屋敷
筑前	那珂郡	春日市	須玖		杉園・柿木屋敷・浦屋敷・奥小路・中
筑前	那珂郡	福岡市	下臼佐		小路・屋形町
筑前	那珂郡	福岡市	上臼佐		屋敷ノ前・的場
筑前	那珂郡	福岡市	彌永		次郎丸・ホリノウチ
筑前	那珂郡	福岡市			中門・ソノタグチ・クラカケ

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	那珂郡	福岡市	鹽原		イバ・立石・堀川
筑前	那珂郡	那珂川町	片繩		小丸
筑前	那珂郡	福岡市	老司		打門・中園
筑前	那珂郡	福岡市	野多目		古屋敷
筑前	那珂郡	福岡市	五十川		上屋敷・下屋敷・弓田・溝ノ内
筑前	那珂郡	福岡市	竹下		前田・奥屋敷・堀ノ内・古屋敷
筑前	那珂郡	福岡市	那珂		警固町・田中園・堀ノ内・屋形町・門田・垣添
筑前	那珂郡	福岡市	東光寺		番小路・麥ノ木園・高丸・古藤園・射場ノ口
筑前	那珂郡	福岡市	馬出		御所ノ内
筑前	那珂郡	那珂川町	松木		前田・太郎丸田・堀ノ前
筑前	那珂郡	那珂川町	中原		前田・金丸
筑前	那珂郡	那珂川町		298. 中原城	城・城ノ山
筑前	那珂郡	那珂川町	五郎丸		前田・サヤノ元・扇ノ前・屋敷ノ内
筑前	那珂郡	那珂川町	上樅原	D58. 平三屋敷	平藏
				R25. 平藏遺跡	
筑前	那珂郡	那珂川町	東隈		屋敷ノ下・古屋敷
筑前	那珂郡	那珂川町	山田	301. 龍神山城	木戸浦・馬場・門田・倉掛・
				302. 城ノ腰城	城ノ下・山城・城山
筑前	那珂郡	福岡市	藥院		城ノ越
筑前	那珂郡	那珂川町	南面里	305. 鷺ヶ岳城	御所ノ谷
				306. 大丸城	城の谷
筑前	那珂郡	那珂川町	別所	300. 老林城	大丸
					角田・次郎丸
				300. 老林城	城山・城林谷
筑前	那珂郡	那珂川町	五ヶ山	D60. 一ノ岳城	倉谷・竹ノ屋敷
				御所・御屋敷	
				D61. 陣尾	陣ノ尾
筑前	那珂郡	那珂川町	不入道		中木戸
				303. 猫瀬城	猫城
筑前	那珂郡	那珂川町	市ノ瀬		城ノ内・堀切
筑前	那珂郡	那珂川町	成竹		熊ノ狩倉・寺倉・屋形ヶ谷
筑前	那珂郡	那珂川町	埋金		中園
筑前	那珂郡	福岡市	横手	岩丸・溝ハサマ・大溝・門田	
筑前	那珂郡	福岡市	井尻	屋敷・向屋敷・古木戸・古屋敷	
筑前	那珂郡	福岡市	下警固		道和小路
筑前	那珂郡	福岡市	松園		松園
筑前	那珂郡	那珂川町	西限		城林谷
筑前	那珂郡	那珂川町	後野		屋敷下
筑前	那珂郡	那珂川町	道善		石倉・古屋敷・ホリ田
筑前	那珂郡	福岡市	麦野		内屋敷・堀ヶ尻・複園・奥園
筑前	那珂郡	福岡市	井相田		向園
筑前	那珂郡	福岡市	住吉		外園・南小路・垣ノ内・花園
筑前	那珂郡	春日市	春日		徳府・上ノ居屋敷・下ノ居屋敷
筑前	那珂郡	春日市	小倉		遠園・寺ヤシキ
筑前	那珂郡	福岡市	三宅		小路・堀川・矢臺
				296. 古野城	城ヶ尾
筑前	那珂郡	福岡市	春吉		花園・溝間・馬場添・馬場・新屋敷
筑前	那珂郡	福岡市	西堅粕		御馬所・西門口
筑前	那珂郡	福岡市	大飼		觀音丸・下堀田・堀田・綿丸・堀
筑前	那珂郡	福岡市	比惠		屋敷町・門ノ内
筑前	那珂郡	福岡市	野間		門ノ浦
筑前	那珂郡	福岡市	高宮		堀川・土居ノ内
筑前	那珂郡	福岡市	堅粕		大溝・舊門前・門・御馬所・大門・カキソヘ・古小路
筑前	那珂郡	春日市	上白水		馬場・門田・新屋敷
筑前	那珂郡	春日市	下白水	297. 天浦城	城のやネ
筑前	早良郡	福岡市	鳥飼		別府・升木屋濱・馬場頭・浪人谷・馬屋谷・弓射場・御馬屋後・新屋敷
				311. 鳥飼城	土手ノ内・茶屋の内
筑前	早良郡	福岡市	蛭浜		北小路・獅丸・屋方町・寶臺
				326. 探題北条氏館	城ノ辻
筑前	早良郡	福岡市	殘崎	327. 城ヶ崎城	城・浦ノ城
				328. 東ノ城	東ノ城

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	早良郡	福岡市	田島		垣添・屋敷・別府ノ前・ヤサソノ・辻 畑・大ノ馬場・小屋敷
筑前	早良郡	福岡市	下長尾		戸井
筑前	早良郡	福岡市	上長尾	R28. 橋井川A遺跡	下屋敷・向屋敷・中城戸 堀田
筑前	早良郡	福岡市	檜原	D62. 古城	古屋敷・堀田
筑前	早良郡	福岡市	柏原		城尾・堀添・屋形町・武士町 政所・中ゾノ
筑前	早良郡	福岡市	西新		石丸
筑前	早良郡	福岡市	龜原		石丸
筑前	早良郡	福岡市	原	D65. 殿屋敷	殿屋敷
筑前	早良郡	福岡市	原	R34. 原遺跡	田中園・金丸・下掘 小園・南屋敷
筑前	早良郡	福岡市	荒江		井場
筑前	早良郡	福岡市	飯倉		鉢田・前田・中城戸
筑前	早良郡	福岡市	干隈		屋敷ノ内
筑前	早良郡	福岡市	野芥		崩ゾノ・土井・中城士・土井
筑前	早良郡	福岡市	梅林		弓掛・クエゾノ・堀田
筑前	早良郡	福岡市	七隈		上野屋敷
筑前	早良郡	福岡市	西油山		居屋敷
筑前	早良郡	福岡市	庄		小路・奥屋敷・西園・金丸
筑前	早良郡	福岡市	小田部		宮城・馬帽子・源藏門・中園
筑前	早良郡	福岡市	有田		當丸・馬場・天神屋敷
筑前	早良郡	福岡市	次郎丸	D63. 立屋敷	建屋敷
筑前	早良郡	福岡市	西脇		土井ノ内
筑前	早良郡	福岡市	下山門		南小路・北小路・今屋敷・舟倉・石堂 丸
				323. 生の松原城	城ノ原・堀
筑前	早良郡	福岡市	拾六町	324. 長鳥城	城ノ内・相馬陣・本城・城ノ辻
					倉道
筑前	早良郡	福岡市	福重		水丸・垣ノ内
筑前	早良郡	福岡市	橋本		園田・川原屋敷・馬場ノ前・向園・矢 苦
筑前	早良郡	福岡市	野方		桔ノ内
筑前	早良郡	福岡市	羽根戸		屋敷ノ内・小路・門ノ前・山屋敷・關 屋原
筑前	早良郡	福岡市	吉武		大門・牛丸
筑前	早良郡	福岡市	飯盛	322. 飯盛城	古園・馬場
筑前	早良郡	福岡市	金武		城ノ尾
筑前	早良郡	福岡市	四ヶ		丸・城田・矢倉ノ下
筑前	早良郡	福岡市	田		弓田・高屋敷・園田・恋園・小路・小 園・大ノ園・八郎丸・龜丸・奥藏・溝 狹間
筑前	早良郡	福岡市	重留		城角・居屋敷・官園・泉屋敷・靄園 満所
筑前	早良郡	福岡市	内野	317. 内野城	本城
筑前	早良郡	福岡市	脇山		門戸口
筑前	早良郡	福岡市	小笠木	315. 安楽平城	城ノ原 小府
筑前	早良郡	福岡市	東入部		立屋敷・掘切・ケサ丸・三郎丸・馬場 田・九郎丸・大門・クラゾノ・加増 園・政留・角・政所
筑前	早良郡	福岡市	西入部	316. 陣ノ原城	杉園・龜丸
筑前	早良郡	福岡市	曲瀬	318. 曲瀬城	山城隣・陣ノ尾・陣原
筑前	早良郡	福岡市	稚原		門ノ内・城山・大門・中門
筑前	早良郡	福岡市	板谷		屋敷ノ谷・矢ハズ
筑前	怡土郡	糸島市	鹿家		藤五郎屋敷
筑前	怡土郡	糸島市	吉井		小賀倉
筑前	怡土郡	糸島市	吉井	343. 吉井岳城	上ノ園・大門・水門
筑前	怡土郡	糸島市	福井		館・御屋敷・城
筑前	怡土郡	糸島市	深江	339. 城崎山城	馬場・陣ノ尾・倉谷・隱屋形・丸園 コイノ丸・垣内・宮小路
筑前	怡土郡	糸島市	濱窪	340. 古城	古城
					中園

地域名	旧郡名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	怡土郡	糸島市	田中		蔵床
筑前	怡土郡	糸島市	松主		屋敷内・下屋敷ノ内
筑前	怡土郡	糸島市	波呂	337. 波呂城	壽命園・矢房
筑前	怡土郡	糸島市	長石	338. 宝珠岳城	城 中國・吉木園・森園
筑前	怡土郡	糸島市	上深江		城山 森園・サヤノ元
筑前	怡土郡	糸島市	一貴山		高德園
筑前	怡土郡	糸島市	石崎		矢風
筑前	怡土郡	糸島市	松國		陣ノ尾
筑前	怡土郡	糸島市	本		マタテ・大丸・富園・富園前・ササド イ・ホリノ前・堀・瀬ツ丸・大園
筑前	怡土郡	糸島市	瀬戸		ササドイ・土井ノ中
筑前	怡土郡	糸島市	東	R40. 東高田遺跡	奥ヶ浦・川園・堀池ノ前
筑前	怡土郡	糸島市	神在		屋敷田
筑前	怡土郡	糸島市	加布里	336. 加布里城	照園・小路・瀬ノ園 宮園・馬場西・馬場東・中ノ小路・後 小路 城山・南城・荒城
筑前	怡土郡	糸島市	長野		三郎丸・久保園・花園
筑前	怡土郡	糸島市	小藏		上屋敷
筑前	怡土郡	糸島市	八島		森園・蔵ノ前
筑前	怡土郡	糸島市	藏持		貝園・地屋敷・森小路・立花園
					藏持古屋敷遺跡 古屋敷
筑前	怡土郡	糸島市	香力		城園
筑前	怡土郡	糸島市	有田		高田屋敷・官藏
筑前	怡土郡	糸島市	三坂		堀ヶ田
筑前	怡土郡	糸島市	高上		屋敷
筑前	怡土郡	糸島市	山北		ホリ
筑前	怡土郡	糸島市	雷山		内園・門田
筑前	怡土郡	糸島市	多久		築地
筑前	怡土郡	糸島市	井原		尾花ヤシキ・徳丸・小路・中ヤシキ・ 寺園・御所・茶ヤシキ・久保園・東 園・大園
筑前	怡土郡	糸島市	高祖	329. 高祖城	福丸・屋敷
筑前	怡土郡	糸島市	大門		木戸・中小路・町ヤシキ・中園・シモ ソノ
筑前	怡土郡	福岡市	飯氏		馬場・大園・屋形町・大屋敷
筑前	怡土郡	福岡市	宇田川原		中小路
筑前	怡土郡	福岡市	周船寺		乙丸・家敷ノ坪
筑前	怡土郡	福岡市	千里		小金丸・垣ノ内・屋片町
筑前	怡土郡	糸島市	三雲		楠木ヤシキ・上カタ・中川ヤシキ・ヤ シキ・三ソノ・杉ソノ・福丸・新村ヤ シキ
筑前	怡土郡	糸島市	王丸		堀切・荻園
筑前	怡土郡	糸島市	川原		奥園・フスボリ
筑前	怡土郡	糸島市	末永		古屋敷
筑前	怡土郡	福岡市	鶴永		石倉
筑前	怡土郡	福岡市	上原		堀ノ内・外園・ナカヤシキ・クラノモ ト・城戸口・イヤソノ
筑前	志摩郡	福岡市	女原	329. 高祖城	古屋敷・鳥帽子尾
筑前	志摩郡	福岡市	青木		草野陣
筑前	志摩郡	福岡市	今津		大園・井手屋敷・川原園・行園・福井 園・城外園
筑前	志摩郡	福岡市		346. 白杵氏端城	馬場・毘沙門・クヌギ原・口戸・門 口・寺小路・立浦・中園・倉ツクシ
筑前	志摩郡	福岡市		347. 鷺城	城カク・城山・城 館屋敷
筑前	志摩郡	福岡市	元岡		六郎丸・馬場・馬場ノ下・弓繩工・馬 場ノ前
筑前	志摩郡	福岡市	桑原		潮見殿
筑前	志摩郡	福岡市	田尻		藏前・中園・九郎丸
筑前	志摩郡	福岡市	太郎丸		道園・横小路・金丸
筑前	志摩郡	福岡市	今出		土手ノ内

地域名	旧都名	市町村名	旧村名(大字)	関連城館	関連地名
筑前	志摩郡	糸島市	板持		倉ノ元・門田・四郎丸
筑前	志摩郡	糸島市	高田		堀ノ元
筑前	志摩郡	糸島市	池田		垣内・宮園・溝添
筑前	志摩郡	糸島市	潤	R46. 潤古屋敷遺跡	古屋敷
筑前	志摩郡	糸島市	波多江		立屋敷・堂蘭
筑前	志摩郡	糸島市	前原	357. 舞岳城	城ノ尾
筑前	志摩郡	糸島市	荻ノ浦		前田・市園
筑前	志摩郡	糸島市	新田		前田
筑前	志摩郡	糸島市	浦志		門田・大城・五郎丸
				D73. 浦志孫右衛門宅	射場
筑前	志摩郡	糸島市	泊	355. 泊城	上土井
筑前	志摩郡	糸島市	馬場		城崎・タチ・堀廻
筑前	志摩郡	糸島市	松隈		馬場添・森ノ園
筑前	志摩郡	糸島市	由比		前田・松隈小路
筑前	志摩郡	糸島市	師吉		大門
筑前	志摩郡	糸島市	初		大城
筑前	志摩郡	糸島市	吉田		古屋敷・府着
筑前	志摩郡	糸島市	井田原	354. 西田城	丸・大丸・藏ノ前
筑前	志摩郡	糸島市	稻留		大園・大屋敷
				R52. 木暮丸	城の辻・城の前
筑前	志摩郡	糸島市	小金丸		殿ノ山・屋敷
				358. 親山城	木暮丸
筑前	志摩郡	糸島市	野北		西屋敷・高蘭・恋野園・小路
筑前	志摩郡	糸島市	櫻井		立屋敷・上堀田・堀田・北園・井ノ園・濱屋敷・花園・大園
筑前	志摩郡	福岡市	小田		古屋敷・門ノ前・門ノ上・門・藏ノ下・堀上
筑前	志摩郡	福岡市	宮浦		勝負坂・小賦倉前・小園・西園・小賦倉・鎧田
筑前	志摩郡	福岡市	玄界島		見付園・福園
筑前	志摩郡	福岡市	西ノ浦		屋敷附・射場
筑前	志摩郡	糸島市	蒼屋		爰園・前田・堀町
筑前	志摩郡	糸島市	岐志		寺倉・堀切
筑前	志摩郡	糸島市	新町		堀田・麦ノ土井・殿山
筑前	志摩郡	糸島市	御床		府中・土手ノ内
筑前	志摩郡	糸島市	久家		堀一作ホリ・殿ノ山
筑前	志摩郡	糸島市	船越	D74. 小金丸氏館	ホリクボ・北ソノ・日門田
					大園
					殿畠

# 索引

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
あ						
青浦城	あおうらじょう	不明	不明	F21	42	—
青木城	あおきじょう	志摩郡	福岡市西区今宿町	345	30	213
青木道跡	あおきいせき	志摩郡	福岡市西区今宿青木	R48	40	270
青柳新城	あおやぎしんじょう	→新山城（しんじょうやまじょう）				
赤間山城	あかまやまじょう	→薦岳城（つただけじょう）				
赤馬山城	あかまやまじょう	→片脇城（かたわきじょう）				
秋葉山城	あきばやまじょう	→城浦堡（じょうがうらぼう）				
朝城	あさじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区浅川	207	16	128
浅川城	あさかわじょう	→城浦堡（じょうがうらぼう）				
朝町城	あさまちじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区紅梅4丁目	D37	34	—
麻生氏家臣宅	あそうしかしなたく	→烟城（はたじょう）				
麻生城	あそうじょう	遠賀郡	北九州市戸畠区菅原1~4丁目	221	18	—
麻生氏宅	あそうしたく	遠賀郡	北九州市戸畠区修多羅	D43	34	—
阿部鑑宗宅	あべあきむねたぐ	→野北殿館（のぎたごのやかた）				
天浦城	あまうらじょう	那珂郡	春日市下白水6丁目・泉1・2丁目	297	26	—
天裏城	あまうらじょう	→天浦城（あまうらじょう）				
天賀城	あまがじょう	遠賀郡	北九州市戸畠区菅原1~4丁目	221	18	—
雨乞山城	あまごいやまじょう	遠賀郡	北九州市戸畠区菅原1~4丁目	241	20	145
天満城	あまじょう	→天浦城（あまうらじょう）				
安樂平城	あらひらじょう	早良郡	福岡市早良区東入部	315	26	196
荒平城	あらひらじょう	→安樂平城（あらひらじょう）				
有田城	ありたじょう	怡士郡	糸島市有田	332	28	208
有田・小田部遺跡群	ありたこたべいせき	早良郡	福岡市早良区有田・小田部	R32	40	255
塙塙ノ城	ありづかのしろ	那珂郡	筑紫郡那珂川町	F13	40	—
安徳城	あんとくじょう	→龍神山城（りゆうじんじょう）				
安徳台遺跡	あんとくだいいせき	那珂郡	筑紫郡那珂川町安徳	R24	40	250
安屋城	あんやじょう	→栄丸城（さかまるじょう）				
飯場城	いいばじょう	→曲園城（まがりぶぢょう）				
飯盛城	いいもりじょう	宗像郡	福津市内殿	273	24	162
飯盛城	いいもりじょう	早良郡	福岡市西区飯盛	322	28	203
飯盛山城	いいもりやまじょう	糟屋郡	糟屋郡篠栗町金出	285	24	170
飯盛山城	いいもりやまじょう	→飯盛城（いいもりじょう）				
飯盛（森）山城	いいもりやまじょう	→飯盛城（いいもりじょう）				
一貴寺	いぎじ	怡士郡	糸島市二丈・壹山	F16	42	—
一貴寺高嶽	いぎじかだけ	怡士郡	糸島市二丈・壹山か	F17	42	—
生松原城	いきのまつばらじょう	早良郡	福岡市西区城の原郷地・上山門1丁目	323	28	—
池田井田遺跡	いけだいだいせき	志摩郡	糸島市波多江原南1丁目	R49	40	271
池田城	いけだじょう	早良郡	福岡市早良区船山	320	28	201
石崎城	いしざきじょう	怡士郡	糸島市二丈石崎	K15	32	235
石崎曲り田遺跡	いしざきまがりたいせき	怡士郡	糸島市二丈石崎	R44	40	266
石築城	いしつじ	→元寇壁屋（げんこうぼうやのい）				
石丸城	いしまるじょう	→城腰城（じょうのこしじょう）				
井田原城	いだわらじょう	→西田城（にしたじょう）				
市瀬城	いちのせじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区市瀬	211	16	130
一瀬城	いちのせじょう	→市瀬城（いちのせじょう）				
一の瀬城	いちのせじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町市瀬	F14	40	—
一ノ岳城	いちのたけじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山・市ノ瀬	308	26	190
一ノ岳里城	いちのたけさとじろ	那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山	D60	36	—
一町屋敷跡	いっちょうやしき	早良郡	福岡市西区拾六町	R35	40	—
井出ノ原遺跡	いでのはるいせき	那珂郡	筑紫郡那珂川町中原東2丁目	R22	38	248
稻居塙城・金居塙城	いないづかじょう・かねいづかじょう	麻田郡	福岡市博多区月隈1丁目	295	24	182
稻付城	いなつきじょう	鞍手郡	宮若市龍徳	185	14	—
稻築城	いなつきじょう	→稻付城（いなつきじょう）				
稻次城	いなつぎじょう	→稻光城（いなみつじょう）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
稻光城	いなみつじょう	鞍手郡	宮若市稻光・小伏	149	12	101
稻村城	いなむらじょう	→稻付城 (いなつきじょう)				
犬鳴城	いぬなきじょう	→犬鳴別館 (いぬなきべっかん)				
犬鳴別館	いぬなきべっかん	鞍手郡	宮若市犬鳴	K6	32	220
井上家臣宅	いのうえかしんたく	遠賀郡	北九州市八幡西区 (旧藤田村)	D38	34	—
井上氏宅	いのうえしたく	遠賀郡	北九州市八幡西区陣原4丁目	D42	34	—
今井城	いまいじょう	宗像郡	宗像市三郎丸2丁目	253	22	—
今許斐城	いまこのみじょう	鞍手郡	鞍手町鞍手町上木月	200	16	—
今許斐城	いまこのみとりで	→今許斐城 (いまこのみじょう)				
岩門城	いわとじょう	→龍神山城 (たつかみやまじょう)				
岩戸館	いわとやかた	→原田種直館 (はらだたねなおやかた)				
岩永左衛門城	いわながざえもんじょう	→城崎砦 (じょうさきとりで) (宮若市)				
岩松城	いわまつじょう	志摩郡	糸島市岩松	352	30	217
上原館	うえぼるやかた	怡土郡	糸島市高祖	D67	38	—
菟道岳城	うじだけじょう	早良郡	福岡市早良区東人部	314	26	196
白ヶ岳城	うすがたけじょう	糟屋郡	古賀市田野	276	24	164
白杵氏端城	うすきしはじょう	志摩郡	福岡市西区今津	346	30	213
内野城	うちのじょう	早良郡	福岡市早良区早良6丁目	317	28	—
内山城	うちやまじょう	鞍手郡	宮若市倉久	175	14	—
鶴ノ木城	うのきじょう	→鶴岳城 (つぐみねがけじょう)				
馬乘城	うまのりじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区上上津役3丁目	209	16	—
浦江遺跡	うらえいせき	早良郡	福岡市西区金武	R34	40	257
浦城	うらじょう	→岩松城 (いわまつじょう)				
浦志館	うらしやかた	→浦志孫右衛門宅 (うらしまごえもんたく)				
浦志孫右衛門宅	うらしまごえもんたく	志摩郡	糸島市前志2丁目	D73	38	—
浦山城	うらやまじょう	鞍手郡	宮若市平	165	12	—
浦山城	うらやまじょう	→探題北条氏城 (たんたいほうじょうしじょう)				
潤古屋敷遺跡	うるうふるやしきいせき	志摩郡	糸島市潤	R50	40	271
永大丸城	えいのまるじょう	→潤田浦城 (そのだうらじょう)				
会下城	えいげじょう	→藤原城 (ふじわらじょう)				
榎城	えのきじょう	→六郎丸城 (ろくろうまるじょう)				
蛭子谷城	えびすだにじょう	→本城城 (ほんじょうじょう)				
羅城	えんのしろ	→名残城 (なごりじょう)				
遠藤大膳宅	えんどうたいざんたく	鞍手郡	鞍手郡鞍手町古門	D26	32	—
御飯ノ山城	おひのやまじょう	糟屋郡	福岡市東区香椎3丁目	293	24	180
老ノ山城	おいのやまじょう	→御飯ノ山城 (おいのやまじょう)				
大神城	おおがみじょう	志摩郡	福岡市東区桑原	350	30	216
大神出雲守宅	おおがみいづものかみ	→大神城 (おおがみじょう)				
大蔵城	おおくらじょう	→茶臼山城 (ちゃうすやま (北九州市八幡東区))				
大島城	おおしまじょう	宗像郡	宗像市大島	248	20	149
大谷城	おおたにじょう	→高丸城 (たかまるじょう)				
大谷高丸城	おおたにたかまるじょう	→高丸城 (たかまるじょう)				
大塚遺跡	おおつかいせき	那珂郡	筑紫郡都那珂川町安徳	R23	38	249
大塚遺跡	おおつかいせき	志摩郡	福岡市東区今宿町	R47	40	269
大首屋敷	おおとやしき	鞍手郡	宮若市山口	K7	32	223
大橋 E 路跡	おおはし E いせき	那珂郡	福岡市東区大橋4丁目	R20	38	246
大池城	おおぶじょう	宗像郡	宗像市大池	262	22	157
大丸城	おおまるじょう	那珂郡	筑紫郡都那珂川町南面里	306	26	—
大村氏宅	おおむらしたく	→地藏山城 (じぞうやまじょう)				
岡田城	おかだじょう	鞍手郡	宮若市山口	157	12	109
岡ノ城	おかのじょう	遠賀郡	遠賀郡朝倉町吉木西1丁目	237	20	143
荻浦居屋敷	おぎうらいやしき	志摩郡	糸島市志摩荻浦	F19	42	—
尾倉城	おぐらじょう	遠賀郡	北九州市八幡東区春の町3丁目	217	18	—
小倉陣	おぐらじょう	→尾倉城 (おぐらじょう)				
小祇城	おぐらじょう	→小倉山城 (おぐらやまじょう)				
小倉城	おぐらじょう	→小倉山城 (おぐらやまじょう)				
小倉山城	おぐらやまじょう	怡土郡	糸島市白糸	341	30	210
尾園城	おぞのじょう	→尾園本城 (おぞのはんじょう)				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
尾園本城	おぞのほんじょう	鞍手郡	宮若市山口	158	12	110
老林城	おとなばやし（ろうりん）じょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町別所	300	26	185
乙野草場城	おとのくさばじょう	→草堀城（くさばじょう）（宮若市乙野）				
音丸城	おとまるじょう	鞍手郡	鞍手郡鞍手町新北	196	16	122
音丸山城	おとまるやまじょう	→音丸城（おとまるじょう）				
御屋敷	おやしき	遠賀郡	北九州市八幡西区祇園2丁目	D41	34	—
尾山城	おやまじょう	→劍城（つるぎだけじょう）				
觀山城	おやまじょう	志摩郡	糸島市志摩小金丸	358	30	218
小山城	おやまじょう	→跋山城（おやまじょう）				
<b>か</b>						
海藏寺城	かいぞうじじょう	遠賀郡	遠賀郡岡垣町内浦	242	20	—
海藏寺戰城	かいぞうじせんじょう	→海藏寺城（かいぞうじじょう）				
隱船	かくれやかた	遠賀郡	北九州市八幡西区烟	D33	34	—
香椎 A 遺跡	かしいあいせき	糟屋郡	福岡市東区香椎 2丁目	R14	38	240
香椎 B 遺跡	かしいbいせき	糟屋郡	福岡市東区香椎・香椎台4~5丁目	R15	38	242
柏原 K 遺跡	かはら Kいせき	早良郡	福岡市南区柏原 6丁目	R27	40	252
春日城	かすがじょう	→古野城（ふるのじょう）				
春日嶽城	かすがだけじょう	不明	不明	F22	42	—
香冢城	かすくじょう	→香津井原屋敷（かすくいはらやしき）				
香津井原屋敷	かすくいはらやしき	宗像郡	福津市福間南 1丁目	D49	36	236
葛ヶ岳城	かずらがたけじょう	宗像郡	宗像市陵嚴寺	—	42	—
片山砦	かたやまとりで	鞍手郡	宮若市山口	163	12	—
片臨城	かたわきじょう	宗像郡	宗像市田島	260	22	155
香月館	かつきやかた	遠賀郡	北九州市八幡西区上香月・白岩町	204	16	—
香月城	かつきじょう	→香月館（かつきやかた）				
香月氏宅	かつきしたく	→香月館（かつきやかた）				
香月氏宅	かつきしたく	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう）（北九州市八幡西区）				
香月七郎則宗宅	かつきしちろうのりむねたく	→香月館（かつきやかた）				
勝島城	かつしまじょう	宗像郡	宗像市神湊	246	20	147
勝野山城	かつのやまじょう	→草堀城（くさばじょう）（鞍手郡小竹町）				
勝山城	かつやまじょう	糟屋郡	糟屋郡久山町久原字慈城	—	42	—
葛城	（かつらぎ）	宗像郡	福津市勝浦・宗像市田島	261	22	156
勝浦岳城	かつらだけじょう	→勝浦岳城（かつらだけじょう）				
桂岳城	かつらだけじょう	鞍手郡	宮若市金丸	176	14	—
金丸城	かなまるじょう	早良郡 / 壱前国	福岡市早良区石釜・佐賀県佐賀市三瀬村三瀬	319	28	200
金山城	かなやまじょう	鞍手郡	宮若市金生	179	14	113
金生城	かなうじょう	→香葉深川屋敷（かばふかがわやしき）				
香葉城	かばじょう	宗像郡	福津市福間南 2丁目	D50	36	—
香葉深川屋敷	かばふかがわやしき	怡士郡	糸島市加布里・二太浜宿	336	28	209
加布里城	かぶりじょう	→臼杵氏端城（うすきしはじょう）				
讃倉城	かまくらじょう	鞍手郡	宮若市上有木	169	14	—
上有木城	かみあるきじょう	宗像郡	福津市上西郷	272	22	—
上西郷城	かみさいごうじょう	宗像郡	福津市上西郷	R12	38	240
上西郷タカナ遺跡	かみさいごううななかいせき	宗像郡	福津市上西郷	R11	38	239
上西郷ニホンスギ遺跡	かみさいごううほんすぎいせき	→稲居塙城・金居塙城（いいないづかじょう・かねいづかじょう）				
上月懸城	かみつきぐまじょう	鞍手郡	直方市上頓野	R9	38	237
上頓野宮ノ前遺跡	かみとんのみやのまえいせき	→尾倉城（おぐらじょう）				
上ノ山城	かみのやまじょう	宗像郡	宗像市山田・遠賀郡岡垣町高倉	250	20	150
上山堡	かみやまほう	糟屋郡	糟屋郡久山町山田・久原	290	24	—
上山田城	かみやまだじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山・市ノ瀬	308	26	192
龜ノ尾城	かめのおじょう	宗像郡	福津市福間駅東 3丁目	271	22	162
龜山城	かめやまじょう	→古賀城（こじょう）				
鴨か浦城	かもがうらじょう	志摩郡	糸島市志摩小金丸・志摩宮・志摩小豆・志摩御床	359	30	—
可也山城	かやさんじょう	→可也山城（かやさんじょう）				
加也山城	かやさんじょう	→龍ヶ岳城（りゅうがたけじょう）				
粥田城	かゆたじょう	→宮永城（みやながじょう）				
雁山城	がんぎやまじょう	鞍手郡	直方市惑田	K9	32	—
惑田城	がんだじょう					

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
根音山城	かんのんやまじょう	那珂郡	筑紫都那珂川町大字中原	—	42	—
冠城	かんむりじょう	→冠山城 (かんむりやまじょう)				
冠山城	かんむりやまじょう	宗像郡	福岡市手光	269	22	160
祇園房城	ぎおんだけじょう	鞍手郡	宮若市本城	183	14	115
岸本五郎兵衛宅	きしもとごろうべえたく	鞍手郡	鞍手郡鞍手町小牧	D30	34	—
北浦城	きたうらじょう	→城ヶ崎城 (じょうがさきじょう)				
北崎城	きたざきじょう	志摩郡	福岡市西久北崎	F20	42	—
北殿館	きたどのやかた	→野北殿館 (のぎたど)				
木藤丸遺跡	きふじまるいせき	志摩郡	糸島市志摩稻留	R52	40	273
木舟・三本松遺跡	きぶねさんばんまいついせき	怡土郡	糸島市二丈深江	R45	40	267
木舟の森遺跡	きぶねのもりいせき	怡土郡	糸島市二丈深江	R46	40	268
九州探題城	きゅうしゆうしゅううたんだいじょう	→探題北条氏城 (たんだいほうじょうしじょう)				
清末遺跡	きょすえいせき	早良郡	福岡市東区東入部4・5丁目	R31	40	255
草崎城	くさざきじょう	宗像郡	宗像市早良裏	247	20	148
草崎山城	くさざきやま	→草崎城 (くさざきじょう)				
草場城	くさばじょう	鞍手郡	宮若市田野	145	12	99
草場城	くさばじょう	鞍手郡	宮若市潟原	140	12	97
草場城	くさばじょう	鞍手郡	鞍手郡小竹町勝野・新多	187	14	—
草場城	くさばじょう	宗像郡	宗像市平等寺	249	20	150
草場城	くさばじょう	→草葉城 (くさばじょう)				
草葉城	くさばじょう	→柑子城 (こうじだいじょう)				
草場山城	くさばやまじょう	糟屋郡	糟屋郡篠栗町篠栗	284	24	169
楠橋城	くすばじょう	→草場城 (くさばじょう) (宗像市)				
熊ヶ城	くまがじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区楠橋	202	16	—
熊ヶ峯城	くまがみねじょう	→熊ヶ峯城 (くまがみねじょう)				
神代氏城	くましろじょう	鞍手郡	宮若市大鷹	137	12	96
熊の城	くまのじょう	→金山城 (かなやまじょう)				
熊野神社東遺跡	くまのじんじやひがしいせき	怡土郡	糸島市二丈田中	R43	40	265
隈本ノ城	くまものしの	→新城山城 (しんじょうやまじょう) (那珂川町)				
熊山城	くまやまじょう	遠賀郡	遠賀郡岡垣町三吉	239	20	144
熊野宅	くまわにたく	→熊山城 (くまやまじょう)				
雲取城	くもとりじょう	→雲取山城 (くもとりやまじょう)				
雲山城	くもとりやまじょう	鞍手郡	直方市上頓野・頓野	192	16	119
藏持境遺跡	くらもちさかいかいせき	怡土郡	糸島市藏持	R38	40	261
藏持古屋敷遺跡	くらもちふるやしきいせき	怡土郡	糸島市藏持	R39	40	261
黒鳥城	くろうじょう	→黒巣城 (くろすじょう)				
黒崎城	くろさきじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区屋敷1丁目・船町	K10	32	227
黒巣城	くろすじょう	鞍手郡	宮若市山口	155	12	108
黒田監物利良宅	くろだけんもとしよしたく	鞍手郡	宮若市金丸	D23	32	—
黒田長清居館	くろだながきよきかん	→直方陣屋 (のおがたぢんや)				
黒田養心宅	くろだようしなたく	宗像郡	福岡市津屋崎4丁目	D48	34	—
黒田養心館	くろだようしんやかた	那珂郡	筑紫郡那珂川町市瀬	D59	36	—
黒丸城	くろまるじょう	鞍手郡	宮若市黒丸	151	12	102
黒丸丸尾城	くろまるまるおじょう	→丸尾城 (まるおじょう)				
越前羽子城	けらはごじょう	宗像郡	福岡市本木	267	22	—
元寇防里	げんこうぼうるい	志摩・早良・那珂・櫛屋	福岡市東区・博多区・早良区・西区	R37	40	258
基石山城	ごいしやま	遠賀郡	遠賀郡岡垣町吉木	235	20	—
光連寺山城	こううんじやまじょう	→探題渋川氏城 (たんだいし・しつかわじょう)				
粗子岳城	こうじだけじょう	志摩郡	福岡市西区今津・草場	348	30	214
好土岳城	こうじだけじょう	→柑子岳城 (こうじだけじょう)				
香地岳城	こうじだけじょう	→柑子岳城 (こうじだけじょう)				
上津役城	こうじゃくじょう	→竹尾城 (たけのおじょう)				
高祖崎城	こうそざき	→石崎城 (いしざきじょう)				
強洞陣	こうとうじん	遠賀郡	北九州市八幡西区藤田	—	42	—
河頭山陣	こうとうやまじん	→強洞陣 (こうとうじん)				
光福寺城跡跡	こうふくじじょうかんあと	鞍手郡	直方市下境	R8	38	237
古賀城	こがじょう	鞍手郡	宮若市脇田	139	12	—
古賀城	こがじょう	遠賀郡	古賀市春日町古賀	228	18	138

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
古賀宗城	こがむねじょう	→黒丸城（くろまるじょう）				
小金丸城	こがねまるじょう	→鶴山城（おやまじょう）				
小金丸氏館	こがねまるしやかた	志摩郡 糸島市志摩鉢越		D74	38	—
五箇山城	ごかやまじょう	→一ノ岳城（いちのたけじょう）				
五ヶ山網取遺跡	ごかやまあみとりいせき	那珂郡 筑紫郡都城町五ヶ山		R26	40	252
古砦跡	こさいあと	遠賀郡 北九州市八幡西区市瀬		D35	34	—
小敷城	こしきじょう	遠賀郡 北九州市若松区小敷		227	18	137
腰山城	こしやまじょう	→岡ノ城（おかのじょう）				
腰（越）山城	こしやまじょう	→城腰山城（じょうのこしやまじょう）				
古城	こじょう	怡士郡 糸島市二丈深江		340	30	—
古城	こじょう	早良郡 福岡市早良区松原		D62	36	—
古城	こじょう	→泊城（とまりじょう）				
古宅	こたく	遠賀郡 遠賀郡遠賀町吉木		D45	34	—
古宅址	こたくあと	→戸畠城（とばたじょう）				
小田部氏宅	こたべしたく	小田部城（こたべじょう）				
小田部城	こたべじょう	早良郡 福岡市早良区有田2~3丁目		312	26	195
許斐里城	このみさとじろ	→古原里城（よしわらのさとじろ）				
許斐氏宅	このみしたく	宗像郡 宗像市王丸		D47	34	—
許斐岳城	このみだけじょう	宗像郡 宗像市王丸・福津市八並		263	22	157
許斐山城	このみやまじょう	→許斐岳城（このみだけじょう）				
小伏城	こぶしじょう	→橋光城（はしめつじょう）				
御別館	ごべつかん	→犬鳴別館（いぬなきべつかん）				
小松岡砦	こまつおかとりで	糟屋郡 古賀市剣野		275	24	163
鶴野白岳城	このもうすがたけじょう	→臼ヶ岳城（うすがたけじょう）				
鶴野氏邑城	このものしゆうじょう	→小松岡砦（こまつおかとりで）				
五郎城	ごろうじょう	遠賀郡 遠賀郡島津		232	20	—
権現堂城	ごんげんどうじょう	→権現山城（ごんげんやまじょう）（鞍手郡小竹町）				
権現山城	ごんげんやまじょう	鞍手郡 鞍手郡小竹町御池		189	14	—
権現山城	ごんげんやまじょう	→権見岳城（たかみだけじょう）				
金剛城	こんごうじょう	鞍手郡 北九州市八幡西区金剛		201	16	—
<b>さ</b>						
西国探題城	さいごくたんないじょう	→探題北条氏城（たんだいほうじょうしじょう）				
坂元城	さかもとじょう	→下有木城（しもあるきじょう）				
坂本城	さかもとじょう	→下有木城（しもあるきじょう）				
鷺城	さぎじょう	糟屋郡 古賀市篠内		277	24	—
鷺城	さぎじょう	志摩郡 福岡市西区今津		347	30	—
鷺白城	さぎしろじょう	→鷺城（さぎじょう）（古賀市）				
鷺代城	さぎしろじょう	→鷺城（さぎじょう）（古賀市）				
左近屋敷	さこんやしき	鞍手郡 宮若市乙野		D21	32	—
笹城	ささじょう	→鬼ノ尾城（かめのおじょう）				
篠谷城	(さきたにじょう)	遠賀郡 北九州市八幡東区大蔵1丁目・高見1丁目		219	18	—
篠山城	(ささやまじょう)	→篠谷城（さきたにじょう）				
笠原城	ささはらじょう	→篠谷城（さきたにじょう）				
佐谷城	さたにじょう	糟屋郡 糟屋郡須恵町佐谷		282	24	167
重松若狭守宅	しげまつわかさのかみたく	早良郡 福岡市早良区内野		D63	36	—
地藏山城	じぞうやまじょう	鞍手郡 宫若市湯原		141	12	98
蘿崎城	しのぎじょう	→蘿城（しのんじょう）				
地島城	じのしまじょう	→城ノ腰城（じょうのこしじょう）（宗像市地島）				
蘿原城	しのわらじょう	怡士郡 糸島市前原南2丁目		331	28	—
蘿城	しのんじょう	鞍手郡 宫若市乙野		144	12	99
四方城	(しほうじょう)	→四方城（しまんじょう）				
志摩城	しまじょう	志摩郡 糸島市志摩馬場・福岡市西区桑原		351	30	—
島内館	(しまうちやかた)	鞍手郡 鞍手郡鞍手町古門		D28	32	—
志摩野城	しまのじょう	→志摩城（しまじょう）				
四万城	しまんじょう	糟屋郡 古賀市青柳町		280	24	166
志水A遺跡	しみずAいせき	早良郡 福岡市早良区小笠木		R30	40	254
清水城	しみずがじょう	鞍手郡 宫若市乙野		147	12	—
下有木城	しもあるきじょう	鞍手郡 宫若市下有木・上有木		172	14	—

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
下村城	しもむらじょう	鞍手郡	宮若市下	142	12	—
下山田城	しもやまだじょう	糟屋郡	糟屋郡久山町山田・新宮町立花口	291	24	171
下山門乙女道跡	しもやまとおとめだいせき	早良郡	福岡市西区下山門3丁目	R36	40	257
十郎ヶ城	じゅうろうがじょう	→吉田城（よしだじょう）				
日尾崎城	しゃがのおじょう	→草場城（くさばじょう）（鞍手郡小竹町）				
守護所址	しゅごしょあと	→陶弘誼館址（すえひろのりやかたあと）				
城浦堡	じょうがうらほう	宗像郡	宗像市御門・名残	258	22	—
城角城	じょうかくじょう	志摩郡	福岡市西区今津	—	42	—
城ヶ崎城	じょうがさきじょう	早良郡	福岡市西区能古	327	28	204
城崎岱	じょうがさきてりで	→城ヶ崎城（じょうがさきじょう）				
城桙城	じょうがぼうじょう	宗像郡	宗像市田久	255	22	—
城崎岱	じょうざきてりで	鞍手郡	宮若市上有木・四郎丸	171	14	—
城崎山城	じょうざきやまじょう	怡上郡	糸島市二丈上深江	339	30	—
城の浦城	じょうのうらじょう	宗像郡	福岡市本木	266	22	—
城之腰城	じょうのこしじょう	遠賀郡	遠賀郡造賀町尾崎	230	18	140
城ノ腰城	じょうのこしじょう	宗像郡	宗像市地島	245	20	147
城ノ腰城	じょうのこしじょう	那珂郡	筑紫郡吉川町上梶原・山田	302	26	—
城腰城	じょうのこしじょう	宗像郡	宗像市石丸4丁目	254	22	—
城越城	じょうのこしじょう	→岡ノ城（おかのじょう）				
城腰	じょうのこし	宗像郡	宗像市大島	—	42	—
城磨山城	じょうのこしやまじょう	鞍手郡	鞍手郡野手町新延	198	16	124
城ノ崎岱	じょうのさきてりで	遠賀郡	北九州府若松区額田	225	18	—
城ノ辻岱	じょうのつじとりで	→楠橋城（くすばじょう）				
城辻城	じょうのつじじょう	遠賀郡	遠賀郡吉賀町別府	K12	32	—
城ノ原城	じょうのはるじょう	→生松原城（いきのまつばらじょう）				
城の山城	じょうのやまじょう	→三瀬城（みつせじょう）				
城山城	じょうやまじょう	志摩郡	糸島市板持	—	42	—
城山城	じょうやまじょう	→加布里城（かぶりじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→稻光城（いなみつじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→葛岳城（かつだけじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→丸山城（まるやまじょう）				
白木城	しらきじょう	→烟城（はたじょう）				
白山城	(しらさんじょう)	糟屋郡	糟屋郡久山町猪野・久原	289	24	—
白土城	しらつかがじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山	309	26	—
白水城	しらうぢじょう	→天浦城（あまうらじょう）				
四郎丸城	しろうまるじょう	鞍手郡	宮若市西四郎丸	174	14	—
白旗城	しろはたじょう	→金生城（かのじょう）				
新城山城	しんじょうやまじょう	糟屋郡	古賀市柳町・谷山	279	24	—
新城山城	しんじょうやまじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町西隈	299	26	184
新城山城	しんじょうやまじょう	志摩郡	糸島市志摩新町	360	30	—
陣尾	じんのお	那珂郡	筑紫郡那珂川町五ヶ山	D61	36	—
陣腹	じんのこし	糟屋郡	福岡市東区松崎1丁目	D54	36	—
陣ノ坂	じんのさか	鞍手郡	宮若山口	D22	32	—
陣ノ原城	じんのはる	早良郡	福岡市西区西原1丁目・西室見町2・3丁目	316	28	—
新町城	しんまちじょう	→城腰山城（じょうのこしやまじょう）				
陣屋谷	じんやだに	遠賀郡	北九州府八幡西区市瀬	D34	34	—
新山崎城	しんやまさきじょう	→山崎城（やまさきじょう）（鞍手郡小竹町）				
陣山城	じんやまじょう	→浅川城（あさかわじょう）				
須恵城	すえじょう	→武藤氏宅（むとうしちく）				
須恵左近屋敷	すえさこんやしき	→左近屋敷（さこんやしき）				
陶弘誼館址	すえひろのりやかたあと	鞍手郡	北九州府八幡西区木屋瀬	D31	34	—
杉山城	すぎやまじょう	糟屋郡	福岡市東区香椎・水谷	294	24	—
須藤鞍河守行重宅	すどうするがのかみゆきしげたく	遠賀郡	遠賀郡野手町	D44	34	—
仙城城	せんじょうじょう	→仙城城（せんじょうじょう）				
園田城	そのだじょう	→園田浦城（そのだらじょう）				
園田浦城	そのだらじょう	遠賀郡	北九州府八幡西区北筑2丁目	205	16	125
袖島館	そましまやかた	鞍手郡	直方市中泉	D24	32	—
袖城城	(そましろじょう)	鞍手郡	直方市下境	190	16	—

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
た						
代官屋敷	だいかんやしき	怡土郡	糸島市二丈武	K16	32	—
大城城	だいじょううじょう	遠賀郡	遠賀郡芦屋町大城	234	20	—
大障子城	だいしょうじじょう	宗像郡	宗像市多礼	259	22	154
大門城	だいもんじょう	→尾倉城（おぐらじょう）				
高祖城	たかすじょう	佐世保市/志摩郡	糸島市今宿上/原・女原・千葉	329	28	205
高岳城	たかだけじょう	→加布里城（かぶりじょう）				
高塔峰砦	たかとうみねひとりで	遠賀郡	北九州州市若松区修多羅	223	18	—
高塔山城	たかとうやま	→高塔峰砦（たかとうみねひとりで）				
高取城	たかとりじょう	鞍手郡	宮若市龍郷・鶴田	186	14	—
鷹取城	たかとりじょう	鞍手郡	直方市永満寺・領野・田川郡福智町上野	191	16	116
鷹取城	たかとりじょう	→高鳥居城（たかとりじょう）（鷲屋郡須恵町・森栗町）				
高鳥居城	たかとりいじょう	糟屋郡	糟屋郡須恵町須恵・上須恵栗町若杉	283	24	168
高鳥居城	たかとりいじょう	→鷹取城（たかとりじょう）（直方市・田川郡福智町）				
高取（山）城	たかとり（やま）じょう	→鷹取城（たかとりじょう）（直方市・田川郡福智町）				
鷹取山城	たかとりやまじょう	鞍手郡	宮若市山口	156	12	108
高丸城	たかまるじょう	→高丸城（たかまるじょう）				
鷹丸城	たかまるじょう	→鷹丸城（たかまるじょう）				
高見城	たかみじょう	遠賀郡	北九州州市八幡西区市瀬・八幡東区前田	214	18	—
鷹見岳城	たかみだけじょう	宗像郡	福津市鍛町	268	22	160
高宮城	たかみやじょう	→高宮城（たかみやじょう）				
高宮山城	たかみややまじょう	遠賀郡	遠賀郡洞庭町吉木	236	20	—
隆守城	たかもりじょう	→大障子城（だいしょじじょう）				
羅口城	たかくちじょう	→城桿城（じようがぼうじょう）				
田久城	たくじょう	鞍手郡	宮若市竹原	168	14	—
竹垣城	たけがきじょう	遠賀郡	北九州州市八幡西区上上津役・市瀬	210	16	130
竹尾城	たけのおじょう	→竹尾城（たけのおじょう）				
竹尾山城	たけのおよまじょう	→竹垣城（たけがきじょう）				
竹原竹垣城	たけはらたけがきじょう	鞍手郡	宮若市乙野	146	12	—
岳宮城	たけみやじょう	→鷺岳城（つたけだけじょう）				
岳山城	たけやまじょう	→上山田城（かみやまだじょう）				
田代城	たしろじょう	立花山城（たちはなやまじょう）				
立花城	たちはなじょう	糟屋郡	糟屋郡洞庭町1丁目・丸山町・洞町・下原・上原・阿蘇	292	24	172
立花山城	たちはなやまじょう	那珂郡	筑紫郡那珂郡大隅町安徳・山田・上緑原	301	26	186
龍神山城	たつかみやまじょう	那珂郡	筑紫郡那珂郡大中郡字立ノ口・春日市上白水	—	42	—
立ノ口城	たつのくじょう	鞍手郡	宮若市黒丸	148	12	101
立林城	たてばやしじょう	早良郡	福岡市早良区次郎丸1丁目	D64	36	—
立屋敷	たてやしき	遠賀郡	北九州州市八幡東区尾倉	216	18	—
多良倉岳城	たらくらだけじょう	→大障子城（だいしょじじょう）				
多礼城	たれじょう	→探題北条氏城（たんだいほじょうじじょう）				
探題城	たんだいじょう	早良郡	福岡市西区姪の浜2丁目	326	28	—
探題渋川氏城	たんだいし・ぶかわしじょう	早良郡	福岡市西区愛弓2丁目	325	28	—
探題北条氏城	たんだいほじょうじじょう	糟屋郡	古賀市庭内・福津市内殿・上西郷	D51	36	—
團原館	だんのばるやかた	→波多江館（はたえやかた（糸島市波多江））				
丹波屋敷	たんばやしき	團原館（だんのばるやかた）				
團宗時宅	だんむねときたく	那珂郡	福岡市南区屋形原	D56	36	—
千葉探題宅	ちばたんだいたく	早良郡	福岡市早良区重留	313	26	—
茶臼城	ちゃうすじょう	→茶臼山城（ちゃうすやすまじょう（宮若市））				
茶臼城	ちゃうすじょう	→茶臼山城（ちゃうすやすまじょう（宮若市））				
茶臼岳城	ちゃうすだけじょう	→臼ヶ岳城（うすがたけじょう）				
茶臼山城	ちゃうすやすまじょう	鞍手郡	宮若市山口	160	12	111
茶臼山城	ちゃうすやすまじょう	遠賀郡	北九州州市八幡西区楠橋	203	16	—
茶臼山城	ちゃうすやすまじょう	遠賀郡	北九州州市八幡東区尾倉	218	18	135
茶臼山城	ちゃうすやすまじょう	宗像郡	宗像市三郎丸	252	22	153
千代丸城	ちよまるじょう	→城辻城（じようのつじょう）				
月城	つきじょう	→小田城（こたべじょう）				
月懸城	つきせじょう	→猫城（ねこじょう（中間市））				
津久美ヶ城	つくみがじょう	→鷺岳城（つぐみがだけじょう）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
鶴居城	つぐみがだけじょう	宗像郡 / 糸島郡	福津市本木・舍利蔵古賀市鶴野 →大障子城(だいじょうじょう)	274	24	163
津瀬城	つせじょう		→篠原城(しのわらじょう)			
繁城	つなぎじょう					
島居城	つただけじょう	宗像郡	宗像市陵厳寺・遠賀郡岡垣町上畠	251	20	151
筒城	つつじょう	怡土郡	糸島市面山・飯原	333	28	—
筒山城	つつやまじょう		→筒城(つつじょう)			
鶴居城	つるだけじょう		→龍ヶ岳城(りゅう(たつ)がだけじょう)			
剣(山)城	つるぎ(やま)じょう	鞍手郡	鞍手町鞍手町中山・新北	197	16	123
剣居城	つるぎだけじょう	鞍手郡	宮若市福光	150	12	—
亭鉢山城	(ていはうばんざんじょう)		→雨乞山城(あまごいやまじょう)			
手野城	てのじょう		→冠山城(かんむりやまじょう)			
手光城	てびかじょう	鞍手郡	宮若市山口	162	12	—
寺山城	てらやまじょう	鞍手郡	宮若市下	143	12	—
天神山城	てんじんやまじょう	鞍手郡	宮若市山口・船光・平	164	12	—
天ノ坊城	てんのぼうじょう	鞍手郡	宮若市龍鹿・鶴田	184	14	—
塔ノ峯城	とうのみねじょう		→黒崎城(くろさきじょう)			
道伯山城	どうはくさんじょう		→直方陣屋(のおがたじんや)			
東蓮寺陣屋	とうれんじんじんや		→直方陣屋(のおがたじんや)			
東蓮寺城	とうれんじじょう		→禮屋郡			
遠見岳望楼	とおみがだけばうろう		糸島郡久山町猪野	D52	36	—
戸切城	とぎりじょう		→城之腰城(じょうのくにじょう)(遠賀郡遠賀町)			
徳重城	とくしげじょう		→名残城(なごりじょう)			
徳永城	とくながじょう	怡土郡	福岡市西区徳永か	F15	42	—
都地城	とじじょう	早良郡	福岡市西区金武	321	28	202
都地若狭守宅	とじわかさのかみたく		→都地域(とじじょう)			
都市原城	とちばるじょう	鞍手郡	宮若市酒田	167	14	—
殿屋敷	とのやしき	早良郡	福岡市早良区祖原	D65	36	—
戸畠城	とばたじょう	遠賀郡	北九州市戸畠区烟区(戸畠戸畠村)	220	18	—
飛尾城	とびおじょう		→佐谷城(さたにじょう)			
泊城	とまりじょう	志摩郡	糸島市泊	355	30	—
友池城	ともいけじょう	鞍手郡	宮若市原田	177	14	—
戸山城	とやまじょう		→大神城(おおがみじょう)			
虎ヶ岳城	とらがたけじょう		→亀の尾城(かめのおじょう)			
鳥飼城	とりかいじょう	早良郡	福岡市中央区鳥飼2丁目	311	26	—
十坊山城	とんぼやまじょう	怡土郡	糸島市二丈吉井	—	42	—
十防山城	とんぼやまじょう		→十坊山城(とんぼやまじょう)			
<b>な</b>						
内藤陣山	ないとうじんやま	遠賀郡	北九州市八幡西区鳴水	D36	34	—
直鳥城	なおとりじょう		→長鳥城(ながとりじょう)			
長井鶴城	ながいづるじょう	鞍手郡	宮若市長井鶴	180	14	—
中尾城	なかおじょう	鞍手郡	宮若市山口	161	12	—
中島城	なかしまじょう		→若松城(わかまつじょう)			
中白水遺跡	なかしうずいせき	那珂郡	春日市上白水5~6丁目	R21	38	247
長重城	ながためじょう		→長鳥城(ながとりじょう)			
長鳥城	ながとりじょう	早良郡 / 怡土郡	福岡市西区下山門・今宿青木	324	28	—
長島鳥城	ながとりしまじょう		→長鳥城(ながとりじょう)			
中原城	なかばるじょう	那珂郡	筑紫郡都原町川町中原	298	26	—
中山城	なかやまじょう		→劍岳城(つるぎだけじょう)			
中山城	なかやまじょう		→席田青木遺跡・中山御跡(むしろだあおきいせき)、なかやまいせき)			
名残城	なごりじょう	宗像郡	宗像市名残	256	22	154
名島城	なじまじょう	糸島郡	福岡市東区名島1~3丁目	K13	32	229
七曲城	ななまがりじょう	那珂郡 / 肥前国	筑紫郡都原町川町中原三義基みゆき町原古賀	310	26	194
鍋倉城	なべくらじょう		→龍昌寺山城(りゅうじょうしうじょうじょう)			
滑城	なめりじょう		→鷲ヶ岳城(わしがだけじょう)			
西田城	にしだじょう	志摩郡	糸島市志摩田原	354	30	—
二重城	にじゅうじょう		→二丈岳城(にじょうだけじょう)			
二丈岳城	にじょうだけじょう	怡土郡	糸島市二丈瀬江・二丈一貴山・二丈福井	342	30	210
二城岳城	にじょうだけじょう		→二丈岳城(にじょうだけじょう)			

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
沼口堀谷城	ぬまぐちほりたにじょう	→堀谷城 (ほりたにじょう)				
猫城	ねこじょう	→白土城 (しらづちがじょう)				
猫城	ねこじょう	遠賀郡 中間市上底井野		229	18	139
猫城	ねこじょう	→猫嶺城 (ねこうとうげじょう)				
猫尾ノ城	ねこおのしろ	→猫嶺城 (ねこうとうげじょう)				
猫嶺城	ねこうとうげじょう	那珂郡 筑紫郡都河町不入道		303	26	188
米多比城	ねたびじょう	糟屋郡 古賀市米多比		278	24	164
直方陣屋	のむかたじんや	鞍手郡 直方市直方		K8	32	224
直方館	のむかたやかた	→直方陣屋 (のむかたじんや)				
野北殿館	のぎたどのやかた	志摩郡 系島市志摩野北		D71	38	—
野中屋敷	のなかやしき	鞍手郡 鞍手町鞍手新延		D25	32	—
<b>は</b>						
博多古塚	はかたこるい	→元寇防塚 (げんこうぼうるい)				
白山城	はくさんじょう	鞍手郡 鞍手町八尋・宮若市倉久・四郎丸		195	16	—
白山城	はくさんじょう	宗像郡 宗像市山田		243	20	146
烟城	はたじょう	遠賀郡 北九州市八幡西区烟		208	16	129
烟山城	はたじょう	→烟城 (はたじょう)				
波多江道跡	はたえいせき	志摩郡 系島市波多江		R51	40	272
波多江城	はたえじょう	→波多江館 (はたえやかた (糸島市波多江))				
波多江氏宅	はたえしたく	→波多江館 (はたえやかた (糸島市原原))				
波多江館	はたえやかた	怡士郡 糸島市篠原		330	28	—
波多江館	はたえやかた	志摩郡 糸島市波多江		356	30	218
烟黒巣城	はたくろすじょう	→黒巣城 (くろすじょう)				
旗振嶺城	はたふりみねじょう	怡士郡 糸島市飯原		335	28	208
旗振山城	はたふりやまじょう	→旗振嶺城 (はたふりみねじょう)				
旗山城	はたやまじょう	→金生城 (かなうじょう)				
烟山城	はたやまじょう	→烟城 (はたじょう)				
鉢窪	はちのくぼ	早良郡 福岡市西区生の松原		D66	38	—
八竜城	はちりゅうじょう	→龍王山城 (りゅうおうやまじょう)				
花尾城	はなおじょう	遠賀郡 北九州市八幡西区鳴水・熊手・八幡東区前田		215	18	132
花尾山城	はなおやまじょう	→花尾城 (はなおじょう)				
花房城	はなぶさじょう	→花房山城 (はなぶさじょう)				
花房山城	はなぶさやまじょう	遠賀郡 北九州市若松区畠田・二島		224	18	136
馬場城	ばばじょう	→志摩城 (しまじょう)				
浜庭城	はまくぼじょう	→加布里城 (かぶりじょう)				
浜田城	はまだじょう	遠賀郡 北九州市若松区白山1丁目		222	18	—
原遺跡	はらいせき	早良郡 福岡市早良区原7・8丁目		R33	40	256
原田種直館	はらだたねなおやかた	那珂郡 筑紫郡都河町安徳		D57	36	—
波呂城	はろじょう	怡士郡 糸島市二丈波呂		337	30	—
波呂城	はろじょう	→波呂城 (はろじょう)				
繁木城	はんぎじょう	→宮永城 (みやながじょう)				
種井川A道跡	ひいがわAいせき	早良郡 福岡市城南區種井川3丁目		R28	40	253
東入部城	ひがしいりべじょう	荒道岳城 (うだけだけじょう)				
東五反田道跡	ひがしごただいせき	怡士郡 糸島市東		R40	40	263
東下田遺跡	ひがししもだいせき	怡士郡 糸島市東		R41	40	263
東高田遺跡	ひがしたこうだいせき	怡士郡 糸島市東		R42	40	263
東ノ城	(ひがしのじょう)	早良郡 福岡市西区能古		328	28	—
昆沙門岳砦	びしゃもんだけとりで	志摩郡 福岡市西区今津		D68	38	—
比津城	ひつじょう	遠賀郡 北九州市八幡西区上津役		—	42	—
姫島城	ひめしまじょう	志摩郡 糸島市志摩姫島		362	32	—
平等寺城	びょうどうじじょう	→草塙城 (くさばじょう (宗像市))				
平瀬山城	ひらうらやまじょう	→油山城 (うらやまじょう (宮若市))				
平山城	ひらうらやまじょう	鞍手郡 宮若市黑丸		152	12	104
広瀬道跡	ひろせいせき	早良郡 福岡市早良区西・内野8丁目		R29	40	254
蟹鏡山城	びんかがみやまじょう	鞍手郡 宮若市金生		178	14	112
深江岳城	ふかえだけじょう	→二丈岳城 (にじょうだけじょう)				
深江淀川城	ふかえよどがわじょう	→古城 (こじょう (糸島市))				
福岡城	ふくおかじょう	早良郡 / 那珂郡 福岡市中央区城内・大濠公園		K14	32	232

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
福地山城	ふくちやまじょう	鞍手郡	直方市越野	—	42	—
福山城	ふくやまじょう	→草場城（くさばじょう）(宮若市湯原)				
藤村氏宅	ふじむらしたく	遠賀郡	北九州市八幡西区（旧熊手村）	D39	34	—
富地原城	ふじわらじょう	宗像郡	宗像市富地原	257	22	—
藤原城	ふじわらじょう	那珂郡	筑紫都郡麻川町南面里	304	26	—
古川館	ふるかわやかた	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう）(北九州市八幡西区)				
古川氏宅	ふるかわしたく	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう）(北九州市八幡西区)				
吉子城	ふるこじょう	糟屋郡	古賀市青柳	281	24	167
古子山城	ふるこやまじょう	→古子城（ふるこじょう）				
古庄氏館	ふるしようしやかた	→古莊能登守宅（ふるしようとののかみたく）				
古莊能登守宅	ふるしようとののかみたく	志摩郡	糸島市志摩吉田	D70	38	—
古野城	ふるのじょう	鞍手郡	鞍手郡鞍手町木月	199	16	—
古野城	ふるのじょう	那珂郡	福岡市南区南大橋1丁目	296	24	183
古野城	ふるのじょう	→内山城（うちやまじょう）				
古野山館	ふるのやまやかた	鞍手郡	鞍手郡鞍手町古門	D27	32	—
平蔵遺跡	へいぞういせき	那珂郡	筑紫都郡阿川町上緑原1丁目	R25	40	251
平三屋敷	へいぞうやしき	那珂郡	筑紫都郡阿川町上緑原	D58	36	—
平蔵屋敷	へいぞうやしき	→平三屋敷（へいぞうやしき）				
邊田砦	へたりで	志摩郡	糸島市志摩小富士	361	32	—
別当山城	べっとうやまじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区別当町	212	16	131
櫻城	へりじょう	→名残城（なごりじょう）				
房州瀬・矢倉門	ぼうしゅうやとり・やぐらもん	博多	福岡市博多区（祇園町）	D55	36	—
宝珠磨城	ほうじゅみだけじょう	怡土郡	糸島市二丈長石	338	30	209
宝林城	ほうりんじょう	宗像郡	福津市本木	265	22	—
星山城	ほしやまじょう	志摩郡	福岡市西区今宿青木・今宿東3丁目	344	30	—
細峯城	ほそみねじょう	→德永城（とくながじょう）				
朝柱山城	ほばしらやまじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区市潮・熊手	213	16	131
堀谷城	ほりにたじょう	鞍手郡	宮若市沼口	166	14	—
堀ノ内遺跡	ほりのうちいせき	糟屋郡	古賀市庄	R13	38	—
堀ノ内城	ほりのうちじょう	→小田部城（こたべじょう）				
本城	ほんじょう	→内野城（うちのじょう）				
本城城	ほんじょうじょう	遠賀郡	北九州市八幡西区本城ヶ谷	206	16	—
本城南遺跡	ほんじょうみなみいせき	遠賀郡	北九州市八幡西区本城東6丁目	R10	38	238
本城山城	ほんじょうやまじょう	鞍手郡	宮若市本城	—	42	—
本城山城	ほんじょうやまじょう	→内野城（うちのじょう）				
<b>主</b>						
舞岳城	まいたけじょう	志摩郡	糸島市前原	357	30	—
舞鶴城	まいづるじょう	→福岡城（ふくおかじょう）				
曲潤城	まがりぶちじょう	早良郡	福岡市早良区曲潤	318	28	200
松尾城	まつおじょう	怡土郡	糸島市飯原	334	28	—
松隈城	まつぐまじょう	志摩郡	糸島市志摩隈	353	30	217
松隈伊賀守宅	まつぐまいがのかみたく	→松隈城（まつぐまじょう）				
丸尾城	まるおじょう	鞍手郡	宮若市黒丸・山口	153	12	106
丸隈山城	まるくまやまじょう	→探題川底城（たんたいしふかわしらじょう）				
マルビ磐	まるびとりで	遠賀郡	遠賀郡遠賀町若松	231	20	—
丸山城	まるやまじょう	糟屋郡	糟屋郡新町大隈	286	24	170
丸山城	まるやまじょう	糟屋郡	糟屋郡久山町久原	288	24	—
水崎城	みずさきじょう	志摩郡	福岡市西区元岡	349	30	215
三瀬城	みつせじょう	早良郡	肥前國・福岡市早良区曲潤・佐賀市三瀬	—	42	—
南ヶ浦砦	みなみがうらとりで	→上山田城（かみやまだじょう）				
源経基陣	みなもとのつねもとじん	遠賀郡	北九州市八幡西区神山	D40	34	—
幽野真玄宅	みねのしんげんたく	遠賀郡	北九州市八幡西区香月	D32	34	—
三野城	みのじょう	那珂郡	福岡市博多区美濃島	—	42	—
宮地岳城	みやぢだけじょう	宗像郡	福津市宮司	270	22	161
宮田城	みやたじょう	鞍手郡	宮若市宮田	181	14	—
宮永城	みやながじょう	鞍手郡	宮若市宮永・山口	154	12	107
宮山城	みややまじょう	→尾園本城（おぞのほんじょう）				
明寺寺城	みょうせんじじょう	→大音屋敷（おおとよやしき）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
三吉城	みよしじょう	→雨乞山城（あまごいやまじょう）				
麦野 A 遺跡	むぎの Aいせき	那珂郡	福岡市博多区麦野3丁目	R17	38	244
高田青木道跡・中山道跡	むしろだあおきいせき・なかやまいせき	糟屋郡	福岡市博多区空港前5丁目・糟屋郡志免町別府西	R16	38	243
席田青木城	むしろだあおきじょう	→席田青木道路・中山道跡（むしろだあおきいせき・なかやまいせき）				
武藤氏宅	むとうしたく	宗像郡	宗像市須恵2丁目	D46	34	—
(名稱記載なし)		宗像郡	福岡市荷利藏	—	42	—
姪浜城	めいのはまじょう	→探題波川氏城（たんだいしふかわじょう）				
元岡村古墳	もとおかむらこるい	志摩郡	福岡市西区元岡	D69	38	—
本岡城郭	もとおかじょうかく	志摩郡	福岡市西区元岡	F18	42	—
磐碧	もとどりとりで	鞍手郡	直方市上頓野	194	16	121
元取城	もとどりじょう	→御磐（もとどりとりで）				
諸岡館跡	もろおかやかたあと	那珂郡	福岡市博多区諸岡1丁目	R19	38	245
諸岡 B 遺跡	もろおか Bいせき	那珂郡	福岡市博多区諸岡6丁目	R18	38	244
<b>や</b>						
焼地山城	やきじやまじょう	糟屋郡	糟屋郡柏原町大瀬	287	24	—
安口判官城	やすくちはうがんじょう	→基石山城（ごいしやまじょう）				
安河内城	やすこううちじょう	鞍手郡	宮若市臨田	138	12	—
山鹿城	やまがじょう	遠賀郡	遠賀郡芦屋町山鹿	233	20	141
山崎城	やまさきじょう	鞍手郡	鞍手郡小竹町新山崎	188	14	—
山崎城	やまさきじょう	鞍手郡	宮若市倉久	173	14	—
山下城	やまじたじょう	鞍手郡	宮若市山口	159	12	110
山下中尾城	やましまなかおじょう	→中尾城（なかおじょう）				
山田ノ城	やまだのしろ	→龍神山城（たつかみやまじょう）				
山ノ田城	やまとたじょう	鞍手郡	直方市上頓野	193	16	120
湯原草場城	ゆばるくさば	→草場城（くさばじょう）（宮若市湯原）				
油比城	ゆびじょう	油比氏宅	（ゆびしたく）			
油比氏宅	ゆびしたく	志摩郡	糸島市油比	D72	38	—
吉井岳城	よしいだけじょう	怡土郡	糸島市二丈吉井	343	30	212
吉川下城	よしかわしもじょう	→下村城（しもむらじょう）				
吉田壱岐城	よしだいきのかみたく	鞍手郡	鞍手郡鞍手町中山	D29	32	—
吉田城	よしだじょう	宗像郡	宗像市吉田・江口	244	20	—
吉野城	よしのじょう	→權現山城（ごんげんやまじょう）				
四塚城	よづかじょう	→草崎城（くさざきじょう）				
吉原里城	よしわらのさとじろ	宗像郡	福津市八並	264	22	—
<b>ら</b>						
楽丸城	らくまるじょう	遠賀郡	北九州市若松区安屋	226	18	136
龍王山城	りゅうおうやまじょう	遠賀郡	遠賀郡岡垣町三吉・手野	240	20	—
竜王城	りゅうおうじょう	→龍王山城（りゅうおうやまじょう）				
龍ヶ岳城	りゅう（たつ）がだけじょう	鞍手郡	宮若市龍徳	182	14	114
龍ヶ岳砦	りゅう（たつ）がたけじりで	→稲伏城（いなつきじょう）				
龍昌寺山城	りゅうしょうじやま	遠賀郡	遠賀郡岡垣町高倉	238	20	144
龍徳城	りゅううとくじょう	→龍ヶ岳城（りゅうう（たつ）がたけじょう）				
六社八幡城	ろくしやはちまんじょう	→平山城（ひらやまじょう）				
六郎丸城	ろくろうまるじょう	鞍手郡	宮若市上有木	170	14	—
<b>わ</b>						
若松城	わかまつじょう	遠賀郡	北九州市戸畠区中馬	K11	32	229
福田安河内城	わきたやすこううちじょう	→安河内城（やすこううちじょう）				
鷲尾山城	わしおやまじょう	→探題北条氏城（たんだいしふじょうしじょう）				
鷲ヶ岳城	わしがたけじょう	那珂郡	筑紫郡那珂川町南面里	305	26	188
和白村陣所	わじろむらじんしょ	糟屋郡	福岡市東区上和白	D53	36	—

## 報告書抄録

ふりがな	ふくおかんのちゅうきんせいじょうかんあとに						
書名	福岡県の中近世城館跡II						
副書名	筑前地域編2						
卷次	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 第2集						
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第250集						
編著者名	一瀬 智・伊津見孝明・今井涼子・酒井芳司・岡寺 良(編集)						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多公園7番7号 Tel 092-651-1111						
発行年月日	2015年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
福岡県筑前地域 の一部(旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡)に所在する中近世 城館遺跡等約350箇所	福岡市東区	40131			121201 ~	福岡県中近 世城館遺跡 等詳細分布 調査	
	博多区	40132			150331		
	中央区	40133					
	南区	40134					
	西区	40135					
	城南区	40136					
	早良区	40137					
	糸島市	40230					
	春日市	40218					
	那珂川町	40305					
	古賀市	40223					
	新宮町	40345					
	久山町	40348					
	志免町	40343					
	粕屋町	40349					
	篠栗町	40342					
	須恵町	40344					
	宇美町	40341					
	福津市	40224					
	宗像市	40220					
	北九州市若松区	40103					
	戸畠区	40105					
	八幡東区	40108					
	八幡西区	40109					
	中間市	40215					
	水巻町	40382					
	岡垣町	40383					
	遠賀町	40384					
	芦屋町	40381					
	直方市	40204					
	宮若市	40226					
	鞍手町	40402					
	小竹町	40401					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
福岡県筑前地域 の一部(旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡)に所在 する中近世城館遺跡等約350箇所	城館 及び城館 関連遺跡	鎌倉 ～江戸時代	城館遺構 (曲輪・土塁・堀など)	なし			
要約	本報告における中近世城館遺跡等詳細分布調査では、筑前地域の一部(旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡)に所在する約350箇所の中近世城館・城館伝承地・城館関連遺跡等を対象とし、一部の対象については現地調査を行い、縄張り図等の作成を行い、その結果を報告している。また、文献史料・絵画資料等についても総合的な調査を実施した結果も併せて報告している。						

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 26	登録番号 1

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書2

## 福岡県の中近世城館跡 II

—筑前地域編2—

福岡県文化財調査報告書第250集

平成27年3月31日

発 行 福岡県教育委員会  
〒812-8575  
福岡県福岡市博多区東公園7番7号  
印 刷 株式会社 四ヶ所  
〒838-8512  
福岡県朝倉市馬田336

